新潟県埋蔵文化財調査報告書　第100集

北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事関係発掘調査報告書

釈迦堂（しゃかどう）遺跡

2000

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事関係発掘調査報告書

釈迦堂遺跡

2000

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県内の高速道路の整備が進められる中、平成９年には磐越自動車が全線開通し、北陸自動車道と連結しました。日本海側と太平洋側を結ぶ所用時間を大幅に短縮し、高速交通網の大動脈となりました。これに伴い、高速自動車道の安全性、利便性を確保するために、施設・設備の改善も急務となり、北陸自動車道黒埼パーキングエリアの拡充が図られました。

本書は、この北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事に先立ち、発掘調査を実施した釈迦堂遺跡の発掘調査報告書です。昭和47年には、北陸自動車道本線の建設に伴い遺跡の一部が発掘調査され、「西蒲原郡黒埼町釈迦堂遺跡」埋蔵文化財緊急調査報告書第１『北陸高速自動車道』[新潟県教育委員会1973]で報告されています。

今回の調査の結果、釈迦堂遺跡は平安時代の集落遺跡で、遺構としては、明確な建物跡は検出されませんでしたが、土坑や溝状遺構が数多く検出されました。中でも、古代の火葬に関係する遺構が検出され、当時の葬送形態の一端が明らかになりました。遺物としては、土師器や須恵器を中心とした多量の土器、土製品、銅銙を初めとする金属製品、木製品、石製品などが出土しました。特に「郡」と墨書された土器が出土したことから、官衙との関連が考えられます。また、鉄鉢形の土器等が出土し、集落内に寺院があったことも推測されます。

当時の釈迦堂遺跡周辺は、信濃川の分流が網の目のように巡り、大小の潟湖が点在する低湿地の環境でした。そのため、遺跡は100年あまりの間に数度の大洪水に見舞われたのですが、当時の人々は同じ場所に集落を築き、生活し続けた様子が明らかになりました。

今回の調査結果が、本県の低湿地における古代史を解明する研究資料として活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、本調査に対して多大なご協力を賜りました黒埼町教育委員会、並びに発掘調査に参加された地元の方々、また、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜った、日本道路公団北陸支社に対して深甚なる謝意を表わします。

平成12年８月

新潟県教育委員会
教育長　野本　憲雄

例　言

1．本書は新潟県西蒲原郡黒埼町大字木場字大南1134番地ほかに所在する釈迦堂遺跡(しゃかどういせき)の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事に伴い、新潟県教育委員会(以下、県教委とする)が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団とする)が平成９年９月１日から12月13日、平成10年４月１日から11月13日に実施した。昭和47年に北陸自動車道建設工事に伴い、遺跡の一部の発掘調査を行っている[関ほか1973]。

3．整理および報告書作成にかかる作業は、平成10年11月から平成12年３月にかけて埋文事業団が行った。

4．出土遺物および記録類は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の註記は略記号「シャカドウ」に出土地点および出土層位を併記した。

5．本書の作成は埋文事業団調査課職員が当たった。第Ⅵ章の自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

6．文中の註は脚註とした。また、引用・参考文献は著者および発行年(西暦)を文中に［　］で示し、巻末に掲載した。ただし、第Ⅵ章の自然科学分析については、章末に掲載した。

7．本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏７度である。既存の地図を用いた場合は、その出典を記した。

8．本書に掲載した遺物番号は全て通し番号とし、本文・観察表・図面図版・写真図版とも共通の番号を使用した。

9．本書の作成作業は寺崎裕助(埋文事業団調査課第一係長)、田海義正(同第三係長)の指導のもとに小濱　亨・村上義則が遺構を、江口友子が遺物を担当し、遺物実測・トレース・図版作成等は埋文事業団整理作業員が行った。

10．本書は江口・小濱・河崎昭一・村上が分担執筆したもので、執筆分担は第Ⅰ章・第Ⅲ章が江口・河崎、第Ⅱ章１・２が小濱、第Ⅱ章３・４、第Ⅳ章１・２、第Ⅴ章、第Ⅶ章が江口である。第Ⅳ章３は江口・小濱・河崎・村上である。編集は江口が行った。

11．人骨分析(第Ⅵ章６)については、日本歯科大学新潟歯学部助教授　笹川一郎氏に依頼し、玉稿を賜った。

12．発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示、ご協力を頂いた。記して御礼を申し上げる。(敬称略、五十音順)

相沢　央、伊藤邦弘、宇河雅之、金子拓男、木島　勉、坂井秀弥、笹川一郎、小林昌二、小林義孝、黒埼町教育委員会、黒崎　直、高濱信行、滝沢定春、田所　真、西蒲原土地改良区黒埼支所、平川　南、フォッサマグナミュージアム、松村恵司、宮島　宏、森澤國夫、安村俊史、山中敏史、渡邉ますみ

目　次

第Ⅰ章　序　説 …… 1

1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査・整理の体制 …… 1
A．調査体制　B．整理体制

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 4

1．遺跡の位置 …… 4
2．地理的環境 …… 4
A．地形概観　B．新潟平野の形成と変遷
3．歴史的環境 …… 7
A．周辺の遺跡　B．古代の釈迦堂遺跡周辺
4．昭和47年度の調査概要 …… 11

第Ⅲ章　調査の概要 …… 17

1．一次調査 …… 17
A．調査方法　B．調査結果
2．二次調査 …… 18
A．平成９年度の調査方法と経過　B．平成10年度の調査方法と経過

第Ⅳ章　遺　跡 …… 23

1．グリッドの設定 …… 23
2．基本層序 …… 24
3．遺構各説 …… 26
A．概観　B．記述の方法　C．各説

第Ⅴ章　遺　物 …… 36

1．概　観 …… 36
2．土　器 …… 36
A．土器の分類　B．記述の方法　C．墨書土器の記述の方法　D．各説
3．土製品 …… 54
A．円面硯　B．手づくね土器　C．筒形土製品　D．塼状土製品　E．土器片円盤
F．土錘

4．木製品 …… 56
A．斎串　B．杭
5．金属製品 …… 56
A．銅鋌　B．銅金具　C．刀子　D．鎌　E．鉄滓
6．石製品 …… 58
A．小礫　B．石錘　C．砥石　D．台石

第VI章　自然科学分析 …… 59

1．はじめに …… 59
2．試　　料 …… 60
3．分析方法 …… 60
A．珪藻分析　B．花粉分析　C．植物珪酸体分析　D．樹種同定
E．種実遺体同定　F．リン・カルシウム分析
4．結　　果 …… 62
A．珪藻分析　B．花粉分析　C．植物珪酸体分析　D．樹種同定
E．種実遺体同定　F．リン・カルシウム分析
5．考　　察 …… 78
A．遺跡周辺の古環境　B．溝状遺構の検討　C．平安時代の植物利用状況
D．火化遺構の検討
6．人骨について …… 92
A．概観　B．土坑325出土、手の末節骨１点
参考文献

第VII章　まとめ …… 94

1．火葬関連遺構について …… 94
A．新潟県内の古代の埋葬例　B．被葬者について
2．遺物について …… 95
A．遺物の時期　B．銅鋌について　C．墨書土器について
3．自然科学分析結果について …… 106
A．火葬関連遺構　B．溝状遺構

要　　約 …… 107
引用・参考文献 …… 108
遺構観察表 …… 111
遺物観察表 …… 119

挿 図 目 次

第１図　周辺の地形区分 …… 5
第２図　周辺の遺跡 …… 6
第３図　的場遺跡、緒立遺跡Ｃ地区全体図・出土遺物 …… 8
第４図　昭和47年度、平成９・10年度調査範囲図 …… 12
第５図　昭和47年度出土遺物１ …… 13
第６図　昭和47年度出土遺物２ …… 14
第７図　昭和47年度出土遺物３ …… 15
第８図　昭和47年度出土遺物４ …… 16
第９図　一次調査範囲図 …… 17
第10図　グリッド設定図 …… 23
第11図　基本層序１ …… 23
第12図　基本層序２ …… 25
第13図　土器分類１ …… 37
第14図　土器分類２ …… 38
第15図　当て具痕・タタキ具痕の細分類 …… 41
第16図　墨書土器表現凡例 …… 42
第17図　円面硯参考資料 …… 54
第18図　金属製品主成分元素 …… 57
第19図　基本層序サンプリング地点 …… 59
第20図　地点１・２の模式柱状図および分析層位 …… 60
第21図　地点１の主要珪藻化石群集 …… 70
第22図　地点２の主要珪藻化石群集 …… 71
第23図　地点２の主要花粉化石群集 …… 72
第24図　珪藻化石 …… 82
第25図　花粉化石(1) …… 83
第26図　花粉化石(2) …… 84
第27図　植物珪酸体 …… 85
第28図　木材(1) …… 86
第29図　木材(2) …… 87
第30図　炭化材(1) …… 88
第31図　炭化材(2) …… 89
第32図　炭化材(3) …… 90
第33図　種実遺体 …… 91
第34図　SK325出土末節骨 …… 92
第35図　火葬関連遺構出土骨片 …… 93

第36図　地震痕跡模式図 ……95
第37図　須恵器無台杯の器高指数 ……96
第38図　墨書土器出土状況(Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層) ……99
第39図　墨書土器出土状況(Ⅹ層) …… 100
第40図　墨書土器出土状況(Ⅺ層・層位不明) …… 101
第41図　「郡」墨書土器出土遺跡の位置 …… 103

表　目　次

第１表　地点１の珪藻分析結果(1) …… 64
第２表　地点１の珪藻分析結果(2) …… 65
第３表　地点１の珪藻分析結果(3) …… 66
第４表　地点２の珪藻分析結果(1) …… 66
第５表　地点２の珪藻分析結果(2) …… 67
第６表　地点２の珪藻分析結果(3) …… 68
第７表　地点２の珪藻分析結果(4) …… 69
第８表　地点１の花粉分析結果 ……69
第９表　地点２の花粉分析結果 ……73
第10表　遺構埋積物の花粉分析結果 ……74
第11表　遺構埋積物の植物珪酸体分析結果 ……74
第12表　樹種同定結果 ……76
第13表　種実遺体同定結果 ……77
第14表　リン・カルシウム分析結果 ……78
第15表　古代の埋葬例 ……94
第16表　器種構成比率 ……97
第17表　食膳具構成比率 ……97
第18表　銅鈴出土遺跡 ……98
第19表　「郡」墨書土器出土遺跡 …… 102

図　版　目　次

図面図版

図版１　遺跡周辺の旧地形

図版２　Ⅷ層遺構全体図１

図版３　Ⅸ層遺構全体図１

図版４　Ⅹ層遺構全体図１

図版５　Ⅺ層遺構全体図１

図版６　Ⅷ層遺構全体図２

図版７　Ⅸ層遺構全体図２(1)

図版８　Ⅸ層遺構全体図２(2)

図版９　Ⅹ層遺構全体図２(1)

図版10　Ⅹ層遺構全体図２(2)

図版11　Ⅺ層遺構全体図２

図版12　Ⅷ層遺構実測図(1) SK1、SK97、SX41、SX88、P94、P99

図版13　Ⅷ層遺構実測図(2) P95、P96、SD226、SD218、SD93、SD92、杭列・杭１・４・７・８・９・11・12・13

図版14　Ⅸ・Ⅹ層火葬関連遺構実測図　SK100、SK102、SK131、P116、SX121、P65、SK325・372、SX126

図版15　Ⅸ層遺構実測図(1) SK4、SK112、SK123

図版16　Ⅸ層遺構実測図(2) SK156、SK105、SK108、SK114、SK110・P109・113、SK117、SX119

図版17　Ⅸ層遺構実測図(3) P6、P32、P19、P26、P124、P14、P15、P20、P120、P331、P106・107、P115、P164、SD178、SD179

図版18　Ⅹ層遺構実測図(1) SK170・SD166、SK185、SK158、SK132、SK209、SK125、SK157

図版19　Ⅹ層遺構実測図(2) SK173、SK135、SK39、SK37、SK51、SK174、SK69、SK133、SK348、SK58

図版20　Ⅹ層遺構実測図(3) SK358・359、SK355・P259、SK397、SK354、SK260、SK289・SD288、SK187

図版21　Ⅹ層遺構実測図(4) SK352、SK263、SK333、SK201、SK236、SD213・SK214、SK255、SK262

図版22　Ⅹ層遺構実測図(5) SK353・312・190

図版23　Ⅹ層遺構実測図(6) SX198、SX136、SX43、SX42、P168、P205、P182、P149、P148、P137、P91、P55、P134、P188、P189、P363、P245、P307、P350、P225

図版24　Ⅹ層遺構実測図(7) P310、P221、P70、P67、P68、P336、P253、P320、P321・322、P319、P246、P261、P313、P191、P291、P287、P275、P220、P376、P327、P241、P256

図版25　Ⅹ層遺構実測図(8) P232、P237・233、P379、P383、P240、P373、焼土305、溝状遺構群１平面図

図版26　Ⅹ層遺構実測図(9) 溝状遺構群１断面図

図版27　Ⅹ層遺構実測図(10) 溝状遺構群２平面図

図版28　Ⅹ層遺構実測図(11) 溝状遺構群２断面図

図版29　Ⅹ層遺構実測図(12) 溝状遺構群２断面図、SD369、SD159

図版30　Ⅺ層遺構実測図(1) SK403、SK400

図版31　XI層遺構実測図(2) SK421、SK399、SK438・P439、P410、P423、P420、P418、P406、P433、P402、P430
図版32　XI層遺構実測図(3) 溝状遺構群３平面図
図版33　XI層遺構実測図(4) 溝状遺構群３断面図
図版34　VII・VIII層土器(1) 1～17
図版35　VIII層土器(2) 18～23
図版36　VIII層土器(3) 24～36
図版37　火葬関連遺構出土土器(1) 37～59
図版38　火葬関連遺構出土土器(2)・IX層土器(1) 60～69
図版39　IX層土器(2) 70～86
図版40　IX層土器(3) 87～109、111
図版41　IX層土器(4) 110、112～124
図版42　X層土器(1) 125～139
図版43　X層土器(2) 140～152
図版44　X層土器(3) 153～167
図版45　X層土器(4) 168～179、181～184
図版46　X層土器(5) 180、185～203
図版47　X層土器(6) 204～214
図版48　X層土器(7) 215～238
図版49　X層土器(8) 239～266
図版50　X層土器(9) 267～292
図版51　X層土器(10) 293～310
図版52　X層土器(11) 311～322
図版53　X層土器(12) 323～332
図版54　X層土器(13) 333～336
図版55　XI層土器(1) 337～344
図版56　XI層土器(2) 345～359
図版57　XI層土器(3) 360、361
図版58　XI層土器(4) 362～372
図版59　XI層土器(5) 373～384
図版60　XI層土器(6)・出土地点・層位不明土器(1) 385～406
図版61　出土地点・層位不明土器(2) 407～427
図版62　土製品(1) 428～454
図版63　土製品(2)・木製品・金属製品 455～507
図版64　石製品 508～528

写真図版

図版65　遺跡周辺の航空写真
図版66　近景　弥彦山を望む、緒立遺跡・的場遺跡を望む
図版67　Ｘ層検出遺構全景
図版68　SK1完掘、SK97断面・鎌出土状況・完掘、SK88完掘、SX41完掘、SD226断面・完掘
図版69　SX218断面・完掘、SD93断面・完掘、SD92断面・完掘、杭１、杭５
図版70　杭11、杭13、SK112断面・完掘、SK123断面・完掘、SK156断面・完掘
図版71　SK100断面・完掘、SK102断面
図版72　SK102完掘、SK131断面・完掘
図版73　SK116断面・骨片出土状況・完掘
図版74　P65断面・完掘、SX121断面
図版75　SX121完掘、SK325断面・完掘
図版76　SK372断面・完掘、SX126検出状況
図版77　SX126遺物出土状況・銅鋳出土状況・土坑部南北断面
図版78　SX126完掘、SK105完掘、SK108断面・完掘、SK114断面・完掘、SK117断面
図版79　SK117遺物出土状況・完掘、SD178完掘、SD179断面・完掘、SK170断面・完掘、SD166完掘
図版80　SK185遺物出土状況・完掘、SK158遺物出土状況・完掘、SK132断面・完掘、SK209遺物出土状況・断面
図版81　SK209完掘、SK125断面・遺物出土状況・完掘、SK157断面・完掘、SK173完掘、SK135断面
図版82　SK135完掘、SK39完掘、SK37断面・完掘、SK51完掘、SK174断面・完掘、SK69断面
図版83　SK69完掘、SK133断面、SK348断面・完掘、SK58断面・完掘、SK359断面、SK355断面
図版84　SK355完掘、SK259断面・完掘、SK397断面・完掘、SK354遺物出土状況、SK260完掘、SK187断面
図版85　SK187完掘、SK289断面・完掘、SK352断面、SK263断面、SK333断面・完掘、SK201断面
図版86　SK201完掘、SK236断面・完掘、SK214断面・完掘、SK213断面・完掘、SK255断面
図版87　SK255完掘、SK262完掘、SK312遺物出土状況・土錘出土状況、SK353遺物出土状況、SK190断面・完掘、SK198断面
図版88　SK198完掘、SK136断面、SK43断面、SX42断面・完掘、P149断面、焼土305検出状況・断面
図版89　焼土305完掘、SD147断面、SD152断面、SD153断面、SD140断面、SD146断面、SD142断面、SD138断面
図版90　SD165断面、SD160断面、SD161断面、SD145断面、溝状遺構群１　3Cグリッド完掘
図版91　溝状遺構群１　3Cグリッド完掘
図版92　溝状遺構群１　3Cグリッド完掘、SD242断面、SD235断面、SD234断面、SD296断面
図版93　SD299断面・遺物出土状況、SD272断面、SD274断面、SD316断面、SD308断面
図版94　溝状遺構群２　4E～6E、4F～6Fグリッド完掘
図版95　溝状遺構群２　4E～6E、4F～6Fグリッド完掘
図版96　SD369遺物出土状況、SD159完掘、SK403断面・遺物出土状況・完掘、SK421遺物出土状況、SK399断面・完掘
図版97　SD425断面、SD407断面、SD77断面、SD386断面、SD427断面、SD78断面
図版98　溝状遺構群３　3E、3F、4E～4Gグリッド完掘

図版99　Ⅶ・Ⅷ層土器(1)、火葬関連遺構出土土器(1)　1～16、18、19、24～28、30～32、37～40、42
図版100　Ⅷ層土器(2) 17、20～23
図版101　Ⅷ層土器(3)、火葬関連遺構出土土器(2) 33～36、41、43～52、56～58
図版102　火葬関連遺構出土土器(3)、Ⅸ層土器(1) 53～55、59～69、73～77
図版103　Ⅸ層土器(2) 70～72、78～88、90～102
図版104　Ⅸ層土器(3) 104～124
図版105　Ⅸ層土器(4) 125～141、146～148
図版106　Ⅹ層土器(1) 142～145、149～159
図版107　Ⅹ層土器(2) 160～174
図版108　Ⅹ層土器(3) 175～190、194～196
図版109　Ⅹ層土器(4) 191～193、197～213、215、216
図版110　Ⅹ層土器(5) 214、217～240
図版111　Ⅹ層土器(6) 241～260、262～265、267、268、270～275
図版112　Ⅹ層土器(7) 276～298
図版113　Ⅹ層土器(8) 299～318
図版114　Ⅹ層土器(9) 319～330
図版115　Ⅹ層土器(10) 331～340
図版116　Ⅺ層土器(1) 341～357
図版117　Ⅺ層土器(2) 358～367
図版118　Ⅺ層土器(3) 368～375、379、380
図版119　Ⅺ層土器(4)、出土地点・層位不明土器(1) 376～378、381、383～392
図版120　出土地点・層位不明土器(2) 393～408、410～413、415～417、419～424
図版121　出土地点・層位不明土器(3)、土製品(1) 418、425～454
図版122　土製品(2)、木製品、金属製品 455～507
図版123　石製品、軽石、鉄滓 508～528、ａ～ｈ
図版124　墨書土器集成(1) 112、185、346、222、270、229、206、238、413、381、402、191、226、374、193、178、１、９、283、345、395
図版125　墨書土器集成(2) 95、161、249、125、343、353、199、344、407、116、351、154、263、218、219、408、288、11、47

第Ⅰ章　序　　説

1．調査に至る経緯

北陸自動車道(福井県敦賀市～新潟県新潟市)は、平成10年に新潟空港インターチェンジまで完成し全線開通となった。また、磐越自動車道(福島県いわき市～新潟県新潟市)も平成９年に全線開通し、新潟県の高速道路網も関越、北陸、磐越、上信越と着々と整備され、その交通量も増加の一途をたどっている。新潟市の近郊に位置する北陸自動車道黒埼パーキングエリアは、都市近郊休憩施設として利用状況が非常に高く、慢性的に混雑している。今後も交通量、長距離利用者が増加することが見込まれることや、日本海沿岸東北自動車道の建設にも備えて改良工事が計画された。

平成８年１月29日、日本道路公団金沢管理局新潟事務所(以下、公団とする)から、新潟県教育委員会(以下、県教委とする)に北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事に伴う、埋蔵文化財の分布状況およびその取り扱いについて照会があった。県教委は、黒埼パーキングエリア内に周知の遺跡である釈迦堂遺跡(昭和47年北陸自動車道建設に伴い発掘調査)が所在するため、分布調査の後、一次調査が必要であると回答した。４月10日、県教委はパーキングエリア改良工事範囲内の38,300㎡について、分布調査を埋文事業団に委託した。その結果、上り線の工事範囲内では遺構・遺物等は検出されなかったが、下り線の工事範囲内では、中世の土師質土器、近世陶磁器が検出された。このため、下り線のパーキングエリア改良工事範囲内の一次調査が必要である旨、公団に回答した。これに対し、公団の回答は平成10年度上り線、平成11年度下り線の開通を計画しているが、用地買収中であるため、現状では着工不可能とのことであった。10月22日、公団と県教委の間で協議がもたれ、平成９年度春から調査に着手し、10月末日終了予定とした。調査方法は一次調査と平行して、二次調査を計画・実施するというものであった。

平成９年４月３日、一次調査範囲の確認と調査方法について公団、県教委、埋文事業団の三者で協議した。調査対象面積22,270㎡のうち、用地買収が終了した20,180㎡について４月８日～４月14日に一次調査を行った。その結果、東端に近いトレンチの南側一か所で遺構・遺物が検出されたことから、東端側の2,100㎡について二次調査が必要と公団に回答した。未買収のため、4月に一次調査ができなかった西端側2,090㎡については、11月20日～11月25日に一次調査を実施したが、遺構・遺物が検出されなかったことから、二次調査の必要はないと公団に回答した。

二次調査は、平成９年９月４日より開始した。

2．調査・整理の体制

A．調査体制

発掘調査は県教委が主体となり、埋文事業団が委託を受け下記の体制で行った。調査は冬期の現場休止期間を含め、平成９年から10年にかけて２か年である。

[一次調査]

調査期間　平成９年４月８日～４月14日、11月20日～11月25日

調査主体　新潟県教育委員会(教育長　平野　清明)

調　　査　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　平野　清明）
管　　理　須田　益輝（専務理事・事務局長）
若槻　勝則（総務課長）
亀井　　功（調査課長）
庶　　務　泉田　　誠（総務課主事）
調査担当　藤巻　正信（調査課調査第一係長）４月８日～４月14日
江口　友子（　　同　　文化財調査員）11月20日～11月25日
調査職員　江口　志麻（　　同　　嘱託員）４月８日～４月14日

［二次調査　平成９年度］
調査期間　平成９年９月４日～12月13日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　平野　清明）
調　　査　（財）新潟県埋蔵交化財調査事業団（理事長　平野　清明）
管　　理　須田　益輝（専務理事・事務局長）
若槻　勝則（総務課長）
亀井　　功（調査課長）
庶　　務　泉田　　誠（総務課主事）
調査指導　藤巻　正信（調査課調査第一係長）
調査担当　江口　友子（　　同　　文化財調査員）
調査職員　野水　　仁（　　同　　文化財調査員）
浦部　頼之（　　同　　文化財調査員）
石田　守之（　　同　　嘱託員）

［二次調査　平成10年度］
調査期間　平成10年４月１日～11月13日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）
調　　査　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　野本　憲雄）
管　　理　須田　益輝（専務理事・事務局長）
若槻　勝則（総務課長）
本間　信昭（調査課長）
庶　　務　椎谷　久雄（総務課主任）
調査指導　寺崎　裕助（調査課調査第一係長）
調査担当　江口　友子（　　同　　文化財調査員）
調査職員　小濱　　亨（　　同　　主任調査員）
河崎　昭一（　　同　　主任調査員）
村上　義則（　　同　　嘱託員）

B．整理体制

出土遺物の水洗・註記作業は、調査現場で発掘調査と平行して実施した。その後、本格的整理作業は、平成10年11月～12年３月まで埋文事業団で行った。遺物の接合・復元・実測・トレースなどの作業は整理

作業員が行った。

［平成10年度］

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）

整　　理　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　野本　憲雄）

管　　理　須田　益輝（専務理事・事務局長）

若槻　勝則（総務課長）

本間　信昭（調査課長）

庶　　務　椎谷　久雄（総務課主任）

整理指導　寺崎　裕助（調査課調査第一係長）

整理担当　江口　友子（　　同　　文化財調査員）

職　　員　小濱　　亨（　　同　　主任調査員）

河崎　昭一（　　同　　主任調査員）

村上　義則（　　同　　嘱託員）

［平成11年度］

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）

整　　理　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　野本　憲雄）

管　　理　須田　益輝（専務理事・事務局長）

若槻　勝則（総務課長）

本間　信昭（調査課長）

庶　　務　椎谷　久雄（総務課主任）

整理指導　田海　義正（調査課調査第三係長）

整理担当　江口　友子（　　同　　文化財調査員）

整理作業員　内山　輝美　小熊　洋子　菊地　圭子

小林　智恵子　東條　シゲ子

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置

釈迦堂遺跡の所在する西蒲原郡黒埼町は新潟県の政治経済の中心である新潟市の南部に隣接するため、高速道路網の中核的位置を占めている。また、遺跡は新潟平野(越後平野) のほぼ中央にあり、周囲にはかつて鎧潟、田潟、大潟、的場潟など広い湿地を持った潟湖が点在した沖積地内に位置する。現況は水田で標高は0.2m前後を測る。

遺跡名は、調査対象地から600mほど南にある、天保年間に出土したといわれる青銅製の釈迦誕生仏を祭った堂(釈迦堂) から名付けられた。昭和47年には、北陸自動車道の建設に伴い、遺跡の一部の発掘調査が行われている。遺跡の北約４㎞には、奈良・平安時代の官衙に関係すると考えられる緒立遺跡と的場遺跡が所在する。また、さらに北の信濃川河口には、国津である蒲原津が所在したと見られることから、古代における蒲原郡の中心地の周辺に当たると考えられる。

2．地理的環境

A．地形概観

釈迦堂遺跡は、新潟平野を流れる信濃川の支流、中ノ口川沿いの沖積地に立地する。新潟平野は、西端には東頸城丘陵の延長部に当たる西山丘陵と角田・弥彦山塊があり、東端には魚沼丘陵の延長部である東山丘陵と新津丘陵・笹神丘陵・五頭連峰・櫛形山脈があり、これら山塊にはさまれている。新潟平野の中央部には信濃川・阿賀野川が流れ、日本海へと至る。

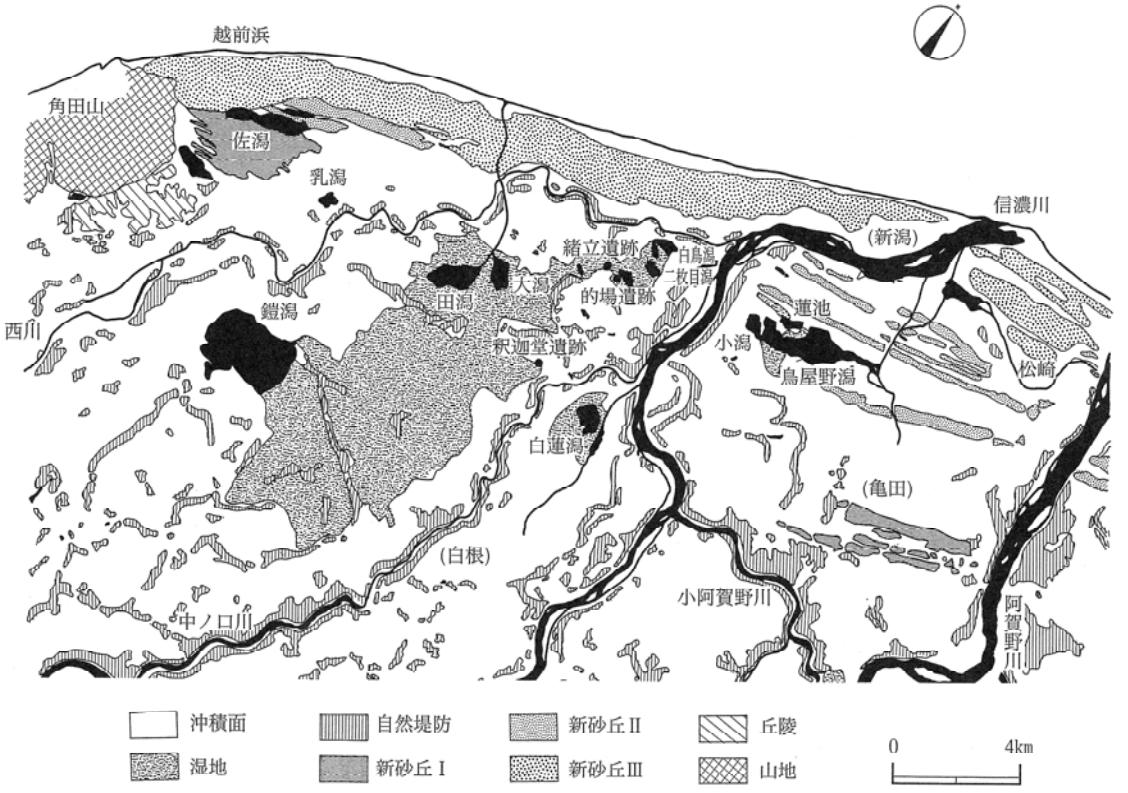
信濃川・阿賀野川の蛇行帯には、自然堤防が非常によく発達している(第１図)。そして、自然堤防に囲まれるようにして後背湿地が広く分布する。後背湿地は、水はけが悪く湿地や潟湖の状態であった。その後、人工的に干拓されて乾田化されたり、河川の氾濫で土砂に埋まって自然に干上がったりした。現在では、鳥屋野潟や福島潟などが潟湖として残っているだけとなった。

享保15(1730)年信濃川と阿賀野川を分離するために松ヶ崎放水路が掘削された。その後も洪水の被害は続き、流量を調節するために開発を禁止する「御封地」と呼ばれる遊水池を造ったり、「水倉」という土盛りをした土地に高い建物を作って食料などを備蓄した。

近年見るような大水田地帯となったのは、昭和30年代以降のことである。江戸時代初めから、明治時代の終わりまでのおよそ300年間の間に、信濃川の洪水は100回以上を数えている。規模の大小はあったが３年に１度の割合で水害が発生していた。遺跡の営まれたおよそ1,100年前の耕地確保の困難さは、想像を絶するものがある。

B．新潟平野の形成と変遷

新潟平野は北西側で日本海に臨み、信濃川・阿賀野川などをはじめ大小の河川によって形成された沖積平野である。沖積層は晩氷期の谷を埋積した堆積物の地層である。この層厚は約150mに達し、他地域の沖積層に比べ数10m以上厚く、新潟平野の沈降が引き続いていることを示唆している。また、海岸部の平野



第１図　周辺の地形区分［田中ほか1996］

の特徴として砂丘の発達がみられるが、新潟平野にも延長約70kmの新潟砂丘が海岸線にほぼ平行して発達している。日本の砂丘は新砂丘と古砂丘に区分され、日本海側の砂丘は、一般的に新砂丘の下に厚い古砂丘を伴っている。しかし、新潟砂丘はこれらの構造とは異なり古砂丘がなく、新砂丘のみが厚く堆積している。砂丘群はその形成時期によって、古い物から新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと区分されている[新潟古砂丘グループ1974]。

新砂丘Ⅰは、縄文時代に主に古胎内川から供給された砂によって成長し、内陸部に広大な潟湖(古白根潟)を形作った。その後、河川の運ぶ土砂によって埋積されていく。新砂丘Ⅱは弥生時代から古墳時代に、主に古阿賀野川から供給された砂によって形成される。内陸は河川の氾濫原となり、さらに土砂が堆積していく。新砂丘Ⅲは奈良時代から室町時代に、古信濃川と古胎内川の供給する砂によって形成された。新砂丘Ⅱの形成後、平安海進に当たる海水面の上昇で、海岸線が陸の方へ前進してきた。砂丘の発達によって、古阿賀野川の河口は狭まり砂の供給量が少なくなり、新砂丘Ⅲは新砂丘Ⅱの上部に発達していった。その後、海退が始まり海岸線は現在とほぼ同じ位置になる。内陸では水の退いた平地が広がり、人が生活を営める範囲も広がったと考えられる。

古信濃川による砂の供給は衰えず、新砂丘Ⅲの成長は続き、古阿賀野川は新砂丘Ⅲで河口を閉鎖され、その流路を西に曲げ、松ヶ崎砂丘の西で海に注いだ。また、新砂丘Ⅲの形成時の古信濃川の河口は、砂丘の地形や砂の粒土分析から現在の新川付近にあったとしている[磯部1980]。古信濃川の河道は、角田山の隆起運動と、平野の沈降運動により、西から東側にしだいに移り、現在の新川付近から関屋付近にその河口が移っていった。このことは、古信濃川の自然堤防の分布の特徴が、南北に連続して連なっていることと、現信濃川の西側に多く見られることから読み取れる。

1. 親仁山遺跡	古代	17. 林葉寺の五輪塔	中世	33. 樋切遺跡	古代	49. 浦田遺跡	古墳・古代
2. 女池稲荷遺跡	古代・中世	18. 大墓遺跡	近世	34. 与平潟遺跡	平安・中世	50. 元宮遺跡	中世
3. 鳥屋野遺跡	中世	19. 木場遺跡	中世	35. 六十歩下遺跡	平安・中世	51. 中才遺跡	古代
4. 地蔵山遺跡	中世	20. 釈迦堂遺跡	平安・中世	36. 西前田遺跡	平安	52. 三町歩遺跡	平安
5. 上中沢遺跡	中世	21. 己ノ明遺跡	中世	37. 千日遺跡	平安	53. 長潟遺跡	中世
6. 的場遺跡	古代・中世	22. 曾根上遺跡	古代	38. 長田遺跡	中世	54. 二丁下遺跡	中世
7. 緒立遺跡	縄文～中世	23. 曾根下遺跡	古代	39. 西萱場遺跡	弥生	55. なえびき橋遺跡	古代
8. 与左ヱ門屋敷遺跡	近世	24. ブギリ遺跡	古代・中世	40. 六枚田遺跡	古代	56. 大島橋遺跡	古代
9. 高山前田遺跡	中世	25. 弥左ヱ門遺跡	古代	41. 兵蔵遺跡	弥生・古墳・中世	57. 四ツ割遺跡	古代
10. 前田遺跡	古代・中世	26. 土手内遺跡	古代	42. 本田遺跡	古代	58. 沼下遺跡	古代・中世
11. 高山西遺跡	中世	27. 芋畑遺跡	中世	43. 浦A遺跡	古代	59. 島灘瀬遺跡	古墳
12. 沢田遺跡	中世	28. 骨田遺跡	古代	44. 浦B遺跡	古代	60. 高畑遺跡	古代
13. 六地山遺跡	弥生・中世	29. 味方排水機場遺跡	縄文	45. 堤遺跡	古代	61. 河井前遺跡	中世
14. 内野潟端A遺跡	中世	30. 味方用水路遺跡	古代	46. 兵右衛門新田の古銭出土地	近世		
15. 内野潟端B遺跡	中世	31. 江向遺跡	中世	47. 太田遺跡	中世		
16. 道下遺跡	中世・近世	32. 横川浜堤外地遺跡	縄文・古代・中世	48. 松崎屋敷遺跡	中世		

第２図　周辺の遺跡

新砂丘Ⅲは信濃川以東では弧状、以西では直線上の見事な砂丘帯に成長した。その結果、河川の河口が狭まることになる。内陸に水が溢れることが多くなり、新潟平野には、扇状地・砂丘・自然堤防以外は、潟湖や後背湿地が多数存在することになった。

最も海に近い新砂丘Ⅲの最終列は、室町時代以降に形成され、東側から延びる砂丘列は古阿賀野川の河口を閉鎖し、古阿賀野川の流路は古信濃川と合流していた。西側から延びる砂丘は古信濃川の河口をさらに東側へ移動させ、関屋分水路付近から現在の位置を取るようになった。古信濃川と古胎内川から運ばれる砂の量は多く、砂丘の成長は早かった。江戸時代(享保年間)の放水路掘削事業などの治水工事が始まるまで、河川は網の目状に発達し、内陸部は湿地や潟湖が広がっていた。

3．歴史的環境

A．周辺の遺跡

釈迦堂遺跡周辺の遺跡は、第２図のとおりである。新潟平野では海岸部に近い砂丘地および、沖積地の自然堤防上に遺跡の分布がみられる。以下、時代順に発掘調査が行われた遺跡を中心に概略を述べる。

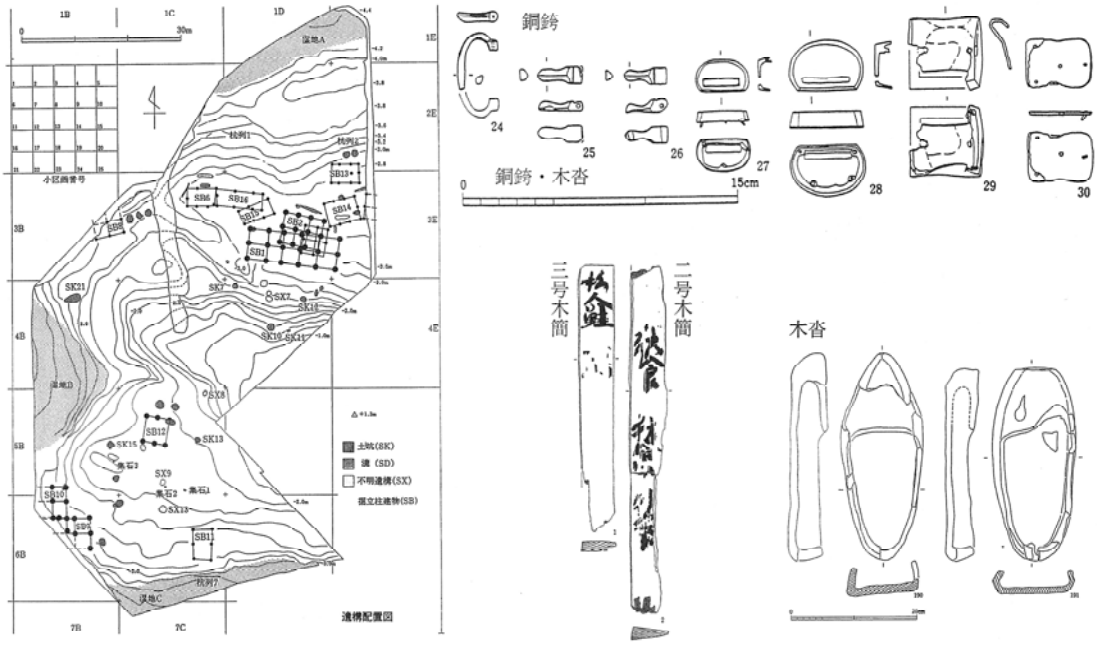
(1)縄文時代

わずか４遺跡でほとんどが遺物散布地で、遺跡の様相が把握できるのは黒埼町緒立遺跡(7)のみである。緒立遺跡は、古墳時代から古代・中世を中心とする遺跡であるが、縄文時代晩期前半から後半の土器も出土している[黒埼町史資料編一1998]。新潟市的場遺跡(6)では、土器・石器が少量出土しているが、時期を明確にできるものはなく、隣接する緒立遺跡出土遺物の時期から晩期の遺物と推定される程度である。中ノ口川左岸にある味方村味方排水機場遺跡(29)では、昭和41年に地盤沈下対策工事の際、地表面から15m下の泥炭層から、縄文時代後期・晩期の土器片が若干出土している。これらの土器は、沖積地に深く埋没する未発見の遺跡の存在を示す資料である。小須戸町横川浜堤外地遺跡(32)では、中期後半の土器が採取されている。ただし、採取された地点が、信濃川の河床の中に見られる湿地帯で、峻拙船が作業したときに土砂といっしょに吸い上げられてきたものということである。この遺物が当初から存在したのか、あるいは洪水などによって他の場所から運ばれたのか即断はできない。しかし、新潟市阿賀野川中洲Ａ遺跡[新潟市史資料編１　1994]で中期後半から後期の土器が採取されている例もあり、横川浜堤外地遺跡でも当初から遺物が存在した可能性は否定できない。

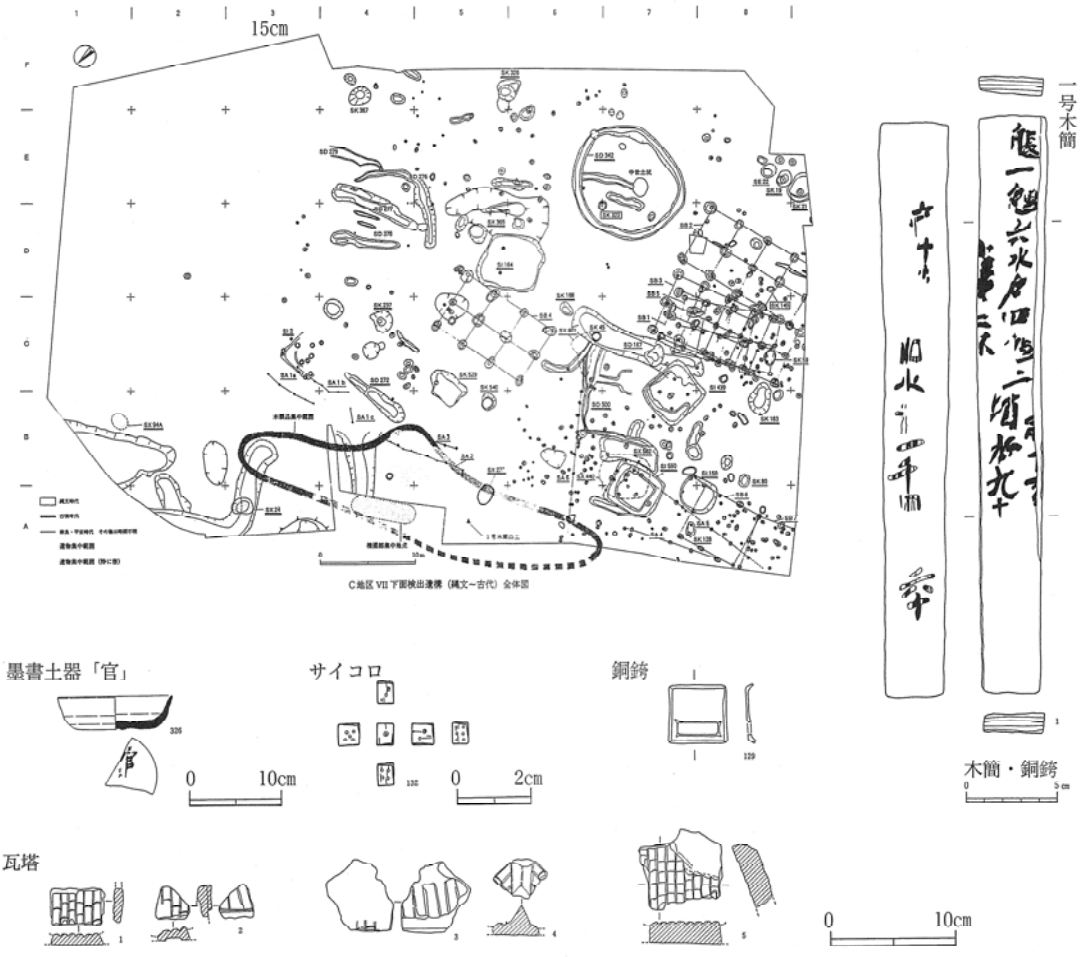
(2)弥生・古墳時代

７遺跡が挙げられる。緒立遺跡は、弥生時代終末から古墳時代初頭、古墳時代後期の遺物が出土している。弥生時代の遺構は14基の土坑が検出されている。遺跡範囲内に所在する緒立八幡宮境内には、社殿下に「緒立八幡神社古墳」と通称される、葺石を持つ径30mの円墳が存在する。時期は、巻町山谷古墳・菖蒲塚古墳とほぼ同時期の古墳時代前期とされる。他に古墳時代の竪穴住居８軒・溝状遺構・土坑が検出されている。新潟市六地山遺跡(13)は、低湿地に囲まれた残丘状の砂丘列に立地する弥生時代後期前半から中頃の遺跡で、過去４回の発掘調査が行われている。ハケ目調整を主体とする北陸系の土器と、縄文を主体とする東北系土器が共存する遺跡である。籾痕のついた土器片が検出されているが、直ちに稲作が行われていたことを証明するものではない。アメリカ式石鏃をはじめとして多量の石鏃と石錐が出土しており、

新潟市的場遺跡全体図・出土遺物（『新潟市史資料編１』を一部改変）



黒埼町緒立Ｃ遺跡全体図・出土遺物（『黒埼町史資料編一』を一部改変）



第３図　的場遺跡、緒立遺跡C地区全体図・出土遺物

鉄鏃などの鉄製品は少ないものと推定される。ほかに月潟村西萱場遺跡(39)・兵蔵遺跡(40)、西川町浦田遺跡(49)、巻町島灘瀬遺跡(59)などがあるが、詳細は不明である。

(3)奈良・平安時代

沖積地の自然堤防上と推定される微高地に34遺跡分布する。前代と比べこの時期遺跡数はかなり増加する。奈良時代以降、土地の私有を認める制度を背景に、沖積平野の低湿地の意欲的な開発が進められ、平野の自然堤防上に集落を築き、開発の拠点としていたことによる[新潟県史通史編１]。

潟東村千日遺跡(37)・六十歩下遺跡(35)・ブギリ遺跡(24)・樋切遺跡(33)、西川町三町歩遺跡(52)などは、釈迦堂遺跡のように現地表面下1.2～1.5mから遺物が検出されるている。

釈迦堂遺跡の北西方向から釈迦堂の御堂脇をとおり味方村役場方向に向かい、近年まで人工の囲土手があったという(明治44年測量の地形図には痕跡あり)。築堤時期など詳細は不明であるが、元々の自然堤防上の微高地に更に土盛りをし、水害に備えたと考えられる(渡邉ますみ氏ご教示)。黒埼町内のこれらの囲土手は昭和18年の耕地整理でほとんどが消滅している。その他、潟東村曾根上遺跡(22)・ブギリ遺跡(24)・土手内遺跡(26)、味方村曽根下遺跡(23)・骨田遺跡(28)などの古代の遺跡は、すべて自然堤防上の水かかりの悪い所に立地し、古代の土地開発を考える上で興味深い。

的場遺跡は、残丘状の小砂丘に立地しており、北側は的場潟に接する。８世紀前半から10世紀終末まで漁業及び水産物等の物資管理のために政策的に編成された遺跡である。検出された14棟の建物はすべて掘立柱建物で、倉庫と考えられる大型の総柱の建物もある。この大型の総柱建物には銭貨が埋納されていた。井戸や区画溝はない。遺物は、大量の土錘(細形約7,300個、太形約1,300個)や木製の浮子(80個)等の魚網具が出土しいるが農具はない。当時、周辺は内水面に囲まれていたと考えられ可耕地はほとんどなかったものと推測される。銅銙(７点)や木沓など官人が身につけるものや、人形や馬形など律令祭祀具の出土を考えると一般集落とは考えにくい。「狄食」「をの尓へ」などと記載した木簡が出土していることからも官衙的な様相が伺える。

的場遺跡から、西へ800mのところに緒立遺跡が所在する。緒立遺跡は８世紀半ばから10世紀後半に営まれた遺跡で、ほぼ的場遺跡と年代が重なることから密接な関係があったことが推測される。遺跡は東西550mの広さを持ち、古代の遺跡の中心はＣ地区と呼ぶ東側で、掘立柱建物７棟、井戸、柵列、土坑等が検出されている。掘立柱建物のうち３棟は総柱建物で、しかも桁行きが４から５間の大型建物で倉庫と考えられる。中央のＡ地区、西側のＢ地区で竪穴住居がそれぞれ１軒づつ検出されている。遺物は、須恵器の貯蔵具を中心とする多量の土器が出土している。高さ50cm 以上の大型の甕や横瓶がそれぞれ10個体も出土している。また、須恵器の大型貯蔵具である「瓩」「瓲」「瓧」を請求した木簡も出土している。これらは、醸造などに使用される容器である。ほかに律令祭祀や官人に関連する物も多い。祭祀具には斎串・琴柱のほか、大小１個体づつの土師器甕の人面墨書土器が出土している。県内では唯一の出土例である。骨角製のサイコロや瓦塔も出土している。的場遺跡より少ないが1,500個の土錘や木製の浮子などの漁網具も出土している。このような遺構・遺物のあり方は、官衙的な様相を呈する。

的場遺跡や緒立遺跡は定型的な建物配置を持たないことや、国が越後の主要な貢納品である鮭を管理していたことを考えると、郡衙ではなく国衙に関係する遺跡と考えられる[春日ほか1998]。

(4)中　世

22遺跡を数えるが、詳細は不明な遺跡が多い。釈迦堂遺跡のおよそ800m北西、木場集落の西端に、木場城跡(19)が所在する。約200m×200mの方形の範囲で、外郭と内郭から構成されていたと推定される。文献によると木場城は、天正８(1580)年に築かれたもので、慶長３(1598)年まで新発田氏に対する上杉氏の重要な拠点として本格的な城館であった。現在、遺構は確認出来ないが、木場地内に「上屋敷」「下屋敷」「館辻」などの呼称が知られている。また、かわらけ・青磁・フイゴの羽口などの遺物が少量出土している[黒埼町史資料編一1998]。その他、西川町長潟遺跡(53)では、開田の際に灰・施釉陶器、人骨などが出土している。潟東村二丁下遺跡(54)では、暗渠掘削工事の際に柱根及び宋銭約１千枚が出土している。

B．古代の釈迦堂遺跡周辺

西暦645年に起こった「乙巳の変」の後に、いわゆる「大化の改新」といわれる政治改革が行われた。新政府が大化年間に東北地方に対してとった政策は次の３つである。第一は、大化元(645)年に東国などの国司に対して管内の武器の収公を命じた際、例外として「辺国の近く蝦夷と境を接する処」では武器の数を確認したうえで、依然として本来の持ち主に持たせておくこと。第二に、大化３(647)年に渟足柵を作り柵戸を置いたこと。第三に、大化４(648)年に磐舟柵を作って蝦夷に備えさせ、また、越と信濃の人民の中から選んで柵戸を置いたことである[虎尾1995]。すべてが蝦夷対策であり、第二・第三はいずれも後の越後国に関係する事柄であることから、北方の蝦夷対策における越後国の重要な位置が示されている。

現在の福井・石川・富山・新潟の北陸地方を一国として設置された広大な越国は、持統天皇３(689)年から同天皇６(692)年の間に、越前・越中・越後に３分割され、北陸道北端の越後国が蝦夷の国と境を接する辺境の国となった。この間の持統天皇４(690)年に、二度目の全国的な戸籍(庚寅年籍)が作成されており、この折りに越国は分割されたと見られる[小林1995]。この時点での越後国は阿賀野川以北の沼垂郡、磐船郡の２郡、そして北の辺境の出羽(庄内)地方を含む範囲で、北方の境は確定していなかった。この領域は、新政府が渟足柵を信濃川河口付近に、磐舟柵を岩船潟周辺に築き、北方の辺境地支配を推し進めていたところである。この頃の越後国府の位置は明確でないが、渟足柵、磐舟柵などの城柵に国司が同居して国政に当たっていた可能性が高い。大宝２(702)年に越中国より 頸城・魚沼・古志・蒲原の４郡が越後国に編入された後、越後国府は頸城郡に移転したと考えられる。最新の考古学の成果では、和島村・下ノ西遺跡(八幡林遺跡とともに古志郡衙と考えられる)から、国司の掾(三等官)の出挙木簡が出土し、越後国府(頸城郡に所在)に越後国司の守(一等官)、沼足城に介(二等官)、両者の中間地点にあたる八幡林・下ノ西遺跡に掾、最北の磐舟柵に目(四等官)が常駐していたのではないかというケースも想定されている[田中1998]。和銅５(712)年には出羽国が建国され、めまぐるしく変化していた越後国の領域が確定した。こうして、日本海側では越後国に変わって出羽国が北限の国として登場し、辺境の国となった。このような国郡の分割は、北陸のみならず全国的に推進された政策である。

釈迦堂遺跡の所在する古代の黒埼町域は、蒲原郡に属していた。蒲原郡の範囲は、現在の阿賀野川以西の中・西・南蒲原郡の一帯である。蒲原郡は、大化前代に国造に任命された、高志深江氏の支配地域である。承平年間(931～938年)に作られた『倭名類聚鈔』では、蒲原郡内に日置・櫻井・勇禮・青海・小伏の５郷があったことを伝えている。これまでに『延喜式』(927)に記された神社名や地名などから、このうちいくつかは比定地が挙げられている。桜井郷については現在の弥彦村に桜井という地名が存在したことか

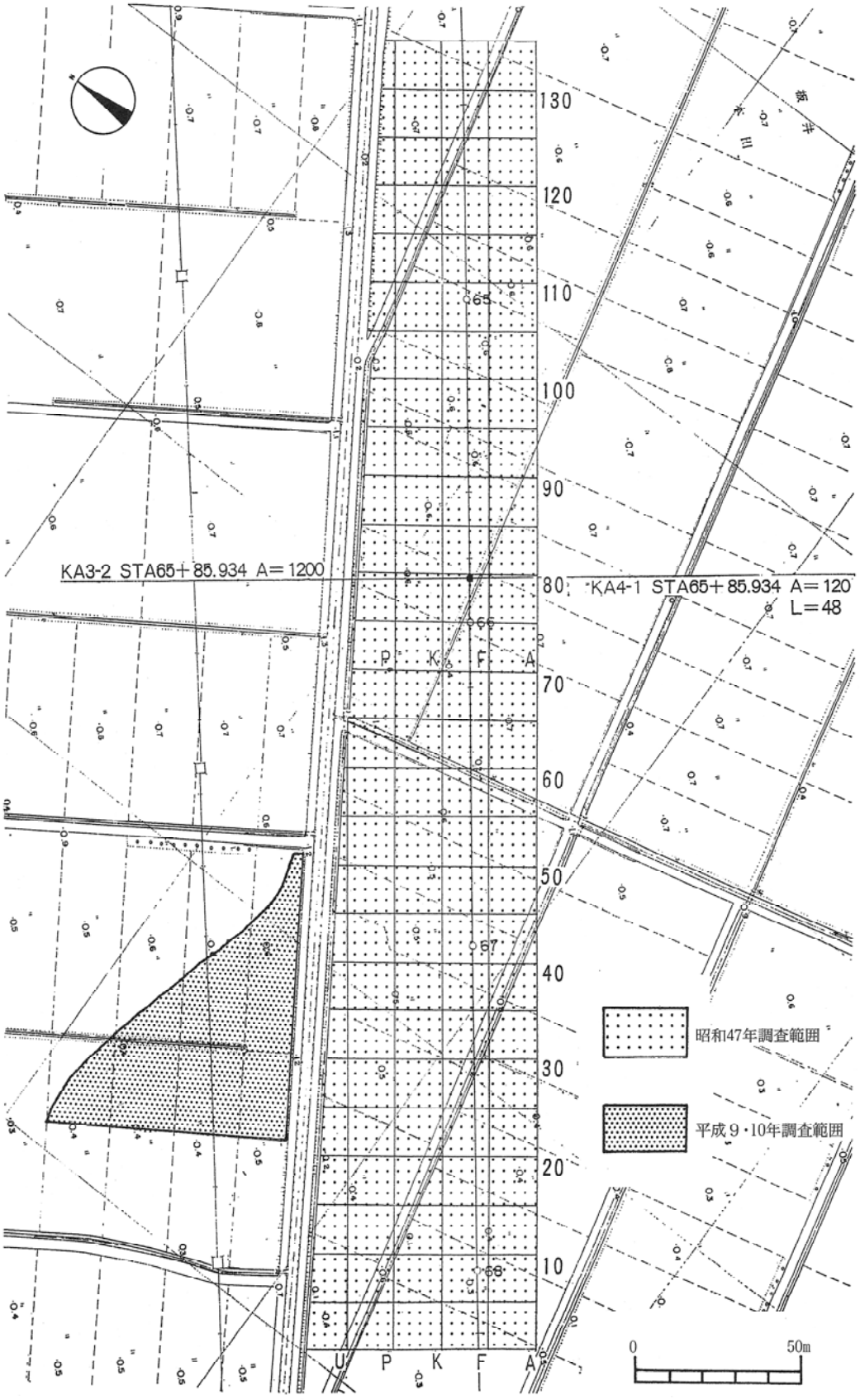
ら、弥彦村周辺に比定する説が有力視されている。勇礼郷は中世史料にも見える三条市の井栗を勇禮(以久禮)の遺称と見る説が多い。『延喜式』には伊久礼神社を載せている。小伏郷については三条市上保内周辺とされている。青海郷については加茂市加茂に現存する青海神社周辺が有力視されている。中世に現在の加茂市付近から白根市付近にかけて青海荘が存在した。また、『延喜式』には蒲原郡の青海神社は二座とあり新潟市長嶺の蒲原神社周辺を青海郷に比定する説もある。平成10・11年度に発掘調査された加茂市馬越遺跡[伊藤1998・1999]などの調査では、８世紀中頃から10世紀前半に営まれた集落にＬ字状の計画的な建物配置が検出され、銅鈐・石銙・石製分銅などの出土で有力な豪族層の存在が伺え、周辺に青海郷が比定できる可能性もある。日置郷については、新津市金津周辺、矢代田・小須戸周辺、吉田町周辺など諸説があるが一致を見ていない。いずれにしても現在、緒立・的場遺跡周辺および釈迦堂遺跡周辺に郷の比定地は見られない。本遺跡が存在した９世紀から『倭名類聚鈔』が成立する10世紀前半の間に郷の数や名称の変遷があると考えられる。

蒲原郡では、八幡林遺跡出土木簡から、高志君五百嶋・高志君大虫が蒲原郡の郡務に従事していたことが知られる。また、『倭名類聚鈔』・『延喜式』に記された郷名・神社名のうち氏族と関連するものとして、小伏郷・小布施神社・日置郷があり、布施氏・日置氏の存在が推測できる。このほか、延暦３(784)年には蒲原郡の三宅連笠雄麻呂が稲十万束を蓄え、これを貧困者の救済や道路・橋を整備するなどの社会事業に当て、従八位の位階を受けたことが知られる。三宅連氏については、５・６世紀に設置された「屯倉」を管掌した地方豪族と系譜的につながるものとの指摘がある。三宅氏は、古代の三島郡に所在する柏崎市箕輪遺跡出土木簡に「三宅史」の文字が見え、その存在が知られる[岡田2000]。高志君氏については、『西大寺資材流記帳』により頸城郡に郡司として存在が知られる氏族であり、また、『国造本記』に見られる高志深江国造と系譜的つながりを持つ可能性がある。また、平成10年の秋田城跡の発掘調査で出土した９世紀前半の漆紙文書の死亡帳(戸籍・計帳とともに古代の人民支配の基本台帳で、戸籍に記載された人のうち、毎年七月から翌年の六月の間に死亡した人の月日を記した帳簿)に、越後から移住した「高志公」の戸で年間６人もの死亡者がいたことがわかっている[日野1999]。和銅７(714)年十月二日条に「勅割尾張、上野、信濃、越後等国民二百戸、配出羽柵戸」とあるのを初見として、霊亀２(716)年、養老３(719)年ほか越後の人々は９世紀初頭まで、たびたび出羽国への移住や物資の輸納を命じられている。この死亡帳に名の見える高志公氏も、律令政府が行った一連の北方支配の一環として移住させられた人々であろう。高志公氏の分布も越後・頸城、蒲原に留まらないことが明らかになった。一方、布施・日置氏は越中国新川郡・信濃国更科郡にそれぞれ布施・日置神社があり、越後周辺に両氏がセットとなって存在している氏族である。また、十二世紀初頭の蒲原郡司に守部有茂の名が見える。三重の塔一基を造営した功徳によって、円羅国王に生まれ変わったという[小林1995]

４．昭和47年度の調査概要

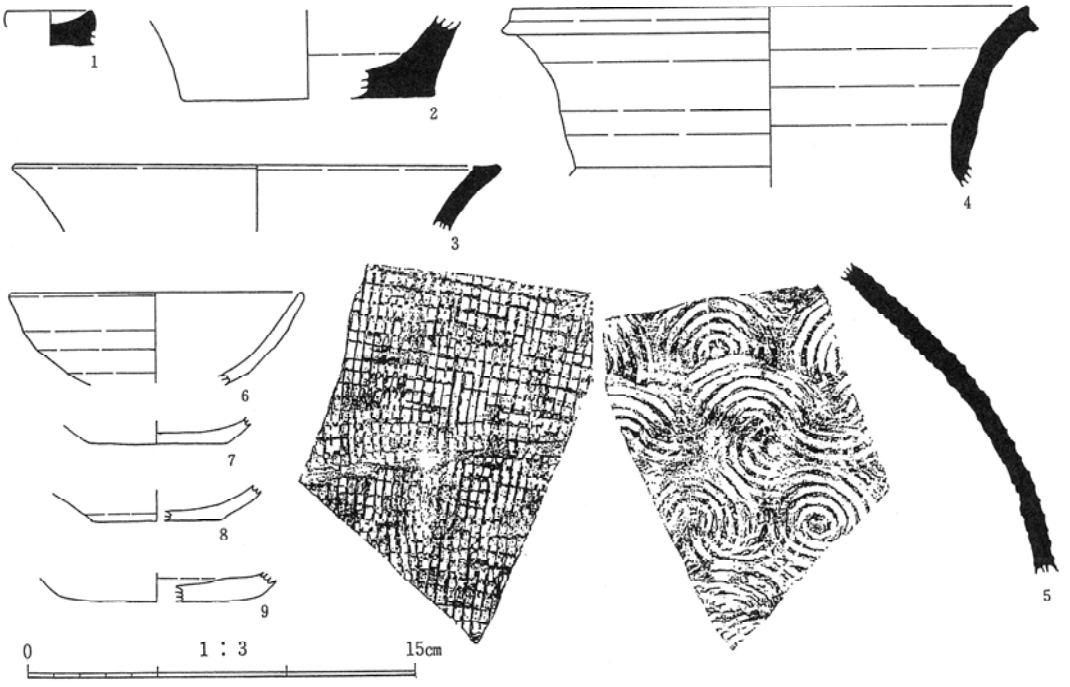
釈迦堂遺跡は、北陸自動車道の建設に伴い、昭和47年10・11月に遺跡の一部を発掘調査した。平成９・10年度調査範囲との位置関係は第４ 図の通りである。昭和47年の調査区は東西420m、南北70mである。遺構は検出されていない。出土遺物の90％は70～80Ａ～Ｈグリッドの２・３層からの出土である。現地は、これまでの26年間に約40㎝も地盤が沈下している。以下、出土遺物の概要を述べる。

最も古い出土遺物は、平安時代の土師器と須恵器であるが、量的にはわずかである。須恵器は、蓋(1)・壷(2)・甕(3～5)がある。須恵器は、多くが佐渡小泊産である。ロクロ成形の土師器の椀があり、底部切り



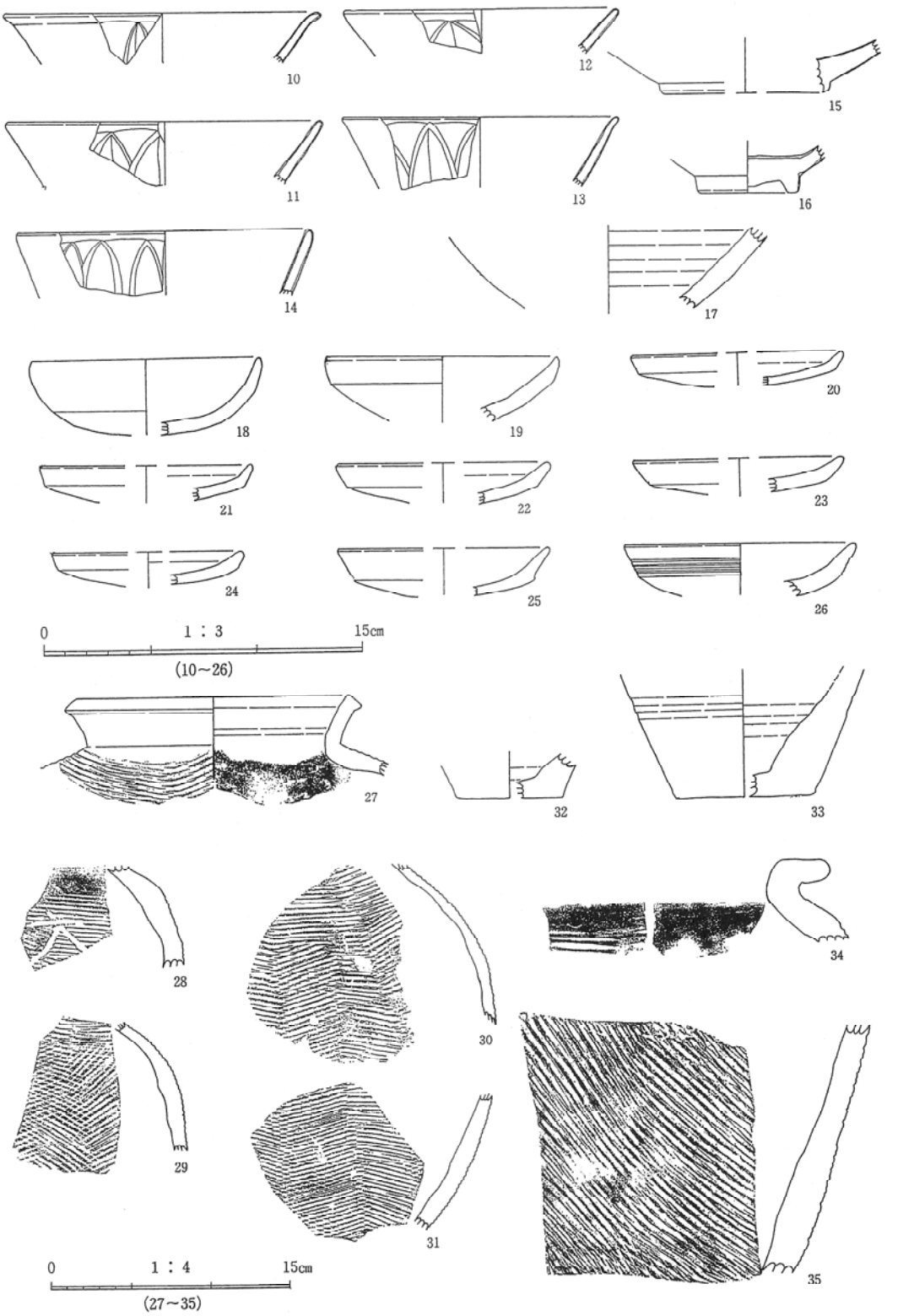
第４図　昭和47年度、平成９・10年度調査範囲図

離し技法は回転糸切り(7･8)及びヘラ切り(9)である。食膳具の主体が土師器であることなどから９世紀末を前後とする時期とみられる。今回出土した遺物の９世紀代という年代観の範囲に収まる時期である。最も多く出土している遺物は、鎌倉・室町時代の13世紀から14世紀代のものである。輸入陶磁器には、青磁(10～16)と白磁(17)があり、鎬を有する連弁文のみられる青磁椀が主体である。土師器は、大型で深身のもの(18･19)と小型で身の浅いもの(20～26)がある。珠洲焼は、壷・甕・擂鉢がある。壷にはロクロ成形のもの(32・33)と叩き成形(27～31)のものがある。32・33は底部外面に静止糸切り痕が残る。28の肩部には、「大」のヘラ描きがある。28・31は外面に綾杉条の叩き、内面は無紋の当て具痕が残る。35は甕で外面は平行叩き、内面には無文の当て具痕が残る。36～52は擂鉢である。36・47は他のものに比べて卸目が細かい。47～52の底部外面には静止糸切り痕が残る。53～55は笹神窯産と見られる瓷器系陶器の甕である。他に、時期不明の土錘、砥石、鉄釘、鎌、銭貨(皇宋通宝、初鋳・宝元二(1039)年)などが出土している。



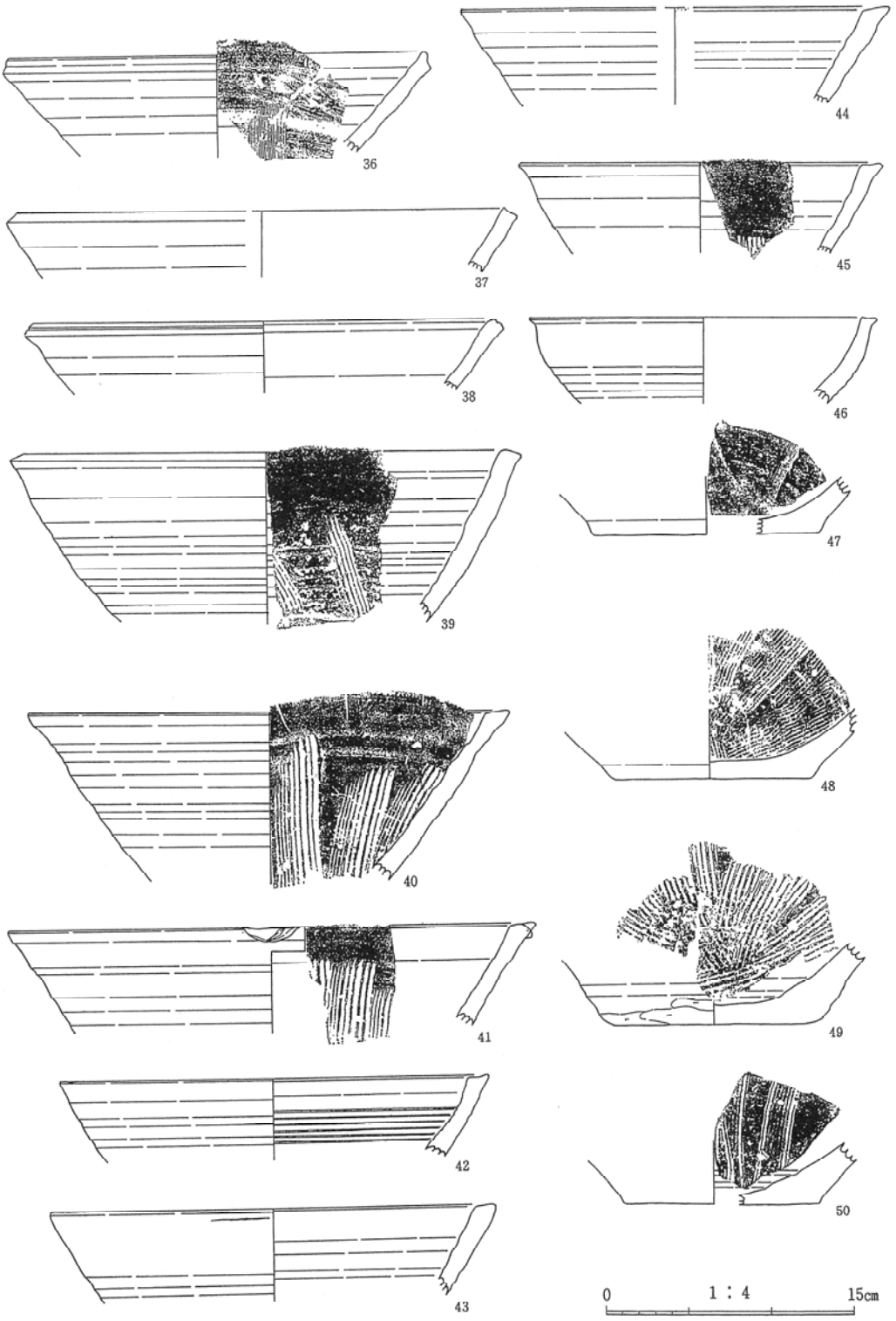
（1～5　須恵器　6～9　土師器）
［黒埼町史資料編一］

第５図　昭和47年度出土遺物１



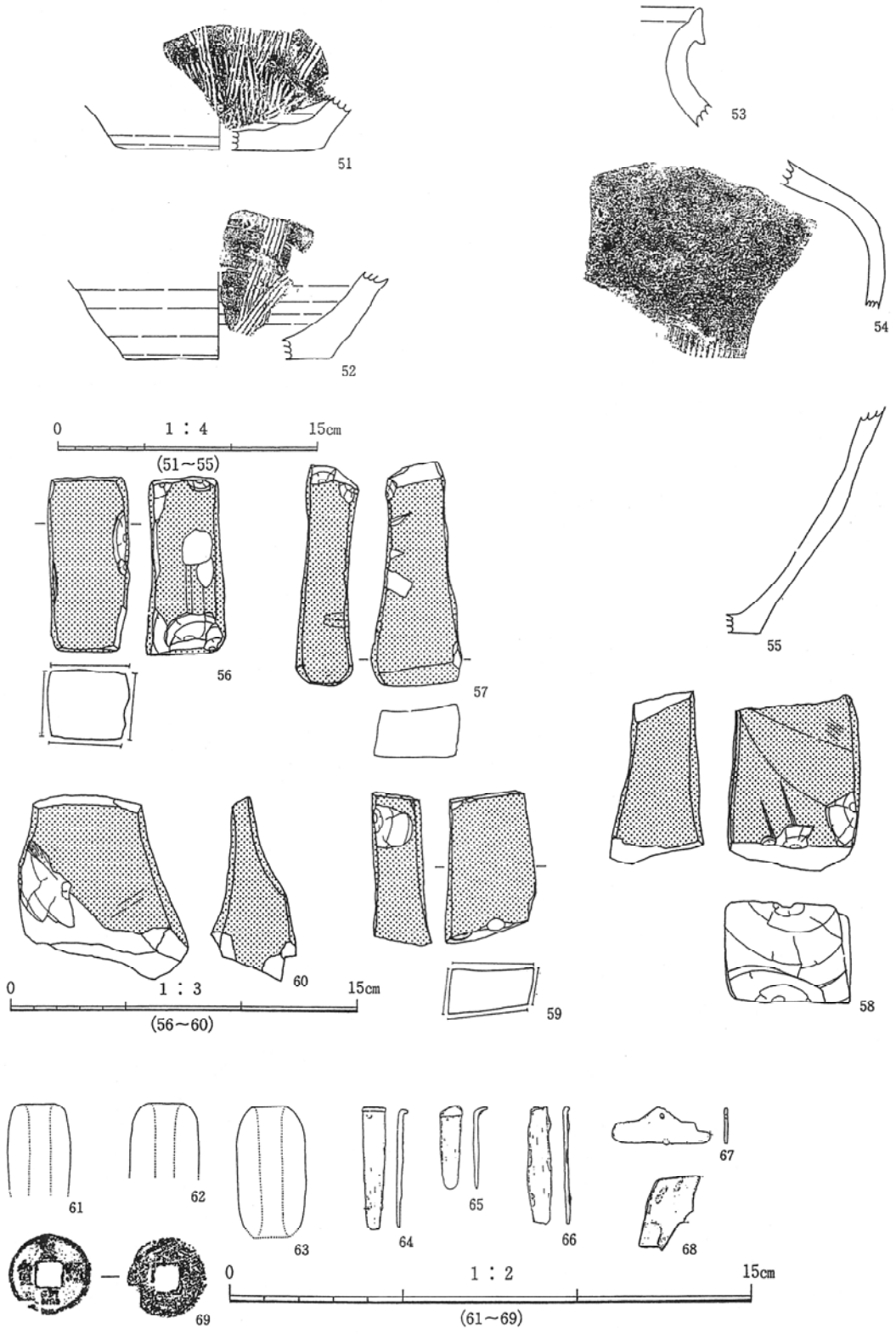
(10～16青磁　17白磁　18～26土師器　27～35珠洲)
［黒埼町史資料編一］

第６図　昭和47年度出土遺物２



(36～50珠洲焼)
［黒埼町史資料編一］

第７図　昭和47年度出土遺物３



(51、52珠洲，53～55白磁，56～60石製品
61～63土製品，64～69金属製品)

［黒埼町史資料編一］

第８図　昭和47年度出土遺物４

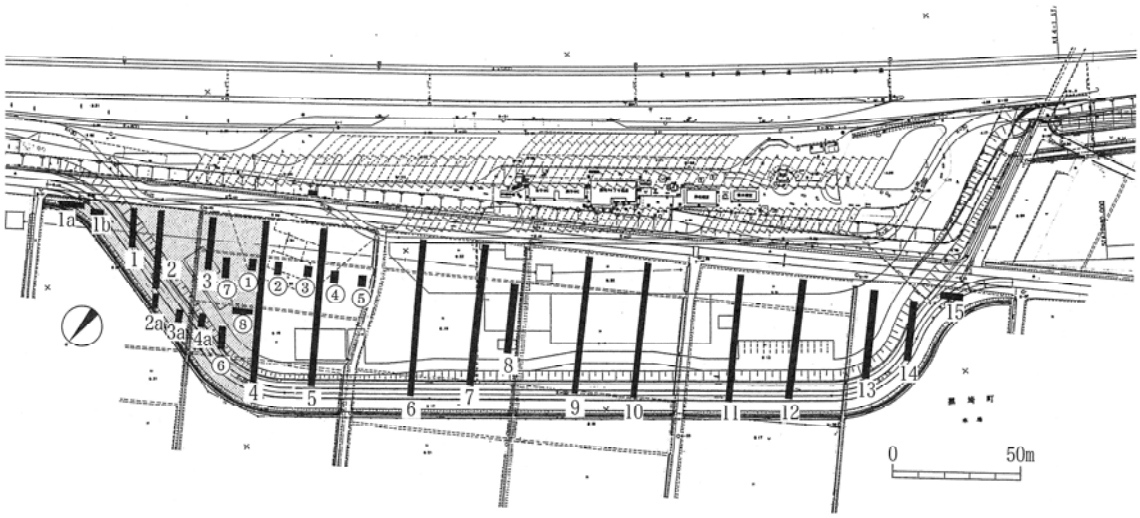
第Ⅲ章　調査の概要

1．一次調査

釈迦堂遺跡は、昭和47年に北陸自動車道の建設に伴い、遺跡の一部の発掘調査が行われており、今回の一次調査対象範囲でも当初から遺構・遺物の存在が予測されていた。一次調査は、平成９年４月８日～14日と11月20日～25日の２回に分けて、埋文事業団が実施した。

A．調査方法

調査方法は対象地域全体(22,270㎡)に任意にトレンチを設定し、重機(バック・フォー)を使用して徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況などを観察し記録した。トレンチの土層断面、及び底面の清掃は、作業員による人力で行った。調査対象地は、水田で約30mごとに用水・排水路で区画されており、その区画毎に２本のトレンチの設定を原則とし、合計15本のトレンチ(1,176㎡)を開け調査した。確認率は5.28%である。



第９図　一次調査範囲図（丸数字は範囲確認調査トレンチ、スクリーントーンは二次調査範囲）

B．調査結果

東端に当たる２トレンチ(以下、Ｔｒとする)のみで、田面から約1.5m下で遺構・遺物が検出された。土坑状の落ち込みを２基検出しているが、一つは黒埼パーキングエリアに近い南端に位置し、径約1.5mの丸味をおびたプランの４分の１ほどを検出した。今回の一次調査の出土遺物の大半が含まれていた。もう一方の土坑状の落ち込みは、南端から約20m付近に位置する。直径が１m前後の円形のプランを呈する。

２Ｔｒから出土した遺物は、平安時代の須恵器と土師器のみであり、昭和47年度の発掘調査で出土あるいは平成８年の分布調査で採取されたような中世の遺物は全く出土しなかった。須恵器は、９世紀代の佐渡・小泊産のものが多かった。器種は無台杯が多く、完形に近いものが３個体、「上」の文字が墨書されたものが１個体、有台杯が１個体で、いずれも南端の遺構から出土した。破片は無台杯がほとんどであるが、甕や杯蓋も数片含まれる。土師器は、甕類の破片が120点あまりと多く、椀の破片も１点あり、須恵器の年

代とほぼ同時期と推測された。二次調査は多量の遺物と２基の遺構が検出された２Ｔｒを中心に2,100㎡について行うこととした。

平安時代の遺物包含層が、田面より1.5m下に存在することと遺構が存在することは確認された。しかし、２Ｔｒ以外のトレンチで遺構・遺物が検出できなかったことから、遺跡そのものの範囲や性格の特定は出来ていない。遺跡の所在する地域は、沖積地の低湿地で地盤も軟弱で湧水が多く、山地での調査方法と同じ調査方法を取ったために危険を伴った。トレンチ壁面の崩落におびえながら調査を行うという状況では、土層観察もままならず正確な情報が得られていない。地質にあった一次調査の方法を選択すべきであったと考える。

２．二次調査

Ａ．平成９年度の調査方法と経過

(1)調査方法

表土除去は、遺物包含層直上まで重機で行った。排水がうまくいかず、小グリッドを細かく分割することは困難と考え５×５ｍに分割することとしたが、ウェルポイントを入れ排水の状況が改善した10月10日以降は２×２ｍに変更した。10月９日までに取り上げた遺物は層位が明確でない物もあり、すべてⅦ層として一律に取り上げている。また、小グリッドの混乱を避けるため黄色のポスターカラーで註記した。

基本層序確認のためトレンチを入れた結果、遺物包含層が間層を挟んで４～５層存在することが確認された。その５層を上から順にⅦ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺ層とした。なお遺物包含層をａ層、間層をｂ層とし、Ⅷａ層、Ⅷｂ層などと呼称した。調査区全体にセクションラインを引き、層位を記入したフラワーラベルを用いて表示した。層位ごとに包含層を掘削し、遺構精査を行い遺構を発掘した。写真はモノクロネガ・カラーポジともに35㎜のフイルムで撮影することを基本とした。遺構実測図は、縮尺20分の１を基本に作成した。各ｂ層ごとにレベリングをおこなった。排土は、ベルトコンベアーで所定の場所に運搬した。

(2)範囲確認調査の方法と結果

当初、2,100㎡で調査を開始したが、遺物が全面に出土することから、遺跡の範囲拡大が予想された。このため、調査範囲外の西側に任意に①～⑧のトレンチを設定して範囲確認調査を行った。９月のトレンチ掘削で壁面の崩落があり危険なことから、トレンチ両側に簡易矢板を打ち、支保を行った中を重機で掘削する方法を選択した。田面から約２ｍまでは重機で薄く掘削する方法で、遺構・遺物の検出に努めた。２ｍ以上は、壁面が崩れてくる可能性があったため、直径20㎝の鋼管を重機で打ち込み、鋼管の中に詰まった土の堆積状況と遺物の有無を確認するという方法を採った。その結果、①～⑤Ｔｒでは、遺構・遺物は検出されなかった。調査区に近い⑥・⑦Ｔｒでは重機掘削で遺構・遺物が検出された。⑧Ｔｒでは重機掘削では遺構・遺物は発見されなかったが、鋼管の中から斎串が１本出土した。斎串は田面から４ｍの位置で管の幅20㎝で上下を切断されていた。この結果、遺跡の範囲は西へ約20m拡張することが判明し、西側の範囲はほぼ確認できた。しかし、遺跡全体の範囲は調査区外に広がるものと推測された。

調査対象面積は、当時用水路・農道となっていた部分を含め4,400㎡となったが、用水路の南は、パーキングエリアの盛土が３ｍあり、幅も狭いことなど工法的にも拡張は困難であるという県教委の判断から、

調査対象面積は用水・農道部分を削除した3,400㎡(×４面)となった。

(3)経　過

９月３日に現地に入ったが、詳細な遺跡の範囲を確認するために、一次調査でトレンチを入れていない４か所にトレンチを設定し掘削した。壁面が崩落するため長いトレンチを掘削することができずａ・ｂと分割して調査を行った。東端の１ａ・１ｂＴｒ、西端の４ａＴｒでは、遺構・遺物は検出できなかった。北端の２ａ・３ａＴｒでは土師器が少量出土した。この結果から、当初の2,100㎡ で二次調査を行うこととした。このトレンチ掘削で地盤の軟弱さと湧水の多さを改めて認識したが、調査員の低湿地遺跡での調査経験の無さと、地質に対する認識不足も手伝い、その後の調査の方法や排水設備の選択などを間違い、大きな混乱を招いた。

９月４日から南端の農道側より５分の法面をつけて表土除去を開始した。ほぼ全面からの遺物の散布と数基の遺構が確認された。平行して表土除去が終了した部分から、調査区の周囲に人力により開渠を掘削した。開渠の両側にベニヤ合板を当て、土留支保を行ったが、地盤が軟弱のため支保が機能せず崩壊した。また、開渠を掘削した排土を法面に置いたため、排土の重さが加わり更に法面の崩落も招いた。９月７・８日の週末に降った雨のため、南の農道側の法面が崩落した。農道の使用に支障が出るため農道沿いに簡易矢板を部分的に打ち込み合板で押さえ修復した。あまりに湧水量が多く開渠の効果も見られないので、ウェルポイントによる排水が可能か地元の削井業者に相談したが、さらに下に15m以上も粘土層が続いてから砂層になるため、表面の水が砂層に浸透せず効果はないということであった。表土除去もほぼ終わりかけた９月13・14日の週末の雨でほぼ全域の法面が崩落した。このままでは、周囲の水田にも崩落の危険が及ぶということで、調査範囲全体に矢板を打ち暗渠を巡らすことになった。暗渠の深さは、一次調査で包含層の厚さや地山の深さなどが明らかになっていなかったため、開渠を掘削しているときの状況から推測して深さ60㎝とし、24時間排水を行ったが、浅すぎて後半にはまったく機能しなかった。矢板打ち工事及び暗渠掘削工事は、９月20日から30日に行った。暗渠を掘削したが効果はすぐには現れず、また湧水量に排水量が追いつかないため、調査区は沼地の状態となっていた。

10月１日より作業員を投入し排水効果が上がる様、上面の泥を除去した。暗渠に上水を流すための排水溝と、土層観察のためのトレンチを兼ねた溝幅50㎝を掘削したが、土圧で押され土留支保も効果がなかった。ウェルポイント設置のため公団から、ボーリング調査の結果を取り寄せた。その土層柱状図には田面より５m下にわずかながら砂層が認められるという結果であったので、ウェルポイントを２台設置することにした。10月３日に設置し10月６日には効果が出始め、調査区内に足場板無しで入れるようになった。トレンチも土圧で押されないようになり、土層観察ができるようになると、遺物が複数の包含層から出土することがわかってきた。さらにトレンチを入れて観察すると、間層を挟んで４層(部分的に５層)の遺物包含層が確認できた。包含層の厚さは２～３㎝のところもあり層序の把握は困難を極めた。10月６日トレンチ掘削中に５Ｅ２グリッドから木炭と骨片が出土し、墓坑の可能性があることがわかった。10月13日に調査方法を再検討し、調査区全体に基本層序を線引きし層位ごとに調査を行うこととなった。また、遺物が調査区全体で出土することから遺跡の範囲拡大が考えられ範囲確認調査を行うことが決まり、10月30日～11月７日に行った。当初の調査面積2,100㎡ については９年度中の調査の終了が困難となり、さらに遺跡の範囲も拡大するということになった。層位ごとの包含層掘削は、10月20日から開始し、23日には一部遺構も確認され始めた。10月31日地山を確認するため、直径20㎝の鋼管を調査区内の６か所に打ち込んだ。

粘土と砂が交互に堆積するXII層が170cm 以上も堆積することから、XII層が平安時代の地山であると推定した。

11月20日～25日には、未買収で一次調査が終了していなかった最西端部分の一次調査を行った。調査面積が拡大したことと、遺物包含層が４～５層存在することが確認されたことから、平成10年度に調査を継続することが決まった。このため、平成９年度は３・４ＥＦグリッドを中心にVII・VIII・IX層の調査を行い、12月13日で調査を一旦終了した。遺構は土坑３基、ピット２基、墓坑が１基検出されている。遺物は、須恵器・土師器を中心に浅箱で20箱出土した。また、地震痕跡がいたるところで検出された。

越冬のため、トレンチには土嚢を詰め壁面の崩落を防いだ。また、遺構確認面の保護のため、養生マットを敷き、さらにブルーシートを重ねて保護した。ウェルポイントで継続して排水作業を行った。

調査範囲が拡張し、斎串が田面から４mの深さで確認されたことなどから、矢板打ち直し工事及び暗渠再掘削工事は10年度の調査を早期に再開するために10年３月に行った。

B．平成10年度の調査方法と経過

(1)調査方法

表土除去は、範囲拡張した西側部分について重機で遺物包含層の直上まで行った。その後、平成９年度に調査した範囲のトレンチ内に崩れないように埋め込んでいる土嚢袋をとりあげた。９年度にトレンチを入れていた場所は、壁面を清掃し基本層序を再度引き直した。また、範囲拡張部分は排水溝を兼ねたトレンチを入れて基本層序を確認していった。調査区全体の基本層序を線引きした後、層序の検討と調査方法の検討を行った。この結果、遺構・遺物の大量に出土する東側が自然堤防上の集落に当たり、遺物の少ない西側は河川あるいは湿地に相当すると推定された。調査は、Ｃラインをおおむね境とし、西側の湿地部分と東側の自然堤防上に２分して調査を行うこととした。複数の遺物包含層・間層が２～３cmと薄く確認が困難ということから、調査の最終段階まで残しておく予定であったメインセクションベルトの両側にトレンチを入れた。これによってセクション引きの作業量を増やし、遺構を破壊したものも多く大きな反省点であり、工夫が必要であった。しかし、複数の包含層を層位的に掘削するという観点からは有効であったと考える。自然堤防上はVIII層からIX層、Ｘ層と上部の包含層から順に人力で掘削し調査を行った。XI層の包含層のみ重機で掘削した。ｂ層上面で遺構精査を行い遺構を発掘し、写真・図面の記録を作成した。遺物が集中して出土した遺構については、適宜遺物出土状況図を作成した。Ｂ・Ｅ・３・５ラインをメインセクションベルトとし、基本層序を実測した。実測図などの縮尺は９年度と同一である。各層の遺構発掘後、大グリッドごとに完掘写真を撮影し、レベリングを行った。写真撮影は、モノクロネガは６×７版、カラーポジは35mmのカメラを使用することを基本とした。集落がもっとも安定していたと考えられるＸ層の調査終了後、ラジコンヘリを使用し調査区全体の航空写真を撮影した。

湿地部分は明確な遺物包含層が認められず、粘土層の下に洪水堆積層と考えられる厚さ20～30cmの砂層を挟む部分と、粘土層のみの部分に分けられた。砂層が認められる部分は、砂層上面までホソを使用し人力で掘削し、遺構精査を行った。砂層も人力で発掘し遺構確認を行ったが、明確な遺構は検出できなかった。地山まで粘土層がまだ20数cmあり、粘土層のみの部分も地山まで50～60cmと厚さがあったため、調査期間短縮のためロングアーム0.7のバックフォーで地山まで掘削していった。その後、湿地部分全体の遺構を精査し、完堀写真を撮影し地形図を作成した。

包含層出土の遺物は小グリットごとに取りあげた。遺構出土遺物は適宜番号を付して取上げた。遺構番号も平成９・10年とも土坑、溝なとの遺構の種別では分けずに検出順に通し番号を付した。

(2)経　過

平成10年９月から農道・用水路の新設工事に着手したいという公団の希望があったが、部分的な引き渡しでなく全体を10月末日に引き渡したいということで公団の了解を得た。調査期間短縮のため、矢板の抜き取り・打ち直しの付帯工事は平成10年３月から着手した。３月30日から４月初めに表土除去を行い、その後は暗渠掘削工事を行った。

５月６日より作業員を導入して土嚢取り上げ作業を行った。平成９年度に入れていたトレンチから基本層序の確認、線引き作業を行った。拡張した範囲にトレンチを入れ基本層序の確認、線引き作業を行ったがかなりの期間を要した。

６月12日基本層序を検討し調査方法を決定した。自然堤防上と湿地部分に分けて、平行して調査を行うことにした。遺物の少ない湿地部分は、重機掘削も併用することになった。６月18日には新潟大学高濱信行助教授らに地震痕跡、地質などについて指導いただき、複数の地震痕跡を確認した。

当初にⅧ層と確認できた部分は掘削作業を開始しており、７月上旬にはⅧ層の調査を終了した。Ⅷ層の遺構発掘と平行してⅨ層の包含層掘削を行い多量の土器が出土した。遺構では鉄製の鎌が入った土坑や杭列、焼骨と木炭が詰まった土坑などを検出した。

Ⅸ層は８月上旬に調査を終了した。８月４日未明からの記録的な集中豪雨で調査区は水没し、排水に丸二日を要した。８月22日には公団主催の一斉現場公開の行事「ハイウエイみて！みて！'98ＩＮ黒埼」の一環として、黒埼町・新潟市内の小学生とその父兄、パーキングの利用者約100名を対象に遺跡説明会を行った。

Ｘ層は最も安定して集落が営まれていた期間で、遺構・遺物が大量に出土した。遺構は多数の溝状遺構・土坑・ピット・火葬場と考えられるような遺構も検出し、この遺構からは、９月８日銅銙が１点出土した。

10月13日これまで出土していた人骨と見られる焼骨を鑑定していただくために、日本歯科大学新潟歯学部の笹川一郎助教授に実見していただいたが、この時は骨の洗浄が行き届いていなかったこともあり、人骨と認定できる部位は確認できなかった。溝状遺構や土坑からは散発的に碁石あるいは双六子と見られる小石も出土した。10月中旬にはＸ層の調査もほぼ見通しが立ち、10月14日県教委の終了確認を得た。10月21日に調査成果を記者発表した。10月23日にはラジコンヘリで航空撮影を行った。10月25日には一般の方を対象に現地説明会を開催し、地元黒埼町の方を中心に約150名の参加者があった。10月26日にⅪ層の包含層を重機で掘削し、遺構精査を行い遺構発掘を行った。10月30日に完掘写真を撮影した。11月２日掘り残しの点検、平面図の点検等を行い、すべての調査が終了し公団に現場を引き渡した。

11月４日公団が行う整地工事に立ち会った。遺物の洗浄、註記作業、図面の整理、遺物の整理、写真の整理、採取した土の洗浄作業などの残務整理を行い、11月13日に完全に現場から撤収した。

(3)排水方法

遺跡は沖積地に立地し、軟弱地盤で掘り下げると地下水が湧出する状況であった。また、土質は粘土質で、降雨によって掘削した法面やセクションベルトが崩れる可能性があった。平成９年度、二次調査を開始した当初に法面が何度も崩落した経緯もあり、地下水はウエルポイントを設置し強制排水を行った。結

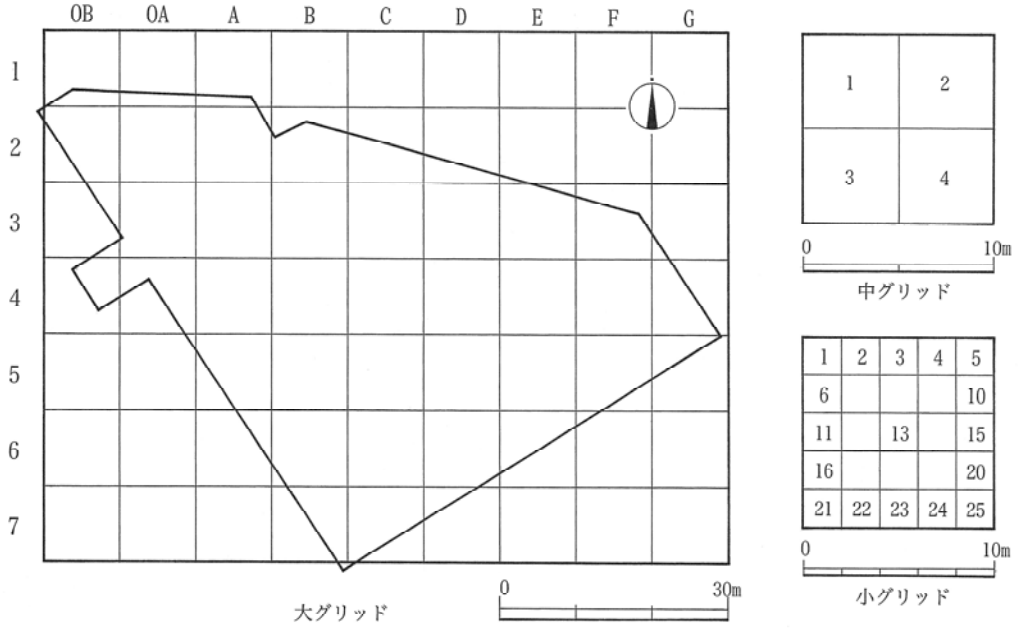
果的にウェルポイントの設置が功を奏し、沼地のような現場の状況が劇的に改善し、包含層が複数存在することも確認できた。しかし、ボーリング調査の結果を見ても本当に効果があるかは分からない状況で試験的に設置したものであった。ウェルポイントは、平成９年度は2,100㎡ で取水管２本を付けたポンプを２台設置し、範囲が3,400㎡ に拡張した10年度は１台追加した。

雨水は調査区全体にトレンチを兼ねた排水溝を掘り、周囲に設置した暗渠に流すようにした。暗渠は幅1.5m、深さ1.8mの溝をバック・フォーで掘削し、底面に多孔の塩化ビニールパイプをいれた後、砕石で溝を充填したものである。暗渠は矢板のすぐ内側、ほぼ全域に敷設し、集水桝を３か所設け、24時間排水を行った。

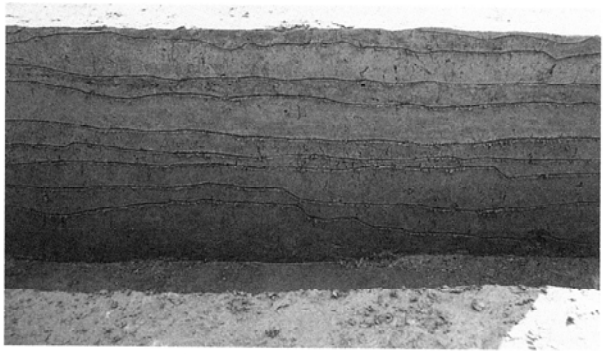
第Ⅳ章　遺　　跡

1．グリッドの設定

グリッドは大・中・小に区分し、国家座標に沿って分割した。大グリッドは10×10mを１区画とし、北西コーナーを基点に東西方向をアルファベットの０Ｂ・０Ａ・Ａ～Ｇで、南北をアラビア数字１～７と呼称した。５Ｅ杭の座標値はＸ：202257.000、Ｙ：42969.000である。中グリッドは平成９年度の９月１日～10月９日の排水に失敗し、小グリッドの細分が不可能と考えられた混乱した時期にのみ使用したグリッドで、５×５ｍを１区画とした４区画である。10月９日以降は、この中グリッドは使用していない。小グリッドは２×２ｍを１区画とし、北西を基点にアラビア数字で１～25に細分した。中グリッドで遺物を取り上げたものについては、小グリッドとの混乱を避ける為、註記は黄色で行った。グリッドの呼称は大・中グリッド、大・小グリッドの順で５Ｅ15などと表示した。



第10図　グリッド設定図

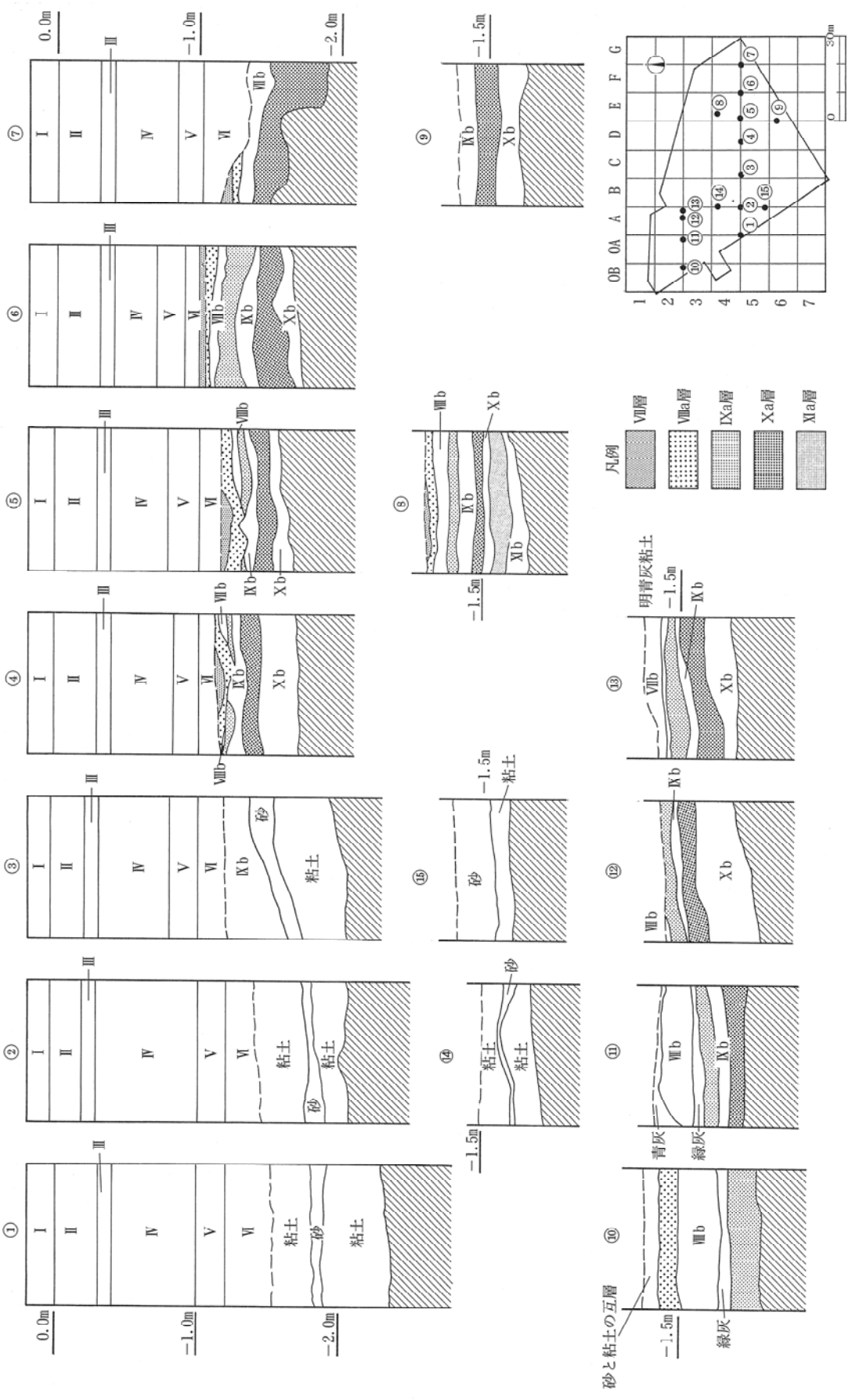


第11図　基本層序１

2．基本層序

遺跡は沖積地の低湿地に立地する。調査前の現況は水田で標高0.20～0.24mと平坦である。遺跡の標高は約－1.7～2.4mである。集落は調査範囲の東側の自然堤防上に形成され、西側に湿地が広がると考えられる。集落と湿地の境は③⑫付近で地山であるⅫ層が西側に落ち込む地点が確認されている。また湿地は、北から南へ緩く傾斜している。現地形から、平安時代の地形を類推することは困難で、自然堤防の形状は不明であるが、遺構の多くが北西向きに掘削されていることから類推すると、地形の制約を受けている可能性がある。色調は地点ごとにかなりの差があり、生活痕跡の顕著な部分(集落)には泥炭を多く含む特徴がある。Ⅷb・Ⅸb層は遺物包含層の間層であるが、いずれも洪水堆積層と考えているが、特にⅨb層は厚い砂層で基本層序把握における鍵層となった。湿地部分は、ほとんど泥炭を含まず、長期間にゆっくり堆積した粘土層で細分は可能であるが、湿地内で共通性を持たないので、上層の粘土層、間に広範囲に広がる砂層、下層の粘土層に大別した。

Ⅰ　層	褐色粘土。水田耕作土。層厚10～20cm。
Ⅱ　層	青灰色～暗青灰色～橙色粘土。水田のいわゆる床土。層厚10～50cm。
Ⅲ　層	暗赤褐色～黒褐色泥炭質粘土。部分的に植物遺体を含む。層厚10～20cm。
Ⅳ　層	明青灰色～青灰色～暗赤褐色～橙色粘土。部分的に白色粘土、植物遺体を含む。層厚10～60cm。
Ⅴ　層	暗青灰色～青黒色粘土。層厚10～30cm。
Ⅵ　層	明青灰色～青灰色シルト質粘土。部分的に植物遺体を含む。層厚10～60cm。
Ⅶ　層	明青灰色粘土。部分的に遺物を包含する。
Ⅷa層	青灰色粘土に暗青灰色の泥炭を多量に含む。遺物包含層。
Ⅷb層	青灰色シルト質粘土層。間層。やや砂質。
Ⅸa層	青灰色粘土に暗青灰色の泥炭を多量に含む。遺物包含層。
Ⅸb層	青灰色砂層。間層。洪水による堆積。
Ⅹa層	青灰色粘土に暗青灰色の泥炭を多量に含む。遺物包含層。
Ⅹb層	青灰色シルト質粘土層。Ⅷb層より砂の混入率がやや高い。
Ⅺa層	青灰色シルト質粘土層。泥炭を少量含む。部分的に認められる遺物包含層であるが、Ⅹa層の遺物と接合するものが多く、Ⅹa層の下層の可能性も高い。
Ⅺb層	青灰色砂質シルト。間層。
Ⅻ層	青灰色砂質粘土層。粘土と砂が細かく交互に厚く堆積する(互層)。地山。
上層粘土層	明青灰～青灰色粘土層。湿地にのみ見られる。
砂　層	青灰色砂層。洪水による堆積と考えられるが、Ⅸb層のさらに下に堆積する砂層。湿地にのみ見られる。
下層粘土層	青灰色粘土層。湿地にのみ見られる。
緑灰色粘土層	湿地にのみ見られる。
青灰色粘土層	湿地にのみ見られる。
砂と粘土の互層	青灰色砂質粘土層。粘土と砂が細かく交互に堆積する(互層)。湿地にのみ見られる。


①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
0.0m
−1.0m
−2.0m
−1.5m
粘土
砂
砂と粘土の互層
青灰
緑灰
明青灰粘土
凡例
Ⅶ層
Ⅶa層
Ⅸa層
Ⅹa層
Ⅺa層
OB
0A
A
B
C
D
E
F
G
30m
0

第12図　基本層序２

3．遺構各説(図版12～33)

A．概　観

釈迦堂遺跡で検出された遺構は古代のものが大半であるが、１基のみ現代の木道とみられる遺構が、地山(Ⅻ層)の自然堤防と湿地の境に検出されている。この木道は、伐り取った枝木(粗朶(そだ))を束ね、軟弱な地盤に沈め基盤とし、その上に土をかぶせて堤あるいは道にしていると考えられる。今回検出された木道は、ガラス片・陶器片などの出土から現代のものと判断したが、粗朶を使った土木技術は、古代から現代まで長い歴史を持っている。

集落の西端に当たるため古代の建物跡は検出されていない。土坑81基、溝状遺構139条、ピット127基、杭列３列14本、焼土３基、不明遺構42基が検出された。覆土の見極めが困難なものも多く遺構検出率は高くないと推測される。基本層序把握のために東西南北に入れた多数のトレンチで、端部あるいは大部分を切られ、全体を検出できなかった遺構も多い。Ⅺ層については、調査段階では間層を挟んでⅩ層下に存在すると認識していたが、遺物の接合状況などを考慮するとⅩ層の範囲に含まれると考えられる。

B．記述の方法

遺構種別は、土坑をＳＫ、溝状遺構をＳＤ、ピットをＰ、不明遺構をＳＸの記号を付して表記している。他に焼土、杭列などがあるがそのままの名称を用い記号は使用していない。遺構番号は層位・種別に関係なくすべて通し番号としている。整理の段階で遺構種別を変更したものがあるが、遺構番号は調査時に付したものをそのまま使用している。また、整理の段階で同一の遺構と判断したものは、早い番号を生かし後の番号は欠番とした。遺構確認面は主にⅧｂ・Ⅸｂ・Ⅹｂ・Ⅺｂ層であるが、包含層中に検出できた遺構は、その都度調査を行っているので記述については、Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層遺構として記述する。ほとんどの遺構から遺物が出土している。ここでは主要な遺構について、各層位ごとにグリッドの早い順に報告する。遺構の位置・規模等は巻末の遺構観察表を参照されたい。

本文中の数値は、断らない限り上端の長軸(長さ)、短軸(幅)の最大値を表わしている。観察表の計測値は、平面形上端・下端の長軸・短軸の最大値を示している。深度はいずれも確認面からの最深部の値である。全体を検出できていない遺構で推定できるものは(　)を付けて表記している。

C．各　説

(1)Ⅷ層検出遺構(図版12・13)

ＳＫ１　浅い皿状の楕円形の落ち込みで、炭化物を大量に含む。長さ300㎝、幅220㎝、深さ９㎝を測る。無台杯、無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ９７　不整円形の土坑である。検出できた幅は116㎝、深さ24㎝である。断面形は弧状である。覆土は２層に分けられ、１層は暗緑灰色粘土で炭化物を少量含む。また砂を斑に多く含む。２層は青灰色粘土で多量の炭化物を帯状に挟む。２層に泥炭が多量に混入する。底部から鉄製鎌(507)１点と長甕が出土している。

ＳＸ４１　不整楕円形の大型の土坑である。２層は青灰粘土に泥炭が多量に混入する。３層は炭化物層で、

３個に割れた被熱した大きめの花崗岩と３～５㎝大の川原石が216個(9,529.8ｇ)まとまって出土した。無台杯、杯蓋、壷類、横瓶、無台椀、盤、小甕、長甕が出土している。２層堆積中に地震による地割れによって、遺構が北西から東南に分断されている。また、底面の起伏が著しいのも地割れの影響と考えられる。

ＳＸ８８　不整形な土坑である。２層に炭化物を多く含む。底面の凹凸が多い。中心部に噴砂の立ち上がりがあり、炭化物が吸い込まれた跡が伺われる。無台杯、黒色無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＤ２２６　走行はN-35°－Ｅで、検出できた長さは172㎝、幅70㎝、深さ20㎝である。西壁は立ち上がりが急であるが、東壁はゆるやかに立ち上がる。２層底部に炭化したワラ灰が多量に堆積している。無台杯、有台杯、杯蓋、小甕、長甕が出土している。

ＳＤ９３　走行はN-52°－W、検出できた長さは280㎝、幅60㎝、深さ23㎝である。断面形は弧状を呈する。１層はわずかに炭化粒を含み、２層の底部には炭化したワラ灰が堆積している。底部はほぼ平坦である。無台杯、無台椀、長甕が出土している。

ＳＤ９２　走行はN-77°－Ｅ、検出できた長さは470㎝、幅132㎝、深さは24㎝程度と浅い。覆土は薄いレンズ状堆積で２層に分かれる。各層とも粘土であるが、特に２層は粘性が強く、粒度も均一で、基本層序のⅤ層に類似している。底部に植物遺体(ガツボ)を多量に含む。底部は凹凸が多く、特に南側の乱れが激しい。遺物は出土していない。

杭　列　２Ｂグリッドで杭が３列14本検出されている。１列目の方向はN-57°－Ｅで４本、２列目の方向はN-54°－Ｅで６本、３列目の方向はN-63°－Ｅで４本である。いずれも上部を欠損しており遺存状態はよくない。また、かなり細い木を使用し貧弱なため、簡易的に作られたものと考えられる。

(2) 火葬関連遺構（図版14）

本遺跡では火葬に関係すると考えられる遺構が土坑５基、ピット２基、遺体を荼毘に付した場(以下、火化遺構とする)の可能性がある遺構１基、木炭と焼骨が平面的に散布する遺構１基が検出されている。検出面はⅨ層およびＸ層にまたがる。

土坑及びピットは、木炭と焼骨を入れ上面を埋めていると考えられるが、水分と土圧によって木炭層が収縮し中央部が落ち込んでいる。焼骨はSK325出土の小骨の１点が、ヒトの手の末節骨(指先部分の骨)と断定されている(第Ⅵ章６)だけであるが、形態を同じくする他の土坑の焼骨も人骨と考えられる。焼骨は、人体一体分は土坑に入っていない。調査中に多少の紛失も考えられるが、形状の不明な細骨がほとんどで粉状のものも多く、もとより人体一体分は納めていないと考えられる。遺体を荼毘に付した後、主要な骨は蔵骨器に入れ墳墓を造営していると考えられるが、墳墓自体は検出できていない。残った木炭や灰と焼骨をこのような土坑に納めたと考えられる。これらの土坑は小林義孝氏のいう「火葬灰埋納土坑」[小林1992]に当たると考えられる。

火化遺構の可能性があるものはSX126のみである。覆土のワラ灰や焼土と１層に多数散布していた遺物とは、遺物に二次的な火を受けた痕跡が全く認められていないことから、直接の関係はないと考えられる。火化遺構が廃絶された後に遺物が投棄されたものと考えられる。

下記の遺構以外にも、粉骨とみられる白色粒子が覆土に含まれる遺構もあるが、ここでは、火葬に関係すると断定した遺構のみを報告する。

ＳＫ１００　自然堤防の最西端２Ａ６グリッドⅨ層で検出された隅円長方形の土坑である。推定の長さは

115cm、幅49cm、深さ24cmを測る。遺構の長軸方向はN-41°－Wである。底部は平坦である。覆土は２層に分かれるが、１層は明らかに人為的に埋め戻された土で平坦に埋め戻されている。緑灰色粘土で、基本層序のⅨａ層に類似する。２層は２～３cm大の木炭層であり、生焼け状態の木炭を含む比較的硬い木炭が主体に埋められている。この木炭層の中央部から南東側に灰白色の粉状の焼骨が大量に混入している。粉骨の密度は、中央部が大きい。壁面・床面ともに被熱した痕跡はない。１層及び２層から有台杯略完形品1個体(38)、無台杯片(39)３点が出土している。この有台杯は佐渡小泊産で、９世紀後半のものと考えられる。

ＳＫ１０２　３Ａ２グリッドⅨ層に位置する隅円長方形の土坑である。トレンチによって中央部が切られ、長さは132cm、幅(60)cm、深さ14cmを測る。長軸の方向はN-31°－Wである。断面は東西両側壁ともゆるやかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で２層に分かれる。１層は青灰色粘土で５～10mm大の木炭をわずかに含む埋土である。２層は木炭層で上面にワラ灰と木炭(20～50mm)が混在し、更に生焼け状態の木炭が多量に混入している。その下から底面の間は比較的きれいな木炭が出土する。南東側の２層底部の２か所にやや大き目の小骨が見られる。２層中央部には多くの粉骨が見られるが、１層にはわずかである。遺物は出土していない。

ＳＫ１３１　３Ｃ４・５グリッドＸ層に位置する、やや不整な隅円長方形の土坑である。長さ186cm、幅85cm、深さ12cmを測り、検出された火葬関係土坑の中では最大である。方向はN-47°－Wを測る。底面は北側に３か所の凹凸がある。覆土は２層に分かれ、１層は青灰色粘土で炭化物５～10mm大をわずかに含む埋め土である。２層は炭化物層で５～10mm大の木炭が、塊状となって多く点在している。粉骨と細骨片は２層中にまんべんなく分布し、中央部と北側に10～20mm大のやや大き目の骨片が各1個ずつ見られた。無台杯片３点、壷類片２点、小甕片９点・長甕片９点が出土している。

Ｐ１１６　SK100・102と同様、自然堤防の最西端７ＣグリッドⅨ層で検出された隅円長方形のピットである。長さ75cm、幅42cm、深さ19cmを測る。長軸方向はN-50°－Wである。SK100・102と比較して規模は小さいが、焼骨は頭骨・下顎の歯槽と部位が断定できる大きさのものが多数認められたが、人骨とは断定できない。無台杯４点、無台椀45点、小甕・長甕片３点が出土している。

Ｐ６５　４Ｅ17Ⅸ層で検出された不整楕円形のピットである。浅い落ち込み程度の穴であるが、木炭に焼骨を大量に含む。高杯の脚部の破片が１点、小甕１点が出土している。

ＳＸ１２１　３Ａ15グリッドⅨ層に位置する不整楕円形の遺構である。木炭と焼骨が掘り込みを持たずに、厚さ６cm、長径は南北方向に88cm、短径は東西に68cmほどの範囲で散布している。１層は明黄灰色の粘土で２層は木炭層でやや大きめ(８×80mm)の骨片１個と多量の粉骨が混入している。木炭層の底部の土には火を受けた痕跡は見られず、火葬に関係する遺構と考えられるが詳細は不明である。遺物は出土していない。

ＳＫ３２５　５Ｅ３グリッドＸ層で検出された隅円長方形の土坑である。長さ105cm、幅(66)cm、深さ10cmを測る。長軸方向はN-49°－Wである。木炭・焼骨が広範囲に散布していたためプランが明確でなかった。SK372を切っている。焼骨の中には、ヒトの指の末節骨と断定された骨片が１点ある(第34図)。長甕片が８点出土している。

ＳＫ３７２　５Ｅ２グリッドＸ層で検出された長方形の土坑である。長さ(64)cm、幅33cm、深さ３cmを測る。長軸方向はN-44°－Wである。SK325に切られ、規模は小さい。木炭と焼骨を多量に含む。無台杯片１点、小甕片１点が出土している。

ＳＸ１２６　自然堤防の最西端、５ＣグリッドＸ層で検出された火化遺構と推測するものである。プラン

検出時にワラ灰の範囲を追ったため、平坦な状態で検出できず、土坑部分を覆う粘土層をほとんど掘削してしまっている。ワラ灰はおよそ360cm四方に広がっていた。ワラ灰は水分と土圧でかなり収縮している。ワラ灰は全て土嚢袋に詰め水洗した。長さ360cm、幅180cm、深さ50cm、長軸方向N-44°－Eの大型土坑が検出された。

1層のワラ灰には少量の木炭と大量の焼土、わずかな焼骨も含まれる。遺物は無台椀、小甕、長甕片73点、黒色土器無台椀1点、無台杯、有台杯、杯蓋、壷・甕類片15点、含鉄鉄滓1点、銅銙1点、2～5cm大の礫7(使用痕のある軽石1・被熱礫1)個、土器片円盤など大量にあるが被熱しているものはわずかに礫1点である。灯明皿もある。「真□」と書いた無台杯(47)が1点出土している。

2層は炭化物を少量含む粘土層で厚さがほぼ均一であることから、人為的に埋めたものと考えられる。遺物は含鉄鉄滓2点のみである。

3層のワラ灰には、少量の木炭と大量の焼土、焼骨もわずかに含まれる。2～4cm大の礫4点、含鉄鉄滓6点が出土しているが被熱しているものはない。壁面や床面にも被熱した痕跡はない。遺体を荼毘に付した後粘土で埋め、荼毘は少なくとも2回行われている。

(3) Ⅸ層検出遺構(図版15～17)

ＳＫ４　不整楕円形の土坑である。2層に炭化物を多量に含む。無台杯、壷類、無台椀、小甕、長甕、黒色土器無台椀が出土している。

ＳＫ１１２　不整楕円形の土坑である。長さは252cm、幅は170cm、深さは20cmを測る。底部は2段の平坦面を持つ。遺物は2層に多く含まれるが、北側に集中している。無台杯、有台杯、杯蓋、黒色土器無台椀、無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ１２３　隅円長方形の大型の土坑である。長さは354cm、幅は127cm、深さは65cm、長軸方向はN-45°－Wを測る。底面は長さ127cm、幅98cmを測る。隅丸長方形の平坦部があり、長軸に沿って北西側壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。南東側壁は内湾ぎみに立ち上がるが上部で外傾する。また、北東の側壁は立ち上がりが急である。長軸の断面形は船底状を呈する。西側壁は地震による墳砂の影響を大きく受けている。覆土はレンズ状堆積で5層に分けられる。1層と2層は暗青灰色粘土であるが2層に3～5㎜大程度の木炭を多量に含んでいる。3層は墳砂である。2層と4層の接触部分に泥炭化した約10㎜の厚さの木炭層が見られる。5層は緑灰色で均一な粘土層であるが底部に厚さ10㎜の泥炭化した木炭層があり、その下に5㎜程度の炭化したワラが堆積している。無台杯、壷類、黒色土器無台椀、無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ１５６　両端をトレンチで切られ全体を検出できていないが、覆土はレンズ状に堆積している。遺物は、無台杯、有台杯、杯蓋、小甕、長甕、鉢が大量に出土している。

ＳＫ１１４　不整楕円形の浅い落ち込みで単層である。長さ113cm、幅68cm、深さ10cmである。無台杯、甕が出土している。

ＳＫ１０５　全体を検出できていないため規模は不明である。無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ１０８　隅円方形の土坑である。1層に噴砂の痕跡が残る。無台杯、黒色土器無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ１１７　不整楕円形の土坑である。小甕、長甕、無台杯、有台杯、甕など多数出土している。

ＳＤ１７８・１７９　5Ｆグリッドで並列して検出された溝であるが、地震の影響を受けた為か端部は変

形している。SD178から無台椀、小甕、SD179から無台杯、小甕、長甕が出土している。

(4) X層検出遺構(図版18～29)

ＳＫ１８０　不整な山形の土坑である。南側はトレンチに切られ、北東端でSD189に切られている。長軸は150cm、短軸は95cm以上、深さは45cmを測る。土坑の形状は、東から西へ１、２、３のブロックに分けられる。第１のブロックはU字形で東側壁は内湾しながら立ち上がるが急である。西側壁は第２のブロックの中央部分に外傾しながら立ち上がる。第２ブロックは、断面で２か所の凹凸が認められるが底部は比較的平坦で、N-50°－Wの方向へゆるやかに立ち上がる。第３のブロックはほとんど平坦で西側壁は内湾しながら立ち上がる。平坦部にはP210がある。覆土は４層に分けられ、１層は青灰色粘土で７㎜大の木炭粒がごくわずかに点在している。２層は青灰色砂質粘土で７㎜大の少量の木炭粒が点在する。３層は緑青灰色シルト層で４層は緑灰色粘土である。各ブロック間には切り合い等は全く認められない。無台杯、杯蓋、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ１７０　溝状の不整形な土坑である。この土坑は地震によって圧縮尖断と流動化の影響をうけて上下に分断され、更に下部は横圧力によって押し潰されて溝状の形態を呈す。上部もその半分を押し潰されて、パイプ形を呈している。北側でSD166に切られ、西側ではSK168とSK185に切られている。SD170の下部は長さ(270)cm、幅(60)cm、深さ75cmを測り、その方向はN-54°－Wを測る。覆土は砂質粘土を基調としているが、１、３、４層は黒色の炭化物が主体である。２、３、４層が上から下に重なり、これを大きく含んだ５層の形からも墳砂に押し潰された事が推察される。出土遺物は無台杯、有台杯、杯蓋、壷類、無台椀、小甕、長甕、鍋、土錘、砥石等多数ある。

ＳＤ１６６　SK170を切る溝である。走行はN-56°－Wである。

ＳＫ１８５　不整楕円形の土坑である。長さ137cm、幅63cm、深さ18cmを測る。底面は北西から南東へ約９°の角度で落ち込んでいる。北西側をSD162、南東側をSK168に切られている。また、SK170の北西側先端部をSK168と共に切っている。覆土は単層で暗緑灰色砂質粘土である。10㎜大の木炭が多量に混入し、泥炭化している。出土遺物は無台杯、有台杯、杯蓋、小甕、長甕である。

ＳＫ１５８　中央部分がくびれた楕円形を呈する土坑である。長さ(105)cm、幅(48)cm、深さ38cmを測る。底面は南東から北西へ急激に落ち込んでいる。覆土は３層に分けられるが、砂質粘土を基調としている。２層に炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

ＳＫ１３２　不整楕円形の土坑。覆土は泥炭・木炭を多量に含み、さらに明青灰色粘土をブロック状に含む。人為的に埋め戻したようである。１層上部の中央から無台杯、小甕、長甕、土錘13個がまとまって出土している。

ＳＫ１２５　不整楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦であるが西側へわずかに傾斜している。断面は北壁の立ち上がりは急であるが、南壁では外反気味に立ち上がる。覆土は単層で紫灰色粘土を基調とし、木炭が多量に混入している。土器片は無台杯、有台杯、壷類、無台椀、小甕、長甕、鉄鉢３個体、土錘など多量に出土しており、土器だまりの可能性がある。また、北側にSD165・160・161があるが、新旧関係は明らかに出来なかった。

ＳＫ１５７　不整楕円形の土坑。覆土はレンズ状堆積で２層に分かれる。１層は少量の木炭を含む。２層は上部と下部に帯状に多量の泥炭を含み、さらに、層全体に緑灰色粘土をブロック状に含む。SD139・142・144を切る。無台杯、有台杯、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ１７３　不整形な土坑である。覆土はレンズ状堆積で２層に分かれる。１層は少量の木炭を含む。２層は上部と下部に帯状に多量の泥炭を含み、さらに、層全体に緑灰色粘土をブロック状に含む。SD139・142・144を切る。遺物は出土していない。

ＳＫ２０９　楕円形の土坑。覆土はレンズ状堆積で２層に分かれる。各層とも炭化物を多く含むが、１層の方が多い。無台杯、小甕、長甕、鉢、土錘３個が出土している。

ＳＫ１３５　楕円形の土坑である。長さは152cm、幅は63cm、深さは14cmを測る。底部は平坦で北西、南東側壁ともゆるやかに立ち上がる。１層は黒褐色炭化物(１～３mm大の木炭)層で無台杯、壷類、無台椀、小甕が出土している。２層は噴砂の砂である。

ＳＫ３９　楕円形の土坑である。断面形は弧状である。長さ260cm、幅(69)cm、深さ13cmである。覆土１・２層は炭化物を大量に含む。無台杯が出土している。

ＳＫ５１　隅円長方形の土坑である。長さ107cm、幅56cm、深さ28cmを測る。無台杯、有台杯、甕、無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ３７　楕円形の土坑である。長さ160cm、幅40cm、深さ20cmを測る。３層に噴砂の影響を受けている。断面は皿状で南西方向に緩く傾斜している。小甕、長甕が出土している。

ＳＫ１７４　楕円形の土坑である。長さ160cm、幅50cm、深さ24cmを測る。覆土全体に炭化物を大量に含む。長甕が４点出土している。

ＳＫ348　楕円形の土坑である。長さ150cm、幅115cm、深さ21cmを測る。長軸は北を向いている。覆土はレンズ状堆積である。２層には、炭化したワラ灰と明褐色の灰を大量に混入する。遺物は出土していない。

ＳＫ６９　やや歪んだ楕円形の土坑である。断面形は皿状である。３層には噴砂の影響が残る。無台杯、無台椀、長甕が出土している。

ＳＫ３５４　不整楕円形の土坑である。長さ186cm、幅101cm、深さ16cmを測る。底部は平坦で断面は北東側壁で内彎し、南西側壁ではやや外傾気味に立ち上がる。断面形は皿状で単層である。無台杯、高杯、甕、小甕、長甕が出土している。多量の植物種子が入っていた。

ＳＫ１３３　楕円形の土坑である。断面形は弧状である。南－北の側壁はゆるやかに内彎し、立ち上がる。覆土は、レンズ状堆積で３層に分かれ、１層は３mm程度の木炭をわずかに含んだ緑灰色粘土である。２層は黒色木炭層で３層の暗青灰色粘土に挟まれている。無台杯、有台杯、無台椀、壷類、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ５８　楕円形の土坑で覆土は単層である。長さ159cm、幅(110)cm、深さ27cmを測る。無台杯、甕、無台椀、小甕、長甕、土錘が出土している。

ＳＫ３５８・３５９　どちらも不整楕円形の土坑である。SK358はその中央部で北側に位置するSK359を切っている。断面形はいずれも弧状である。SK358の覆土はレンズ状堆積で３層に分かれている。１層は黒褐色粘土で２層は緑灰色シルトに少量の木炭粒(７mm大)が点在する。３層は暗オリーブ灰色の砂質粘土で、少量の炭化粒が混じっている。SK359は単層・緑灰色砂質粘土で、この中に少量の木炭粒(７～８mm大)が層状に混入している。SK358からは無台杯、甕、無台椀、小甕、長甕、土錘4個が出土している。SK359から遺物は出土していない。

ＳＫ３５５　楕円形の土坑である。北東側はP322に、北側はSK313に切られている。東側にはSK397があり、これを切っている。無台杯、甕、小甕、長甕、小礫が出土している。覆土は９層よりなり、１・３・５層はほとんど同じで淡い緑灰色シルトでこの中に淡い灰褐色の砂質粘土を含み、７層は黒色のワラ灰層で少量の

細かい木炭を含んでいる。９層は６層中に挟まれており、灰黄褐色砂質粘土のブロック状になっている。P259に切られている。

ＳＫ３９７　楕円形の土坑で中央付近に浅い落ち込みがある。長さ142cm、幅(87)cm、深さ28cmを測る。北からP321・322、SK355・313に切られている。覆土は３層に分かれるが暗灰色砂質粘土を基調とし、２層に極く少量の木炭が点在し、３層は緑灰色シルトである。遺物は出土していない。

ＳＫ２６０　楕円形の土坑である。長さ(100)cm、幅56cm、深さ14cmを測る。北西側先端部はSK313に切られている。底面は平坦で断面形状は船形であり、内湾気味に立ち上がるも１か所平坦部があり、それより外傾気味に立ち上がる。南東側壁は内湾気味に立ち上がるも１か所凹地があり、それ以後は外傾気味に立ち上がり、上端部で垂直となる。覆土は３層に分かれ、１層は黄褐色の粘土、３層は暗緑灰色の砂質粘土である。１層と３層の間に２層の黒色炭化物層を挟み、３層中には緑灰色粘土が帯状に混じる。無台杯、杯蓋、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ１８７　不整楕円形の土坑である。断面形は、浅い平坦面があり、北東側が部分的に窪む。無台杯、長甕が出土している。

ＳＫ２８９　楕円形の土坑でSD288に北側で切られている。長さ220cm、幅(203)cm、深さ21cmを測る。２層にワラ灰を多量に含む。甕、小甕、長甕が出土している。

ＳＤ２８８　幅20cm、走行N-41°-Wである。遺物は出土していない。

ＳＫ２６３　隅円長方形の土坑である。長さ156cm、幅116cm、深さ15cmを測る。東南側は緩く立ち上がり、北東側は上端近くで垂直に立ち上がる。無台杯、壷蓋、長甕が出土している。

ＳＫ３５２　隅円長方形の土坑である。長軸方向はほぼ南北方向でN-３°-Ｅである。西側をSK333、東側をSD229に切られている。無台杯、有台杯、壷類、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ３３３　やや歪んだ楕円形の土坑である。１層は木炭を含む褐灰色粘土を基本とするが、表面に焼土が多量に堆積する。また、粉骨も多量に混入する。無台杯、有台杯、甕、無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ２０１　不整楕円形の土坑である。長軸方向はほぼ南北方向でN-５°-Ｅである。底面は平坦である。無台杯、甕、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ２３６　長方形の土坑である。長さ208cm、深さ19cmである。無台杯、甕、長甕が出土している。

ＳＫ２１４　隅円長方形の土坑である。覆土はレンズ状堆積である。中央部を噴砂が貫いている。無台杯、長甕が出土している。SD213に切られている。

ＳＤ２１３　幅42cm、走行N-30°-Wの溝状遺構である。杯蓋、長甕が出土している。

ＳＫ２５５　隅円長方形の土坑である。断面形は東側が内傾して立ち上がり、南側は外傾して立ち上がる。検出された長さは(240)cm、幅116cm、深さ25cmである。無台杯、壷類、無台椀、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ２６２　不整楕円形の土坑である。底部は平坦面から南西側に緩く傾斜する。無台杯、有台杯、壷類、甕、小甕、長甕、小礫１点が出土している。

ＳＫ１９０　不整楕円形の土坑である。底面は比較的平坦で中央部には土器片が多量に出土し、両端側は殆ど出土しない。長さ320cm、幅(256)cm、深さ23cmを測る。長軸は北を向いている。東側壁は外傾しながら緩やかに立ち上がるが、西側壁は内湾しながら２段に立ち上がる。南北側壁は内湾しながら立ち上がるが急であり、南側壁はSK312の北側壁を切っている。覆土は青灰色粘土を基調とし、１層は砂が縞状に混じ

り、２層は炭化粒を多量に含んでいる。無台杯、杯蓋、壷類、甕、無台椀、小甕、長甕、筒形土製品、土錘１点が出土している。

ＳＫ３１２　不整楕円形の大型の土坑である。SK190に切られ、SK353を切っている。長さ440cm、幅215cm、深さ18cmを測る。底面は平坦で無台杯、杯蓋、壷類、甕、無台椀、小甕、長甕、土錘18点が全面にわたって出土するがやや西半分に集中する。断面は内湾しながら立ち上がるも急である。覆土は単層で暗緑灰色砂質粘土に2.5mm大の木炭を多量に含む。

ＳＫ３５３　不整円形の土坑である。SK312に切られている。断面形状は２か所で凹凸面があるが側壁で内湾しながら、立ち上がるも急である。覆土は単層で灰色砂質粘土である。炭化物(２～５mm大の木炭)を多量に含んでおり、外側端に多く分布する。無台杯、有台杯、杯蓋、壷蓋、壷類、甕、無台椀、小甕、長甕、土器片円盤、土錘が全面から出土している。

ＳＤ２０２　長さ560cm以上、幅54cm、深さ17cmを測り、走行はN-43°-Wである。底部は平坦であるが、東側壁は２段に外傾気味に立ち上がり、中間の平坦部を経て再び外傾気味に立ち上がる。西側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土は緑灰色粘土である。小甕、長甕が出土している。切り合い関係はSK190の南端部とSK312・353のやや中央部を切ってSK353の南端部で止まっており、北端部はトレンチに切られ不明である。SD202はSK353からSK190方向にゆるく傾斜し落ち込む。

木炭の出土状況と土の堆積状況から、この土坑はゴミ穴の可能性がある。SK353を使用した後、SK312の土坑を掘削し使用していたようだ。次にSK190を掘削し、さらにSD202を掘削している。

ＳＸ１９８　不整楕円形の不明遺構である。断面形状は中央部に凹凸が１か所あるが、両側壁ともゆるやかに内湾しながら、立ち上がっている。覆土は単層で暗緑灰色粘土である。小甕、長甕が出土している。

ＳＸ４３　不整形な不明遺構である。断面形は皿状である。無台杯、小甕、長甕が出土している。

ＳＸ１３６　不整楕円形の不明遺構である。有台杯、小甕、長甕が出土している。

ＳＸ４２　不整楕円形の不明遺構である。長軸方向の立ち上がりは急である。無台杯、壷類、長甕が出土している。

Ｐ１６８　２Ｃ25グリッドで検出された楕円形のピットである。長さ(95)cm、幅54cm、深さ35cmを測る。隣接する南側のSK170と北側のSK185を切っている。２層の中に粉骨が含まれる。無台杯、壷類、無台椀、小甕、長甕、鍋が出土している。

Ｐ１４９　３Ｄ４グリッドに位置する楕円形のピットである。長さ98cm、幅75cm、深さは21cmを測る。断面形は弧状で、覆土はレンズ状堆積で３層に分かれている。１層は緑灰色砂質粘土、２層は暗緑灰色砂質粘土に５～10mm大の木炭が少量点在する。３層は緑灰色砂質粘土で口縁部欠損の長頸瓶(158)が頸部を内側に向け傾いた状態で出土している。長頸瓶を蔵骨器とする例もあるため墳墓の可能性も考えられたが、骨片が入っていないことや、覆土の堆積状況等から墳墓とは断定できなかった。

Ｐ３０７　直径22cm、深さ８cmを測る。底部は平坦で南と北の側壁では、内湾ぎみに立ち上がるも急である。覆土は単層で青灰色粘土である。遺物は刀子の留め金具の一部らしい銅片(505)が深さ５cmの所から出土している。銅片は出土当初、錆もなく光沢を帯びていた。

Ｐ２４１　円形のピット。覆土はレンズ状堆積で２層に分かれる。１層は木炭がぎっしり詰まった状態で、土の混入は見られない。２層は木炭を少量含むが、均一な粘土である。遺物は出土していない。

焼土３０５　５Ｅ８グリッドで検出された直径70～80cmの円形の焼土でSD302に切られている。１～４層とも堅く焼きしまっている。２層に粉骨のような白色粒子が多量に混入している。無台椀が１点出土してい

る。同じ５ＥグリッドＸ層にSK325・372の火葬灰埋納土坑があり、関連する可能性もある。

溝状遺構群１(３Ｃグリッド)

３Ｃグリッドの28条からなる溝状遺構群の方向は、おおむねN-40～45°－Wであり、南東方向に緩やかに下方に傾斜する。南側の溝は幅が狭く浅いが、北側の溝は幅が広く深い傾向が見られる。断面形はＵ字あるいは弧状である。また、多くの溝状遺構は単層で短期間に埋没したものと考えられる。SD160・161・162・167の覆土は２層に分かれ、SD195は３層に分かれる。最も南側に位置するSD138は、長さ230cm、幅20cm、深さ７cm程度であるのに対して、北側に位置するSD152は、長さ800cm、幅40cm、深さ15cmである。幅が狭く浅い溝からは、土器がほとんど出土していないが、幅が広く深い溝からは土器の出土が多い。幅が狭く浅い溝は、畑の畝であると考えられる。幅が広く深い溝は他の用途で掘られた溝の可能性もあるが、３Ｃグリッド内で完結するものが多く、水路等とは考えにくい。直線的な形状の溝の他に、SD151のように二股に分かれるものや、SD153のように複数の溝が切りあっているのか部分的に不整形な溝もある。また、SD160と161、165の切り合い関係は明らかに出来ていない。SD141・143・172・195・196の長軸方向は北東向きになっており、他の溝群とほぼ直交し切り合っている。SD141は、SD140とつながり、SD142・144・145を切り、SD139に切られる。SD143は、SD142とつながり、SD144・145を切り、SD140に切られる。SD172は、長さが170cm程度と短い溝であるが、SD140・145・146・177を切っている。SD195も短い溝で、SD146とSD147に両端を切られている。SD196は、SD152に切られ止まっている。

溝状遺構群２(４～６Ｅ・Ｆグリッド)

４～６Ｅ・Ｆグリッドの６つのグリッドにまたがる80条の溝状遺構群である。多くの溝の方向は、N-45～50°－W前後で、南東方向にゆるやかに下方へ傾斜する。SD234・272・274・301・316・242・308は方向を違え、多くの溝とほぼ直行する。５Ｅグリッドの溝は間隔が開き長さも短いものが多いが、４Ｅ・５Ｆグリッドの溝群は長さも長く間隔も密である。断面形はＵ字もしくは弧状である。ほとんどの溝の覆土は単層であるが、SD235のみ覆土が３層に分かれる。SD235の１層は、他の溝の覆土と同一の土質であるが、２層の下部にはワラ灰を多量に含み、３層の中間には砂を帯状に多量に含む。１層から無台杯、有台杯、杯蓋、甕、小甕、長甕がまばらに出土している。さらに、幅60cm、深さ30cm程度と深く、唯一、堆積状況が違う溝である。水の流れがあった可能性も考えられる。SD316は、100cmと最も幅の広いSD299につながり、SD299からは無台杯、杯蓋、甕、無台椀、小甕、長甕、鉢がまとまって出土している。SD296とSD299は噴砂の貫入を受けている。多くの溝は畑の畝と考えられるが、SD235のように深い溝は、栽培された作物の違いと考えられる。

(5) Ⅺ層検出遺構(図版30～33)

ＳＫ４０３　楕円形の大型の土坑である。長さ430cm、幅178cm、深さ29cmを測る。長軸方向はN-44°－Wである。当初SK435と切り合った土坑と考えていたが、横断面の状況、遺物の接合状況から同一の土坑と判断した。２か所に噴砂の影響を受けている。全体から、無台杯、有台杯、杯蓋、高杯、甕、小甕、長甕、小礫、木片などが大量に出土している。墨書土器も「与止」を始め７点出土している。

ＳＫ４２１　楕円形の土坑である。長さ231cm、幅118cm、深さは38cmを測る。底部は平坦であり、南～西側壁は内彎しながら、立ち上がるが急である。北～東側壁は内灣しながら、立ち上がるが、上部では外傾するが急である。覆土は４層あり、色の変化はあっても砂質粘土を基調とする。１層は緑灰色シルトで２層は淡黄褐色砂質粘土である。３層は緑灰色砂質粘土で４層は少し黒ずんだ砂質粘土であり、黒色の10mm

程度の木炭が点在する。遺物は木片と木炭が南西側底部に板状に出土している。南東部４層中に小礫１点が出土する。他に無台杯、甕、小甕、長甕が出土している。

ＳＫ４００　不整楕円形の土坑である。長さ(330)㎝、幅165㎝、深さ40㎝を測る。長軸方向はN-43°－Wである。覆土は暗緑灰色砂質粘土である。５～７㎜程の木炭が多く含んでいる。無台杯、有台杯、杯蓋、壷蓋、甕類、無台椀、小甕、長甕、土錘２点が出土している。中央部３か所で木の実が出土している。

ＳＫ４４２　楕円形の土坑である。長さ118㎝、幅71㎝、深さ７㎝を測る。底面は平坦であり、側壁は北側でゆるやかに外傾気味に立ち上がる。南側は内湾しながらゆるやかに立ち上がる。無台杯、有台杯、杯蓋、甕類、小甕、長甕、土錘１点が出土している。また、北端部で木の実が多量に出土する。

溝状遺構群３(３Ｅ・Ｆ、４Ｅ・Ｆ・Ｇグリッド)

27条の溝で構成される溝状遺構群３の溝の走行は、N-36～40°－Wである。SD407の走行のみN-40°－EでSD425と直交している。ほとんどの溝から遺物が出土している。SD425は２本のものが、北西側で４本に分かれ、さらに東南で２本が結合して、全部で３本になっている。SD386は東南で２叉に分かれる。断面形はＵ字･弧状･皿状などである。SD75の断面形は不整形である。単層の溝が多いが、SD385･77が３層、SD407･78･427･416が２層堆積している。

第V章　遺　物

1.概　観

今回の調査で遺物は、集落の営まれていた東側の自然堤防上の遺構・包含層から主に出土した。西側の湿地からも少量出土している。浅箱換算で78箱の遺物が出土している。内訳は、土器および土製品63箱・石製品および礫13箱・木製品１箱・金属製品１箱である。遺物は平安時代、９世紀代の遺物が主体である。他に近世以降の遺物が数点あるが、昭和47年度の調査のような中世の遺物は全く出土していない。また、灰釉陶器、緑釉陶器なども全く出土していないが、多量の墨書土器が出土している。遺跡は集落と考えられるが、有力者の存在や官衙との関連、村落内寺院の存在を窺わせるような遺物も出土している。

土器は須恵器・土師器があり、器種は須恵器の無台杯・有台杯・杯蓋・高杯・皿・無台盤・壷蓋・短頸壷・広口壷・小瓶・長頸瓶・横瓶・甕・円面硯がある。土師器は無台椀・黒色土器無台椀・有台椀・鉢・小壷・小甕・長甕・鍋がある。この他に、土錘・石錘・筒形土製品・土器片円盤・手づくね土器・銅銙・刀子・鎌・砥石・斎串・杭がある。自然石を碁石あるいは双六子として使用したとみられる小礫などがある。

2．土　器(図版34～61)

A．土器の分類(第13・14図)

(1)食膳具(第13図１～30)

食膳具に占める土師器の割合は、極めて少ない。

須恵器(１～20)

無台杯(１～５)　杯のうち、高台をもたないもの。口径は12～14cm前後の範囲に収まる。ロクロナデによって成形されている。底部は基本的に回転ヘラ切り後無調整である。法量での分類は行わず体部の形態で細分した。ほとんどが佐渡小泊窯跡群産(以下、小泊産)と考えられ、他に笹神窯跡群産(以下、笹神産)、新津丘陵窯跡群産(以下、新津産)などが少量含まれる。

A類(１・２)　体部が内湾気味に立ち上がるもの。１は底部から体部の器壁が厚く、口縁部はあまり開かない。胎土は緻密で焼成不良で黄橙色を呈する。新津産のものと考えられるが、数は少ない。９世紀第２四半期頃のものと考えられる。２は薄手で内湾気味に立ち上がるものである。

B類(３)　体部が直線的に立ち上がるもの

C類(４)　体部が外反気味に立ち上がるもの

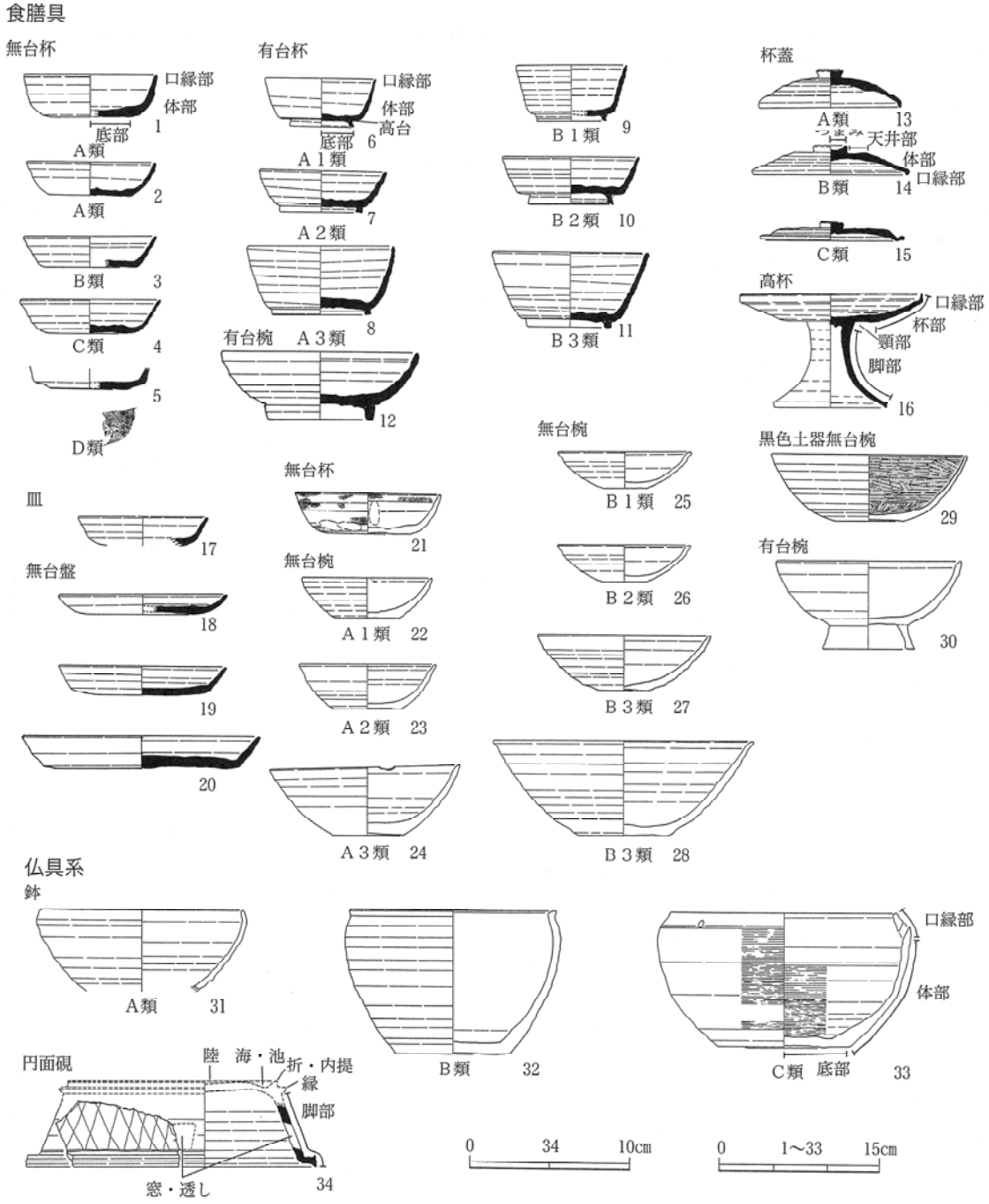
D類(５)　底部からの立ち上がりに稜を持つもの。底部切り離しは回転糸切りで１個体のみである。頸城あるいは西古志産の可能性がある。

有台杯(６～11)　杯のうち高台を持つもの。器形および法量で細分した。

A類(６～８)　体部が内湾気味に立ち上がるもの。

１(６)身が深く小型のもの。

２(７)身が浅く中型のもの。



第13図　土器分類１

３(８)身が深く大型のもの。

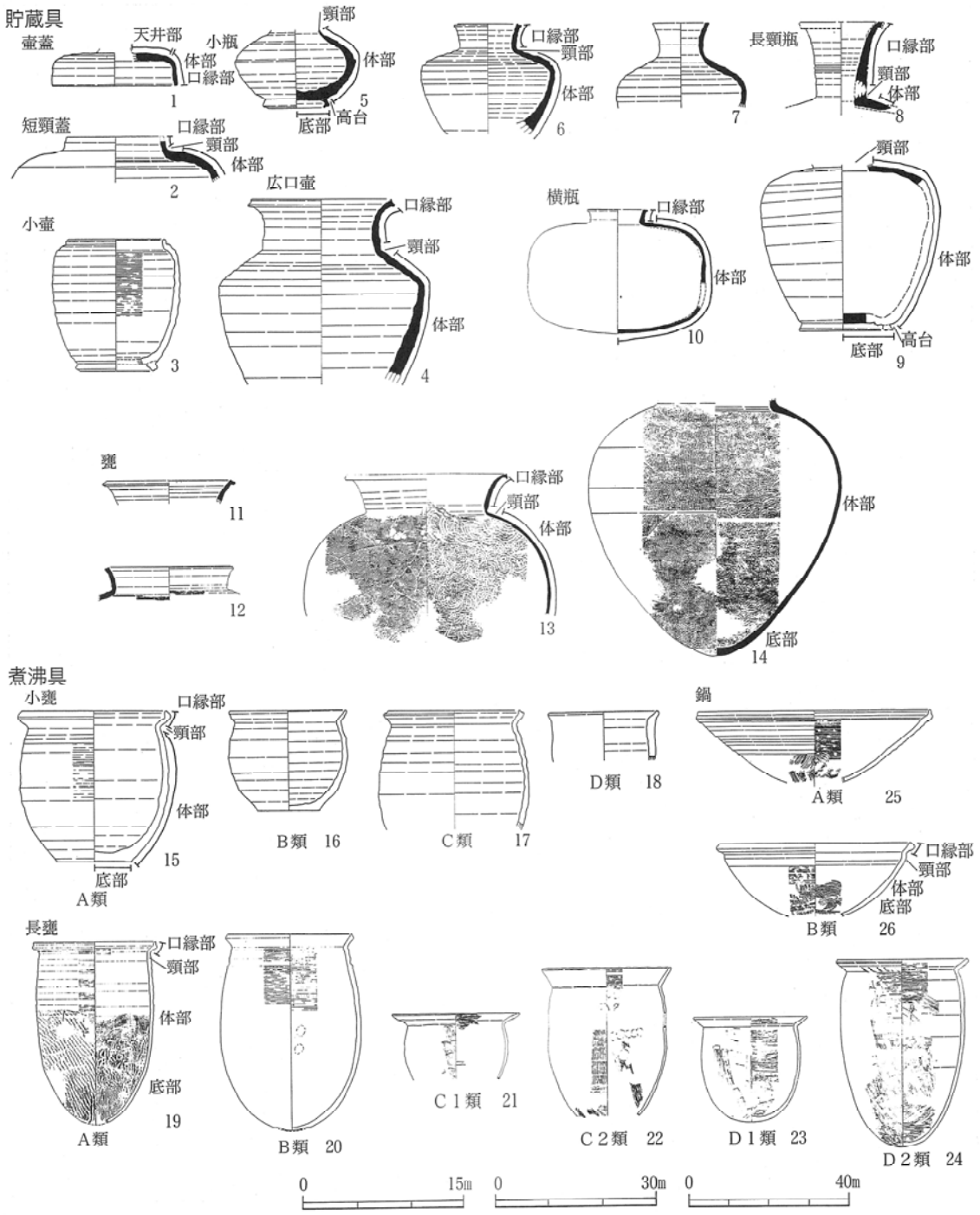
B類(９～11) 体部が直線気味に立ち上がるもの。

１(９)身が深く小型のもの。

２(10)身が浅く中型のもの

３(11)身が深く大型のもの。

有台椀(12)　体部は椀形でやや高い高台が付く。施釉陶器を模したものと考えられる。１個体のみである。



第14図　土器分類２

杯　蓋(13～15)　中型・大型の有台杯に付く蓋である。器形で３分類した。

A類(13) 器形が全体的に丸みを持ち、器高が高いもの。数は少ない。

B類(14) 天井部が平らに削られ、体部との境は稜を明確に持つ。ほとんどの杯蓋はこの形態で小泊産である。

C類(15) 天井部が広く、器高が低く偏平で縁部は外反する。西古志窯跡群産(以下、西古志産)のものと考えられる。数個体のみである。

高　杯(16)　杯部は杯蓋の天地を逆にし、脚部を付けた形態である。佐渡小泊窯跡群産で倒蓋型式といわれるものである。３個体のみである。

皿(17)　杯より身が浅く、盤より底径の小さいものを皿とした。口径は約12cmとほぼ無台杯と同じである。高台の有無は不明である。胎土から新津丘陵窯跡群産のものと考えられる。１個体のみである。

無台盤(18～20)　底部が広く身が浅いものを盤とした。３個体のみのため細分は行っていない。９世紀第２～３四半期の頃のものと考えられる。

土師器(21～30)

無台杯(21)　須恵器の無台杯を模したものと考えられる。１個体のみである。

無台椀(22～28)　器形・法量で細分した。

A類(22～24)　底部と口径の比率が１：３未満のもの。

１(22)口径12cm未満のもの。

２(23)口径12cm以上16cm未満のもの。

３(24)口径16cm以上のもの。

B類(25～28)　底部と口径の比率が１：３以上のもの。

１(25)口径12cm未満のもの。

２(26)口径12cm以上16cm未満のもの。

３(27・28)口径16cm以上のもの。

黒色土器無台椀(29)　内面を黒色処理し、内面に磨きをかけたもの。数は少ない。細分は無台椀と同一である。

有台椀(30)　高い高台を持つもので１個体のみである。

(2)仏具系(第13図31～34)

鉢(31～33)　仏具として使用したと見られるものである。すべて土師器である。

A類(31)　椀形のもの。

B類(32)　口縁があまり開かず口縁端部が短く外反する。

C類(33)　鉄鉢形で張り出し部に稜をもつものと口縁部に複数の孔が開くものがある。

円面硯(34)　須恵器の円面硯である。寺院および官衙など特殊な遺跡で出土することが多いといわれるが、集落遺跡からの出土も近年増加している。１個体のみである。県内での出土例も近年増加している。土製品の項で報告する。

(3)貯蔵具(第14図１～14)

３の小壷以外はすべて須恵器である。

壷　蓋(１)　短頸壷に付く蓋である。ツマミが付く。

短頸壷(２)　肩の張る体部に短く直立する口縁部を持つ。

小　壷(３)　土師器で口径が広く、口縁は短く上につままれている。高台が付く。

広口壷(４)　広口の外反する口縁を持ち、体部の肩がやや張り出す。

小　瓶(５～８)　器形で細分した。

A類(5)　そろばん珠状の体部で、高台が付く。口縁部形態不明。

B類(6) 短めの口縁を持ち、体部の肩が張り出す。底部形態不明。

C類(7) 短めの口縁を持ち、体部の肩の張り出しは緩い。底部形態不明。

長頸瓶(9)　長い頸部を持つ瓶類で9は高台が付くものである。

横　瓶(10)　俵型の体部を持ち、短めの口縁が付く。大小2種類の法量があるようだが細分は行っていない。

甕　類(11～14)　口縁部片が多く個体数は多いとみられる。また、大小2種の法量があるようだが、細分は行っていない。

(4) 煮沸具(第14図15～26)

小　甕(15～18)　底部は回転糸切りが基本である。口縁部の形態で細分した。

A類(15) 口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部がつままれている。

B類(16) 口縁部が「く」の字に屈曲するもの。

C類(17) 口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が面取りされているもの。

D類(18) 口縁が短く外反するもの。

長　甕(19～24)　底部は平底・丸底がある。平底では静止糸切りのものがわずかにあるが、基本はヘラ切りである。「北陸型」といわれるロクロ成形で体部上半にカキメ、底部の丸底はタタキ痕がのこるものが多い。また、「佐渡型甕」・「西古志型甕」といわれるハケメを多用する甕も少量含む。口縁部の形態で細分した。

A類(19) ロクロ成形で口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部がつまみあげられている。

B類(20) ロクロ成形で口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が面取りされている。

C類(21・22) いわゆる佐渡型甕といわれるもので、他の長甕と比べ器高が小さめである。非ロクロ成形で体部の器壁が極めて薄い。体部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが施される。口縁部は長く外反し、外面は無調整、内面は横または斜め方向のハケメを施す。一般に底部は丸底と平底があるが、底部があるものは丸底のみである。法量で細分した。

1 (21) 器高が20cm前後のもの。

2 (22) 器高が25cm前後のもの。

D類(23・24) 砲弾形の体部に口縁部は強く「く」の字に外反する。外面はケズリの後に縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが施される。いわゆる西古志型甕である。法量で細分した。

1 (23) 器高が20cm前後のもの。

2 (24) 器高が30cm前後のもの。

鍋(25・26)　口縁部の形態で細分した。

A類(25) 口縁部の屈曲は緩く、口縁端部がつまみあげられている。

B類(26) 口縁部は緩く「く」の字に屈曲し、口縁端部は面をつくっている。

B．記述の方法（第15図）

報告は、各層ごとに遺構出土土器・包含層出土土器を報告した後、出土地点・層位不明分を報告する。平成9年度に行った、一次調査出土遺物も不明分として報告する。土器の分類・部位名称は、第13・14図のようにした。調整技法の表現は、ロクロの回転を利用した篦削り・なで・刷毛目をそれぞれ「ロクロケズリ」・

「ロクロナデ」・「カキメ」とする。ロクロを使用しない篦削り・なで・刷毛目をそれぞれ「ケズリ」・「ナデ」・「ハケメ」とする。また、黒色土器等に見られる篦磨きは、「ミガキ」とした。貯蔵具の甕・横瓶、煮沸具の長甕の当て具痕・タタキ具痕の細分類は、内堀信雄氏の分類[内堀1989]を基本に第15図のようにした。出土地点・胎土・法量などの詳細は巻末の遺物観察表を参照されたい。法量の計測に当たり、口径・底径は接地面の最大値を測定した。器高も最大値を測定した。須恵器の胎土については、山三賀Ⅱ遺跡[坂井1989]を参考にA群・B群・C群・D群に分類した。

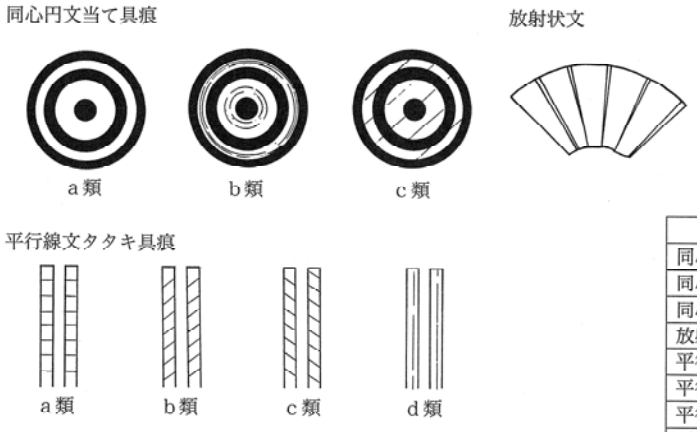
A群：胎土は相対的に粗く、石英・長石・金雲母を多量に含む。器面はざらつき小礫が露出する。笹神丘陵の笹神・真木山窯跡群を中心とする一群である。笹神丘陵は古代の沼垂郡にあたる。

B群：胎土は精良で長石とみられる白色粒子を多く含み、器面に溶着痕(黒色の小さな吹き出し斑点)が見られるもの。まれに海面骨針を含むものがある。佐渡小泊産と考えられる一群である。器種によって粘土の選択が異なっており、杯類は特に精良な胎土で器壁は薄く、軽量なものが多い傾向が見られる。高杯などには粘性の強い粘土を選択している。

C群：胎土が精良で器面はなめらかである。長石・石英の細粒をごく少量含むものが多い。新津丘陵産と見られるものである。杯類は器壁が厚く相対的に重量感がある。新津丘陵は古代の蒲原郡にあたる。

D群：A～C群以外のものを一括した。出雲崎町・和島村・寺泊町周辺の島崎川流域を中心とする、西古志産と考えられる一群を含む。胎土は緻密で精良で器面はなめらかである。島崎川流域は古代の古志郡にあたる。

土師器煮沸具で、一般的北陸型長甕とは区別できる、いわゆる佐渡型甕は須恵器に合わせ胎土B群とした。また、西古志型甕および鍋も須恵器に合わせ胎土D群とした。



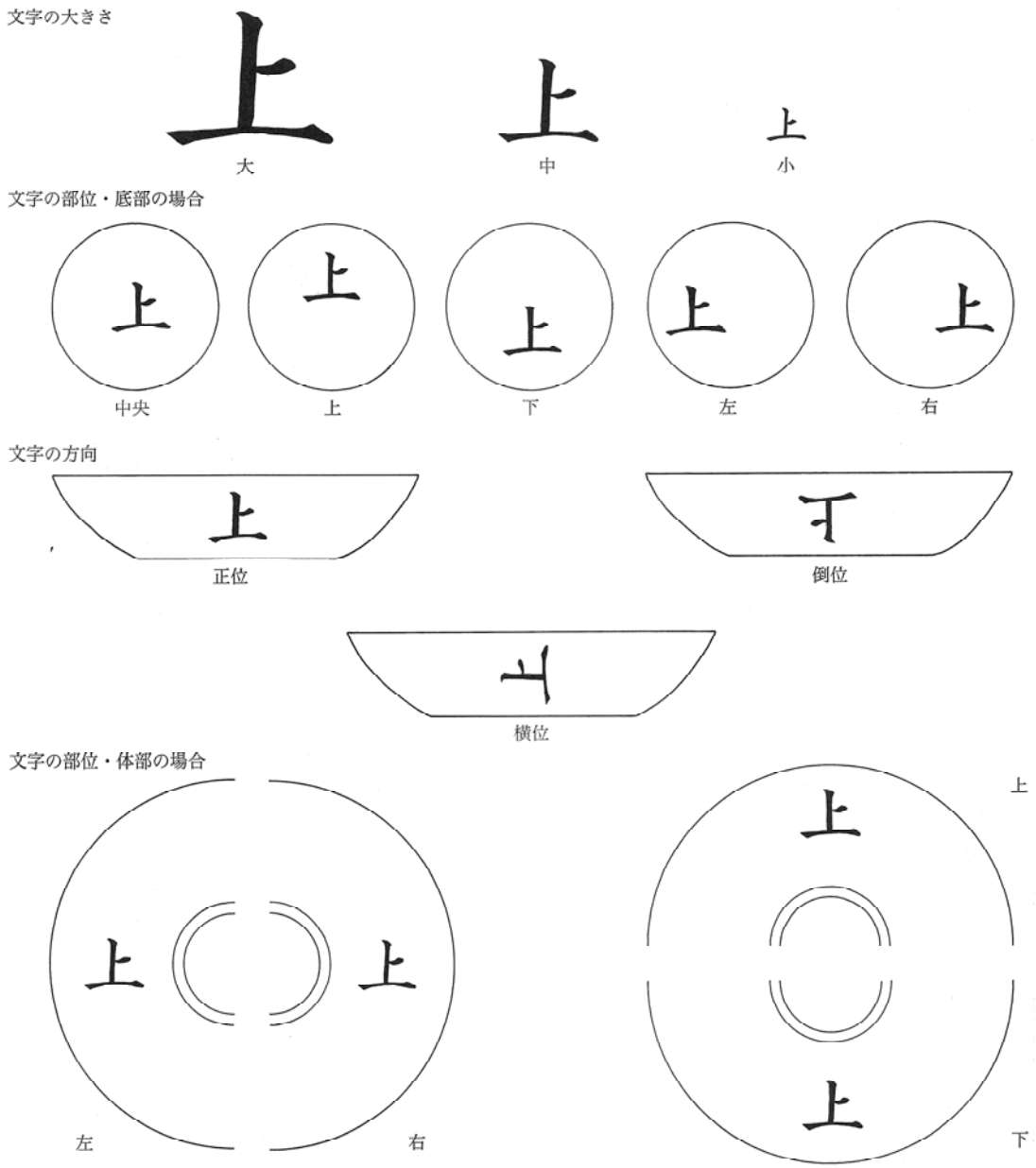
名称	分類基準
同心円文a類	木目の見られないもの
同心円文b類	年輪状の木目の見られるもの
同心円文c類	柾目状の木目の見られるもの
放射状文	放射状の文様がみられるもの
平行線文a類	木目が彫り込みに対し直行するもの
平行線文b類	木目が右上がりに斜行するもの
平行線文c類	木目が左上がりに斜行するもの
平行線文d類	木目が平行するもの

第15図　当て具痕・タタキ具痕の細分類（[内堀1988]を原図として再トレース）

C．墨書土器の記述の方法（第16図）

釈迦堂遺跡では、墨痕のみのものを含め78点の墨書土器が出土している。墨書の文字の表現については、『石川県墨書土器集成』[(社)石川県埋蔵文化財保存協会1997]、および新潟県墨書土器集成検討会の資料[小林ほか2000]を基に、第16図のように統一を図った。文字の大きさは、おおむね４～５㎝を大、２～３㎝を中、１㎝を小とした。底部に書かれている場合、中央・上・下・左・右の５つに分けた。実際には、

それぞれの中間に書かれているものもあるが、左上、右下などとは分けていない。墨書が体部に書かれている場合は、土器を正位に置いた場合の文字方向をみて、正位・倒位・横位とした。さらに、横位の場合は文字を正位にみて部位を上・下・左・右と表現した。したがって、表現は墨書の部位方向・大きさの順に記載し、「底部外面中央・大」、「体部外面横位右・中」などと表現した。釈文に用いる符号は以下のようである。



第16図　墨書土器表現凡例

「　」　文字が完結しているもの。
「　　文字は上には続かないが、下は欠損等により不明。
　　」文字は下には続かないが、上は欠損等により不明。
□□　判読できないが、字数の確認できるもの。
[　]　判読できず、字数の確認できないもの。
〔　〕　判読できないが残画から推定できるもの。
(　)　上記以外の説明。

D．各　説(1～427)

(1)Ⅶ層出土土器(1～4)

無台杯(1)　1は小泊産の無台杯A類で底部外面上に大文字で「大 の字が墨書されている。

鉢(2)　2は鉢B類でロクロ成形で口縁端部が短く外反する。口径は19.0cmである。

長頸瓶(3)　小泊産とみられる長頸瓶の口縁部である。口径が14.0cm前後とする大型の長頸瓶と考えられる。

小甕(4)　4は小甕A類で口縁端部が上部につままれ細くなっている。胎土に石英が含まれる。

(2)Ⅷ層出土土器(5～36)

a)遺構出土土器(5～23)

SK1(5)　中型で身の浅い、有台杯A2類が1点出土している。やや肉厚で高台は短く外端接地である。新津産の可能性がある。外面に自然釉が付着している。

SX2(6)　小泊産の杯蓋B類が1点出土している。ツマミは3.5cmと大きく偏平である。溶着痕と火ぶくれが見られる。9世紀第4四半期ころのものである。

SD218(7)　7は無台杯C類である。器壁は薄く小泊産である。

SD226(8～10)　9は無台杯A類で底部外面左に中文字で「衣」と墨書されている。小泊産で9世紀第3～4四半期のものある。10は有台杯B2類である。高台は短く外端接地である。西古志産の可能性があり9世紀第1～2四半期ころか。

SX41(11～22)　11は無台杯A類で、底部外面左に大文字で「真」の墨書がある。小泊産で9世紀第3～4四半期ころのものである。47の「真」とは違い、崩れた字形である。12は有台杯B類で小泊産である。体部はかなり開いて立ち上がる。13は無台杯D類である。体部は稜をもって立ち上がり、特徴的である。推定底径は7cmである。底部切り離しは、須恵器無台杯では唯一の回転糸切りである。頸城または西古志産の可能性があり、9世紀第2四半期ころのものである。14は無台椀A2類である。体部外面下部にススが付着している。15は無台椀B2類である。器壁は厚い。17は小泊産の横瓶である。体部の推定長径37.0cm、短径24cm前後と大型である。内面は同心円文c類の当て具を使用している。18は甕である。口縁はわずかに外反し、口径は22.3cm程度で大きさは中甕程度である。頸部にカキメの後の平行線文タタキ痕が部分的に残る。内面はカキメが残る。19は小甕A類である。体部に強いロクロナデの凹凸が残る。頸部は器壁が薄く、口縁は厚く丸みを持つ。20は長甕A類で丸底である。底部は丸く平行線文・同心円文で叩き出した後、軽く内外面をハケで調整している。21は長甕B類・丸底で胎土が新津産の無台杯A類に類似している。体部上半は、カキメの下を縦方向に削っている。体部下半から底部はハケメで調整されている。風化が著しく、内面の当て具痕はわずかに残る。22は長甕B類である。口縁は短い。体部はやや丸みを帯びる。

P276(23)　体部が丸みを持った長甕B類で短めの口縁が付く。内面に縦方向のナデがわずかに残る。

b)包含層出土土器(24～36)

無台杯(24～29)　24～26はA類である。24は体部外面正位に墨書があるが判読不能である。新津産である。25は口縁部に長さ4cm、幅0.7cmの打ち欠きがある。内面にタールが付着していることから、灯明芯を載せるための打ち欠きと考えられる。26は小泊産である。ロクロナデが顕著である。27はB類で溶着痕が見られ、小泊産と推定される。28は底部外面中央に2文字の墨書があるが判読不能である。9世紀第2～3四

半期ころのものである。29も底部外面に墨痕があるが判読不能である。

杯蓋(30～32)　30～32はＢ類である。30･31はいずれも小泊産である。30は口径14.8㎝、31は口径13.9㎝である。32は小泊または西古志産である。

甕(33)　甕の頸部から体部である。平行線文ｂ類・同心円文ｃ類のタタキ痕が残る。頸部内面に指頭圧痕が明瞭に残る。体部の最大径は49.0㎝である。新津産の可能性がある。

長甕(34・35)　34はＡ類で口縁端部が細く外側につままれている。口径24.0㎝とやや大きい。35もＡ類で口縁端部が厚くつままれている。内面に同心円文がわずかに残る。

鍋(36)　36はＡ類で口縁部はゆるく「く」の字を呈し、端部はわずかにつままれている。体部にハケメを多用していることから、西古志産の鍋とみられる。

(3) 火葬関連遺構出土土器(37～64)

ＳＫ１００(37・38)　37は無台杯Ａ類である。口径は11.8㎝とやや小型で小泊産である。38は有台杯Ｂ３類で、高台は外面が強くナデられ内傾し、体部との境が明瞭でない。小泊産である。

ＳＫ１３１(39・40)　39は無台杯Ｂ類である。口縁部の残りが少なく、口径は推定で14.0㎝前後と大きい。40は底部が欠損しているが有台杯Ａ類と推定され、口径は10.0㎝程度である。器壁はかなり肉厚である。

ＳＸ６５(41)　41は高杯である。SX65からは脚部の一部が出土しているのみである。杯部は杯蓋を倒位にした倒蓋式といわれるもので、杯部の口径は17.0㎝、器高は11.0㎝で小泊産である。脚部端部はつままれている。杯部には直径12.5㎝位の杯類を伏せて置いて焼いた重ね焼き痕が残る。

ＳＫ１１６(42)　42は無台杯Ｂ類である。器壁は極めて薄く、小泊産である。

ＳＸ１２６(43～64)　43から45は無台杯Ａ類である。44は内外にタールが付着していることから、灯明皿に転用されていると考えられる。47は無台杯Ｂ類である。底部外面中央に中文字で「真□　と墨書されている。かなりの能筆である。48は有台杯Ｂ３類である。高台の接地面が欠けている。49は有台杯の高台内側を硯として使用している。底部の周囲を全周打ち欠いて整え、安定するように調整している。50は杯蓋Ｂ類で小泊産である。51は杯蓋Ｃ類で偏平な器形で、口縁部が横方向につままれている。胎土は緻密で西古志産と考えられる。52は無台椀Ａ２類である。口径は14.0㎝である。53は無台椀Ａ３類である。口径は16.0㎝である。54は無台椀Ａ３類である。体部外面の底部付近に複数の墨痕がある。55は黒色土器無台椀Ａ３類である。体部下半および底部はケズったあと磨いている。内面に底部にミガキの痕跡が残る。56は長頸瓶で頸部は欠損し不明である。体部下半はケズられている。高台は内端接地である。９世紀第２四半期頃のものである。SK129出土の破片と接合している。小泊産と推定される。57は小甕Ａ類で、口縁内面にカキメがわずかに残る。体部下半外面の剥落が著しい。隣接するSX119出土の破片と接合している。58は小甕Ｂ類である。口縁はゆるく「く」の字を呈する。59は小甕Ｃ類で口縁端部はわずかに下方につままれている。60は長甕Ａ類である。頸部はゆるい「く」の字で、器壁は薄くなっている。体部下半はケズられている。61は長甕Ｂ類である。口縁は肉厚である。SK123出土の破片と接合している。62は長甕Ｃ類である。体部下半は上半部に比べ薄くなっている。頸部の３㎝下からタタキが見られるが、平行線が細かいものと粗いものと２種類のタタキ痕が見られる。63は「佐渡型甕」の長甕Ｃ類である。口縁内面は横方向のハケメが施されている。口径は22.8㎝である。64は長甕Ｃ１類である。外面は縦方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメが施される。内面に多数の指頭圧痕が明瞭に残る。

(4) Ⅸ層出土土器(65～124)

a)遺構出土土器(65～90)

ＳＫ４(65～69)　65は黒色土器無台椀Ｂ２類である。器壁は極めて薄い。内面に放射状のミガキがわずかにみられる。66は小甕Ａ類である。口径は12.8㎝である。67は小甕の底部である。ロクロナデの痕跡が明瞭に残り、外面の剥落が著しい。SK103出土の破片と接合している。68は長甕Ｂ類である。口縁端部の中央は窪ませている。69は鍋Ｂ類である。底部は平行線文ｃ類・同心円文ａ類で叩き出され、内面はさらにハケメで調整されている。

ＳＫ１２３(70・71)　70は長甕Ａ類で丸底である。平行線文ａ類のタタキ痕、同心円文の当て具痕が残る。71は長甕Ａ類である。胎土は大粒の石英・長石を多く含み粗く相対的に重量感があり、笹神産の須恵器の胎土に類似していることから笹神産と考えられる。同一個体と見られる破片に平行線文ａ類のタタキ痕が残る。内面は剥落が著しく当て具痕跡は不明である。72も長甕Ｂ類で口縁から頸部にかけて器壁が厚い。同一個体の破片から平行線文ａ類のタタキ痕が見える。内面は放射状の当て具を使用している。

ＳＸ３４(73)　73は長甕Ａ類で口縁は短く強く外反する。体部は膨らみがなく寸胴でである。平行線文ａ類のタタキ痕が残る。内面は同心円文当て具痕である。

ＳＫ１０(74)　74は小甕Ａ類である。口縁部はゆるく「く」の字状で口縁端部は内側に強くつままれている。

ＳＫ３０(75)　75は小甕Ａ類で口縁は強く外反し、さらに上に丸くつままれる。76は小甕Ｄ類で非ロクロ成形で口縁は短く外反する。口径10.0㎝と小型で胎土はやや粗い。口縁部形状・胎土とも他の小甕と様相が異なり、在地のものと見られる。小甕Ｄ類はこの1個体のみである。

Ｐ１５(77)　77は杯蓋Ｂ類である。ツマミの調整が粗く、笹神産で歪みが大きい。

ＳＫ１１２(78～80)　78は無台杯Ａ類で、胎土は精良で器壁は極めて薄いが、焼成は軟質である。79は無台杯Ｂ類で体部外面に墨痕があるが判読不能である。80は杯蓋Ｂ類である。口径15.3㎝と大型でツマミも偏平で大きい。笹神産の可能性が高い。

ＳＸ１１７(81～87)　81は無台杯Ａ類で底部径は口径に比して大きい。胎土は緻密で精良であるが、焼成は軟質である。82も無台杯Ａ類である。底部外面左に残った墨書から〔長〕の文字を書いたものと考えられる。９世紀第２四半期ころのものである。83・84は無台杯Ｃ類で小泊産である。ともに体部の立ち上がりがかなり開く。85は鉢Ａ類で出土している鉢類では口径19.0㎝と小型である。口縁部外面にわずかにススが付着する。86は小甕Ａ類である。体部のロクロナデの凹凸が著しい。87は長甕Ａ類である。平行線文ａ類のタタキ痕が残る。内面は無文の当て具か。

ＳＸ１５０(88)　88は無台杯Ａ類である。内外の底部にのみススが付着している。

ＳＸ１１９(89)　89は無台杯の底部である。外面中央に墨痕がある。

ＳＤ１７９(90)　90は無台杯Ｃ類で小泊産である。

b)包含層出土土器(91～124)

食膳具(91～116)

無台杯(91～103)　91～94はＡ類である。92は底部外面中央に墨書があるが判読不能である。93は底部外面に複数の墨書があるようだが判読不能である。95～102はＢ類である。95は底部外面中央に「巳」または「弓」を丸く囲んだ墨書がある。「弓」の墨書は六日町長表遺跡[小林2000]で多数の類例があり、95と同一

の字形のものが「弓」と判読されていることから、95も「弓」の可能性が高い。笹神産で９世紀第２四半期ころのものである。97は体部の立ち上がりがかなり開く。小泊産である。100は焼き歪みが大きく、佐渡小泊産である。101はロクロナデの痕跡が著しく、体部外面立ち上り際に墨痕がある。103は底部の外面に墨書があるが判読不能である。複数の文字の可能性がある。

有台杯(104～108)　104はＡ１類で底部の円盤に粘土ひもを積み上げて成形している。105はＡ３類で長石・石英を多量に含み笹神産と見られる。106はＢ２類で底部の円盤に粘土ひもを積み上げて成形している。上越市滝寺古窯跡群産の可能性がある。９世紀第２四半期ころのものと見られる。107はＢ３類で内傾ぎみの高台が付き、外端接地である。108は断面三角形の高台が付く形態で東海系といわれるものか。底部はヘラ切り無調整である。胎土は小泊産のものに類似している。

杯蓋(109～111)　109～111はすべてＢ類である。109・110は小泊産で内面を硯に転用している。111はリング状のツマミが付き、笹神産とみられる。

無台盤(112)　体部は直線的に開いて立ち上がる。全体的に器壁は厚い。胎土は緻密である。底部外面左に「郡」の墨書がある。縦1.3㎝、横1.5㎝の小文字で書かれている。新津産で９世紀第２四半期ころのものと見られる。

無台椀(113～116)　113はＡ２類で口縁端部がわずかに外反する。口径は14.3㎝である。114もＡ２類で口径12.4㎝と小ぶりである。115はＢ３類で口径24.4㎝、器高8.7㎝と大型の椀である。鉢としてもよいほどの大きさであるが、底部切り離しが回転糸切りであることから、ここでは椀としておく。116は底部外面中央に中文字で「□(家カ)刀」が墨書されている。家は407に「家刀」とあることから類推できる。

貯蔵具(117～119)

小瓶(117)　117はＣ類で頸部および底部形態は不明である。肩は張らずに丸みをおびている。

横瓶(118)　118は横瓶の体部の閉塞部分である。円盤の大きさは約10㎝である。外面は平行線文ａ類でタタキ出した後カキメ、内面の当て具痕は同心円文である。

甕(119)　119は甕類の破片である。外面は格子目文タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。器壁が薄いことから、小型の甕類の破片と思われる。

煮沸具(120～124)

小甕(120)　120は小甕Ａ類で口径は13.4㎝、底径7.0㎝、推定器高13.5㎝である。

長甕(121～123)　121はＢ類で口縁端部が下にわずかにつままれている。体部は丸みを持った器形になると思われる。122もＢ類で内面にハケメが見られる。123もＢ類で体部が張り出す器形になると思われる。

鍋(124)　124はＢ類で内面はハケメ、外面はカキメで底部はケズられている。

(5) Ｘ層出土土器(125～340)

ａ)遺構出土土器(125～216)

ＳＸ３６(125～135)　SX36は遺物集中地点である。Ⅺ層検出のSK403の破片と接合するものが多い。125は無台杯Ａ類である。底部外面中央に〔与止〕の合わせ文字の墨書がある。９世紀第３四半期ころのものと見られる。126は有台杯Ａ１類で高台は外端接地である。口縁は極めて薄くしている。Ⅺ層で検出されたSK403出土の破片と接合している。127は有台杯Ｂ２類である。高台はやや高めで外端接地である。新津産である。128は有台杯Ｂ３類で小泊産である。器壁は薄く、体部の高台付近はケズられている。SK403出土の破片と接合している。129は杯蓋Ａ類で丸い天井部を持つ新津丘陵産である。ツマミは小さくなり９世紀

第２四半期ころのものと考えられる。127とセットの可能性が高い。130は杯蓋Ｂ類で小泊産である。131は土師器無台椀Ａ２類である。底部の剥落が著しい。130は長頸瓶の口縁部で口径10.0cm、小泊産である。口縁端部は外側につままれている。９世紀第２四半期ころのものである。133は長甕Ａ類とした。口縁端部は丸くつままれている。平行線文ｃ類でタタキ出されている。内面の当て具は不明である。134は長甕Ｃ１類の佐渡型甕である。器高は20cm前後になるものと見られる。135は鍋Ｂ類で西古志産である。体部上部はカキメの下に縦方向のハケメを施し、底部はケズられている。内面底部はハケメで調整されている。

ＳＫ４３(136)　136は高杯の脚部である。杯部との接着面に３条の櫛歯状の工具で付けた接合の技法が明瞭に残る。内面には成形時に絞ったときの斜め方向のシワが見える。小泊産である。

ＳＫ４０(137)　137は無台杯Ｃ類で胎土に重量感があり、新津産の可能性がある。

ＳＫ５１(138)　138は有台杯Ｂ３類である。高台は外端接地である。

ＳＸ４２(139)　139は鍋Ｂ類である。口縁部は強く屈曲し、端部は厚く肥厚し玉縁状である。口径は30.7cmである。

ＳＫ１２５(140～148)　140は無台杯Ａ類で内面に赤色顔料が付着している。本遺跡で赤色顔料が付着しているものは140のみであるが、SK125から仏具系の遺物が多く出土していることと関係があるか。141は無台杯Ｂ類である。142は鉢Ｂ類で体部はやや直線的に立ち上がり、口縁部は内湾する。内面はカキメが施される。底部外面に制作時の長さ4.5～5.2cm、幅1.8cmの２本のロクロ板または亀板[西1986]といわれる痕跡が明瞭に残る。143は鉢Ｃ類で全体に調整が粗雑である。肩部に強いロクロなでが施され、稜を作ろうとしているようだが幅が一定でない。底部から体部にかけて粗くケズられている。口径は21.4cmである。144は鉢Ｃ類である。外面にカキメを施して丁寧な作りで新津産の可能性がある。口縁部下方に焼成前に直径0.9cmの孔が３単位で施されているようである。この孔には、摩耗あるいは欠けなどの使用痕が見られないことから、装飾のための孔と見られる。外面にわずかにススが付着している。145も鉢Ｃ類で新津産と見られる。３単位の孔が口縁部下方に施されている。ひとつの孔はうまく穿孔できていない。これらの孔も摩耗・欠け等の使用痕は見られない。このように鉄鉢形の鉢が３個体出土したSK125は特異な性格を持つのであろうか。146は有台杯である。高台外面はナデられており、内面にはわずかに墨痕が付着している。147も壷・瓶類の体部である。体部の最大径は18cm程度である。肩に１条の沈線が巡る。新津産の可能性がある。148は小甕Ａ類である。全体にススが付着している。

ＳＫ１３３(149・150)　149は有台椀Ａ３類である。高台は内湾している。150は無台盤で、口径は15.3cmである。極めて緩く短く立ち上がる。底部はヘラ切りである。溶着痕が見られる。

ＳＫ１３５(151)　151は短頸壷である。口縁はやや内傾して立ち上がる。口径は8.6cmである。溶着痕が多数見える。152は甕の口縁で直立気味に立ち上がり、端部がわずかに外反する。推定口径21.6cmで中型の甕と考えられる。

ＳＫ１３２(153)　153は長甕Ｃ２類の佐渡型甕としたが、佐渡型甕には長胴の甕は見られないことから、他の産地の可能性も残る。胎土・手法は佐渡型甕と類似している。口縁は４cmと長く体部の器壁は薄い。高さは30cm前後か。内面に指頭圧痕が多数明瞭に残る。

ＳＤ１４０(154)　154は無台杯Ａ類である。底部外面中央に「□□(所カ)」、側面横位右に「其　の墨書がある。「其　の第２・３画は218の「葛」の筆跡と類似しており、同筆の可能性がある。また、方向は逆であるが、218の字形と類似し、右下は欠けていることから「葛」を墨書している可能性も残る。９世紀第２四半期ころのものである。

ＳＤ１４７(155)　155は鉢Ａ類である。内面にカキメが施されている。体部から口縁まで器壁の厚みは一定である。

ＳＤ１５２(156)　156は無台杯Ｃ類である。底部は凹凸があり、体部は緩やかに開き気味に立ち上がる。新津丘陵産の可能性がある。157は杯蓋Ｂ類である。偏平なボタン状のツマミが付く。口縁端部は肉厚である。

Ｐ１４９(158)　158は長頸瓶の体部から底部である。頸部は欠損している。高台は外反している。実測図では表現しきれていないが、内面の肩と頸部の中程に風船技法で上部を円盤でふさいだ時の段差が明瞭に残る。底部内面に調整時の削りクズが付着している。小泊産で９世紀中葉から後半のものと見られる。

Ｐ１６８(159)　159は無台杯Ｂ類である。口径14.0cm、底径9.0cm、器高3.7cmと大きい。焼成は軟質である。

ＳＫ１７０(160～168)　160は無台杯Ａ類である。胎土は精良で、小泊産である。161は無台杯Ｂ類である。体部に墨痕があり、底部外面中央に「＊」の記号が大きく墨書されている。９世紀第３～４四半期ころのものである。162は有台杯Ａ３類である。高台は短く内端接地である。163･164は杯蓋Ｂ類である。いずれも小泊産である。165は土師器･無台杯Ａ類である。内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。灯明皿に転用しておりスス･タールが内外面に付着している。166は長頸瓶の頸部から体部である。頸部に２条の沈線が巡る。口縁端部は欠損しており、体部は剥落が著しい。167は小泊産の横瓶の頸部から体部である。口径は11.2cm体部径推定33.1cmと小型である。体部の片面が閉塞されているが、もう一方は不明である。外面のタタキ具は平行線文ｂ類を使用している。内面は同心円文ｃ類で、中心には更に十字に溝が彫り込まれている。内面は剥落が著しい。168は鍋Ｂ類である。体部下半から底部はケズられている。内面の口縁部付近はカキメ、底部付近はハケメが施され西古志産の可能性がある。

ＳＤ１６６(169)　169は長甕Ｄ１類の西古志型甕である。高さ19.4cmと小型である。内面はハケメ、外面の体部上部はケズられ下半はハケメが施されている。

ＳＸ１８１(170～172)　170は有台杯Ａ３類で小泊産である。高台は丸みを持ち、外端接地である。171は長甕の底部で、切り離しは静止糸切りである。172は長甕Ｃ２類である。内外にハケメが施されている。

ＳＫ１８５(173)　173は無台杯Ｂ類である。SK172出土の破片と接合している。

ＳＫ１８７(174)　174は無台杯Ａ類である。灯明皿に転用されている可能性がある。

ＳＫ１９０(175～177)　175は杯蓋Ｂ類である。ツマミは偏平で大きい。176は小甕Ｂ類である。口縁は「く」の字で薄くなっている。小型だが、重量感がある。177は長甕Ｂ類である。風化が著しい。

Ｐ１９１(178)　178は無台杯Ａ類である。体部に倒位で「大」の墨書がある。文字の大きさは中である。９世紀第３四半期ころのものである。

ＳＤ１９６(179)　179は無台杯Ａ類である。底部外面は部分的に焼成不良である。

ＳＫ１７４(180)　180は長甕Ａ類である。口縁端部の一部は上につままれ、一部は下に引かれている。体部は砲弾状である。外面は平行線文ｂ類、内面も平行線文の当て具痕が残る。

ＳＫ２５１(181)　181は無台杯Ａ類で新津産である。口径は10.8cmと小型である。

ＳＫ２１４(182)　182は無台杯Ａ類で小泊産である。41･136･356の高杯と同様な粘性の強い粘土を使用している。

ＳＤ２１３(183)　183は杯蓋Ｂ類である。ツマミが欠損している。内面に自然釉が付着している。

ＳＸ２３１(184・185)　184は無台杯Ｃ類である。体部は極めて薄く口縁端部は外反する。185も無台杯Ｃ

類である。底部外面ほぼ中央に「千縄」と大文字で墨書している。「千縄」は人名の可能性があるが、346とは同筆ではない。

ＳＤ２３５(186)　186は杯蓋Ｂ類である。天井部から体部にかけて外反気味に反る。

ＳＤ２５７(187)　187は無台椀Ａ２類である。口縁部の内面にわずかにタールが付着し、全体にススが付着する。灯明皿に転用か。

ＳＤ２６５(188)　188は有台杯Ｂ１類である。高台は外端接地である。口径は10.1cmである。189は杯蓋Ｂ類である。ツマミは略宝珠形である。

ＳＤ２５１(190)　190は新津産の須恵器の皿としたが、高杯の可能性もわずかにある。口径は12.0cm程度である。

ＳＫ２５５(191)　191は小泊産の無台杯Ａ類である。底部外面上に中文字で「長」の墨書があるが、横一画が足りない字形である。９世紀第２四半期ころのものである。

ＳＤ２４４(192)　192は無台杯Ｃ類である。ススが内面見込み以外に大量に付着している。

ＳＤ３００(193)　193は無台杯Ａ類である。底部外面上に中文字で細く「大」の字を墨書している。９世紀第２四半期ころのものである。

ＳＤ２９９(194)　194は長甕Ａ類である。全体に器壁は薄く、体部はやや丸みを帯び中型である。外面は頸部下はカキメ、その下はハケメを施している。内面は、カキメを施している。西古志産である。

ＳＤ２７３(195)　195は長甕Ｂ類である。外面平行線文ｂ類、内面縦方向のハケメが施されている。整形の最後に外面を縦方向にナデている。

ＳＫ２６２(196)　196は小泊産の広口の壷である。口径は13.0cm程度である。

ＳＸ３０９(197)　197は無台杯Ｂ類である。溶着痕がある。

ＳＫ３１２(198～201)　198は無台杯Ａ類である。胎土に海綿骨針を含む。口縁部のみ焼成不良である。199は無台杯の底部外面下に「与止」の合わせ文字が墨書されている。「与」の最後の一画が省略されている。200は新津産の杯蓋Ｂ類である。ツマミが小さくなっている。201は長甕Ａ類である。内面に指頭圧痕が残る。

ＳＫ３３３(202・203)　202は新津産の無台杯Ａ類である。器壁は厚く立ち上がりは垂直気味である。胎土はにぶい橙色である。203は小泊産の有台杯Ａ３類である。高台は外端接地で断面形は三角形に近い。

ＳＫ３５４(204～210)　204は無台杯Ａ類で底部内面の凹凸が著しく、凸部は摩耗して滑らかである。205は無台杯Ｂ類で小泊産である。206は無台杯Ａ類で、底部外面上に中文字で「七」と墨書されている。207は有台杯Ｂ３類で、伏せて焼成しているので高台内面にまで自然釉が多量に付着している。208は小甕Ａ類である。体部下半が張り出している。209は長甕Ｂ類である。平行線文のタタキ痕がわずかに残る。210は長甕Ｂ類で頸部がすぼまるような器形である。体部下半はケズられている。

ＳＫ３４３(211)　211は杯蓋Ｃ類の西古志産である。ツマミは小さく、口縁端部は外反している。内面は硯に転用されている。９世紀第２四半期ころのものである。

ＳＫ３５３(212)　212は長甕Ｄ２類西古志産の甕である。内外面はハケメ、外面体部下半はケズられている。

ＳＤ３５６(213)　213は無台杯Ａ類である。小泊産である。

ＳＸ３７１(214)　214は甕で口縁は大きく開く。体部外面は平行線文ｂ類のタタキ痕、内面は同心円文当て具で頸部近くは右回りである。

ＳＫ３５８(215)　215は長甕Ｂ類である。平行線文ｃ類のタタキ痕、当て具痕は不明である。

ＳＤ３６９(216)　216は無台椀Ａ２類である。底部外面に墨書があるが判読不能である。

ｂ)包含層出土土器(217～340)

食膳具(217～302)

無台杯(217～272)　217～229はＡ類である。218は体部に「葛」の文字が横位・左に墨書されている。154と同筆と見られる。９世紀第２四半期ころのものである。219も体部に「葛」の文字が横位・右に墨書されているが、218とは同筆ではないが土器の時期は同一である。222は底部外面・上に「一」と大きく墨書されている。９世紀第３～４四半期ころのものとみられる。226は底部外面上・中文字で「長」と墨書されている。体部に墨痕がある。９世紀第２四半期ころのものである。227・228は新津産の無台杯Ａ類である。器壁が厚く全体に丸みを持つ。229は底部外面・上に「二」の墨書がある。９世紀第２四半期ころのものである。230～255はＢ類である。232・236は口縁部にタールが付着していることから、灯明皿に転用されているとみられる。235は体部左に墨書「□(葛カ)水」があるが、上の文は上部の墨痕が薄いが「葛」と読める可能性が高い。238は底部外面・上に「十」の墨書としたが、天地が逆の可能性もある。いずれにしても「十」となる。９世紀第２四半期ころのものである。243は底径が小さく体部が大きく開く器形で東海系の影響が見える。244は底部外面に墨書があるが判読不能である。249は底部外面右・中文字で記号「～」のようなものが漆で書いてある。９世紀第２四半期ころのものである。252は底部外面に墨痕がある。255は底部内面上・中文字で〔与止〕の合わせ文字が墨書されている。９世紀第２四半期ころのものである。256～259はＣ類である。256は笹神産でやや大粒の長石・石英が多量に含まれる。257は焼成が軟質である。底部のヘラ切り痕の凸部は摩耗している。258・259は器壁が薄く小泊産である。260・261は底部外面に墨書があるが判読不能である。260は新津産である。262は底部外面に複数の文字の墨書、体部外面に墨痕があるが判読不能である。263は底部外面左に「碓□(下カ)」の墨書がある。下の文字は「下」の可能性もある。小泊産で９世紀第２～３四半期ころのものである。264は底部外面に墨書があるが判読不明である。265は底部外面に文字の一部の四、または皿の部分が残るが判読不能である。266は底部外面に墨痕がある。267は底部外面中央・中文字で２文字以上の墨書があるが判読不能である。268は底部外面中央に中文字で複数の墨書があるが判読不能である。９世紀第２～３四半期ころのものである。269は底部内面に墨痕がある。270は底部外面上に中文字で「犬」、方向を変えて上に中文字で「一」と墨書している。271も底部外面に大文字で墨書されているが判読不能である。272も底部外面に墨痕がある。

有台杯(273～281)　273は有台杯Ａ３類で、器高は7.1cmと身が深い。高台は小さく中央に接地面を持つ。274はＢ１類で高台の端部が外側につままれる。275はＢ２類で短い高台が付き、底部の中央が落ち込む。西古志産である。276もＢ２類で短い偏平な高台が付く。胎土は極めて緻密で西古志産の可能性が高い。277～281はＢ３類である。277は小泊産である。口径14.4cmと大型である。278は口縁部内外面にタールが付着している。279は断面三角形に近い高台が付き、小泊産である。280は内端接地である。281は底部のみで高台の内面に墨痕があるが、転用硯として使用した可能性もある。

有台椀(282)　須恵器の有台椀は282の１個体のみである。施釉陶器を模したものと考えられる。器壁は厚く、やや高めの高台が付き、接地面は摩耗が著しい。胎土は白色粒子を多く含み、小泊産である。

杯蓋(283～291)　283はＡ類で内面左・中文字で「東」の墨書がされている。西古志産で９世紀第２四半期ころのものである。281～291はＢ類である。284は杯蓋Ｂ類としたが全体の器形は丸みを帯びる。285は内面を転用硯としており、摩耗している。９世紀第２四半期ころのものである。288は内面左に「真田」の墨

書がある。小泊産で９世紀第３四半期ころのものである。291は宝珠状のツマミを持ち、９世紀第２四半期ころのものである。

無台盤(292)　292は口径16.3cm、底径12.0cmと大型で、体部が直線的に立ち上がる。

無台椀(293～300)　293はＡ１類である。294はＡ２類で全体に丸くボール状である。295もＡ２類で左右の器高が0.6cmほど違いがある。296もＡ２類で体部は緩やかに立ち上がる。297はＡ３類で全体に器壁が厚い。口径は17.6cmである。口縁部の一部が打ち欠かれている。298もＡ３類で内外面にスス・タールが付着している。299はＢ２類で口縁端部が外反する。内外面にススが付着している。300はＢ３類で口径16.0cm、底径は4.6cmと小さい。

黒色土器無台椀(301)　301は黒色土器で口径18.0cm、底径6.4cm、高さ6.2cmである。内面底部は放射状のミガキ、体部から口縁部は口縁に沿ってミガキをかけている。

有台椀(302)　302は2.2cmの高い高台が付く大ぶりな椀である。土師器の有台椀は302のみである。

仏具系(303)

鉢Ｂ類(303)　303は直立気味の体部を持つ鉢である。底部付近外面にヘラケズリ、内面はハケメが施される。

貯蔵具(304～310)　貯蔵具には土師器と須恵器があるが、304以外はすべて須恵器である。

短頸壷(304)　304は短い口縁が直立に付く有台の壷である。高台は内端接地で外反する。

小瓶(305)　305は算盤珠状の体部を持つ、有台の小瓶Ａ類である。高台は内側につままれ内端接地である。306は肩の張る小瓶Ｂ類である。口縁部はやや短めで高台は付かないと考えられる。肩に幅３mmの沈線が１条巡る。

甕類(307～310)　307は甕類に付く把手と推定される。内面は同心円文当て具痕が残る。幅7.4cm、高さ3.8cm、厚さ2.0cmである。308は短めの直立気味の口縁部を持つ甕である。推定口径21.0cmである。中型の甕になると推定される。309は外反した口縁で、端部は外側につままれている。推定口径23.0cmである。310は甕の体部片である。外面は平行線文ｂ類、内面は同心円文である。器壁が厚いので大型の甕になると考えられる。

煮沸具(311～340)

小甕(311～318)　311は小甕Ａ類で、頸部は強く「く」の字に屈曲する。体部上半のロクロナデの痕跡が明瞭に残るが、下半はケズられている。口縁端部は厚く上につままれている。312は体部全体にロクロナデの痕跡が明瞭に残る。313はＢ類で体部が丸く、頸部はあまり締まらず、口縁は緩く「く」の字に外反する。314・315は小甕Ｃ類である。315は口縁端部が窪んでいる。318は底部に回転糸切り痕、およびロクロから持ち上げるときに差し込んだ、２本の串状工具の痕跡が明瞭に残る。

長甕(319～333)　319～324はＡ類である。319は内面に指頭圧痕が残る。320はケズった後、平行線文ｂ類・同心円文で叩き出している。322は口縁端部を細く上部につまんでいる。325～330はＢ類である。325は口縁端部が丸く肥厚する。327の内面は口縁部から頸部はカキメ、体部は縦方向のハケメが施されている。331～333はＣ１類である。331はいわゆる佐渡型甕の中甕というべき法量で、高さは15.0cm前後である。体部は丸みを持ち、頸部は「く」の字を呈し、口縁は長く外反する。332も佐渡型甕で内外面ハケメ調整される。内面に指頭圧痕が見られる。333は長甕Ｃ２類で長胴になると推定される。内外ハケメ調整で指頭圧痕が見られる。

鍋(334～340)　334は鍋Ａ類である。口縁部はほとんど屈曲せず、口縁端部が上につまみあげられている。

底部は平行線文ａ類・同心円文で叩き出されている。335～340はＢ類である。335はカキメで整形した後、ケズって厚さ調節を行っている。底部は平行線文ｃ類・同心円文ｃ類で叩き出している。336・340は口縁端部がわずかに窪んでいる。

(6) Ⅺ層出土土器(341～389)

ａ)遺構出土土器(341～380)

ＳＫ４２１(341)　341は無台杯で底部外面上に〔与止〕の墨書がある。９世紀第３四半期ころのものである。

ＳＫ４０３(342～361)　342～345は無台杯Ａ類である。343・344は底部外面上に中文字で「与止」の合わせ文字が墨書されているが同筆ではない。土器の時期は９世紀第２四半期ころのもので同一である。345は口縁部を打ち欠かれ、内面にタールが付着し灯明皿と見られる。底部外面上に「玉」の墨書がある。９世紀第２四半期ころのものである。346～350は無台杯Ｂ類である。346は底部外面上に「千縄」という人名の可能性のある墨書がある。９世紀第２四半期ころのものである。351は底部外面に「全口(万カ)　の墨書がある。９世紀第２～３四半期ころのものである。352は有台杯Ｂ１類である。ロクロナデの痕跡が明瞭である。新津産の可能性がある。９世紀第２四半期ころのものである。353は有台杯Ｂ３類である。高台内面左に「与止」の合わせ文字の墨書がある。343と同筆の可能性がある。354・355は杯蓋Ｂ類である。355は西古志産である。356は高杯である。佐渡小泊産である。杯部に直径12cm程度の杯を伏せて焼成した重ね焼き痕がある。SX36(Ｘ層)・SD386(Ⅺ層)出土の破片、Ⅷ・Ⅸ層出土の破片と接合している。357は小甕Ａ類である。体部下半はケズられている。口縁端部は短くつままれている。358・359は長甕Ａ類である。358は内面ハケメ・ケズリ調整したあと叩き出している。360は長甕Ｂ類である。外面のカキメと内面のカキメは道具を変えている。外面は平行線文ｂ類で叩き出されている。内面体部に指頭圧痕、底部はハケメがわずかに残る。

ＳＫ４００(362～369)　362～364は無台杯Ａ類で362は新津丘陵産である。内外にタール・炭化物が大量に付着している。365は杯蓋Ｂ類である。366は有台杯の底部である。高台は端部がわずかに外反する。笹神産で折縁杯の可能性もある。367は小甕Ｃ類である。内面にわずかにカキメが残る。外面指頭圧痕が残る。368は長甕Ａ類である。平行線文ｃ類・同心円文ａ類に直交する溝が掘られている可能性がある。369は長甕Ｄ２類西古志型甕である。内外ハケメが施される。内面に指頭圧痕が並んで観察される。

ＳＫ４３８(370)　370は小甕Ｂ類である。チャートが多く混入する。

ＳＫ４４２(371)　371は有台杯Ａ３類である。高台は外端接地で内灣する。

ＳＤ７７(372・373)　372は鍋Ｂ類である。底部外面はケズられ、内面はハケメ調整されている。西古志産である。373は大甕の口縁部である。波状文が二条引かれるが不揃いである。

ＳＸ７５(374)　無台杯374は底部上に中文字で「長」の墨書がある。横一画が足りない字形である。９世紀第２四半期ころのものである。375は杯蓋で偏平な器形である。376は大甕の体部である。外面は平行線文ｂ類である。内面の体部中央付近は同心円文ｃ類で叩き出している。その下は平行線文の当て具を使用しているが、粘土がある程度乾燥してから叩いているため、痕跡は浅い。それに比べて底部付近の平行線文は深い。

ＳＤ３８６(377)　377は無台杯Ｂ類である。内面にタールが付着している。378は長甕Ｂ類である。外面は平行線文タタキ痕、内面は指頭圧痕が残る。

ＳＤ７８(379)　379は杯蓋Ｂ類である。ツマミは小さく全体に歪みがある。380は短頸壷に付く壷蓋でツマ

ミが付く。

b）包含層出土土器(381～389)

無台杯(381～384)　381はA類で底部に「□(萬ヵ)」と読める可能性のある墨書がある。383は無台杯B類である。体部はかなり開き気味に立ち上がる。384は底部外面に墨痕がある。底径は9.0cmと大きい。

杯蓋(385)　385は杯蓋B類で小泊産である。口縁端部は細く尖っている。

有台皿(386)　386は底部の破損面がわずかに下に伸びていることから、有台皿あるいは高杯の可能性がある。

甕(387)　甕の体部片である。平行線文b類、同心円文b類で叩かれている。大甕になると考えられる。

小甕(388)　388はA類で体部下半はケズられている。口縁端部は内側につままれている。

鍋(389)　389は鍋B類で口縁端部は厚く丸みを持つ。口径は34.0cm程度である。

(7)出土層位・位置不明土器(390～427)

食膳具(390～418)

無台杯(390～414)　390～402はA類である。390・392・396～401・403～406は9世紀第2～3四半期ころのものである。390は内外面にタールが付着し、灯明皿に使用されたと考えられる。391・393は底部外面に墨痕がある。394は複数の墨書が底部外面にあるが判読不能である。395はやや深めの器形で底部外面右に中文字で「廣」の墨書がある。9世紀第3四半期ころのものである。402は底部外面上に中文字で「西」の墨書がある。9世紀第2四半期ころのものである。403～408はB類である。403は内面異タールが付着し灯明皿と見られる。口縁部に灯明の芯を安定させるための打ち欠きが大(幅3.9cm深さ1.2cm)小(幅0.7cm深さ0.5cm)2か所ある。407は底部外面上に中文字で「家刀」の墨書がある。9世紀第3四半期ころのものである。408は一次調査出土分である。底部外面左に大文字で「上」、体部左に中文字で〔葛〕の墨書がある。文字位置は、底部と外面の差はあるがいずれも左に墨書している。409は体部外面に墨痕がある。410は底部外面に墨書があるが判読不能である。9世紀第3四半期ころのものである。下は墨痕のみか。411・414も底部外面に墨書があるが判読不能である。412は底部外面中央に二文字の墨書があるが判読不能である。9世紀第2～3四半期ころのものである。413は底部内面に小文字で「十」の墨書がある。横画に比べ縦画が長い。9世紀第3四半期ころのものである。

有台杯(415)　415は有台杯A3類である。高台外面はナデられている。火ぶくれの痕跡が数個まとまって見られる。

無台椀(416～418)　416は内外面にタールが付着し、灯明皿に転用されている。418は椀である。口径は23.6cmと大型である。口縁端部は外反する。

黒色土器無台椀(419)　419は黒色土器無台椀の底部である。他の黒色土器無台椀に比べ器壁が厚い。底径は7.4cm程度である。

仏具系(420)

鉢(420)　420は鉢B類で口縁端部がわずかに外反する。口径は18.6cm程度である。

貯蔵具(421～424)

小瓶(421・422)　421は小瓶C類である。口縁部の長さ2.6cmである。肩が張る器形である。西古志産の可能性があり、9世紀第2四半期ころのものである。422は小瓶の底部で高台が付く。高台は幅広で偏平である。これも西古志産で9世紀第2四半期ころのものである。

壷・瓶類(423)　423は壷または瓶類の底部で高台が付く。高台は外端接地で、径は10.5cmである。西古志産で９世紀第２四半期ころのものである。

甕(424)　424は甕の体部の破片である。外面は平行線文ａ類、内面も平行線文の当て具痕である。大甕になると推定される。

小甕(425)　425は小甕Ａ類である。胎土に金雲母・小礫が混じる。

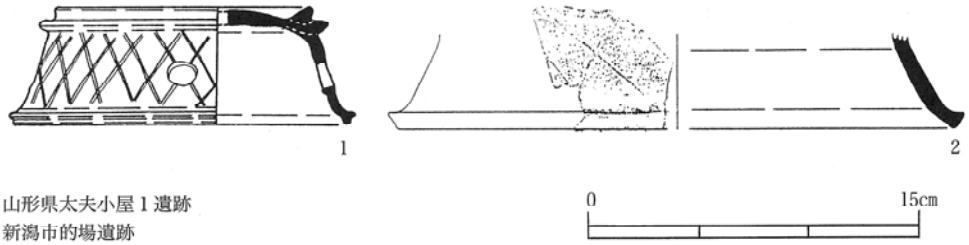
煮沸具(426・427)

長甕(426・427)　426はＡ類で頸部が強く屈曲し、口縁端部は上につままれている。427もＡ類で頸部はゆるく「く」の字を呈し、口縁端部は厚くつままれている。

３．土製品(図版62)

Ａ．円面硯(428)

脚部の一部が出土している。甕の口縁部を逆にした器形で、台形の透かしが複数入る。外面には斜格子状のヘラ描きが施される。脚径は18.0cmである。新潟市的場遺跡に同類の円面硯が出土している。上部の推定復元は山形県・太夫小屋１遺跡[古代城柵官衙遺跡検討会1999]出土の円面硯を参考にした。



1．山形県太夫小屋１遺跡
2．新潟市的場遺跡

第17図　円面硯参考資料

Ｂ．手づくね土器(429)

１点のみの出土で、祭祀遺物と考えられる。口縁部が玉縁状に肥厚する。内面に指頭圧痕が残る。口径4.4cm、底径3.3cm、高さ2.8cmである。

Ｃ．筒形土製品(430・431)

430・431はこれまで製塩土器の器台[坂井1989]あるいは、用途不明の筒形土製品[新潟市1994]、筒型有孔脚台[本間1983]などの多様な名称で呼ばれている土製品である。ここでは、筒形土製品とした。どちらも同一個体と見間違うほど胎土は共通し、小礫を多量に含み極めて粗雑である。非ロクロ作りで輪積みの痕跡が明瞭に残る。430は中央に直径1.3～2.0cmの小孔が３～５か所指で開けられている。外面は縦方向のナデが明瞭に残る。内外面にススが付着し、二次被熱し赤変している。431は３か所以上の孔が開けられている。緒立遺跡ではカマド製品と思われるものとされており、本遺跡出土品も用途はカマドの支脚と考えている。

D．塼状土製品(432)

432は粘土を四角形に成形し焼成したレンガ、いわゆる塼とよばれるものと推定される。塼は古代において寺院や官衙の基壇や擁壁に使用されたものである。県内で出土例は見出せず、わずかに寺泊町横滝山廃寺[前島己基1984]で塼仏が出土している。北陸の寺院跡の塼の出土例は、福井県箱谷遺跡、石川県黒瀬瓦窯跡、富山県寺山遺跡、大北遺跡、越中国分寺跡など数例ある[北陸古瓦研究会編1987]。胎土は精良で焼成は極めて軟質で軽量である。スサなどの繊維質の材料は含まれないので壁材ではない。きちんと面が作られており、角度はほぼ直角である。塼には正方形塼・長方形塼があるがいずれとも判別は付かない。実測が可能だった432(143.7g)以外に破片が740.5ｇある。

E．土器片円盤(433～453)

縄文時代から各時代を通して、土器片を加工して円板状に成形する、いわゆる土器片円盤または円板状土製品といわれるものがある。時代によって用途の変遷があると考えられ、多様な説があるが性格は明らかになっていない。本遺跡では、須恵器の破片を打ち欠いた土器片円盤が32個で主体を占め、土師器の破片を円盤状に打ち欠いたものは１点のみである。他に近世以降のものと見られる泥めんこ１個が出土している。

(1)磨面を持たないもの(433～443)

細かな打ち欠きによって円盤状あるいは方形に整形している。大きさは2.0㎝前後である。

(2)磨面を持つもの(444～453)

円板というよりむしろ方形あるいは台形とすべき形である。すべての面に磨り面を持つ。(1)の磨面を持たないものとは明らかに機能を異にする。

(3)泥めんこ(454)

型抜きで成形したもので表面に４弁の花文が浮き出ている。

F．土　錘(455～499)

すべて土師質の土錘で細型土錘が44個、太型土錘が１個出土している。

(1)細型土錘(455～498)

長さは３～６㎝、幅１～1.5㎝、重さ２～９g前後である。SK312からは18個まとまって出土している。471・472・453などは指頭圧痕が残っている。

(2)太型土錘(499)

長さ5.4㎝、幅4.4㎝、重さ96.5gである。外面にハケメのような痕跡がわずかに残る。

4．木製品(図版63)

本遺跡は低湿地に立地する遺跡にも関わらず、木製品の出土はわずかであった。

A．斎　串(500)

平成９年度の範囲確認調査の⑧トレンチに打ち込んだ鋼管の中から出土した。鋼管の幅20cmで上下が切断されている。出土層位は地表面下約4mでⅫ層にあたると考えられる。⑧トレンチは集落の西側に広がる湿地の範囲にあたり、水辺での祭祀行為が想定される。板目材を使用し、上向きの切り込みが左右対に６か所入っている。幅1.8cm、厚さ0.5cmである。

B．杭(501～503)

Ⅸ層・２Ｂグリッドで３列・14本検出出来た杭列の中で状態の良いものだけを図化した。上部はすべて欠損している。501は杭№７で先端部分のみの残存で４面に切断している。502は２面に切断している。503は杭№１で樹皮が残存している。加工面は１面で階段状になっている。

5．金属製品(図版63・123)

金属製品は銅製品３点、鉄製品２点が出土している。第18図に糸魚川市フォッサマグナミュージアムのご協力により、金属製品の主成分元素の解析結果を示す。分析器はＸ線マクロアナライザーを使用している。アルミニウム(Ａｌ)が検出されているものがあるが、遺物に土壌の成分が付着しているためと考えられる。他に鉄滓が出土しているが写真(図版123ｂ～ｈ)のみ掲載した。

A．銅　銙(504)

奈良時代中頃から平安時代初頭に六位以下の下級役人が身に付けたといわれる、腰帯の飾り金具(銙)の一つで巡方である。銅製(銅銙)で黒漆が全体に塗られていたといわれるが、漆は一部しか残っていない。火化遺構と推定されるSX126から出土しているが、被熱はしていない。共伴する土器類が９世紀代ということから伝世品の可能性が高い。さらに表面上部にヤスリを掛けたような痕跡があり、表面が丸くなっていることも補修されたことを示している。このことから表面の黒漆は補修後に塗布されたものである。裏面には４つの鋲の内３つが残る。縦2.42cm、横2.64cm、厚さ0.65cmで郡司の大領クラスが持つ大きさといわれる。主成分元素は銅(Ｃｕ)で、鉛(Ｐｂ)・珪素(Ｓｉ)を含有する。

B．銅金具(505)

P307から出土している銅の金具である。直径２cmほどの棒状のものに巻き付けた金具と見られ、重なり合った接合部分が観察できる。残存する長さ1.9cm、幅0.6cm、厚さ0.05cm、重さ0.6gである。刀子のようなものを留めた金具の可能性がある。主成分元素は銅(Ｃｕ)と少量の銀(Ａｇ)で、珪素(Ｓｉ)・カルシウム(Ｃａ)・硫黄(Ｓ)を含有する。

C．刀　子(506)

鉄製で刀子の中茎(広茎か)の可能性がある。直径0.4～0.5cmの目釘孔がある。裏面は腐食し膨らんでい

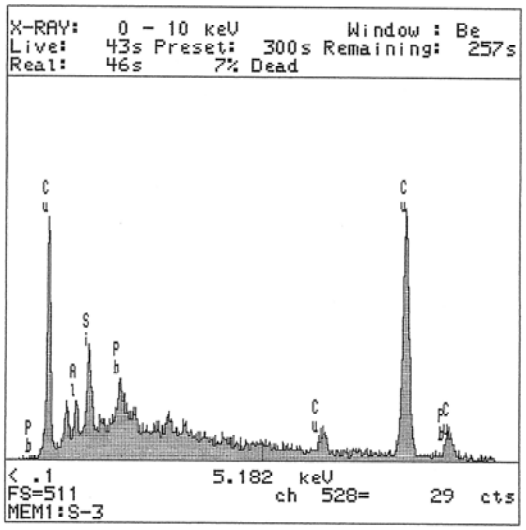
る。主成分元素は鉄(Ｆｅ)で、珪素(Ｓｉ)・硫黄(S)・リン(P)・マンガン(Mn)を含有する。

D．鎌(507)

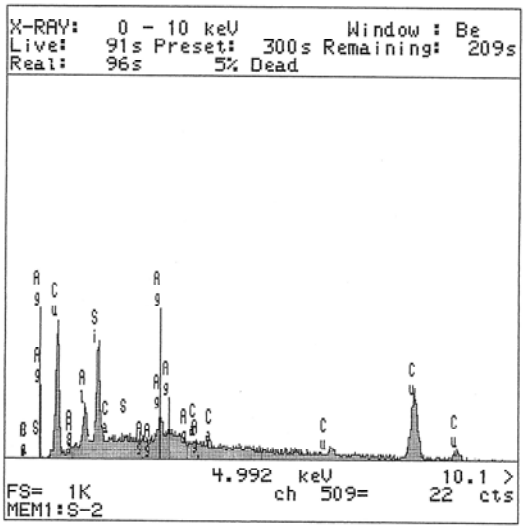
Ⅷ層で検出されたSK97から出土した鉄製の直刃の鎌である。残存する長さ14.6cm、幅3.6cm、厚さ0.5cmである。主成分元素は鉄(Ｆｅ)で、珪素(Ｓｉ)・硫黄(S)・リン(P)を含有する。

E．鉄　滓(図版123ｂ～ｈ)

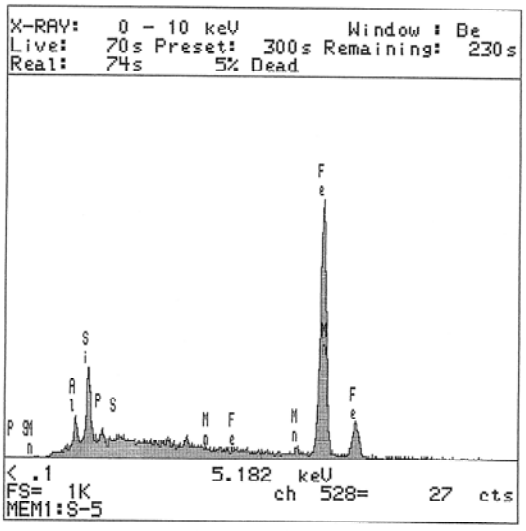
鉄滓は、火化遺構と推定されるSX126から78.5ｇ、SD332から9.1ｇ、X層から29.9ｇ出土している。図版123ｂ～ｈはSX126出土分である。磁石に引き付けられるが、メタル検知器には反応しないことから、精錬・鍛冶過程で出来る含鉄鉄滓と考えられる。しかし、現段階では、出土量がわずかなことから実際に鍛冶遺構があったとは断定できない。



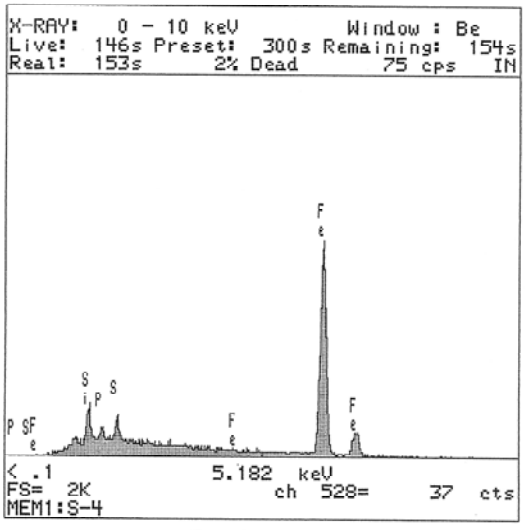
①銅錏(504)



②銅金具 (505)



③刀子 (506)



④鎌 (507)

第18図　金属製品主成分元素

6．石製品(図版64)

本遺跡では礫および石製品の出土量は少ない。図化していないがSX126出土の使用痕のある軽石(図版123a)が1点出土している。

A．小　礫(508～520)

直径２cm程度の偏平な自然石で搬入礫である。508～519は黒色で520のみ白色の石である。508はSK70、509はSD211、510はSK262、513～517はSK403から散発的に出土している。洪水によって運ばれたとみられる礫が多い中で、特異な存在である。意識的に黒色・白色の石を選択していたとみられ、用途は碁石または双六子(駒)が考えられる。使用痕は認められない。山三賀Ⅱ遺跡[坂井1989]のSI1304(８世紀第４四半期～９世紀第１四半期)で未調整の小礫が８個一括して出土したと報告されている。用途不明となっているが、これらも碁石あるいは双六子として使用された可能性が高い。

B．石　錘(521)

安山岩製の石錘である。中央部のみの残存である。棒状の礫の中央部に横位の溝、それに直交するように縦方向の溝が付けられているが、下方向の溝は明瞭でない。このような石製品については、藤巻正信氏の精力的な資料集成・研究[藤巻1998]があり、それによると用途は魚網錘でなく、天秤釣りに使用する錘具の可能性が指摘されている。緒立遺跡で２点、的場遺跡で８点出土している。

C．砥　石(522～527)

522は直方体を呈し、５面の作業面を持つ。切断面にもわずかに線状痕が見える。石材は凝灰岩である。仕上用の砥石か。523は砂岩製の直方体の砥石である。裏面は切断されている。524は凝灰岩の砥石である。直方体で長さ20.1cm、幅8.9cm、厚さ3.9cm、重さ868gと大型である。破損後に一部被熱している。525は凝灰岩製の砥石である。カマボコ状を呈する自然石を使用している。刃部を研いだ8.9cmのＶ字状の溝が付いている。526は砂岩の自然石を使用した砥石である。527は安山岩製の砥石である。自然石を使用し不定形である。

D．台　石(528)

528は表面と裏面に摩耗痕がある。表面に線状痕がわずかに見られる。この石の上で何らかの作業を行ったものと考えられる。底部の摩耗痕は、固定した時の接地面との摩擦によるものと考えられる。

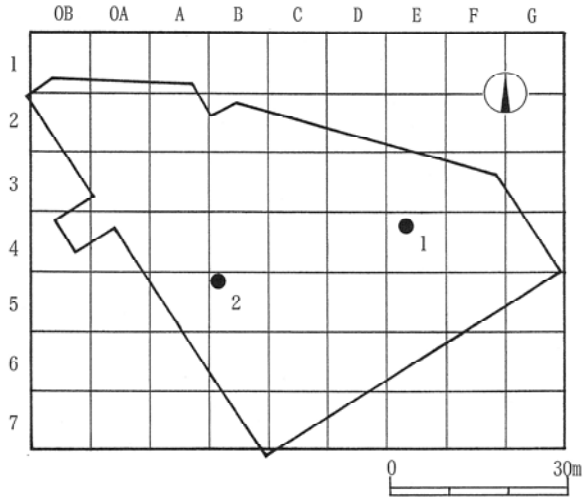
第VI章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

釈迦堂遺跡は、新潟平野のほぼ中央部、沖積地の潟湖に面した自然堤防上に位置する。今回の発掘調査区は、平安時代(９世紀初頭～終末)を中心とする集落の西端にあたり、土坑・杭列・畑跡と推定される溝状遺構・火葬灰埋納土坑などが検出されている。また、さらにその西側には、湿地が広がっていたと想定されている。今回の自然科学分析では、遺跡の立地環境、遺跡周辺の古植生、栽培や植物利用について検討するために、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体同定・材同定をそれぞれ実施する。

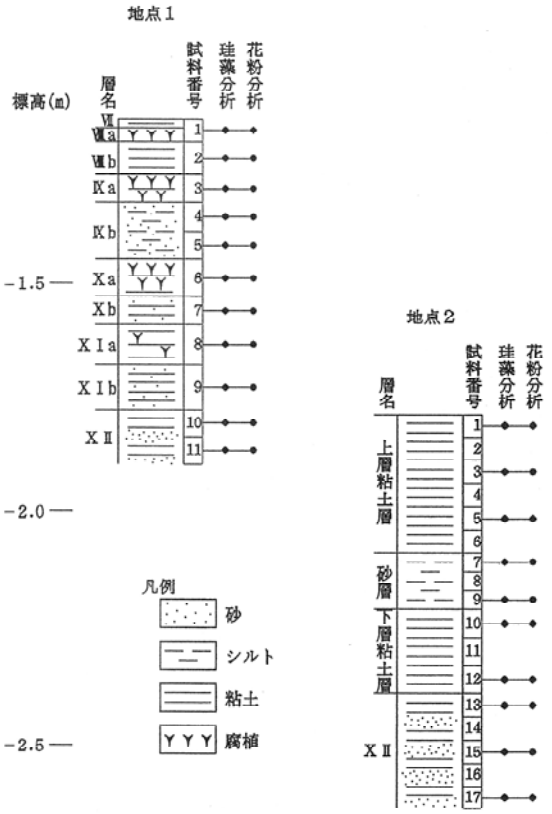
一方、本遺跡からは「火葬灰埋納土坑」と呼ばれる遺構が検出されている。遺構内は灰と焼骨片で充填されていることから、遺体を荼毘に付したあと、主な骨は蔵骨器等にいれ、残った木灰と骨片を納めたものと考えられている。また、「火化遺構」と見られる遺構が検出されている。覆土は３層に分かれるが、それぞれ遺物や炭化物、骨片の産状に差があるようである。今回は、各層位ごとの違いに着目して、リン・カルシウム分析を実施することにより、その構造や埋積過程に関する情報を得る。



第19図　基本層序サンプリング地点（編者作成）

2．試　料

発掘調査区内の自然堤防上と調査区西側の層序は、大きく12層に分層されている。最下部のXII層は、青灰色を呈する砂と粘土の互層で、西側に向かい傾斜する。自然堤防上では、砂を含む粘質土と腐植を含む粘質土が交互に堆積する(XI層～VII層)。調査区西側では、XII層の上位に下層粘土層・砂層・上層粘土層が堆積する。自然堤防にあたる場所に地点１を設定して土壌試料11点、調査区西側の湿地にあたる場所に地点２を設定して土壌試料17点が採取された(第19･20図)。また、調査区東側で検出される溝状遺構の埋積物土壌試料10点、比較試料として溝状遺構の脇から土壌試料１点(試料名：比較試料１)が採取された。



第20図　地点1･2の模式柱状図および分析層位

樹種同定を行う試料は、出土した自然木などの生木５点、火葬灰埋納土坑などから出土した炭化材60点である。炭化材は一括採取されたものが多く、複数の炭化材片が見られる。複数の炭化材片が見られた試料については、無作為に５～10点を抽出した。また、種実遺体の同定を行う試料は、平安時代の遺構等から検出された10点である。各試料とも１～数個の種実遺体が入っている。なお、材同定および種実遺体同定を行う試料の詳細については、各分析項目の結果とともに表示する。一方、火化遺構の埋積土は、上から１～３層に分層されている。１層は、木灰・焼土を含み、骨片が少量出土し、土師器･須恵器・鉄滓・銅鋌などの遺物を含む。２層は炭化物を少量含むが、遺物などはみられない。３層は１層と類似し、木灰焼土を含み、骨片が少量出土し、土師器・須恵器などの遺物も含む。試料は、１層直上層、１層～３層(ただし３層は上部・下部と２点採取)、３層直下層から合計６点採取された。また、これらとは別に、遺構の脇から採取された対照試料１点(試料名：比較試料２)である。試料の詳細は、結果とともに表記する。

3．分析方法

A．珪藻分析

試料を湿重で７g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、200個体以上同定・計数する。種の同定は、K. Krammer(1992)、K. Krammer & H. Lange-Bertalot(1986, 1988,

1991a, 1991b)、E. Reichardt (1995)、H. Lange-Bertalot & D. Metzeltin (1996)、H. LangeBertalotetal. (1996)、D. Metzeltin & A. Witkowski (1996) などを用いる。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種については、その内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率３％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が、現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、K. Asai & T. Watanabe (1995) の環境指標種を参考とする。

B．花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離(臭化亜鉛，比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸：濃硫酸＝９：１)の順に物理・化学的な処理を施して、花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は、同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした、百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン(－)で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

C．植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W，250KHz，１分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)、および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表として示す。

D．樹種同定

生材は、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

E．種実遺体同定

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

F．リン・カルシウム分析

分析については、土壌標準分析・測定法委員会(1986)などを参考に、過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法でリン酸を測定した。試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩に通す(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を、加熱減量法(105℃、５時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸10mlを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン含量をリン酸(P_2O_5)濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸濃度を測定する。一方、カルシウム分析は、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に、原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量(P_2O_5mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

4．結　果

A．珪藻分析

結果を第１～７表、第21･22図に示す。珪藻化石は、いずれの試料も100個体以上産出する。以下、珪藻化石群集の特徴を地点ごとに述べる。

＜地点１＞

完形殻の出現率は40～70%であり、産出分類群数は42属44種である。珪藻化石群集は、産出種の生態的特徴から、試料番号11、試料番号10～４、試料番号３、試料番号２・１の４つに区分される。以下に、各珪藻化石群集の特徴を下位から述べる。

試料番号11は、陸生珪藻が約60%を占めることが特徴である。中でも陸生珪藻Ａ群(伊藤･堀内, 1991)の*Amphora montana*が、約50%と優占している。陸生珪藻とは、多少の湿り気のある乾いた環境に生育する種であり、中でも乾燥に耐性のある種がＡ群とされている。

試料番号10～４は、貧塩不定性種が70～85%、真＋好アルカリ性種が45～60%、流水不定性種が35～75%を占める。特に優占する種がなく、様々な種が低率で産出する。

試料番号３は、陸生珪藻が約60%を占める。中でも陸生珪藻Ａ群とされている*Hantzschia amphioxys*が約30%、*Amphora montana*が約15%、*Navicula mutica*が約10%と多産する。

試料番号２・１は、貧塩不定性種が60～80%、真＋好アルカリ性種が50%、流水不定性種が45～50%を占める。また、試料番号１で陸生珪藻Ｂ群(伊藤･堀内, 1991)で沼沢湿地付着性種(安藤, 1990)の*Eunotia praerupta* var. *bidens*、陸生珪藻Ａ群の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*がそれぞれ約10%前後と、比較的多く産出する。しかし、優占種がなく、様々な種が低率で産出する。陸生珪藻Ｂ群とは、湿った環境にも水中にも生育する種である。沼沢湿地付着生種とは、沼よりも浅く水深が１m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢や、さらに水深の浅い湿地に生育する種である。

＜地点２＞

完形殻の出現率は50～70%であり、産出分類群数は38属67種である。珪藻化石群集は、産出種の生態的特徴から試料番号17～９、試料番号７、試料番号５、試料番号３・１の４つに区分される。以下に、各珪藻化石群集の特徴を下位から述べる。

試料番号17～９は、貧塩不定性種が65～80%、真＋好アルカリ性種が60～70%、流水不定性種が40～60%を占める。優占種がなく、様々な種が低率で産出する。

試料番号７は、陸生珪藻が全体の15～30%を占める。中でも陸生珪藻Ａ群とされている*Navicula mutica*が、10～15%と多産する。

試料番号５は、貧塩不定性種が約70%、真＋好アルカリ性種が約60%、流水不定性種が約50%を占める。優占種がなく、様々な種が低率で産出する。

試料番号３・１は、陸生珪藻が全体の20～40%を占める。中でも陸生珪藻Ｂ群で沼沢湿地付着性種の*Eunotia praerupta* var. *bidens* が、10～20%と多産する。

Ｂ．花粉分析

結果を第８～10表、第23図に示す。以下、地点１、地点２、遺構埋積物および比較試料ごとに、結果を述べる。

＜地点１＞

試料番号11を除く試料では花粉化石の保存状態が悪く、また計数していないが二次堆積した化石も含まれる。また、概して花粉化石の検出個体数が少なく、シダ類胞子が多産する傾向にある。検出される種類は、木本花粉17種類、草本花粉11種類、シダ類胞子２種類の合計30種類である。試料番号11では、他の試料に比べ、保存状態が良好なものが多い。特に、カヤツリグサ科が多産する。

＜地点２＞

各試料とも化石の保存状態が悪く、二次堆積した化石も含まれる。また、各試料ともシダ類胞子が多産する傾向にあり、試料番号７・９・10の３試料で花粉化石の検出個体数が極めて少ない。主な木本花粉の出現傾向は、マツ属・ハンノキ属・ブナが比較的多く検出され、この他にモミ属・ツガ属・スギ属・ヤナギ属・サワグルミ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属・モチノキ属などを伴う。

一方、草本花粉では、ガマ属・ミクリ属・サジオモダカ属・イネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ヨモギ属などが検出される。なお、試料番号15・12では、カヤツリグサ科が比較的多く検出される傾向にある。

＜遺構埋積物＞

SD273の２層を除く各試料では花粉化石の保存状態が悪く、また二次堆積した化石も含まれる。また、概して花粉化石の検出個体数が少なく、シダ類胞子が多産する傾向にある。検出される種類は、木本花粉16種類、草本花粉13種類、シダ類胞子２種類の合計31種類である。SD273の２層では、他の試料に比べ保存状態が良好なものが多く、イネ科が多産する。なお、栽培植物に由来する種類は、検出されない。

第１表　地点１の珪藻分析結果(1)

種類	生態性			環境指標種											
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
Actinocyclus ingens Rattray	Euh				−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−
Coscinodiscus spp.	Euh				−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	−	−	−	1	2	−	1	−	−	−	−
Rhizosolenia hebetata (Bail.)Gran	Euh				−	−	−	1	−	−	−	−	1	−	−
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A, B	−	1	1	4	2	−	1	−	1	−	−
Thalassionema nitzschioides var. parva Heiden and Kolbe	Euh				−	−	−	2	5	−	−	−	−	1	−
Thalassiosira spp.	Euh				−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
Cyclotella striata−C. stylorum	Euh−Meh			B	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Navicula peregrina (Ehr.)Kuetzing	Meh				−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh−Meh	al−il	l−ph	U	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	1
Gomphonema pseudoaugur Lange−Bertalot	Ogh−Meh	al−il	ind	S	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
Navicula pusilla W. Smith	Ogh−Meh	ind	ind		1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Navicula veneta Kuetzing	Ogh−Meh	al−il	ind	U	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	3
Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow	Ogh−Meh	al−il	ind	S	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Nitzschia palea (Kuetz.)W. Smith	Ogh−Meh	ind	ind	S	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O. Muller	Ogh−Meh	al−il	ind		4	3	2	−	4	2	6	10	11	5	9
Achnanthes clevei Grunow	Ogh−ind	al−il	l−ph	T	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh−ind	al−bi	l−ph	T	−	1	−	2	−	−	−	−	−	−	−
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh−ind	al−il	r−ph	T	1	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh−ind	ind	r−ph	K, T	−	−	1	5	2	3	−	1	2	1	1
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh−ind	al−il	ind	U	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−
Achnanthes oestrupii (Cl.)Hustedt	Ogh−hob	ac−il	l−ph		−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh−ind	ind	r−ph	T	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Achnanthes spp.	Ogh−unk	unk	unk		−	−	−	−	1	−	−	−	1	2	1
Amphora affinis Kuetzing	Ogh−ind	al−il	ind	U	2	1	−	1	−	−	−	−	−	−	1
Amphora montana Krasske	Ogh−ind	ind	ind	RA	3	−	13	1	−	−	3	11	8	9	65
Amphora pediculus (Kuetz.)Grunow	Ogh−ind	al−bi	ind	T	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh−ind	al−il	l−bi	M, U	3	2	1	1	1	2	−	1	−	−	1
Aulacoseira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh−ind	al−il	l−ph	U	1	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−
Aulacoseira spp.	Ogh−unk	unk	unk		−	1	1	−	2	2	1	−	−	2	−
Caloneis leptosoma Krammer & Lange−Bertalot	Ogh−ind	ind	l−ph	RB	1	−	−	2	1	−	−	2	2	−	−
Caloneis silicula var. intermedia Mayer	Ogh−ind	al−il	ind		−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
Ceratoneis arcus Kuetzing	Ogh−hob	ind	r−bi	K, T	−	1	−	−	1	−	−	−	−	1	−
Ceratoneis arcus var. recta (Cl.)Krasske	Ogh−ind	ind	r−bi	T	1	1	−	4	−	−	−	−	1	−	−
Cocconeis disculus Schumann	Ogh−ind	al−il	l−bi		−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh−ind	al−il	ind	U	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh−ind	al−il	r−ph	T	−	1	−	3	−	1	−	−	1	−	−
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh−ind	al−il	r−ph	T	3	1	3	2	3	4	1	−	2	−	1
Cocconeis spp.	Ogh−unk	unk	unk		1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Craticula cuspidata (Kuetz.)D. G. Mann	Ogh−ind	al−il	ind	S	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Cymbella cistula (Ehr.)Kirchner	Ogh−ind	al−il	l−ph	O, T	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−	−
Cymbella gracilis (Ehr.)Kuetzing	Ogh−ind	ind	l−ph	T	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−
Cymbella lata Grunow	Ogh−unk	unk	unk	T	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh−ind	al−bi	l−bi	O	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh−ind	ind	r−ph	K, T	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh−ind	ind	ind	T	−	3	3	6	1	4	1	4	7	8	2
Cymbella sinuata Gregory	Ogh−ind	ind	r−ph	K, T	1	6	2	7	3	4	4	1	7	7	5
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V. Heurck	Ogh−ind	al−il	ind	T	1	5	−	2	−	2	3	−	−	−	−
Cymbella turgidula Grunow	Ogh−ind	al−il	r−ph	K, T	2	5	1	−	3	−	1	−	1	3	1
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh−ind	al−il	r−ph	T	1	3	1	5	3	3	1	2	−	1	−
Cymbella spp.	Ogh−unk	unk	unk		1	1	−	1	1	1	−	−	−	−	−
Denticula spp.	Ogh−unk	unk	unk		−	1	−	−	2	−	−	−	−	−	−
Diatoma hyemale var. mesodon (Ehr.)Kirchener	Ogh−ind	al−il	r−bi	K, T	−	−	−	−	1	1	2	−	2	3	−
Diatomella balfouriana (W. Smith)Grevil	Ogh−ind	ind	ind	RA	−	−	−	1	2	−	−	−	−	−	−
Diploneis elliptica (Kuetz.)Cleve	Ogh−ind	al−il	l−ph	RA, T	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Diploneis parma Cleve	Ogh−ind	ind	ind		−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh−ind	al−bi	ind		−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−
Epithemia sorex Kuetzing	Ogh−ind	al−bi	ind	T	−	−	−	−	−	−	1	1	−	1	−
Epithemia turgida (Ehr.)Kuetzing	Ogh−ind	al−il	l−ph	T	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Epithemia spp.	Ogh−unk	unk	unk		−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh−hob	ac−il	l−ph		−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−
Eunotia biseriatoides H. Kobayasi	Ogh−ind	ind	ind	RA	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Eunotia monodon var. undulata Hustedt	Ogh−hob	ac−il	ind		−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Eunotia pectinalis (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh−hob	ac−il	ind	O, T	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh−hob	ac−il	ind	O	1	−	1	−	1	2	−	−	1	2	−
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh−hob	ac−il	l−ph	RB, O, T	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh−hob	ac−il	l−ph	RB, O	10	−	1	−	−	−	−	1	−	−	−
Eunotia praerupta var. inflata Grunow	Ogh−hob	ac−il	l−ph	RI	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Eunotia subarcuatoides Noerpel & Lange−Bertalot	Ogh−hob	ac−il	ind		−	−	−	1	−	−	1	−	−	1	−
Eunotia spp.	Ogh−unk	unk	unk		4	−	−	1	1	−	−	−	−	3	−
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh−ind	al−il	ind	T	2	−	−	1	1	−	1	−	−	2	−
Fragilaria capucina var. radians (Kuetz.)Lange−Bertalot	Ogh−ind	al−il	ind		−	1	−	1	1	−	−	1	−	1	−
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh−ind	al−il	l−ph	U	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh−ind	al−il	l−ph	S	−	1	−	1	1	−	1	−	−	1	−

第２表　地点１の珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境指標種											
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
Fragilaria construens var. triundulata Reichelt	Ogh−ind	al−il	l−ph		−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Fragilaria leptostauron (Ehr.)Hustedt	Ogh−ind	al−il	l−ph		−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh−ind	al−il	l−ph	S	−	−	−	−	−	−	−	2	1	1	−
Fragilaria pinnata var. lancettula (Schum.)Hustedt	Ogh−ind	al−il	ind	S	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange−Bertalot	Ogh−ind	al−il	ind		3	5	1	1	3	2	1	−	2	−	2
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh−ind	al−il	r−ph	K,T	1	−	1	5	3	1	1	1	1	2	−
Fragilaria virescens Ralfs	Ogh−ind	ac−il	l−ph	U	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh−ind	al−il	ind	U	−	−	−	−	2	−	1	−	−	1	1
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh−ind	ind	l−ph	O	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh−ind	al−il	ind	U	−	−	−	−	2	4	4	1	1	−	−
Gomphonema angustum Agardh	Ogh−ind	al−il	ind		−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
Gomphonema christensenii Lowe et Kociolek	Ogh−unk	unk	r−ph	T	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−
Gomphonema clevei Fricke	Ogh−ind	al−bi	r−ph	T	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh−ind	al−il	l−ph	O,U	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−
Gomphonema helveticum Brun	Ogh−unk	ind	r−ph	T	1	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−
Gomphonema olivaceum (Lyngb.)Kuetzing	Ogh−ind	al−il	ind	U	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh−ind	ind	ind	U	1	1	1	2	4	7	7	15	4	3	3
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange−Bertalot	Ogh−ind	al−il	ind		2	2	3	4	3	3	−	3	4	3	−
Gomphonema quadripunctatum (Oestrup.)Wislouch	Ogh−ind	al−bi	r−ph	K,T	2	1	1	−	1	1	1	−	1	1	−
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh−ind	ind	r−bi	J	2	8	3	7	4	4	−	2	3	2	1
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh−ind	ind	l−ph	T	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
Gomphonema spp.	Ogh−unk	unk	unk		3	2	1	3	3	4	1	−	2	3	1
Gyrosigma spencerii (W.Smith)Cleve	Ogh−ind	al−il	l−ph	U	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh−ind	al−il	ind	RA,U	13	2	33	2	8	10	5	10	6	5	4
Martyana martyi (Heribaud)Round	Ogh−ind	al−il	ind		−	2	−	−	−		−	−	−	−	−
Melosira longispina Hustedt	Ogh−ind	ind	l−bi		−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh−ind	al−il	r−bi	K,T	−	−	−	1	−	1	1	−	−	−	−
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh−ind	al−bi	ind	RB,S	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Navicula constans Hustedt	Ogh−unk	unk	unk		−	1	−	−	−	−	4	−	−	−	−
Navicula contenta Grunow	Ogh−ind	al−il	ind	RA,T	−	1	−	−	−	3	−	2	2	1	−
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh−ind	al−il	ind	U	−	−	−	−	−	−	1	5	5	1	6
Navicula cryptotenella Lange−Bertalot	Ogh−ind	ind	ind	T	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh−ind	al−il	ind	O,U	−	−	−	−	−	3	2	1	−	−	−
Navicula gallica var. perpusilla (Grun.)Lange−Bertalot	Ogh−ind	ind	ind	RI	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Navicula kotschyi Grunow	Ogh−ind	al−il	ind		−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Navicula mobiliensis var. minor Patrick	Ogh−ind	al−il	ind		1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
Navicula mutica Kuetzing	Ogh−ind	al−il	ind	RA,S	12	6	10	1	9	6	24	17	−	10	1
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.)Cleve	Ogh−ind	al−il	ind	RI	−	−	1	−	−	−	−	−	11	−	−
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh−ind	ind	ind		1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh−ind	ind	ind	U	−	−	−	1	1	−	1	−	1	−	−
Navicula seminulum Grunow	Ogh−ind	ind	ind	RB,S	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−
Navicula tokyoensis H.Kobayasi	Ogh−ind	ind	l−ph	RI	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh−ind	al−il	r−ph	K,U	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Navicula spp.	Ogh−unk	unk	unk		2	2	1	2	1	−	2	3	2	4	−
Neidium affine (Ehr.)Cleve	Ogh−hob	ind	l−bi		−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Neidium alpinum Hustedt	Ogh−unk	unk	ind	RA	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Ogh−ind	ac−il	ind	RI	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh−ind	al−bi	ind	S	−	−	1	−	−	−	−	1	1	1	−
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh−ind	al−il	ind	RB,U	−	−	−	1	−	1	1	−	4	−	1
Nitzschia debilis (Arnott)Grunow	Ogh−ind	al−il	ind	RB,U	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Nitzschia terrestris (Pet.)Hustedt	Ogh−ind	ind	ind	RI	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Nitzschia spp.	Ogh−unk	unk	unk		−	−	−	−	−	1	1	1	1	1	−
Orthoseira roeseana (Rabh.)O'Meara	Ogh−ind	ind	ind	RA	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh−ind	al−il	l−ph	O	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−
Pinnularia appendiculata (Ag.)Cleve	Ogh−hob	ind	ind	RB	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh−ind	ind	ind	RA	−	1	−	−	−	−	−	1	1	−	−
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh−ind	ind	ind	U	1	3	1	1	2	2	−	−	−	2	−
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh−ind	ind	ind	S	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−
Pinnularia obscura Krasske	Ogh−ind	ind	ind	RA	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh−hob	ac−il	ind		1	−	1	1	−	−	4	−	2	−	1
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh−ind	ind	ind	RI	5	5	5	2	1	3	10	9	6	2	3
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh−ind	ind	ind	RI	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh−ind	ac−il	ind	RB,S	1	1	1	−	1	1	−	2	−	−	−
Pinnularia subcapitata var. paucistriata (Grun.)Cleve	Ogh−ind	ac−il	l−ph	O,U	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh−ind	ind	ind	O	−	−	−	2	−	−	−	1	1	−	−
Pinnularia spp.	Ogh−unk	unk	unk		2	3	1	−	1	3	1	1	3	1	1
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange−B.	Ogh−hil	al−il	r−ph	K,T	4	−	−	1	2	2	−	−	1	−	2
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh−ind	al−il	ind		−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Rhopalodia gibba var. ventricosa (Kuetz.)H.&M.Peray	Ogh−ind	al−il	ind		−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh−hil	al−il	ind		−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Sellaphora americana (Ehr.)Mann	Ogh−ind	al−il	l−ph		−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−
Sellaphora bacillum (Ehr.)Mann	Ogh−ind	al−il	ind	U	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh−ind	ind	ind		−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh−ind	ind	ind	S	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

第３表　地点１の珪藻分析結果(3)

種類	生態性			環境指標種											
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
Stauroneis anceps fo. linearis (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	T	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Stauroneis phoenicenteron var. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Stauroneis prominula Hustedt	Ogh-ind	ind	unk		－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
Stephanodiscus spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	－	－	－	1	－	1	4	－	－	1	1
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	－	1	－	1	2	－	1	1	－	－
Surirella spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	－	1	1	1	－	－	－	－	－
Synedra rostrata Pantocsek	Ogh-ind	al-il	r-ph		－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	1	－	－	－	1	－	－	－	－	1	－
海水生種合計					0	1	1	10	12	0	2	0	2	1	0
海水－汽水生種合計					0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水－汽水生種合計					5	4	4	0	5	2	6	10	12	7	14
淡水生種合計					109	98	99	100	95	103	105	110	113	105	112
珪藻化石総数					114	104	104	111	112	105	113	120	127	113	126

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
Euh:海水生種
Euh－Meh:海水生種－汽水生種
Meh:汽水生種
Ogh－Meh:淡水生種－汽水生種
Ogh－ind:貧塩不定性種
Ogh－hob:貧塩嫌塩性種
Ogh－unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
al－bi:真アルカリ性種
al－il:好アルカリ性種
ind:pH不定性種
ac－il:好酸性種
unk:pH不明種

C.R.:流水に対する適応性
l－bi:真止水性種
l－ph:好止水性種
ind:流水不定性種
r－ph:好流水性種
r－bi:真流水性種
unk:流水不明種

環境指標種

A:外洋指標種B:内湾指標種（以上は小杉，1988）
J:上流性河川指標種　K:中～下流性河川指標種　L:最下流性河川指標種　M:湖沼浮遊性種　O:沼沢湿地付着生種　P:高層湿原指標種（以上は安藤，1990）
S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種（以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995）
R:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群,RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内，1991）

第４表　地点２の珪藻分析結果(1)

種類	生態性			環境指標種										
	塩分	pH	流水		1	3	5	7	9	10	12	13	15	17
Nitzschia marginulata var. subconstricta Grunow	Euh				－	－	2	－	－	2	2	－	－	－
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A,B	－	－	1	1	1	1	1	2	－	1
Thalassionema nitzschioides var. parva Heiden and Kolbe	Euh				－	－	1	－	－	1	－	1	－	－
Navicula peregrina (Ehr.)Kuetzing	Meh				1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Nitzschia granulata Grunow	Meh			E1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－
Nitzschia levidensis var. salinarum Grunow	Meh				－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
Nitzschia lorenziana Grunow	Meh			E2	－	1	－	－	－	－	－	－	2	－
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind		－	－	－	－	1	－	－	－	－	1
Bacillaria paradoxa Gmelin	Ogh-Meh	al-bi	l-ph	U	－	－	－	－	－	－	3	－	－	2
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
Navicula integra (W.Smith)Ralfs	Ogh-Meh	al-il	unk		－	2	－	－	－	－	－	－	2	－
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		18	12	13	5	16	8	22	10	26	14
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	4	5	－	－	－	－	－	－	－	－
Achnanthes japonica H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,T	－	－	1	－	1	－	－	－	2	－
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	－	1	3	－	－	2	2	2	4	3
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	T	－	－	－	－	1	1	－	－	1	－
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	1	－	－	－	1	－	1	1
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	2	1	－	1	3	10	1	1	－
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－
Amphora pediculus (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	－	－	1	－	－	1	－	1	2	－
Anomoeoneis brachysira (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,T	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－
Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	1	2	－	－	－	－	1	－	－	－
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	－	－	2	－	1	－	1	1	－	1
Aulacoseira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
Aulacoseira italica var. valida (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph		－	－	2	－	1	1	－	1	－	－
Aulacoseira spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	2	3	－	2	－	1	－	2	2
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		－	1	－	－	－	1	2	1	－	1
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		－	－	－	－	－	－	2	－	－	－

第５表　地点２の珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境指標種										
	塩分	pH	流水		1	3	5	7	9	10	12	13	15	17
Ceratoneis arcus Kuetzing	Ogh-hob	ind	r-bi	K,T	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—
Ceratoneis arcus var. recta (Cl.)Krasske	Ogh-ind	ind	r-bi	T	1	—	6	—	—	4	4	3	3	3
Cocconeis neodiminuta Krammer	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	—	1	1	1	—	—	—	1	—
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	2	1	—	—	1	—	1	—	3
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	3	3	4	4	13	6	3	1	6	7
Cocconeis pseudothumensis Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph		—	1	—	—	—	1	—	—	—	—
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	1	—	1	—	—	—	3	—	—	—
Cymbella cistula (Ehr.)Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	—	—	—	—	—	1	1	2	1	1
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	—	—	—	—	1	—	1	—	—	1
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	—	—	1	—	—	—	—	2	1	—
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	5	3	5	1	9	7	4	9	5	9
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	2	—	3	5	9	7	7	7	8	13
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V. Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	4	2	1	1	3	2	2	3	9
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	4	—	1	10	8	1	2	4	8	8
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	—	6	4	5	5	6	5	10	4	12
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	2	—	—	—	—	—	1	2
Denticula spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	2	—	—	1	—	1	—	1
Diatoma hyemale var. mesodon (Ehr.)Kirchener	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	1	—	1	1	2	4	1	—	3	—
Diploneis elliptica (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	RA,T	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		—	—	—	1	—	—	—	—	1	—
Epithemia sorex Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	T	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—
Epithemia turgida (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	3	—	—	—	—	—	—	1	—
Eunotia arcus var. bidens Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	1	—	—	—	—	—	—	—	1
Eunotia flexuosa (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi		8	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	—	1	—	—	—	—	—	1	—
Eunotia monodon var. undulata Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia papilio (Grun.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia pectinalis (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	1	—	—	1	—	—	—	—	1	—
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	4	—	—	—	1	—	—	2	2
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	6	16	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	12	42	4	—	—	—	—	—	—	1
Eunotia praerupta var. inflata Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RI	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia subarcuatoides Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		5	6	3	—	1	—	1	—	—	—
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	3	1	4	—	2	1	—	2	5	4
Fragilaria capucina var. radians (Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	—	—	—	1	—	—	—	4	1
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	—	—	—	—	2	—	—	—	1	—
Fragilaria construens var. triundulata Reichelt	Ogh-ind	al-il	l-ph		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Fragilaria exigua Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	—	—	—	—	—	2	—	—	—	1
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		2	1	9	1	1	2	3	3	3	6
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	2	4	3	6	2	3	3	8	4
Fragilaria virescens Ralfs	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	—	1	4	2	—	1	3	3	2
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	4	—	1	—	1	—	1	—	—	—
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	—	1	1	—	—	1	2	1	—
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	1	—	—	1	—	—	—	—
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Gomphonema christensenii Lowe et Kociolek	Ogh-unk	unk	r-ph	T	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	—	1	1	1	1	—	—	—	—	—
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Gomphonema helveticum Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	—	—	—	2	—	—	1	1	2	—
Gomphonema olivaceum (Lyngb.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	1	3	6	3	4	5	9	6	5
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	3	3	7	2	7	4	7	7	11
Gomphonema quadripunctatum (Oestrup.)Wislouch	Ogh-ind	al-bi	r-ph	K,T	1	—	1	2	—	1	—	1	2	3
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	1	4	6	3	5	4	2	4	2	11
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—

第６表　地点２の珪藻分析結果(3)

種類	生態性			環境指標種										
	塩分	pH	流水		1	3	5	7	9	10	12	13	15	17
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	2	2	1	—	5	2	2	5	3
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		—	—	—	—	—	—	2	—	5	6
Gyrosigma spencerii (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	3	—	5	1	1	4	4	—	—
Martyana martyi (Heribaud)Round	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Mastogloia smithii Thwaites	Ogh-ind	ind	l-bi		—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Melosira longispina Hustedt	Ogh-ind	ind	l-bi		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Meridion circulae Agardh	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	—	—	2	—	1	—	1	4	1	1
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	—	1	—	—	2	—	—	—	—	—
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	1	3	2	1	—	—	1	1	1
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	—	—	1	—	—	1	3	—	—
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	—	—	—	—	—	—	—	—	3	1
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	—	—	2	—	1	—	3	1	—	—
Navicula elginensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
Navicula margalithii Lange-Bertalot	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Navicula mobiliensis var. minor Patrick	Ogh-ind	al-il	ind		—	5	—	1	—	—	2	—	3	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	10	13	14	18	—	3	8	6	1	3
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Navicula placenta fo. obtusa Meister	Ogh-ind	al-il	ind		—	2	—	—	—	—	3	—	—	—
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		—	4	—	—	—	1	—	—	—	—
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	—	—	1	1	1	1	2	2	2	2
Navicula recens Lange-Bertalot	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	—	3	—
Navicula tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	—	—	—	—	—	—	6	—	—	—
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	1	—	—	—	—	2	—	—	—
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	—	1	2	—	4	1	2	—
Neidium affine (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		—	—	—	1	—	—	2	—	—	—
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		1	—	1	1	1	1	—	1	3	—
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	—	—	—	—	—	—	4	3	1	2
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	1	—	—	—	—	1	1	—	—	—
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	—	1	—	6	—	1	5	3	—	1
Nitzschia debilis (Arnott)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
Nitzschia terrestris (Pet.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	—	—	1	1	1	—	—	—	1	—
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	1	—	1	—	—	—	—	—	1
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	2	—	1	—	—	—	1	—	—	—
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia esoxiformis Fusey	Ogh-hob	ac-il	ind		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	3	—	1	1	—	—	1	—	1	—
Pinnularia inconstans Mayer	Ogh-hob	ac-il	ind		—	—	2	—	—	—	—	1	—	—
Pinnularia karelica Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph		—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	—	2	—	—	1	1	2	—	—
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Pinnularia pisciculus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		—	—	—	2	—	1	2	1	—	—
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	2	6	1	1	—	—	3	1	—	2
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	—	1	1	—	1	3	—	—	—
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	—	—	2	3	1	—	—	2	4	1
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	2	—	—	—	3	1	—	2
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind		—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Sellaphora americana (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	2	1	—	—	—	—	—	—	—
Sellaphora bacillum (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	—	—	—	1	—	—	1	—	—	2
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Stauroneis anceps fo. linearis (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	T	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	—	1	1	—	—	1	4	1	—	—
Stauroneis phoenicenteron var. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1	—	—	—	—	—	—	1	—	2
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—

第７表　地点２の珪藻分析結果(4)

種類	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	1	3	5	7	9	10	12	13	15	17
Stephanodiscus spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	—	—	2	—	—	—	1	—	—	—
Surirella linearis W.Smith	Ogh-ind	ind	ind		—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Surirella spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	1	—	—	1	—	1	—	1
Synedra inaequalis H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,K,T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Synedra rostrata Pantocsek	Ogh-ind	al-il	r-ph		—	—	1	2	—	—	—	—	—	—
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	1	—	2	—	—	—	—	—	1	—
海水生種合計					0	0	4	1	2	4	4	3	0	1
海水－汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					1	1	1	0	0	1	0	0	2	0
淡水－汽水生種合計					18	14	13	5	17	8	26	10	29	17
淡水生種合計					127	171	147	117	100	100	158	138	157	173
珪藻化石総数					146	186	165	123	119	113	188	151	188	191

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
Euh:海水生種
Meh:汽水生種
Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種
Ogh-hil:貧塩好塩性種
Ogh-ind:貧塩不定性種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
al-bi:真アルカリ性種
al-il:好アルカリ性種
ind:pH不定性
ac-il:好酸性種
unk:pH不明種
unk :流水不明種

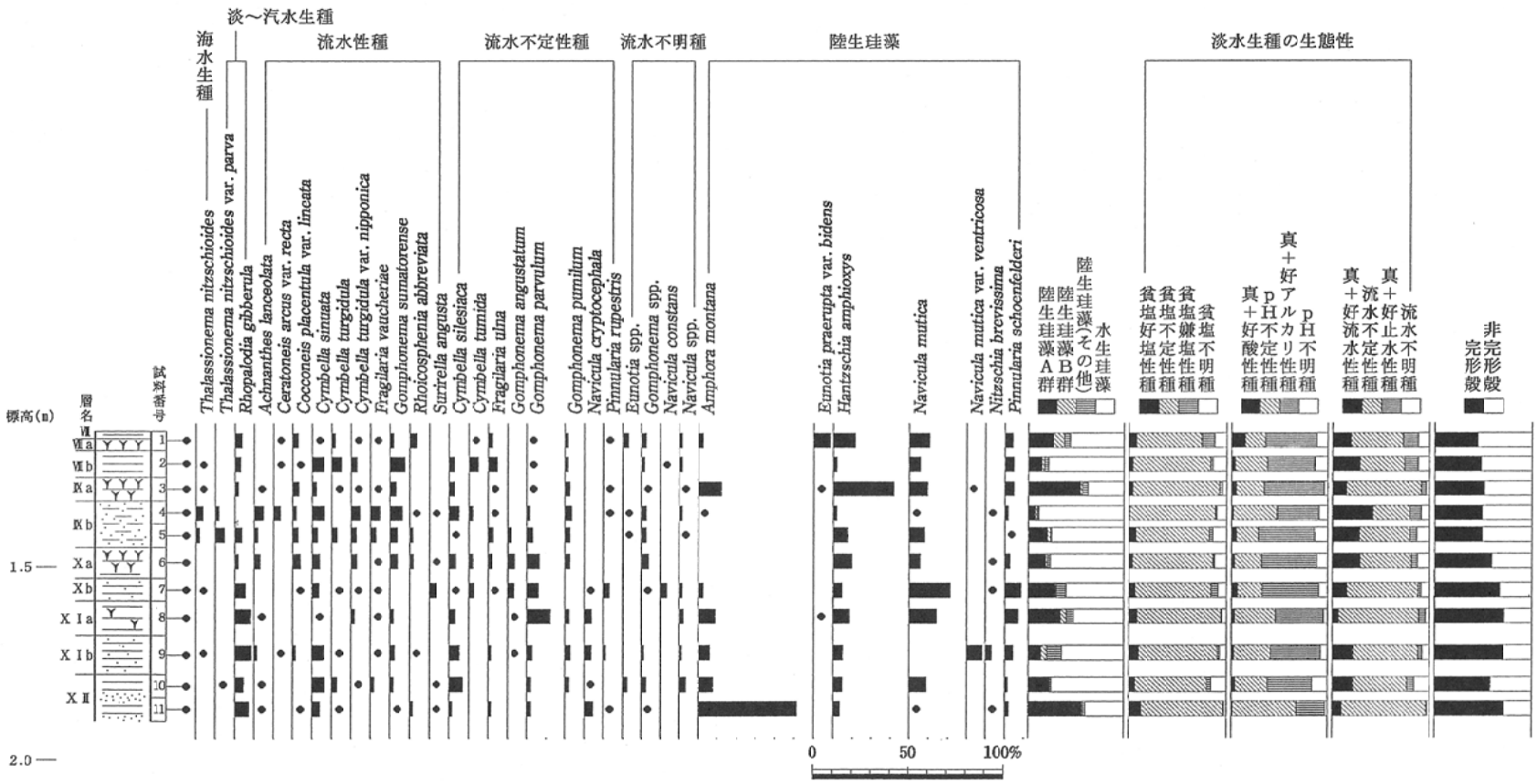
C.R.:流水に対する適応性
l-bi:真止水性種
l-ph:好止水性種
ind :流水不定性種
r-ph:好流水性種
r-bi:真流水性種

環境指標種

A:外洋指標種　B:内湾指標種　El:海水泥質干潟指標種　E2:汽水泥質干潟指標種（以上は小杉，1988）
J:上流性河川指標種　K:中～下流性河川指標種　M:湖沼浮遊性種　N:湖沼沼沢湿地指標種　O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）
S:好汚濁性種U:広適応性種T:好清水性種（以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995）
R:陸生珪藻（RA:A群,RB:B群,RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内，1991）

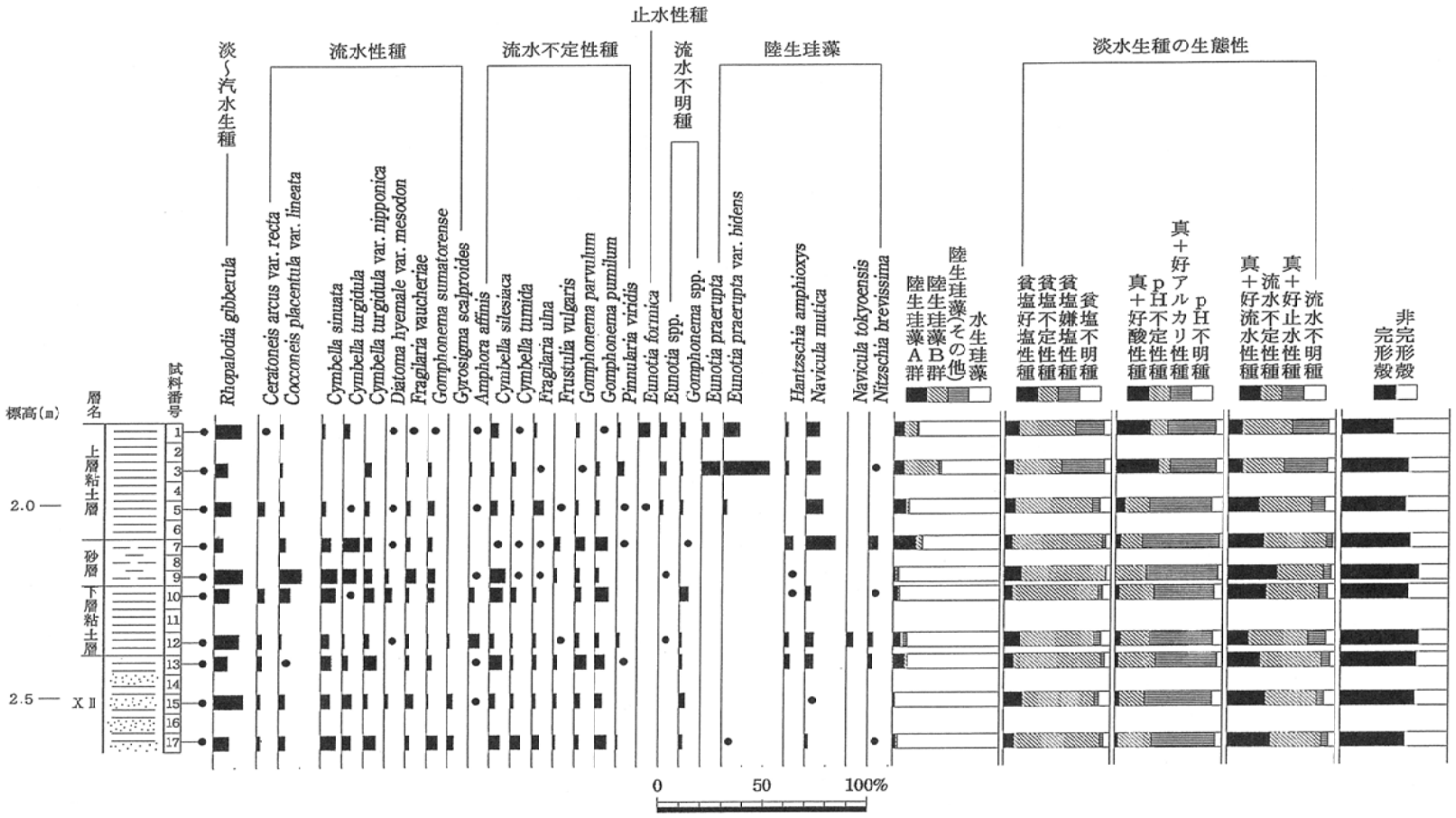
第８表　地点１の花粉分析結果

種類 / 試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
木本花粉											
モミ属	—	—	—	—	—	1	—	1	1	1	1
ツガ属	—	1	—	2	1	2	1	3	2	—	4
トウヒ属	—	—	—	—	—	—	1	1	2	1	—
マツ属	—	—	2	1	3	2	2	5	4	3	5
スギ属	—	—	1	1	—	—	—	3	—	—	—
サワグルミ属	—	—	—	1	—	—	—	2	—	—	—
クルミ属	—	—	—	—	—	—	—	1	1	1	—
クマシデ属－アサダ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1
カバノキ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
ハンノキ属	—	—	1	3	2	—	—	1	3	1	8
ブナ	—	2	2	9	7	1	1	4	6	11	3
コナラ属コナラ亜属	—	—	—	1	—	—	—	1	1	1	1
ニレ属－ケヤキ属	—	—	—	2	1	—	—	3	—	2	—
モチノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
シナノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ウコギ科	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
スイカズラ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
草本花粉											
ガマ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
イネ科	1	—	5	—	1	1	2	7	—	—	1
カヤツリグサ科	—	—	1	1	—	1	—	9	6	3	242
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	—	1	1	1	2	1	3	—	1	—
タデ属	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
ナデシコ科	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
バラ科	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
セリ科	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
マツムシソウ属	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
ヨモギ属	—	—	1	—	—	1	—	1	1	—	1
キク亜科	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—
シダ類胞子											
サンショウモ	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—
他のシダ類胞子	—	23	59	42	73	42	118	219	146	172	239
合　計											
木本花粉	0	3	7	20	15	6	5	25	22	22	26
草本花粉	2	0	8	3	2	6	4	24	7	4	245
シダ類胞子	0	23	59	42	74	42	119	219	146	172	239
総計	2	26	74	65	91	54	128	268	175	198	510



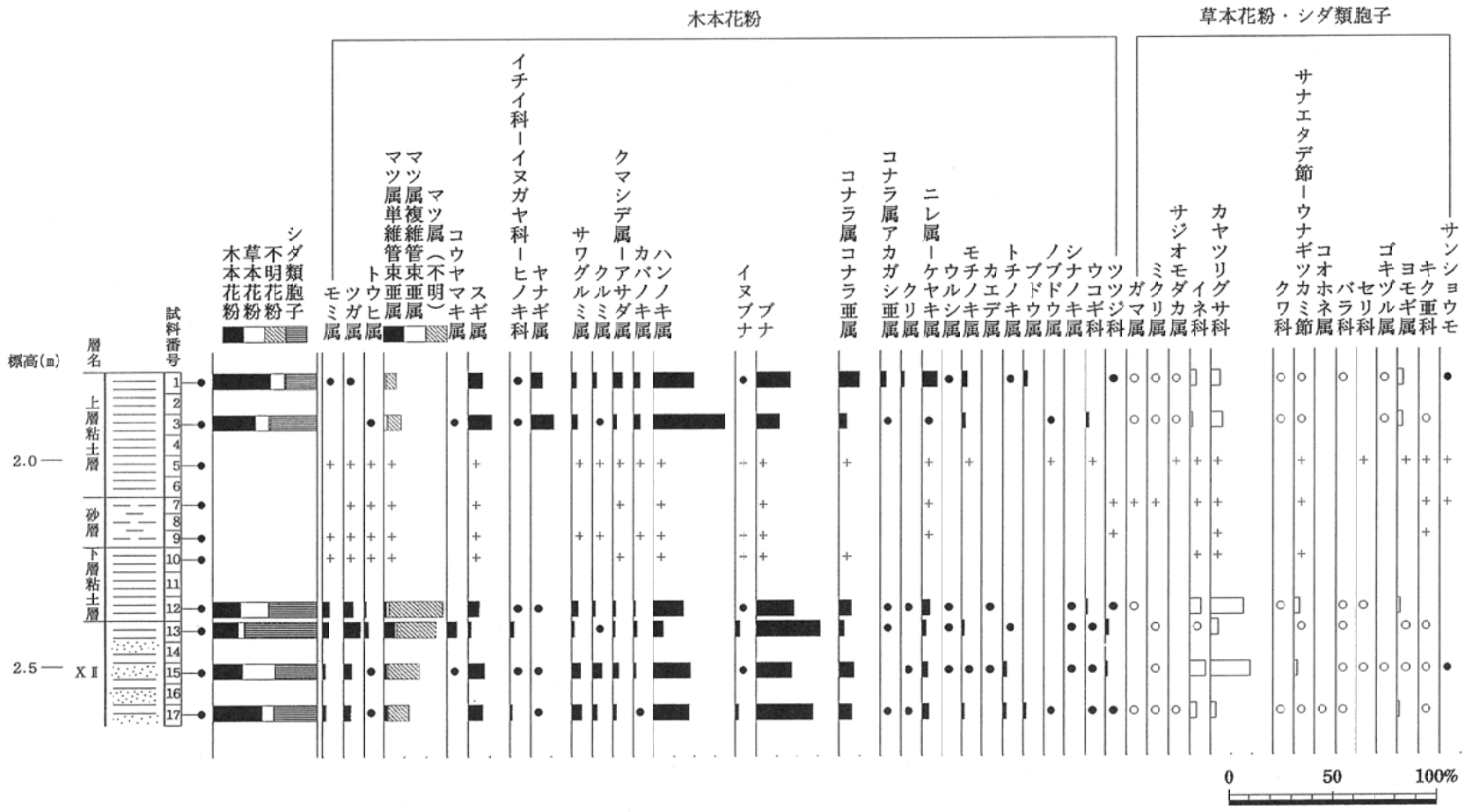
第21図　地点１の主要珪藻化石群集

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満を示す。



第22図　地点２の主要珪藻化石群集

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１%未満を示す。



第23図　地点２の主要花粉化石群集

出現率は、木本花粉化石総数、草本花粉は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第９表　地点２の花粉分析結果

種　類 ／ 試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉										
モミ属	1	－	4	－	5	3	8	7	3	5
ツガ属	2	－	6	9	5	2	11	21	11	12
トウヒ属	－	1	6	2	1	1	3	6	1	3
マツ属単維管束亜属	1	－	1	－	－	－	3	14	4	6
マツ属複維管束亜属	2	2	1	－	－	－	3	2	1	1
マツ属（不明）	10	7	9	29	12	9	58	47	37	31
コウヤマキ属	－	1	－	－	－	－	－	12	1	－
スギ属	15	12	3	4	2	2	12	3	19	22
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	1	－	－	－	－	1	5	2	4
ヤナギ属	12	12	－	－	－	－	1	－	1	1
サワグルミ属	5	3	3	－	1	－	7	3	11	16
クルミ属	4	1	1	－	1	－	3	2	12	7
クマシデ属－アサダ属	11	2	2	2	－	1	3	3	8	5
ハシバミ属	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
カバノキ属	8	4	3	－	2	－	3	5	4	3
ハンノキ属	44	37	18	4	2	2	33	12	46	56
イヌブナ	2	－	4	－	1	1	1	5	1	5
ブナ	37	12	18	5	5	6	42	79	44	87
コナラ属コナラ亜属	22	4	5	－	－	2	13	6	19	20
コナラ属アカガシ亜属	6	1	－	－	－	－	1	1	－	3
クリ属	3	－	－	－	－	－	2	－	1	1
シイノキ属	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ニレ属－ケヤキ属	17	1	6	2	2	－	10	6	8	12
キハダ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
アカメガシワ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
シラキ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ウルシ属	1	－	－	－	－	－	1	2	1	－
モチノキ属	6	2	3	－	－	－	－	3	2	4
カエデ属	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－
トチノキ属	1	－	－	－	－	－	－	2	5	5
ブドウ属	4	－	－	－	－	－	－	－	－	4
ノブドウ属	－	1	1	－	－	－	－	－	－	1
シナノキ属	－	－	－	－	－	－	1	1	1	－
ツバキ属	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－
ウコギ科	－	2	1	－	－	－	3	1	2	1
ツツジ科	2	－	－	1	3	－	2	4	3	1
イボタノキ属	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
トネリコ属	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－
ガマズミ属	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
タニウツギ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
スイカズラ属	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
草本花粉										
ガマ属	1	1	－	1	－	－	1	－	－	1
ミクリ属	1	2	－	2	－	－	－	3	3	6
サジオモダカ属	1	1	5	－	－	－	－	－	－	1
イネ科	12	3	4	4	－	1	45	6	65	22
カヤツリグサ科	18	15	10	12	4	2	131	39	168	18
クワ科	2	1	－	－	－	－	1	－	－	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	3	2	6	4	－	2	22	5	13	4
タデ属	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－
アカザ科	－	－	1	－	－	－	－	－	－	2
コオホネ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
キンポウゲ科	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－
バラ科	2	－	－	－	－	－	1	1	1	3
マメ科	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
フサモ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
セリ科	－	－	1	－	－	－	1	－	4	－
ゴキヅル属	1	2	－	－	－	－	－	－	2	－
コモギ属	10	6	4	－	－	－	11	2	8	7
オナモミ属	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
キク亜科	－	2	1	2	1	－	－	2	1	2
タンポポ亜科	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
不明花粉	3	3	1	－	－	－	4	5	5	4
シダ類胞子										
サンショウモ	3	－	4	1	－	－	－	－	1	－
他のシダ類胞子	117	116	108	315	280	416	380	700	346	273
合　計										
木本花粉	221	106	95	58	42	30	228	253	253	318
草本花粉	51	35	34	25	5	5	216	59	266	69
不明花粉	3	3	1	0	0	0	4	5	5	4
シダ類胞子	120	116	112	316	280	416	380	700	347	273
総計（不明花粉を除く）	392	257	241	399	327	451	824	1012	866	660

第10表　遺構埋積物の花粉分析結果

種類 / 試料名	SD234	SD250	SD365	SD273 1層	SD273 2層	SD281 1層	SD281 2層	SD298	SD299 a	SD299 b	比較試料1
木本花粉											
モミ属	1	−	−	2	−	1	3	1	−	1	1
ツガ属	4	1	1	3	−	−	1	−	−	1	1
トウヒ属	−	−	2	−	−	−	−	−	−	1	1
マツ属	4	2	9	5	1	−	2	4	−	3	−
スギ属	3	1	−	−	6	−	−	−	−	−	−
サワグルミ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
クルミ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
クマシデ属−アサダ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
カバノキ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
ハンノキ属	4	−	1	2	5	1	−	2	−	1	1
イヌブナ	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ブナ	4	1	1	3	1	1	2	3	−	−	1
コナラ属コナラ亜属	1	1	−	1	2	1	1	1	1	−	−
クリ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
ニレ属−ケヤキ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
シナノキ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
草本花粉											
イネ科	5	4	4	10	566	1	−	1	3	1	1
カヤツリグサ科	13	7	1	6	11	11	1	4	1	2	1
ミズアオイ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
クワ科	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	1	3	2	1	1	−	3	1	−	−	1
アカザ科	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
ナデシコ科	−	−	2	−	−	1	−	−	−	−	−
キンポウゲ科	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
アブラナ科	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
セリ科	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
ヨモギ属	1	1	−	2	4	−	−	−	−	−	−
キク亜科	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タンポポ亜科	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
シダ類胞子											
サンショウモ	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	1
他のシダ類胞子	227	156	150	117	15	150	52	126	58	201	64
合計											
木本花粉	23	6	14	16	17	4	9	13	1	10	5
草本花粉	20	16	10	19	585	14	4	6	6	3	3
シダ類胞子	227	156	150	117	15	150	55	126	58	201	65
総計	270	178	174	152	617	168	68	145	65	214	73

第11表　遺構埋積物の植物珪酸体分析結果

種類 / 試料番号	SD234	SD250	SD365	SD273 1層	SD273 2層	SD281 1層	SD281 2層	SD298	SD299 a	SD299 b	比較試料1
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	−	3	−	5	47	2	−	−	1	−	−
ヨシ属	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−
ウシクサ族ススキ属	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
イチゴツナギ亜科	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
不明キビ型	−	3	−	−	−	−	−	1	−	−	−
不明ダンチク型	1	−	1	−	1	−	1	1	−	1	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	−	3	1	2	52	3	1	−	1	−	−
タケ亜科	−	1	1	2	2	−	−	−	−	−	−
ヨシ属	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−
不明	1	2	2	2	3	−	−	1	−	1	1
合計											
イネ科葉部短細胞珪酸体	1	6	1	7	49	3	1	2	1	1	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1	6	5	7	57	3	1	1	1	1	1
総計	2	12	6	14	106	6	2	3	2	2	2
組織片											
イネ属穎珪酸体	−	−	−	1	9	−	−	−	−	−	−
イネ属短細胞列	−	3	−	5	47	2	−	−	−	−	−
不明組織片	−	16	−	−	−	−	−	−	−	−	−

C．植物珪酸体分析

結果を第11表に示す。植物珪酸体は、各試料からわずかに検出される程度であり、また保存状態も悪い。

遺構埋積物のうち、SD250・SD265・SD273・SD281・SD299では、栽培植物のイネ属が検出される。特に、SD273の２層ではその産出が目立ち、稲籾に形成されるイネ属穎珪酸体や、イネ属の葉部に形成される短細胞列も見られる。一方、比較試料１では、判別不能な植物珪酸体がわずかに認められるに過ぎない。

D．樹種同定

結果を第12表に示す。SK123草本片は、組織の観察ができず不明とした。

その他の試料は、針葉樹４種類(マツ属複維管束亜属・ヒノキ・ヒノキ属・イチイ)と広葉樹９種類(ヤナギ属・クマシデ属イヌシデ節・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・サクラ属・カエデ属・エゴノキ属・トネリコ属)に同定される。各種類の主な解剖学的特徴を、以下に記す。

・マツ属複維管束亜属(Pinus subgen. Diploxylon)　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ヒノキ(Chamaecyparis obtusa(Sieb. et Zucc.)Endlcher)　　ヒノキ科ヒノキ属

試料は保存状態が悪い。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ヒノキ属(Chamaecyparis)　　ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１～15細胞高。

上記ヒノキまたはサワラであるが、種類の同定には至らずヒノキ属とした。

・イチイ(Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.)　　イチイ科イチイ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急～緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔組織壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１～２個。放射組織は単列、１～５細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

・ヤナギ属(Salix)　　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または２～３個が複合して年輪全体にほぼ一様に散在するが、年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

・クマシデ属イヌシデ節(Carpinus subgen. Euarpinus)　　カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に２～４個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、１～３細胞幅、１～40細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris)　　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管

は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus)　　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～５列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc.)　　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・サクラ属(Prunus)　　バラ科

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または２～８個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、１～３細胞幅、１～50細胞高。

・カエデ属(Acer)　　カエデ科

試料は保存状態が悪い。散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および２～３個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～30細胞高。木口面で不規則な帯状の紋様が見られる。

第12表　樹種同定結果

遺構名	時代・時期	出土位置	試料の質	試料数	樹種　（　）内の数字は個数
SK100	平安時代		炭化材	10	ヒノキ属 (7)
					クマシデ属イヌシデ節 (1)
					コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (1)
					コナラ属コナラ亜属コナラ節 (1)
SK102	平安時代		炭化材	9	ヤナギ属 (7)
					エゴノキ属 (2)
SK116	平安時代		炭化材	8	ヒノキ属 (3)
					ヤナギ属 (3)
					サクラ属 (2)
SK123	平安時代	５層	炭化材	1	ヤナギ属 (1)
			草本片	1	不明 (1)
SK125	平安時代		炭化材	8	ヒノキ属 (5)
					クリ (3)
SX65	平安時代		炭化材	6	イチイ (2)
					クリ (4)
SX121	平安時代		炭化材	5	ヤナギ属 (5)
SX126	平安時代	３区１層	生木	1	マツ属複維管束亜属 (1)
		２区ベルト３層	生木	1	マツ属複維管束亜属 (1)
		４区ベルト２層粘土	生木	1	ヒノキ (1)
SX131	平安時代		炭化材	7	コナラ属コナラ亜属コナラ節 (4)
					イチイ (1)
					コナラ属コナラ亜属コナラ節 (1)
					クマシデ属イヌシデ節 (1)
5F5 グリッド			生木	1	カエデ属 (1)
4F2 グリッド			生木	1	トネリコ属 (1)

・エゴノキ属(Styrax)　　エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または２～４個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高いが、年輪界付近では径・密度共に減少する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、１～３細胞幅、１～20細胞高。

・トネリコ属(Fraxinus)　　モクセイ科

環孔材で孔圏部は２～３列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～20細胞高。

E．種実遺体同定

結果を第13表に示す。10試料中、試料番号７の種実遺体は、炭化・破損が著しく同定不能である。また、試料番号８は、磨耗した炭化材片である。検出された種類は、オニグルミ、モモ、エゴノキ属の３種類である。以下に、検出された種類の形態的特徴を示す。

第13表　種実遺体同定結果

番号	出　土　地　点	結　果
1	SD311（4F12グリッド）	オニグルミ
2	P137（3D13グリッド）	オニグルミ
3	SK125（3C15-3D11グリッド）	モモ
4	5A5グリッド砂下層	オニグルミ
5	2B16グリッドVII層	オニグルミ
6	SK123（4D12・13グリッド）３・４層	オニグルミ
7	SK123（4D12・13グリッド）２層	不明
8	SK123（4D12・13グリッド）５層	木材
9	SK400（4F1-6グリッド）２層	モモ
10	4A18・20グリッド深掘トレンチVII層出土	エゴノキ科

・オニグルミ(Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana(Maxim) Kitamura)クルミ科クルミ属

核が検出される。褐灰色。大きさは３cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが、先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。内部は、子葉が入る２つの大きなくぼみがある。

・モモ(Prunus parsica Batsch)バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出される。褐色～黒褐色で大きさは３cm程度。核の形は楕円形で、やや偏平である。基部は丸く大きな臍点があり、へこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・エゴノキ属(Styraxsp.)エゴノキ科

核が検出される。灰黒色。側面観は楕円形，上面観は円形。長さ１cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に３本の浅い溝がある。核は厚く、硬い。

F．リン・カルシウム分析

結果を第14表に示す。リン酸含量は、試料番号１・３を除き、比較試料に比べて高い傾向を示す。特に、試料番号４で14.07mg/g、試料番号５で16.35mg/gと高い。カルシウムについても、概ねリン酸と同様な傾向にあり、試料番号４・５で高い。

第14表　リン・カルシウム分析結果

試料名	層位	試料名	土性	土色	P205(mg/g)	CaO(mg/g)	備考
SX126	1層直上層	No.1	HC	2.5Y4/2　暗灰黄	1.20	4.09	
	1層	No.2	HC	2.5Y4/1　黄灰	5.58	6.04	植物繊維含む
	2層	No.3	HC	2.5Y5/2　暗灰黄	1.30	4.61	
	3層上部	No.4	HC	2.5Y3/1　黒褐	14.07	11.87	植物繊維含む
	3層下部	No.5	HC	2.5Y3/1　黒褐	16.35	11.61	植物繊維含む
	3層直下部	No.6	HC	2.5Y5/2　暗灰黄	3.46	4.37	
SX126遺構外	自然堆積層	比較試料2	HC	2.5Y6/2　灰黄	1.43	4.41	

注1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
注2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。
HC‥‥重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

5．考　察

A．遺跡周辺の古環境

地点1の珪藻化石群集は、大きく2つに分けられる。一つは、XII層下部･IXa層のように陸生珪藻が優占する群集である。もう一つは、XII層上部～IXb層やVIIIb層～VIIIa層でみられる群集で、とくに優占する種がみられず、様々な種が低率に産出する。今回の調査地点では、これら2つの群集組成が繰り返して出現する特徴がある。このような特徴は、河川敷の洪水堆積物の土層断面に認められる(堀内ほか，1996)。これによると、流水不定性種が多産する他に、流水性種がやや卓越して陸生珪藻なども低率に伴う群集は混合群集とされており、洪水性の堆積環境を指標する。また陸生珪藻の優占する群集は、洪水後に地表面となった乾いた環境を指標するとされている(堀内ほか，1996)。

以上から、今回の調査地点は、河川の氾濫する時期と地表面となる時期が何度か繰り返されたと考えられる。また、このような状態でXII層～VII層が堆積し、自然堤防が形成されたと考えられる。また、地点2では、下部粘土層から砂層にかけて混合群集から陸生珪藻が多産する群集に変化するが、上層粘土層になると、上部に向かって沼沢湿地付着性種の*Eunotia praerupta*、*Eunotia praerupta* var. *bidens* が増加する。このような珪藻化石群集の変化から、調査区西側は河川の影響を受けて下層粘土層・砂層が堆積したが、しだいに氾濫の影響が弱まり湿地的な状態に変化して、上層粘土層が堆積したと考えられる。

一方、今回検出された花粉化石群集では、ハンノキ属が比較的多く検出されている。ハンノキ属は、低地で湿地林を形成する種類を含む分類群である。この他、ヤナギ属・サワグルミ属・クルミ属・ニレ属ーケヤキ属・カエデ属・トチノキ属・トネリコ属など、渓谷林・河畔林の構成要素が検出されている。また、遺跡内から出土した木材も、これらに共通する種類が検出されている。これらの種類は、河道沿いの植生を反映しており、そこに生育していたものに由来する化石が運搬・堆積したと思われる。また、種実遺体で検出されるエゴノキ属も、林縁部など周辺に生育していたのであろう。さらに、樹種同定の結果から、マツ属複維管束亜属、スギ属、ヒノキ属(ヒノキ)、イチイなどの針葉樹、ブナ、コナラ亜属(クヌギ節･コナラ節)、クリなどの落葉広葉樹などの種類が、主な森林構成種として分布していたと推定される。柏崎平野に位置する西谷遺跡では、弥生時代後期後半以降、針葉樹のスギ属、暖温帯林要素のアカガシ亜属、冷温帯に分布するブナ属などの種類が、森林を構成する主要素として存在していたとされている(パリノ・サーヴェイ株式会社，1992a)。今回の組成と比べると、アカガシ亜属の出現率に差がみられる。これは、両平野では、植生が多少異なっていたことを反映しているのかもしれない。ただし、上述したように、堆

積環境が不安定であり、明らかに再堆積したとわかる化石も含まれている。また、全体的に花粉化石の保存状態が悪く、シダ類胞子が多産する傾向にある。一般的に広葉樹に由来する花粉に比べ、シダ類胞子や針葉樹に由来する花粉の方が、腐食に対して抵抗性があることが知られている(例えば、徳永・山内，1971など)。これらを考慮すると、ここで得られた花粉化石群集は歪曲しており、当時の植生を十分に反映していない可能性もある。したがって、本遺跡周辺の古植生については、今後資料が蓄積されることが期待される。今回の結果も、その上で再検討を行う必要があると考えている。

B．溝状遺構の検討

比較試料１では、判別不能な植物珪酸体がわずかに認められるに過ぎない。しかし、畑跡と想定されている溝状遺構SD250・SD265・SD273・SD281・SD299では、栽培植物のイネ属が検出される。このことから、平安時代頃、少なくとも本遺跡周辺で稲作が行われていたことが推定される。特に、溝状遺構の中でもSD273の２層でイネ属の産出が目立ち、稲籾に形成されるイネ属穎珪酸体やイネ属の葉部に形成される短細胞列も見られた。このように、遺構によりイネ属の出現状況がかなり遍在している。このことは、イネ属植物体が周囲一帯に存在していたのではなく、部分的に集中していたことを反映している可能性もある。つまり、ここでのイネ属に由来する化石の多産は、稲藁や籾殻などを肥料や農業資材として利用したことなどを、反映している可能性がある。今後、珪藻分析等により、遺構の埋積過程についても検討を行いたい。

一方、花粉化石でも、栽培植物に由来する種類が検出されない。そのため、当時本遺跡周辺でどのような種類が作物とされていたか、現段階では不明である。なお、これらの溝状遺構の周辺には、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属などが生育していたと思われる。

C．平安時代の植物利用状況

今回検出された種実は、いずれも表面が磨耗していることから、流されてきたものと思われる。検出された種類のうち、オニグルミは可食植物として各時代の遺跡から出土例が多い。今回の試料は、その形状からみて利用後の残渣を破棄したものでないと思われるが、周辺に生育していたものであり、有用植物となっていた可能性が高い。また、モモは栽培のために渡来した種類で、食用・薬用・観賞用など幅広い用途があり、周辺での栽培・利用が示唆される。

一方、遺構などから出土した炭化材は、いずれも燃料材などの一部が残存したものと考えられる。とくに火葬灰埋納土坑から出土したものは、遺体を荼毘に付したときなどの燃料材の一部の可能性がある。樹種を見ると、複数の試料について同定を行った遺構のうち、SX121を除く全ての遺構で複数の種類が認められる。その種類構成は遺構によって異なり、構成している種類も針葉樹から広葉樹まで様々である。この結果から、特定の種類を選択したのではなく、周辺で入手できる様々な種類を利用したことが推定される。神奈川県横浜市上の山遺跡では、火葬墓の燃料材にコナラ節を中心に多くの種類が認められ、また火付け材等の一部と考えられる草本類(テリハノイバラ・イネ科・カヤツリグサ科等)も出土している(パリノ・サーヴェイ株式会社，1992b)。この状況から、遺跡周辺に生育していた種類を利用したことが指摘されている。本遺跡の結果についても、同様の事情が指摘できる。

火葬灰埋納土坑と考えられている土坑のうち、SK100とSK116ではヒノキ属が出土している。ヒノキ属は有用材であり、曲物などの素材として利用されていたことが知られている(川村，1983)。そのため、これらのヒノキ属は燃料材ではなく、副葬された木製品等に由来する可能性もある。

D．火化遺構の検討

今回のような沖積土の場合、土壌の特性としてリン酸の保持力が弱い。そのため、比較試料の値は1.43mg/gと低くなっている。たとえば、火山灰土を扱った東京都田園調布南遺跡では、リン酸の標準的含量は3.0～3.5mg/gで(中根，1992)高いが、沖積地に立地する豊島馬場遺跡では、約1.0mg/gほどであり、今回の値に近い(東京都北区教育委員会，1995)。このような、本来リン酸を保持しにくい土壌であるにもかかわらず、土坑内で高い値が得られているのは、骨片が残っていたことや炭化物などに成分が吸着したためと考えられる。最も値の高かった３層は、荼毘に付した灰が多量に投棄されているとみられ、間層を挟んで１層にも灰が投棄されている。２層ではリン酸が高くないことから考えると、一度土をかけて２回に分けて灰を埋めたと考えられる。これは、土層断面でみられた炭化物や遺物の産状と一致する。また、３層の下層もリン酸値が高くなっている。これはリン酸などの成分が、粘土粒子などとともに下方へ移動したためと見られるが、このような現象が起こりうることが、バーンズほか(1986)によって指摘されている。埋葬施設について土壌理化学分析調査を行う場合、事例を増やして比較検討することが必要である。このような土坑は類例が少ないようであるが、今後もこのような観点で調査事例を増やすことにより、遺体埋納状況について、より詳細な検討が可能になると思われる。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

K. Asai & T. Watanabe (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

ジナ・バーンズ，ルール・ブラント，サイモン・ケーナ，デイビット・ロリガー，西田史朗（1986）日本の土壌中での燐酸塩の挙動．考古学と自然科学，19，p.57-68.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）「土壌標準分析・測定法」．354p.，博友社.

堀内誠示・高橋敦・橋本真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について．日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集，p.62-63，日本文化財科学会.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，６，p.23-45.

川村恵洋（1983）曽根遺跡出土木材の識別．新大演報，16，p.75-82.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

K. Krammer (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1-353., BERLIN・STUTTGART.

K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Teil1, Naviculaceae, Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Teil2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae, Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991a) Bacillariophyceae, Teil3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae, Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991b) Bacillariophyceae, Teil4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

H. Lange-Bertalot, K. Kulbs, T. Lauser, M. Noerpel-Schempp & M. Willmann (1996) Dokumentation und Revision der von G. Krasske beschriebenen Taxa, Iconographia Diatomologica 3., 358p., Koeltz.-Koenigstein.

H. Lange-Bertalot & D. Metzeltin (1996) Oligotrophie-Indikatoren. 800 Taxa reprasentativ fur drei diverse Seen-Typen, Iconographia Diatomologica 2., 390p., Koeltz.-Koenigstein.

D. Metzeltin & A. Witkowski (1996) Diatomeen der Baren-Insel, Suesswasser-und marine Arten. Iconographia Diatomologica 4., 287p., Koeltz.-Koenigstein.

中根秀二 (1992) 一号方形周溝墓の自然科学的分析.「田園調布南　2」, p.133-149, 都立学校遺跡調査会.

農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967)「新版標準土色帖」.

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1992a) 西谷遺跡における弥生時代後期以降の古環境変遷と低地利用.「刈羽村埋蔵文化財調査報告書第１集　西谷遺跡発掘調査報告書」, p.45-59, 刈羽村教育委員会.

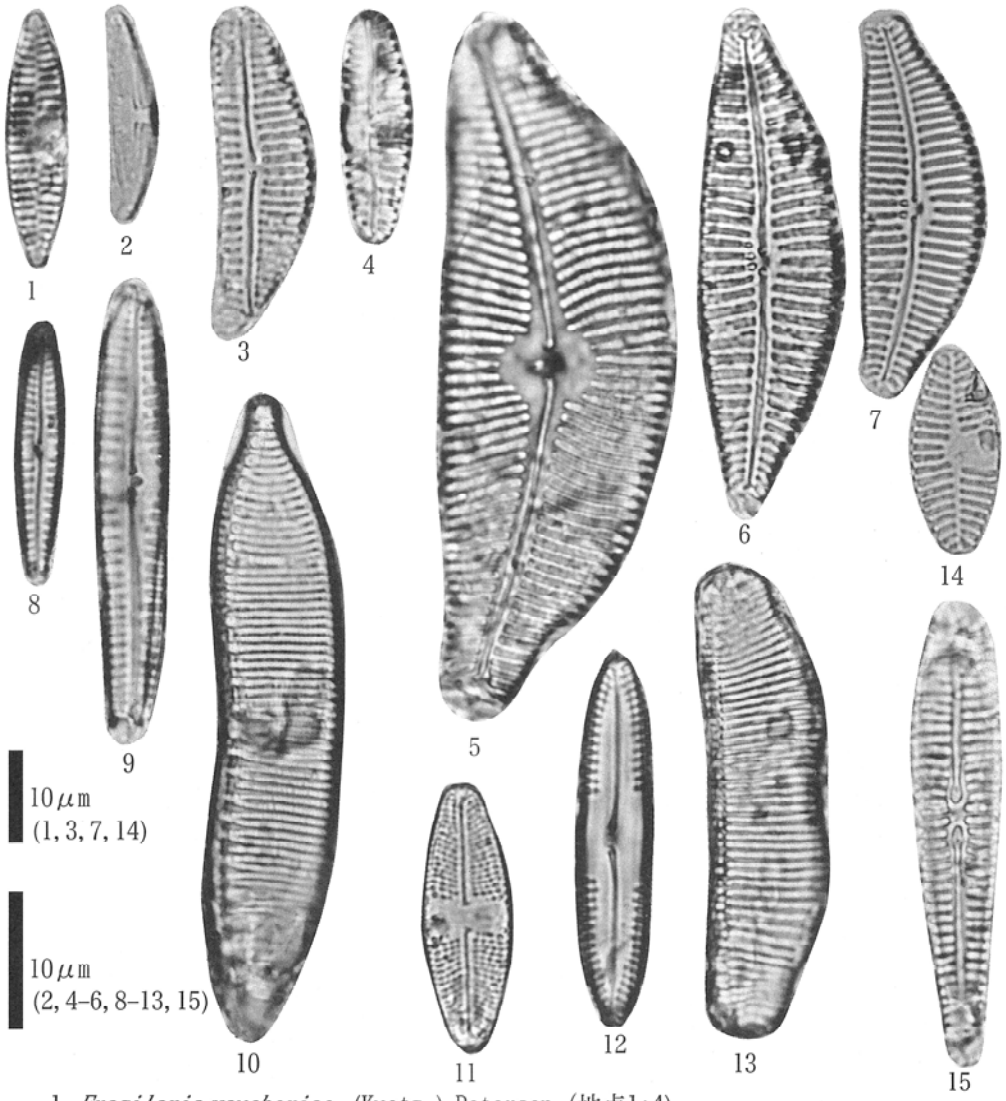
パリノ・サーヴェイ株式会社 (1992b) 上の山遺跡植物遺体同定.「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIII　上の山遺跡」, p.196-202, 横浜市埋蔵文化財センター.

ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定.「土壌調査ハンドブック」, p.39-40, 博友社.

E. Reichardt (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1843), Iconographia Diatomologica 1., 107p., Koeltz.-Koenigstein.

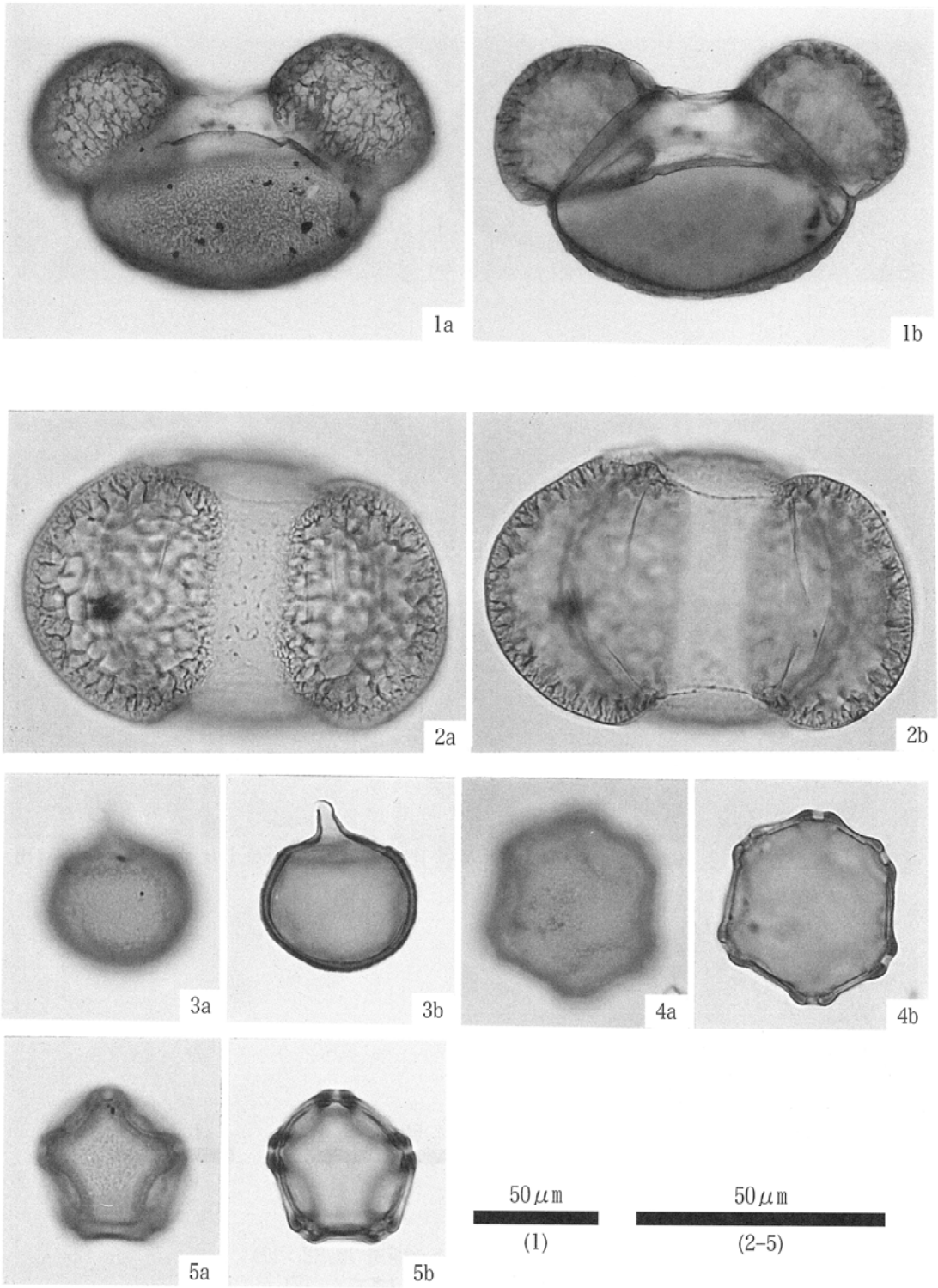
徳永重元・山内輝子 (1971) 花粉・胞子.「化石の研究法」, p.50-73, 共立出版株式会社.

東京都北区教育委員会 (1995)「北区埋蔵文化財調査報告16集　豊島馬場遺跡 (本文編)」, 383p..



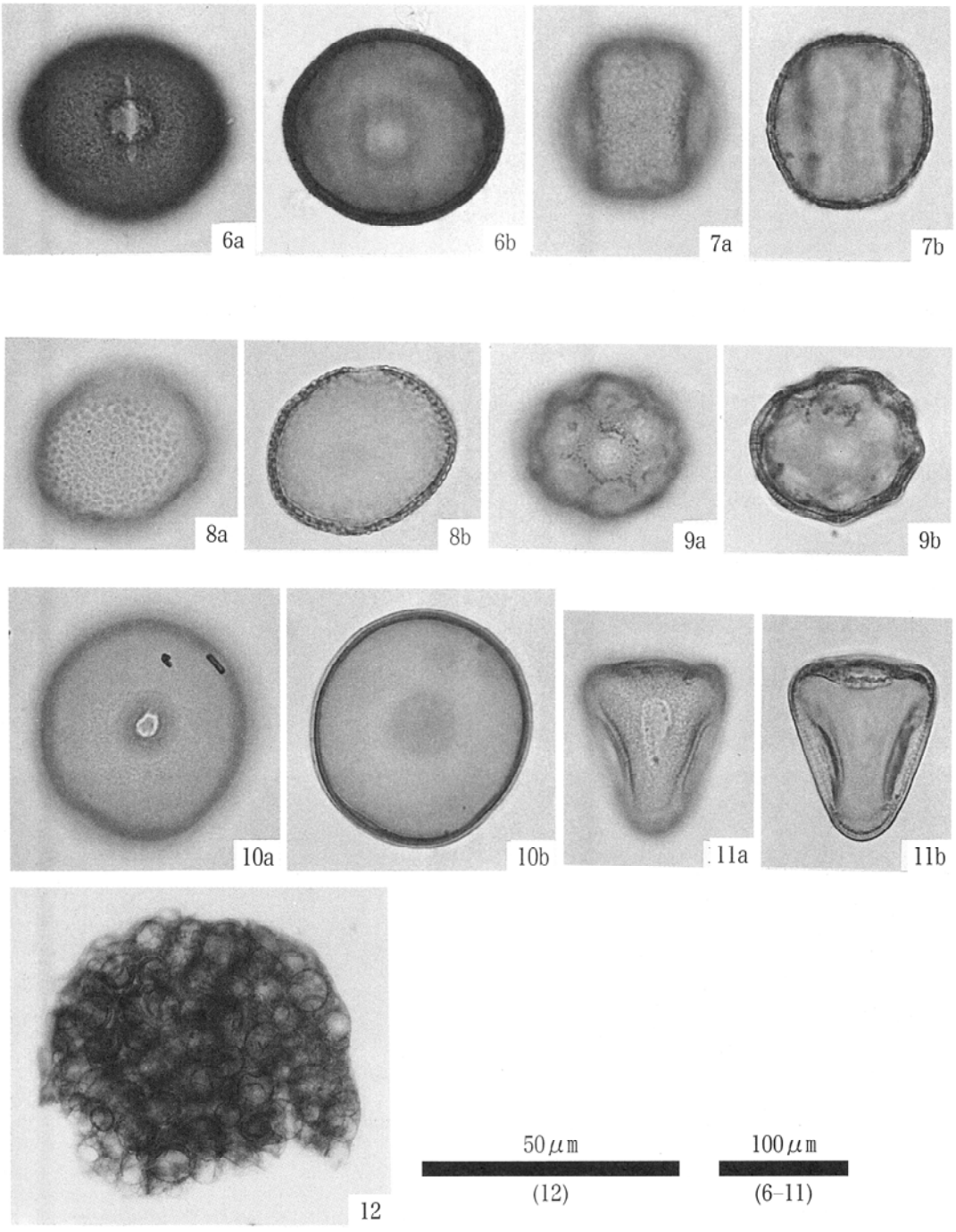
1. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.) Petersen (地点1;4)
2. *Amphora montana* Krasske (地点1;1)
3. *Cymbella silesiaca* Bleisch (地点1;4)
4. *Cymbella sinuata* Gregory (地点1;2)
5. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) V. Heurck (地点1;2)
6. *Cymbella turgidula* var. Grunow (地点1;2)
7. *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow (地点1;4)
8. *Gomphonema pumilum* (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot (地点1;4)
9. *Gomphonema sumatorense* Fricke (地点1;2)
10. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (地点1;1)
11. *Navicula mutica* Kuetzing (地点1;1)
12. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer (地点1;1)
13. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow (地点1;1)
14. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (地点1;4)
15. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lange-B (地点1;1)

第24図　珪藻化石



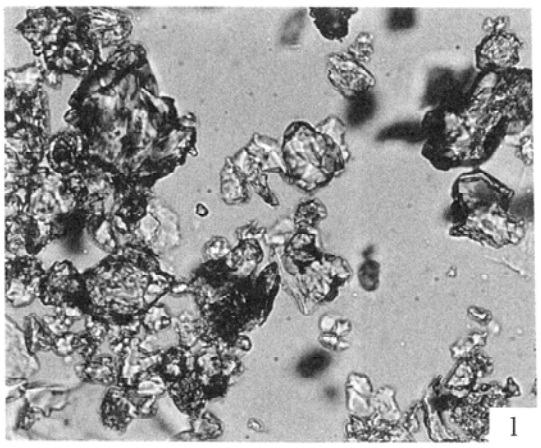
1. モミ属（地点2;17）
2. マツ属単維管束亜属（地点2;17）
3. スギ属（地点2;17）
4. サワグルミ属（地点2;17）
5. ハンノキ属（地点2;17）

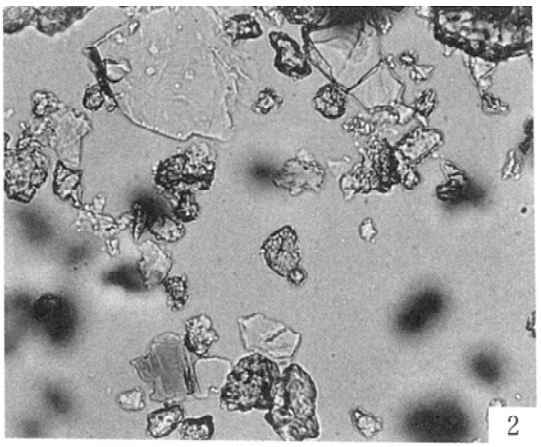
第25図　花粉化石(1)

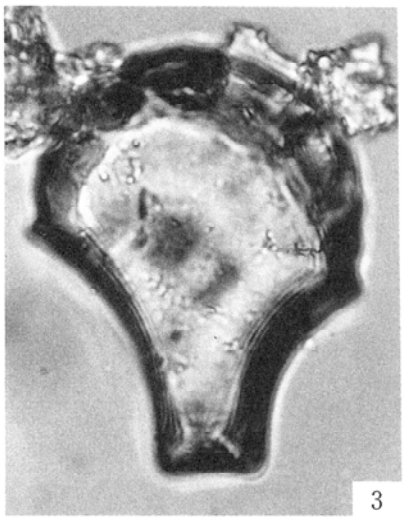


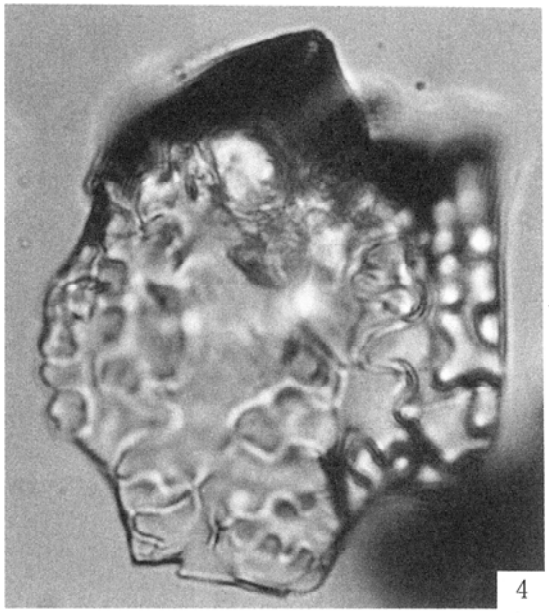
6. ブナ（地点2；17）
7. コナラ属コナラ亜属(地点2；17)
8. ミクリ属（地点2；17）
9. サジオモダカ属（地点2；17）
10. イネ科（地点2；17）
11. カヤツリグサ科（地点2；17）
12. サンショウモ（地点2；17）

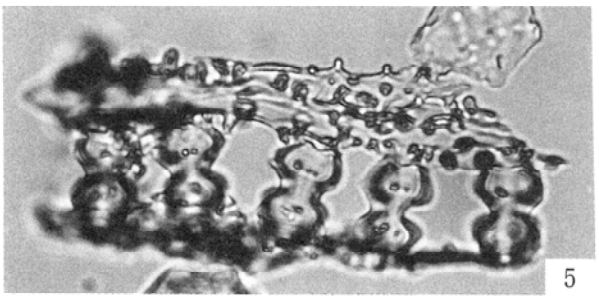
第26図　花粉化石(2)


1


2


3


4

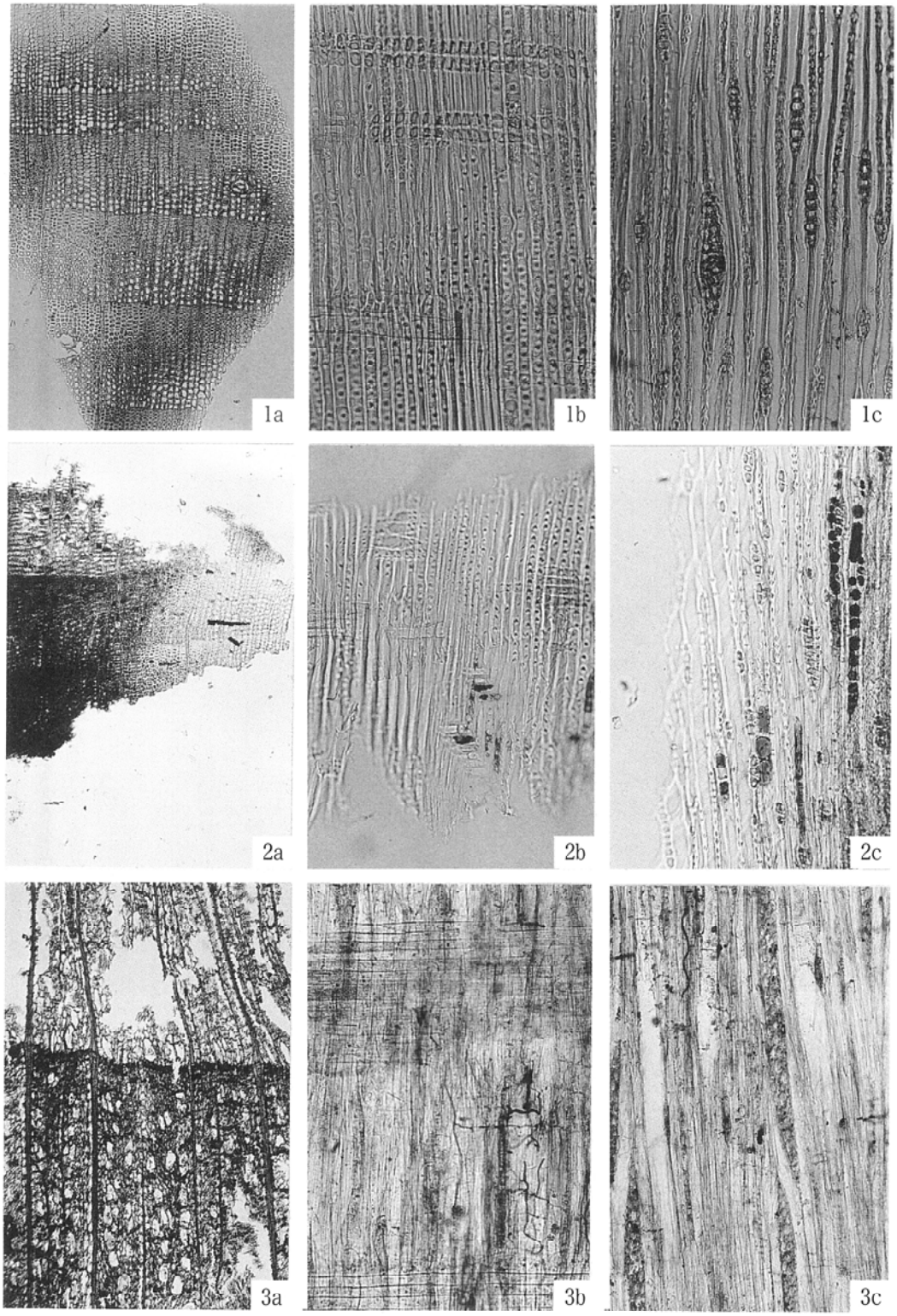

5

50μm
(1, 2)

50μm
(3-5)

1.イネ属機動細胞珪酸体（SD273　2層）
2.イネ属穎珪酸体（SD265）
3.イネ属短細胞列（SD273　1層）
4.状況写真（SD281）
5.状況写真（比較試料1）

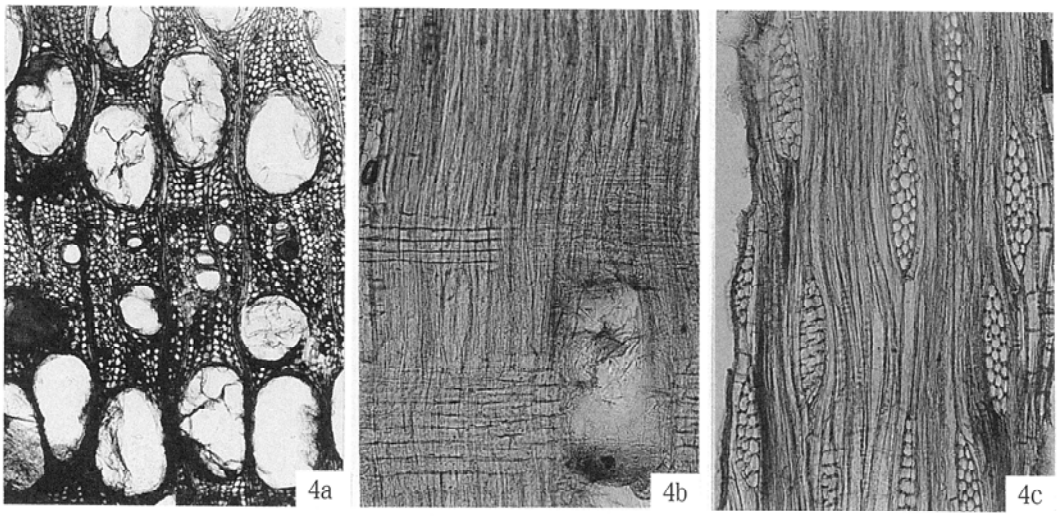
第27図　植物珪酸体



1. マツ属複維管束亜属（SX126　3区1層）
2. ヒノキ（SX126 4区ベルト2層粘土）
3. カエデ属（5F5グリッド倒木）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

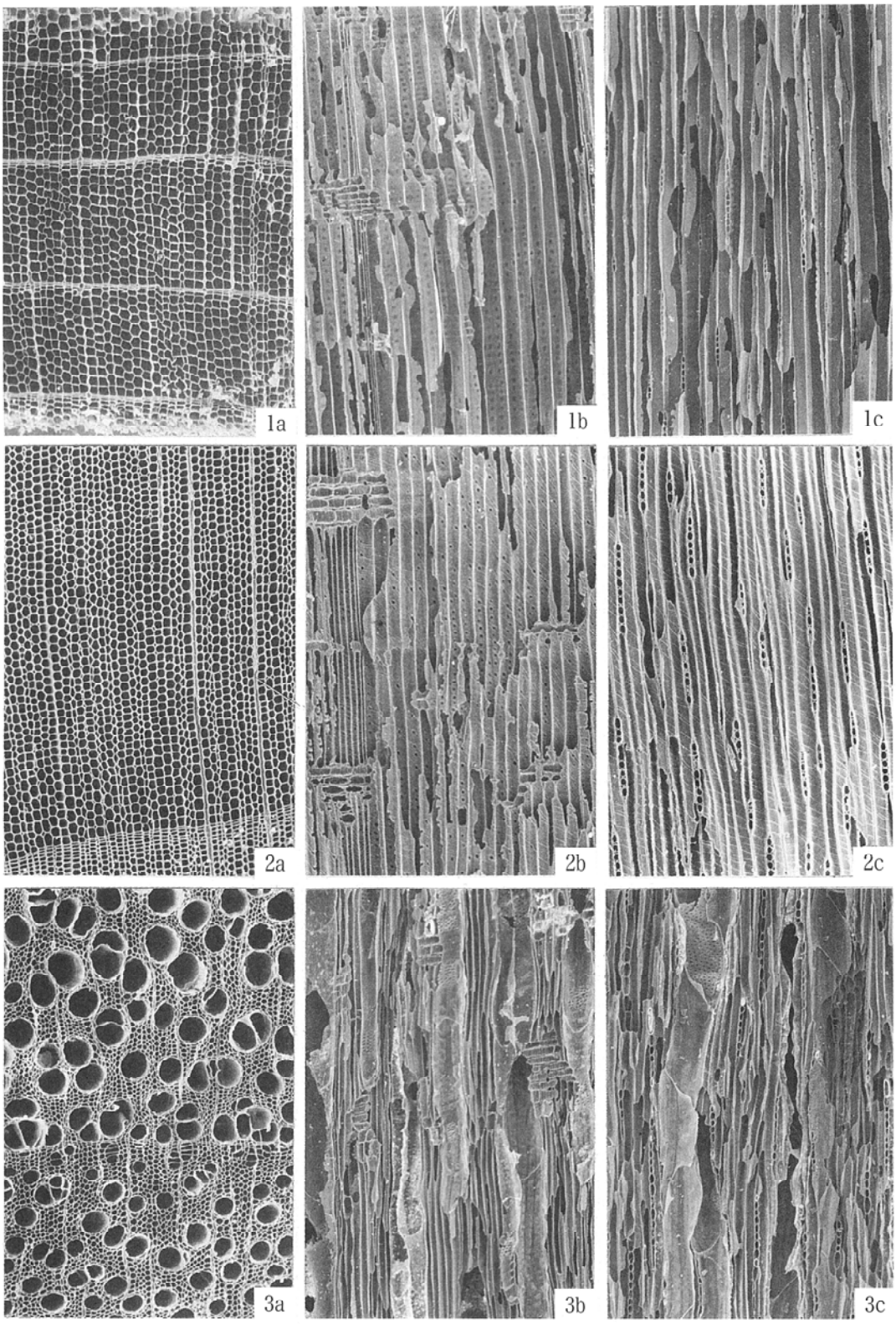
第28図　木材(1)



4.トネリコ属（4F2グリッド倒木）
a：木口，b：柾目，c：板目

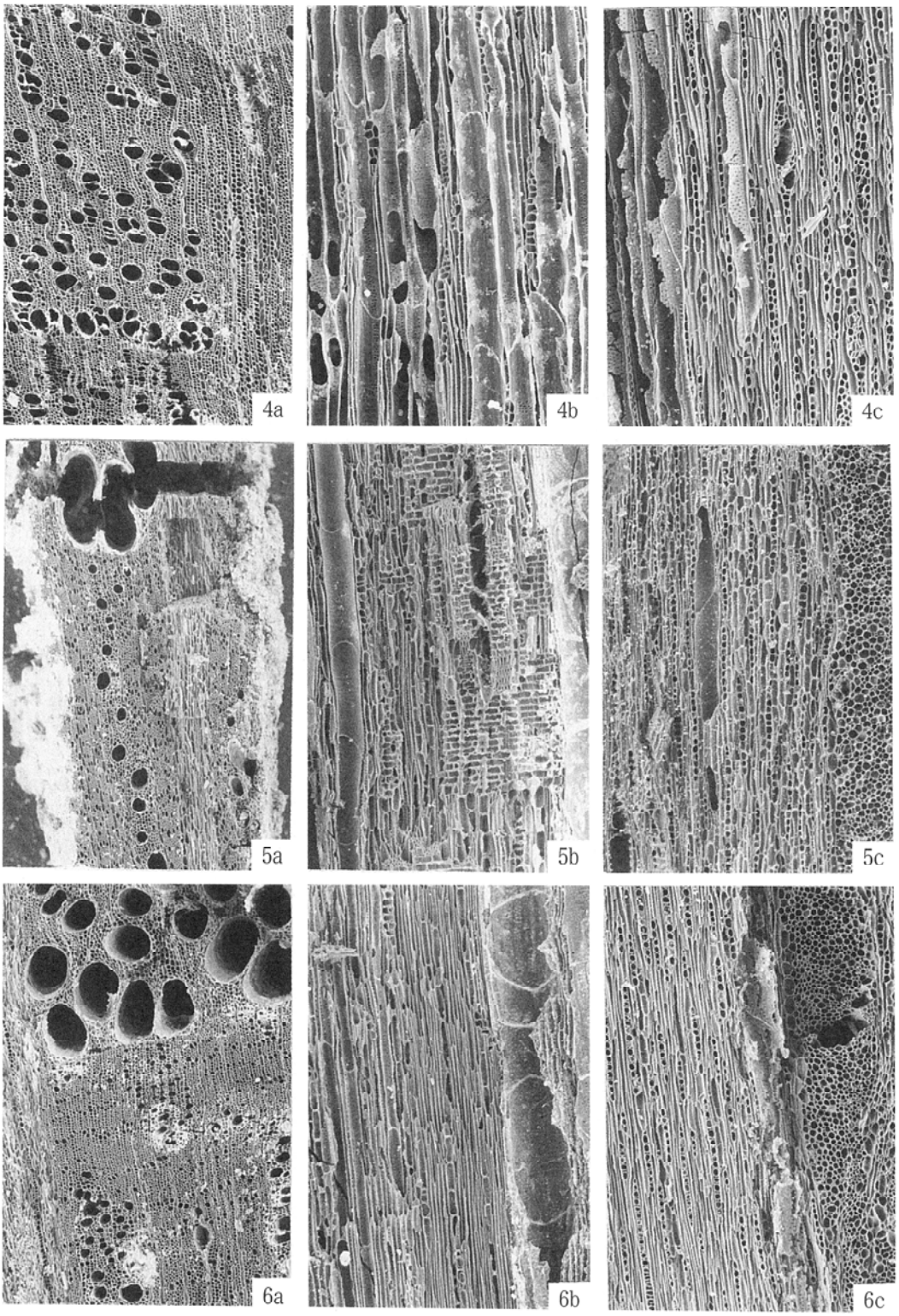
200μm：a
200μm：b，c

第29図　木材(2)



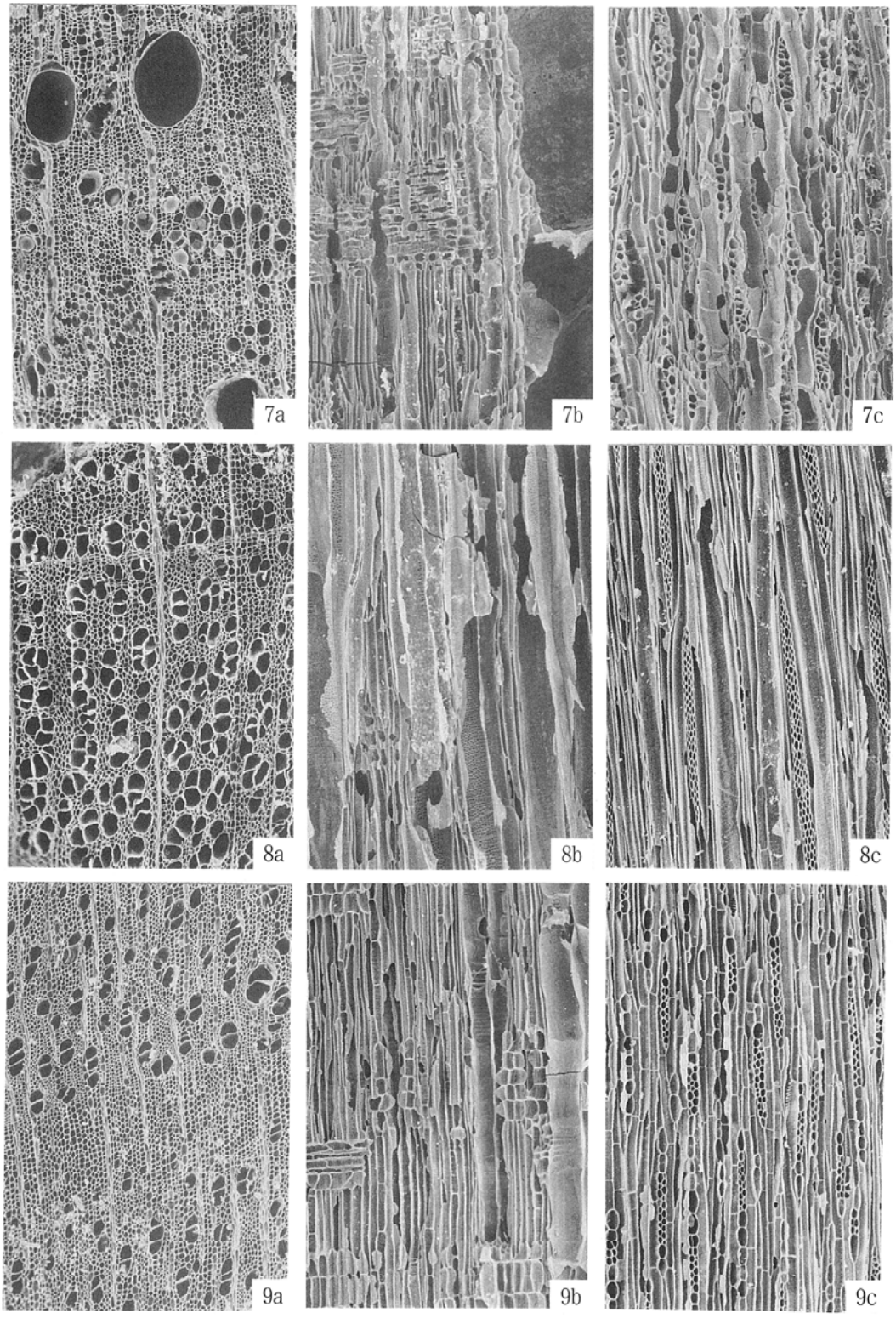
1. ヒノキ属（SK116）
2. イチイ（SX65）
3. ヤナギ属（SK102）
　a：木口，b：柾目，c：板目

第30図　炭化材(1)



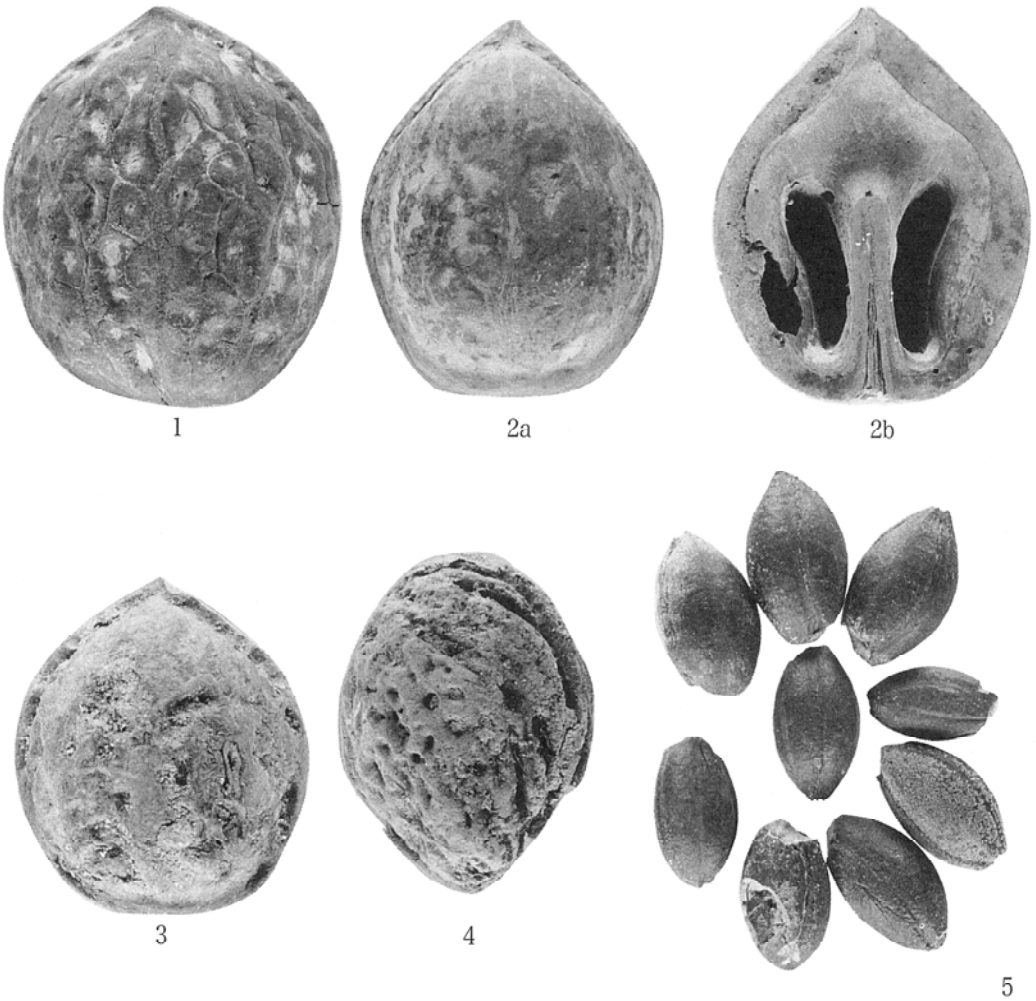
4. クマシエ属イヌシデ節（SX131）
5. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（SX131）
6. コナラ属コナラ亜属コナラ節（SX131）
　a：木口，b：柾目，c：板目

第31図　炭化材(2)



1. クリ（SX65）
2. サクラ属（SK116）
3. エゴノキ属（SK102）
　a：木口，b：柾目，c：板目

第32図　炭化材(3)



1. オニグルミ（試料番号4）
2. オニグルミ（試料番号5）
3. オニグルミ（試料番号1）
4. モモ（試料番号9）
5. エゴノキ属（試料番号10）

第33図　種実遺体

6．人骨について

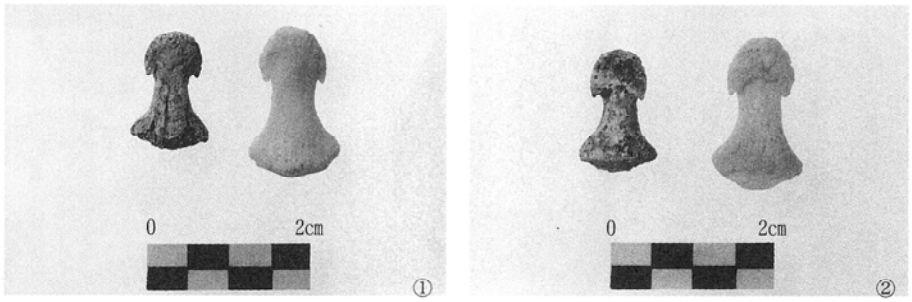
日本歯科大学新潟歯学部　　笹川　一郎

A．概　観

本遺跡からは焼骨の破片が多数出土したが、人骨と判定できるのは下記の１点であった。また、他の焼骨破片のうち、形の一部をとどめている複数の骨片は、大きさや内部構造では人骨のそれと矛盾しない。出土状況からして共産する他の焼骨片も人骨の可能性が高い。

B．土坑325出土、手の末節骨１点

ほぼ完全な手の末節骨(指先の骨)である。大きさと形態からみて、成人の親指以外の指の末節骨である。焼骨のため変形や収縮が考えられ、指の特定や性別などは不明である。



第34図　SK325出土末節骨①表②裏（右：現代人男性末節骨）

参考文献

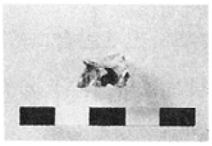
池田次郎　1981「出土火葬骨について」『太安萬呂墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第43冊
奈良県立橿原考古学研究所編

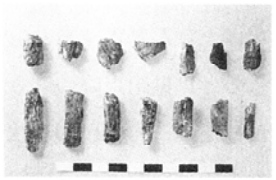
笹川一郎・高橋正司　1983「人骨」『緒立遺跡発掘調査報告書』96-102黒埼町教育委員会編

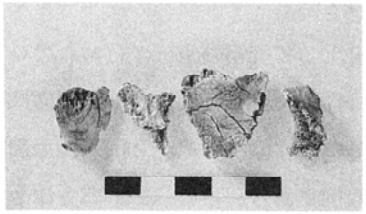
P65

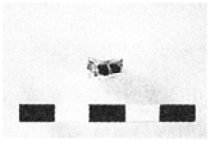
P116

P116頭骨表


P116歯槽

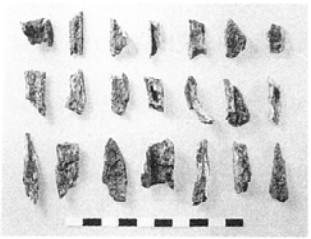

SK131


P116頭骨裏


P116歯槽

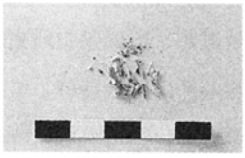
SK325

SK325


SK161

SK372

SX121


SX126・1層

SX126・2層

第35図　火葬関連遺構出土骨片

第Ⅶ章　ま と め

1．火葬関連遺構について

A．新潟県内の古代の埋葬例

文献史料に見える、火葬の初見は文武４(700)年の僧道昭である。後の703年の持統太上天皇の火葬は「養老(おそらく溯って大宝令(701年制定))令」条文中の火葬規定を実行に移し、貴族間に火葬を広める直接の契機となるよう行われた。令の火葬の規定は、仏教と直接の関係を持たない。律令制における上層階級の喪葬は土葬が基本であり、火葬は欲して願い出る場合に許された[黒崎1980]。火葬が天皇・貴族層に一般化するのは11世紀以降のことであり、11世紀以降といえども、必ずしもすべての葬送が火葬によるものではなかった。一方庶民の葬法は土葬や遺骸の遺棄も多い状況である[仲山1995]。

県内の古代の埋葬例は、東日本埋蔵文化財研究会で『東日本における奈良・平安時代の墓制－墓制をめぐる諸問題－』[東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会編1995]として資料の集成が行われている。1995年当時で10例と関東地方などと比べ、北陸地方特に越後・佐渡は極めて調査例が少なく、実態は明らかでない[春日1995]。第15表に以後検出されたものを追加してまとめた。古墳への追葬２例、律令制定以前の火葬墓１例、平安時代９～10世紀の土坑墓４例・火葬関連遺構６例である。古墳への追葬と律令制定以前の火葬墓を除外すると、９世紀前半～10世紀初頭の土坑墓と火葬関連遺構が、ほぼ同数確認され混在している様子がわかる。時期も限定され、10世紀前葉以降の墳墓は確認されていない。また、土坑墓と火葬墓がともに検出された遺跡はない。

第15表　古代の埋葬例

No.	遺　跡　名	所　在　地	埋葬形態	遺構・出土遺物	時　　期
1	背ノ沢遺跡	佐渡郡真野町	古墳への追葬	無袖形横穴式石室内に古代の土器	７C後半～８C初頭
2	宮口古墳群	東頸城郡牧村	古墳への追葬	横穴式石室の羨道や古墳墳頂に古代の土器	９C中葉以降
3	新保遺跡・柿崎古墓	東頸城郡柿崎町	土坑墓	木炭郭木棺墓　須恵器長頸瓶、灰釉陶器瓶子・壷、水晶玉、土師器椀	９C後半
4	草水窯跡	新津市	土坑墓	土師器長甕合口棺	９C後半～10C初頭
5	一ノ口遺跡西地区	上越市	土坑墓	土師器長甕合口棺	９C後半～10C初頭
6	中ノ沢遺跡	中頸城郡妙高高原町	土坑墓	土師器椀３個体重ね合せ、刀子	９C後半～10C初頭
7	大萱場古墳	長岡市	火葬墓	横穴式木芯礫室、壷	７C初頭
8	直り山Ｂ遺跡	新潟市	火葬墓	蔵骨器、須恵器短頸壷	９C中葉前後
9	駒坂墳墓	両津市	火葬墓	蔵骨器・須恵器横瓶の身に有台杯の壷、焼骨・灰・砂	９C後半～10C初頭
10	釈迦堂遺跡	西蒲原郡黒埼町	火葬墓	火葬灰埋納土坑６基、有台杯・無台杯、火化遺構１基、木炭骨散布地１基	９C前半～終末
11	高柳宮ノ本遺跡	新井市	火葬墓	火葬灰埋納土坑２基、集石遺構１基	９C後半～10C初頭
12	杉明遺跡	新井市	火葬墓	火葬灰埋納土坑１基、集石遺構２基、掘立柱建物１棟、柵１列、溝１条	９C後半～10C初頭
13	茗荷谷墳墓	南蒲原郡田上町	火葬墓	蔵骨器、須恵器、短頸壷、和銅開珎100枚余	８C前半

火葬墓のみ簡単に見ていくと、駒坂遺跡［新潟県史通史編１　1986］は蔵骨器を持つ墳墓の確実な例である。須恵器の横瓶を蔵骨器に須恵器の杯・椀を蓋にしていると考えられる。横瓶には、焼骨・灰・砂が詰まっていた。新井市の高柳宮ノ本遺跡・杉明遺跡は火葬に関係する遺構が多数検出されている。高柳宮ノ本遺跡は、本遺跡と同様の火葬灰埋納土坑とみられる土坑２基と、南方約８mのところに石組遺構１基が検出されている。拳大から人頭大の川原石が配置され、中には熱を受け赤変し割れているものもある。周辺に焼土や炭は散布していない。付近から、灰釉陶器の皿が出土しており、副葬品の可能性も指摘されている。杉明遺跡では、火葬灰埋納土坑１基と隣接して土坑２基と柵１列、溝１条、石組遺構１基と、殯屋

と想定されている小型の掘立柱建物１棟が検出されている。やや離れたところでは集石遺構２基が検出されている。

本遺跡の火葬灰埋納土坑から無台杯、有台杯の破片が出土しているが、二次被熱を受けているものはない。ほぼ完形に復元できるものはSK100から出土した38のみで他は細片である。副葬品ではなく、火葬灰を運搬する際の容器とした可能性も考えられる。火化遺構のSX126から出土した大量の土器は、上層全体に散布し、二次被熱の痕跡もないことから、火化遺構としての役割を終えた後に投棄されたものと考えられる。また、火葬関連遺構が西側に分布するのは、集落内の居住地と墓域等の分離が認められるのか、調査例の増加を待って今後の検討課題としたい。

B．被葬者について

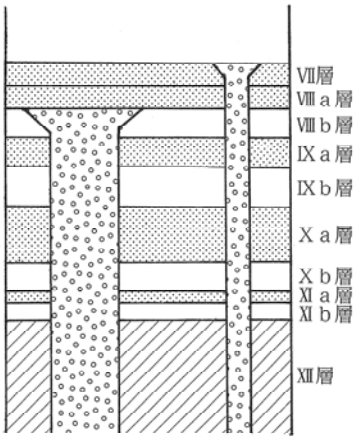
上記のように、火葬が限定された階級の人のみしか行われなかったということを考えると、本遺跡で火葬された人はいわゆる在地の富豪層、豪族の可能性が高い。火化遺構と推定されるSX126から奈良時代の銅銙(従八位相当)が１点出土しているが、共伴している土器が９世紀前半であることから、これは伝世品である。銅銙に補修の痕跡が認められることからも、半世紀もの長い間大切に伝えられたことになる。従八位相当の官位は郡司の大領にあたり、過去において集落内に郡司の大領クラスの有力者が存在し、その後継者が引きつづき存在していたことが想定できる。このことから被葬者には、在地の富豪層、豪族の血縁的集団を想定することも可能だろう。

2．遺物について

A．遺物の時期

(1)地震痕跡との関係

本遺跡ではⅦ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺの５層の遺物包含層(ａ層)が間層(ｂ層)を挟んで確認されている。Ⅶ層は出土遺物が少量のため、詳細な土器の時期は特定できていないが、おおむね９世紀代の範囲で収まり10世紀には入らないと考えられる。Ⅷ層の土器は９世紀第４四半期、Ⅸ層の土器は９世紀第３～４四半期、Ⅹ・Ⅺ層の土器は９世紀第１四半期の遺物を少量含むが、中心は第２四半期の時期がおおむね設定できる。出土土器の大半はⅩ層出土であることから、集落が安定して営まれた時期は９世紀第２四半期ころといえる。須恵器の産地は大半を佐渡小泊産が占め、他に笹神産、新津産、西古志産などがある。唯一８世紀代の遺物は銅銙の１点のみである。



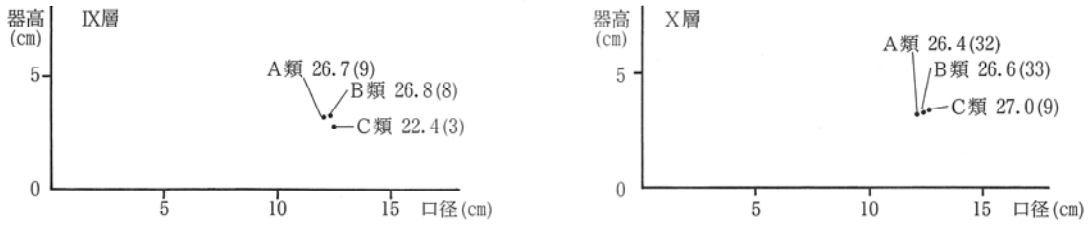
第36図　地震痕跡模式図

集落は数度の洪水に見舞われながらも、この地で生活を続けていたことが判明した。最も大規模な洪水はⅩ層を覆うⅨｂ層である。この洪水後も人々はこの地に戻り生活を営んだが、再度の洪水に見舞われる。また、この後、大規模な地震にも見舞われ、集落は壊滅的な被害が出たことが予想される。遺跡に地割れ、噴砂、断層などの地震の痕跡が多数見られるが、この地

震は『日本三代実録』に記録のある貞観５(863)年６月17日の地震によるものと考えられる。この地震によるとみられる地割れがⅨ層を切ってⅧ層に見られ、土器の時期ともほぼ一致する。また、噴砂がⅦ層で噴出するものがあることから、貞観５年以降にも地震があった可能性が高い。後者の地震については、新潟大学高濱信行氏より仁和３(887)年の地震の記録[宇佐美1987]が２回あることをご教示いただいた。１つは「仁和３年７月６日夜、越後で津波を伴い、溺死者数千、京都に有感。越後に関する史料の信憑性不十分ゆえ無番号とする。」との宇佐美氏の注釈がある。この記事については史料の出典が記載されていないため確認することが出来なかった。２つめは『扶桑略記』に記載のある、仁和３年７月30日の記録で京都の地震記録に続いて「信乃国大山　崩、巨河溢流、六郡城地漂流、牛馬男女流死成丘」というものである。これは、最近の研究結果で八ヶ岳が大崩落し、千曲川がせき止められた結果、今も残る松原湖などの湖沼が作られたことがわかっている。千曲川の河原に埋まっていた、大崩落当時のヒノキの年輪年代測定によって、887年に起こったことが証明されている。しかし、越後への影響を語る文献は無く、不明とせざるをえない。

(2)須恵器無台杯器高指数について

本遺跡では、須恵器無台杯についてＡ類：体部が内湾気味に立ち上がるもの、Ｂ類：体部が直線的に立ち上がるもの、Ｃ類：体部が外反気味に立ち上がるものに細分した。Ａ～Ｃ類が出土しているⅨ・Ｘ層について器高指数(器高÷口径×100)の平均値を第37図に示した。Ｘ層ではＡからＣ類へ直線的に並び、器高と口径が比例関係にあり、器形と口径の関係が現れている。Ａ類・Ｂ類はⅨ層からＸ層への変化は器高・口径ともほとんどみられないが、Ｃ類は口径はほぼ同じだが、器高が６㎜低くなるという傾向を示す。



第37図　須恵器無台杯の器高指数(　)内の数字は計測個体数

(3)器種・食膳具構成比率

本遺跡の器種・食膳具構成比率を第16・17表に示す。食膳具の比率は66.7%、貯蔵具の比率は3.2%、煮沸具の比率は29.1%を示す。食膳具の内、土師器・黒色土器の占める割合は約10%で、残り90%は須恵器が占める。土師器の内でも黒色土器の占める割合は0.3%と極めて低い。９世紀末から10世紀初頭の上郷遺跡[春日1997]の器種構成比は食膳具が71.7%、貯蔵具が1.0%、煮沸具が27.3%と本遺跡と類似した数値が出ている。しかし、食膳具の構成比率が全く違い土師器無台椀が54.0%を占め、９世紀前半を中心とする本遺跡との時期差を示している。

食膳具・貯蔵具・煮沸具のほかには土師器の鉢が出土している。１%とわずかであるが、特に鉄鉢の出土は集落内に寺院あるいは御堂の存在を推測させるものである。東国では８世紀終末から９世紀初頭には、

集落内に寺院あるいは草堂のようなものが見られ始め、これを村落内寺院[須田1985]という。小さな基壇を持った覆屋ふうの建物に安置した堂塔に、塼仏や押出仏、瓦塔などを入れた構造と推定されている[網野ほか1998]。県内では緒立遺跡、上越市今池遺跡[坂井1984]で瓦塔、新潟市山木戸遺跡[小池1999]、笹神村発久遺跡などでは「寺」の墨書土器が出土している。真野町藤塚貝塚では「□(高カ)命寺」の墨書土器が出土しており、寺院名を推定できる唯一の例である。越後も東国とほぼ同じ９世紀代に村落内寺院の存在が確認される。本遺跡で鉄鉢の他に村落内寺院の存在を推測させる遺物には、円面硯・転用硯・塼状土製品がある。墨書土器には寺院の存在を示す文字は出土していない。集落内に寺院と火葬関連遺構が存在していたと考えられるが、蔵骨器および埋葬施設は検出されていない。集落内に寺院と墓域が存在していたと考えられる遺跡は、県内には今のところ見当たらない。今回は村落内寺院の存在の可能性を指摘するに止め、今後の調査例の増加を待って再検討する必要があると考える。

第16表　器種構成比率

種別	器種	口縁部残存率	(破片数)	比率	(破片)
土師器	無台椀	412.5	(353)	6.3	(10.0)
	有台椀	9.0	(3)	0.1	(0.1)
黒色土器	無台椀	5.5	(11)	0.2	(0.3)
須恵器	無台杯	3,033.5	(1,492)	46.1	(42.1)
	有台杯	460.0	(129)	7.0	(3.6)
	杯蓋	406.0	(124)	6.2	(3.5)
	無台盤	23.0	(3)	0.3	(0.1)
	高杯	30.0	(2)	0.5	(0.1)
食膳具総計		4,387.5	(2,117)	66.7	(59.8)
土師器	壷	38.0	(46)	0.6	(1.3)
須恵器	壷・瓶	116.0	(33)	1.8	(1.0)
	甕	54.0	(15)	0.8	(0.4)
貯蔵具総計		208.0	(94)	3.2	(2.7)
土師器	小甕	899.0	(490)	13.6	(13.8)
	長甕	957.0	(738)	14.5	(20.8)
	鍋	64.5	(58)	1.0	(1.6)
煮沸具総計		1,920.5	(1,286)	29.1	(36.2)
土師器	鉢	69.5	(46)	1.0	(1.3)
仏具系総計		69.5	(46)	1.0	(1.3)
総計		6,585.5	(3,543)		

第17表　食膳具構成比率

種別	器種	口縁部残存率	(破片数)	比率	(破片)
土師器	無台椀	112.5	(353)	9.4	(16.7)
	有台椀	9.0	(3)	0.2	(0.1)
土師器総計		421.5	(356)	9.6	(16.8)
黒色土器	無台椀	13.5	(11)	0.3	(0.5)
黒色土器総計	無台椀	13.5	(11)	0.3	(0.5)
須恵器	無台杯	3,033.5	(1,492)	69.1	(70.5)
	有台杯	460.0	(129)	10.5	(6.1)
	杯蓋	406.0	(124)	9.3	(5.9)
	無台盤	23.0	(3)	0.5	(0.1)
	高杯	30.0	(2)	0.7	(0.1)
須恵器総計		3,952.5	(1,750)	90.1	(82.7)
食膳具総計		4,387.5	(2,117)		

B．銅銙について

古代の装身具である腰帯は、慶雲４(707)年に初めて革帯を使用したと言われる。五位以上の貴族は金銀装腰帯、六位以下の下級官人は銅製黒漆塗りの銙をつけた烏油腰帯(銅銙帯)と決められていた。延暦15(796)年に「隆平永宝」の鋳造を支えるために銅銙帯を廃して石帯に変えるが、大同２(807)年平城上皇の復古策により銅銙帯に復し、弘仁元(810)年、ふたたび石帯を用いるようになる。銅銙は奈良時代前半から平安時代初頭に使用されていたものである。本遺跡では火化遺構と推定されるSX126から銅銙・巡方が１点出土している。供伴する遺物が９世紀前半であることから、この銅銙は伝世品と考えられる。１本の腰帯を分解し、飾金具のみをシンボリックに分有する観念が存在した可能性も指摘されている[田中1990]。

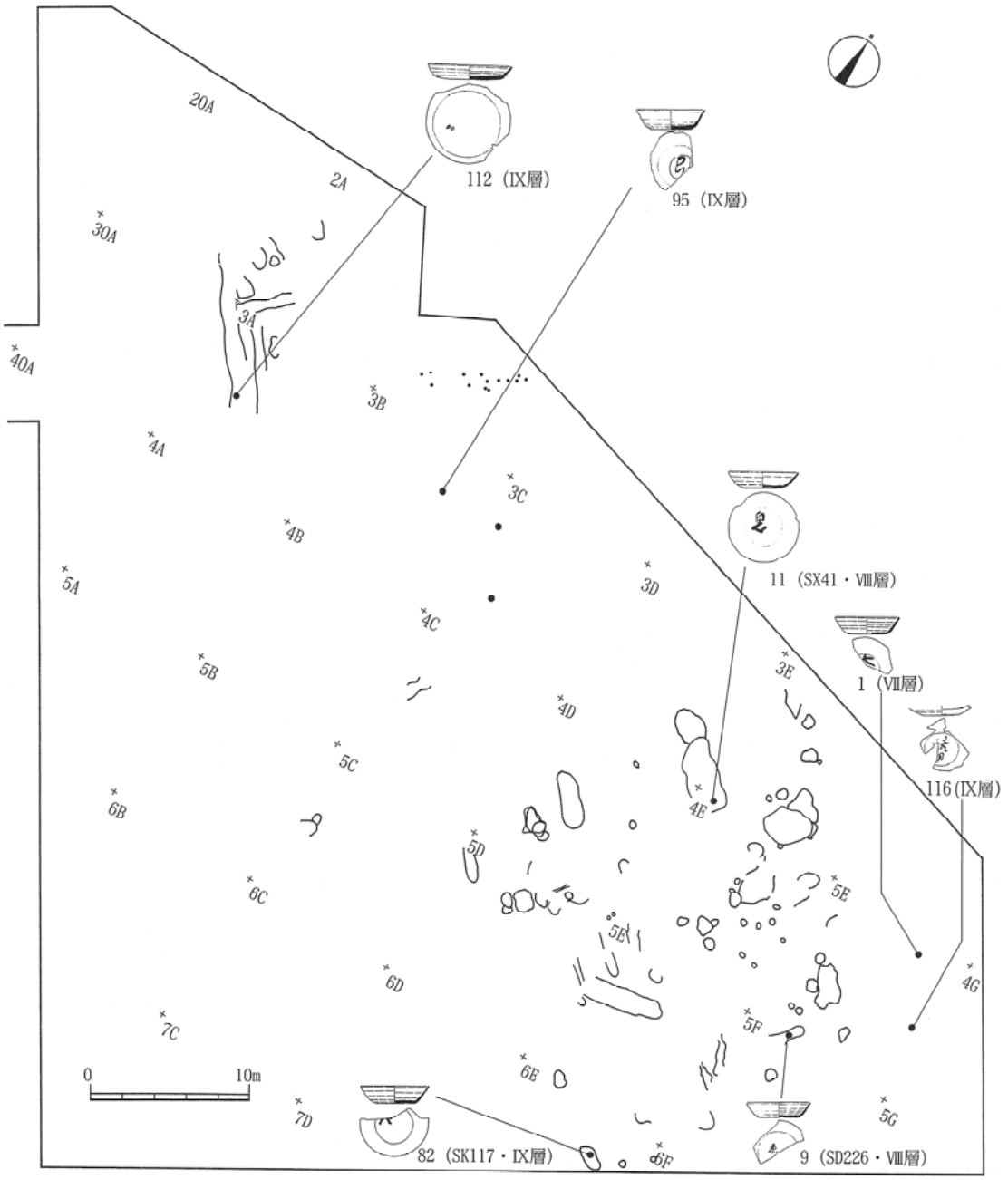
県内では最近出土例が増え、銅銙出土遺跡は12遺跡を数える。このうち蒲原郡内の遺跡は新潟市的場遺跡、茗荷谷遺跡、黒埼町緒立遺跡、釈迦堂遺跡、新津市上浦遺跡、加茂市馬越遺跡の６遺跡で、全体の半数を占める。銅銙については、８段階の規格が認められ、この８段階の規格差は、小初位、大初位と八位から六位までの正従八ランクの位階差に対応するものと想定されている[松村1996]。本遺跡出土の銅銙は長さ2.42cm、幅2.64cm、厚さ0.65cmを測り、従八位に相当し郡司の大領クラスが持つ大きさといわれる。的場遺跡出土の銅銙・巡方は従六位相当、丸鞆は正八位相当である。緒立遺跡出土の銅銙・巡方は正八位相当で、いずれも釈迦堂遺跡より上位の位階を持ち、遺跡の性格とも一致している。

第18表　銅銙出土遺跡

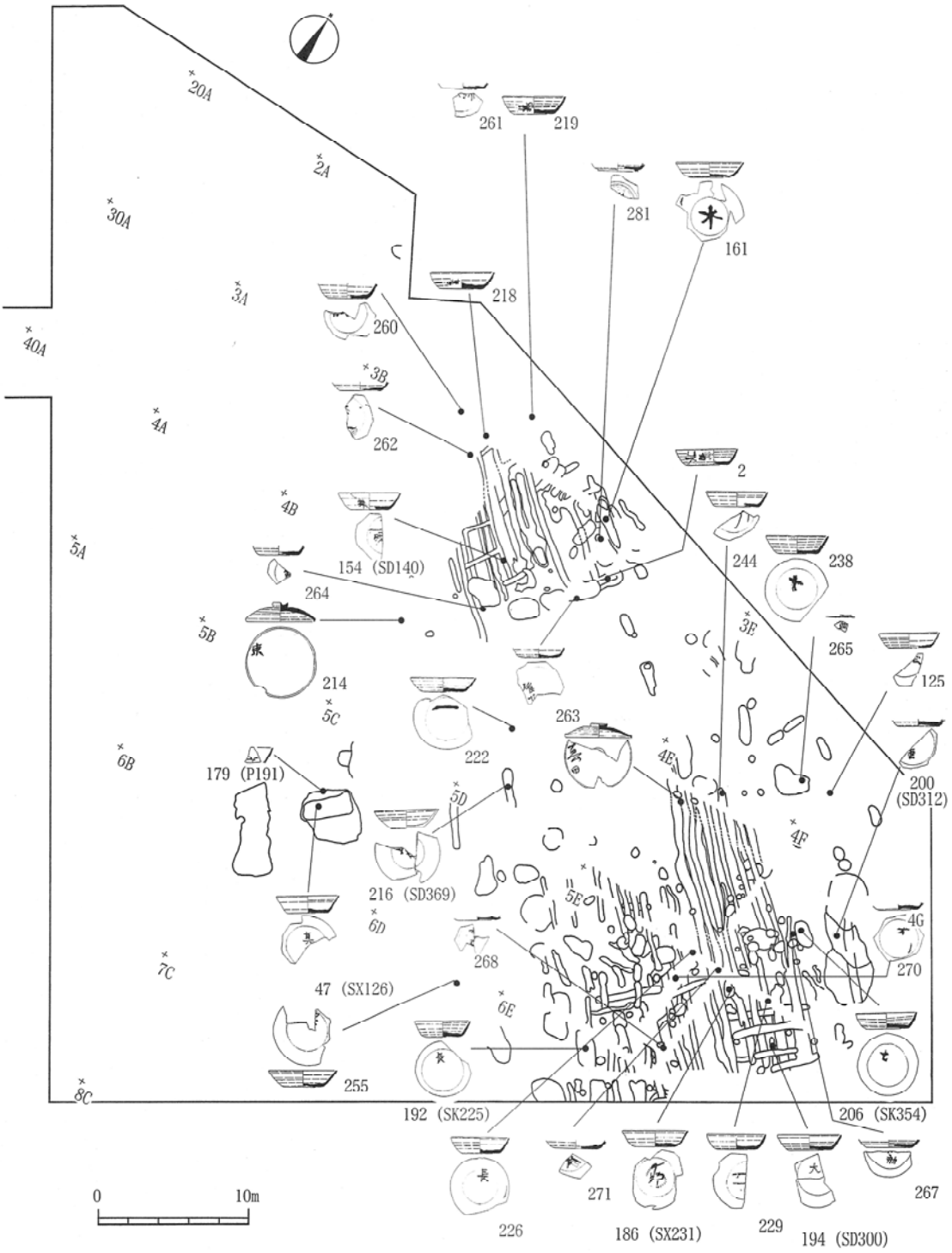
No.	遺跡名	所在地	丸鞆	巡方	その他	時期	備考
1	山三賀Ⅱ遺跡	北蒲原郡聖籠町	鉄銙・丸鞆		鉄銙・刺金	８～９Ｃ	
2	茗荷谷遺跡	新潟市	裏金具１点			８～９Ｃ	
3	的場遺跡	新潟市	２点	１点	刺金	８～10Ｃ	
4	緒立遺跡	西蒲原郡黒埼町		１点		８～９Ｃ	
5	釈迦堂遺跡	西蒲原郡黒埼町		１点		９Ｃ	
6	上浦遺跡	新津市	１点			７末～９Ｃ	
7	馬越遺跡	加茂市	１点			８～10Ｃ	石銙有り
8	八幡林遺跡	三島郡和島村		１点	鉈尾	９Ｃ	石銙有り
9	観音寺遺跡	南蒲原郡中之島町			鉈尾	９Ｃ	
10	栗原遺跡	新井市				９Ｃ	
11	箕輪遺跡	柏崎市	１点			９Ｃ	
12	馬場遺跡	佐渡郡相川町				９～10Ｃ	

Ｃ．墨書土器について

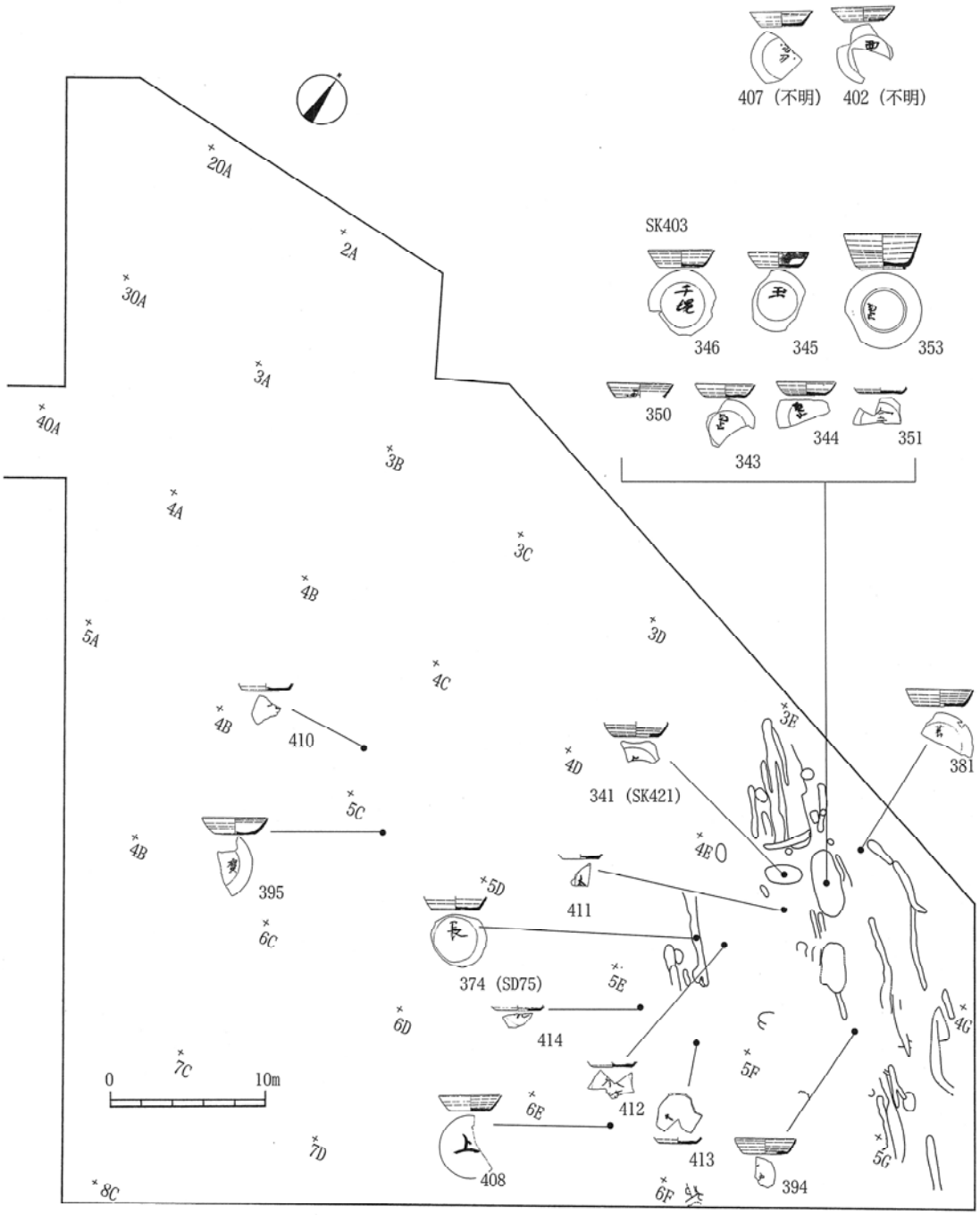
本遺跡で出土した墨書土器は、79点を数える。出土状況は包含層からの出土が多く、遺構が多く検出されている東側全体に散布している。「葛」の墨書土器は５点のうち４点が、２ＢＣ・３Ｃグリッドにある程度まとまって出土している。「与止」の墨書土器は全体で11点あるが、そのうち３点がSK403(３Ｅ19)、他の７点も３・４Ｆグリッドにある程度まとまって出土している。遺構出土分ではSK403(Ⅺ層)から７点まとまって出土しているのが目立つ。また、ほとんどが須恵器無台杯に書かれている。ほかは須恵器有台杯に書かれているもの２点、杯蓋に書かれているもの２点、無台盤に書かれているもの１点、土師器無台椀に書かれているもの２点である。緒立遺跡・的場遺跡出土の墨書土器と共通する文字もいくつかある。墨書の釈文については、新潟大学小林昌二氏、同大学院相沢央氏にご教示いただいた。新潟県内の墨書土器は「第５回新潟墨書土器検討会」[小林ほか2000]に拠った。石川県出土の墨書土器は『石川県出土文字資料集成』[(社)石川県埋蔵文化財保存協会1997]に拠った。墨書の文字は、内容別に以下のように分類できる。



第38図　墨書土器出土状況（Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層）



第39図　墨書土器出土状況（X層）



第40図　墨書土器出土状況（XI層・層位不明）

(1)郡に関係する墨書土器

「郡」(112)・・１点

「郡」あるいは「郡カ」とされる墨書土器が出土している遺跡は、県内で７遺跡を数える(第19表・第41図参照)。いずれも具体的な郡名は記されていない。これは、その遺跡が所属する郡のことを指しているので、あえて記載する必要がなかったものと考えられる。このことから、本遺跡出土の「郡」墨書土器も、遺跡の所在する蒲原郡を指しているものと考えられる。現在、蒲原郡衙は発見されていないが、官衙関連遺跡として的場遺跡・緒立遺跡があり、本遺跡との距離はおよそ４㎞である。蒲原郡内では「郡」の文字史料は本遺跡が初例である。無台盤は本遺跡では３個体出土しているが、一般に出土数が少なく、出土する遺跡の性格も限定される(いわゆる官衙関連遺跡)傾向があるようである。その無台盤を選択して「郡」の文字を記したことに意味があるのか、他の食膳具と同様に扱われたのか検討の余地が残る。「郡」の文字は、細い線で小さく記され、かなりの能筆によるものである。このような字形は８世紀前半のものに多いといわれ[平川1989]、八幡林遺跡、栗原遺跡出土のものと共通している。土器の時期は、９世紀第２四半期のもので、西側の湿地に当たるところからの出土である。

第19表　「郡」墨書土器出土遺跡

No.	遺跡名	所在地	種別	器種	文字の位置・大きさ	読み	土器の時期	遺跡の種別
1	曽根遺跡	北蒲原郡豊浦町	不明	有台杯	不明・小	「郡」		官衙関連遺跡
2	釈迦堂遺跡	西蒲原郡黒埼町	須恵器	無台盤	底部外面左・小	「郡」	９世紀第２四半期	集落
3	八幡林遺跡	三島郡和島村	須恵器	無台杯	底部外面左・小	「郡殿新」	８世紀後半	古志郡衙
4	八幡林遺跡	三島郡和島村	須恵器	無台杯	底部外面左・小	「郡」	８世紀後半	古志郡衙
5	八幡林遺跡	三島郡和島村	須恵器	無台杯	底部外面左・小	「郡佐」	８世紀後半	古志郡衙
6	八幡林遺跡	三島郡和島村	須恵器	有台杯	底部外面左・小	「郡」	８世紀後半	古志郡衙
7	八幡林遺跡	三島郡和島村	須恵器	有台杯	底部外面中央・中	「郡□（殿カ)」	８世紀後半	古志郡衙
8	八幡林遺跡	三島郡和島村	須恵器	有台杯	底部外面上・小	「郡」	８世紀末葉	古志郡衙
9	八幡林遺跡	三島郡和島村	須恵器	杯　蓋	内面左・中	「郡」	８世紀後半	古志郡衙
10	木崎山遺跡	中頸城郡柿崎町	須恵器	有台杯	底部内面左・大	「郡」		官衙関連遺跡
11	栗原遺跡	新井市	須恵器	杯　蓋	外面右・小	「郡」	８世紀前半	頸城郡衙
12	泉畑田遺跡	佐渡郡金井町	須恵器	有台杯	底部外面中央・大	「□（郡カ)」	８世紀後半？	
13	仲畑遺跡	佐渡郡真野町	須恵器	無台杯	底部外面上・中	「郡」	９世紀後半？	

(2)人名と思われる墨書土器

「千縄」(185・346)・・２点　　「犬」、「一」(270)・・１点

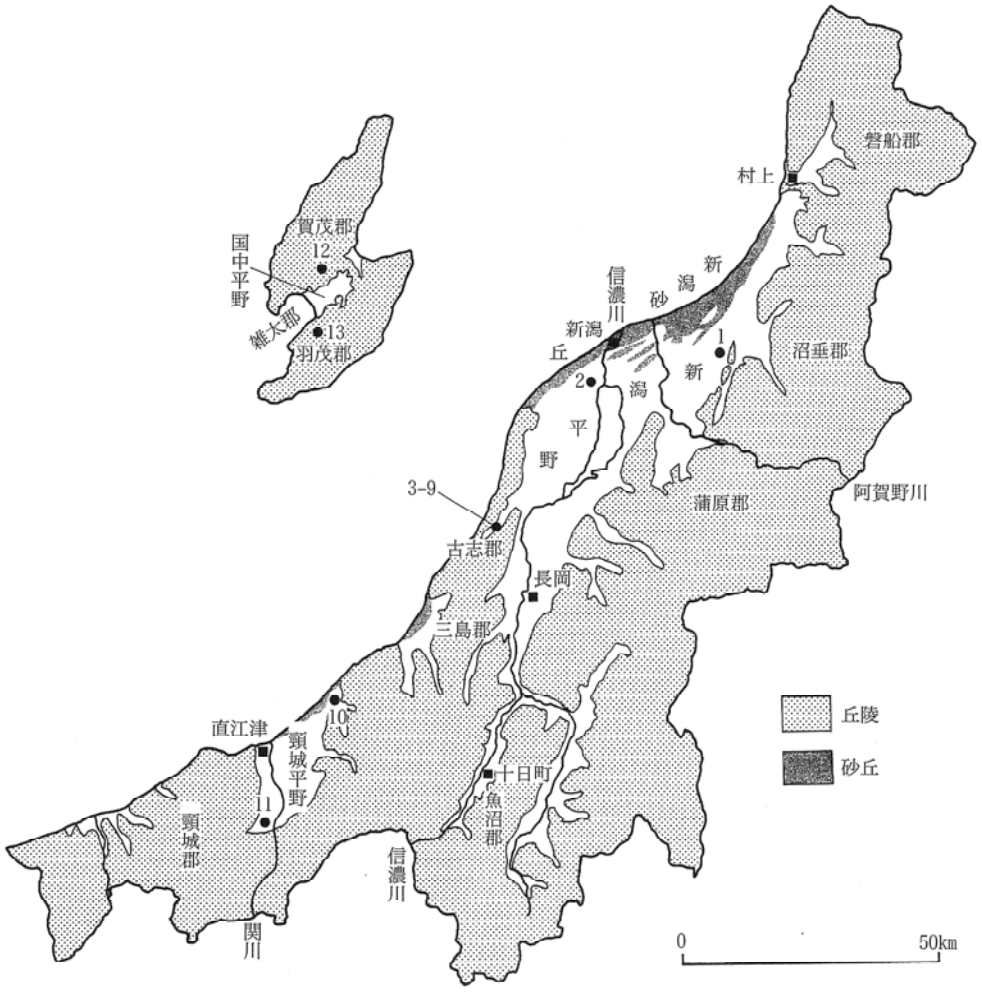
古代の人名には「縄」の文字を使用しているものがみられ、これも人名の可能性があり、「ちただ」と読める可能性がある。人名を記した墨書土器が的場遺跡に多数出土している。「黒人」、「廣成」、「赤万呂」、「吉万呂」などがあるが「縄」を使った人名は見当たらない。石川県金石本町遺跡に「真縄」、三小牛ハバ遺跡に「太縄」の類例がある。

「犬」、「一」も人名の可能性がある。「犬」のほか動物名を使った人名は一般的であり、「犬万呂」などがある。

(3)数字を表わした墨書土器

「一」(222)・・１点　　「二」(229)・・１点　　「七」(206)・・１点　　「十」(238・413)・・２点

「□(萬カ)」(381)・・１点



第41図　「郡」墨書土器出土遺跡の位置

数字を記した墨書土器は多くの遺跡で出土しているが、一般に一字の場合「三」「七」「八」「十」の文字を記す場合が多いといわれる。本遺跡では、「十」が２点出土している。土器の時期は９世紀第２～４四半期のものである。県内では「六」を集落の共通文字としている、妙高高原町中ノ沢遺跡[立木ほか1997]・関川谷内遺跡[小池1998]などがある。「□(萬カ)」は数字というよりも吉祥文字的な意味が強いかもしれない。

(4)方位を表わした墨書土器

「西」(402)・・１点

方位を表わすが、基点となる建物などがあると推定される。調査範囲が集落の西端に当たることから、東側にあると推定される遺跡の中心地を基点とすると考えられる。発久遺跡に「東」、新潟市小丸山遺跡に「西家」、新津市川口甲遺跡に「西水(木カ)田」、八幡林遺跡に「南」「北家」「南家」、越路町岩田遺跡に「東」、下新町遺跡に「東家」、真野町国分寺遺跡に「北」、豊栄市新五兵衛山遺跡に「東」、頸城村榎井Ａ遺跡に「北」「北館」、刈羽村払川遺跡に「南」の墨書土器の出土例がある。

(5) 一字で性格不明の墨書土器

「長」(82・191・226・374)・・４点　「大」(1・178・193)・・３点　「衣」(9)・・１点
「束」(283)・・１点　「玉」(345)・・１点　「廣」(395)・・１点　「㊣」または「㊢」(95)・・１点

「長」の墨書土器は４点出土しているが、底部外面の上に書かれるもの３点、左に書かれるもの１点で、すべて９世紀第２四半期のものである。191・374は横1画が足りない字形である。県内で「長」の墨書土器を出土している遺跡は、１字では的場遺跡、上越市一之口遺跡西地区、新井市月岡遺跡にある。他の文字との組み合わせでは、曽根遺跡で「長人」「大長」、的場遺跡で「乙長」、八幡林遺跡で「田長」「長長」が出土している。「長」の文字は仏教に関係の深い語として用いられるようでもある。

「大」の墨書土器は３点出土しているが、９世紀第２～３四半期のものである。178・193は細い線で記載している。やや太い線で記載されている１は、２点より時期が下がる可能性がある。県内では13遺跡で出土例がある。「大」は大きさを表わすとも考えられるが、曽根遺跡にのみ「大」「中」「小」の墨書土器がそろっているが、「大」のみの遺跡が多く、対象・基準が不明のため性格不明とする。

「衣」の墨書土器は１点のみである。越路町岩田遺跡、小千谷市金塚遺跡 [江口ほか1999] に出土例がある。

「束」の墨書土器は１点のみである。稲百把が１束、矢の長さを測る単位が束であるが、この墨書の場合の性格は不明である。県内に類例はない。

「玉」は９世紀第３四半期のものである。緒立遺跡、三和村吉田遺跡に出土例がある。

「廣」は９世紀第３四半期のもので、緒立遺跡に出土例がある。他の文字と組み合わせて「廣成」「廣麻呂」などの人名とする例がある。

「㊣」または「㊢」の墨書土器は、９世紀第２四半期のものである。「巳」の場合類例はないが、「弓」の場合長表遺跡に「弓公」の類例がある。文字を丸で囲むものはこの１点のみである。

(6) 記号と見られる墨書・漆書土器

「＊」(161)・・１点　「〰」(249)・・１点 (漆書)

「＊」は、「水」または「木」とも読める可能性があるが、ここでは記号とした。性格は不明である。的場遺跡に類例がある。

「〰」は、記号とした。性格は不明である。漆書きはこの１点のみである。

(7) 二字で性格不明の墨書土器

「与止」(125・199・255・341・343・344・353)・・７点　「家刀」(116・407)・・２点
「全□ (万カ)」(351)・・１点　「碓□ (下カ)」(263)・・１点

「与止」は合わせ文字で、上下に密着させて１文字のように見せている。同一文字を記した墨書では最も多い字形で７点の出土である。この文字に対する集落内の共通認識があったものと考えられる。県内に類例は見出せない。土器の時期は９世紀第２四半期のものが４点、９世紀第３四半期のものが３点と時期差がある。また、同一時期でも同筆でないため字形に差がある。「与止」は「よと」と読むようであるが、性格は不明である。『倭名類聚鈔』巻第十の「殿」の項目に「寝殿　四聲云寝七稔反和名禰夜方言腰云與止乃寝室也」とある (下線筆者、平川南氏ご教示) のが参考になる可能性がある。また、『日本国語大辞典』では、「よと」は「よどの (夜殿) に同じ。」とある。しかし、「与止」が寝殿の読みを表わす可能性が高いとし

ても、建物跡が検出されていないことから、そのような建物、あるいは建物の一室を指す空間が存在した可能性を指摘するに止める。ほかに『倭名類聚鈔』に磐船郡に「餘戸」郷があったとされるが、関係は不明である。

「家刀」の墨書土器は２点あるが、性格は不明である。刀の下に文字がないことは明らかだが、「家刀自」を省略している可能性も考えられる。「刀自」は古代では女性の一般名称、豪族女性の社会的尊称、女性の家統括者、最下層の女官などに用いられた。「家刀自」とは家内部を管理統率した女性を指す言葉である。「刀自」の墨書の例は県内にはないが、石川県小松市荒木田遺跡から「刀自」「荒木力(刀)自」、金沢市金石本遺跡から「刀自」「阿刀自」などの墨書が出土しているが、「自」の文字を省略したものはない。

「全□(万カ)は性格不明である。

「碓□(下カ)」も性格不明である。

(8)「葛」の文字を使用した墨書土器

「葛」(体部) (218･219) ・・２点　　「□(葛カ)水」(体部) (235) ・・１点

「上」(底部) ・「葛」(体部) (408) ・・１点　　「□□(所カ)」(底部) ・「葛」(体部) (154) ・・１点

「葛」の文字は方向の違い(右３・左２)はあるが、いずれも体部に書かれている。「葛」の文字は体部に書くという作法の存在が伺える。「与止」に次いで多い字形である。和名は「かずら(かづら)」と読み、山野に自生するつる草の一種である。茎の繊維は布を織るのに用い、根は薬用また葛粉をつくる。県内および石川県にも類例はない。墨書土器が出土する遺跡が多数ある千葉県でも、わずかに山武郡大網白里町南麦台遺跡[山口1994]で、推定も含め12点の「葛」の墨書土器(９世紀代全般)が出土している。体部に書かれるもの４点、底部に書かれるもの８点で、この遺跡では底部に書かれる場合のほうが多い。わずか３県しか確認していないが極めて類例の少ない文字と考えられる。南麦台遺跡の報告では「桂」の地名が近接する茂原市に残っていることから、葛城氏との関係を指摘している。葛城氏は、大和国葛城地方を本拠とした古代の豪族で、５世紀に大王家の外戚氏族として勢力を誇っていたが、５世紀末には勢力が衰え没落したものと考えられる。葛城氏没落後、蘇我氏がその基盤を継承した。北陸では越前国司解に「葛城部」、平城京から出土した加賀国の付札に「葛城部」の文字がある[小林1996]。慶雲２(705)年に越後守(国の長官)に任じられた、威名真人大村が同４年越城で病没しているが、その墓誌によると、その年十一月に「(前略)帰葬　大倭国葛木下郡山君狛井山岡、(後略)」とあり、威名真人大村の本貫が大倭国葛木下郡にあった事が知られる。越城がどのような施設を指すか不明であるが、越後と葛城との関係を示すものは、この資料のみである。「葛」とともに底部に書かれている「上」や「□□(所カ)」の文字が、どのように関係するのかは不明である。また、「□(葛カ)水」の性格も不明である。

(9)「真」の文字を使用した墨書土器

「真」(11) ・・１点　　「真田」(288) ・・１点　　「真□(47) ・・１点

「真」１字と、その他の文字を組み合わせたものがある。「真」の１字の墨書は加茂市馬越遺跡に出土例がある。「真」は一般的に墨書されることが多い文字で、人名に使われることも多い文字であるが、「真田」は性格不明である。

3．自然科学分析結果について

A．火葬関連遺構

ＳＸ１２６　土壌の分析結果によると、比較試料より、リン・カルシウム値が高いという結果が得られた。特に３層の炭化物層の値が高くなっている。２層の粘土層がリン・カルシウム値が低いことは人為的な埋土のためと考えられる。また、１層の炭化物層のリン・カルシウム値が低いことは、リン酸などの成分が粘土粒子などとともに下方へ移動したためと考えられている。SX126は遺体を荼毘に付した火化遺構と考えていたが、分析結果によってほぼ裏付けられたといえよう。

ＳＫ１００・１１６・３２５、ＳＸ１２６　木炭・生木の樹種同定を行ったが、ヒノキ属が含まれている事が判明した。ヒノキ属は有用材であり、曲物などの素材として利用されていた事が知られ、そのため、これらのヒノキ属は燃料材ではなく、副葬された木製品等に由来する可能性が指摘されている。火葬の際に木製品を入れる作法が存在したかどうかは不明であるが可能性はあろう。または、木棺に使用された材の可能性もある。

B．溝状遺構

ＳＤ２５０・２６５・２７３・２８１・２９９　栽培植物のイネ属が検出されている。このことから、平安時代に少なくとも本遺跡周辺で稲作が行われていたことが推定されている。稲作の可能性のある地点は、集落の西側(地点２に当たる)に広がっていたと考えられる湿地である。地点２では、二次堆積の可能性もあるが、イネ科の花粉も検出されている。

ＳＤ２７３　２層からイネ属の産出が目立つ。遺構によってイネ属の出現状況に偏りがあることから、稲ワラや籾殻などを農業肥料や農業資材として利用したことを反映している可能性が指摘されている。発掘中も溝状遺構から炭化したワラが出土することが度々あり、上記の可能性は高い。残念ながら溝状遺構からは、明確な栽培種の花粉は検出されなかったが、畑という推定は揺るがないものと考える。他の遺跡の例では、９世紀末から10世紀初頭の亀田町牛道遺跡[立木1999]の畝状遺構からは、ワタ・アブラナ科の花粉および植物珪酸体の分析から稲作の可能性が指摘されている。

要　約

1．釈迦堂遺跡は新潟県西蒲原郡黒埼町大字木場字大南1,134番地ほかに所在する。

2．遺跡は信濃川左岸、沖積地の低湿地の自然堤防上に立地し、標高は約0.2mである。

3．発掘調査は北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事に伴う緊急発掘調査である。調査面積は13,600㎡である。

4．遺物包含層は間層を挟んで５層確認された。これらの間層は洪水による堆積と考えられる。貞観５(863)年に発生した大きな地震の地割れなどの痕跡が確認された。さらに後の地震による噴砂も確認され、遺跡は古代において少なくとも２回の地震に見舞われている。

5．遺構は火葬灰埋納土坑と火化遺構が検出されている。また、多数の畑の畝と考えられる溝状遺構や土坑が検出されている。今回の発掘調査対象地は集落の西端に当たると考えられ、建物跡は検出されていないが、遺物の出土状況等から見て東側に居住地があるものと想定される。西側には湿地が広がっていたと考えられる。

6．遺物の時期幅は９世紀全般であるが、集落がもっとも安定して営まれていた時期は、９世紀第２四半期である。須恵器は佐渡小泊窯跡群産が主体を占める。

7．墨痕のみのものを含め79点の墨書土器が出土している。「郡」「与止」「葛」「長」など多種あるが、「郡」の墨書土器は古代の蒲原郡内では初例である。

8．円面硯、鉄鉢、塼状土製品などが出土し、遺構は検出されていないが、「村落内寺院」の存在が推測される。

9．「郡」の墨書土器、銅銙の出土、火葬の実施など集落内に一定の有力者の存在が考えられる。

引用・参考文献

青木　宏　1964『越後木場城―戦乱の蒲原歴史と木場城址について―』黒埼村教育委員会

網野善彦ほか　1998『歴史時代の考古学』シンポジウム日本の考古学５　(株)学生社

家田順一郎　1981『曽根遺跡Ⅰ』豊浦町教育委員会

家田順一郎　1982『曽根遺跡Ⅱ』豊浦町教育委員会

石井則孝　1985『陶硯』考古学ライブラリー42　ニューサイエンス社

(社)石川県埋蔵文化財保存協会編　1997『石川県出土文字資料集成』

伊藤秀和　1998・1999『馬越遺跡現地説明会資料』平成10・11年度　加茂市教育委員会

宇佐美龍夫　1987『新編日本被害地震総覧』

内堀信雄　1988「須恵器甕にみられる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集

江口友子ほか　1999「金塚遺跡」『金塚遺跡・三仏生遺跡・割目Ａ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第92集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

岡田和則　2000「木簡に「馬家村の文字―箕輪遺跡―」埋文にいがたNo.29　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1995「新潟県の奈良・平安時代の墓制について」『東日本における奈良・平安時代の墓制―墓制をめぐる諸問題―』東日本埋蔵文化財研究会編

春日真実　1997『上郷遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集　新潟県教育委員会(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実ほか　1998「第二章原始・古代―緒立遺跡―」「第三章中世第一節釈迦堂遺跡」『黒埼町史資料編一原始・古代・中世』黒埼町

建設省　1999「北陸の誇る社会資本(2)『けんせつほくりくNo.360』

黒崎　直　1980「近畿における８・９世紀の墳墓」『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報(第38冊)奈良国立文化財研究所

黒崎　直　1996『古代の農具』日本の美術第357号　至文堂

小池邦明　1999『山木戸遺跡第2次発掘調査概報』新潟市教育委員会

小池義人　1998『関川谷内遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

古代城柵官衙遺跡検討会　1999「山形県の官衙関連遺跡　太夫小屋１遺跡」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

小林昌二　1995「第二章第三節第二項畿内政権と新潟」「第三章第一節国郡の形成」「第三章第三節古代港湾蒲原津と荘園公領」『新潟市史通史編１原始古代中世近世(上)』新潟市

小林昌二　1996「越地域における部民分布の再検討―北陸地域の出土文字資料と氏族分布―」『越と古代の北陸』古代王権と交流３名著出版

小林昌二ほか　2000『第5回新潟墨書土器検討会』新潟墨書土器検討会

小林義孝　1992「灰を納めた土壙」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集

小林義孝　1997「古代火葬墓の第一類型(上)—河内田辺古墓の再検討から—」『大阪府文化財研究第13号』(財)大阪府文化財調査研究センター

小林義孝　1998「古代火葬墓の第一類型(下)—河内田辺古墓の再検討から—」『大阪府文化財研究第14号』(財)大阪府文化財調査研究センター

坂井秀弥　1984『今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集　新潟県教育委員会

坂井秀弥　1989『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集　新潟県教育委員会

坂井秀弥　1996「水辺の古代官衙遺跡—越後平野の内水面・船運・漁業—」『越と古代の北陸』古代王権と交流３名著出版

須田　勉　1985「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢Ⅱ—早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集—』

関　雅之ほか　1973「西蒲原郡黒埼町釈迦堂遺跡調査報告」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』埋蔵文化財緊急調査報告書 第１　新潟県教育委員会

高橋　勉　1991「古代葬送の一形態」『新潟考古学談話会会報第8号』新潟考古学談話会

高橋　勉・山本肇・飯坂盛泰　1999「第4章第3節集落と寺院・官衙」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院

田中久夫ほか　1996「平野の自然と人類史—越後平野を例にして—」第四紀研究Ｖｏｌ.35Ｎｏ.3　日本第四紀学会

田中広明　1990・1991「律令時代の身分表象(Ⅰ)(Ⅱ)」『土曜考古』第15・16号　土曜考古学研究会

立木由理子ほか　1997『中ノ沢遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第84集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

立木由理子　1999『牛道遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第91集　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

出越茂和　1998「古代石川における山と里の寺」『杉野屋専光寺遺跡』志雄町教育委員会

虎尾俊哉　1995『古代東北と律令法』(株)吉川弘文館

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター編　1983『埋蔵文化財ニュース41陶硯関係文献目録』

仲山英樹　1995「古代東国における墳墓の展開とその問題点」『東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—』東日本埋蔵文化財研究会

新潟県　1986『新潟県史　通史編１　原始・古代』

新潟市史編さん原始古代中世部会編　1994「第五章奈良・平安時代第三節信濃川以西的場遺跡」新潟市

平川　南ほか　1989「古代集落と墨書土器—千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合—」『国立歴史民俗博物館研究報告第22集』

平川　南　1991「墨書土器とその字形—古代村落における文字の実相—」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』

平川　南　1996「里刀自小論—いわき市荒田目条里遺跡第二号木簡から—」『国立歴史民俗博物館研究報告書第66集』

平川　南　1997「一古代出土文字資料の語るもの」『新しい史料学を求めて』歴博大学院セミナー国立歴史民俗博物館編　(株)吉川弘文館

藤巻正信　1998「陰陽石ー異形漁撈錘ー」『新潟考古学談話会会報第19号』新潟考古学談話会
北陸古瓦研究会編　1987『北陸の古代寺院ーその源流と古瓦ー』桂書房
前島己基　1984『横滝山廃寺跡発掘調査概報ー昭和58年度第３次調査ー』寺泊町教育委員会
松村恵司　1995「古代東国集落の諸相…村と都の暮らしぶり」『古代の集落ーしもつけのムラとその生活』
栃木県立しもつけ風土記の丘資料館第９回企画展　栃木県教育委員会
松村恵司　1996「古代集落と在地社会」『土地と在地の世界をさぐるー古代から中世へー』山川出版社

遺構観察表

規模の上端・下端・深度の単位はｃｍである。

種別	No.	位置	層位	上端	下端	深度	平面形	方向	出土遺物・土師器	出土遺物・須恵器	出土遺物・その他	備考
SK	1	3E23	Ⅷb	300 × 220	266 × 182	9	楕円形	N−73°−E	無台椀、小甕、長甕	無台杯		
SX	2	4E18	Ⅷb	×(45)	×(28)	11			長甕	杯蓋		
SX	3	4E23・24	Ⅷb	×(55)	×(38)	18			長甕			
SK	4	3E13	Ⅸb	(106)×(80)	60 × 32	15	不整楕円形	N−52°−E	無台椀、小甕、長甕、黒色土器無台椀	無台杯、甕類		
SX	5	3E24	Ⅸb	(140)×(90)	115 ×(57)	16			小甕、長甕		土錘	
P	6	3E18	Ⅸb	67 × 62	34 × 27	10						
SK	7	4F12	Ⅸb	×	×	15			無台椀、長甕	無台杯		
SK	8	4E3	Ⅸb	× 112	× 38	15						
SK	9	4E5	Ⅸb	× 111	× 76	9			長甕			
SK	10	4E13	Ⅸb	90 × 76	57 × 48	13		N−14°−W	小甕			
SK	11	4F17	Ⅸb	87 × 78	60 × 58	5		N−67°−W	無台椀、長甕	無台杯		
P	12	4E10	Ⅸb	38 × 23	30 × 13	8						
P	13	4E15	Ⅸb	107 × 80	×	13			長甕			
P	14	4E14	Ⅸb	27 × 23	16 × 8	12						
P	15	4E14	Ⅸb	42 × 29	12 × 10	15			無台椀、長甕、小甕	無台杯		
P	16	4E13	Ⅸb	25 × 16	13 × 8	9						
P	17	4E8	Ⅸb	28 × 24	15 × 13	7						
P	18	4E15	Ⅸb	25 × 15	14 × 7	5						
P	19	3E20	Ⅸb	32 × 18	15 × 12	19			長甕			
P	20	4E19・20	Ⅸb	37 × 25	20 × 12	11						
P	21	4E18	Ⅸb	(41)× 35	(32)× 15	12			無台椀			
P	22	4F22	Ⅸb	45 × 41	27 × 26	11						
P	23	4F11・12	Ⅸb	60 × 48	40 × 35	12			長甕	無台杯		
P	24	4F22	Ⅸb	32 × 26	18 × 14	17						
SK	25	4E18	Ⅸb	(68)× 60	(40)× 36	7		N−72°−W	長甕			
P	26	3E23	Ⅸb	(41)×(40)	20 × 20	9						
P	27	4E3	Ⅸb	× 21	× 9	14						
SX	28	3E18・19・23・24	Ⅸb	205 × 195	×				小甕	無台杯		
P	29	4E4	Ⅸb	26 × 25	19 × 17	8			長甕			
SK	30	4E18	Ⅸb	114 ×(88)	(89)× 57	22		N−44°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯		
焼土	31	3E13	Ⅸb	29 ×(22)	×	7			長甕			
P	32	3E18	Ⅸb	45 × 36	30 × 27	10			小甕、長甕	無台杯		
SG	33	4F18・23	Ⅸb	85 × 51	×							
SX	34	4E9・14	Ⅸb	×(181)	×(103)	13			小甕、長甕	無台杯		
SX	35	4F12・13・17・18	Ⅸb	(265)× 130	(172)× 67	37			無台椀、小甕、長甕	無台杯	土錘	
SX	36	3F16	Ⅹa	×	×				無台椀、小甕、長甕、 鍋	無台杯、有台杯、杯蓋、壷瓶、甕		
SK	37	3E9・14	Ⅹb	160 × 40	141 × 25	20	楕円形	N−18°−E	小甕、長甕			
SK	39	3E12・17・18	Ⅹb	260 ×(69)	210 ×(35)	13	楕円形	N−38°−W		無台杯		
SK	40	4E3	Ⅹb	×(53)	×(25)	9				無台杯		
SX	41	3D・3E	Ⅷb	(458)×(210)	(400)×(155)	15	不整楕円形		無台椀、盤、小甕、長甕	無台杯、杯蓋、壷瓶、横瓶	川原石216個9,529.8g	
SX	42	3E21	Ⅹb	×(105)	×(97)	13	不整楕円形		長甕	無台杯、壷瓶		
SX	43	3E6	Ⅹb	×(145)	×(127)	11	不整形		小甕、長甕	無台杯		
P	44	3E12	Ⅹb	70 ×(44)	42 ×(22)							
SK	51	3E13・14	Ⅹb	107 × 56	87 × 29	28	隅丸長方形	N−31°−E	無台椀、小甕、長甕	無台杯、有台杯、甕		
P	55	3E17・22	Ⅹb	53 × 38	18 × 15	13	楕円形					
SK	58	4E2・3	Ⅹb	159 ×(110)	94 ×(53)	27	楕円形	N−67°−E	無台椀、小甕、長甕	無台杯、甕	土錘	

種別	No.	位　置	層位	上　端	下　端	深度	平面形	方　向	出土遺物・土師器	出土遺物・須恵器	出土遺物・その他	備　考
P	60	3E・18・23	Ⅹb	39 × 34	21 × 11							
SX	61	3E19・20・24・25	Ⅹb	263 ×(153)	×(42)				小甕、長甕			
P	62	3E24	Ⅹb	(46) × (32)	(28) × (17)							
P	63	4E4	Ⅹb	26 × 20	10 × 8	12						
P	65	4E17	Ⅸb	60 × 49	23 × 22	6	不整楕円形		小甕、長甕	無台杯、杯蓋		火葬灰埋納土坑
P	67	4F2	Ⅹb	85 × 58	70 × 47	7	楕円形					
P	68	4F3	Ⅹb	(78) × (74)	(50) × (50)	16	円形			甕		
SK	69	3E18	Ⅹb	132 × 59	118 × 49	13	楕円形	N−51°−W	無台椀、長甕	無台杯		
P	70	4F1	Ⅹb	78 × 62	30 × 26	10	円形		長甕	甕	碁石又は双六子	
P	71	4E17	Ⅹb	× 47	× 27	14			長甕	無台杯		
SD	75	4E6・12・18	Ⅺb	× 60	× 42	14		N−43°−W	無台椀、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋、壷瓶、甕		溝状遺構群3
SX	76	4E17	Ⅹb	13 × 13	×					甕		
SD	77	4E17・22	Ⅺb	× 64	× 34	18		N−45°−W	無台杯、小甕、長甕	有台杯、甕		溝状遺構群3
SD	78	4E22・23	Ⅺb	× 46	× 24	11		N−45°−W	無台椀、小甕、長甕	有台杯、杯蓋、壷蓋		
SX	79	4E17	Ⅺb	82 × 50	66 × 36	7			小甕、長甕	甕		
SX	88	4D17	Ⅷb	176 × 125	116 × 57	22	不整形		小甕、長甕、黒色無台椀	無台杯		
P	91	3D19	Ⅹb	31 × 31	20 × 20	16	円形					
SD	92	5E6〜8・11〜13	Ⅷb	×(132)	×(69)	24		N−77°−E				
SD	93	5E6	Ⅷb	×(60)	×(26)	23		N−52°−W	無台椀、長甕	無台杯		
P	94	5D3	Ⅷb	×(74)	×(21)	21	不整形					
P	95	5E2・3	Ⅷb	×(88)	×(30)	19	楕円形		小甕、長甕			
P	96	5E11	Ⅷb	×(33)	×(12)	26	楕円形					
SK	97	5F16	Ⅷb	×(116)	×(43)	24			長甕		鎌	
SX	98	5B3	湿地部	× 176	×(105)	20			長甕			
P	99	4D20	Ⅷb	×(72)	×(24)	8	円形					
SK	100	2A6	Ⅸb	(115) × (60)	(86) × 33	23	隅丸長方形	N−41°−W		無台杯、有台椀		火葬灰埋納土坑
P	101	2B18	Ⅸb	10 × 9	×							
SK	102	3A2	Ⅸb	132 ×(60)	93 × 22	14	隅丸長方形	N−31°−W				火葬灰埋納土坑
SK	103	5D3	Ⅸb	×(82)	×(38)				長甕	無台杯		
P	104	4D9・10・14・15	Ⅸb	54 × 42	20 × 19	9						
SK	105	5D1・6	Ⅸb	×(70)	×(24)	13			小甕、長甕、無台椀			
P	106	5D7・8	Ⅸb	85 × 66	30 × 28	14						
P	107	5D8	Ⅸb	51 × 50	24 × 22	8				無台杯		
SK	108	5D3・8	Ⅸb	134 × 133	110 × 72	22	隅丸方形	N−04°−W	小甕、長甕、黒色無台椀	無台杯		
P	109	4D17	Ⅸb	82 × 74	50 × 49	15		N−06°−W	小甕、長甕			
SK	110	4D17	Ⅸb	142 × 75	110 × 55	20		N−37°−W				
SX	111	5F7	Ⅸb	79 × 77	37 × 34	6			小甕			
SK	112	3D19・20	Ⅸb	252 × 170	200 × 129	20	不整楕円形	N−76°−W	無台椀、小甕、長甕、黒色無台椀	無台杯、有台杯、杯蓋		
P	113	4D17	Ⅸb	65 × 49	43 × 30	7						
SK	114	5E・6E	Ⅸb	113 × 68	73 × 42	10	不整楕円形	N−39°−W		無台杯、甕		
P	115	5E24・25	Ⅸb	×(47)	×(28)	14						
P	116	7C9	Ⅸb	75 × 42	30 × 19	19	楕円形	N−50°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯		火葬灰埋納土坑
SK	117	6E9	Ⅸb	(150) × 90	64 × 43	15	不整楕円形	N−57°−W	小甕、長甕	無台杯、有台杯、甕		
SX	118	4C6・7・11・12	Ⅸb	×(93)	×(60)	7			小甕、長甕	無台杯		
SX	119	5C11	Ⅸb	(110) × (88)	×	4			小甕、長甕	無台杯、壷瓶		
P	120	5C11	Ⅸb	59 × 45	45 × 25	6			小甕			
SX	121	3A15	Ⅸb	× 88	× 68	6	不整形					
木道	122	3A	Ⅸb	×	×							
SK	123	4D12・13・18	Ⅸb	354 × 127	307 × 98	65	隅丸長方形	N−45°−W	無台椀、小甕、長甕、黒色無台椀	無台杯、壷瓶	土器片円盤	大型土坑

種別	No.	位　置	層位	上　端	下　端	深度	平面形	方　向	出土遺物・土師器	出土遺物・須恵器	出土遺物・その他	備　考
P	124	4D3・4	Ⅸb	38 × 29	13 × 10	12			無台椀			
SK	125	3C・3D	Ⅹb	× 120	× 73	26	不整楕円形		無台椀、小甕、長甕、鉢	無台杯、有台椀、壷瓶	土錘	
SX	126	5C12・13・17・18	Ⅹb	360 × 353	250 × 63	30	隅丸長方形	N−44°−E	無台椀、小甕、長甕、黒色無台椀	無台杯、有台杯、杯蓋、壷瓶、甕	銅銙、土器片円盤、土錘	火化遺構
杭列	127	2B	Ⅸb	×	×							杭14本
SX	128	2A8	Ⅹb	× 76	×							
SK	129	5C7	Ⅹb	×(108)	×(95)	30			長甕	壷瓶		
P	130	4C7	Ⅹb	50 × 33	27 × 17	8		N−42°−W	長甕			
SK	131	3C4・5	Ⅹb	186 × 85	116 × 37	12	隅丸長方形	N−47°−W	小甕、長甕	無台杯、壷瓶		火葬灰埋納土坑
SK	132	3C15・20	Ⅹb	×(155)	×(55)	18	不整楕円形		小甕、長甕	無台杯	土錘	
SK	133	4D1・2	Ⅹa	(155)× 81	(110)× 36	20	楕円形	N−47°−E	小甕、長甕	無台杯、有台杯、無台椀、壷瓶		
P	134	4D17	Ⅹb	75 × 67	49 × 36	12	楕円形		長甕	無台杯		
SK	135	3D12・13	Ⅹb	152 × 63	90 × 27	14	楕円形	N−57°−W	無台椀、小甕	無台杯、壷瓶		
SX	136	3D19	Ⅹb	225 × 75	216 × 61	12	不整形		小甕、長甕	有台杯		
P	137	3D13	Ⅹb	30 × 29	15 × 15	29	円形		無台椀			
SD	138	3C22	Ⅹb	228 × 22	206 × 6	10		N−48°−W		無台杯		溝状遺構群1
SD	139	3C・4C	Ⅹb	× 38	× 14	9		N−51°−W	小甕、長甕			溝状遺構群1
SD	140	3C6・7・12・13・18	Ⅹb	× 36	× 12	16		N−40°−W	小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群1
SD	141	3C17	Ⅹb	× 24	× 10	8		N−32°−E	長甕			溝状遺構群1
SD	142	3C17	Ⅹb	× 26	× 10	11		N−45°−W				溝状遺構群1
SD	143	3C11・12	Ⅹb	× 28	× 10	8		N−38°−E		壷瓶		溝状遺構群1
SD	144	3C12	Ⅹb	× 24	× 10	7		N−48°−W				溝状遺構群1
SD	145	3C12・18	Ⅹb	× 40	× 12	9		N−51°−W	長甕			溝状遺構群1
SD	146	3C6・7・12・13	Ⅹb	× 78	× 18	13		N−50°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、有台杯		溝状遺構群1
SD	147	3C1・2・7・8・13	Ⅹb	× 76	× 32	14		N−49°−W	小甕、長甕、鉢	無台杯		溝状遺構群1
P	148	3D10	Ⅹb	65 × 60	25 × 24	12	円形					
P	149	3D2	Ⅹb	98 × 75	47 × 30	21	楕円形		小甕、長甕	壷瓶		
SK	150	4E8・9・13・14	Ⅸb	×(121)	×(74)	17			小甕、長甕	無台杯		
SD	151	3C2・7・8・9	Ⅹb	×(120)	×(30)	10		N−55°−W	無台椀、小甕、長甕、鉢	無台杯、杯蓋	土錘	溝状遺構群1
SD	152	3C2・3・8・9・14・15	Ⅹb	× 40	× 18	16		N−55°−W	小甕、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋	土錘	溝状遺構群1
SD	153	3C3	Ⅹb	×(180)	×(140)	21		N−51°−W	小甕、長甕	壷瓶		溝状遺構群1
P	154	5D8	Ⅹb	61 × 52	25 × 11	10		N−80°−W	小甕			
SD	155	3D10	Ⅹb	× 37	× 13	10		N−11°−E	小甕			溝状遺構群1
SK	156	4E・4F	Ⅸb	× 217	× 83	19			小甕、長甕、鉢	無台杯、有台杯、杯蓋		
SK	157	3C17・18・22・23	Ⅹb	252 × 155	60 ×	25	不整楕円形	N−06°−E	小甕、長甕	無台杯、有台杯		
SK	158	3C4	Ⅹb	(105)× (48)	68 × 22	38	楕円形	N−50°−W				
SD	159	5D1・6	Ⅹb	× 35	× 14	10		N−40°−W				溝状遺構群1
SD	160	3D6	Ⅹb	× 32	× 16	14		N−34°−E	小甕、長甕	有台杯		溝状遺構群1
SD	161	3D6	Ⅹb	× 40	× 24	14		N−37°−E	小甕、長甕、鍋	無台杯、壷瓶、甕		溝状遺構群1
SD	162	2C23	Ⅹb	× 40	× 18	14			小甕、長甕	無台杯	土錘	溝状遺構群1
P	163	6F10	Ⅹb	36 × 35	21 × 14	42			長甕	甕		
P	164	6F1	Ⅸb	39 × 26	12 × 11	30			小甕	無台杯		
SD	165	3C・3D	Ⅹb	× 40	× 12	22		N−51°−W	小甕、長甕	無台杯、有台杯、壷瓶、甕		溝状遺構群1
SD	166	2C・3D	Ⅹb	× 45	× 10	25		N−56°−W	長甕	無台杯、壷瓶		溝状遺構群1
SD	167	3C5	Ⅹb	× 32	× 15	12		N−35°−W	小甕、長甕	無台杯、杯蓋		溝状遺構群1
P	168	2C25	Ⅹb	(95)× (54)	(48)× (17)	35	楕円形		無台椀、小甕、長甕、鍋	無台杯、壷瓶		
SD	169	2C・2D	Ⅹb	260 × 26	220 × 8	10		N−88°−E	無台椀、長甕			溝状遺構群1
SK	170	2C・3C・3D	Ⅹb	×	×	75		N−54°−W	無台椀、小甕、長甕、鍋	無台杯、有台杯、杯蓋、壷瓶	土錘	
P	171	3C5	Ⅹb	(37)× (33)	(19)× (19)	23			小甕、長甕			
SD	172	3C18	Ⅹb	× 30	× 14	9		N−25°−E		無台杯、杯蓋		溝状遺構群1

種別	No.	位　置	層位	上　端	下　端	深度	平面形	方　向	出土遺物・土師器	出土遺物・須恵器	出土遺物・その他	備　考
SK	173	3C19・20・24・25	X b	206 × 137	73 × 66	25	不整形	N−51°−E				
SK	174	3E15	X b	160 × 50	97 × 36	24	楕円形	N−58°−W	長甕			
SK	175	3E6・7	IX b	× 120	× 103	10			小甕			
SX	176	3E7	IX b	(72) × (72)	30 × 28			N−33°−E	長甕	無台杯、甕		
SD	177	3C14・19	X b	240 × 48	220 × 32	7			小甕、長甕			溝状遺構群1
SD	178	5F6	IX b	× 44	× 34	9		N−25°−W	無台椀、小甕			
SD	179	5F11	IX b	× 52	× 32	11		N−51°−W	小甕、長甕	無台杯		
SK	180	2C21・22	X b	× 43	× 31	45			小甕、長甕	無台杯、杯蓋		
SX	181	6E6・7	X b	×	×				無台椀、小甕、長甕	無台杯、有台杯、甕	土器片円盤	
P	182	3C10	X b	75 × 44	32 × 28	32	楕円形					
SK	184	4F5	IX b	×	×	9						
SK	185	2C24	X b	137 × 63	113 × 39	18	不整楕円形	N−59°−W	小甕、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋、壷瓶		
SX	186	5D8・13	X b	255 × 141	217 × 105	6			小甕、長甕			
SK	187	5D9	X b	169 × 115	120 × 82	17	不整楕円形	N−61°−E	長甕	無台杯		
P	188	4E7	X b	55 × 39	26 × 20	11	楕円形					
P	189	4E7	X b	51 × 33	27 × 13	10	不整楕円形					
SK	190	4F3・4・8・9	X b	320 × (256)	270 × 202	23	不整楕円形	N−00°	無台椀、小甕、長甕	無台杯、杯蓋、壷瓶、甕	筒形土製品、土錘	
P	191	5C12	X b	25 × 24	10 × 10	22	円形		無台椀、小甕	無台杯		
P	192	3C14	X b	20 × 16	13 × 8	7			小甕			
P	193	3C14	X b	32 × 17	15 × 6	7			長甕			
P	194	3C13	X b	22 × 20	12 × 12	6						
SD	195	3C7	X b	× 76	× 34	18		N−20°−E	長甕			溝状遺構群1
SD	196	2C・3C	X b	× 48	× 15	17		N−16°−E	小甕	無台杯		溝状遺構群1
SX	198	2C17	X b	158 × 63	127 × 32	10	不整楕円形		小甕、長甕			
SD	199	5E1・6	X b	× 24	× 10	13		N−39°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
SD	200	5E16	X b	× 28	× 18	7		N−43°−W				溝状遺構群2
SK	201	5E11・12	X b	207 × 105	181 × 66	23	不整楕円形	N− 05°−E	小甕、長甕	無台杯、甕		
SD	202	4F	X b	× 54	× 36	17		N−43°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
SK	203	5E20	X b	128 × 82	102 × 68	13		N−64°−W				
P	204	3C10	X b	18 × 15	6 × 6	26						
P	205	3C3	X b	37 × 27	11 × 10	30						
P	206	3C22	X b	25 × 22	7 × 5	11						
SD	207	3B5	X b	× 22	× 10	7		N−21°−E				溝状遺構群1
SK	209	3C14	X b	135 × 79	84 × 43	26	楕円形	N−59°−W	小甕、長甕、鉢	無台杯	土錘	
P	210	2C22	X b	30 × 28	16 × 16	15						
SD	211	5E25	X b	× 62	× 36	17		N−51°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、杯蓋	碁石又は双六子	溝状遺構群2
P	212	5E20	X b	(38) ×	(12) ×	7						
SD	213	5E22	X b	× 42	× 28	10		N−30°−W	長甕	杯蓋		溝状遺構群2
SK	214	5E22	X b	× (120)	× (75)	20	隅丸長方形		長甕	無台杯		
SK	216	5G1	X b	× 49	× 30	17			小甕、長甕	無台杯、甕		
SD	217	4E・5E	X b	× 36	× 22	14		N−40°−W	小甕	無台杯、壷瓶		溝状遺構群2
SD	218	5E1	VIII b	× 80	× 40	12		N−40°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯		
P	220	5E19	X b	40 × 34	20 × 19	13	円形		無台椀、長甕	無台杯		
P	221	4E25	X b	28 × 28	12 × 10	17	円形					
SD	222	5E17	X b	244 × 34	228 × 22	7		N−56°−W				溝状遺構群2
SD	223	5E5	X b	×	×	10						溝状遺構群2
SD	224	5E17	X b	×	×	7			無台椀、小甕	無台杯、甕		溝状遺構群2
P	225	4E20	X b	90 × 55	55 × 27	8	楕円形		長甕	無台杯		
SD	226	4F・5F	VIII b	× 70	× 45	20		N−35°−E	小甕、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋		

種別	No.	位　置	層位	上　端	下　端	深度	平面形	方　向	出土遺物・土師器	出土遺物・須恵器	出土遺物・その他	備　考
SD	227	4F22	Xb	× 38	× 16	25		N−45°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群2
SD	228	5E11	Xb	× 21	× 11	10		N−55°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
SD	229	5E4	Xb	× 26	× 15	11		N−43°−W	小甕、長甕	有台杯、杯蓋		溝状遺構群2
SX	230	5F7	Xb	75 × 48	45 × 21	6			小甕			
SX	231	5F1・2	Xb	×(67)	×(30)	15			小甕、長甕	無台杯、甕		
P	232	5F16	Xb	41 × 32	11 × 11	15	円形			甕		
P	233	5E・5F	Xb	38 × 38	12 × 10	18	円形					
SD	234	5F4・8	Xb	× 60	× 30	13		N−46°−E	小甕、長甕	無台杯、杯蓋、甕		溝状遺構群2
SD	235	5F4・9	Xb	× 70	× 28	29		N−43°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、杯蓋、有台椀、甕		溝状遺構群2
SK	236	5E・6E	Xb	208 ×	105 × 92	19	長方形	N−67°−W	長甕	無台杯、甕		
P	237	5E・5F	Xb	33 × 28	12 × 11	22	円形		長甕			
SD	238	6E9	Xb	× 26	× 12	13		N−45°−W	長甕			溝状遺構群2
SD	239	6E9	Xb	84 × 32	54 × 14	25		N−34°−W	無台椀、長甕	甕		溝状遺構群2
P	240	6E9	Xb	32 × 28	12 × 12	36	円形					
P	241	5F11	Xb	37 × 33	18 × 15	17	円形					
SD	242	5E・5F	Xb	× 48	× 20	25		N−31°−E				溝状遺構群2
SD	243	5E・5F	Xb	× 56	× 22	9		N−50°−W	小甕	甕		溝状遺構群2
SD	244	6E5・10	Xb	×(104)	×(54)	18		N−35°−W	無台椀、長甕	無台杯、杯蓋		溝状遺構群2
P	245	4E15	Xb	38 × 28	20 × 16	30	楕円形		小甕、長甕			
P	246	4E18	Xb	50 × 40	21 × 18	10	方形					
SD	247	4E23・24	Xb	× 20	× 12	2		N−69°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
SD	248	4E23	Xb	× 28	× 12	4		N−41°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
SD	249	5E・5F	Xb	× 44	× 22	15		N−43°−W	長甕、無台椀	甕		溝状遺構群2
SD	250	5F6・7・12・13	Xb	× 46	× 20	15		N−52°−W		甕		溝状遺構群2
SD	251	4・5E・F	Xb	× 82	× 50	22		N−51°−W	盤、小甕、長甕、	無台杯、有台杯、杯蓋、壷瓶、甕	筒形土製品、土錘	溝状遺構群2
P	252	5F16・17	Xb	42 × 26	25 × 14	7						
P	253	4F17	Xb	85 × 72	65 × 45	15	不整形		小甕、長甕	無台杯、杯蓋		
SX	254	5F5	Xb	×(42)	×(17)	5						
SK	255	6E4	Xb	(240)× 116	164 × 56	25	隅丸長方形	N−43°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、壷瓶、甕		
P	256	5F14	Xb	52 × 46	35 × 30	10	円形		小甕			
SD	257	5E・5F	Xb	× 46	× 14	9		N−53°−W	無台椀、小甕、長甕			溝状遺構群2
SK	258	5E16	Xb	×(99)	×(55)	17			長甕	有台杯		
P	259	4F16	Xb	25 × 23	18 × 15	12			長甕		土錘	
SK	260	4F22	Xb	(100)× 56	64 × 37	14	楕円形	N−46°−W	小甕、長甕	無台杯、甕		
P	261	4F18	Xb	60 × 47	39 × 35	8	円形		無台椀、小甕	無台杯		
SK	262	6F1	Xb	× 95	× 64	18	不整楕円形		小甕、長甕	無台杯、有台杯、壷瓶、甕	碧石又は双六子	
SK	263	5E4・9	Xb	156 × 116	(128)× 95	15	隅丸長方形	N−37°−E	長甕	無台杯、杯蓋		
SD	264	5E19	Xb	300 × 34	280 × 20	5		N−48°−E	小甕			溝状遺構群2
SD	265	5E14・15	Xb	(434)× 44	414 × 30	5		N−49°−E	無台椀、小甕、長甕	無台杯、杯蓋、壷瓶、甕	土器片円盤	溝状遺構群2
SD	266	5E18	Xb	180 × 46	140 × 30	11		N−46°−W	小甕、長甕	甕		溝状遺構群2
SD	267	5E18・23	Xb	× 34	× 20	12		N−36°−W				溝状遺構群2
P	268	5E25	Xb	×(29)	×(15)	14						
SD	269	3D・3E	Xb	× 86	× 73	15		N−90°				溝状遺構群2
SD	270	3D・3E	Xb	× 52	× 36	14		N−70°−W				溝状遺構群2
SX	271	3E16	Xb	×(64)	×(22)	10						
SD	272	5F13	Xb	× 26	× 10	10		N−53°−E		無台杯		溝状遺構群2
SD	273	5E・5F	Xb	× 120	× 42	32		N−51°−W	小甕、長甕	無台杯、杯蓋、壷瓶、甕		溝状遺構群2
SD	274	5F9	Xb	295 × 38	276 × 18	11		N−59°−E	長甕	無台杯、有台杯、甕		溝状遺構群2
P	275	5E・5F	Xb	(83) × 62	42 × 28	12	楕円形		長甕			

種別	No.	位　置	層位	上　端	下　端	深度	平面形	方　向	出土遺物・土師器	出土遺物・須恵器	出土遺物・その他	備　考
P	276	4D25	Ⅷb	20 × 20	5 × 5	10			甕			
P	277	4D25	Ⅷb	23 × 18	10 × 8	7						
SD	279	4F24	Xb	× 72	× 38	10		N−61°−W	長甕	壺瓶		溝状遺構群2
SD	280	5E13	Xb	240 × 26	220 × 16	10		N−83°−E	小甕、長甕	無台杯、有台杯、甕		溝状遺構群2
SD	281	5E13・18	Xb	× 50	× 28	17		N−37°−W	無台椀、小甕、長甕	有台杯、甕		溝状遺構群2
SD	282	5E15	Xb	× 38	× 24	6		N−50°−W	長甕			溝状遺構群2
SD	283	5E15	Xb	× 34	× 24	7		N−46°−E				溝状遺構群2
SD	284	5E14	Xb	172 × 40	158 × 34	4		N−36°−W	長甕	無台杯		溝状遺構群2
P	285	5E20	Xb	34 × 28	11 × 10	7						
SD	286	5E9	Xb	72 × 24	62 × 16	5		N−48°−W				溝状遺構群2
P	287	5E10	Xb	46 × 33	31 × 22	10	楕円形			甕	土器片円盤	
SD	288	5D・5E	Xb	× 20	× 7	14		N−41°−W				溝状遺構群2
SK	289	5D10・15	Xb	220 ×(203)	133 ×(82)	21	楕円形	N−89°−E	小甕、長甕	甕		溝状遺構群2
P	291	5E1	Xb	70×46	59 × 24	10	楕円形					
SD	292	5E13・14	Xb	160 × 38	120 × 22	18		N−58°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、甕	土器片円盤	溝状遺構群2
SX	293	6E8・9・13・14	Xb	×(184)	×(174)	20						
SD	294	4E・5E	Xb	× 90	× 40	20			無台椀、盤、小甕、長甕	無台杯		
SK	295	5D3	Ⅷb	× 239	× 185	26			無台椀、小甕、長甕	無台杯		
SD	297	5F2・8	Xb	× 56	× 36	10		N−47°−W	無台椀、小甕、長甕、鉢	無台杯、杯蓋、無台椀、甕		溝状遺構群2
SD	298	5F3・8・9	Xb	× 54	× 14	11		N−46°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、壺瓶、甕		溝状遺構群2
SD	299	4E・4・5F	Xb	× 96	× 34	25		N−44°−W	無台椀、小甕、長甕、鉢	無台杯、杯蓋、甕		溝状遺構群2
SD	300	5F9	Xb	× 30	× 6	16		N−43°−W	小甕	無台杯		溝状遺構群2
SD	301	4F・5F	Xb	× 36	× 20	11		N−48°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、杯蓋、甕		溝状遺構群2
SD	302	4E・5E	Xb	× 40	× 24	14		N−48°−W	小甕、長甕	甕		溝状遺構群2
SD	303	4E・5E	Xb	× 30	× 16	12		N−46°−W	小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群2
SD	304	4E・5E	Xb	× 36	× 20	13		N−43°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
焼土	305	5E8	Xb	79 ×(62)	(55)× 54	10	円形		無台椀			
SD	306	6F1	Xb	× 36	× 23	18		N−49°−W	小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群2
P	307	4E15	Xb	22 × 21	14 × 13	8	円形					
SD	308	5E15	Xb	× 32	× 12	9		N−18°−E				溝状遺構群2
SX	309	4F19	Xb	120 × 26	70 × 18	19			長甕	無台杯		
P	310	4E20	Xb	46 × 37	22 × 17	14	円形			杯蓋		
SK	312	4F13・14・15	Xb	× 210	× 179		不整楕円形		小甕、長甕、黒色無台椀	無台杯、杯蓋、壺瓶、甕	土錘	
P	313	4F21・22	Xb	77 × 71	33 × 22	22	円形		小甕、長甕	無台杯		
SD	314	4F・5F	Xb	× 30	× 16	13		N−48°−W	小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群2
SK	315	4F23	Xb	82 × 40	66 × 24	5		N−57°−W	長甕			
SD	316	5F10	Xb	× 52	× 14	30		N−42°−E	小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群2
SX	317	5F11	Xb	(142)×(78)	98 × 50	14			小甕			
P	319	4F17・22	Xb	81 × 39	57 × 16	13	楕円形					
P	320	4F17	Xb	55 × 34	37 × 21	9	楕円形					
P	321	4F17	Xb	57 × 55	25 × 25	25	円形		無台椀、小甕、長甕	無台杯		
P	322	4F17	Xb	53 × 29	×	39	円形		無台椀、小甕、長甕	無台杯		
SD	323	5F16	Xb	× 34	× 16	6		N−30°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
P	324	5F16	Xb	(45)×(40)	(15)×(14)	22						
SK	325	5E3	Xb	105 ×(66)	73 × 35	10	隅丸長方形	N−49°−W	長甕			火葬灰埋納土坑
SD	326	4E・5E	Xb	× 36	× 20	11		N−40°−W	小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群2
P	327	5F8・13	Xb	39 × 30	20 × 15	12	円形					
SD	328	4E	Xb	× 56	× 30	12		N−52°−W				溝状遺構群2
SD	329	4E	Xb	× 32	× 20	7		N−47°−W	長甕	無台杯、有台杯、甕		溝状遺構群2

種別	No.	位　置	層位	上　端	下　端	深度	平面形	方　向	出土遺物・土師器	出土遺物・須恵器	出土遺物・その他	備　考
SK	330	4F16	Xb	80 × 35	60 × 12	9		N−44°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
P	331	5D4	IXb	×(50)	×(40)	12			長甕			
SD	332	4E	Xb	× 58	× 32	13		N−50°−W	小甕、長甕	無台杯、甕	土錘	溝状遺構群2
SK	333	5E8・9	Xb	145 × 80	95 × 47	15	楕円形	N−23°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、有台杯、甕		溝状遺構群2
SD	334	5F3	Xb	× 60	× 24	16		N−50°−W	無台椀、長甕	甕		溝状遺構群2
P	336	4F11	Xb	44 × 27	22 × 10	15	楕円形					
P	337	4F12	Xb	38 × 25	12 × 12	9						
P	338	4F18	Xb	33 × 30	25 × 25	5						
P	339	4F18	Xb	36 × 28	16 × 13	10			鍋			
SD	340	4F21・22	Xb	(350) × 26	(334) × 14	7		N−48°−W	無台椀、小甕	無台杯		溝状遺構群2
SX	341	5E5	Xb	(75) ×	(48) ×							
P	342	5F2	Xb	70 × 32	55 × 18	8		N−70°−E	小甕、	無台杯		
SK	343	5F3	Xb	×(65)	×(48)	18			小甕、長甕	有台杯、杯蓋		
SD	344	4E10・15	Xb	× 30	× 16	13		N−53°−W	長甕			溝状遺構群2
P	345	4E24	Xb	34 × 34	13 × 11	8			長甕			
SK	346	5E5	Xb	×	×	10						
SD	347	5E10	Xb	× 42	× 20	11		N−48°−W	長甕	無台杯		溝状遺構群2
SK	348	4D24	Xb	150 × 115	108 × 54	21	楕円形	N−00°				
SD	349	4E	Xb	× 40	× 14	12		N−45°−W	小甕、長甕	無台杯、甕		溝状遺構群2
P	350	4E18・19	Xb	48 × 27	35 × 16	16	楕円形		小甕、長甕			
SD	351	4E23	XIb	(108) × 26	(84) × 12	16		N−47°−W	小甕			溝状遺構群3
SK	352	5E4・9	Xb	173 × (85)	130 × 62	10	隅丸長方形	N−03°−E	小甕、長甕	無台杯、有台杯、壷瓶		
SK	353	4F15・19・20	Xb	(390) × 323	355 × 313		不整楕円形	N−43°−W	無台碗、小甕、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋、壷蓋、甕	土器片円盤、土錘	
SK	354	4F18・23	Xb	186 × 101	140 × 75	16	不整楕円形	N−62°−W	小甕、長甕	無台杯、高杯、甕	種子、土器片円盤	
SK	355	4F16・17・21・22	Xb	172 × 100	89 × 72	25	楕円形	N−32°−E	小甕、長甕	無台杯、甕	碁石又は双六子	
SD	356	4E	Xb	× 36	× 14	12		N−52°−W	小甕、長甕			溝状遺構群2
SD	357	4E	Xb	× 42	× 18	8		N−48°−W	小甕、長甕	無台杯、甕		溝状遺構群2
SK	358	4E10・15	Xb	179 × (74)	150 × (34)	18	不整楕円形	N−37°−E	無台椀、小甕、長甕	無台杯、甕	土錘	
SK	359	4E10・15	Xb	(103) × (52)	(52) × (27)	15	不整楕円形	N−26°−E				
P	360	4E15	Xb	25 × 21	17 × 13	6						
P	361	4F16	Xb	23 × 20	14 × 13	8						
P	362	4F22	Xb	15 × 14	7 × 5	8						
P	363	4E10	Xb	×(72)	×(29)	22	円形		小甕、長甕			
SD	364	4E10	Xb	× 52	× 18	14		N−49°−W	小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群2
SX	365	5E9・10	Xb	145 × 95	129 × 75				小甕			
P	366	4F22	Xb	90 × 52	55 × 32	11		N−65°−W	長甕			
SD	367	5F10	Xb	× 58	× 18	13		N−48°−W	長甕	無台杯		溝状遺構群2
SD	368	5F10	Xb	× 44	× 16	12		N−43°−W	長甕			溝状遺構群2
SD	369	4D22	Xb	× 49	× 20	12		N−43°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯		溝状遺構群2
SD	370	5E25	Xb	× 48	× 18	13		N−39°−W		杯蓋		溝状遺構群2
SX	371	5E8	Xb	× 54	× 50				無台椀、小甕、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋、甕	土器片円盤、土錘	
SK	372	5E2	Xb	(64) × 33	(50) × 12	3	隅丸長方形	N−44°−W	小甕	無台杯		火葬灰埋納土坑
P	373	6F1	Xb	34×32	24 × 19	19	円形					
SD	374	5E・6E	Xb	× 32	× 12	13		N−33°−W				溝状遺構群2
SD	375	6E5	Xb	× 32	× 20	18		N−40°−W				溝状遺構群2
P	376	5F4	Xb	36 × 33	9 × 8	30	円形		長甕			
P	377		Xb	45 × 40	11 × 10	47						
P	378	5E5	Xb	38 × 29	20 × 13	6						
P	379	6E4	Xb	58 × 40	46 × 31	24	楕円形		長甕			

種別	No.	位　置	層位	上　端	下　端	深度	平面形	方　向	出土遺物・土師器	出土遺物・須恵器	出土遺物・その他	備　考
P	380	5E13	Xb	39 × 35	25 × 17	7						
SX	381	5E14・19	Xb	116 × 42	70 × 25	12				甕		
P	382	5E7	Xb	46 × 25	28 × 16	10						
P	383	6E5	Xb	32 × 24	19 × 13	20	円形		長甕			
SX	384	4D25	Xb	×(53)	×(37)							
SD	385	4F	XIb	(680)× 72	(640)× 20	20		N−43°−W	小甕、長甕	無台杯、壷瓶		溝状遺構群3
SD	386	4F15・20	XIb	× 72	× 34	5		N−46°−W	無台椀、小甕、長甕	無台杯、杯蓋、高杯、壷瓶、甕		溝状遺構群3
SD	387	3F・4F	XIb	(640)× 60	(620)× 36	10		N−33°−W	長甕	無台杯		溝状遺構群3
P	389	4F20	XIb	(42)×(40)	(21)×(21)	11						
SD	390	5G1	Xb	× 50	× 22	17		N−68°−E	長甕			溝状遺構群2
SK	391	5F22	XIb	× 45	× 34	22						
SD	392	5F2	Xb	×	×							溝状遺構群2
SD	393	5F22	XIb	× 32	×	15						溝状遺構群3
SX	394	5F21	Xb	45 × 21	23 × 11	12						
SX	395	4F6	Xb	(75)× 52	×			N−32°−E	無台椀			
SD	396	4F・4G	XIb	× 96	× 38	18		N−45°−W	無台椀、長甕	無台杯、杯蓋、甕		溝状遺構群3
SK	397	4F17	Xb	142 ×(87)	96 ×(50)	28	楕円形	N−22°−E				
SD	398	4F9	XIb	(450)× 40	(440)× 34	14		N−40°−W				溝状遺構群3
SK	399	4E1	XIb	115 × 63	60 × 15	24	楕円形	N−36°−W				
SK	400	4F1・6・7	XIb	(330)× 165	× 114	40	不整楕円形	N−43°−W	無台杯、無台椀、小甕、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋、壷瓶、甕	土錘	
SD	401	4F7・12	XIb	× 30	× 12	7		N−47°−W				溝状遺構群3
P	402	4E3	XIb	84 × 32	43 × 11	19	楕円形		長甕			
SK	403	3E19・25	XIb	430 × 178	365 × 112	29	楕円形	N−44°−W	小甕、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋、有台椀、甕	碁石又は双六子	SK435と合併
SD	404	4E5	XIb	× 14	× 12	10		N−48°−W	小甕、長甕	有台杯		溝状遺構群3
SD	405	4E5	XIb	× 30	× 16	11		N−46°−W	小甕、長甕			溝状遺構群3
P	406	3E16	XIb	97 × 66	56 × 33	16	楕円形	N−83°−W				
SD	407	3E18	XIb	(320)× 40	300 × 28	18		N−40°−E	小甕、長甕	甕		溝状遺構群3
SD	408	3E17	XIb	× 34	× 22	8		N−47°−W				溝状遺構群3
SD	409	3E3・13	XIb	320 × 38	280 × 26	8		N−36°−W				溝状遺構群3
P	410	3E7	XIb	(78)×(75)	45 × 43	14	円形		長甕	甕		
SD	411	4F6	XIb	(220)× 52	(200)× 20	18		N−32°−W	長甕	無台杯、有台杯		溝状遺構群3
SK	412	4E10	XIb	(110)× 62	(64)× 30	20		N−41°−W	長甕			
SD	416	3E20	XIb	× 30	× 14	15		N−59°−W				溝状遺構群3
SD	417	4F15	XIb	× 30	× 13	16		N−63°−E				溝状遺構群3
P	418	3E14	XIb	34 × 28	11 × 10	7	円形		小甕、長甕			
SD	419	4F・4G	XIb	× 66	× 26	11		N−38°−W				溝状遺構群3
P	420	3E13	XIb	37 × 30	18 × 14	14	円形					
SK	421	3E23・24	XIb	231 × 118	195 × 86	38	楕円形	N−67°−E	小甕、長甕	無台杯、甕	碁石又は双六子	
SD	422	3F12	XIb	400 × 42	360 × 26	13		N−57°−W	小甕、長甕	甕		溝状遺構群3
P	423	3E13	XIb	75 × 58	65 × 40	6	長方形					
SD	424	3E11・16・17	XIb	360 × 30	320 × 16	8		N−39°−W				溝状遺構群3
SD	425	3E	XIb	× 140	× 76	29		N−45°−W	長甕	有台杯、壷瓶、甕		溝状遺構群3
SD	427	4G・5G	XIb	× 54	× 16	15		N−42°−W	小甕、長甕			溝状遺構群3
SD	428	3E・3F	XIb	202 × 60	182 × 36	17		N−81°−W				溝状遺構群3
P	430	4E18	XIb	70 × 25	41 × 14	30	楕円形		長甕			
SX	431	4F5	XIb	218 ×	182 ×							
SD	432	3F・4F	XIb	190 × 30	166 × 20	19		N−52°−W				溝状遺構群3
P	433	3E18	XIb	37 × 34	22 × 20	18	円形					
SD	434	3F18・23・24	XIb	(560)× 32	(540)× 14	11		N−42°−W				溝状遺構群3
SD	436	4E	Xb	236 × 32	220 × 14	13		N−42°−E				溝状遺構群2
SD	437	4E・5E	Xb	(182)× 42	× 24	9		N−59°−E	小甕	甕		溝状遺構群2
SK	438	4F16	XIb	(116)×(80)	(73)×(44)	16	楕円形	N−55°−E	小甕、長甕			
P	439	4F16	XIb	(69)× 32	(37)× 16	10	楕円形	N−86°−E				
SX	441	5F3	XIb	(78)×	(13)×	43			小甕			
SK	442	4G16	XIb	118 × 71	81 × 46	7	楕円形	N−43°−W	小甕、長甕	無台杯、有台杯、杯蓋、甕	土錘	

遺物観察表

(1) No. は遺物番号と一致する。
(2) 胎土分類はA：笹神丘陵産　B：小泊窯跡群産　C：新津丘陵窯跡群産　D：A～C以外、西古志窯跡群産も含むとする。
(3) 色調は農林水産技術会議事務局・(財) 日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』によった。
(4) 手法はとくにことわっていないものは、内外に共通に施されたものである。

No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
1	5B4		Ⅶ	須恵器	無台杯A	B		11.8	6.4	3.2	3/16	灰白色		底部外面上・大、「大		
2	2B11·16·17		Ⅶ	土師器	鉢B			19.0	10.3	13.3	1/16	灰色／浅黄橙色	外：ケズリ			
3	3D25		Ⅶ	須恵器	長頸瓶	B？		(14.0)	－	－	4/16	灰色				内：自然釉
4	3D25		Ⅶ	土師器	小甕A		石英	12.0	5.2	8.8	5/16	にぶい橙色	回転糸切り			内：口縁部炭化物、外：スス
5		SK1	Ⅶb	須恵器	有台杯A2	C？		11.7	7.3	3.9	12/16	青灰色				外：自然釉
6		SX2	Ⅶb	須恵器	杯蓋B	B？		14.6	－	2.6	12/16	灰白色	重ね焼き痕			溶着痕、火ぶくれ、
7		SD218	Ⅶb	須恵器	無台杯A	B		12.4	7.5	2.9	6/16	灰白色	重ね焼き痕			
8		SD226	Ⅶb	須恵器	無台杯A	B	長石	12.5	8.0	3.0	5/16	灰色	重ね焼き痕			
9		SD226	Ⅶb	須恵器	無台杯A	B		11.7	7.2	2.8	1/16	灰色		底部外面左・中、「衣」		
10		SD226	Ⅶb	須恵器	有台杯B2	D		12.9	8.8	4.0	10/16	灰色				外：自然釉
11		SX41	Ⅶb	須恵器	無台杯A	B		12.9	6.8	3.2	13/16	灰白色		底部外面左・大、「真」		
12		SX41	Ⅶb	須恵器	無台杯B	B		12.4	7.2	2.7	7/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
13		SX41	Ⅶb	須恵器	無台杯D	D		－	(7.0)	－	0/16	灰色	回転糸切り			
14		SX41	Ⅶb	土師器	無台椀A2			12.5	4.7	3.6	2/16	にぶい橙色／灰白色	回転糸切り			外：体部下ススト
15		SX41	Ⅶb	土師器	無台椀B2		長石·石英	14.0	4.0	4.0	3/16	灰白色	回転糸切り			内:口縁部ススト、外：体部ススト
16		SX41	Ⅶb	土師器	無台椀		長石·チャート	－	5.2	－	0/16	灰白色／にぶい橙色	回転糸切り			
17		SX41	Ⅶb	須恵器	横瓶	B		－	－	－	0/16	明褐灰色／黒色	片面は開そく、もう一方は不明、内：同心円文c類、外：平行線文a類			外：自然釉、口縁部欠損
18		SX41	Ⅶb	須恵器	甕			(22.3)	－	－	2/16	暗青灰色	カキメ、外：タタキ			
19		SX41	Ⅶb	土師器	小甕A		長石·石英	13.0	－	－	3/16	にぶい橙色				外：ススト
20		SX41	Ⅶb	土師器	長甕A		砂·チャート	22.5	－	－	6/16	にぶい橙色	カキメ、ハケメ、内：同心円文当て具a？類、外：平行線文a類			外：底部ススト
21		SX41	Ⅶb	土師器	長甕B	C？		22.0	－	－	15/16	にぶい橙色	カキメ、ハケメ、内：当て具痕、外：ケズリ			
22		SX41	Ⅶb	土師器	長甕B		長石·チャート	20.0	－	－	2/16	浅黄橙色	カキメ、内：同心円文タタキ、外：平行文タタキ			内：風化、ススト、外：剥落、ススト
23		P276	Ⅶb	土師器	長甕B		チャート·石英·砂多量	21.0	－	－	3/16	浅黄橙色	内：ナデ、外：カキメ			外：ススト
24	3C6		Ⅶa	須恵器	無台杯A	B		(12.3)	－	－	1/16	灰色		体部外面正位上・中、□」		
25	3D24		Ⅶa	須恵器	無台杯A	B	長石	12.4	7.0	3.1	11/16	灰白色			灯明皿	溶着痕、内：タール、口縁部に長さ4cm、巾さ0.7cmで打ち欠き
26	4D25		Ⅶa	須恵器	無台杯A	B		12.5	7.5	3.4	5/16	灰色				
27	5D4		Ⅶa	須恵器	無台杯B	B	長石·石英	12.2	8.2	3.1	7/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
28	3C17		Ⅶa	須恵器	無台杯	B		－	7.6	－	0/16	灰白色		底部外面中央・中、「□□」		
29	5E23		Ⅶa	須恵器	無台杯	B		－	6.8	－	0/16	灰白色		底部外面墨痕		
30	3B6		Ⅶa	須恵器	杯蓋B	B		14.4	－	3.0	14/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			溶着痕、自然釉
31	5E1·8·12		Ⅶa	須恵器	杯蓋B	B		14.8	－	2.7	3/16	灰色	外：ケズリ、			溶着痕
32	5E7		Ⅶa	須恵器	杯蓋B	BorD		13.9	－	2.8	16/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			
33	2B17·24		Ⅶa	須恵器	甕	C？		－	－	－	0/16	灰色	内：同心円文c類、頸部内面指頭圧痕、外：カキメ、平行線文b類			
34	5D2·5		Ⅶa	土師器	長甕A		白色粒子·石英·小礫	24.0	－	－	5/16	にぶい橙色／灰白色	外：カキメ			
35	4D5		Ⅶa	土師器	長甕A			22.0	－	－	2/16	灰褐色	内：同心円文、外：カキメ			
36	2A23·3B5		Ⅶa	土師器	鍋A	D		31.5	－	－	2/16	淡橙色	カキメ、ハケメ、外：ケズリ			
37		SK100	Ⅸb	須恵器	無台杯A	B		11.8	7.2	3.0	1/16	青灰色	重ね焼き痕			
38		SK100	Ⅸb	須恵器	有台杯B3	B	長石·石英	12.9	7.3	6.6	14/16	灰色	外：体部～高台に強いナデ			内：ススト、火ぶくれ
39		SK131	Xb	須恵器	無台杯B	B		(14.2)	－	－	1/16	灰白色	重ね焼き痕			
40		SK131	Xb	須恵器	有台？杯A	C？		(10.2)	－	－	1/16	青灰色				
41		P65	Ⅸb	須恵器	高杯	B		17.0	10.6	11.0	15/16	灰色	外：ケズリ、倒置式、径12.5cm位の杯を決せて焼いた重ね焼き痕			
42		P116	Ⅸb	須恵器	無台杯B	B		12.8	7.2	3.0	4/16	青灰色				
43		SX126	Xb	須恵器	無台杯A	B		11.9	7.2	3.3	12/16	灰色				溶着痕
44		SX126	Xb	須恵器	無台杯A			12.5	7.1	3.2	8/16	灰白色			灯明皿	タール
45		SX126	Xb	須恵器	無台杯A	B		11.7	7.1	2.8	12/16	灰色	重ね焼き痕			
46		SX126	Xb	須恵器	無台杯B	B	海綿骨針·長石	12.2	7.2	2.8	10/16	灰色	ヘラ切り後ナデ			
47		SX126	Xb	須恵器	無台杯B	B		12.4	8.0	3.2	4/16	灰色		底部外面中央・中、「真□		
48		SX126	Xb	須恵器	有台杯B3	B	長石	13.1	(7.8)	(6.5)	11/16	灰色				溶着痕
49		SX126	Xb	須恵器	有台杯		長石	－	7.7	－	0/16	灰色			転用硯	全周打ち欠き
50		SX126	Xb	須恵器	杯蓋B		長石·石英	14.2	－	3.0	4/16	灰色	外：ケズリ			
51		SX126	Xb	須恵器	杯蓋C	D		12.5	－	－	6/16	灰白色				

No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
52		SK125	Xb	土師器	無台椀A2			14.0	−	−	5/16	灰白色／にぶい黄橙色				
53		SK125	Xb	土師器	無台椀A3			16.0	5.6	5.3	2/16	橙色／にぶい橙色	回転糸切り			外：口縁部スス
54		SK125	Xb	土師器	無台椀A3	B	長石	17.0	6.2	5.9	2/16	灰白色／浅黄橙色	回転糸切り	体部外面墨痕		
55		SK125	Xb	土師器	黒色土器無台椀A3			(16.0)	6.3	5.2	1/16	黒色／淡黄色	内：ミガキ、外：ケズリ、回転糸切り			外：部分的スス
56		SK125	Xb	須恵器	長頸瓶	B		−	10.7	−	0/16	明褐灰色／暗灰色	外：ケズリ、ヘラ切り後ナデ			内：白色自然釉、外：肩～胴に自然釉
57		SK125	Xb	土師器	小甕A	精良		13.0	6.4	(13.5)	2/16	にぶい黄橙色／灰黄褐色	内：カキメ、回転糸切り			外：底部付近剥落顕著
58		SK125	Xb	土師器	小甕B		長石	12.0	7.8	13.0	3/16	灰白色／灰黄褐色	外：ケズリ、回転糸切り			内：炭化物
59		SK125	Xb	土師器	小甕C			14.6	−	−	9/16	にぶい橙色	内：カキメ			
60		SK125	Xb	土師器	長甕A		雲母・長石	20.0	−	−	4/16	にぶい黄橙色	外：カキメ、ケズリ			外：スス
61		SK125	Xb	土師器	長甕B		小礫	(20.0)	−	−	4/16	橙色	カキメ			外：スス
62		SK125	Xb	土師器	長甕B			17.0	−	−	4/16	にぶい黄橙色	内：同心円文、外：平行線文a類			外：スス
63		SK125	Xb	土師器	長甕C	B		22.8	−	−	4/16	にぶい黄橙色	ハケメ、非ロクロ			スス
64		SK125	Xb	土師器	長甕C1	B	小礫	26.6	−	−	2/16	にぶい黄橙色	ハケメ、内：指頭圧痕、非ロクロ			スス
65		SK4	IXb	土師器	黒色土器無台椀B2			15.6	5.2	5.1	4/16	黒色／にぶい黄橙色				
66		SK4	IXb	土師器	小甕A		チャート・石英	12.8	−	−	8/16	灰白色／にぶい橙色				内：口縁部スス、外：スス
67		SK4	IXb	土師器	小甕		チャート・石英	−	6.2	−	0/16	浅黄橙色	外：ケズリ、回転糸切り			スス、外：剥落顕著
68		SK4	IXb	土師器	長甕B		石英	21.5	−	−	3/16	にぶい橙色	カキメ			外：スス
69		SK4	IXb	土師器	鍋B			35.4	−	−	2/16	浅黄橙色／灰白色	内：ハケメ、同心円文a類、外：カキメ、ケズリ、平行線文c類			スス
70		SK123	IXb	土師器	長甕A			20.0	−	−	4/16	にぶい橙色	カキメ、内：同心円文、外：平行線文a類			内：体部スス、外：体部炭化物
71		SK123	IXb	土師器	長甕A	A	石英・チャート・長石	20.4	−	−	8/16	にぶい黄橙色	外：平行線文a類			炭化物、風化顕著
72		SK123	IXb	土師器	長甕B		小礫・チャート	20.2	−	−	2/16	にぶい橙色	内：ケズリ後ナデ、放射状当て具、外：カキメ、平行線文a類			炭化物
73		SK34	IXb	土師器	長甕A		長石	(23.0)	−	−	1/16	橙色／浅黄橙色	カキメ、内：同心円文、外：平行線文a類			外：スス
74		SK10	IXb	土師器	小甕A		長石・石英・チャート	11.8	−	−	11/16	灰白色				内：口縁部炭化物、外：スス、炭化物
75		SK30	IXb	土師器	小甕A			13.6	−	−	11/16	にぶい黄橙色／褐灰色				内：口縁部スス、炭化物
76		SK30	IXb	土師器	小甕D	やや粗		10.0	−	−	8/16	にぶい褐色／褐色	非ロクロ			スス
77		P15	IXb	須恵器	杯蓋B	A		14.3	−	3.2	12/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			歪み大
78		SK112	IXb	須恵器	無台杯A	B		12.3	7.0	3.1	14/16	灰白色				
79		SK112	IXb	須恵器	無台杯B	B		(12.2)	−	−	1/16	灰色		体部外面墨痕		
80		SK112	IXb	須恵器	杯蓋B	A		15.3	−	2.6	3/16	青灰色	外：ケズリ			
81		SK117	IXb	須恵器	無台杯A		長石	11.9	7.7	3.1	12/16	灰白色	重ね焼き痕			
82		SK117	IXb	須恵器	無台杯A	B		12.3	7.0	3.3	8/16	灰白色		底部外面左・中、〔長〕		溶着痕
83		SK117	IXb	須恵器	無台杯C	B		13.0	7.8	3.0	4/16	灰色				
84		SK117	IXb	須恵器	無台杯C	B		12.3	7.3	2.5	4/16	灰色				
85		SK117	IXb	土師器	鉢A			19.0	−	−	2/16	にぶい黄橙色／にぶい橙色				外：口縁部スス
86		SK117	IXb	土師器	小甕A		長石・長英・雲母	14.0	−	−	4/16	にぶい橙色				内：炭化物、外：スス
87		SK117	IXb	土師器	長甕A		チャート	22.0	−	−	9/16	にぶい黄橙色	カキメ、内：ミガキ、無文？当て具、外：平行線文a類			スス
88		SK150	IXb	須恵器	無台杯A	B		12.5	6.9	3.1	8/16	灰白色				底部スス
89		SK119	IXb	須恵器	無台杯	B		−	−	−	0/16	灰色		底部外面墨痕		
90		SD179	IXb	須恵器	無台杯C	B		12.1	7.4	3.0	4/16	灰白色				
91	3D18		IXa	須恵器	無台杯A	B		12.2	7.1	3.1	12/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
92	4C1		IXa	須恵器	無台杯A	B		11.7	7.5	3.4	2/16	灰色		底部外面中央、□」		体部スス
93	5F3		IXb	須恵器	無台杯A	B		12.0	6.4	2.9	2/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面［ ］		
94	6E2		IXa	須恵器	無台杯A	B	長石	12.0	7.6	3.4	12/16	灰色	重ね焼き痕			
95	3B9		IXa	須恵器	無台杯B	A	石英・長石粒大	12.6	7.5	3.7	1/16	灰色／灰赤色	重ね焼き痕	底部外面中央・大、「⑩」または「④」		
96	3D13		IXa	須恵器	無台杯B			12.4	7.8	3.1	9/16	灰白色	重ね焼き痕			
97	3D18		IXa	須恵器	無台杯B	B		13.6	8.2	3.2	11/16	灰色				溶着痕
98	3F16		IXa	須恵器	無台杯B	B		12.0	7.4	2.9	7/16	灰色				
99	3F16		IXa	須恵器	無台杯B		長石	13.3	7.8	4.0	7/16	灰色	重ね焼き痕			
100	4C4・5		IXa	須恵器	無台杯B	B		11.3	7.0	3.4	2/16	灰色	重ね焼き痕			口縁部歪み大、内：灰白色自然釉がゴマ塩状にかかる
101	5E5		IXa	須恵器	無台杯B	B		(12.0)	7.5	3.0	1/16	青灰色	重ね焼き痕	体部外面墨痕		
102	6E6		IXab	須恵器	無台杯B	B	長石・石英	11.4	6.5	3.2	12/16	灰色	重ね焼き痕			内：自然釉斑、口縁部歪み
103	4F22		IXa	須恵器	無台杯	B		−	−	−	0/16	灰色		底部外面［ ］		
104	4F19・21・25		IXa	須恵器	有台杯A1			10.2	5.8	4.4	7/16	灰色	円盤作り			内：自然釉
105	2D35		IXa	須恵器	有台杯A3	A		13.4	8.4	6.1	8/16	灰色				外：わずかに自然釉
106	2C23		IXa	須恵器	有台杯B2	D		11.2	7.6	3.6	8/16	灰色	円盤作り、ヘラ切り後ナデ			
107	4E2・8		IXb	須恵器	有台杯B3		長石	13.9	7.7	6.4	3/16	青灰色				スス
108	2C25		IXb	須恵器	有台杯	D		−	7.7	−	0/16	灰色				東海系

No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
109	3C3・5		Ⅸab	須恵器	杯蓋B	B		15.3	—	3.3	12/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕		転用硯	内：墨、自然釉
110	3C5		Ⅸa	須恵器	杯蓋B	B		15.3	—	3.2	4/16	灰色／灰白色	外：ケズリ、重ね焼き痕		転用硯	内：わずかに墨、磨痕
111	4F16・22		Ⅸa	須恵器	杯蓋B	A		15.8	—	2.5	5/16	灰白色	外：ケズリ、重ね焼き痕			自然釉
112	2B12		Ⅸb	須恵器	無台盤	C		15.4	12.5	2.7	8/16	灰白色	重ね焼き痕	底部外面左・小、「郡」		9c第2～3四半期
113	3C24		Ⅸb	土師器	無台椀A2			14.3	6.1	4.8	6/16	浅黄橙色				
114	3D13		Ⅸa	土師器	無台椀A2			12.4	5.0	3.7	14/16	浅黄橙色	回転糸切り			
115	5F4		Ⅸb	土師器	無台椀B3		チャート	24.4	8.0	8.7	4/16	にぶい橙色	糸切り			
116	4F15		Ⅸa	土師器	無台椀			—	6.1	—	0/16	浅黄橙色	回転糸切り	底部外面中央・中、「□（家カ）刀」		407と同じ文字カ、
117	5E5・12		Ⅸb	須恵器	小瓶C	B		—	—	—	0/16	灰白色				内：溶着痕、外：灰オリーブ色自然釉
118	5D11		Ⅸb	須恵器	横瓶			—	—	—	0/16	灰色	体部側面閉そく(円盤10cm大)、内：同心円文、外：カキメ、平行線文a類			
119	2E24		Ⅸa	須恵器	甕			—	—	—	0/16	灰白色／灰色	内：同心円文、外：格子目タタキ			
120	4E18・19・23・24		Ⅸa	土師器	小甕A		小礫・石英	13.4	7.0	(13.5)	4/16	にぶい黄橙色	回転糸切り			内：口縁部炭化物、外：口縁・体部スス
121	3C5		Ⅸb	土師器	長甕B		石英	20.0	—	—	5/16	にぶい黄橙色/にぶい橙色	カキメ			内：炭化物、外：スス
122	3D19		Ⅸb	土師器	長甕B			20.0	—	—	2/16	浅黄橙色	カキメ、内：ケズリ、ハケメ			外：スス
123	6E4		Ⅸa	土師器	長甕B		長石	19.0	—	—	4/16	浅黄橙色／灰白色	カキメ			
124	4E16		Ⅸa	土師器	鍋B			31.5	—	—	2/16	浅黄橙色	内：ハケメ、外：カキメ、ケズリ			スス
125		SX36	Xa	須恵器	無台杯A	B		11.9	8.0	2.8	1/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面中央・中、〔与止〕		
126		SX36	Xa	須恵器	有台杯A1	B		10.2	5.8	4.7	11/16	灰色				
127		SX36	Xa	須恵器	有台杯B2	C		12.6	7.6	4.4	2/16	青灰色				
128		SX36	Xa	須恵器	有台杯B3	B		15.3	8.4	8.5	2/16	灰白色／灰色				内：スス
129		SX36	Xa	須恵器	杯蓋A	C		13.2	—	3.5	4/16	青灰色	重ね焼き痕			天井部丸い
130		SX36	Xa	須恵器	杯蓋B	B		15.6	—	3.1	10/16	灰白色	外：ケズリ、重ね焼き痕			内：スス
131		SX36	Xa	土師器	無台椀A2		チャート	13.6	6.7	3.7	13/16	にぶい橙色	回転糸切り			
132		SX36	Xa	須恵器	長頸瓶	B		(10.0)	—	—	4/16	灰色				オリーブ灰色自然釉
133		SX36	Xa	土師器	長甕A		チャート・石英	18.6	—	—	6/16	浅黄橙色	カキメ、外：平行線文c類			スス
134		SX36	Xa	土師器	長甕C1	B		22.0	—	—	8/16	にぶい黄橙色／暗褐色	ハケメ、非ロクロ			スス
135		SX36	Xa	土師器	鍋B	D		35.0	—	16.3	2/16	橙色	ハケメ、カキメ、外：ケズリ			体部スス
136		SX43	Xb	須恵器	高杯	B		—	—	—	0/16	青灰色	杯部接着面にクシ筋3条			
137		SK40	Xb	須恵器	無台杯C	C		12.2	8.3	3.5	13/16	青灰色	重ね焼き痕			
138		SK51	Xb	須恵器	有台杯B3		長石	13.6	7.6	6.3	3/16	灰色				
139		SX42	Xb	土師器	鍋B			30.7	—	—	2/16	灰白色	カキメ、外：ケズリ			内：スス
140		SK125	Xb	須恵器	無台杯A	B		12.3	7.5	3.4	3/16	灰色				内：赤色顔料
141		SK125	Xb	須恵器	無台杯B	B	長石・石英	12.6	7.9	3.2	4/16	灰色	重ね焼き痕			
142		SK125	Xb	土師器	鉢B		チャート	—	11.4	—	0/16	灰白色	内：カキメ、外：ケズリ			底部外面に亀板痕跡
143		SK125	Xb	土師器	鉢C		海綿骨針	21.4	—	—	5/16	淡黄色	内：カキメ、外：ケズリ			
144		SK125	Xb	土師器	鉢C	C	石英・チャート	16.4	—	—	10/16	浅黄橙色	カキメ、外：ハケメ			径0.9cm孔2個残存、3単位？、外：スス
145		SK125	Xb	土師器	鉢C	C		20.8	12.0	12.4	8/16	浅黄橙色	カキメ、外：ケズリ、ヘラ切り後ナデ			径0.8cm孔2個＋不整形1個(3単位？)、外：スス
146		SK125	Xb	須恵器	有台杯			—	8.2	—	0/16	灰色				
147		SK125	Xb	須恵器	瓶	C	長石・石英	—	—	—	0/16	褐灰色／暗青灰色	沈線、風船作り			
148		SK125	Xb	土師器	小甕A		石英・小礫	11.5	6.7	13.7	15/16	にぶい橙色	回転糸切り			炭化物、内：口縁部スス、外：スス
149		SK133	Xa	須恵器	有台杯A3	B	長石・石英	13.4	7.5	6.9	12/16	灰色				
150		SK133	Xa	須恵器	無台盤	B		15.3	9.7	1.9	9/16	灰色				
151		SK135	Xb	須恵器	短頸壺			(8.6)	—	—	2/16	褐灰色／オリーブ黒色				内：溶着痕、外：自然釉、火ぶくれ
152		SK135	Xb	須恵器	甕			(21.6)	—	—	1/16	暗青灰色	カキメ			
153		SK132	Xb	土師器	長甕C2	B	小礫	23.8	—	—	1/16	にぶい橙色	指頭圧痕、ハケメ			
154		SD140	Xb	須恵器	無台杯A	B		12.2	7.4	3.4	2/16	灰色		底部外面中央・中、「□□（所カ）」、体部外面横位右・中、「其（器カ）」		
155		SD147	Xb	土師器	鉢A		チャート	15.0	—	—	4/16	淡黄色	内：カキメ			
156		SD152	Xb	須恵器	無台杯C	C	石英・長石多量	12.5	5.8	3.6	7/16	暗青灰色	ヘラ切り後ナデ、重ね焼き痕			粘性の強い粘土
157		SD152	Xb	須恵器	杯蓋B	B		15.2	—	2.6	4/16	青灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			
158		P149	Xb	須恵器	長頸瓶	B		—	9.0	—	0/16	灰色				自然釉
159		P168	Xb	須恵器	無台杯B	C？		14.0	9.0	3.7	8/16	灰白色				スス
160		SK170	Xb	須恵器	無台杯A	B	精良	11.7	8.1	3.1	14/16	暗灰色	ヘラ切り後ナデ			
161		SK170	Xb	須恵器	無台杯B	B		13.4	7.6	3.0	6/16	青灰色	重ね焼き痕	底部外面中央・大、「＊」、体部外面墨痕		記号？
162		SK170	Xb	須恵器	有台杯A3		長石	14.0	9.0	6.4	11/16	灰色	回転ヘラ切り後高台貼付			
163		SK170	Xb	須恵器	杯蓋B			15.9	—	3.2	10/16	灰色	外：ケズリ			外：口縁部自然釉
164		SK170	Xb	須恵器	杯蓋B	B		15.6	—	3.1	13/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			
165		SK170	Xb	土師器	無台杯A		石英・長石	13.3	7.3	3.8	15/16	浅黄橙色	指頭圧痕		灯明皿	スス、タール

No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
166		SK170	Xb	須恵器	長頸瓶			−	−	−	1/16	灰色	外：沈線2条			内：口縁～頸部自然釉、外：肩～胴部自然釉、剥落部分多い
167		SK170	Xb	須恵器	横瓶	B		11.2	(33.1)	−	6/16	褐灰色／黄灰色	片面開そく、もう一方は不明、内：同心円文c類、外：平行線文b類			内：剥落顕著、外：オリーブ黒色自然釉、
168		SK170	Xb	土師器	鍋B	D	石英	36.0	−	20.0	4/16	にぶい橙色	カキメ、内：ハケメ、外：ケズリ			スス
169		SD166	Xb	土師器	長甕D1	D		20.7	−	19.4	3/16	にぶい黄橙色	ハケメ、内：カキメ、外：ケズリ			スス、炭化物
170		SX181	Xb	須恵器	有台杯A3	B		13.0	6.8	6.4	6/16	灰色				
171		SX181	Xb	土師器	長甕		石英・長石	−	7.4	−	0/16	にぶい橙色	静止糸切り、外：ケズリ			
172		SX181	Xb	土師器	長甕C2	B		21.0	−	−	4/16	にぶい褐色	ハケメ、非ロクロ、内：カキメ			スス、炭化物
173		SK185	Xb	須恵器	無台杯B			13.0	8.4	3.1	12/16	灰色	重ね焼き痕			スス
174		SK187	Xb	須恵器	無台杯A	B		12.4	7.9	3.1	5/16	灰色			灯明皿?	口縁部スス
175		SK190	Xb	須恵器	杯蓋B			14.1	−	2.7	12/16	灰白色	重ね焼き痕、ロクロケズリ			自然釉
176		SK190	Xb	土師器	小甕B		長石・石英	10.6	5.8	9.3	1/16	にぶい黄橙色	回転糸切り			スス、重量感あり
177		SK190	Xb	土師器	長甕B		石英・チャート	20.0	−	−	2/16	にぶい黄橙色	外：カキメ、ケズリ			風化顕著
178		P191	Xb	須恵器	無台杯A	B		−	−	−	0/16	灰白色		体部外面倒位下・小、「大」		
179		SD196	Xb	須恵器	無台杯A	B		12.3	7.5	3.3	16/16	青灰色／黄橙色	ヘラ切り後ナデ			外：底部部分的焼成不良
180		SK174	Xb	土師器	長甕A		石英	18.8	−	−	10/16	にぶい黄橙色	カキメ、内：平行線文当て具痕、外：平行線文b類			スス
181		SK251	Xb	須恵器	無台杯A	C?		10.8	7.4	2.6	7/16	灰色	重ね焼き痕			スス?、やや黒く小さめの器形で重量感あり
182		SK214	Xb	須恵器	無台杯A	B	白色粒子多量	12.1	8.2	3.1	12/16	灰色	重ね焼き痕、回転ヘラ切り後ナデ			高杯の胎土と類似、粘性の強い粘土使用
183		SD213	Xb	須恵器	杯蓋B			15.4	−	2.7	9/16	黒褐色／灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			内：自然釉、ツマミ欠損
184		SX231	Xb	須恵器	無台杯C			13.2	5.9	3.1	6/16	灰白色				
185		SX231	Xb	須恵器	無台杯C	B		12.8	7.4	3.4	3/16	灰白色	重ね焼き痕	底部外面中央・大、「千組」		人名?
186		SD235	Xb	須恵器	杯蓋B	B		15.5	−	2.4	8/16	青灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			溶着痕、外：自然釉
187		SD257	Xb	土師器	無台椀A2			12.0	5.6	3.7	3/16	にぶい橙色	回転糸切り		灯明皿?	内：口縁部タール、外：スス
188		SD265	Xb	須恵器	有台杯B1			10.1	5.8	4.5	4/16	灰白色	外：ケズリ、ヘラ切り後ナデ			内：自然釉
189		SD265	Xb	須恵器	杯蓋B		長石	12.4	−	3.0	4/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			
190		SD251	Xb	須恵器	皿	C	石英	(12.0)	−	−	1/16	浅黄橙色				焼成不良
191		SK255	Xb	須恵器	無台杯A	B		10.9	8.3	3.2	11/16	青灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「長」		自然釉
192		SD244	Xb	須恵器	無台杯C			12.2	7.0	3.4	3/16	灰白色／黄灰色				内：見込以外にスス大量
193		SD300	Xb	須恵器	無台杯A	B		12.6	8.0	3.0	3/16	青灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「大」		
194		SD299	Xb	土師器	長甕A	D		15.0	−	−	4/16	橙色	カキメ、外：ハケメ			スス
195		SD273	Xb	土師器	長甕B		雲母・長石	18.6	−	−	13/16	にぶい橙色	カキメ、内：ハケメ、外：平行線文b類			
196		SK262	Xb	須恵器	広口壺	B?	長石	(13.0)	−	−	6/16	褐灰色／黒褐色	外：ケズリ			外：自然釉
197		SX309	Xb	須恵器	無台杯B	B		11.9	7.2	3.1	4/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
198		SK312	Xb	須恵器	無台杯A		長石・海綿骨針	13.4	8.8	3.1	4/16	灰色				口縁部焼成不良
199		SK312	Xb	須恵器	無台杯	B		−	8.0	−	0/16	灰色		底部外面下・中、「与止」		
200		SK312	Xb	須恵器	杯蓋B	C		15.0	−	2.7	1/16	灰色	外：ケズリ			
201		SK312	Xb	土師器	長甕A		チャート・長石	20.0	−	−	6/16	灰白色	カキメ、内：指頭圧痕?			外：スス
202		SK333	Xb	須恵器	無台杯A	C		12.2	7.0	4.0	1/16	にぶい橙色				
203		SK352	Xb	須恵器	有台杯A3	B	長石	14.4	8.6	6.4	3/16	青灰色				外：わずかに自然釉
204		SK354	Xb	須恵器	無台杯A	B?	長石	12.4	7.5	3.2	11/16	灰白色	重ね焼き痕			
205		SK354	Xb	須恵器	無台杯B	B		12.4	8.7	3.2	16/16	灰色	重ね焼き痕			
206		SK354	Xb	須恵器	無台杯A		石英	12.0	8.0	3.2	16/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「七」		
207		SK354	Xb	須恵器	有台杯B3	C?		14.0	7.4	6.6	13/16	灰白色／黄灰色	外：ケズリ			外：自然釉多量
208		SK354	Xb	土師器	小甕A		チャート・石英	13.2	−	−	3/16	灰白色				外：スス
209		SK354	Xb	土師器	長甕B		石英・長石	20.2	−	−	2/16	灰白色	カキメ、外：平行タタキ			内：スス、風化顕著
210		SK354	Xb	土師器	長甕B		石英	15.2	−	−	4/16	にぶい橙色／浅黄橙色	内：カキメ、外：ケズリ			外：スス
211		SK343	Xb	須恵器	杯蓋C	D		13.0	−	1.7	14/16	灰白色			転用硯	内：磨滅
212		SK353	Xb	土師器	長甕D2	D		−	−	−	0/16	灰白色	ハケメ、外：ケズリ			外：スス
213		SD356	Xb	須恵器	無台杯A	B?	長石	11.8	7.5	3.2	8/16	灰色				
214		SX371	Xb	須恵器	甕			40.0	−	−	12/16	赤黒色／黒色	内：ケズリ、同心円文、外：平行線文b類			
215		SK358	Xb	土師器	長甕B		中礫0.3cm・チャート・雲母	19.0	−	−	2/16	灰白色	外：カキメ、平行線文c類、ケズリ			スス
216		SD369	Xb	土師器	無台椀A2			12.8	5.0	3.5	8/16	灰白色	回転糸切り	底部外面〔 〕		
217	2A1		Xa	須恵器	無台杯A		長石	11.6	7.2	3.0	6/16	灰色				
218	2B25		Xa	須恵器	無台杯A	B		12.6	8.2	3.3	11/16	青灰色		体部外面横位左・中、「葛」		
219	2C16		Xa	須恵器	無台杯A	B		12.4	7.4	3.5	13/16	青灰色	重ね焼き痕	体部外面横位右・中、「葛」		自然釉
220	3D25		Xa	須恵器	無台杯A	B	長石	11.8	8.1	3.0	8/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
221	3G12		Xa	須恵器	無台杯A		長石・褐色粒子	11.8	7.2	3.1	5/16	灰色	重ね焼き痕		灯明皿	内：タール、口縁内打ち欠き
222	4D11		Xa	須恵器	無台杯A	B		13.0	8.1	3.0	7/16	灰白色	重ね焼き痕	底部外面上・大、「一」		

No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
223	4E19		Xb	須恵器	無台杯A			12.1	6.7	3.7	6/16	灰色	重ね焼き痕			底部焼成不良
224	4F14		Xb	須恵器	無台杯A		長石	12.4	8.5	3.4	5/16	灰白色	重ね焼き痕			
225	5C1		Xa	須恵器	無台杯A		長石・石英	12.2	7.8	2.9	8/16	灰色	重ね焼き痕			
226	5E5		Xa	須恵器	無台杯A	B		11.7	7.0	3.2	12/16	青灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「長」、体部墨痕		自然釉
227	5E13		Xa	須恵器	無台杯A	C		11.8	6.5	3.6	2/16	にぶい橙色	ヘラ切り後ナデ			
228	5E18		Xa	須恵器	無台杯A	C		12.8	5.4	3.7	3/16	浅黄橙色	ヘラ切り後ナデ			
229	5F3		Xb	須恵器	無台杯A	B		11.6	7.6	3.0	5/16	灰色		底部外面上・大、「二」		
230	3B5		Xb	須恵器	無台杯B	B		12.4	8.5	3.4	8/16	灰色	重ね焼き痕			
231	3C25		Xa	須恵器	無台杯B			12.2	7.4	4.0	2/16	にぶい橙色				焼成不良
232	3D4		Xa	須恵器	無台杯B			13.1	8.0	3.4	16/16	灰白色			灯明皿	タール
233	3D6・7		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.3	8.1	2.9	7/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
234	3D6・11・16		Xa	須恵器	無台杯B	B	長石	11.9	7.8	2.8	8/16	灰色	重ね焼き痕			
235	3D6		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.1	7.7	3.1	5/16	灰色	重ね焼き痕	体部外面右・中、「□（碁カ）水」		口縁部打ち欠き？
236	3D14		Xa	須恵器	無台杯B	B	長石	11.9	8.6	3.2	13/16	緑灰色	重ね焼き痕		灯明皿	タール
237	3E13		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.2	7.6	3.5	6/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
238	3E20		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.2	7.4	3.5	12/16	灰白色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「十」		口縁部打ち欠き、スス
239	3E24		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.0	7.4	3.5	5/16	灰色	重ね焼き痕			
240	4E23		Xa	須恵器	無台杯B			15.0	10.8	3.6	5/16	灰白色				
241	4F17		Xa	須恵器	無台杯B	B		11.9	7.1	2.9	12/16	灰色				
242	2E25		Xa	須恵器	無台杯B	B	石英・長石	11.8	8.0	3.4	8/16	灰色	重ね焼き痕			
243	3D16		Xa	須恵器	無台杯B		石英	13.3	7.3	3.5	14/16	灰色				
244	4E3		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.1	8.2	2.9	2/16	灰色		底部外面・大、〔 〕		
245	4F3		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.7	7.6	3.3	5/16	灰色	重ね焼き痕			
246	4F11・12		Xb	須恵器	無台杯B	B		12.3	7.8	2.9	4/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
247	4F13・25		Xb	須恵器	無台杯B	B		12.2	7.6	3.1	6/16	青灰色	重ね焼き痕			内：灰色・灰白色のゴマ塩状自然釉
248	4F18		Xa	須恵器	無台杯B	B		11.7	6.5	3.4	8/16	灰色	重ね焼き痕			
249	4F25		Xb	須恵器	無台杯B	B		12.2	6.7	3.5	7/16	灰白色	重ね焼き痕	底部外面左・中、「〜」		漆書き記号？
250	5D14		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.1	8.8	3.1	6/16	灰色	重ね焼き痕			
251	5E18・24		Xa	須恵器	無台杯B			12.4	7.3	4.0	5/16	灰色	重ね焼き痕			
252	5F11		Xa	須恵器	無台杯B	B		11.6	8.0	3.2	1/16	オリーブ灰色	重ね焼き痕	底部外面墨痕		
253	5F13		Xa	須恵器	無台杯B			12.0	−	−	10/16	灰色	重ね焼き痕			
254	5F17		Xa	須恵器	無台杯B	B		12.0	7.4	3.2	7/16	灰色	重ね焼き痕			
255	6D4		Xa	須恵器	無台杯B	B		13.3	7.3	3.5	7/16	青灰色		底部内面上・中、〔与止〕		
256	3B4		Xa	須恵器	無台杯C	A	長石・石英	12.9	7.5	3.5	4/16	灰色				
257	3B5・25		Xa	須恵器	無台杯C			12.8	9.0	3.4	12/16	灰白色				スス？、焼成やや不良
258	4F18		Xa	須恵器	無台杯C	B		12.4	7.8	3.5	6/16	灰色	重ね焼き痕			
259	5E5		Xa	須恵器	無台杯C	B	長石	12.8	7.5	3.2	10/16	灰色	重ね焼き痕			
260	2E24		Xa	須恵器	無台杯	C		−	7.8	−	0/16	明オリーブ灰色		底部外面〔 〕		
261	2C16		Xa	須恵器	無台杯			−	7.8	−	0/16	緑灰色		底部外面〔 〕		
262	3B5		Xa	須恵器	無台杯			−	8.0	−	0/16	青灰色		底部外面〔 〕、体部墨痕		
263	3C・3D		Xa	須恵器	無台杯	B		−	5.6	−	0/16	灰色		底部外面左・中、「雑□（下ヵ）		
264	3C23		Xa	須恵器	無台杯	B		−	7.4	−	0/16	青灰色		底部外面〔 〕		
265	3E20		Xa	須恵器	無台杯	B		−	−	−	0/16	灰色		底部外面〔 〕		
266	4E15		Xa	須恵器	無台杯	B		−	8.0	−	0/16	灰色		底部外面墨痕		
267	4F12・13・17・18		Xa	須恵器	無台杯	B		−	9.0	−	0/16	灰色		底部外面中央・中、□□」		外：底部スス
268	4E25		Xa	須恵器	無台杯	B		−	7.2	−	0/16	灰色		底部外面中央・中、[ ]		
269	5E4		Xa	須恵器	無台杯	B		−	7.0	−	0/16	灰色		底部内面墨痕		
270	5E10		Xa	須恵器	無台杯	B		−	7.7	−	0/16	灰色		底部外面上・中、「大」、底部外面上・中、「一」		
271	5F1		Xa	須恵器	無台杯	B		−	8.0	−	0/16	青灰色		底部外面・大、□」		
272	5F16		Xa	須恵器	無台杯	B		−	8.0	−	0/16	灰白色/明オリーブ灰色		底部外面墨痕		
273	6C20・23・25, 7C5		Xa	須恵器	有台杯A3	B		13.4	7.0	7.1	4/16	灰白色				
274	5E5		Xa	須恵器	有台杯B1			10.2	6.4	5.2	6/16	青灰色	重ね焼き痕			
275	3D16		Xa	須恵器	有台杯B2	D		10.9	6.4	3.9	10/16	灰色				
276	5F16		Xa	須恵器	有台杯B2	D		12.5	8.8	3.6	14/16	灰色				付着物
277	3C15		Xa	須恵器	有台杯B3	B		14.4	7.8	7.0	10/16	灰色				溶着痕
278	3F18		Xa	須恵器	有台杯B3			13.6	8.6	6.3	8/16	灰色	外：ケズリ、ヘラ切り後ナデ			タール
279	4D1		Xa	須恵器	有台杯B3	B		14.2	8.2	6.5	1/16	灰色	外：ケズリ			外：底部自然釉、伏せて焼成、溶着痕

No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
280	4D10		Xa	須恵器	有台杯B3			14.8	7.5	7.3	16/16	灰白色	外：ケズリ			外：自然釉
281	3C5		Xa	須恵器	有台杯	B		－	8.0	－	0/16	灰色		底部外面墨痕	転用硯？	
282	5D4, 5F16		Xa	須恵器	有台椀	B		13.4	7.2	4.7	7/16	灰色				灰釉模造品
283	4C6		Xa	須恵器	杯蓋A	D	長石・石英	13.4	－	3.8	15/16	灰色	外：ケズリ	内面左・中、「東」		
284	3D12		Xa	須恵器	杯蓋B	B		14.0	－	2.7	4/16	青灰色	外：ケズリ			
285	3B25		Xa	須恵器	杯蓋			12.4	－	2.7	3/16	灰白色	外：ケズリ		転用硯	内：磨痕
286	3D1		Xa	須恵器	杯蓋B	A？	石英・長石	16.1	－	2.9	12/16	灰白色	外：ケズリ、重ね焼き痕			自然釉
287	4E1・12・17		Xb	須恵器	杯蓋B			13.7	－	2.8	8/16	明緑灰色	重ね焼き痕			内：スス
288	4E7		Xa	須恵器	杯蓋B	B		13.0	－	2.7	8/16	灰色	外：ケズリ	内面左・大、小、「真臼」		
289	4F13		Xb	須恵器	杯蓋B	A		14.6	－	2.9	10/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			自然釉
290	5F9		Xa	須恵器	杯蓋B	B	石英	15.3	－	2.4	1/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			自然釉
291	5F13・17・18		Xa	須恵器	杯蓋B	B		14.8	－	3.3	12/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			
292	5D18		Xa	須恵器	無台盤			16.3	12.0	2.4	6/16	灰色	重ね焼き痕			
293	2A15		Xa	土師器	無台椀A1			11.2	6.8	3.5	6/16	にぶい橙色	回転糸切り			外：口唇スス？
294	3C9		Xa	土師器	無台椀A2			12.8	4.8	4.5	8/16	にぶい黄橙色	回転糸切り			
295	4E12		Xb	土師器	無台椀A2		長石・石英	13.0	5.0	3.7	8/16	橙色／にぶい橙色	回転糸切り			
296	5E23		Xa	土師器	無台椀A2		長石	13.0	5.9	3.0	2/16	にぶい橙色	回転糸切り			口唇部スス
297	4F6・17・22, 5F1		Xa	土師器	無台椀A3			17.6	6.6	6.4	12/16	にぶい橙色	外：ケズリ、回転糸切り後ケズリ？			炭化物、スス、口縁打ち欠き
298	5F12・13		Xa	土師器	無台椀A3		長石	17.0	6.6	5.7	5/16	灰白色	回転糸切り			スス、タール
299	4F17		Xa	土師器	無台椀B2			12.2	4.0	3.4	2/16	浅黄橙色	回転糸切り			スス
300	3E18		Xa	土師器	無台椀B3		石英・長石・チャート	16.0	4.6	5.1	3/16	にぶい橙色	回転糸切り			
301	30A3		Xa	土師器	黒色土器無台椀		金雲母・長石	18.0	6.4	6.2	4/16	黒色／にぶい橙色	内：ミガキ、底部放射、外：ケズリ、口縁～体部平行ミガキ			
302	3C18		Xa	土師器	有台椀		雲母	17.0	8.6	8.1	5/16	にぶい橙色				
303	5F8・13		Xa	土師器	鉢B			13.0	11.6	15.7	2/16	にぶい橙色	指頭圧痕、内：ハケメ、外：ケズリ			
304	5E19・25		Xa	土師器	短頸壺	精良		(9.0)	(7.6)	(12.1)	4/16	にぶい黄橙色／褐灰色	内：カキメ、外：ケズリ			スス、内：下部摩耗顕著
305	5F4		Xb	須恵器	小瓶A	精良		－	5.1	－	0/16	灰白色	風船技法、底部貼付け			暗灰色自然釉
306	5C1・21, 5E21		Xa	須恵器	小瓶B			(5.7)	－	－	10/16	灰白色	外：沈線1条			風化顕著
307	5D14		Xa	須恵器	甕			－	－	－	0/16	灰色	内：当て具痕、外：指頭圧痕、手ずくね			
308	3B10		Xa	須恵器	甕	C		(21.0)	－	－	0/16	黒色				
309	3C3		Xa	須恵器	甕	B		(23.0)	－	－	2/16	黒褐色				
310	3E22		Xb	須恵器	甕			－	－	－	0/16	黒色	内：同心円当て具、外：平行線文b類			内：自然釉
311	3E20		Xa	土師器	小甕A		石英・長石	13.4	7.0	12.6	10/16	浅黄橙色	外：ケズリ、回転糸切り			内：口縁部スス
312	3G12		Xa	土師器	小甕A			13.2	7.0	13.2	5/16	淡黄色	回転糸切り			スス
313	2B16		Xa	土師器	小甕B		チャート・長石	14.5	7.3	11.0	12/16	淡橙色	外：カキメ、回転糸切り			外：スス、風化顕著
314	5E1		Xa	土師器	小甕C		小礫・石英	13.0	7.2	13.3	2/16	浅黄橙色／にぶい黄橙色	外：ケズリ、回転糸切り			スス
315	3C16		Xa	土師器	小甕C			12.0	－	－	4/16	にぶい橙色				内：スス
316	5E23		Xa	土師器	小甕		小礫	－	6.8	－	0/16	にぶい橙色／明褐灰色	外：ケズリ			
317	3E7		Xa	土師器	小甕		長石	－	6.4	－	0/16	灰白色／淡黄色	回転糸切り			スス
318	3E2		Xa	土師器	小甕		石英	－	6.0	－	0/16	浅黄橙色／にぶい黄橙色	回転糸切り、径1.5mmの糸使用			
319	3C20		X	土師器	長甕A		チャート・石英・砂多量	18.8	－	－	7/16	灰白色	カキメ、内：指頭圧痕、外：ケズリ			風化顕著
320	4F7, 5E2・4, 6F1		Xab	土師器	長甕A		小礫	19.5	－	－	3/16	浅黄橙色	カキメ、内：同心円文、外：ケズリ、平行線文b類			スス
321	4F10・17, 5F7		Xa	土師器	長甕A		石英・長石・チャート	21.2	－	－	7/16	灰白色	カキメ、外：ケズリ			内：炭化物、外：スス
322	5E18・19・25		Xa	土師器	長甕A		雲母	20.0	－	－	3/16	灰白色／橙色	カキメ			
323	4F18		Xa	土師器	長甕A			(19.4)	－	－	2/16	浅黄橙色	カキメ			外：スス
324	5F3		Xa	土師器	長甕A		雲母	(19.4)	－	－	3/16	浅黄橙色	カキメ			
325	3C10		X	土師器	長甕B		石英・長石・チャート	17.8	－	－	2/16	にぶい褐色	内：指頭圧痕、外：カキメ			
326	3C		Xa	土師器	長甕B		石英・小礫・雲母	19.6	－	－	6/16	灰白色	カキメ			
327	4F9・18・19		Xa	土師器	長甕B			23.2	－	－	6/16	橙色	カキメ、内：ハケメ、外：ケズリ			
328	4F13		Xa	土師器	長甕B		チャート・石英	18.5	－	－	3/16	灰白色	外：カキメ、ケズリ			
329	6E9・12		Xab	土師器	長甕B		小礫・石英	17.0	－	－	4/16	浅黄橙色	カキメ			スス
330	5E15		Xa	土師器	長甕B		雲母・長石・石英	16.0	－	－	2/16	にぶい橙色／明褐灰色	外：カキメ、ケズリ			内：スス
331	3F3・16・17		Xa	土師器	長甕C1	B		23.4	－	－	11/16	にぶい黄橙色	ハケメ、非ロクロ			スス
332	4F10		Xb	土師器	長甕C1	B	小礫	23.4	－	－	1/16	明褐灰色	ハケメ、内：指頭圧痕、非ロクロ			スス、炭化物
333	3D11		Xa	土師器	長甕C2	B		25.0	－	－	3/16	にぶい黄橙色	ハケメ、内：指頭圧痕、非ロクロ			スス
334	5E2・5・9・10		Xa	土師器	鍋A			43.0	－	－	8/16	にぶい黄橙色	ハケメ,内：カキメ、同心円文、外：平行線文類a類			外：スス
335	3E19		Xa	土師器	鍋B			35.6	－	－	5/16	にぶい黄橙色／浅黄橙色	ハケメ、内：同心円文c類、外：カキメ、ケズリ、平行線文c類			スス
336	4E23		Xa	土師器	鍋B		石英・雲母	36.0	－	－	4/16	浅黄橙色	外：ケズリ			外：炭化物

No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
337	4F25		Xa	土師器	鍋B		石英・雲母・チャート	35.0	-	-	2/16	浅黄橙色	カキメ、外：ケズリ			外：ススI
338	5E13		Xa	土師器	鍋B		石英	41.4	-	-	9/16	灰白色	内：カキメ、外：ケズリ			外：ススI
339	5E25		Xa	土師器	鍋B		長石・小礫	(42.0)	-	-	1/16	浅黄橙色	カキメ			
340	5E25		Xa	土師器	鍋B		石英・長石	34.6	-	-	2/16	にぶい橙色	外：ケズリ、カキメ			外：炭化物
341		SK421	XI	須恵器	無台杯A	B		-	8.4	-	0/16	青灰色		底部外面上・中、〔与止〕		
342		SK403	XI	須恵器	無台杯A	B	長石・石英	11.9	8.0	2.6	6/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
343		SK403	XI	須恵器	無台杯A	B		11.3	7.0	2.6	4/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面左・中、「与止」		
344		SK403	XI	須恵器	無台杯A	B		11.4	6.8	2.5	2/16	青灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「与止」		
345		SK403	XI	須恵器	無台杯A	B		11.6	7.7	3.0	7/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「玉」	灯明皿	内：タール、口縁部打ち欠き
346		SK403	XI	須恵器	無台杯B	B		12.7	8.4	3.5	6/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「千鳥」		人名？
347		SK403	XI	須恵器	無台杯B			12.4	6.7	3.1	3/16	灰色	重ね焼き痕			
348		SK403	XI	須恵器	無台杯B		長石	12.3	8.3	3.1	6/16	灰白色	重ね焼き痕			
349		SK403	XI	須恵器	無台杯B	B	長石	11.8	8.6	3.2	11/16	灰白色	重ね焼き痕、ヘラ切り後ナデ			
350		SK403	XI	須恵器	無台杯B	B		12.6	-	-	3/16	灰色		体部、「□		
351		SK403	XI	須恵器	無台杯	B		-	7.6		0/16	灰色		底部外面・大、中、「全□（万ヵ）		
352		SK403	XI	須恵器	有台杯B1	C		8.8	5.8	4.4	4/16	青灰色	重ね焼き痕			
353		SK403	XI	須恵器	有台杯B3	B		14.5	8.4	7.2	13/16	灰色	外：ケズリ、ヘラ切り後ナデ	底部外面左・中、「与止」		外：自然釉
354		SK403	XI	須恵器	杯蓋B	B		15.5	-	3.1	13/16	青灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			溶着痕、外：自然釉
355		SK403	XI	須恵器	杯蓋A	D	長石・石英	14.9	-	3.8	7/16	灰色	外：ケズリ			
356		SK403	XI	須恵器	高杯	B		16.9	10.4	10.7	15/16	灰色	倒蓋式、重ね焼き痕			杯部に径12cmの杯を伏せて焼いた重ね焼き痕
357		SK403	XI	土師器	小甕A		チャート・長石・石英	13.4	6.8	14.0	8/16	にぶい橙色	外：カキメ、ケズリ			内：炭化物、外：ススI
358		SK403	XI	土師器	小甕A		長石・雲母・小礫	(23.0)	-	-	3/16	淡黄色	カキメ、内：ハケメ、当て具痕、外：ケズリ、タタキ			
359		SK403	XI	土師器	小甕A		石英・チャート	20.6	-	-	6/16	にぶい黄橙色／浅黄橙色	カキメ、内：当て具痕、外：タタキ			
360		SK403	XI	土師器	長甕B		長石・石英・チャート・砂	23.0	-	-	7/16	にぶい黄橙色／灰黄褐色	カキメ、内：ハケメ、指頭圧痕、外：平行線文b類			外：ススI、炭化物
361		SK403	XI	須恵器	甕			-	-	-	0/16	灰白色／灰色	内：ケズリ、同心円文、外：カキメ、平行線文a類			外：肩部より上に灰白色自然釉
362		SK400	XI	須恵器	無台杯A	C	緻密	12.1	6.0	3.5	8/16	浅黄橙色			灯明皿	タール、炭化物？他に類例あり
363		SK400	XI	須恵器	無台杯A		長石	12.4	9.0	3.0	5/16	灰色	重ね焼き痕			底部部分的に焼成不良
364		SK400	XI	須恵器	無台杯A			12.8	9.2	3.1	5/16	灰色				
365		SK400	XI	須恵器	杯蓋B	B		16.1	-	2.6	8/16	灰白色	外：ケズリ、重ね焼き痕			
366		SK400	XI	須恵器	有台杯	A		-	7.8	-	0/16	灰色	貼付け高台			
367		SK400	XI	土師器	小甕A		チャート	13.4	-	-	8/16	淡黄色／にぶい黄橙色	内：カキメ、外：指頭圧痕			内：炭化物、外：ススI
368		SK400	XI	土師器	長甕A		長石	19.4	-	-	5/16	灰白色	内：同心円文a類、外：平行線文c類、カキメ			ススI
369		SK400	XI	土師器	長甕D	D	雲母・チャート	24.0	-	34.9	4/16	にぶい黄橙色／明褐灰色	カキメ、ハケメ、内：指頭圧痕、外：ケズリ			外：ススI
370		SK438	XI	土師器	小甕B		チャート・石英	13.9	-	-	14/16	にぶい橙色／にぶい褐色				内：炭化物、外：ススI
371		SK442	XI	須恵器	有台杯A3	A？	長石	13.7	8.1	7.2	8/16	灰色	静止糸切り？			
372		SD77	XIb	土師器	鍋B	D		(36.6)	-	15.5	2/16	黄橙色	ハケメ、内：カキメ、外：ケズリ			ススI
373		SD77	XIb	須恵器	甕			-	-	-	1/16	灰色／暗オリーブ灰色	外：波状文2条			自然釉
374		SD75	XIb	須恵器	無台杯	B		-	8.8	-	0/16	灰色		底部外面上・中、「長」		
375		SD75	XIb	須恵器	杯蓋B			15.6	-	2.3	9/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			外：口縁自然釉
376		SD75	XIb	須恵器	甕			-	-		0/16	褐灰色／灰色	内：体部同心円文c類、底部平行線文当て具、外：格子文			内部当て具3種類使用
377		SD336	XIb	須恵器	無台杯B	B		12.0	8.3	2.5	4/16	灰色	重ね焼き痕		灯明皿	内：タール
378		SD336	XIb	土師器	長甕B			20.0	-	-	2/16	灰白色	カキメ、内：指頭圧痕、外：平行タタキ			外：ススI、炭化物
379		SD73	XIb	須恵器	杯蓋B	A		12.4	-	2.8	16/16	灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			口縁端部自然釉、全体に歪み
380		SD73	XIb	須恵器	壺蓋			11.6	-	-	12/16	灰色／暗灰色	外：ケズリ			外：天井部自然釉
381	3E15		XIa	須恵器	無台杯A	B		12.9	8.6	3.2	5/16	青灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「□（萬ヵ）」		
382	5F10		XIa	須恵器	無台杯A			12.2	8.0	3.9	5/16	灰色				
383	4G21		XIa	須恵器	無台杯B			12.7	7.4	3.5	5/16	灰白色				
384	5E3		XIa	須恵器	無台杯	B		-	9.0	-	0/16	灰色		底部外面墨痕		
385	4E2・7		XIa	須恵器	杯蓋B	B	長石	14.9	-	2.7	12/16	青灰色	外：ケズリ、重ね焼き痕			溶着痕
386	4G6		XIa	須恵器	高杯？	A	長石	13.0	-	-	6/16	灰色				
387	20A5		XI	須恵器	甕	C？		-	-	-	0/16	灰色／黒褐色	内：同心円文b類、外：平行線文b類			
388	4E10		XI	土師器	小甕A		小礫・長石・チャート	13.4	7.5	6.1	6/16	灰白色	カキメ、外：ケズリ			外：下部ススI少量
389	3E23		XIa	土師器	鍋B		石英・チャート	34.0	-	-	7/16	淡黄色	カキメ			内：ススI
390	3C4		-	須恵器	無台杯A	B		12.5	8.0	3.3	14/16	灰白色			灯明皿？	タール
391	3D4		-	須恵器	無台杯A	B		12.3	6.8	3.1	5/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面墨痕		
392	3E3		-	須恵器	無台杯A	B		12.3	7.4	3.1	10/16	灰色	重ね焼き痕			溶着痕
393	4E3		-	須恵器	無台杯A	B		11.9	8.0	3.3	1/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面墨痕		ススI

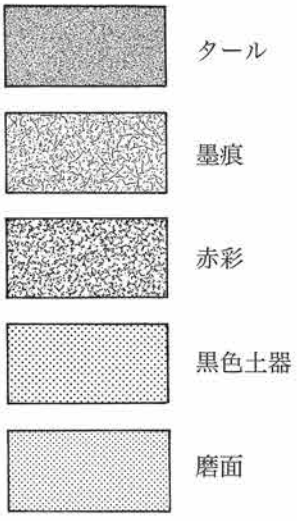
No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
394	4F		-	須恵器	無台杯A	B		11.6	7.0	2.9	2/16	青灰色	重ね焼き痕	底部外面、「□」、□		
395	5C2		砂層	須恵器	無台杯A	B		12.5	7.2	3.5	5/16	灰白色	重ね焼き痕	底部外面右・中、「廣」		
396	2Tr①区		Ⅶ	須恵器	無台杯A	B	長石	12.0	7.5	3.2	15/16	灰白色	重ね焼き痕			
397	2Tr①区		Ⅶ	須恵器	無台杯A	B	長石・石英	12.0	7.7	3.3	16/16	灰白色	重ね焼き痕			
398	2Tr①区		Ⅶ	須恵器	無台杯A	B	長石	12.4	7.2	2.7	16/16	灰色				溶着痕
399	2HT		-	須恵器	無台杯A	B		12.3	7.3	2.8	8/16	灰色				
400	2HT		-	須恵器	無台杯A	B		11.4	6.2	3.0	16/16	灰色				溶着痕
401	2HT		-	須恵器	無台杯A	B	長石	12.5	7.7	3.3	4/16	灰白色	重ね焼き痕			
402	3Ht		-	須恵器	無台杯A	B		12.0	7.6	3.0	5/16	灰色	重ね焼き痕	底部外面上・中、「酉」		
403	3E3		-	須恵器	無台杯B	B		12.2	8.0	3.4	14/16	灰白色	重ね焼き痕		灯明皿	内：タール、打ち欠き?
404	2HT		-	須恵器	無台杯B	B		11.8	6.1	3.2	14/16	灰色				
405	5E2,5F1		-	須恵器	無台杯B	B	石英・長石	12.1	7.3	3.0	8/16	灰白色				
406	2HT		-	須恵器	無台杯B	B		11.9	7.3	2.8	8/16	明緑灰色				溶着痕、外：スス
407			-	須恵器	無台杯B	B		12.0	7.6	2.9	5/16	灰色		底部外面上・中、「家刀」		
408	2Tr①区試掘		-	須恵器	無台杯B	B		11.9	7.4	3.0	10/16	青灰色		底部外面左・丈、「上」、体部左・中、〔墓〕		溶着痕
409	3E3		-	須恵器	無台杯	B		-	7.0	-	0/16	灰色		体部外面墨痕		
410	4B20		-	須恵器	無台杯	B		-	8.0	-	0/16	灰色		底部外面、□」		
411	4E4		-	須恵器	無台杯	B		-	-	-	0/16	灰色		底部外面、「□		
412	4E、3HT		-	須恵器	無台杯	B		-	7.3	-	0/16	灰色		底部外面中央、「□□」		
413	5E4		-	須恵器	無台杯	B		-	6.8	-	0/16	灰白色		底部内面上・小、「十」		
414	5E2		-	須恵器	無台杯			-	7.5	-	0/16	灰色	底部ケズリ	底部外面、□」		
415	2Tr①区試掘		-	須恵器	有台杯A3	B		12.7	7.4	6.5	13/16	灰白色／灰色	外：ケズリ			外：自然釉、火ぶくれ
416	3D4,4D2		-	土師器	無台椀A2		石英・長石	12.6	4.5	4.0	15/16	にぶい橙色	回転糸切り		灯明皿	タール
417	2Tr①区試掘		-	土師器	無台椀A2		金雲母・石英	12.6	6.0	4.2	1/16	にぶい橙色	外：手持ち?ケズリ、ヘラ切り後ナデ?			
418	5E2		-	土師器	無台椀			23.6	-	-	2/16	にぶい橙色				
419	HT		-	土師器	黒色土器無台椀		雲母	-	7.4	-	0/16	黒色／浅黄橙色				他の黒色土器に比べ肉厚
420	2HT		-	土師器	鉢B			(18.6)	-	-	2/16	灰白色				
421	4E3		-	須恵器	小瓶C	D		(5.2)	-	-	6/16	黄灰色／灰色				
422	3F		-	須恵器	小瓶	D	長石	-	6.2	-	0/16	灰色	高台貼付け			
423	3E3		-	須恵器	壺・瓶類	D		-	10.5	-	0/16	灰色	外：ケズリ、貼付け高台、ヘラ切り後ナデ			溶着痕
424	5F		-	須恵器	甕			-	-	-	0/16	暗緑灰色／灰色	内：平行線文、外：カキメ、平行線文a類			自然釉
425	3H		-	土師器	小甕A		石英・小礫	12.4	6.2	12.0	11/16	にぶい橙色	回転糸切り			内：炭化物、外：全体スス
426	3B14		-	土師器	長甕A		石英	(20.4)	-	-	3/16	灰白色	カキメ			
427	4E3		-	土師器	長甕A			21.8	-	-	4/16	浅黄橙色	カキメ			スス
428	5F1		-	土製品	円面硯		石英・長石	-	18.0	-	2/16	灰色	外：格子状ヘラ描き			的場遺跡に類似品あり、2つ以上の透かし
429	3E25		Xb	土製品	手づくね土器			4.4	3.3	2.8	1/16	灰白色	手づくね、内：指頭圧痕			祭祀遺物
430		SK170・190	Xb	土製品	筒形土製品	粗	小礫多量	14.2	-	8.8	-	橙色／灰褐色	小孔径1.3～2.0cm、5ヶ所、非ロクロ、輪積み			スス、内：二次被熱赤変
431		SD251	Xb	土製品	筒形土製品	粗	長石	13.4	-	8.8	-	にぶい赤褐/にぶい褐	小孔3ヶ所以上、外から内へ貫く、非ロクロ			二次被熱赤変
432	6E2		Xa	土製品	塔状土製品			-	-	-	-	灰白色	焼成帆、二次被熱なし			外面スス、重量143.7g
433		SK123	Dxb	土製品	土器片円盤			(長) 2.0	(幅) 2.0	(厚) 0.7	(重) 3.7	灰色	瓶類破片使用			
434		SK123	Dxb	土製品	土器片円盤			(長) 1.8	(幅) 1.9	(厚) 0.9	(重) 4.1	灰色	外：カキメ			
435		SK123	Dxb	土製品	土器片円盤			(長) 2.7	(幅) 2.2	(厚) 0.9	(重) 4.6	灰色	瓶類破片使用			自然釉
436		SX126	Xb	土製品	土器片円盤			(長) 2.6	(幅) 2.8	(厚) 1.0	(重) 9.5	灰白色	甕類破片使用			外：スス
437		SX126	Xb	土製品	土器片円盤			(長) 1.8	(幅) 2.2	(厚) 0.9	(重) 4.9	灰白色				
438		SX126	Xb	土製品	土器片円盤			(長) 2.0	(幅) 2.1	(厚) 0.9	(重) 5.0	灰色	内：当て具痕、同心円文			
439	3B5?		Xa	土製品	土器片円盤			(長) 1.9	(幅) 1.9	(厚) 0.6	(重) 2.1	にぶい橙色	外：カキメ			
440	3C22		Xa	土製品	土器片円盤			(長) 2.2	(幅) 2.5	(厚) 0.9	(重) 6.5	灰色	内：カキメ			外：自然釉
441	3C16		Xa	土製品	土器片円盤			(長) 3.2	(幅) 3.1	(厚) 0.9	(重) 12.5	灰色	内：当て具痕、外：タタキ、甕類破片使用			自然釉
442	4D18		Ⅷa	土製品	土器片円盤			(長) 2.0	(幅) 2.2	(厚) 0.9	(重) 5.0	灰色				自然釉
443	4D23		Ⅷb	土製品	土器片円盤			(長) 2.0	(幅) 2.2	(厚) 0.8	(重) 4.4	灰色	外：カキメ、瓶類破片使用			自然釉
444		SK353	Xb	土製品	土器片円盤			(長) 2.5	(幅) 2.9	(厚) 1.0	(重) 11.4	灰色				摩耗
445		SD265	Xb	土製品	土器片円盤			(長) 2.2	(幅) 2.7	(厚) 1.2	(重) 13.9	灰白色	内：カキメ、外：タタキ、大甕破片使用			摩耗
446		SK354	Xb	土製品	土器片円盤			(長) 3.5	(幅) 2.3	(厚) 1.1	(重) 7.8	灰色				摩耗
447		SX371	Xb	土製品	土器片円盤			(長) 3.2	(幅) 2.1	(厚) 1.3	(重) 15.6	灰色				摩耗
448	5E8		Ⅷa	土製品	土器片円盤			(長) 2.5	(幅) 2.3	(厚) 1.2	(重) 9.0	灰色				摩耗
449	4F23		Dxa	土製品	土器片円盤			(長) 2.7	(幅) 3.1	(厚) 1.0	(重) 9.5	灰色	内：当て具痕、外：タタキ			摩耗
450	4E24		Xa	土製品	土器片円盤			(長) 3.1	(幅) 2.8	(厚) 0.8	(重) 8.5	灰色				摩耗

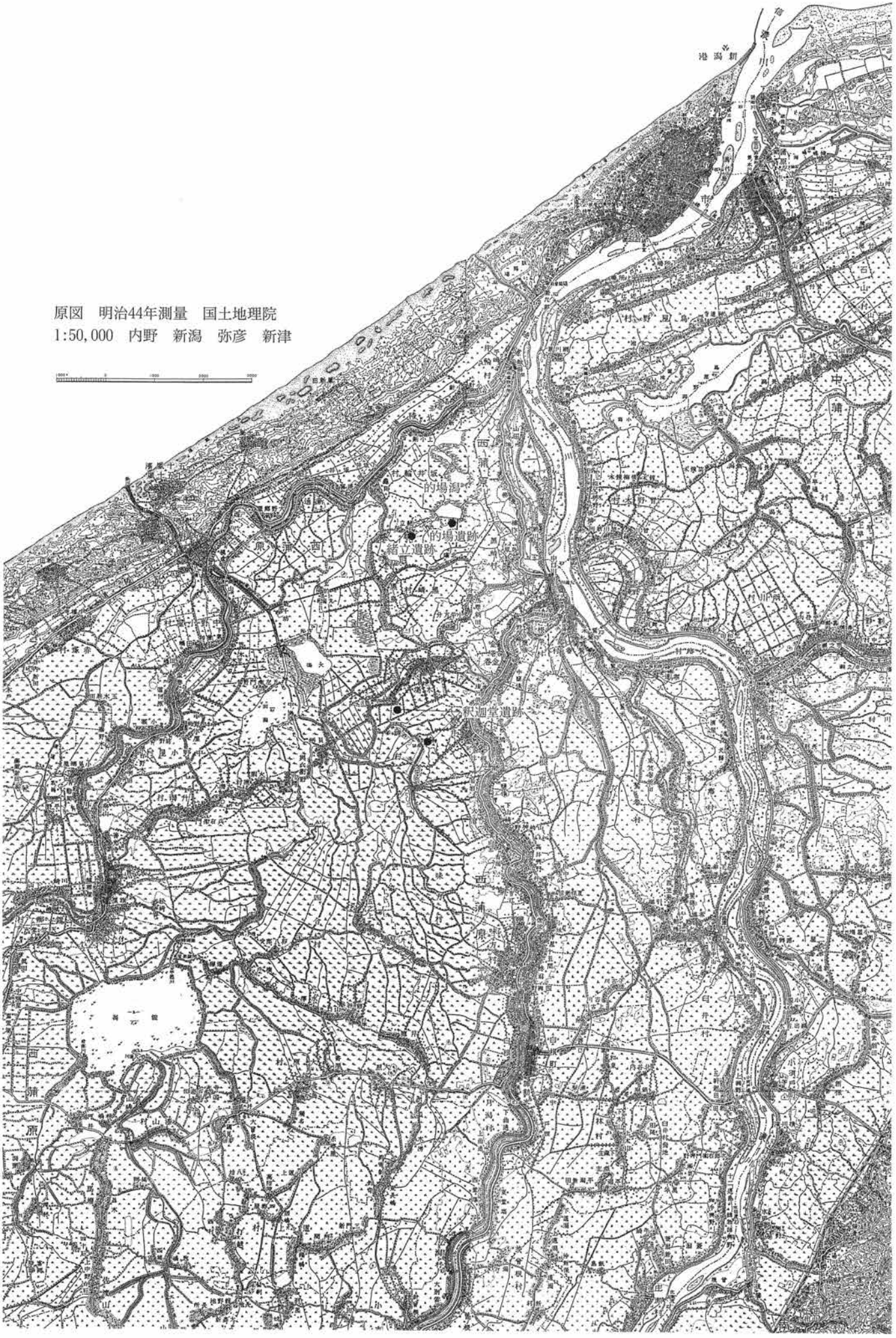
No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
451	4E24		Xb	土製品	土器片円盤			(長) 2.8	(幅) 2.5	(厚) 0.8	(重) 7.8	灰色	内：当て具痕、外：タタキ、瓶類破片使用			摩耗
452	4F20		Xb	土製品	土器片円盤			(長) 3.1	(幅) 3.0	(厚) 1.1	(重) 13.7	灰色				摩耗
453	5F4		Xa	土製品	土器片円盤			(長) 3.7	(幅) 2.5	(厚) 1.2	(重) 17.4	灰色				摩耗
454	5A13		砂中	土製品	泥面子			(長) 1.6	(幅) 1.6	(厚) 0.6	(重) 1.1	橙色	型おこし？			
455		SK58	Xb	土製品	土錘			(長) 5.5	(幅) 1.2	－	(重) 6.5	灰白色				スス
456		SK125	Xb	土製品	土錘			(長) 3.9	(幅) 0.9	－	(重) 3.2	灰白色				スス
457		SD151	Xb	土製品	土錘			(長) 5.7	(幅) 1.2	－	(重) 7.2	にぶい橙色				スス
458		SK170	Xb	土製品	土錘			(長) 5.2	(幅) 1.2	－	(重) 4.9	浅黄橙色				
459		SK209	Xb	土製品	土錘			(長) 4.0	(幅) 1.1	－	(重) 3.2	灰白色				
460		SK209	Xb	土製品	土錘			(長) 5.7	(幅) 1.4	－	(重) 7.4	にぶい黄橙色				スス
461		SK132	Xb	土製品	土錘			(長) 5.2	(幅) 1.3	－	(重) 7.6	浅黄橙色				
462		SK132	Xb	土製品	土錘			(長) 6.4	(幅) 1.2	－	(重) 7.3	にぶい黄橙色	指頭圧痕			
463		SK132	Xb	土製品	土錘			(長) 5.0	(幅) 1.3	－	(重) 6.8	浅黄橙色				
464		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.0	(幅) 1.2	－	(重) 5.7	灰白色				
465		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.4	(幅) 1.2	－	(重) 5.8	灰白色				スス
466		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 4.4	(幅) 1.4	－	(重) 5.4	灰白色				焼成不良
467		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.0	(幅) 1.2	－	(重) 5.1	にぶい黄橙色				
468		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 4.3	(幅) 1.2	－	(重) 3.2	灰白色				焼成不良
469		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.8	(幅) 1.1	－	(重) 5.7	灰白色				スス
470		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 4.6	(幅) 1.2	－	(重) 4.0	灰白色				焼成不良
471		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.4	(幅) 1.2	－	(重) 5.9	灰白色	指頭圧痕			
472		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.1	(幅) 1.1	－	(重) 5.3	灰白色	指頭圧痕			スス
473		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 4.3	(幅) 1.1	－	(重) 4.4	灰白色				スス
474		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.4	(幅) 1.0	－	(重) 3.8	灰白色				
475		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.4	(幅) 1.2	－	(重) 5.4	灰白色				スス
476		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 4.9	(幅) 1.5	－	(重) 6.5	灰白色				
477		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.3	(幅) 1.2	－	(重) 5.9	灰白色				
478		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.1	(幅) 1.3	－	(重) 6.9	灰白色				
479		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 5.6	(幅) 1.1	－	(重) 5.4	灰白色	指頭圧痕			
480		SK312	Xb	土製品	土錘			(長) 4.7	(幅) 1.2	－	(重) 6.2	灰白色				
481	3C10		Xa	土製品	土錘			(長) 5.2	(幅) 1.3	－	(重) 7.5	浅黄橙色				
482	3C13		Xa	土製品	土錘			(長) 5.7	(幅) 1.3	－	(重) 7.6	にぶい黄橙色				
483	3C14		Xa	土製品	土錘			(長) 5.2	(幅) 1.3	－	(重) 7.1	にぶい橙色	指頭圧痕			
484	3C15		Xa	土製品	土錘			(長) 5.0	(幅) 1.2	－	(重) 5.8	灰白色	指頭圧痕			
485	3C18		Xa	土製品	土錘			(長) 5.3	(幅) 1.2	－	(重) 6.9	にぶい橙色				スス
486	3C15		Xa	土製品	土錘			(長) 4.6	(幅) 1.2	－	(重) 5.5	浅黄橙色				スス
487	3C20		Xa	土製品	土錘			(長) 6.2	(幅) 1.4	－	(重) 9.1	浅黄橙色				スス
488	3C23		Xa	土製品	土錘			(長) 5.3	(幅) 1.4	－	(重) 7.9	浅黄橙色				
489	4E20		Xa	土製品	土錘			(長) 4.8	(幅) 1.1	－	(重) 4.4	にぶい橙色				スス
490	4F22		Xa	土製品	土錘			(長) 5.0	(幅) 1.1	－	(重) 4.5	にぶい黄橙色				
491	5F2		Xa	土製品	土錘			(長) 4.5	(幅) 1.0	－	(重) 2.9	黒褐色				
492	5F12		Xa	土製品	土錘			(長) 4.4	(幅) 1.0	－	(重) 3.1	にぶい赤褐色				
493	6C19		Xa	土製品	土錘			(長) 5.4	(幅) 1.3	－	(重) 7.8	にぶい橙色				
494	6C25		Xa	土製品	土錘			(長) 3.9	(幅) 0.9	－	(重) 2.3	灰白色				スス、焼成不良
495	6C25		Xa	土製品	土錘			(長) 3.6	(幅) 0.8	－	(重) 1.9	灰白色				
496	6C25		Xa	土製品	土錘			(長) 3.6	(幅) 0.9	－	(重) 2.5	にぶい黄橙色				焼成不良
497	6C25		Xa	土製品	土錘			(長) 3.5	(幅) 1.0	－	(重) 2.1	灰白色				焼成不良
498	6C25		Xa	土製品	土錘			(長) 3.6	(幅) 0.8	－	(重) 2.5	灰白色				
499	3D1		Xa	土製品	土錘		砂多量	(長) 5.4	(幅) 4.4	－	(重) 96.5	にぶい黄橙色				スス
500	⑧Tr		Ⅷ	木製品	斎串	板目材		－	(幅) 1.8	(厚) 0.5	－		切込3対			上下破損
501	2B14		Ⅸb	木製品	杭			(長) 7.2	(幅) 2.6	(厚) 2.5	－					杭7
502	2B13		Ⅸb	木製品	杭			(長) 6.7	(幅) 2.3	(厚) 2.2						
503	2B17		Ⅸb	木製品	杭			(長) 17.5	(幅) 3.4	(厚) 3.3	－					杭1
504		SX126	Xb	金属製品	銅銙			(長) 2.42	(幅) 2.64	(厚) 0.65	－		補修痕、やすり痕跡、4つの鋲、黒漆			
505		P307	Xb	金属製品	銅金具			(長) 1.9	(幅) 0.6	(厚) 0.05	(重) 0.6					径2cmほどの棒状のものに巻き付けた金具
506	5D21		Ⅸb	金属製品	刀子			(長) 4.1	(幅) 1.2	(厚) 0.8	(重) 3.8		径4～5mmの目釘孔、広茎？			目釘孔裏面腐蝕
507		SK97	Ⅷb	金属製品	鏃			(長) 14.6	(幅) 3.6	(厚) 0.5						

No.	出土グリッド	遺構No.	層位	種別	器種	胎土	含有物	口径	底径	高さ	口縁部残存率	色調内/外	手法	墨書	転用	備考
508		P70	Xb	石製品	小礫			(口) 1.9	(幅) 1.5	(厚) 0.5	(重) 2.3	黒色				碁石又は双六子
509		SD211	Xb	石製品	小礫			(口) 2.1	(幅) 1.9	(厚) 1.0	(重) 5.6	黒色				碁石又は双六子
510		SK262	Xb	石製品	小礫			(口) 1.6	(幅) 1.5	(厚) 0.6	(重) 2.3	黒色				碁石又は双六子
511		SK355	Xb	石製品	小礫			(口) 1.5	(幅) 1.5	(厚) 0.7	(重) 1.9	黒色				碁石又は双六子
512		SK421	XI	石製品	小礫			(口) 1.7	(幅) 1.5	(厚) 0.9	(重) 3.4	黒色				碁石又は双六子
513		SK403	XI	石製品	小礫			(口) 1.9	(幅) 1.5	(厚) 0.9	(重) 3.8	黒色				碁石又は双六子
514		SK403	XI	石製品	小礫			(口) 1.7	(幅) 1.4	(厚) 0.8	(重) 2.8	黒色				碁石又は双六子
515		SK403	XI	石製品	小礫			(口) 1.6	(幅) 1.5	(厚) 0.8	(重) 3.3	黒色				碁石又は双六子
516		SK403	XI	石製品	小礫			(口) 1.8	(幅) 1.5	(厚) 0.8	(重) 3.4	黒色				碁石又は双六子
517		SK403	XI	石製品	小礫			(口) 1.6	(幅) 1.6	(厚) 0.8	(重) 3.0	黒色				碁石又は双六子
518	3E3		VII	石製品	小礫			(口) 2.3	(幅) 1.5	(厚) 1.3	(重) 6.9	黒色				碁石又は双六子
519	3C1		IXa	石製品	小礫			(口) 1.5	(幅) 1.1	(厚) 0.6	(重) 1.5	褐灰色				碁石又は双六子
520	3D18		IX	石製品	小礫			(口) 1.8	(幅) 1.4	(厚) 0.8	(重) 3.1	明褐灰色				碁石又は双六子
521	2A12		Xa	石製品	石錘	安山岩		-	(幅) 5.6	(厚) 5.2	(重) 401.1					
522	4F3		IXa	石製品	砥石			-	(幅) 5.1	(厚) 3.9	-					
523	4E24		Xa	石製品	砥石	砂岩		-	(幅) 5.2	(厚) 1.3	(重) 92.1					裏面破損
524		SK170	Xb	石製品	砥石	凝灰岩		(口) 20.1	(幅) 8.9	(厚) 3.9	(重) 868.0					
525	4F18		Xa	石製品	砥石	凝灰岩		-	(幅) 8.5	(厚) 7.3	(重) 1199.5					
526	4E3		-	石製品	砥石	砂岩		-	(幅) 5.4	(厚) 2.7	-					
527	3E1		-	石製品	砥石	安山岩		-	(幅) 12.7	(厚) 7.7	-					
528	5C11		-	石製品	台石	安山岩		(口) 14.3	(幅) 13.1	(厚) 7.5	(重) 1949.5					

図　　版

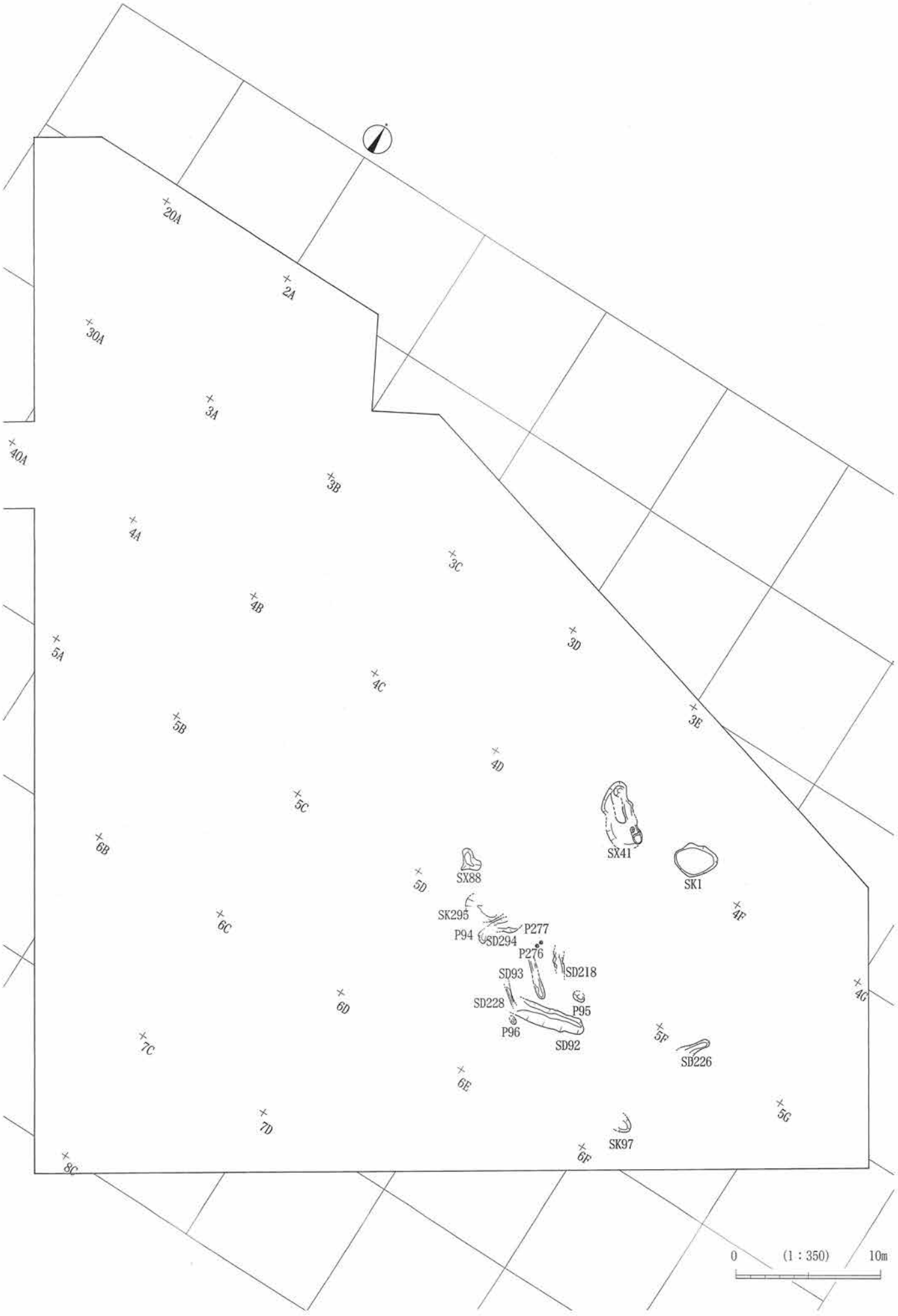
遺物スクリーントーン凡例

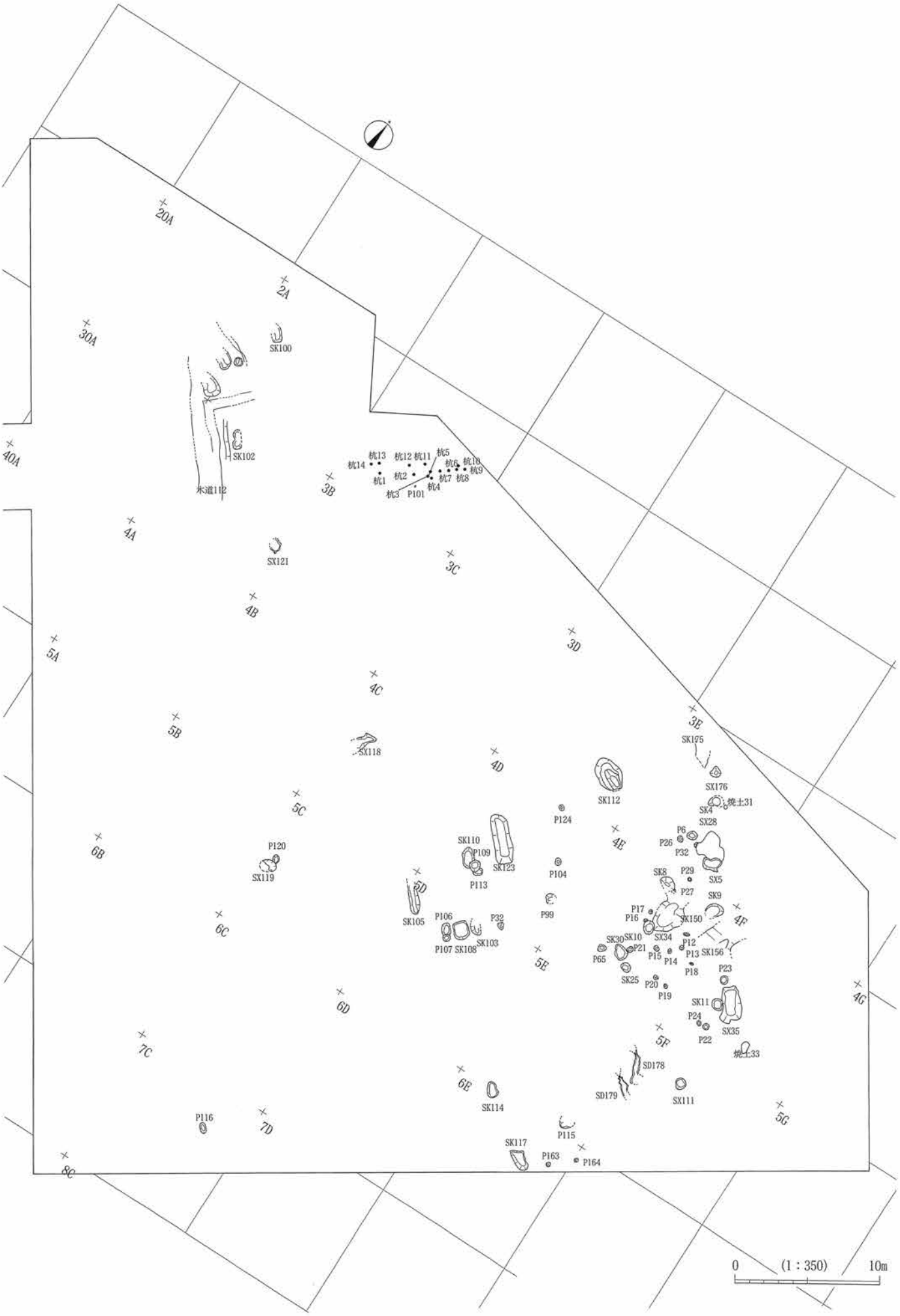



原図　明治44年測量　国土地理院
1:50,000　内野　新潟　弥彦　新津
的場遺跡
釈迦堂遺跡
中浦原
西浦原

図版２

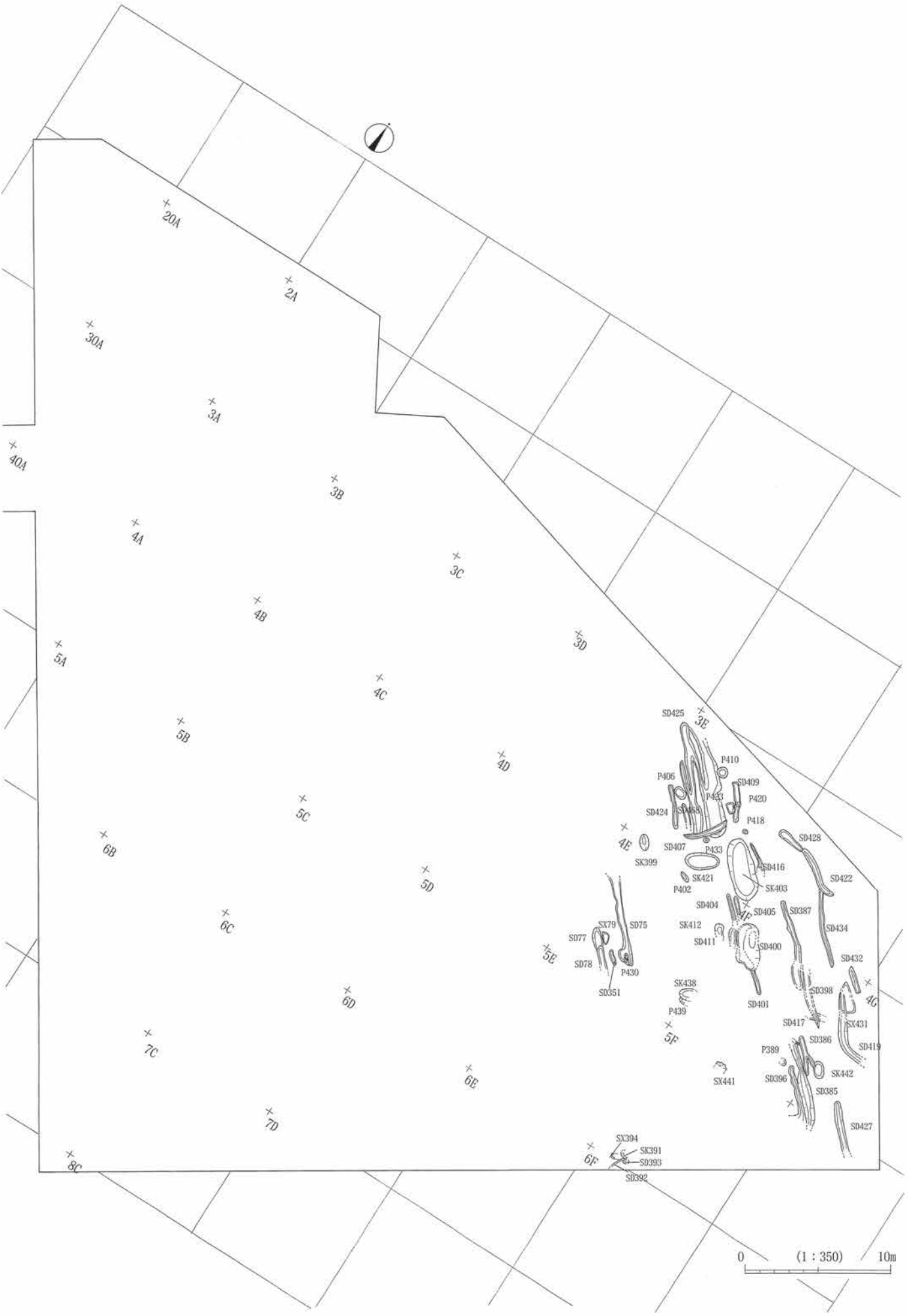
Ⅷ層遺構全体図１




20A
2A
30A
SK100
SK102
木道112
40A
3B
杭13
杭12
杭11
杭5
杭14
杭6
杭10
杭9
杭1
杭2
杭7
杭8
杭3
P101
杭4
4A
SX121
3C
4B
3D
5A
4C
3E
5B
SX118
4D
SK175
SK112
SX176
焼土31
SK4
SX28
5C
P124
P6
P26
P32
6B
P120
SX119
SK110
P109
SK123
4E
P104
SK8
P29
SX5
P113
5D
P27
SK9
P99
P17
P16
SK150
4F
6C
SK105
P106
P32
SK103
P107
SK108
SK30
SK10
SX34
P12
P21
P15
P14
P13
SK156
P65
5E
P18
P23
SK25
P20
P19
4G
6D
SK11
P24
SX35
P22
5F
7C
焼土33
SD178
6E
SD179
SX111
SK114
5G
P116
7D
P115
SK117
P163
P164
8C
0
(1：350)
10m

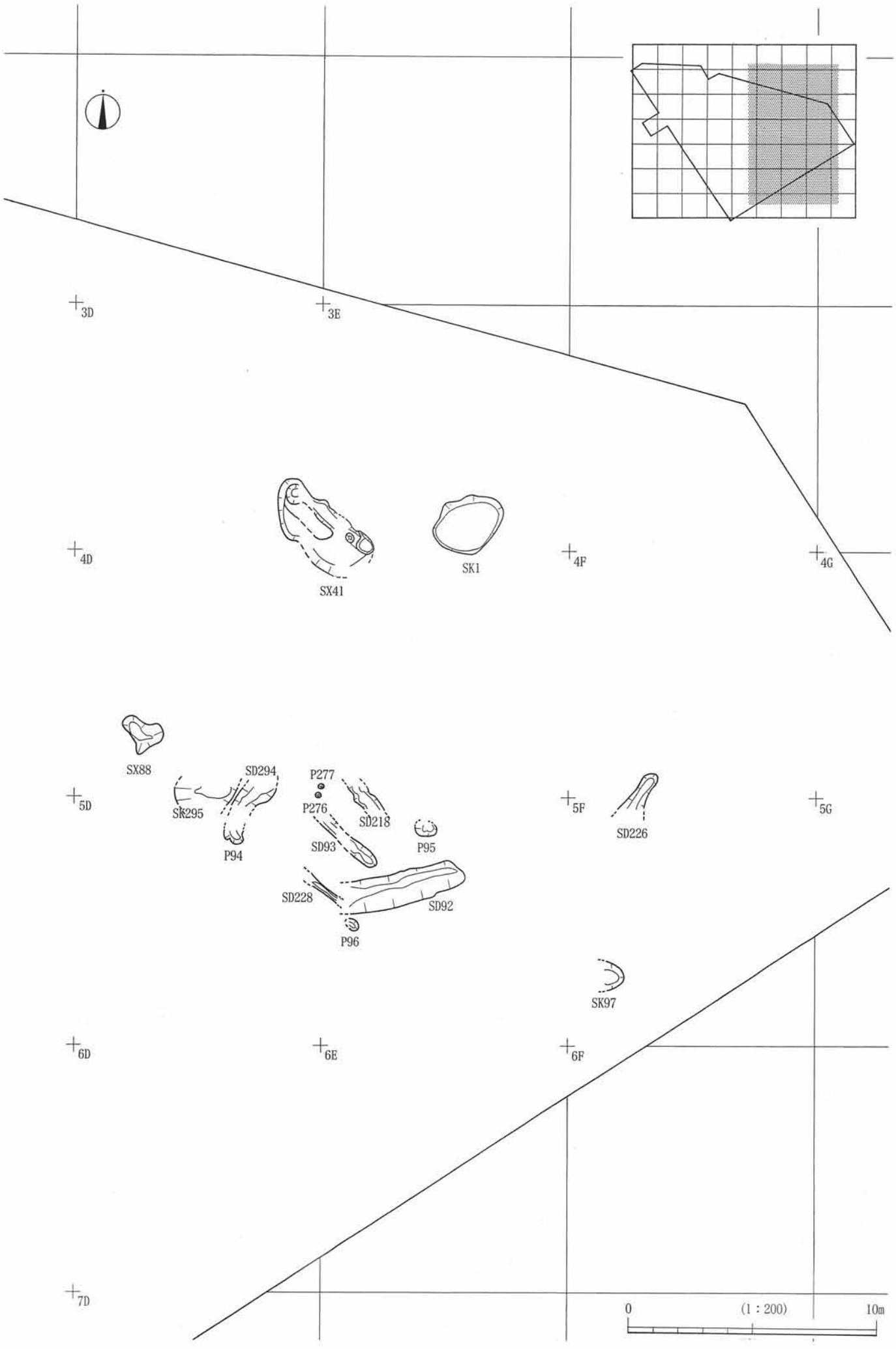
図版４

X層遺構全体図１

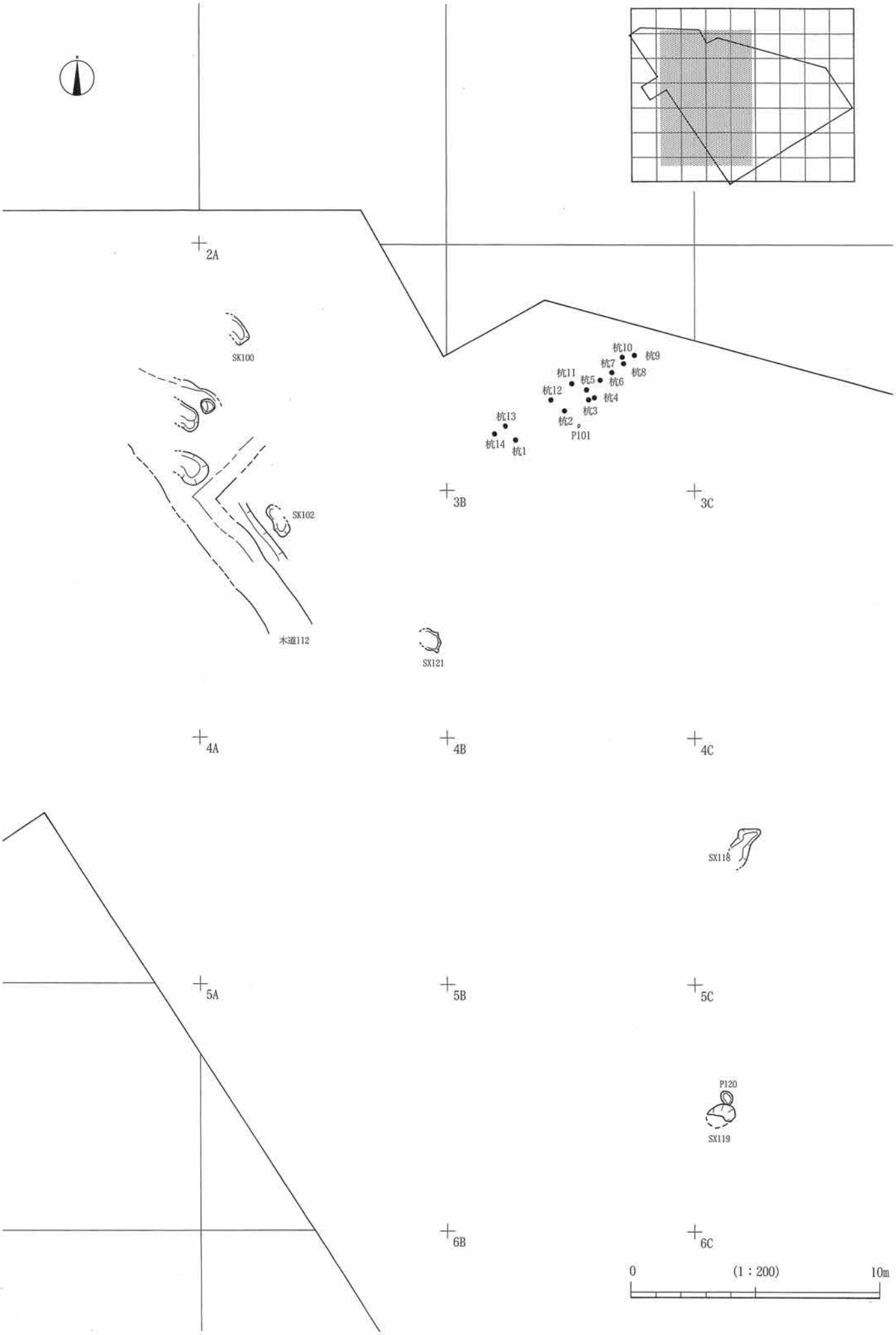

20A
2A
30A
3A
40A
3B
4A
3C
4B
3D
5A
4C
5B
4D
5C
6B
5D
6C
6D
7C
6E
7D
8C
6F
5E
4E
3E
4F
5F
SD425
P410
P406
SD409
P420
P418
SD424
SD428
SD407
P433
SK399
SD416
SD422
SK421
SK403
P402
SD404
SD405
SD387
SD434
SX79
SD75
SK412
SD77
SD411
SD400
SD432
SD78
P430
SD351
SK438
SD398
4G
SD401
P439
SD417
SX431
SD386
SD419
P389
SD396
SK442
SX441
SD385
SD427
SX394
SK391
SD393
SD392
0
(1：350)
10m

図版6

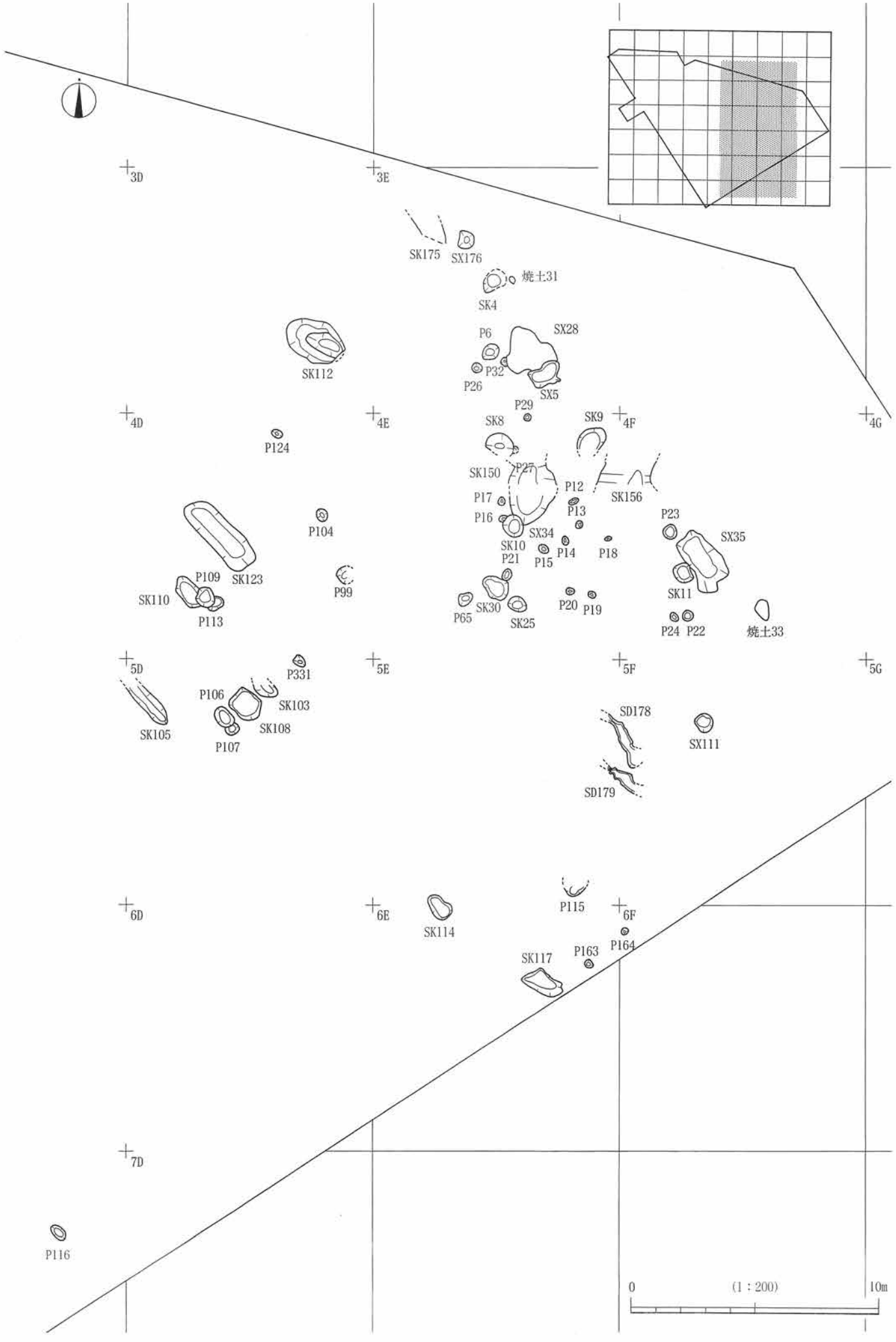
Ⅷ層遺構全体図2



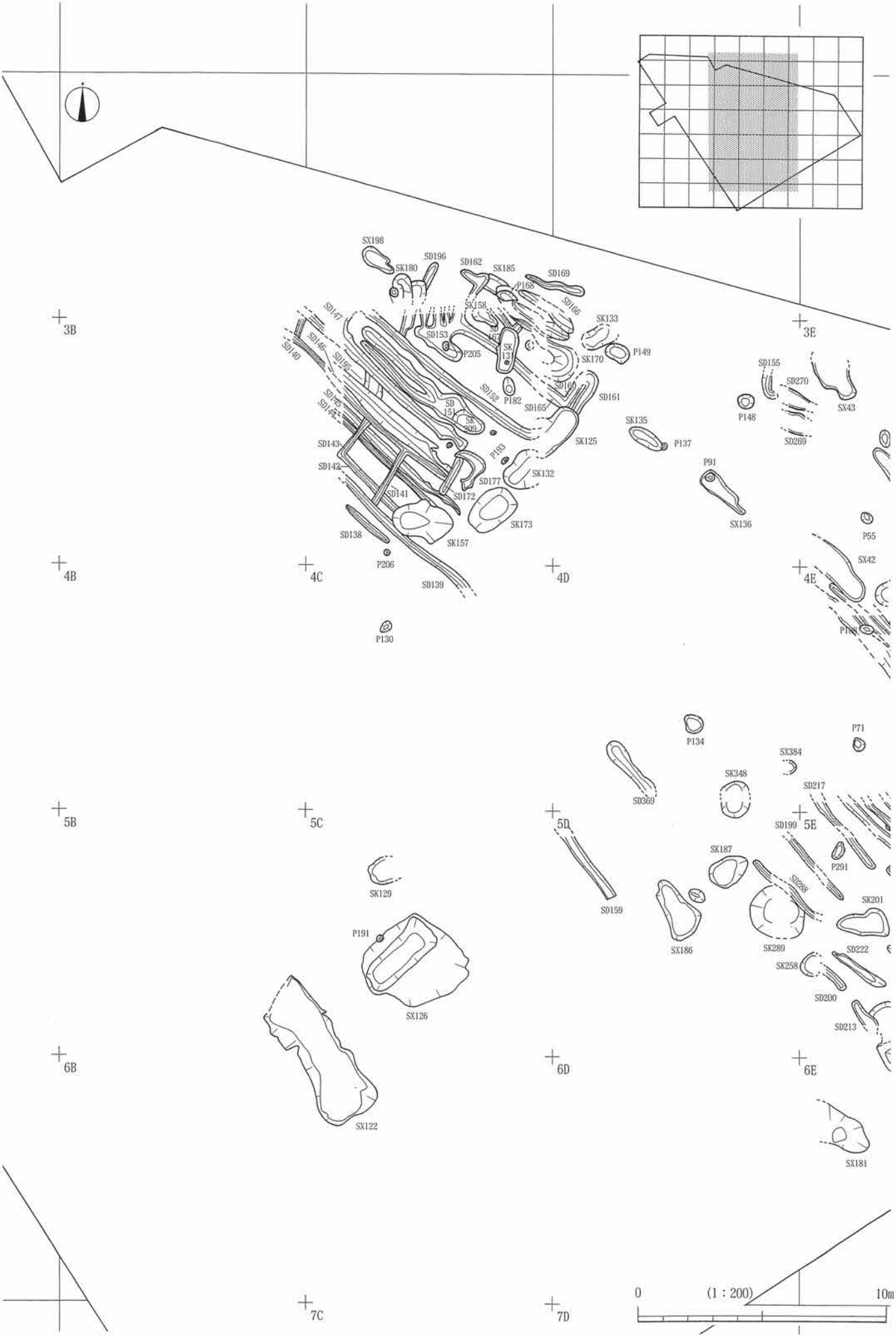
Ⅸ層遺構全体図2 (1)


2A
SK100
杭10
杭9
杭7
杭8
杭11
杭5
杭6
杭12
杭4
杭3
杭13
杭2
P101
杭14
杭1
3B
3C
SK102
木道112
SX121
4A
4B
4C
SX118
5A
5B
5C
P120
SX119
6B
6C
0
(1：200)
10m

Ⅸ層遺構全体図2 (2)

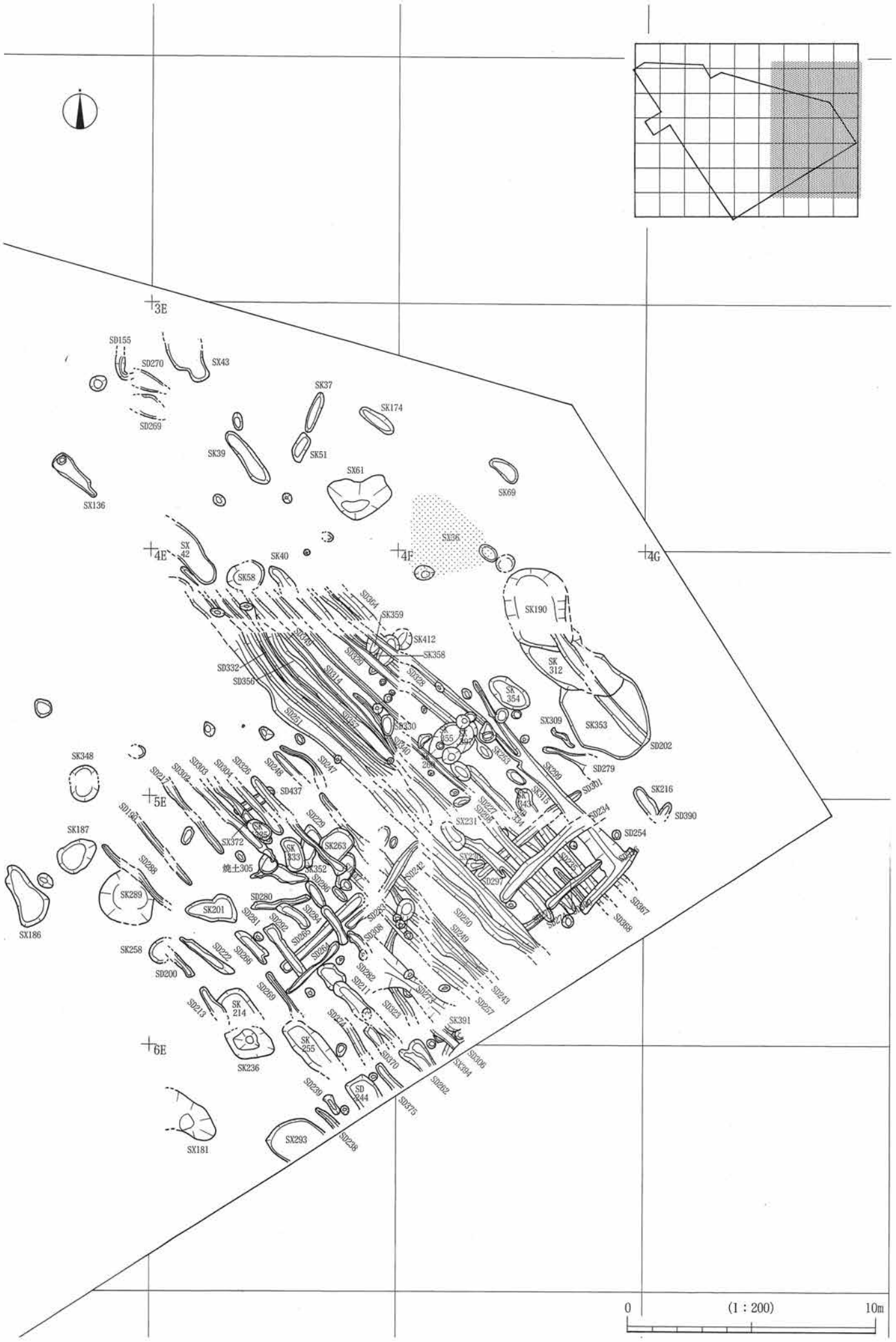

3D
3E
4D
4E
4F
4G
5D
5E
5F
5G
6D
6E
6F
7D
SK175
SX176
焼土31
SK4
SK112
P6
SX28
P32
P26
SX5
P29
SK8
SK9
P124
SK150
P27
P12
SK156
P17
P13
P16
P104
SX34
SK10
P14
P18
P23
SX35
P21
P15
P109
SK123
P99
SK110
P113
P65
SK30
SK25
P20
P19
SK11
P24
P22
焼土33
P331
P106
SK103
SK105
SK108
P107
SD178
SX111
SD179
P115
SK114
P164
SK117
P163
P116
0
(1：200)
10m

X層遺構全体図2 (1)

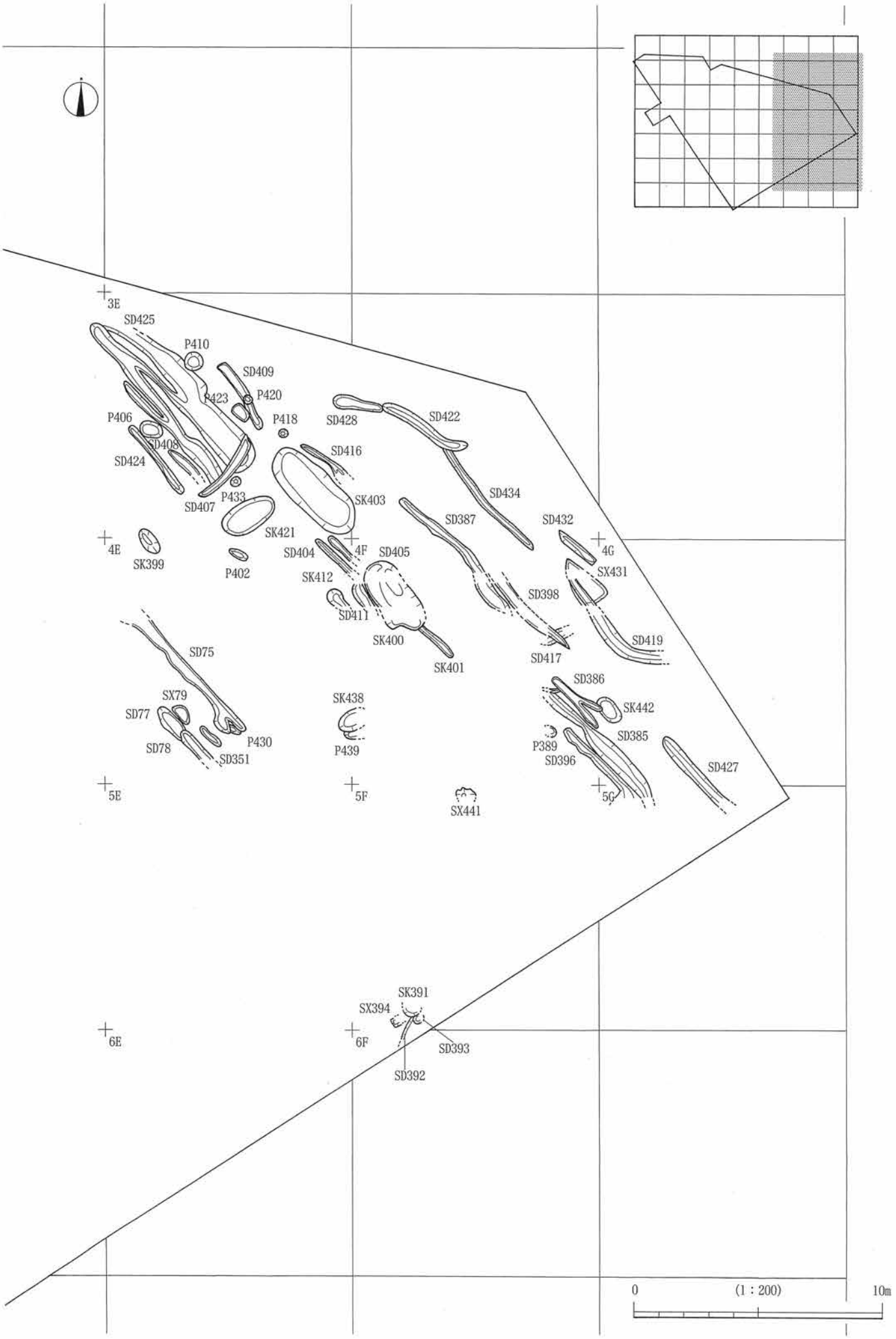

SX198
SD196
SK180
SD162
SK185
SD169
P168
SD166
SK158
SD147
SD153
SK133
P149
SD140
SD146
SD195
P205
SK170
SD160
SD161
SD152
P182
SD165
SD155
SD270
SX43
P148
SD269
SK135
P137
SD143
SD142
P193
SK125
SK132
P91
SD177
SD141
SD172
SX136
SD138
SK157
SK173
P55
SX42
P206
SD139
P130
P71
P134
SX384
SK348
SD217
SD369
SD199
SK187
P291
SD159
SD268
SK201
SX186
SK289
SD222
SK258
SD200
SK129
P191
SD213
SX126
SX122
SX181
3B
3E
4B
4C
4D
4E
5B
5C
5D
5E
6B
6D
6E
7C
7D
0
(1 : 200)
10m

図版10

X層遺構全体図２(2)

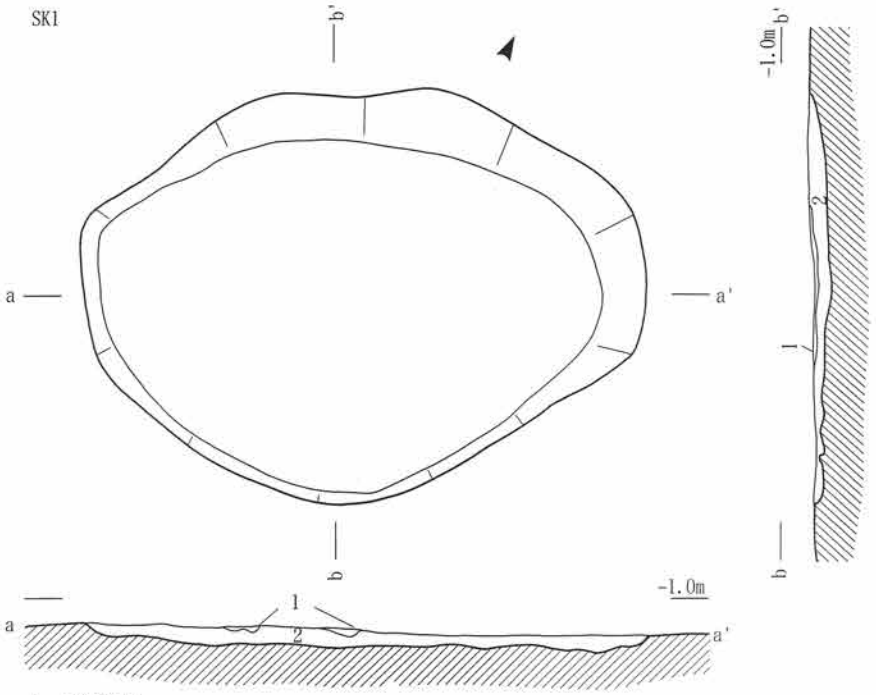


0 (1：200) 10m


3E
SD425
P410
SD409
P423
P420
P406
P418
SD428
SD422
SD408
SD424
SD416
SD434
P433
SD407
SK403
SD387
SD432
SK421
4E
SD404
4F
SD405
4G
SK399
P402
SK412
SX431
SD398
SD411
SD419
SK400
SD417
SD75
SK401
SD386
SX79
SK438
SK442
SD77
SD385
P389
P430
P439
SD78
SD396
SD427
SD351
5E
5F
SX441
5G
SK391
SX394
6E
6F
SD393
SD392
0
(1：200)
10m

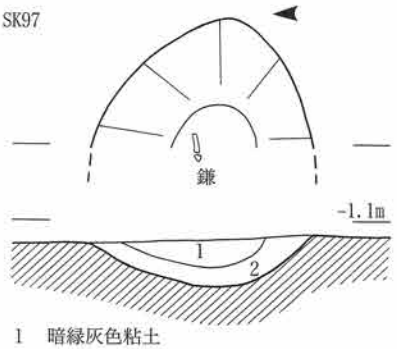
Ⅷ層遺構実測図(1)

SK1



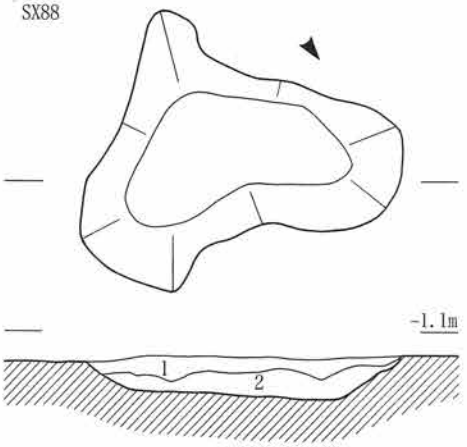
1　灰色粘土
2　灰色粘土
　炭化物(20㎜大)を多量に混入
　緑灰色粘土を含む

SK97



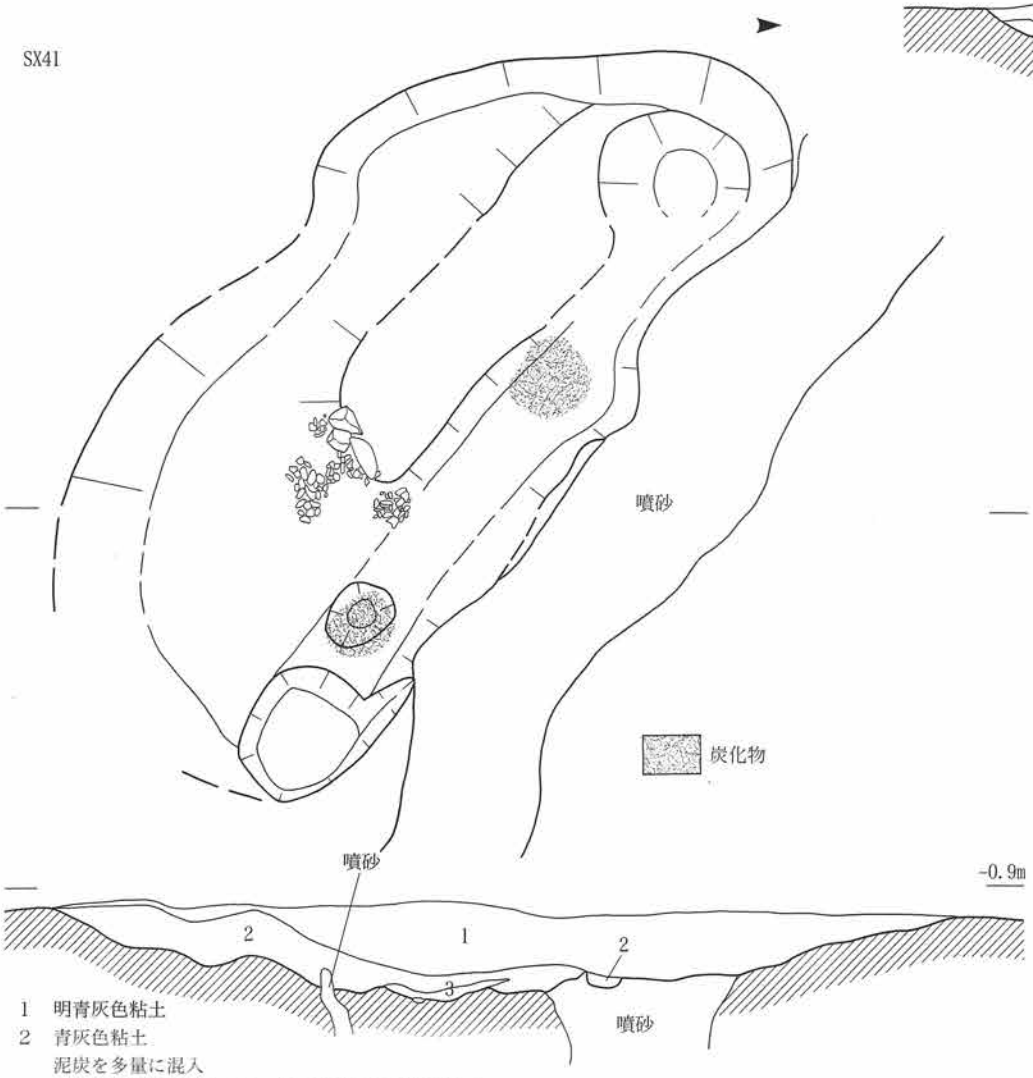
1　暗緑灰色粘土
　炭化物を少量含む
　砂を斑に多量に混入
2　青灰色粘土
　炭化物を帯状に多量に混入
　噴砂の痕跡あり

SX88



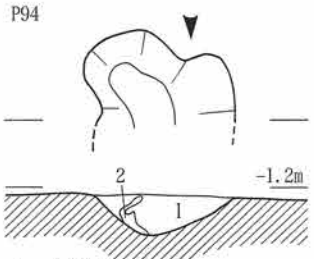
1　青灰色粘土
　炭化物を少量含む
2　暗緑灰色粘土
　炭化物を多量に混入

SX41



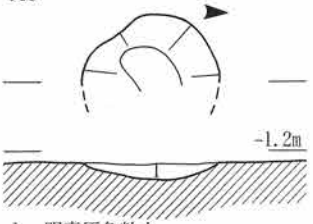
1　明青灰色粘土
2　青灰色粘土
　泥炭を多量に混入
　最深部に炭化物(20～30㎜大)が多量に厚く堆積する
3　炭化物(20～30㎜大)が厚く堆積する層
　川原石(30～50㎜大)が大量に混入

P94



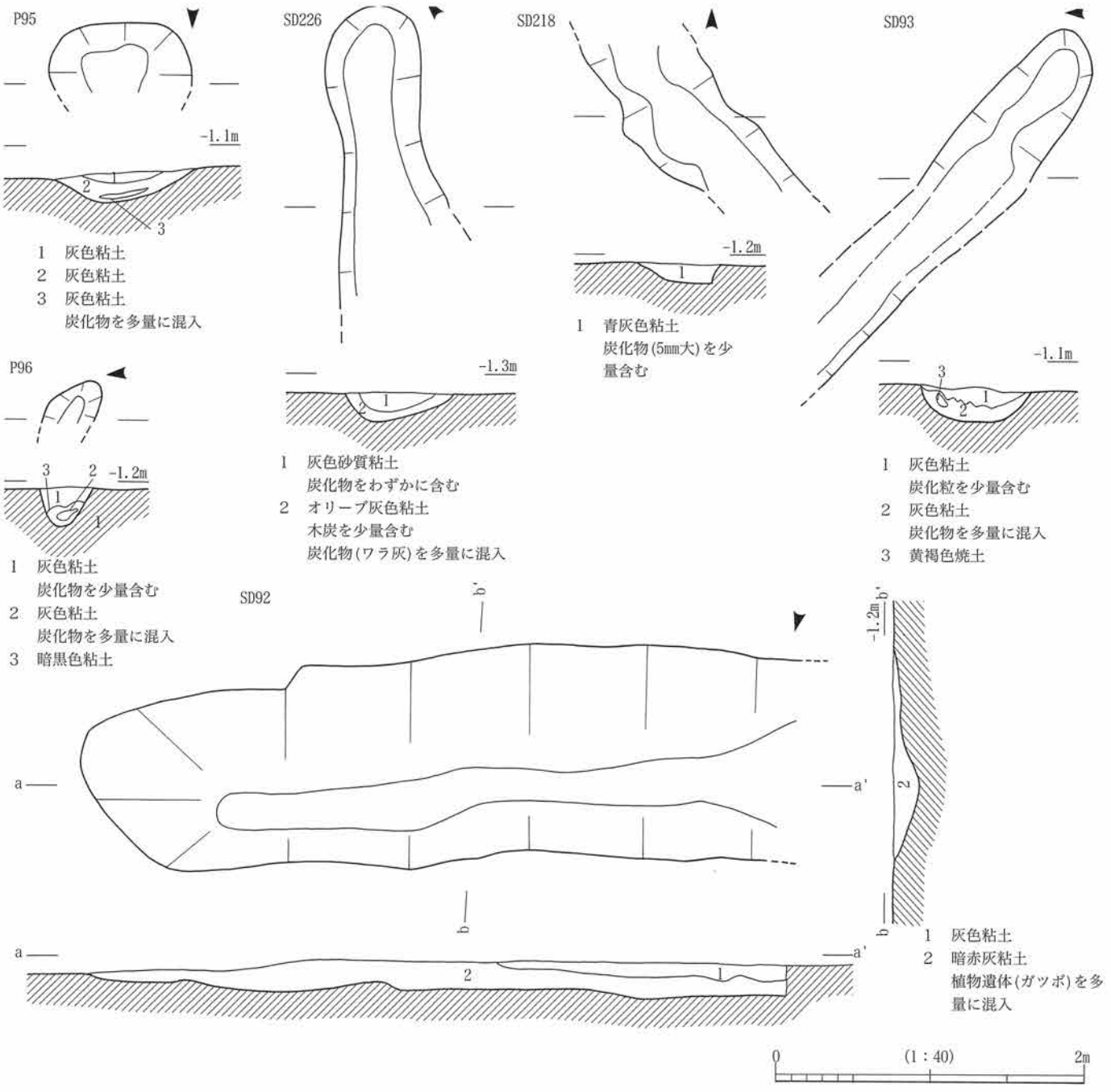
1　灰色粘土
　下部に炭化物を多量に混入
2　噴砂

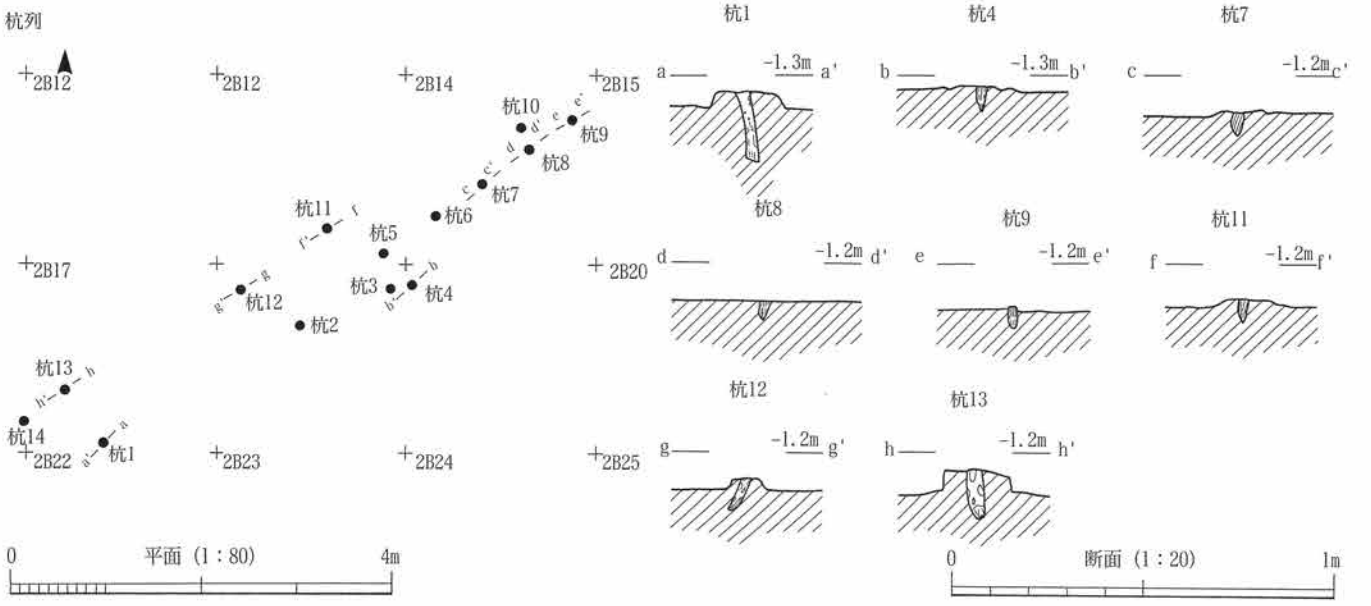
P99



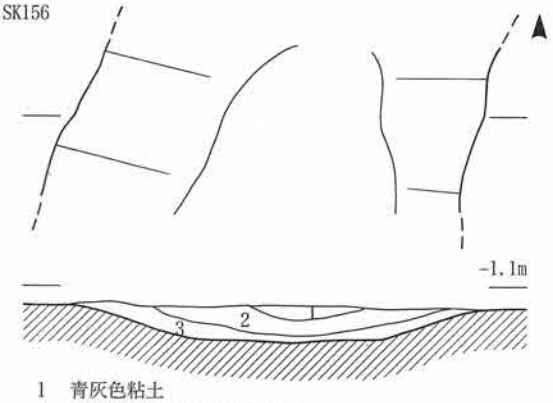
1　明青灰色粘土
　炭化物を中位部に多量に含む

0　(1：40)　2m


P95
-1.1m
1 灰色粘土
2 灰色粘土
3 灰色粘土
炭化物を多量に混入
SD226
-1.3m
1 灰色砂質粘土
炭化物をわずかに含む
2 オリーブ灰色粘土
木炭を少量含む
炭化物(ワラ灰)を多量に混入
SD218
-1.2m
1 青灰色粘土
炭化物(5mm大)を少量含む
SD93
-1.1m
1 灰色粘土
炭化粒を少量含む
2 灰色粘土
炭化物を多量に混入
3 黄褐色焼土
P96
-1.2m
1 灰色粘土
炭化物を少量含む
2 灰色粘土
炭化物を多量に混入
3 暗黒色粘土
SD92
-1.2m
1 灰色粘土
2 暗赤灰粘土
植物遺体(ガツボ)を多量に混入
0 (1:40) 2m

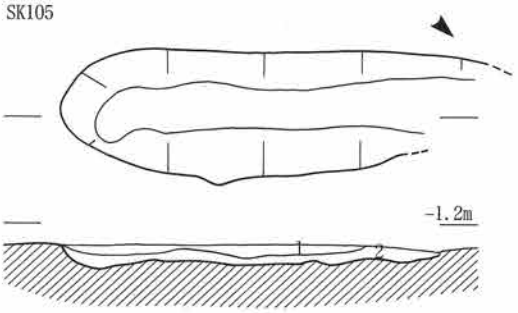

杭列
杭1
杭4
杭7
杭8
杭9
杭11
杭12
杭13
杭2
杭3
杭5
杭6
杭10
杭14
0 平面 (1:80) 4m
0 断面 (1:20) 1m

SK156



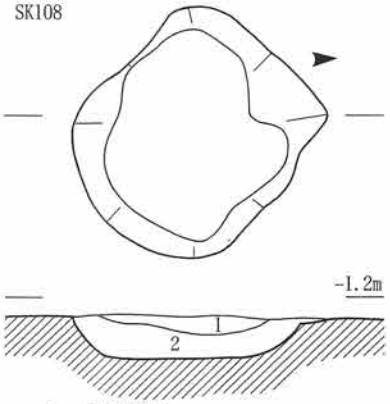
1　青灰色粘土
　炭化粒(3㎜大)を多量に混入
2　青灰色粘土
3　青灰色粘土

SK105



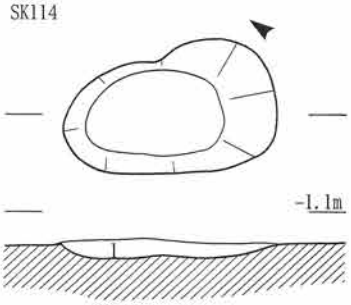
1　青灰色粘土
　泥炭を少量含む
2　暗青灰色粘土
　炭化物を多量に含む
　焼土粒を少量含む

SK108



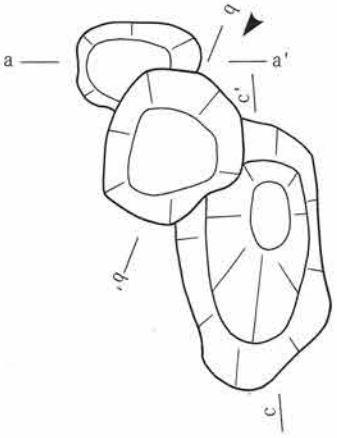
1　青灰色粘土
　噴砂の痕跡あり
2　青灰色粘土
　炭化物(5～10㎜)を含む
　泥炭を多量に混入

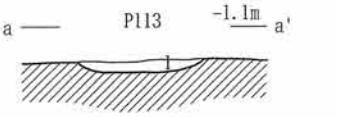
SK114



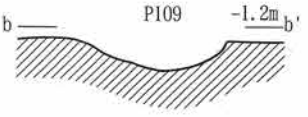
1　青灰色粘土
　泥炭、炭化物を多量に混入

SK110・P109・113

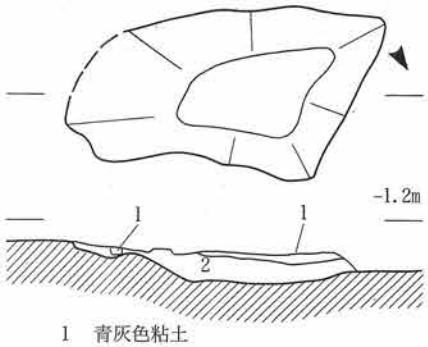




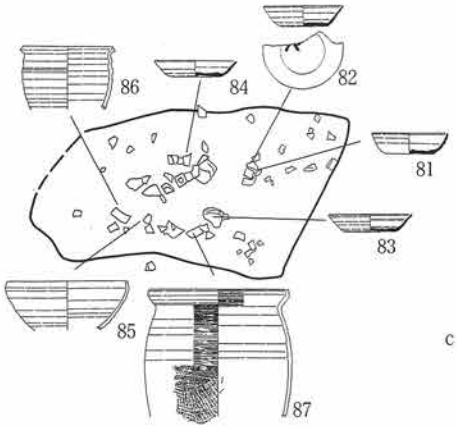
1　青灰色粘土
　泥炭混入



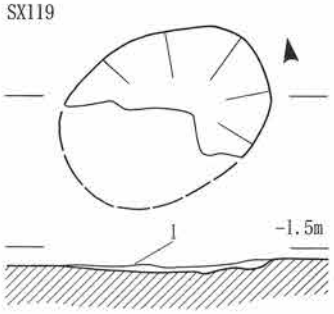
SK117



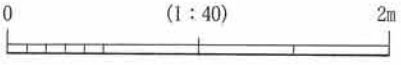
1　青灰色粘土
　炭化物を少量含む
2　暗青灰色粘土
　炭化物(5～20㎜大)を含む
　焼土を多量に混入
　噴砂の痕跡あり



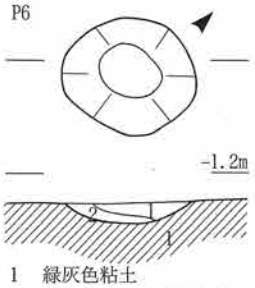
SX119



1　暗青灰色粘土
　木炭（10～20㎜大）を含む
　灰褐色の灰を多量に混入

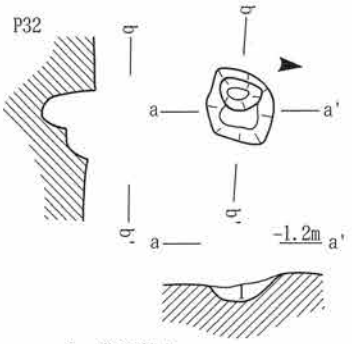


P6



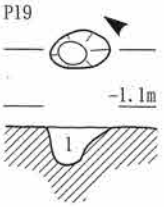
1　緑灰色粘土
　炭化物(2～5㎜大)を含む
　暗赤褐色粘土部分的に混入
2　灰色粘土
　黒色粘土を多量に混入
　暗赤褐色粘土を部分的に含む

P32



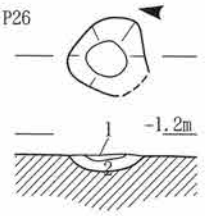
1　橙色粘土
　木炭(20㎜大)、
　灰色の灰が大量に混入

P19



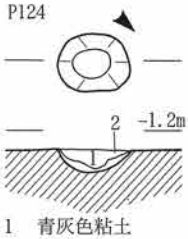
1　暗青灰色粘土
　青灰色粘土を
　斑に含む

P26



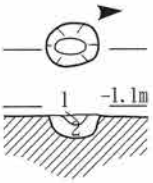
1　青灰色粘土
2　青灰色粘土
　木炭(20～30㎜)・
　橙色粒子を多量に混入

P124



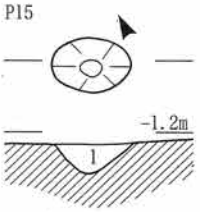
1　青灰色粘土
　炭化物、泥炭を多量に混入
2　青灰色粘土
　炭化物、泥炭をわずかに含む

P14



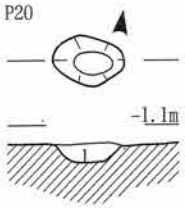
1　青灰色粘土
　暗青灰色粘土を少量含む
2　暗青灰色粘土
　炭化物を少量含む

P15



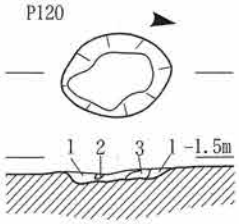
1　青灰色粘土
　炭化物を少量含む

P20



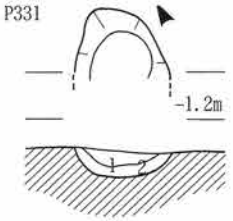
1　青灰色粘土
　炭化粒(2㎜大)を
　少量含む

P120



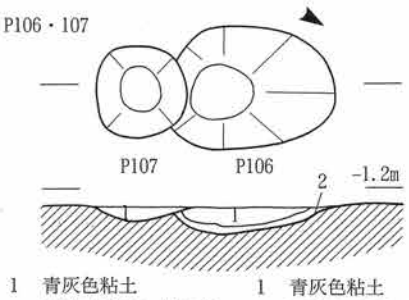
1　暗青灰色粘土
　炭化物(5～10㎜大)を含む
　焼土を多量に混入
2　灰色粘土
3　青灰色粘土
　1層をブロック状に含む

P331



1　明青灰色粘土
　炭化粒(3㎜大)を
　やや多量に混入
　植物遺体を多量に混入
2　明褐色粘土
　炭化物(10㎜大)を
　多量に混入
　焼土を含む

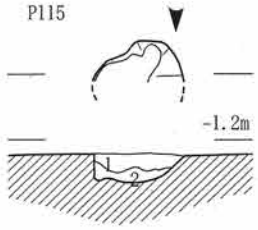
P106・107



1　青灰色粘土
　泥炭を底面に少量含む

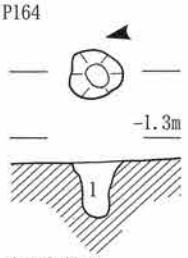
1　青灰色粘土
　泥炭を少量含む
2　青灰色粘土
　泥炭を多量に混入

P115



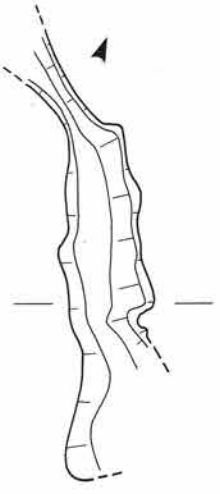
1　青灰色粘土
　泥炭を多量に混入
2　青灰色粘土
　泥炭を多量(1層よりは少ない)混入

P164



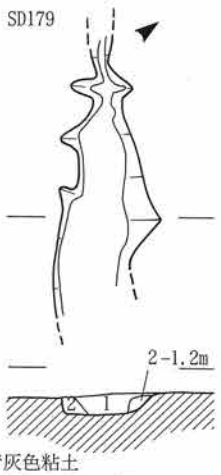
1　青灰色粘土
　木炭(10㎜大)を少量含む
　泥炭を多量に混入

SD178



1　青灰色粘土
　泥炭をわずかに混入
2　青灰色粘土
　木炭(10㎜大)を少量含む
　泥炭を多量に混入

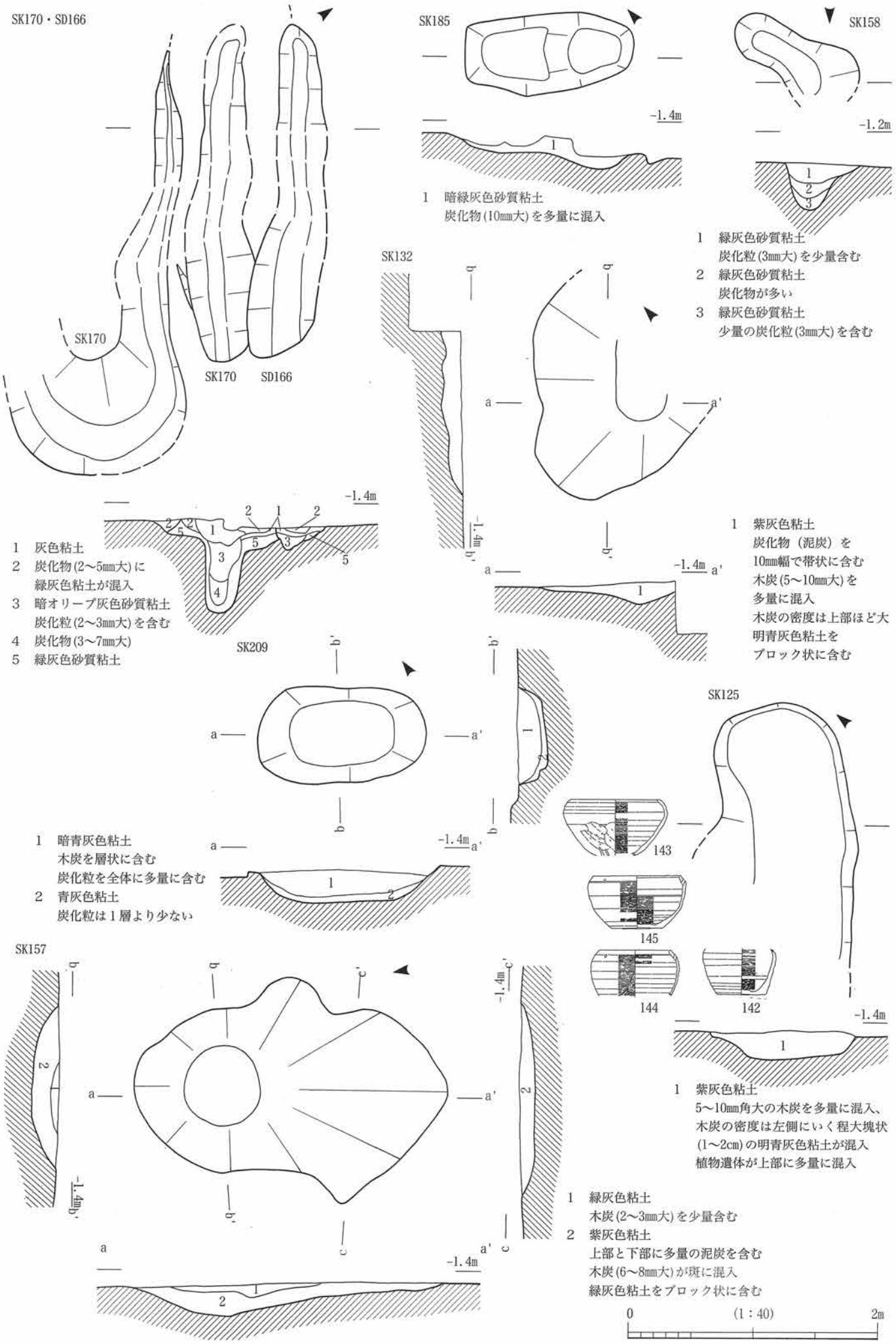
SD179



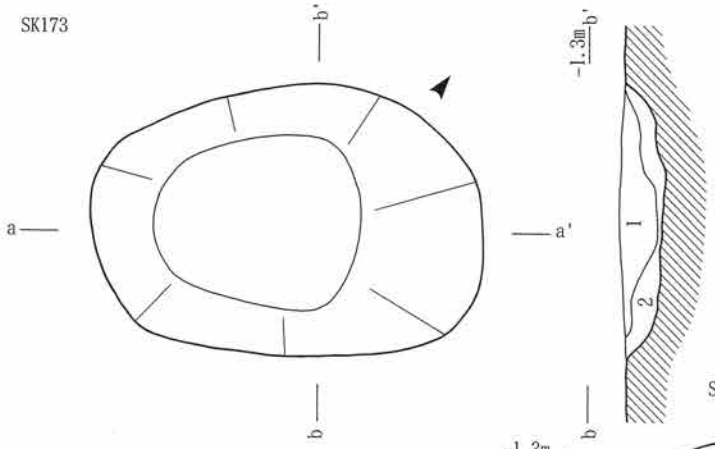
1　青灰色粘土
　泥炭をわずかに混入
2　青灰色粘土
　砂質土に粘土質が少量含む

0　(1：40)　2m

X層遺構実測図(1)

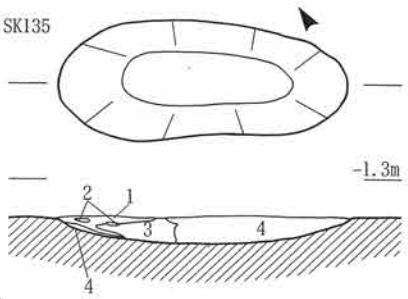

SK170・SD166
SK170
SK170
SD166
-1.4m
1 灰色粘土
2 炭化物(2～5㎜大)に
緑灰色粘土が混入
3 暗オリーブ灰色砂質粘土
炭化粒(2～3㎜大)を含む
4 炭化物(3～7㎜大)
5 緑灰色砂質粘土
SK185
-1.4m
1 暗緑灰色砂質粘土
炭化物(10㎜大)を多量に混入
SK158
-1.2m
1 緑灰色砂質粘土
炭化粒(3㎜大)を少量含む
2 緑灰色砂質粘土
炭化物が多い
3 緑灰色砂質粘土
少量の炭化粒(3㎜大)を含む
SK132
-1.4m
-1.4m
1 紫灰色粘土
炭化物(泥炭)を
10㎜幅で帯状に含む
木炭(5～10㎜大)を
多量に混入
木炭の密度は上部ほど大
明青灰色粘土を
ブロック状に含む
SK209
-1.4m
1 暗青灰色粘土
木炭を層状に含む
炭化粒を全体に多量に含む
2 青灰色粘土
炭化粒は1層より少ない
SK125
143
145
144
142
-1.4m
1 紫灰色粘土
5～10㎜角大の木炭を多量に混入、
木炭の密度は左側にいく程大塊状
(1～2㎝)の明青灰色粘土が混入
植物遺体が上部に多量に混入
SK157
-1.4m
-1.4m
1 緑灰色粘土
木炭(2～3㎜大)を少量含む
2 紫灰色粘土
上部と下部に多量の泥炭を含む
木炭(6～8㎜大)が斑に混入
緑灰色粘土をブロック状に含む
0 (1:40) 2m

SK173



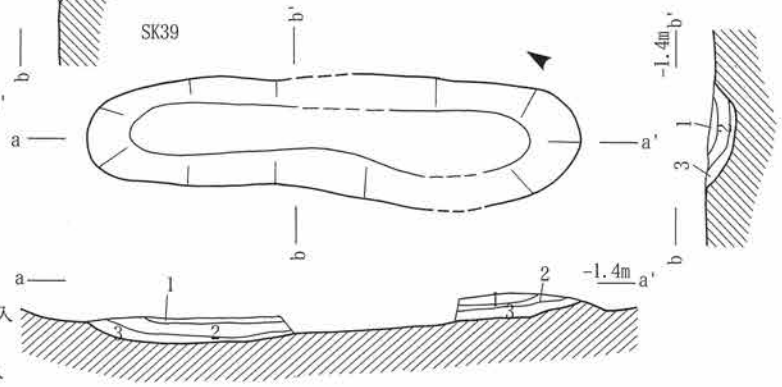
1　暗灰黄色シルト質粘土
　木炭(7～10㎜大)を含む
2　青灰色シルト質粘土
3　噴砂

SK135



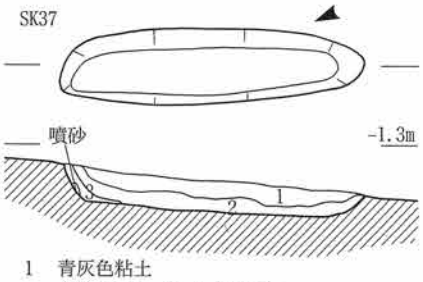
1　黒褐色炭化粒
　(1～3㎜大)層
2　噴砂
3　灰黄褐色粘土
4　暗緑灰色粘土
　植物遺体やや多い

SK39



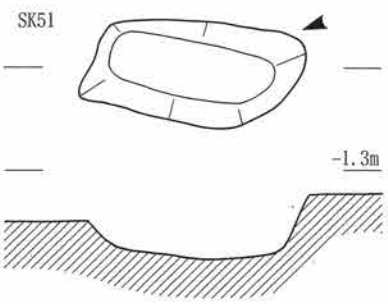
1　暗青灰色粘土
　炭化物(10㎜大)を多量に混入
2　青灰色粘土
　炭化粒(3㎜大)を多量に混入
3　青灰色粘土
　植物遺体を多量に混入

SK37

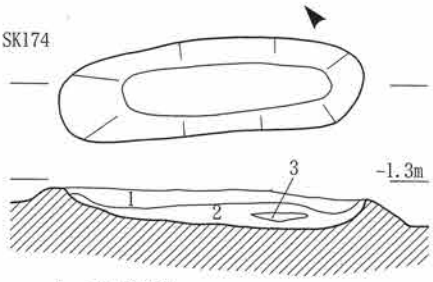


1　青灰色粘土
　炭化物(10㎜大)を少量含む
　植物遺体を多量に混入
2　青灰色シルト
　植物遺体を少量含む
3　青灰色シルト
　噴砂の痕跡あり

SK51

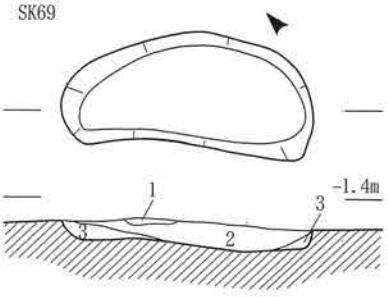


SK174



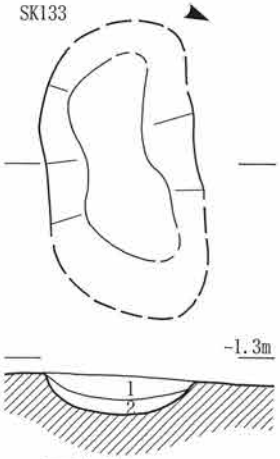
1　青灰色粘土
　炭化物(10㎜大)を多量に混入
2　青灰色粘土
　炭化粒(3㎜大)を少量含む
3　青灰色粘土
　炭化物を多量に混入

SK69



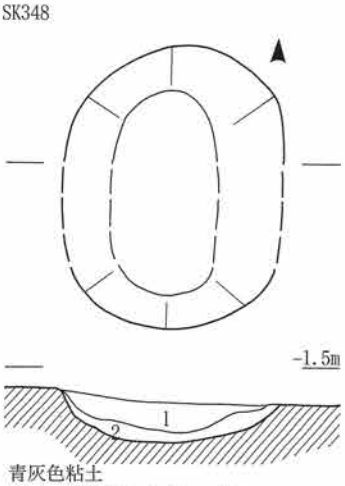
1　青灰色粘土
2　暗青灰色粘土
3　青灰色シルト
　噴砂の痕跡あり

SK133



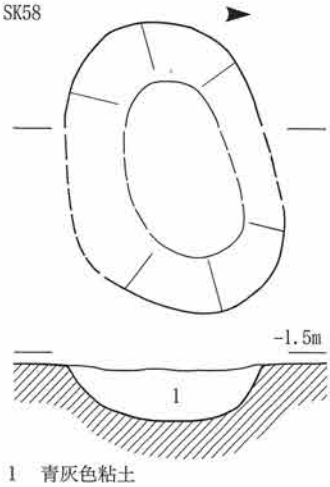
1　緑灰色粘土
　炭化粒(3㎜大)をわずかに含む
2　黒褐色炭化物層
　黄色粘土粒子(5～10㎜大)を
　わずかに含む

SK348



1　青灰色粘土
　泥炭、植物痕跡を多量に混入
2　青灰色粘土
　木炭(20㎜大)を少量含む
　炭化物黒色ワラ灰、明褐色の灰を多量に混入

SK58

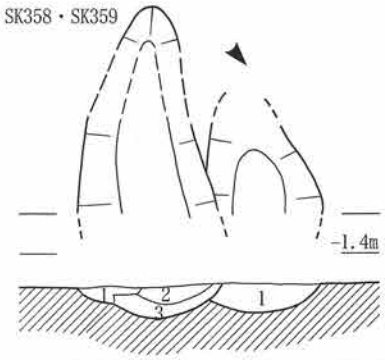


1　青灰色粘土

0　(1：40)　2m

X層遺構実測図(3)

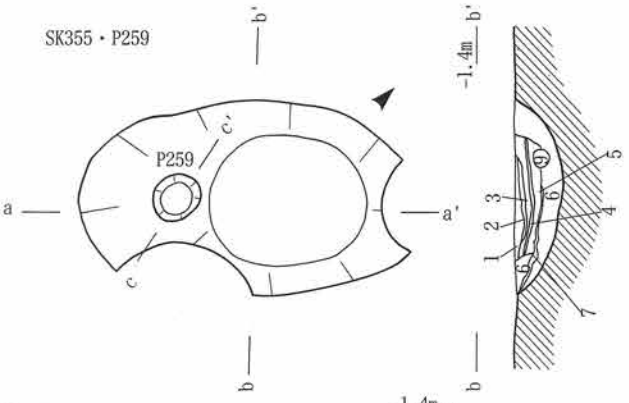
SK358・SK359



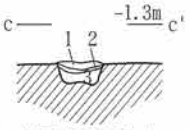
1 黒褐色粘土
2 緑灰色シルト
炭化粒をわずかに含む
3 暗オリーブ灰色砂質粘土
炭化粒を少量含む

1 緑灰色砂質粘土
炭化粒を帯状に
少量含む

SK355・P259

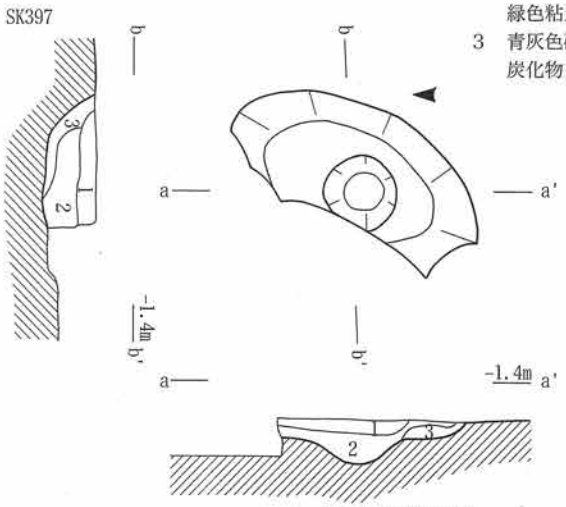


1 淡い緑灰色シルト
2 淡い灰褐色砂質粘土
3 淡い緑色シルト
4 淡い灰褐色砂質粘土
5 淡い緑灰色シルト
6 暗緑灰色砂質粘土
炭化物を少量含む
7 黒色炭化物
8 緑灰色砂質粘土



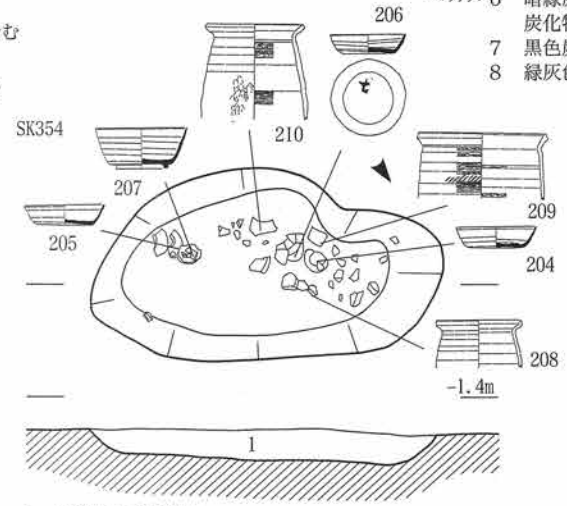
1 緑灰色砂質粘土
木炭を少量含む
2 黒色木炭層
緑色粘土を少量含む
3 青灰色砂質粘土
炭化物を少量含む

SK397



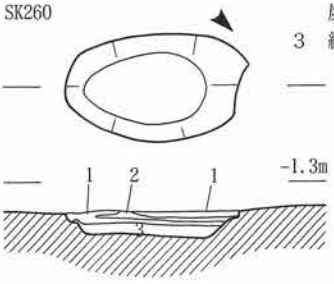
1 暗緑灰色砂質粘土
炭化物(5～10mm大)を少量含む
2 暗緑灰色砂質粘土
炭化粒をわずかに含む
3 緑灰色シルト

SK354



1 暗緑灰色砂質粘土
炭化物(2～5mm大)を多量に混入
種子を多量に混入

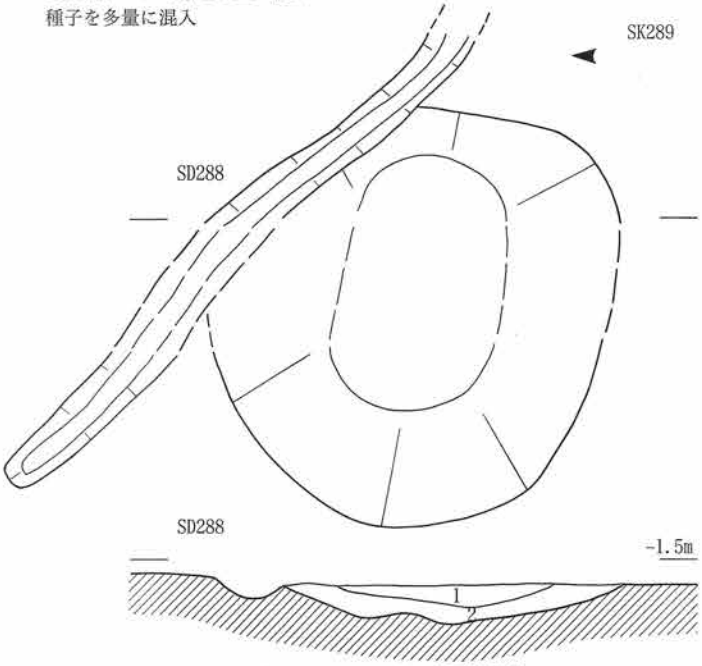
SK260



1 灰黄褐色粘土
2 黒色炭化物層
3 暗緑色砂質粘土
緑灰色粘土が帯状に含む

SK289

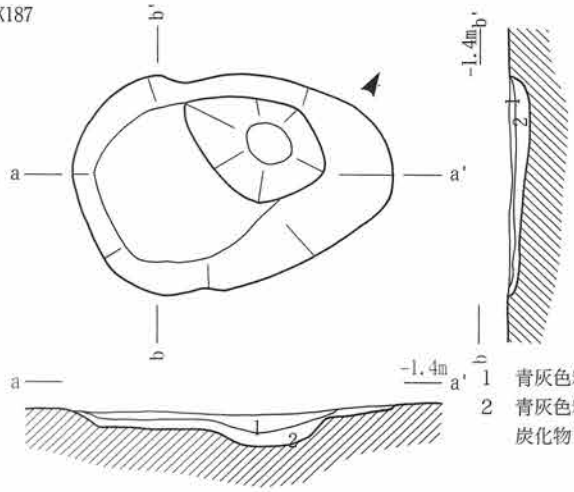
SD288



SD288

1 青灰色粘土
木炭(5mm大)をわずかに含む
泥炭を多量に混入
2 青灰色粘土
木炭(20mm大)を少量含む
泥炭・ワラ灰を多量に混入

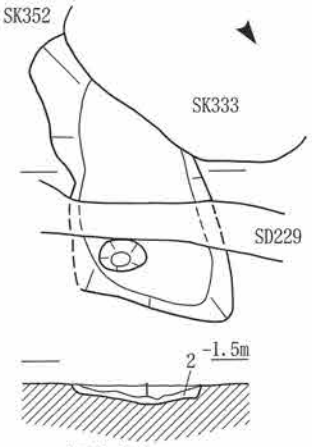
SK187



1 青灰色粘土
2 青灰色粘土
炭化物をわずかに混入

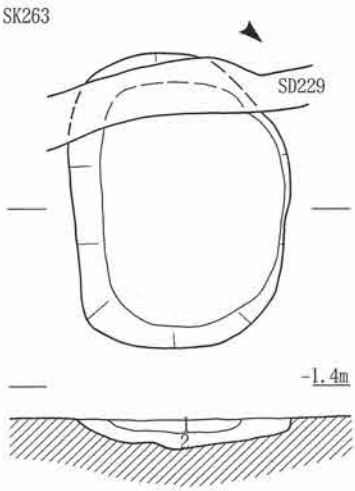
0 (1:40) 2m

SK352



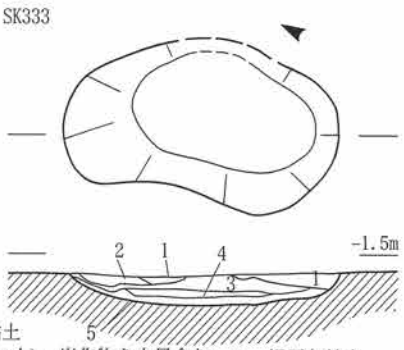
1　青灰色粘土
　木炭(5mm大)をわずかに含む
　泥炭を多量に混入
2　青灰色粘土
　木炭(30～50mm大)を中量底面にのみ含む
　ワラ灰を多量に混入

SK263



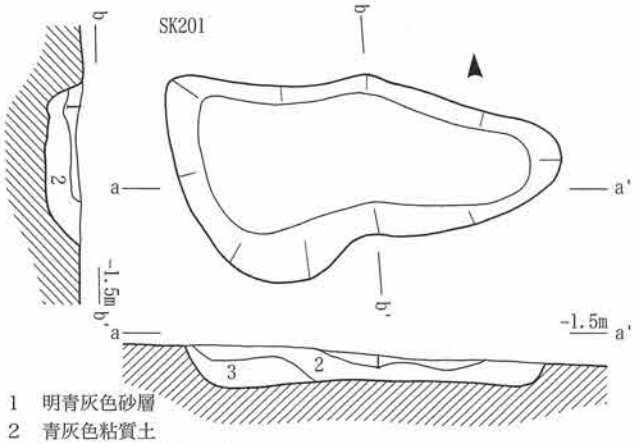
1　青灰色粘土
　泥炭を少量含む
2　青灰色粘土
　やや砂質

SK333



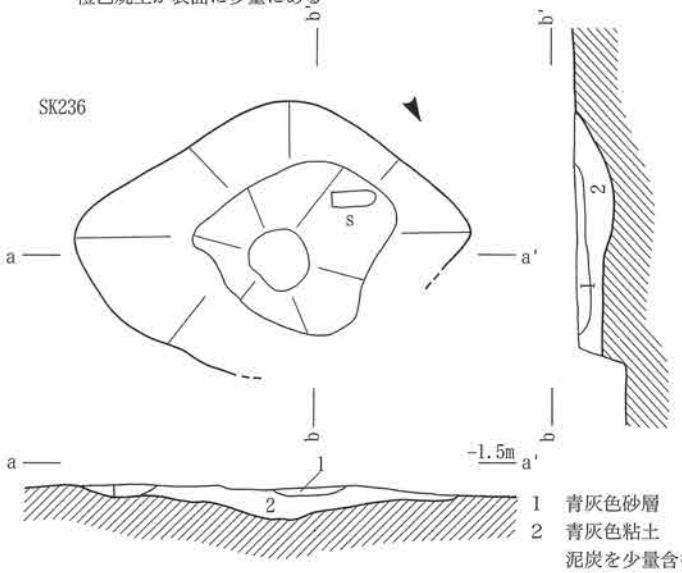
1　褐灰色粘土　　5
　木炭(30mm大)・炭化物を中量含む
　橙色焼土が表面に多量にある
　粉骨を多量に混入
2　褐灰色焼土
　木炭(5mm大)を少量含む
　橙色焼土が表面に多量にある
5　褐灰色粘土
　木炭(5mm大)・炭化物を中量含む
4　青灰色粘土
5　褐灰色粘土
　木炭(5mm大)・炭化物を中量含む

SK201



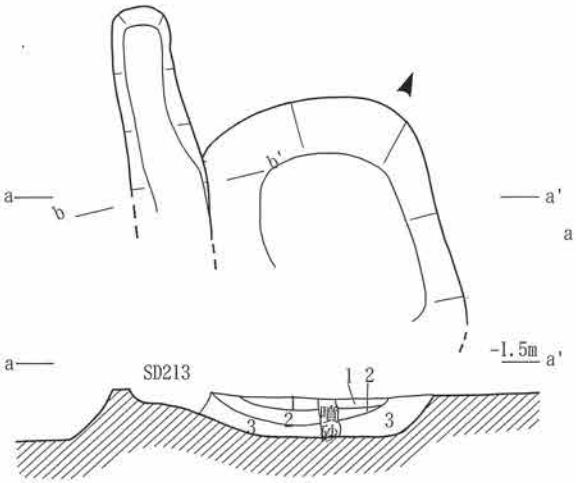
1　明青灰色砂層
2　青灰色粘質土
　泥炭・砂をわずかに含む
3　青灰色粘質土
　泥炭をわずかに含む

SK236



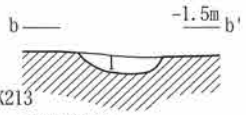
1　青灰色砂層
2　青灰色粘土
　泥炭を少量含む

SD213・SK214



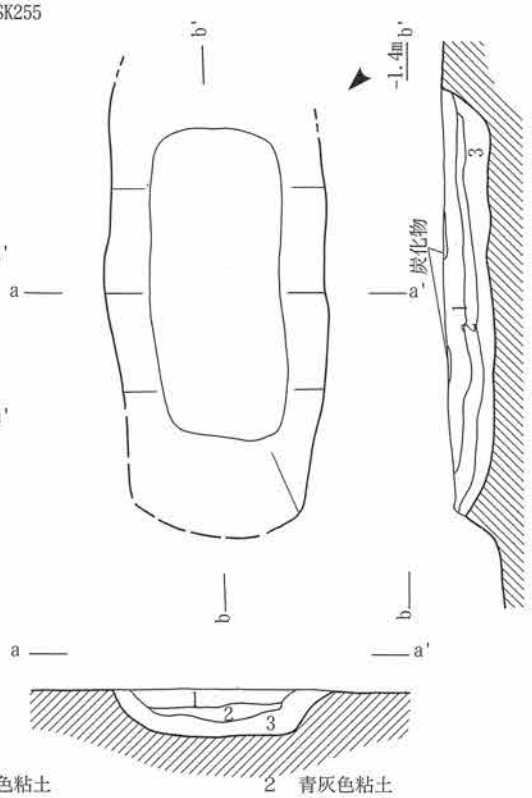
1　青灰色砂
2　青灰色粘土
3　青灰色粘土
　やや赤味がかかる
　泥炭を多量に混入

SK213



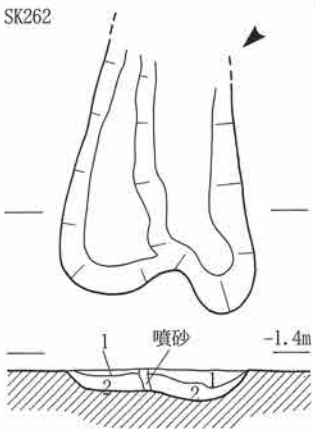
1　青灰色粘土
　やや赤味がある
　木炭（10mm大）を少量含む

SK255



1　青灰色粘土
　炭化物が表面に10mmの厚さである
　木炭（10mm大）を少量含む
　泥炭を多量に混入
2　青灰色粘土
　泥炭をわずかに含む
3　青灰色粘土
　木炭（10mm大）を少量含む
　泥炭を多量に混入

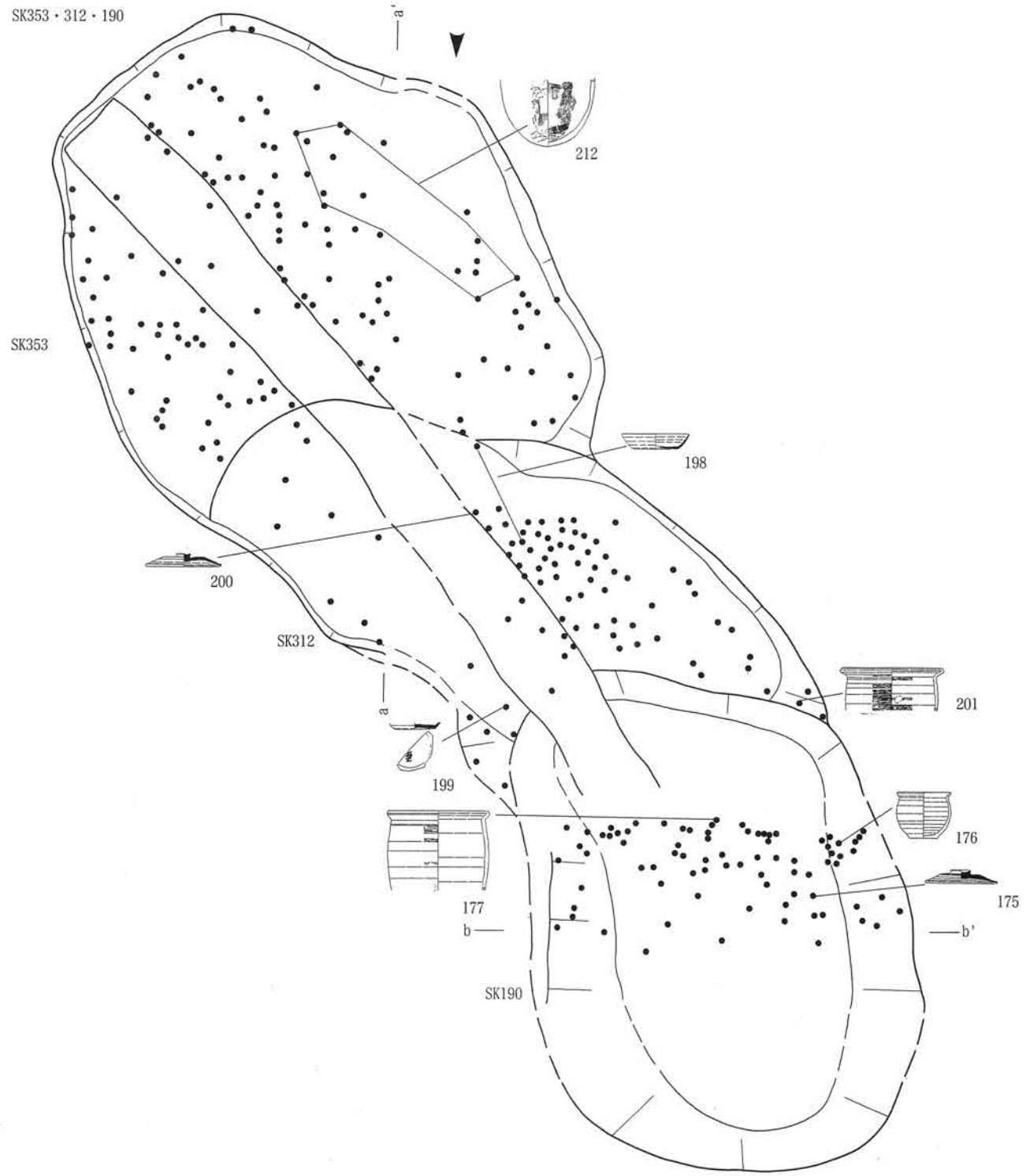
SK262

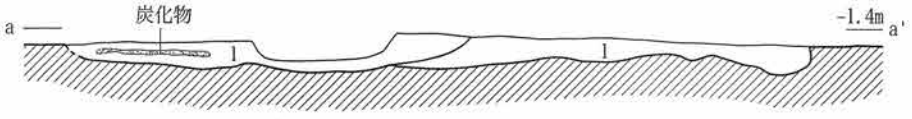


1　青灰色粘土
　木炭（10mm大）を少量含む
　泥炭を多量に混入
2　青灰色粘土
　泥炭を中量含む

0　(1：40)　2m

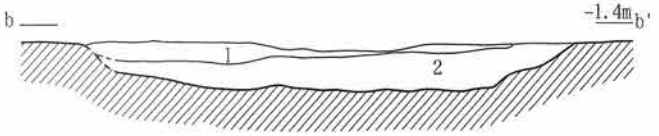
X層遺構実測図(5)





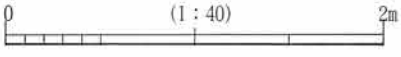
1　暗緑灰色砂質粘土
　炭化物（2～5㎜大）を多量に混入

1　暗灰色砂質粘土
　炭化物を多量に混入
　植物遺体を多量に混入

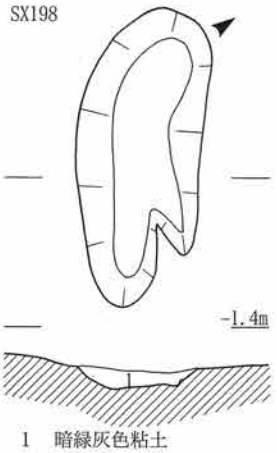


1　青灰色粘土
　砂を縞状に含む
　植物遺体を多量に混入

2　暗青灰色粘土
　炭化物（10㎜大）を
　多量に混入

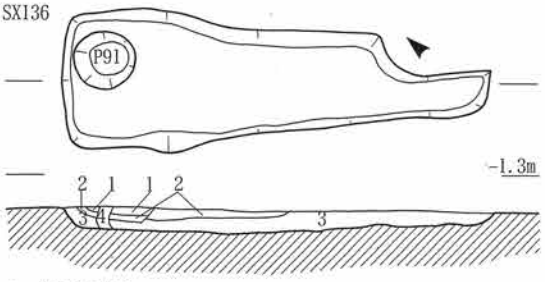


SX198



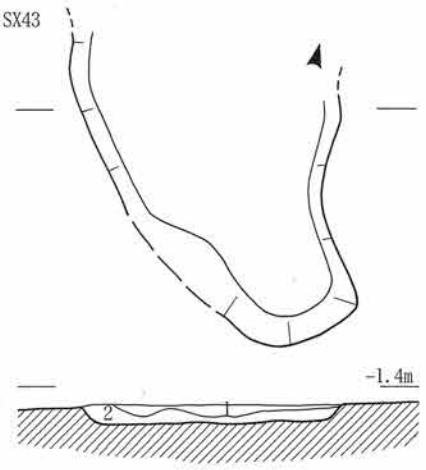
1　暗緑灰色粘土

SX136



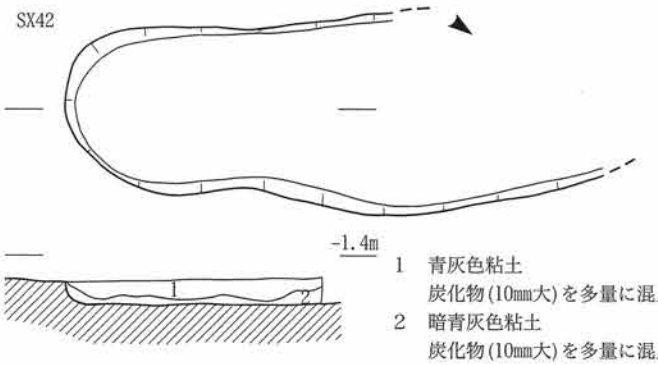
1　緑灰色粘土
2　黒色炭化物(4～5mm大)層
3　緑灰色粘土
4　噴砂

SX43



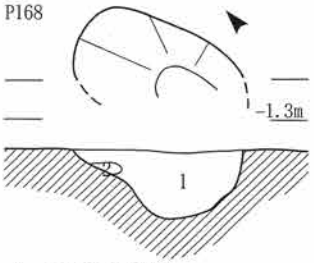
1　青灰色粘土
　炭化粒(3mm大)を多量に混入
　植物遺体を多量に混入
2　暗青灰色粘土

SX42



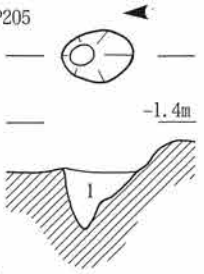
1　青灰色粘土
　炭化物(10mm大)を多量に混入
2　暗青灰色粘土
　炭化物(10mm大)を多量に混入

P168



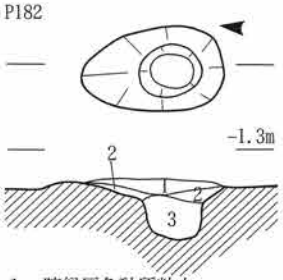
1　緑灰色砂質粘土
2　炭化物層
　緑灰色粘土を縞状に少量含む

P205



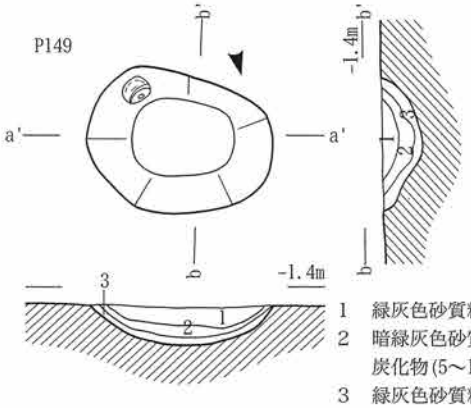
1　紫灰色粘土
　炭化粒(1～3mm大)を含む
2　明青灰色粘土をブロック状に含む

P182



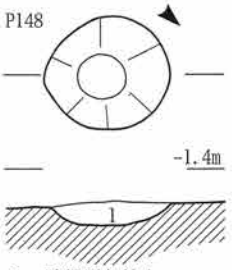
1　暗緑灰色砂質粘土
　炭化物(5～7mm)を多量に混入
2　緑灰色粘土
3　暗オリーブ灰色砂質粘土
　炭化物(5～7mm)を多量に混入

P149



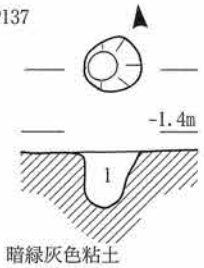
1　緑灰色砂質粘土
2　暗緑灰色砂質粘土
　炭化物(5～10mm大)を含む
3　緑灰色砂質粘土

P148



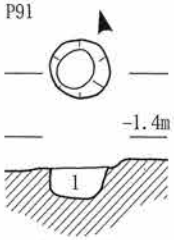
1　暗緑灰色粘土

P137



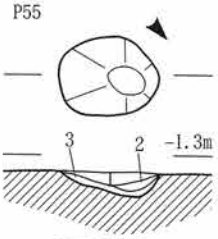
1　暗緑灰色粘土
　炭化物をわずかに含む

P91



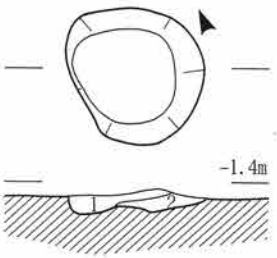
1　緑灰色粘土
　炭化物を少量含む
　噴砂の痕跡あり

P55



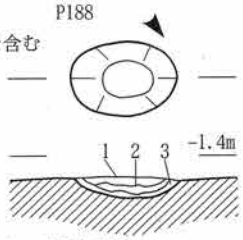
1　青灰色粘土
2　暗青灰色粘土
　炭化物を少量含む
3　青灰色シルト

P134



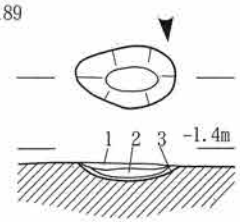
1　青灰色粘土
　泥炭を少量含む　砂をわずかに含む
　噴砂の痕跡あり
2　橙色粘土
　焼土に木炭(10～20mm大)を少量含む

P188



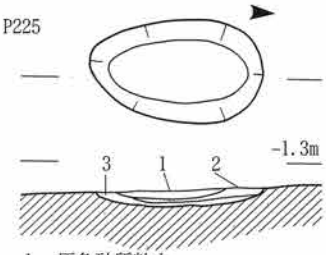
1　青灰色粘土
　炭化物(10mm大)を含む
　植物遺体を多量に混入
2　青灰色粘土
　植物遺体を多量に混入
3　青灰色粘土
　植物遺体を少量含む

P189



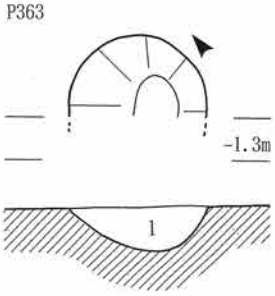
1　青灰色粘土
　炭化物(10mm大)を含む
　植物遺体を多量に混入
2　青灰色粘土
　植物遺体を多量に混入
3　青灰色粘土
　植物遺体をわずかに含む

P225



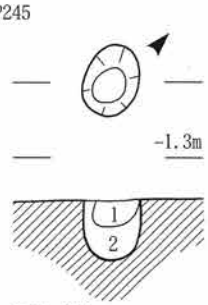
1　灰色砂質粘土
2　黒色炭化物(木炭)層
　灰色砂質粘土を帯状に含む
3　灰色砂質粘土

P363



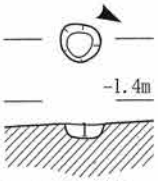
1　緑灰色粘土
　木炭(5～10mm大)を少量含む
2　砂を少量含む

P245



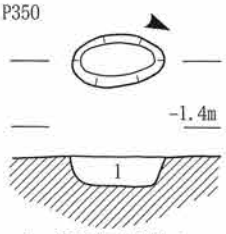
1　青灰色粘土
2　炭化物(木炭　15～30mm)
　骨片及び粉骨少量中心部に含む

P307



1　青灰色粘土

P350

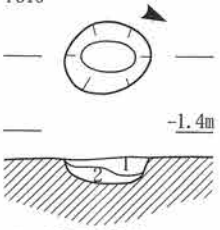


1　青灰色砂質粘土
　木炭(1mm大)を
　少量含む

0　(1：40)　2m

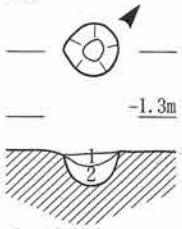
X層遺構実測図(7)

P310



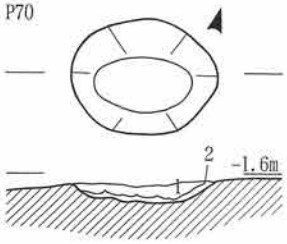
1 暗灰色粘土
炭化粒を少量含む
2 緑灰色砂質粘土

P221



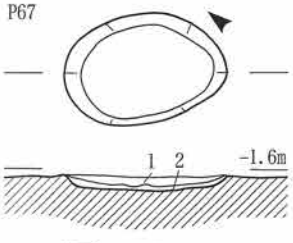
1 緑灰色粘土
炭化物(5～10mm)を多量に混入
2 緑灰色粘土

P70



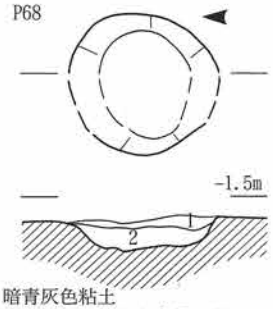
1 青灰色砂質土
木炭(10mm大)を少量含む
2 青灰色シルト

P67



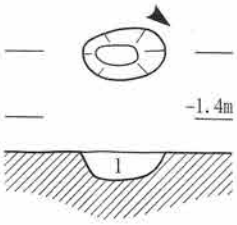
1 青灰色シルト
木炭(10mm大)を含む
植物遺体を多量に混入
2 青灰色シルト
黄褐色砂が混在する

P68



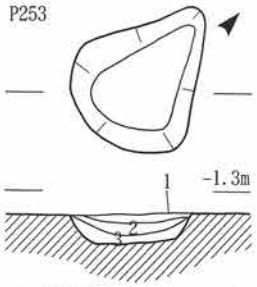
1 暗青灰色粘土
炭化物(10mm大)を多量に混入
植物遺体を多量に混入
2 暗緑灰色粘土
植物遺体を多量に混入

P336



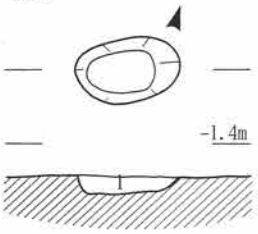
1 暗緑灰色粘土

P253



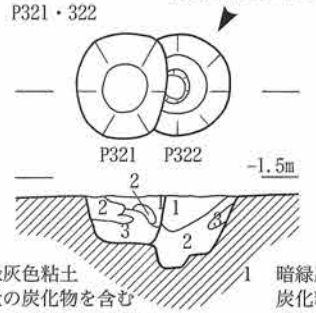
1 黒色炭化物(ワラ灰多い)層
緑灰色粘土を帯状に含む
2 緑灰色粘土
木炭を少量含む
3 緑灰色砂質粘土
明黄褐色の焼土(厚さ10×長さ20mm)を帯状に含む

P320



1 暗オリーブ灰色シルト
炭化物を少量含む

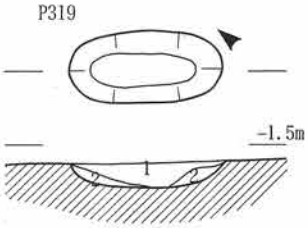
P321・322



1 暗緑灰色粘土
少量の炭化物を含む
灰色粘土をレンズ状に含む
2 暗緑灰色砂質粘土
炭化物(泥状)を縞状に多量に混入
3 灰色砂質粘土

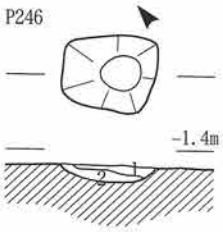
1 暗緑灰色砂質粘土
炭化粒(1.5mm大)を含む
2 灰黄褐色粘土
3 灰色粘土
炭化物をわずかに含む

P319



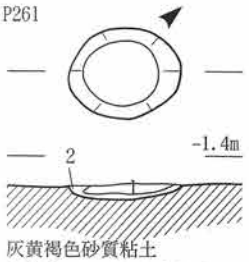
1 暗緑灰色シルト
炭化物をわずかに含む
2 緑灰色シルト

P246



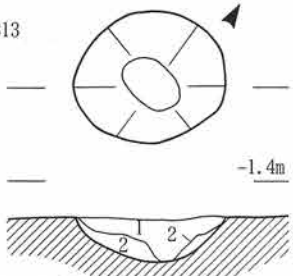
1 青灰色粘土
2 炭化物(木炭)
骨片及び粉骨少量中心部に含む

P261



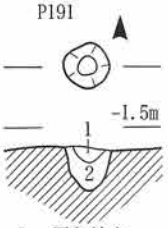
1 灰黄褐色砂質粘土
炭化物(10mm大)を中量含む
2 緑灰色砂質粘土

P313



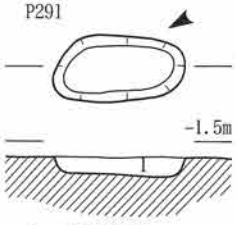
1 緑灰色砂質粘土
炭化物(10～20mm大)を少量含む
2 緑灰色シルト

P191



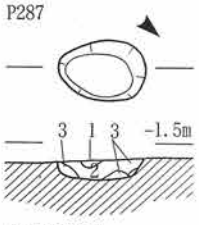
1 灰色粘土
炭化物をわずかに混入
2 灰色粘土
炭化物(50mm大)を少量含む

P291



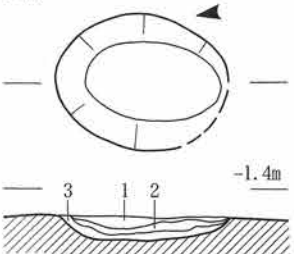
1 青灰色粘土
泥炭をわずかに混入

P287



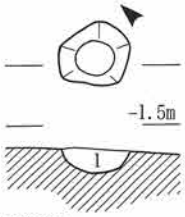
1 明青灰粘土
砂、泥炭をわずかに含む
2 明青灰粘土
炭化物(20～30mm大)を多量に混入
3 明青灰粘土
砂(1層より多い)、泥炭をわずかに含む

P275



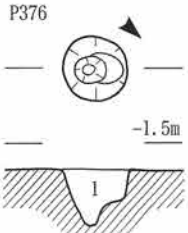
1 暗青灰色粘土
木炭を少量含む
2 紫灰色粘土
ワラ灰を多量に含む
3 紫灰色粘土
木炭を少量含む

P220



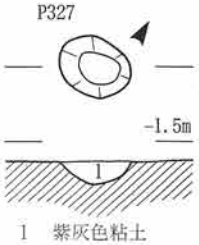
1 褐灰色粘土
炭化物(5～10mm大)を中量含む

P376



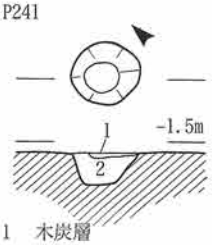
1 暗青灰色粘土
木炭(2～3mm大)を多量に含む
2 暗青灰色シルト

P327



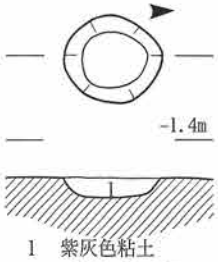
1 紫灰色粘土
木炭を少量含む

P241

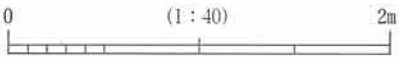


1 木炭層
木炭(5～20mm大)がぎっしり詰まった状態
土の混入は見られない
2 暗青灰色粘土
木炭を少量含む

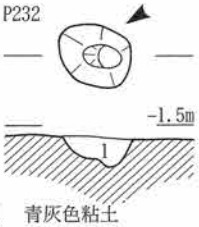
P256



1 紫灰色粘土
木炭を少量含む

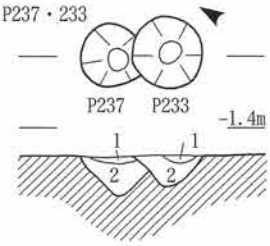


P232



1　青灰色粘土
木炭（3～10mm大）を含む
明黄褐色シルト質粘土が
ブロック状に多量に混入

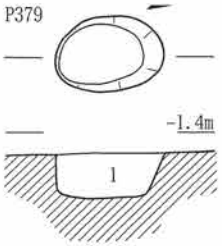
P237・233



1　紫灰色粘土
木炭を少量含む
2　暗青灰色粘土
木炭を少量含む

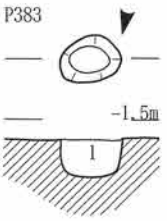
1　紫灰色粘土
木炭を少量含む
2　暗青灰色粘土
木炭を少量含む

P379



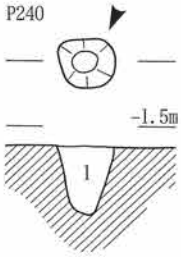
1　青灰色粘土
炭化物をわずかに混入

P383



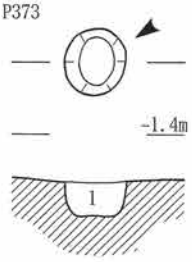
1　青灰色粘土
炭化物（5mm大）を
多量に混入

P240



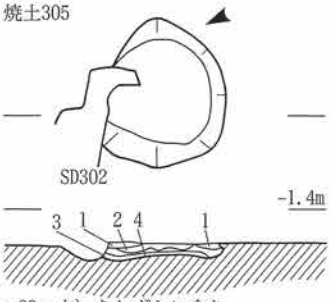
1　青灰色粘土
泥炭を多量に混入

P373



1　青灰色粘土
炭化物を少量含む

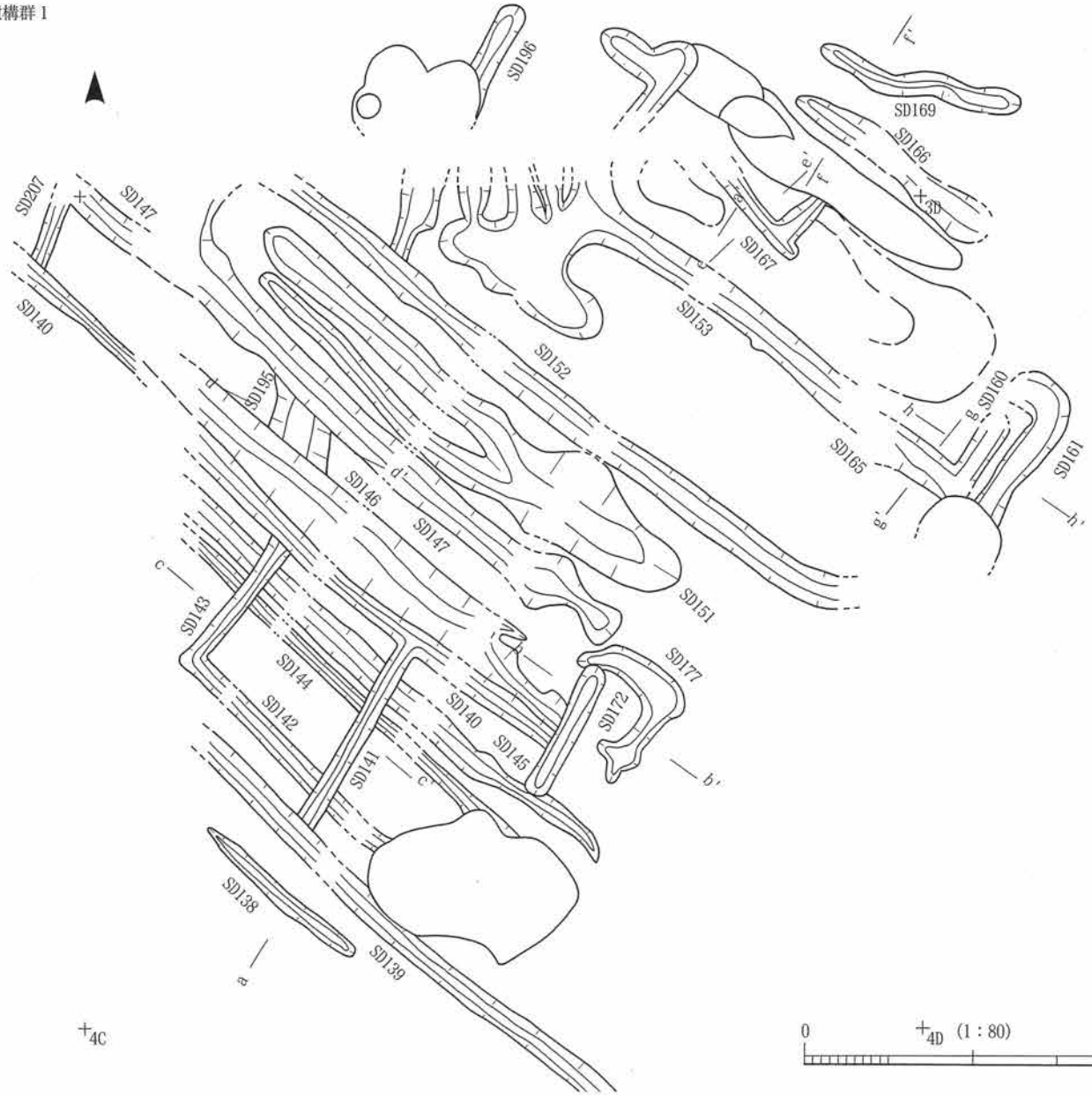
焼土305



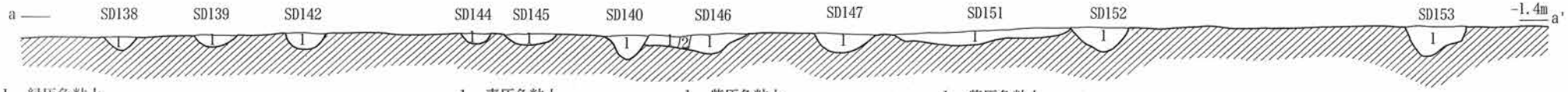
1　橙色粘土
木炭（10～20mm大）をわずかに含む
2　灰褐色粘土
灰か粉骨の様な白色粒子を多量に混入した焼土
3　橙色焼土
褐灰色の灰を中量含む
4　黒色ワラ灰

0　(1：40)　2m

溝状遺構群1



0　(1：80)　4m

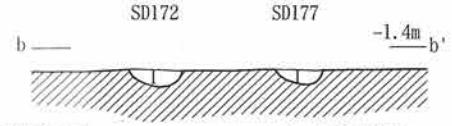


1 緑灰色粘土
木炭(2～3㎜大)を少量含む

1 青灰色粘土
木炭(2～3㎜大)を少量含む

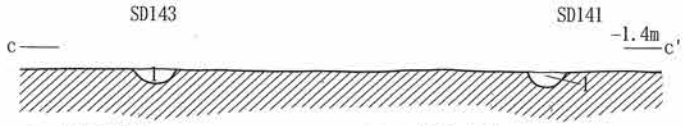
1 紫灰色粘土
木炭(6～8㎜大)を多量に含む
青灰色粘土をブロック状に含む
2 噴砂

1 紫灰色粘土
木炭(6～8㎜大)を多量に含む
青灰色粘土をブロック状に含む



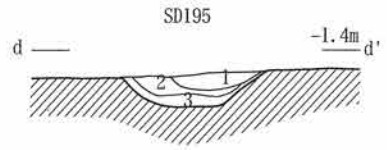
1 紫灰色粘土
木炭(6～8㎜大)を少量含む
緑灰色粘土をブロック状に含む

1 紫灰色粘土
上部に木炭を多量に含む
中～下部に木炭を含む

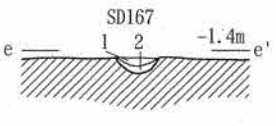


1 緑灰色粘土
木炭(2～3㎜大)を少量含む

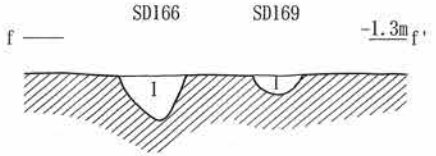
1 青灰色粘土
木炭(2～3㎜大)を少量含む



1 暗緑灰色粘土
木炭・ワラ灰を多量に混入
2 緑灰色粘土
ワラ灰を多量に混入
3 紫灰色粘土
木炭を多量に混入、ワラ灰を少量含む

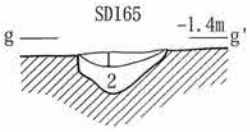


1 青灰色粘土
炭化物（(5㎜大)を含む
2 緑灰色粘土
砂を少量含む

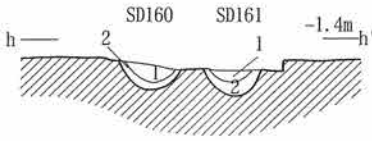


1 暗緑灰色砂質粘土
炭化物(5～10㎜大)を含む

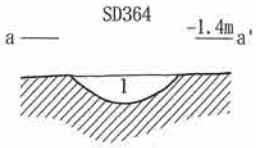
1 暗オリーブ灰色砂質粘土
炭化物を少量含む



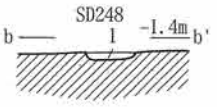
1 暗灰色粘土
炭化物(5～7㎜大)を多量に混入
2 暗灰色砂質粘土



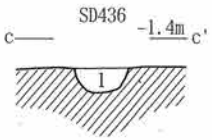
1 暗灰色粘土
炭化物(5～7㎜大)を多量に混入
2 暗灰色砂質粘土



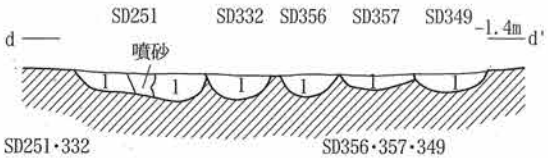
1 青灰色粘土
泥炭をわずかに含む



1 灰色砂質シルト
炭化物（7×10㎜）を
わずかに含む

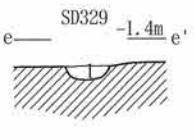


1 青灰色砂質粘土
泥炭を多量に混入

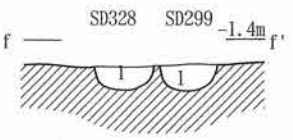


SD251・332
1 紫灰色シルト
木炭(6～8㎜大)を多量に混入
植物遺体を含む

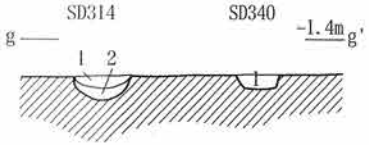
SD356・357・349
1 紫灰シルト
炭化物(6～8㎜大の角炭)を多量
に混入
植物遺体を含む



1 暗緑灰色粘土
炭化物(10㎜大)を含む

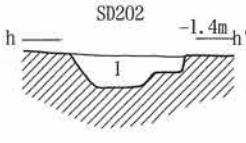


1 緑灰色砂質粘土
炭化粒をわずかに含む

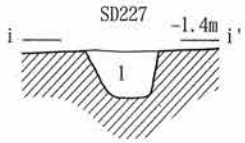


1 紫灰色粘土
木炭を少量含む
2 青灰色粘土
木炭を少量含む

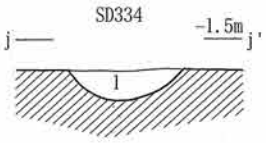
1 緑灰色砂質粘土
炭化物を
わずかに含む



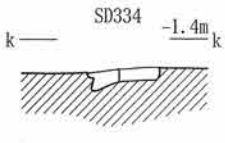
1 緑灰色粘土



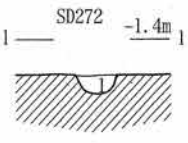
1 緑灰色粘土



1 紫灰色粘土
木炭を少量含む

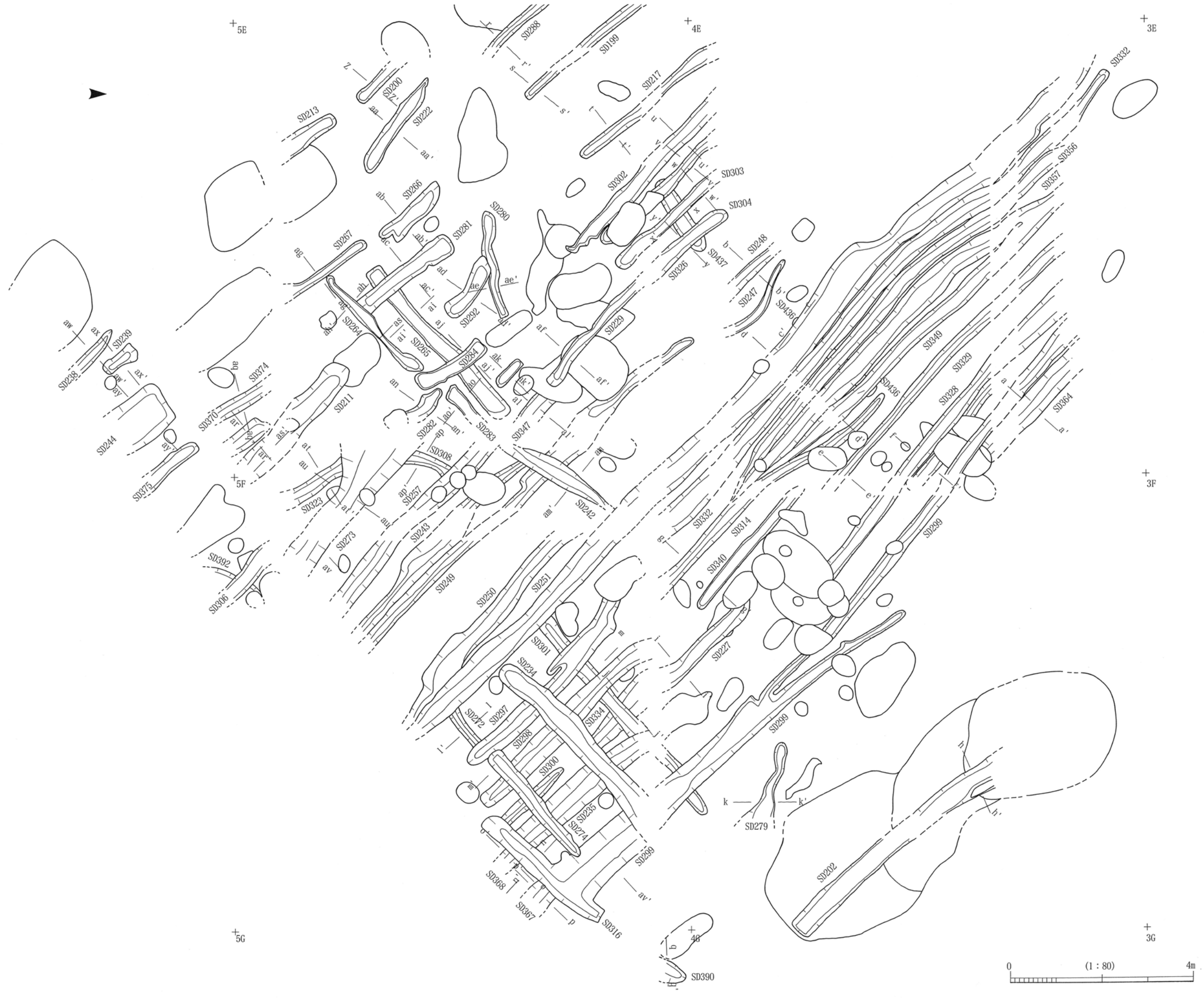


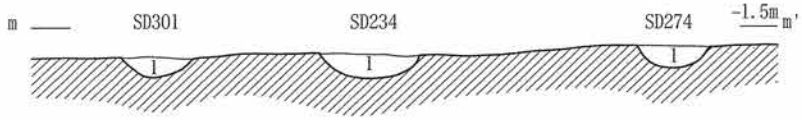
1 緑灰色砂質シルト
炭化物を少量含む
植物遺体を少量含む



1 紫灰色粘土
炭化物を少量含む

0 (1：40) 2m

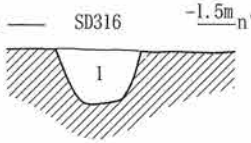

5E
4E
3E
5F
3F
5G
4G
3G
SD213
SD200
SD222
SD288
SD199
SD217
SD332
SD266
SD280
SD281
SD267
SD302
SD303
SD304
SD356
SD357
SD326
SD437
SD248
SD247
SD436
SD264
SD265
SD292
SD284
SD229
SD239
SD238
SD374
SD370
SD211
SD282
SD283
SD347
SD349
SD329
SD328
SD364
SD244
SD375
SD323
SD308
SD257
SD242
SD273
SD243
SD249
SD392
SD306
SD250
SD251
SD301
SD234
SD272
SD297
SD334
SD298
SD300
SD235
SD274
SD299
SD368
SD367
SD316
SD314
SD340
SD227
SD279
SD202
SD390
0
(1：80)
4m



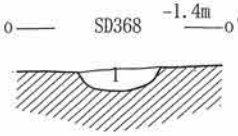
1 紫灰色粘土
木炭（6～8mm大）を少量含む

1 紫灰色粘土
炭化物を少量含む

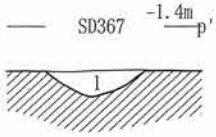
1 紫灰色粘土
木炭を少量含む



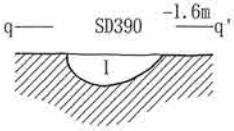
1 紫灰色粘土
木炭を少量含む



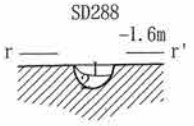
1 紫灰色粘土
木炭をわずかに含む
青灰色粘土をブロック状に含む



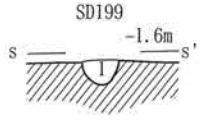
1 紫灰色粘土
木炭をわずかに含む
青灰色粘土をブロック状に含む



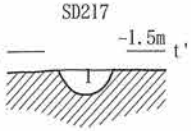
1 青灰色粘土
木炭（5～20mm大）を
少量含む



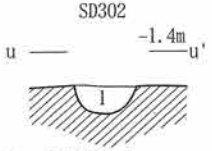
1 青灰色粘土
2 青灰色粘土
泥炭をわずかに含む
砂を少量含む



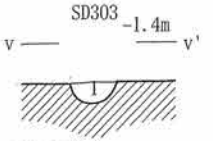
1 青灰色シルト
炭化物を少量含む



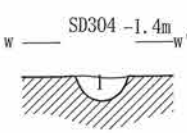
1 青灰色粘土
炭化物を少量含む



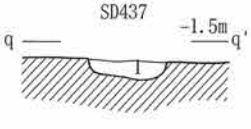
1 青灰色粘土
木炭（5～10mm大）
を少量含む
泥炭を少量含む



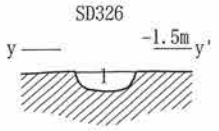
1 青灰色粘土
木炭を帯状（12mm幅）で
含む
泥炭を少量含む



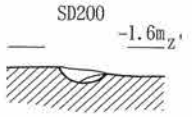
1 青灰色粘土
木炭（5～10mm大）
を少量含む
泥炭を少量含む



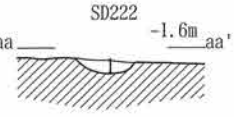
1 青灰色砂質粘土
泥炭を多量に混入



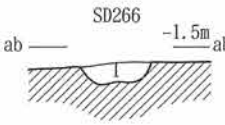
1 青灰色粘土
炭化物（10mm）を
少量含む
泥炭を多量に混入



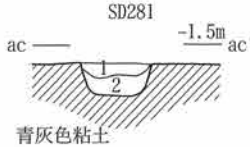
1 青灰色シルト
2 青灰色砂



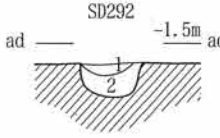
1 青灰色粘土



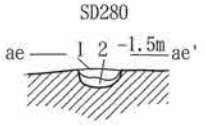
1 青灰色粘土
炭化物を少量含む



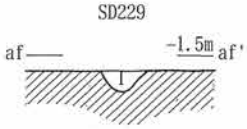
1 青灰色粘土
木炭（5mm大）を少量含む
泥炭を多量に混入
2 青灰色粘土
木炭（5mm大）をわずかに含む
泥炭を少量含む



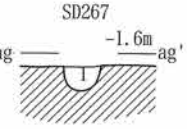
1 青灰色粘土
泥炭をわずかに含む
やや砂質
2 青灰色粘土
木炭（10～30mm大）を少量含む
泥炭を多量に混入



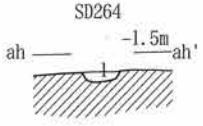
1 青灰色粘土
木炭（10mm大）を少量含む
泥炭を少量含む
2 明青灰色砂質粘土



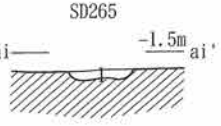
1 青灰色粘土
ワラ灰、焼土が
部分的に多量に混入



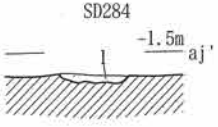
1 青灰色粘土
炭化物を少量含む



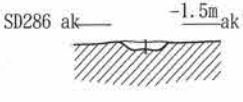
1 青灰色粘土
炭化物を少量含む



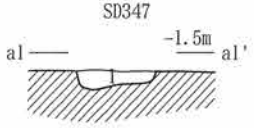
1 青灰色粘土
炭化物を少量含む



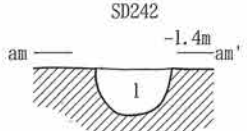
1 青灰色粘土
泥炭を多量に混入



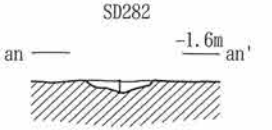
1 青灰色粘土
木炭（5mm大）を
わずかに含む
泥炭を多量に混入



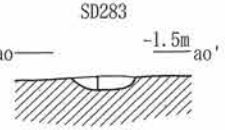
1 青灰色粘土
泥炭をわずかに含む
やや砂質



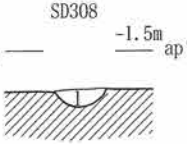
1 紫灰色粘土
木炭を少量含む



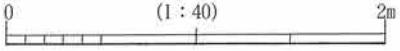
1 青灰色粘土
木炭（10mm大）をわずかに含む
泥炭を多量に混入
砂を少量含む



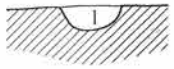
1 青灰色粘土
木炭（10mm大）を
わずかに含む
泥炭を多量に混入



1 紫灰色粘土
木炭を少量含む

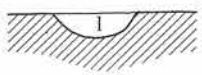


aq — SD374 -1.5m aq'



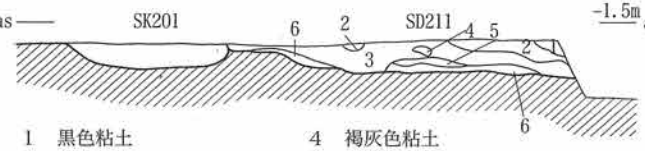
1 青灰色粘土
炭化物をわずかに混入

ar — SD370 -1.5m ar'



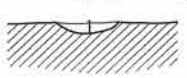
1 青灰色粘土
炭化物を少量含む

as — SK201 SD211 -1.5m as'



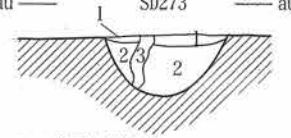
1 黒色粘土
ワラ灰がブロック状に混入
灰褐色の灰を少量含む
2 青灰色粘土
泥炭を多量に混入
3 青灰色粘土
泥炭中量混入
4 褐灰色粘土
灰と粘土
5 青灰色粘土
泥炭をわずかに混入
6 黒色粘土
ワラ灰、灰白色の灰を少量含む

at — SD323 -1.5m at'



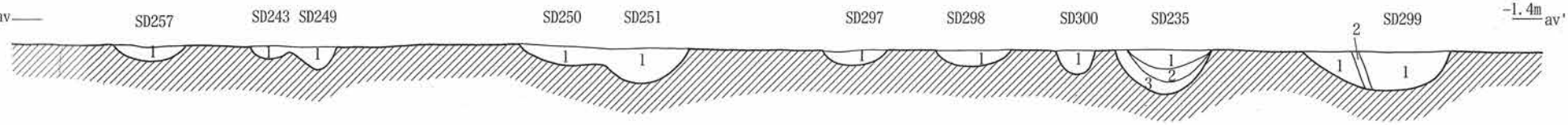
1 紫灰色粘土
木炭（6～8mm大）
を少量含む

au — SD273 -1.4m au'



1 紫灰色粘土
炭化物（木炭）を少量含む
2 青灰色粘土
木炭を少量含む
3 噴砂

av — SD257 SD243 SD249 SD250 SD251 SD297 SD298 SD300 SD235 SD299 -1.4m av'

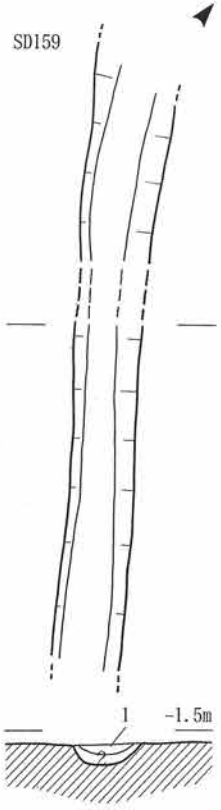


1 青灰色粘土
木炭を少量含む

1 紫灰色粘土
木炭（6～8mm大）を多量に混入
2 青灰色粘土
木炭を少量含む
ワラ灰が下部に多量に混入
3 暗青灰色粘土
砂が中間に多量に混入
植物遺体を多量に混入

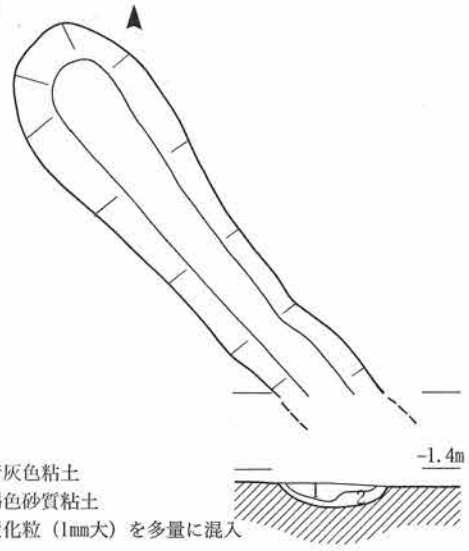
1 紫灰色粘土
木炭を少量混入
ワラ灰を一部多量に混入
2 噴砂

SD159



1 青灰色粘土
2 青灰色粘土

SD369

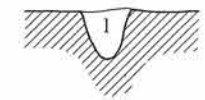


1 青灰色粘土
2 褐色砂質粘土
炭化粒（1mm大）を多量に混入

SD238 aw — -1.5m aw'

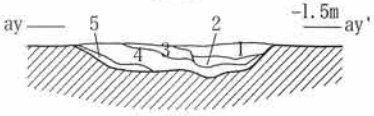
1 青灰色粘土

SD239 ax — -1.5m ax'

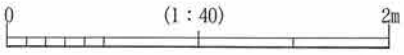


1 青灰色粘土
泥炭を少量含む

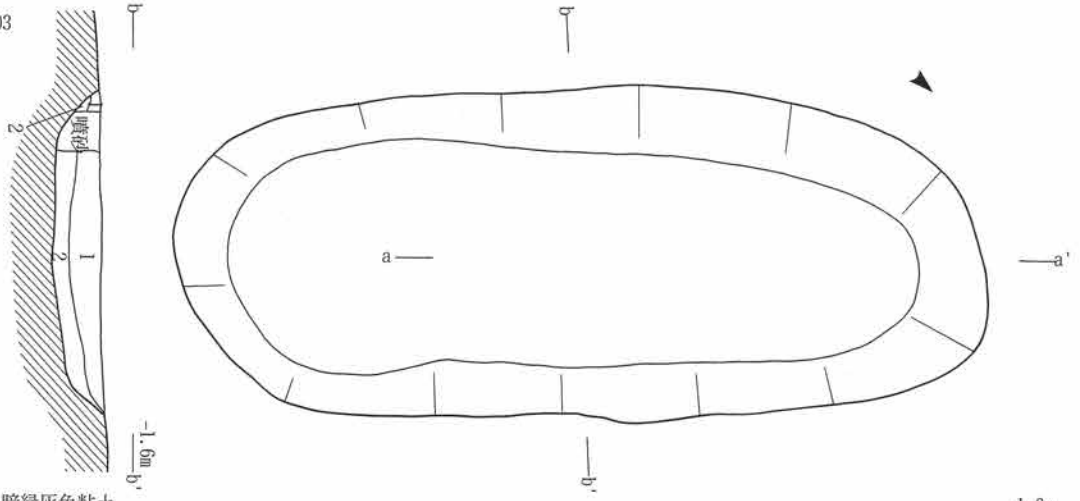
SD244 ay — -1.5m ay'



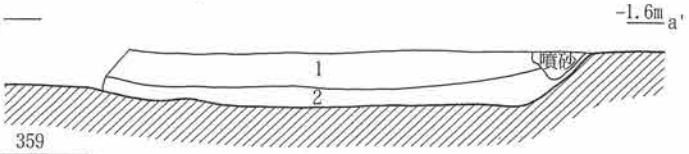
1 青灰色粘土
泥炭・炭化物を多量に混入
ワラ灰を含む
2 青灰色粘土
泥炭を中量混入
3 青灰色粘土
泥炭をわずかに含む
4 青灰色粘土
木炭（10mm大）をわずかに含む
泥炭を多量に混入
5 明青灰色粘土
泥炭をわずかに含む

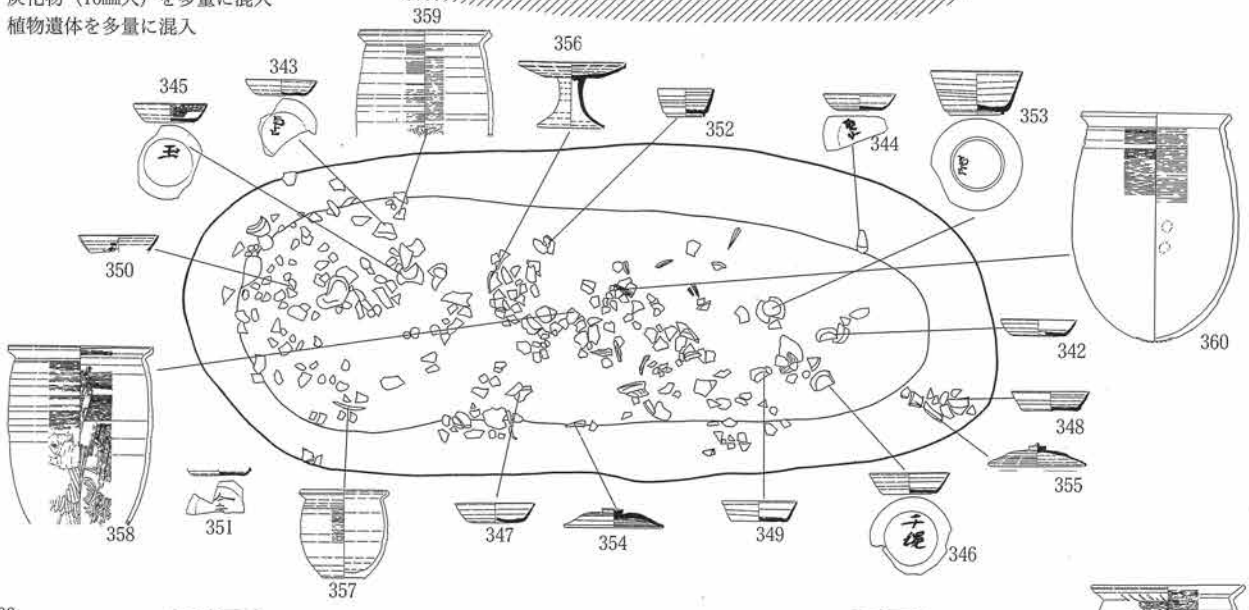


SK403

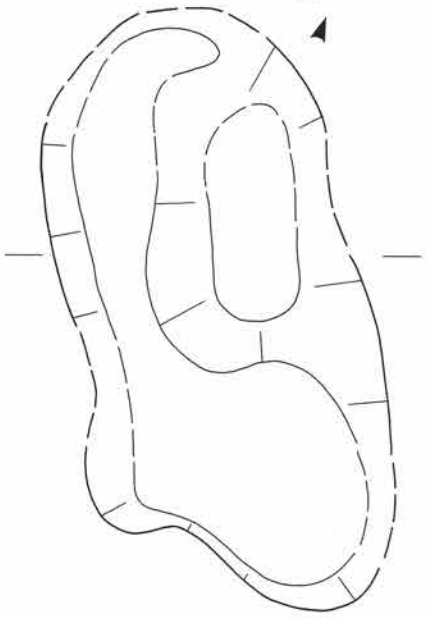


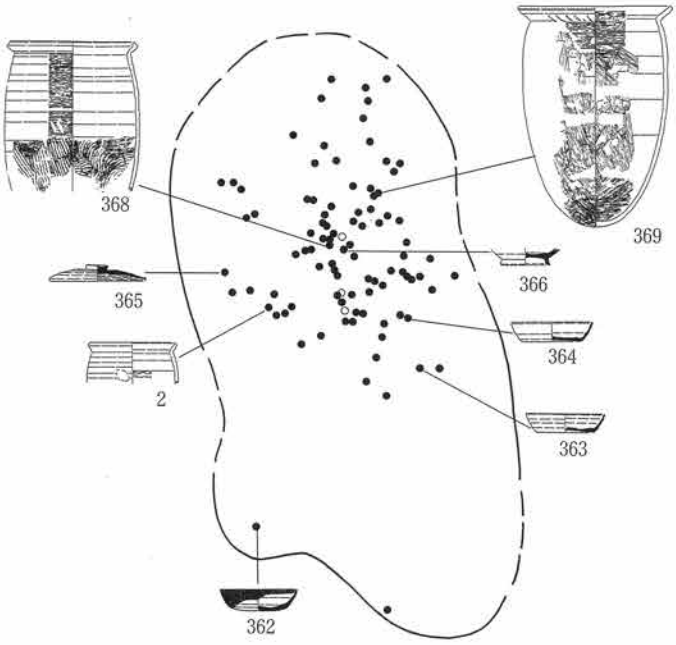
1　暗緑灰色粘土
　炭化物（10mm大）を多量に混入
　植物遺体を多量に混入
2　暗緑灰色粘土
　炭化物（10mm大）を多量に混入
　植物遺体を多量に混入



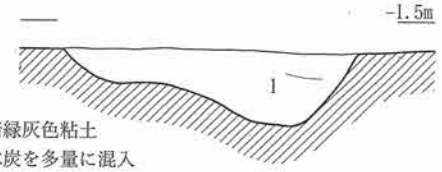


SK400

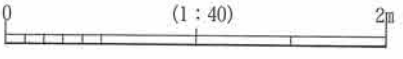




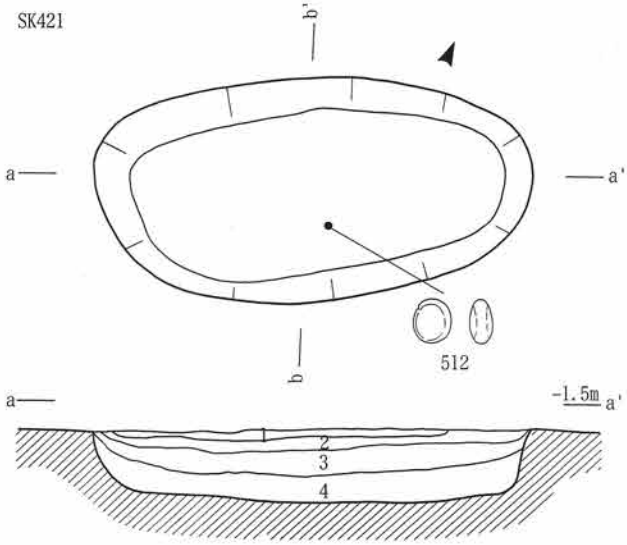
○木の実



1　暗緑灰色粘土
　木炭を多量に混入

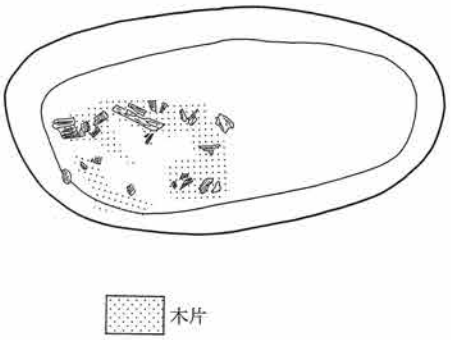


SK421



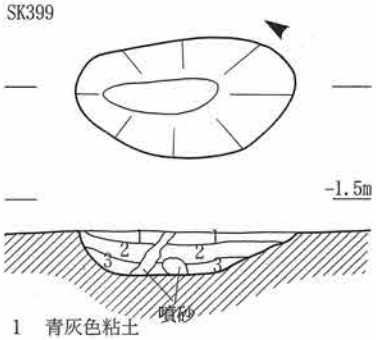
1　緑灰色シルト
2　淡黄褐色砂質粘土
3　緑灰色砂質粘土
4　暗緑灰色砂質粘土
炭化物（10㎜大）を含む

SK421遺物分布図



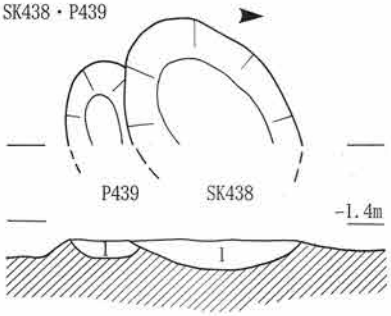
木片

SK399



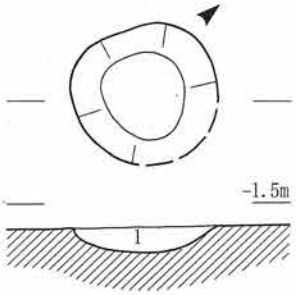
1　青灰色粘土
泥炭をわずかに含む
2　青灰色粘土
泥炭を中量含む
3　青灰色粘土
砂を中量含む

SK438・P439



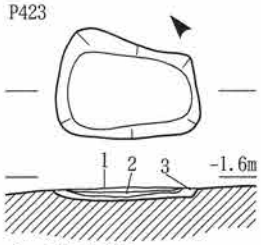
1　緑灰色砂質粘土　1　暗緑灰色砂質粘土
2　炭化粒を少量含む

P410



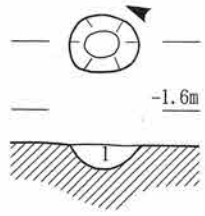
1　青灰色粘土
木炭（6～8㎜大）を斑に含む

P423



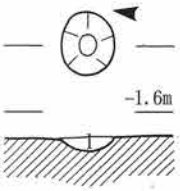
1　青灰色粘土
炭化物を少量含む
砂を中量含む
2　木炭層（20～30㎜大）
3　青灰色粘土
砂を中量含む

P420



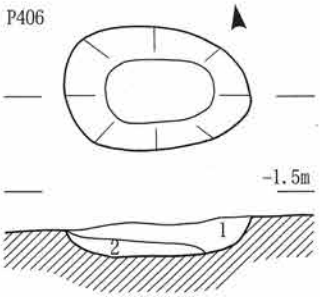
1　青灰色粘土
炭化粒をわずかに含む

P418



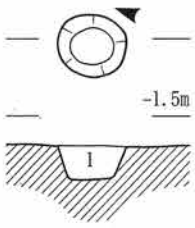
1　青灰色粘土
木炭を少量含む

P406



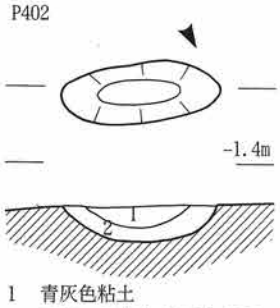
1　オリーブ灰色粘土
少量の木炭を含む
植物遺体を含む
2　オリーブ灰色粘土
木炭（10～20㎜大）が
多量に詰まっている
厚いところで50㎜程度

P433



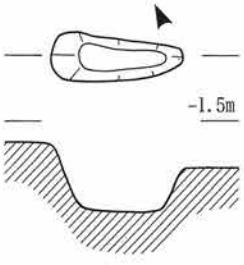
1　青灰色シルト質粘土
木炭を少量含む

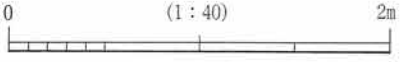
P402

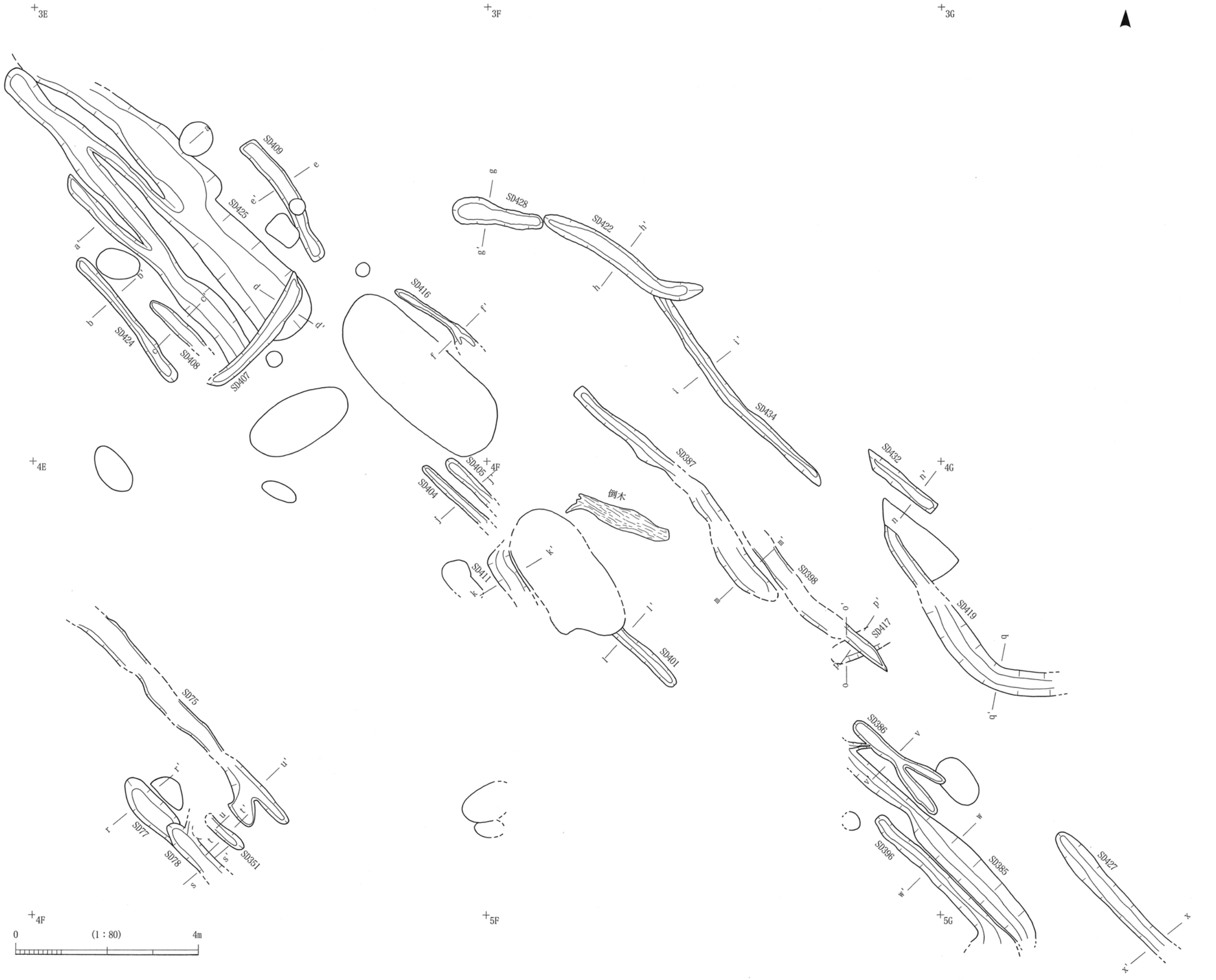


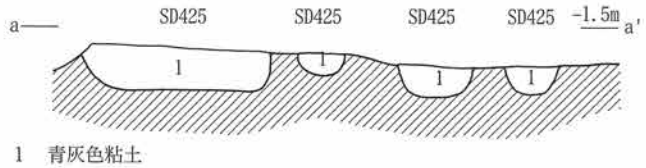
1　青灰色粘土
泥炭・炭化物を多量に混入
2　青灰色粘土
泥炭をわずかに含む

P430

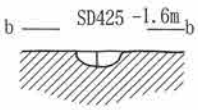




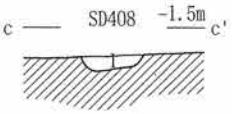

3E
3F
3G
4E
4F
4G
5F
5G
SD409
SD425
SD424
SD408
SD407
SD428
SD422
SD416
SD434
SD387
SD405
SD404
SD411
倒木
SD401
SD398
SD417
SD419
SD432
SD386
SD396
SD385
SD427
SD75
SD77
SD78
SD351
0
(1：80)
4m



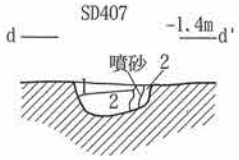
1　青灰色粘土
炭化物を中量含む
砂を中量含む



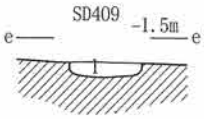
1　青灰色粘土
炭化物を少量含む
やや砂質



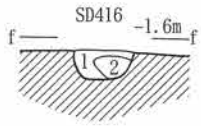
1　緑灰粘土
炭化物（10㎜大）を
わずかに含む



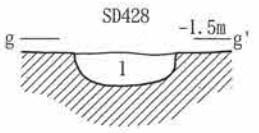
1　青灰色粘土
泥炭を少量含む
2　紫灰色粘土
泥炭（10㎜厚の層状）、木炭を多量に混入
青灰色粘土をブロック状に含む



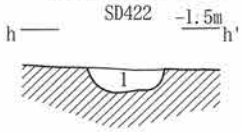
1　青灰色粘土
木炭（6～8㎜大）を
斑に含む



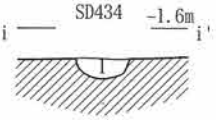
1　青灰色シルト質粘土
泥炭を多量に混入
2　青灰色砂質粘土



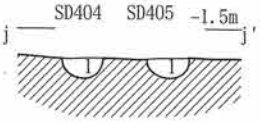
1　青灰色粘土
砂を中量含む



1　青灰色粘土
炭化物を少量含む

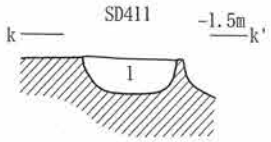


1　青灰色粘土
炭化物を少量含む

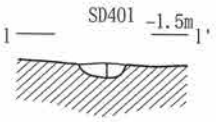


1　青灰色粘土
木炭（5～10㎜大）を少量含む
泥炭を多量に混入
砂を少量含む

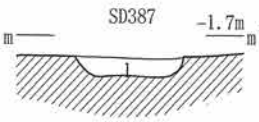
1　青灰色粘土
木炭（5～20㎜大）を少量含む
泥炭を多量に混入
砂を少量含む



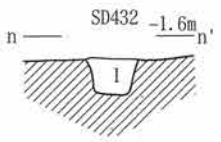
1　青灰色シルト質粘土
木炭（5㎜大）を少量含む
泥炭を多量に混入



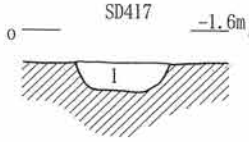
1　青灰色砂質粘土



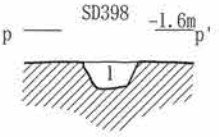
1　青灰色粘土
木炭（5～30㎜大）を少量含む



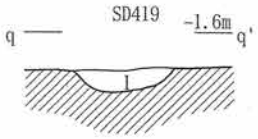
1　青灰色粘土



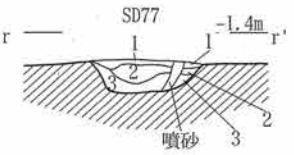
1　緑灰色砂質粘土



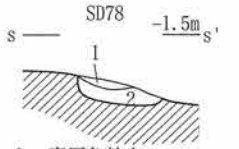
1　青灰色粘土
砂を少量含む



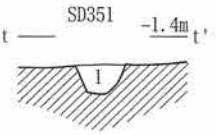
1　青灰色粘土
炭化粒（2～3㎜大）を中量含む
泥炭を多量に混入



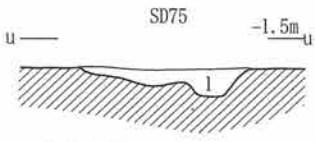
1　灰色粘土
木炭（5～10㎜大）を大量含む
泥炭を多量に混入
2　緑灰色粘土
3　緑灰色砂質粘土



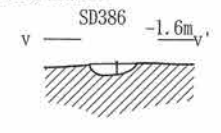
1　青灰色粘土
木炭（10～30㎜大）を多量に混入
2　青灰色粘土
木炭（10㎜大）を少量含む



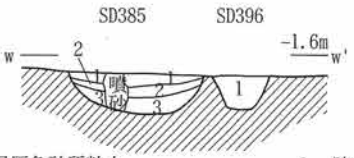
1　青灰色粘土
炭化物（5㎜大）を含む



1　青灰色粘土
木炭（20～30㎜大）をわずかに含む

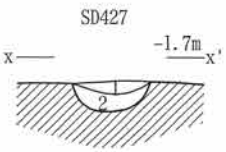


1　青灰色粘土
炭化物（5～30㎜大）を
含む

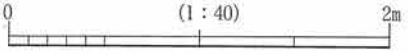


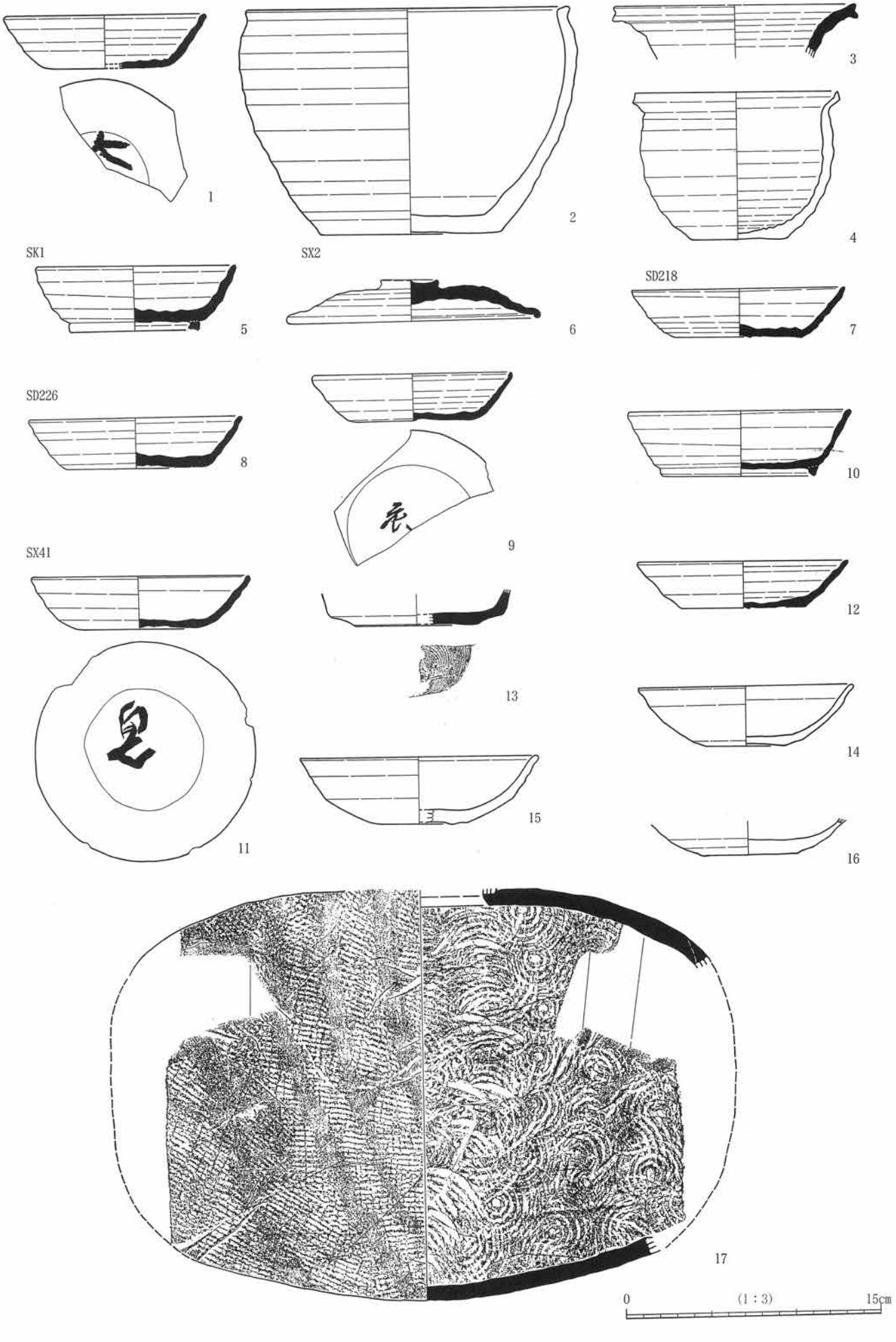
1　暗緑灰色砂質粘土
炭化物をわずかに含む
2　緑灰色砂質粘土
炭化粒をわずかに含む
3　緑灰色シルト
炭化物（6～8㎜大）をわずかに含む

1　暗緑灰色粘土
炭化粒をわずかに含む

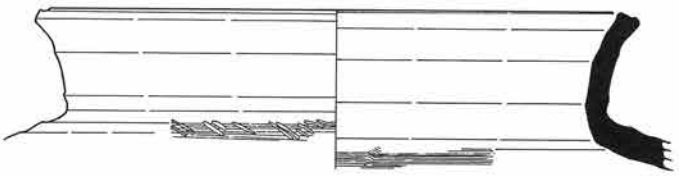


1　灰黄褐色粘土
木炭を少量含む
2　緑灰色砂質シルト

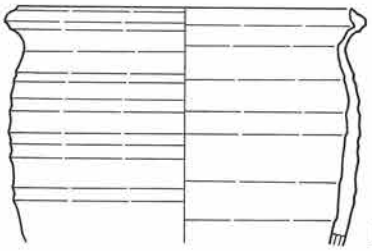



1
2
3
4
SK1
5
SX2
6
SD218
7
SD226
8
9
10
SX41
11
12
13
14
15
16
17
0
(1：3)
15cm

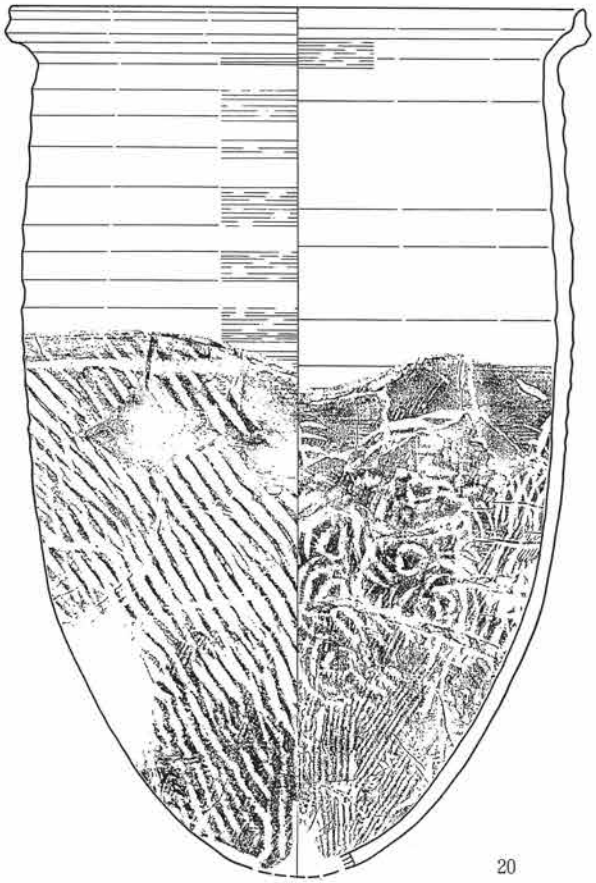
SX41



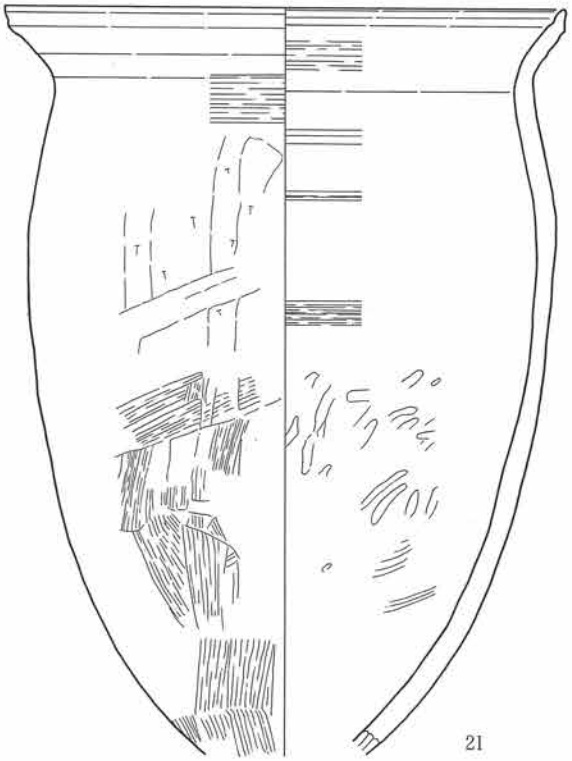
18



19

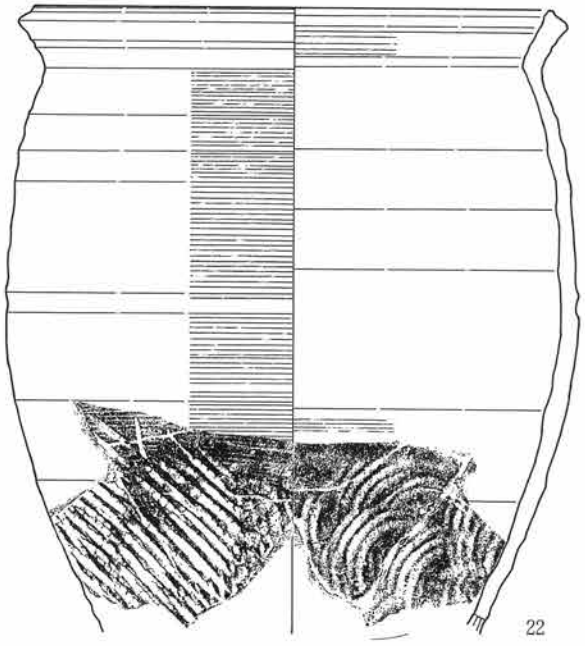


20

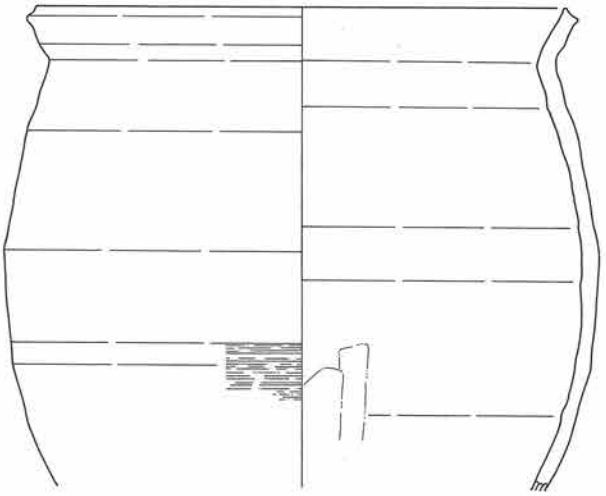


21

P276

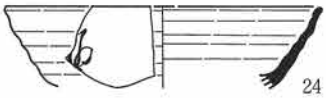


22



23

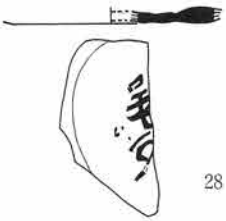
0 (1：3) 15cm

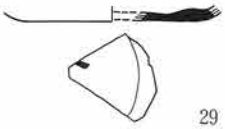

24

25

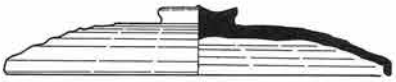
26

27

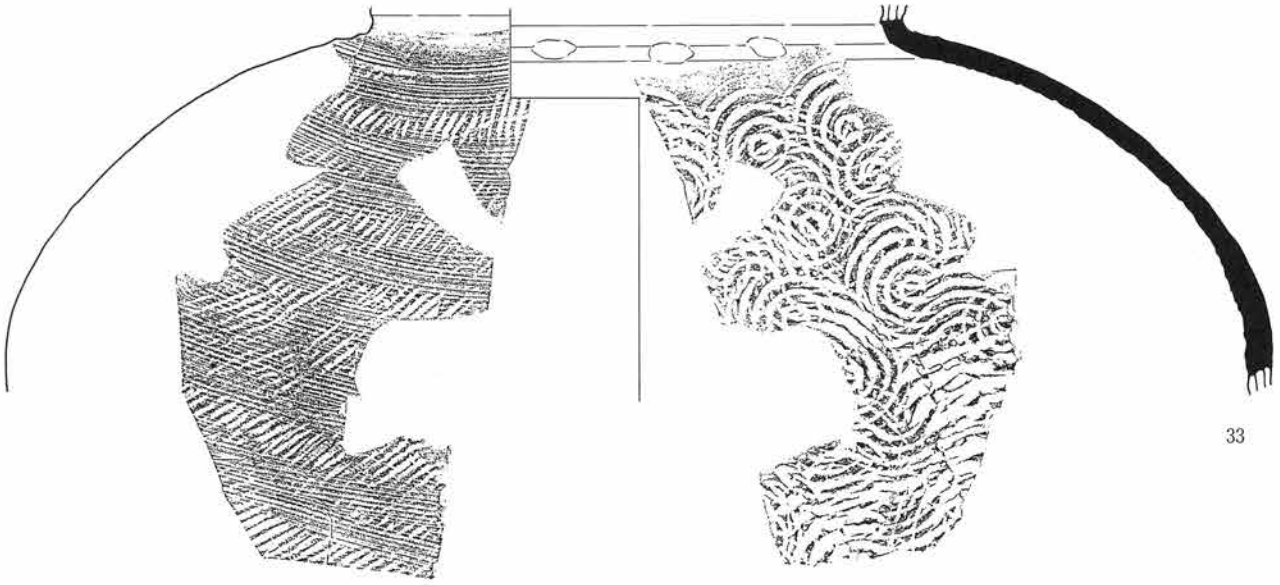

28

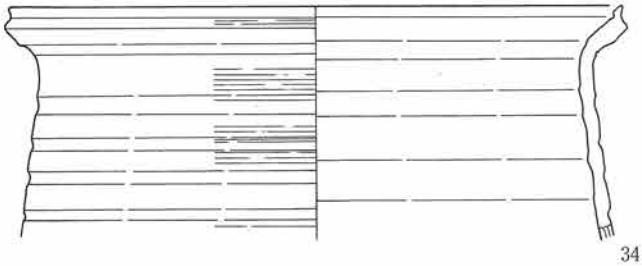

29

30

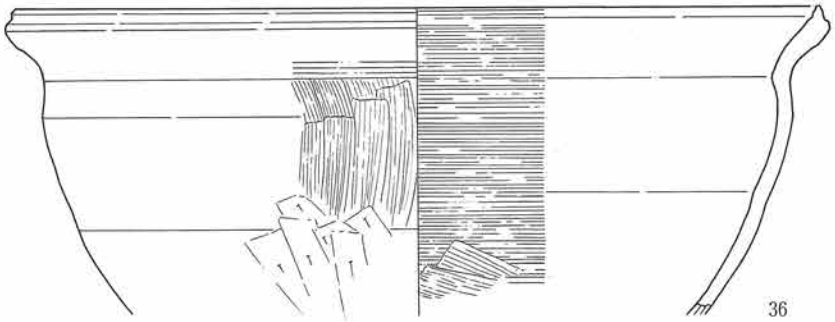

31

32

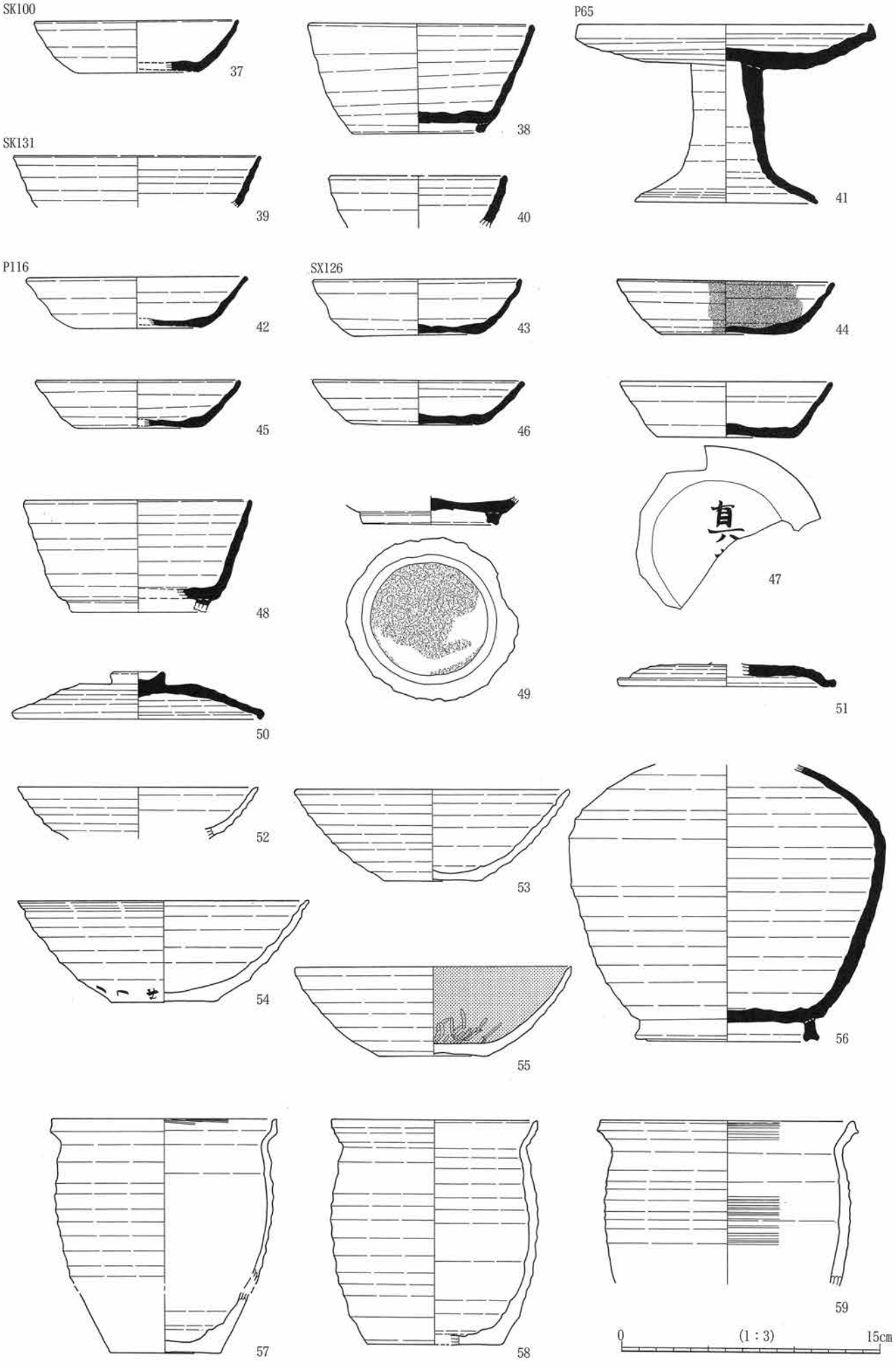

33


34

35

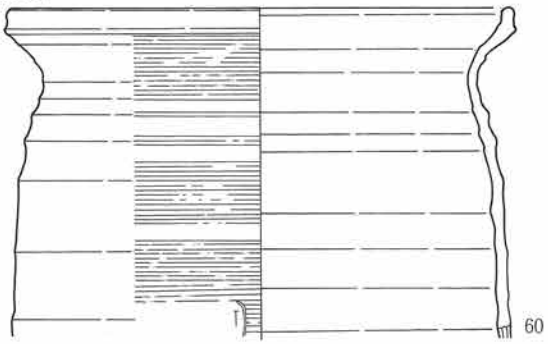

36

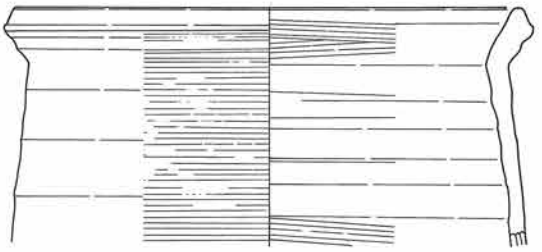
0 (1:3) 15cm

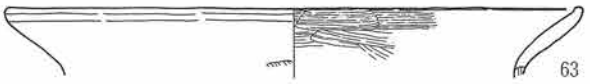

SK100
37
38
SK131
39
40
P65
41
P116
42
SX126
43
44
45
46
48
49
47
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
(1:3)
15cm

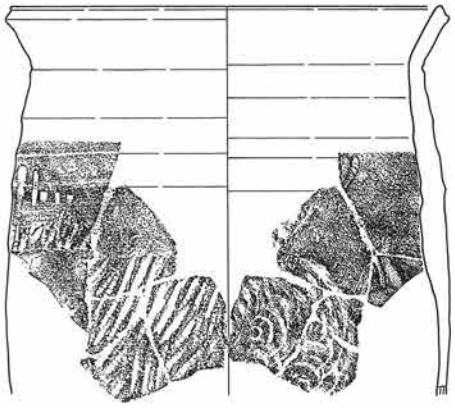
火葬関連遺構出土土器(2)・区層土器(1)

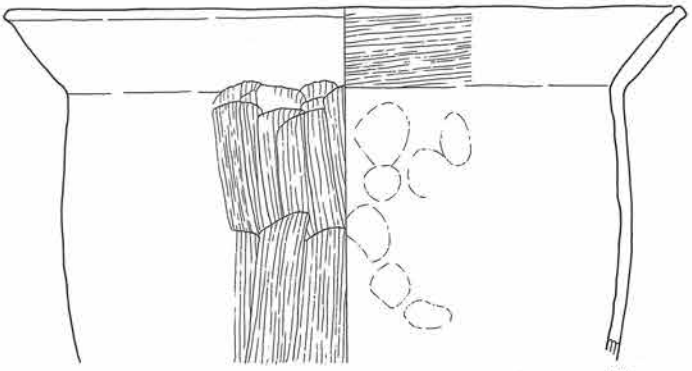
SX126


60

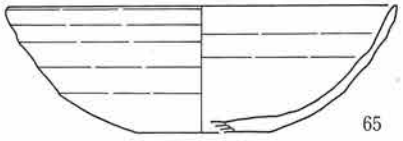

61

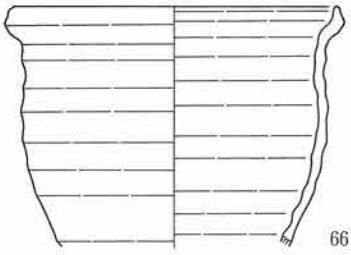

63

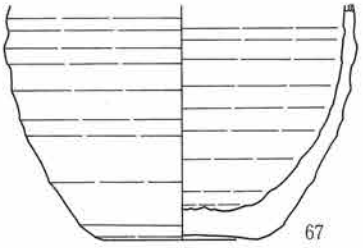

62


64

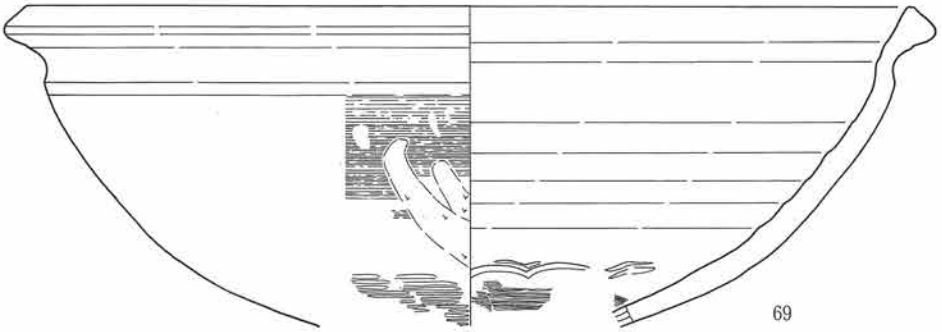
SK4


65


66

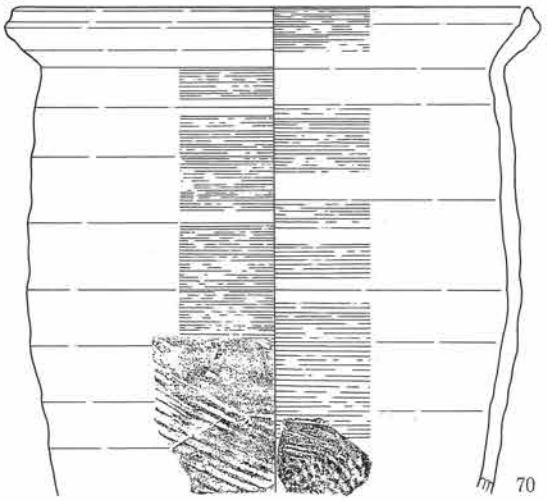

67

68

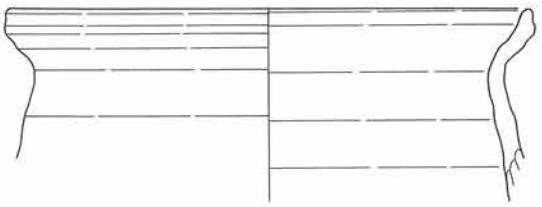

69

0 (1:3) 15cm

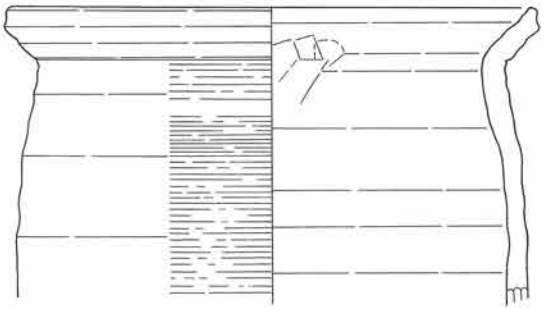
SK123



70

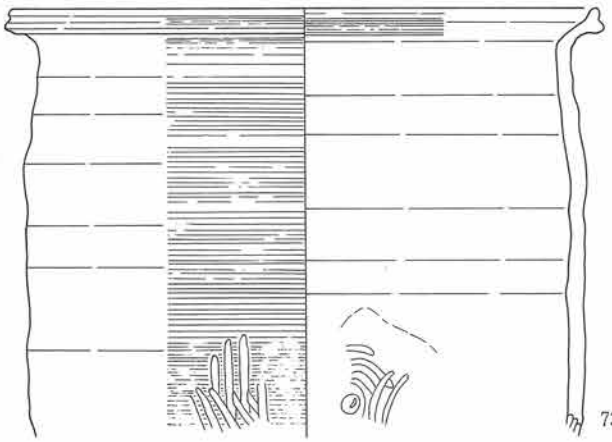


71



72

SX34

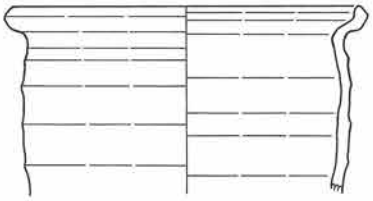


73

SK10

74

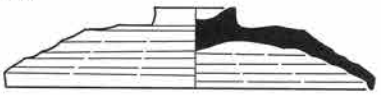
SK30



75

76

P15



77

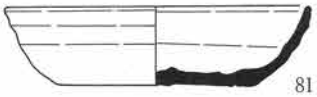
SK112

78

79

80

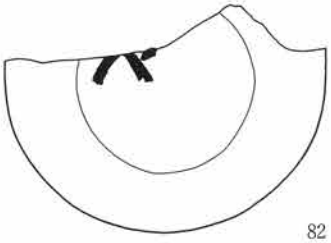
SK117



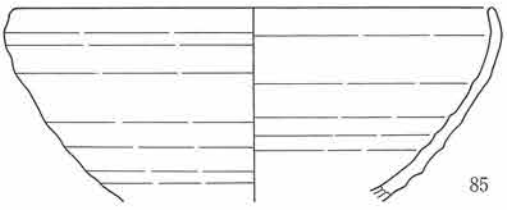
81

83

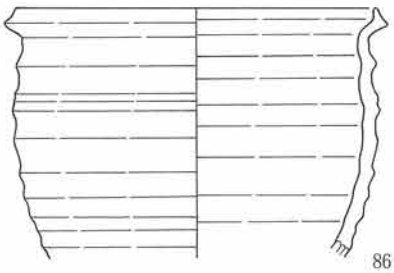
84



82

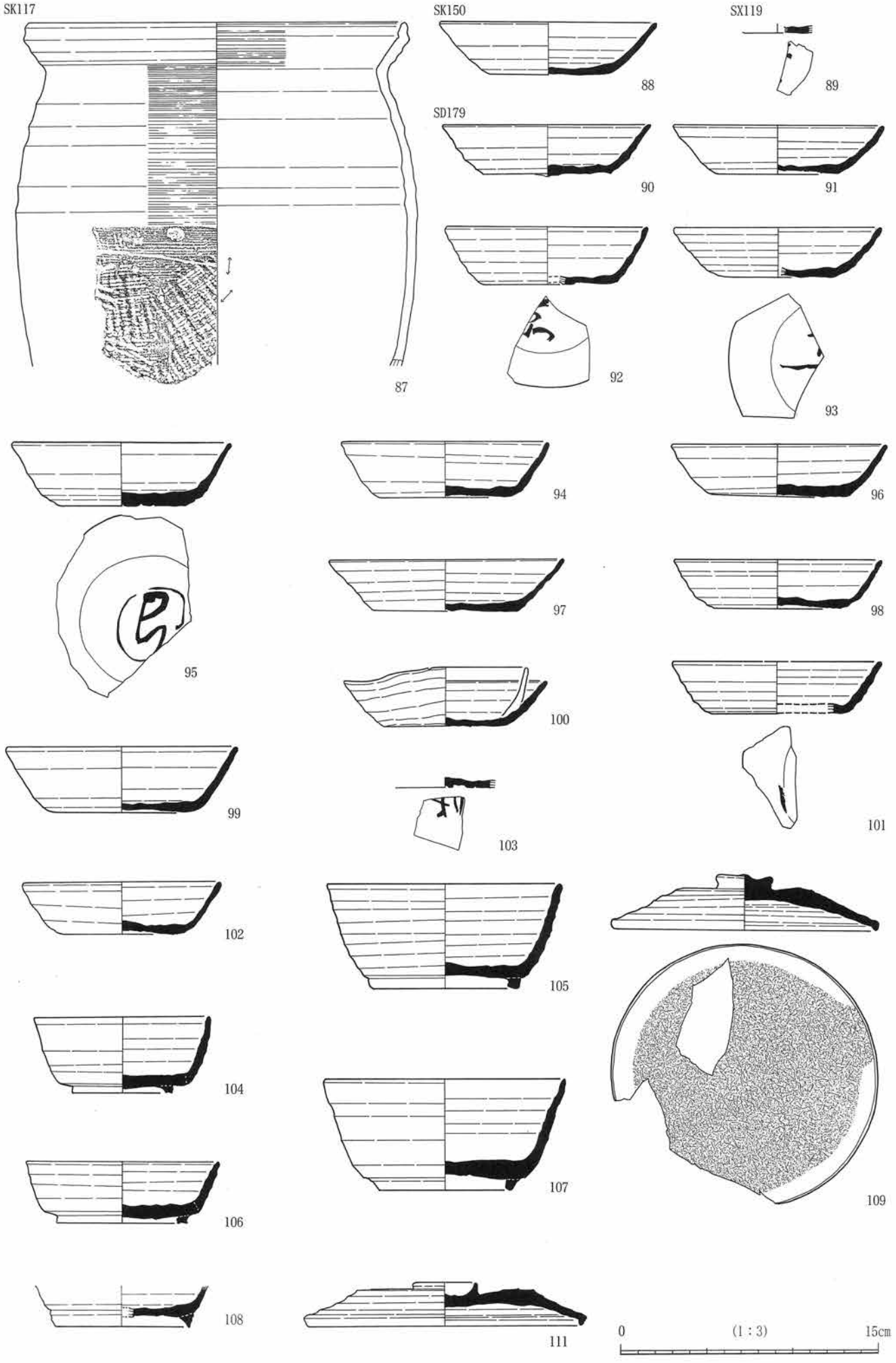


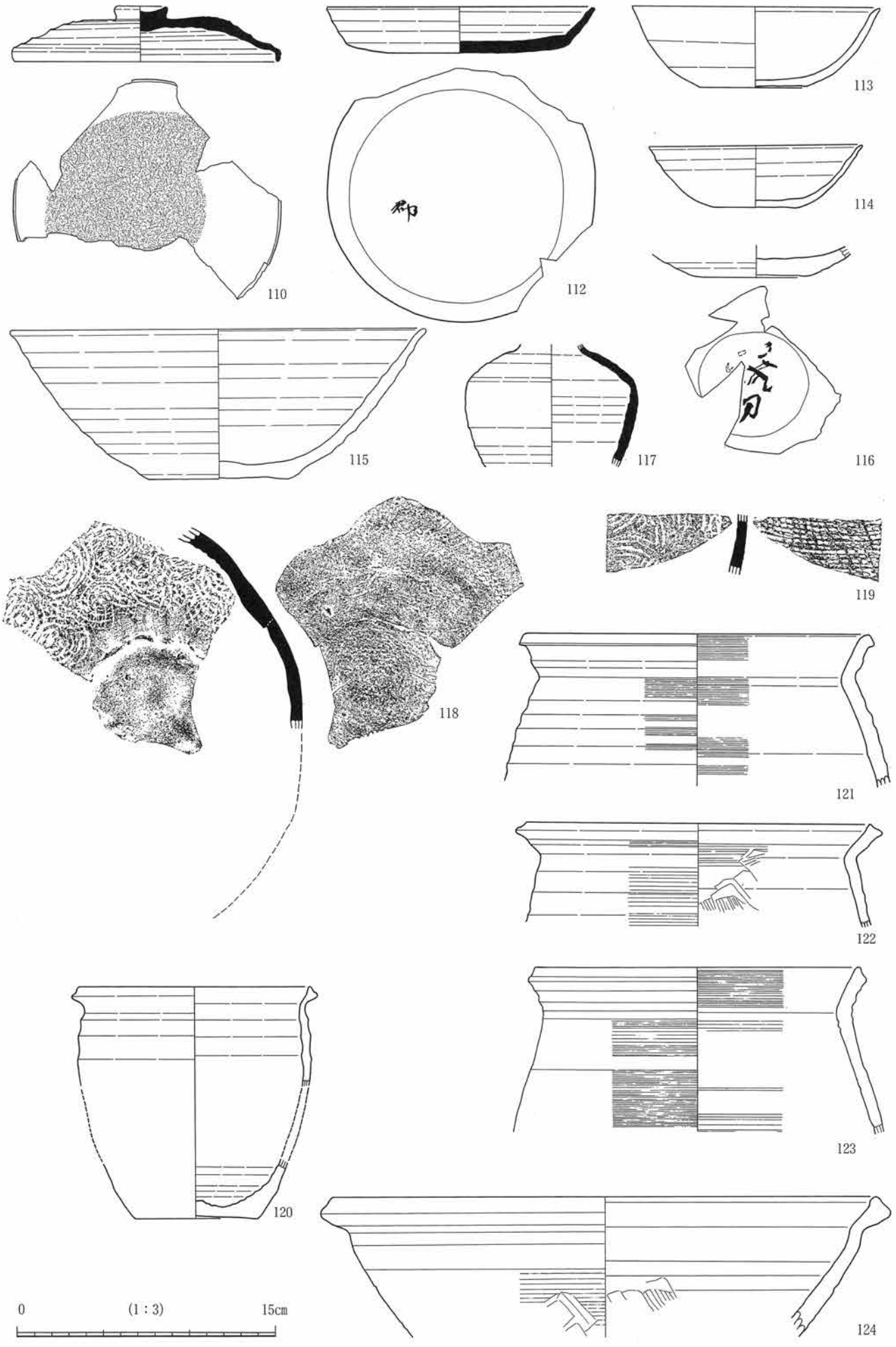
85



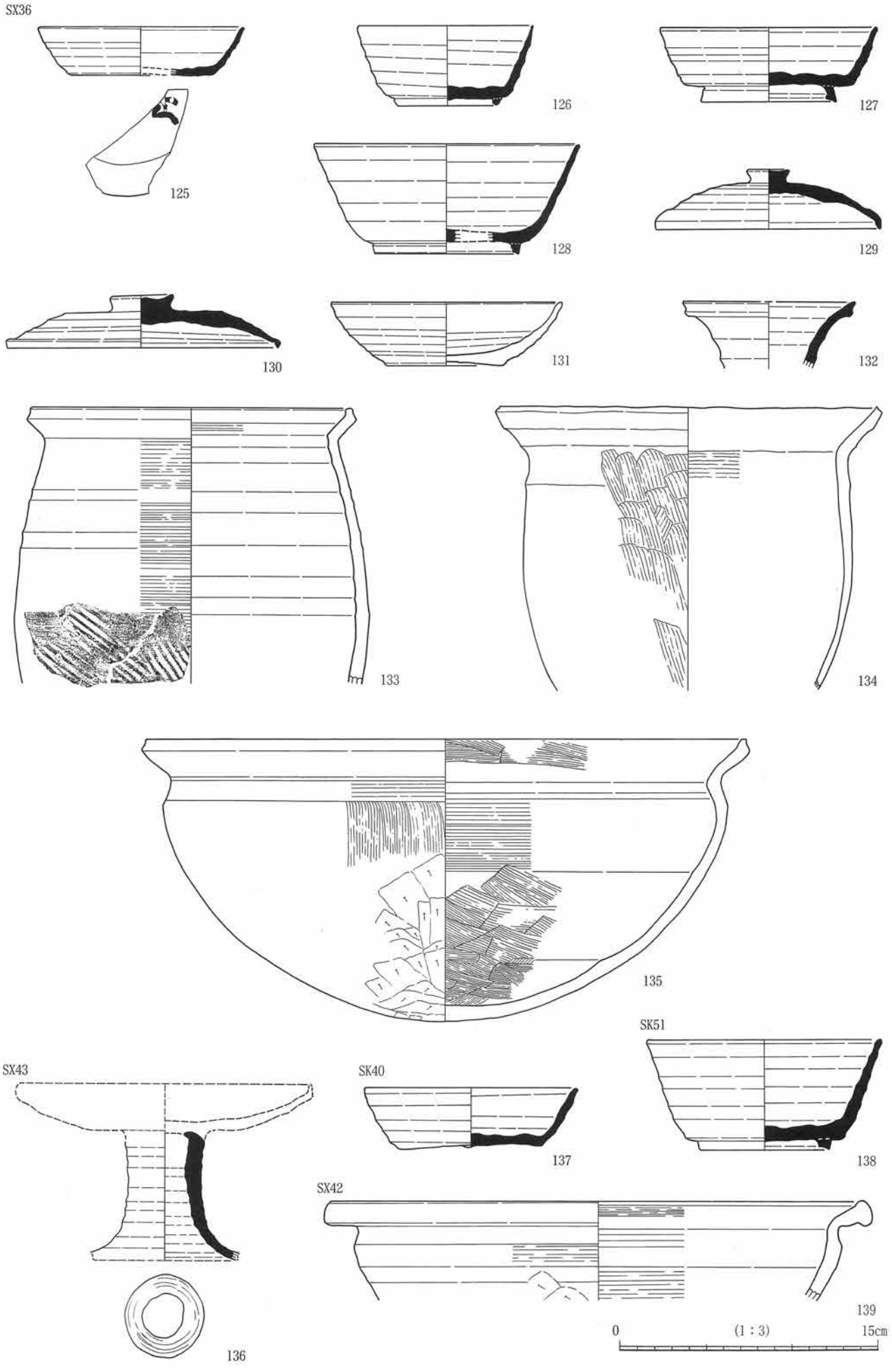
86

0　(1：3)　15cm

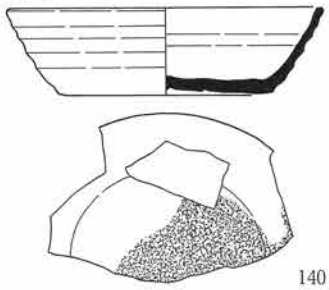

SK117
87
SK150
88
SX119
89
SD179
90
91
92
93
94
95
96
97
98
100
99
103
101
102
105
104
107
109
106
108
111
0
(1:3)
15cm


110
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
0
(1：3)
15cm

X層土器(1)

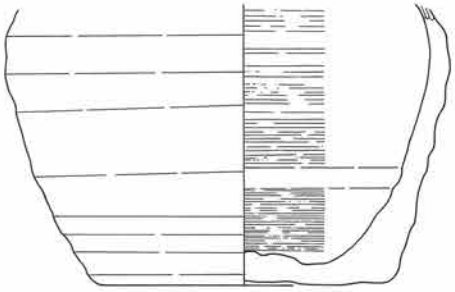

SX36
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
SK51
SX43
SK40
137
138
SX42
136
139
0
(1：3)
15cm

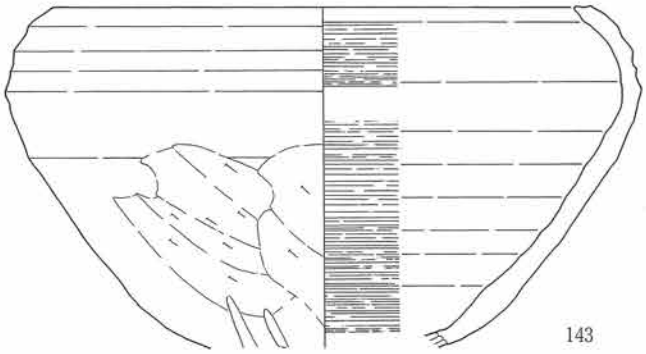
SK125



140

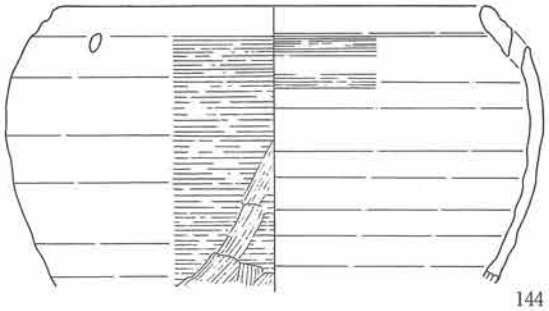
141



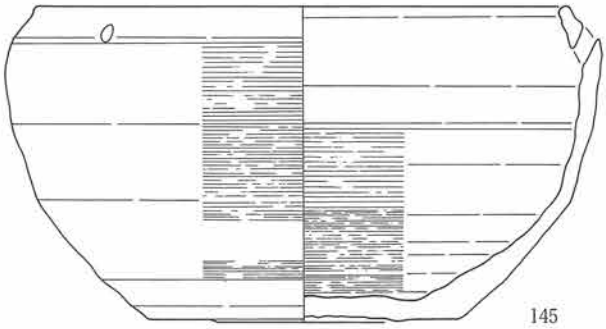


143

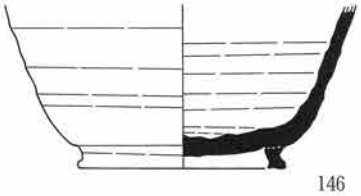
142



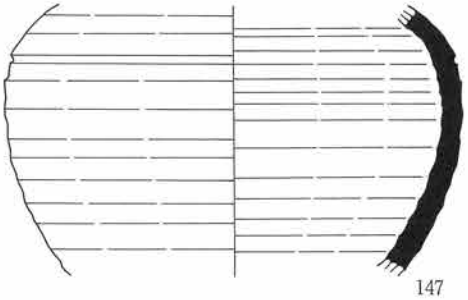
144



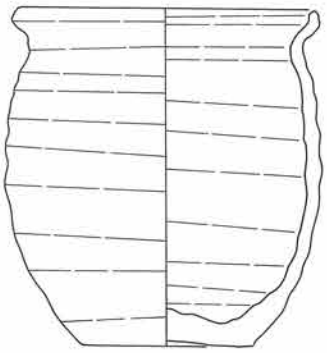
145



146

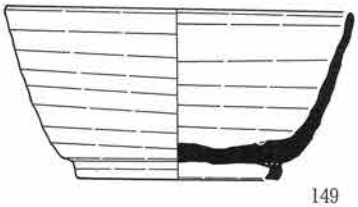


147

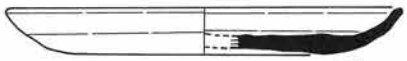


148

SK133



149



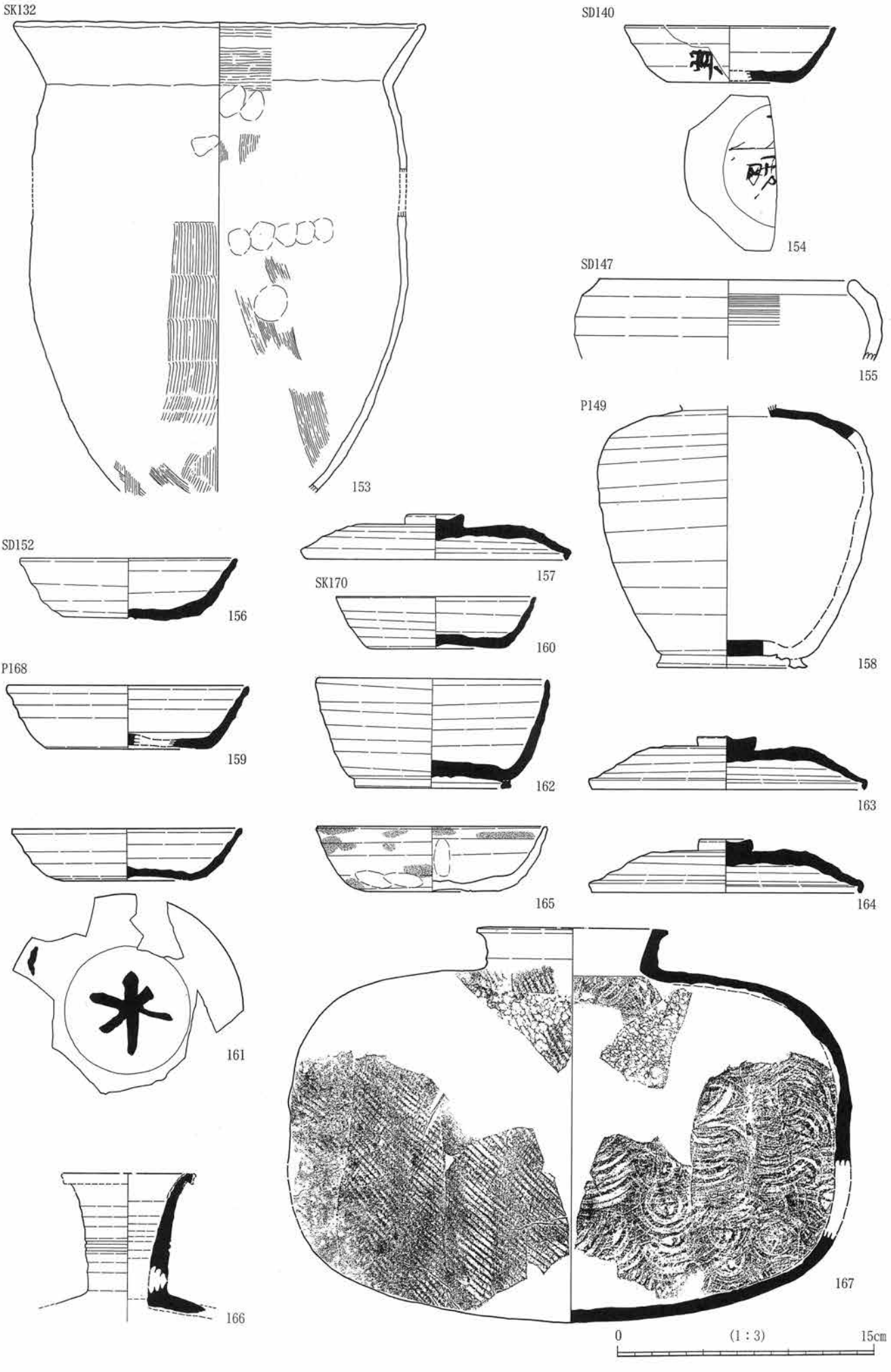
150

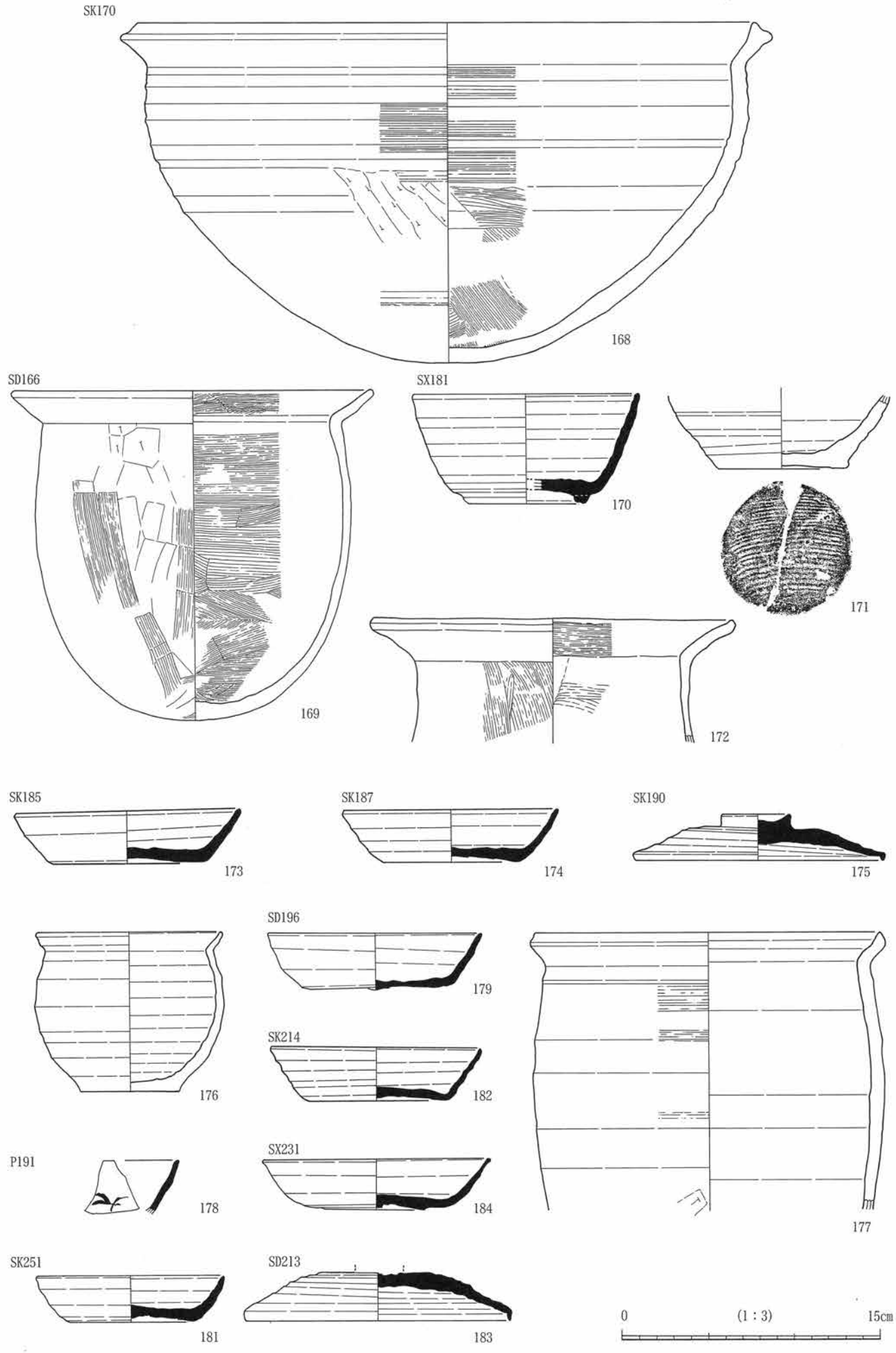
SK135

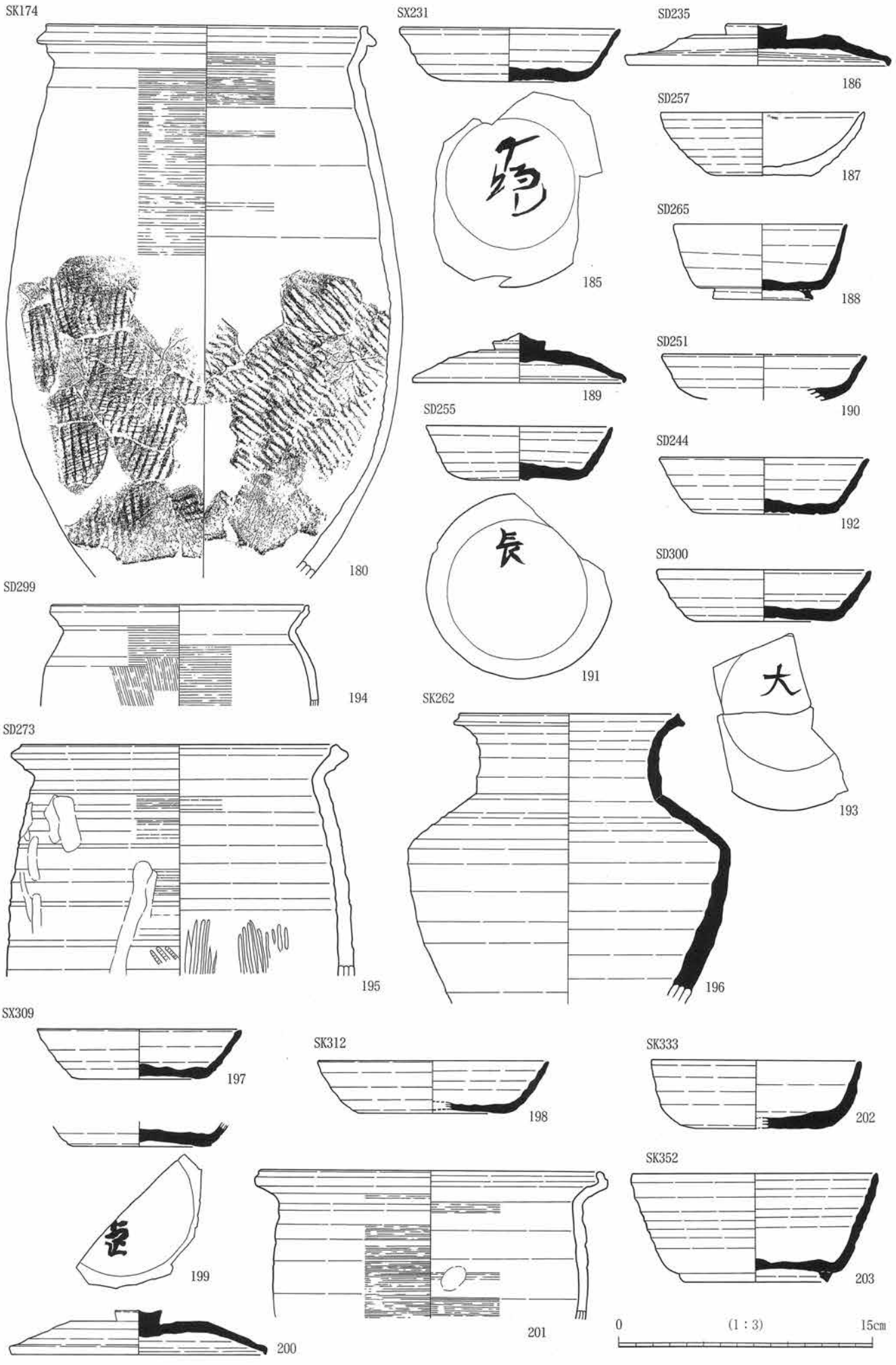
151

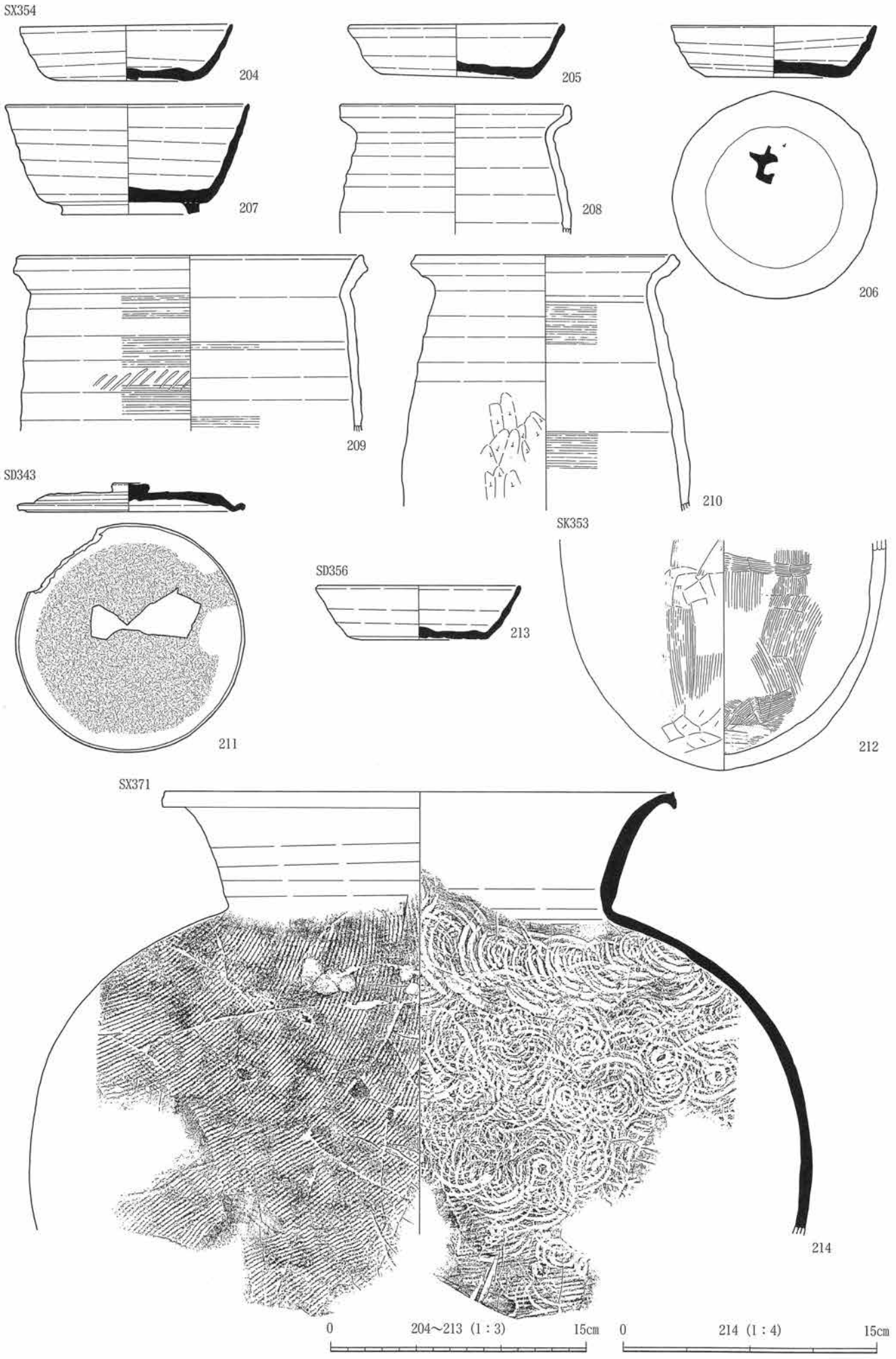
152

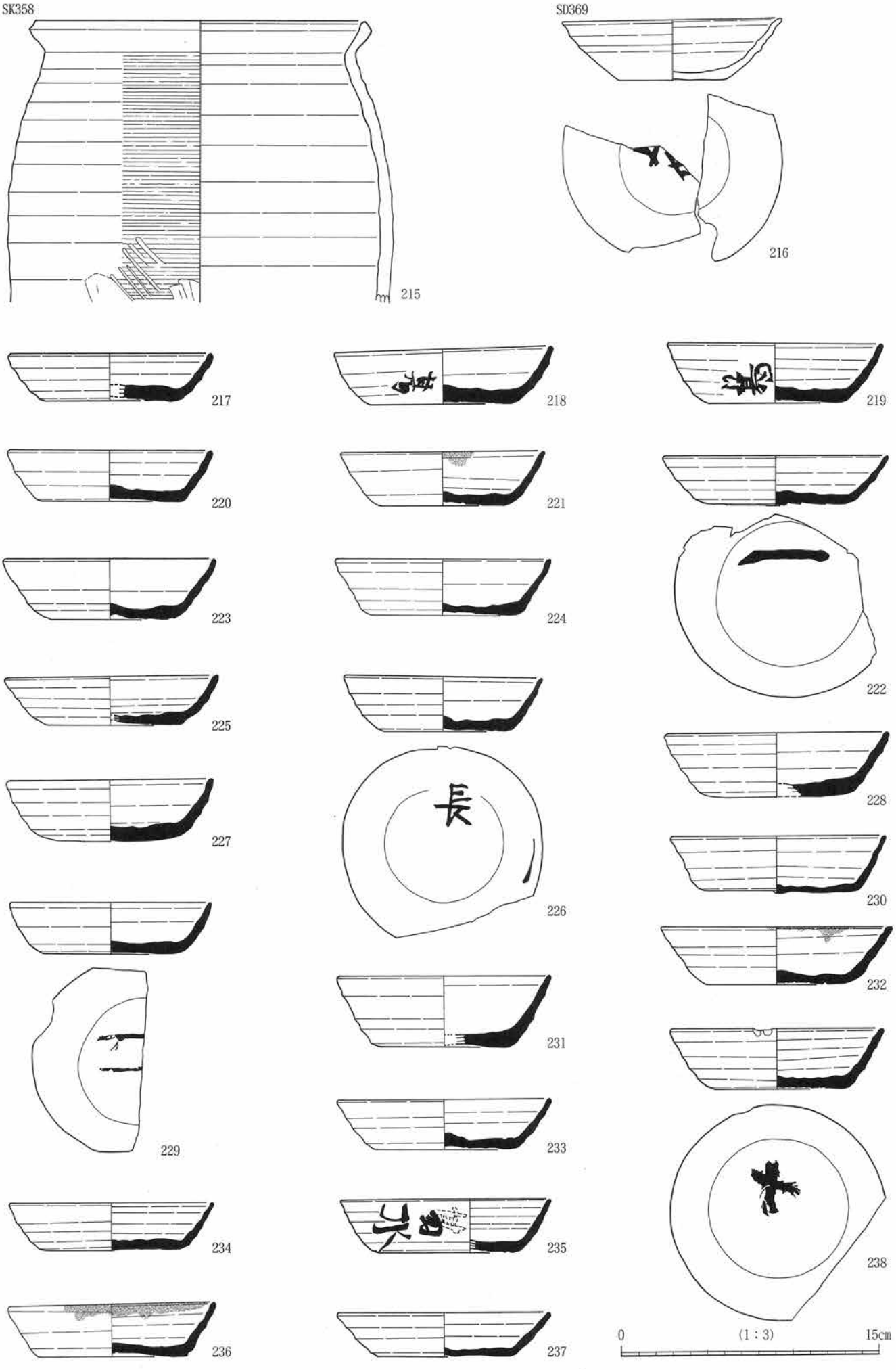
0　(1：3)　15cm

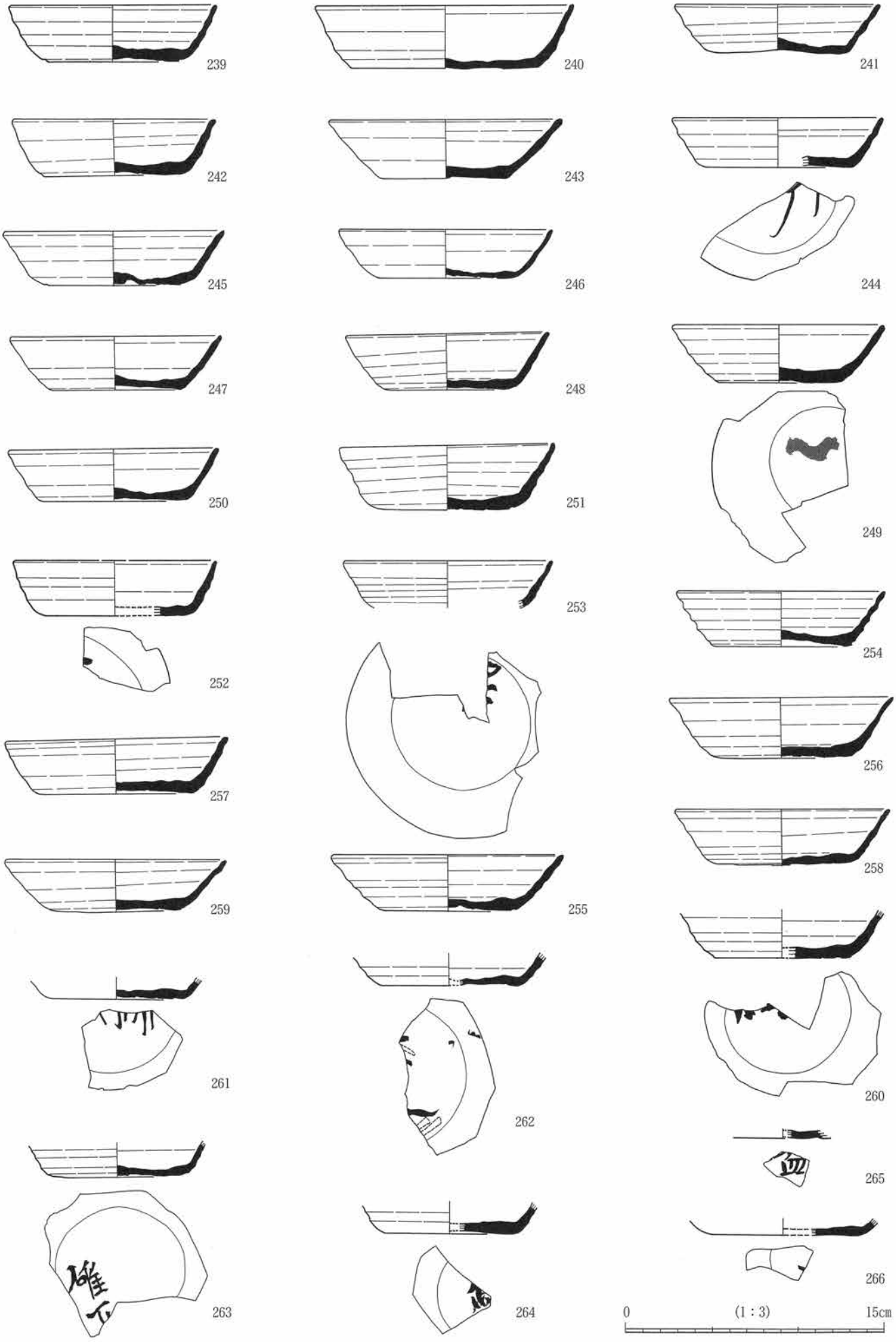

SK132
153
SD140
154
SD147
155
P149
158
SD152
156
157
SK170
160
P168
159
162
163
165
164
161
166
167
0
(1:3)
15cm

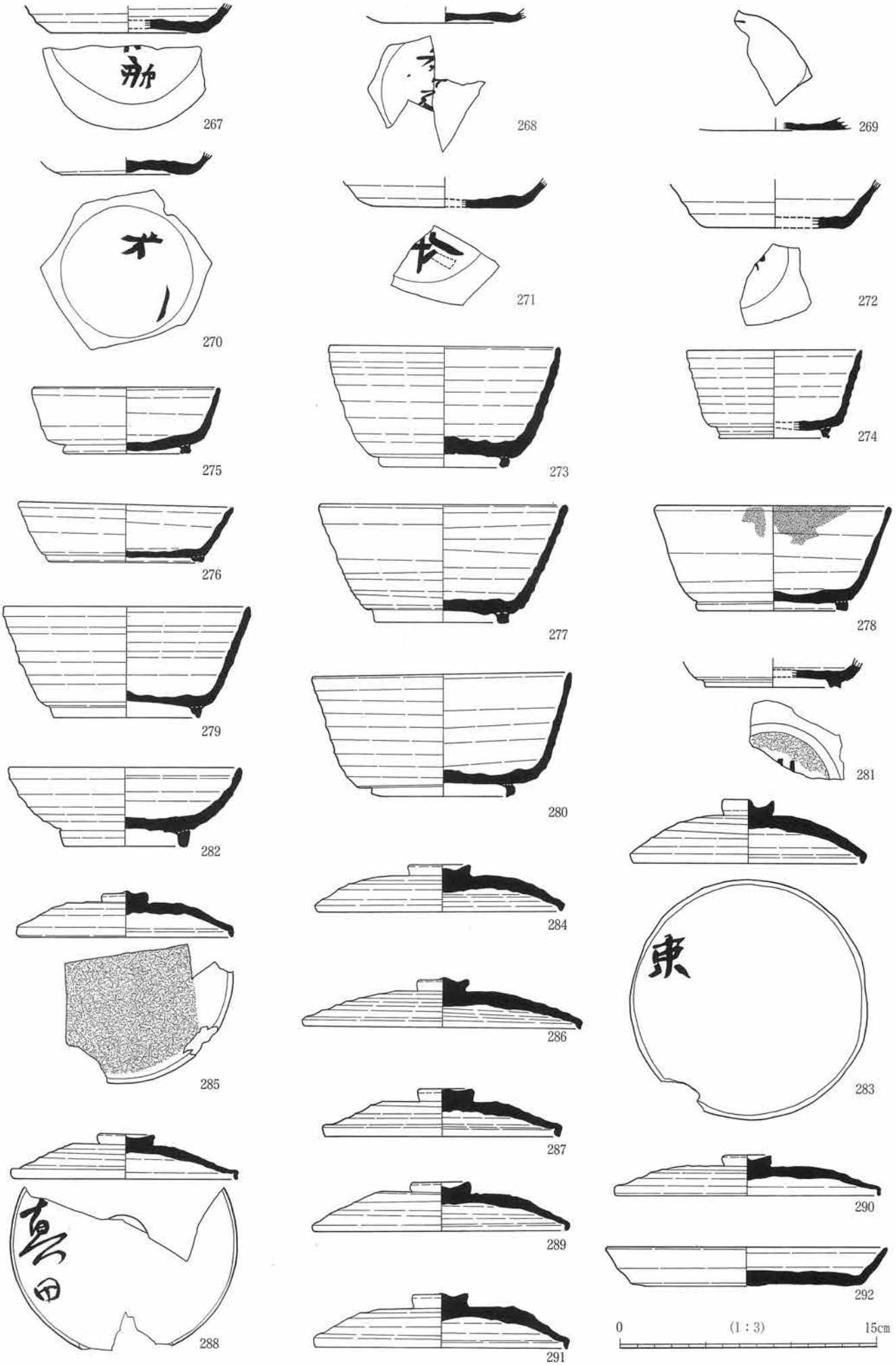

SK170
168
SD166
169
SX181
170
171
172
SK185
173
SK187
174
SK190
175
176
SD196
179
SK214
182
177
P191
178
SX231
184
SK251
181
SD213
183
0
(1：3)
15cm

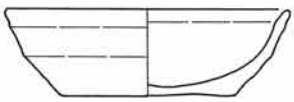

SK174
SX231
SD235
186
SD257
187
SD265
188
185
SD251
190
189
SD255
SD244
192
SD300
191
SD299
194
193
SK262
SD273
195
196
SX309
197
SK312
198
SK333
202
199
SK352
203
201
200
0
(1:3)
15cm

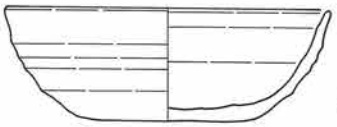

SX354
204
205
207
208
206
209
210
SD343
211
SD356
213
SK353
212
SX371
214
0
204～213 (1：3)
15cm
0
214 (1：4)
15cm

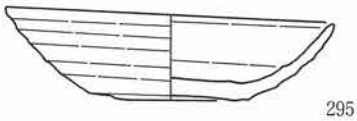

SK358
215
SD369
216
217
218
219
220
221
223
224
222
225
228
227
230
226
232
231
229
233
234
235
238
236
237
0
(1:3)
15cm

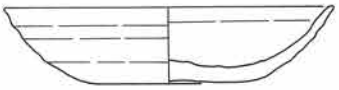

239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
256
257
258
259
255
260
261
262
263
264
265
266
0
(1：3)
15cm

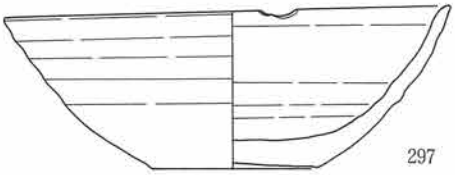

267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
284
285
286
283
287
288
289
290
291
292
0
(1:3)
15cm

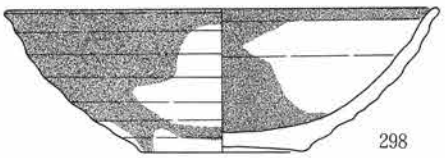

293

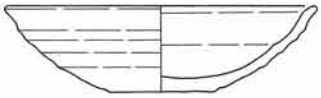

294

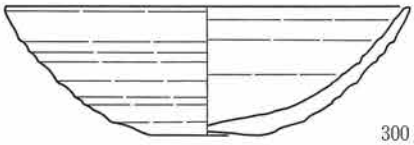

295

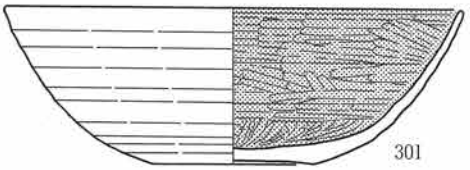

296

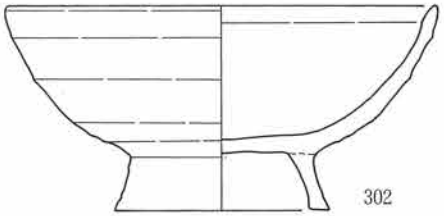

297


298

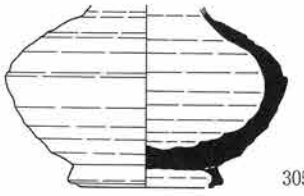

299

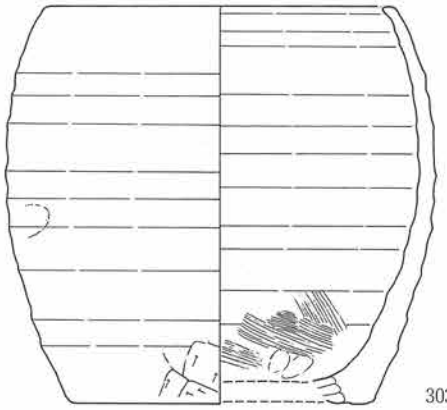

300

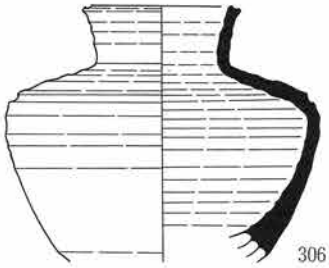

301

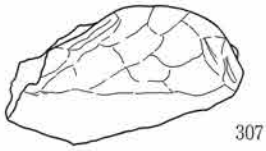

302

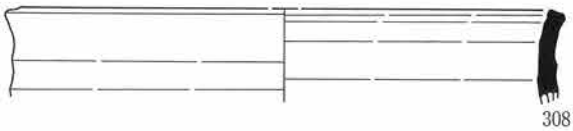
304

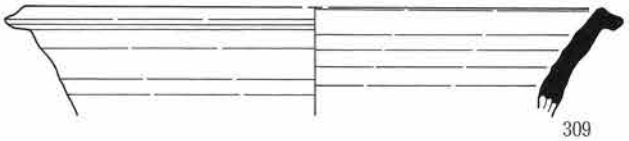

305

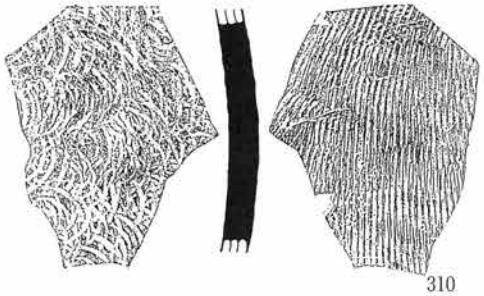

303


306


307

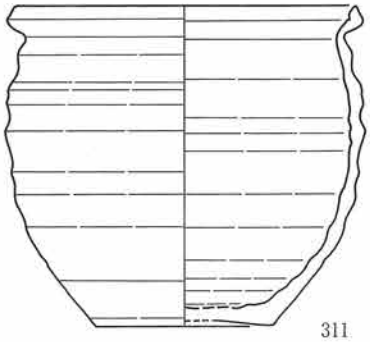

308

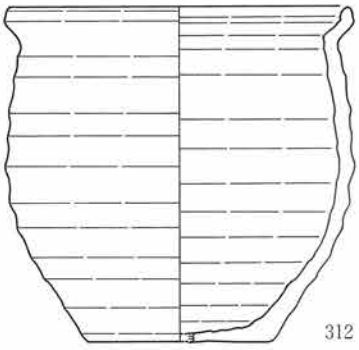

309

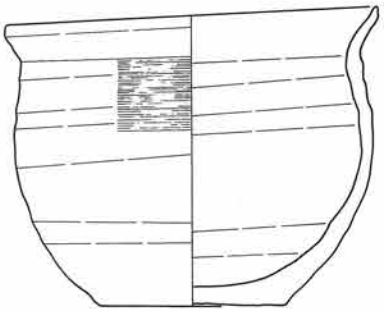

310

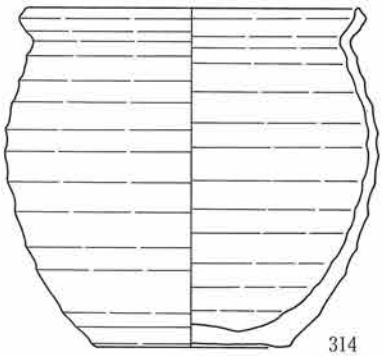
0 310 (1:4) 20cm

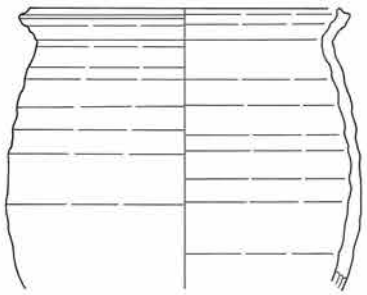
0 293～309 (1:3) 15cm

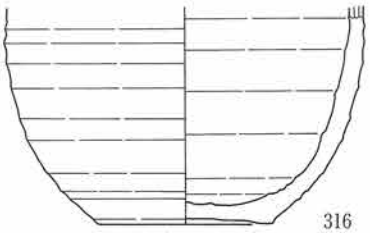

311

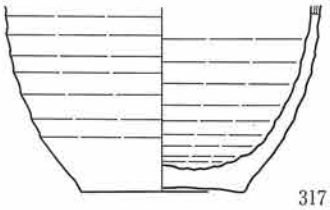

312


313

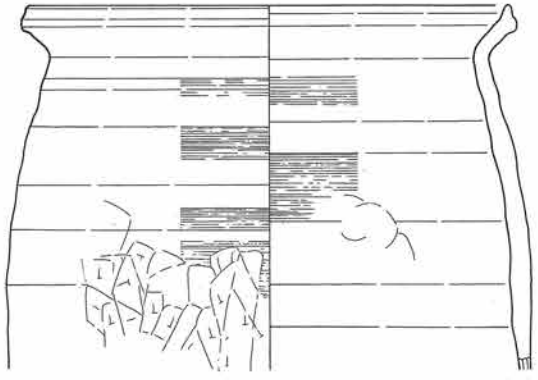

314

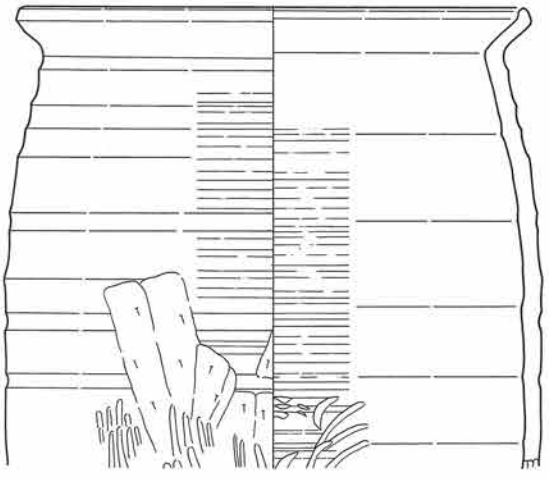

315

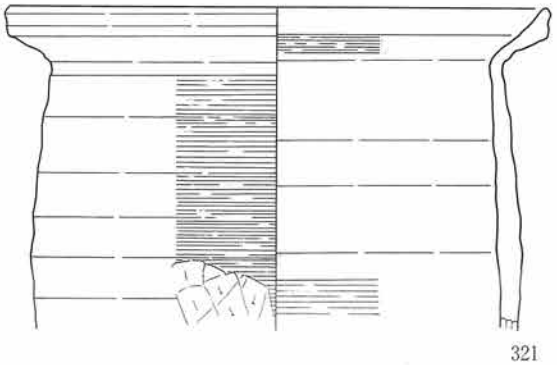

316


317

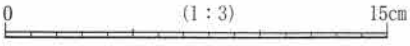
318

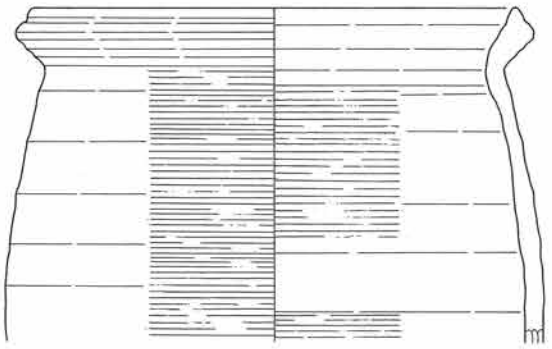

319


320


321

322

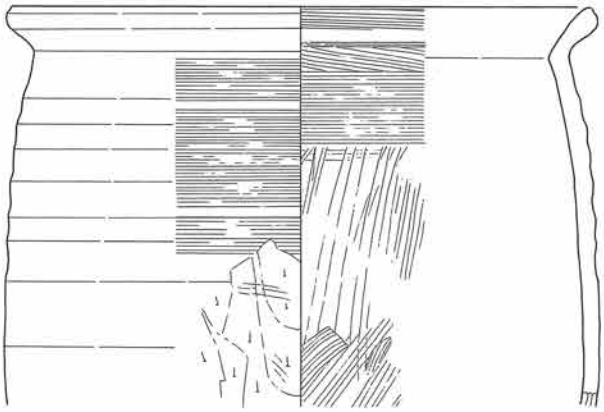


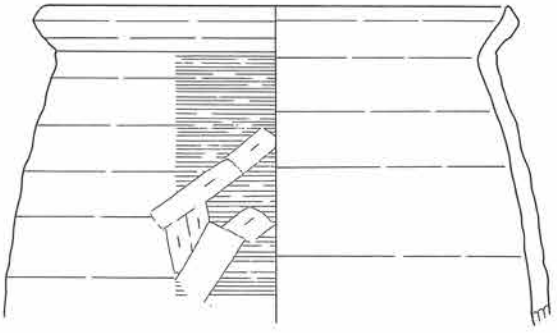

323

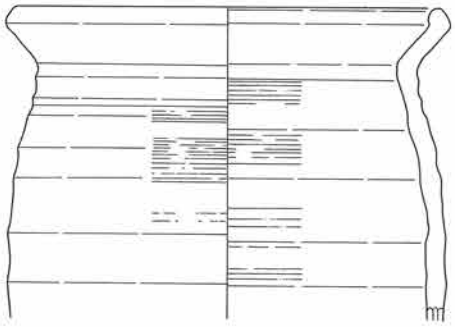
324

325

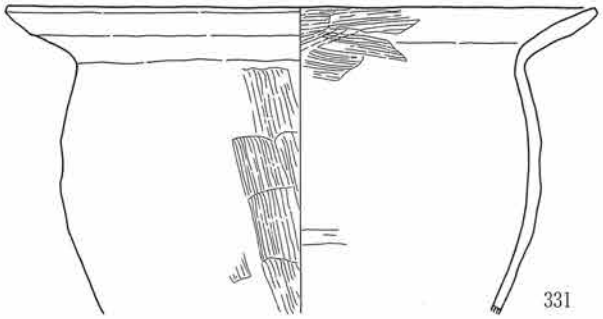
326

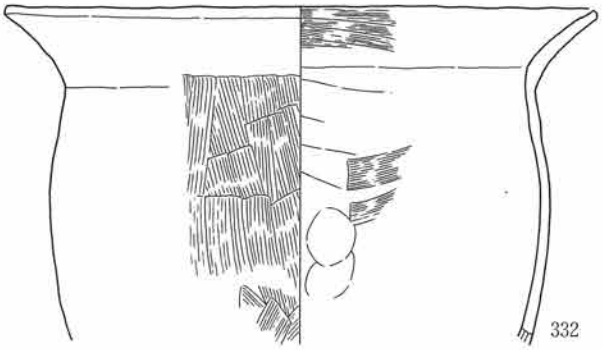

327


328

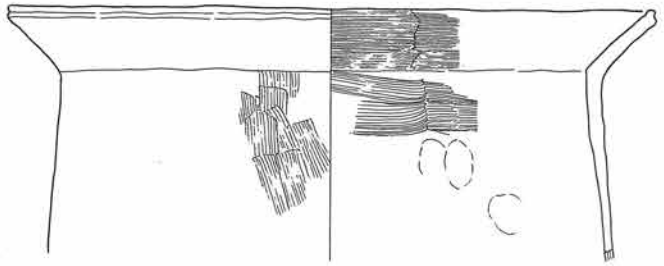

329

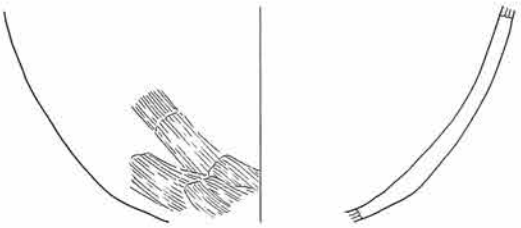
330


331

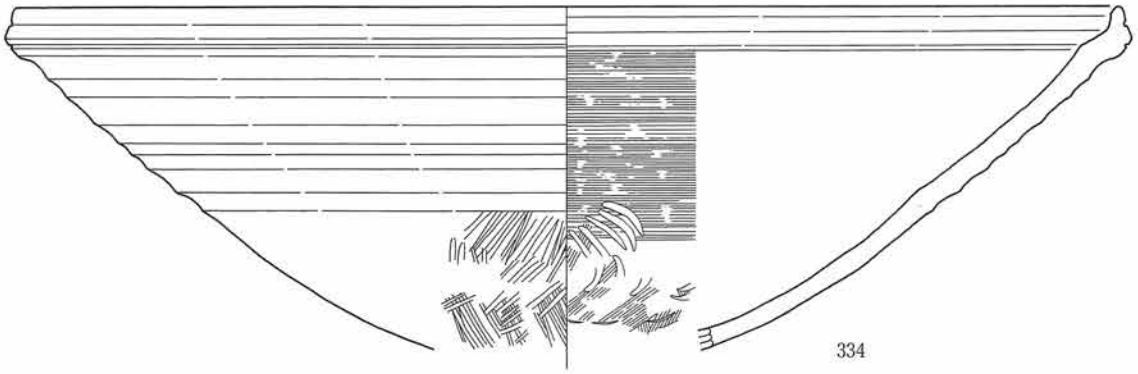

332

0 (1：3) 15cm

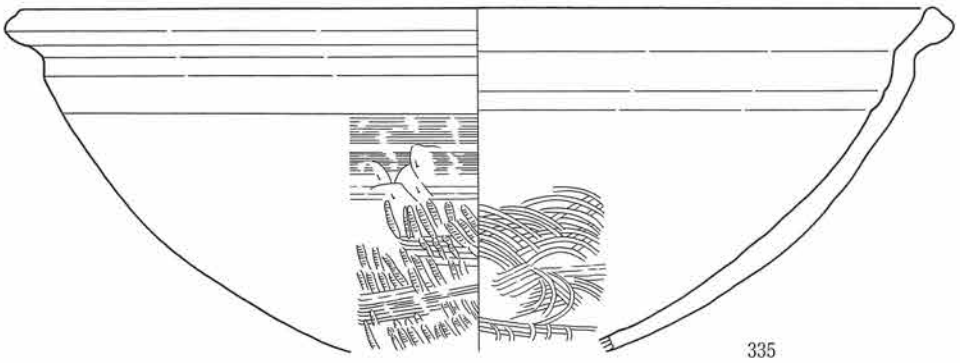




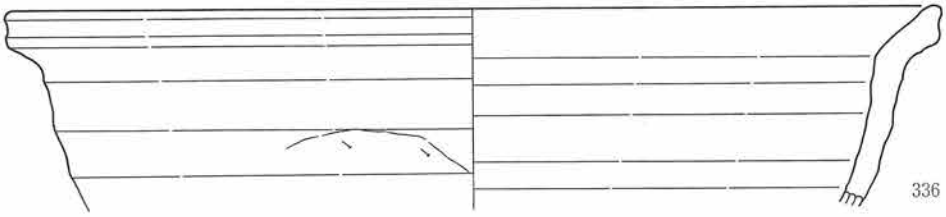
333



334

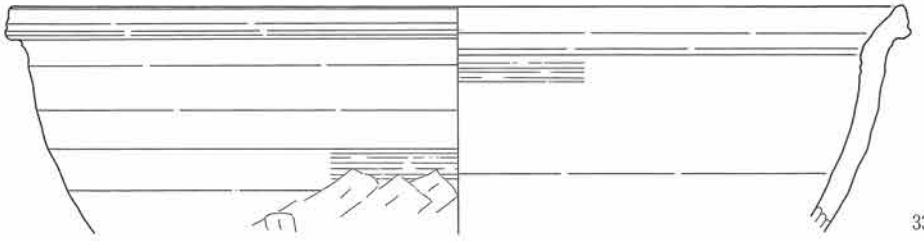


335

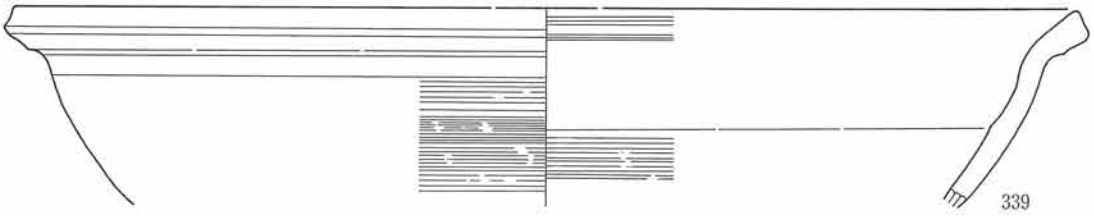


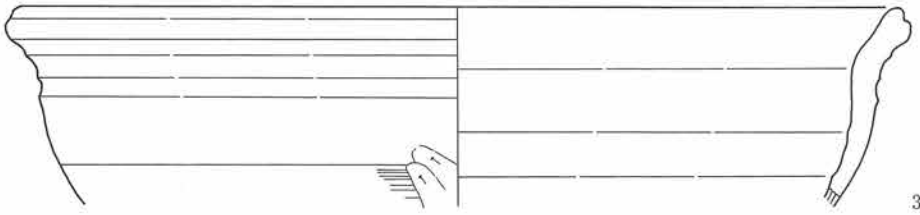
336

0 (1：3) 15cm

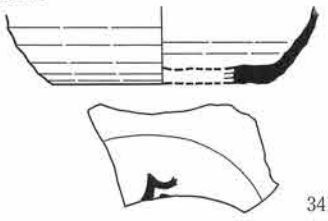

337

338

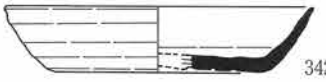

339

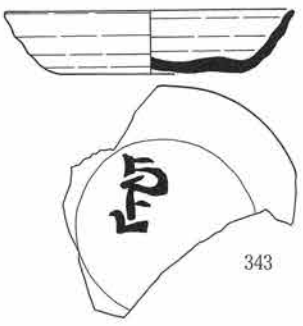

340

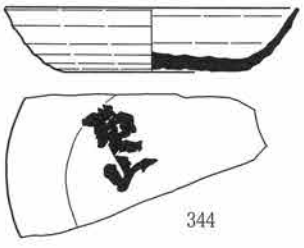
SK421


341

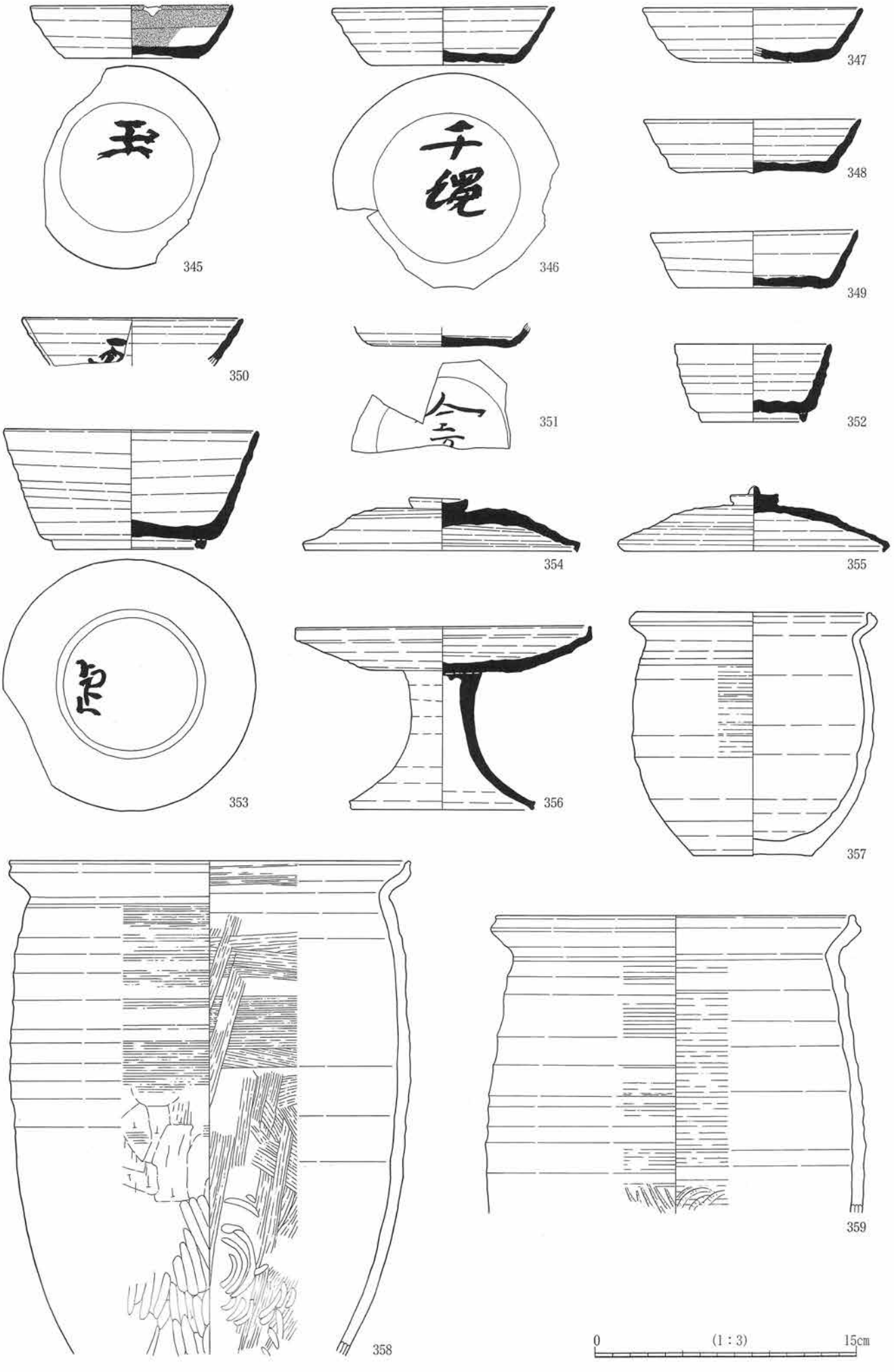
SK403

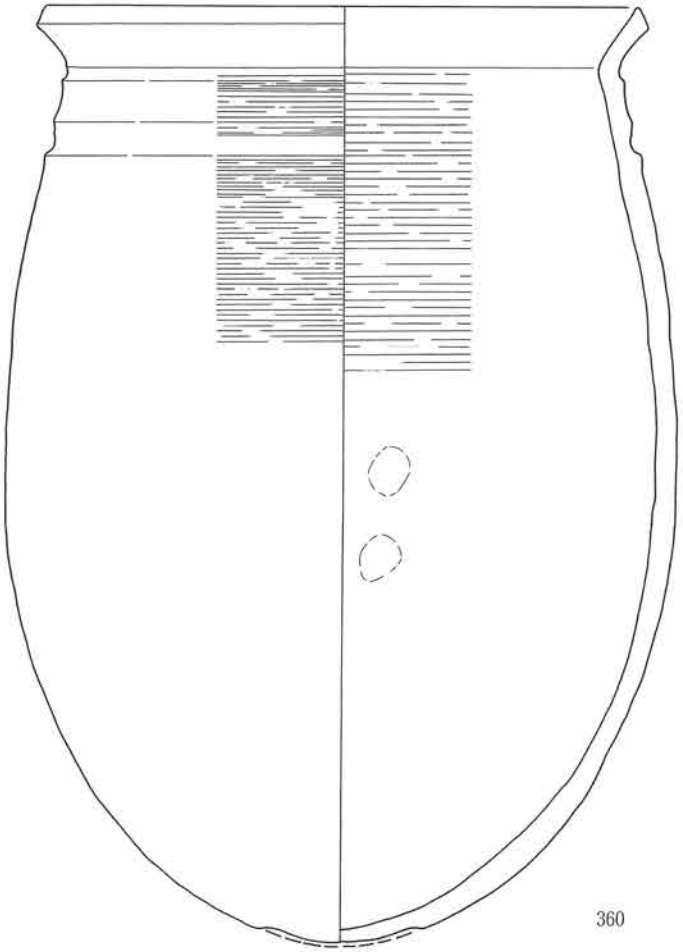

342


343

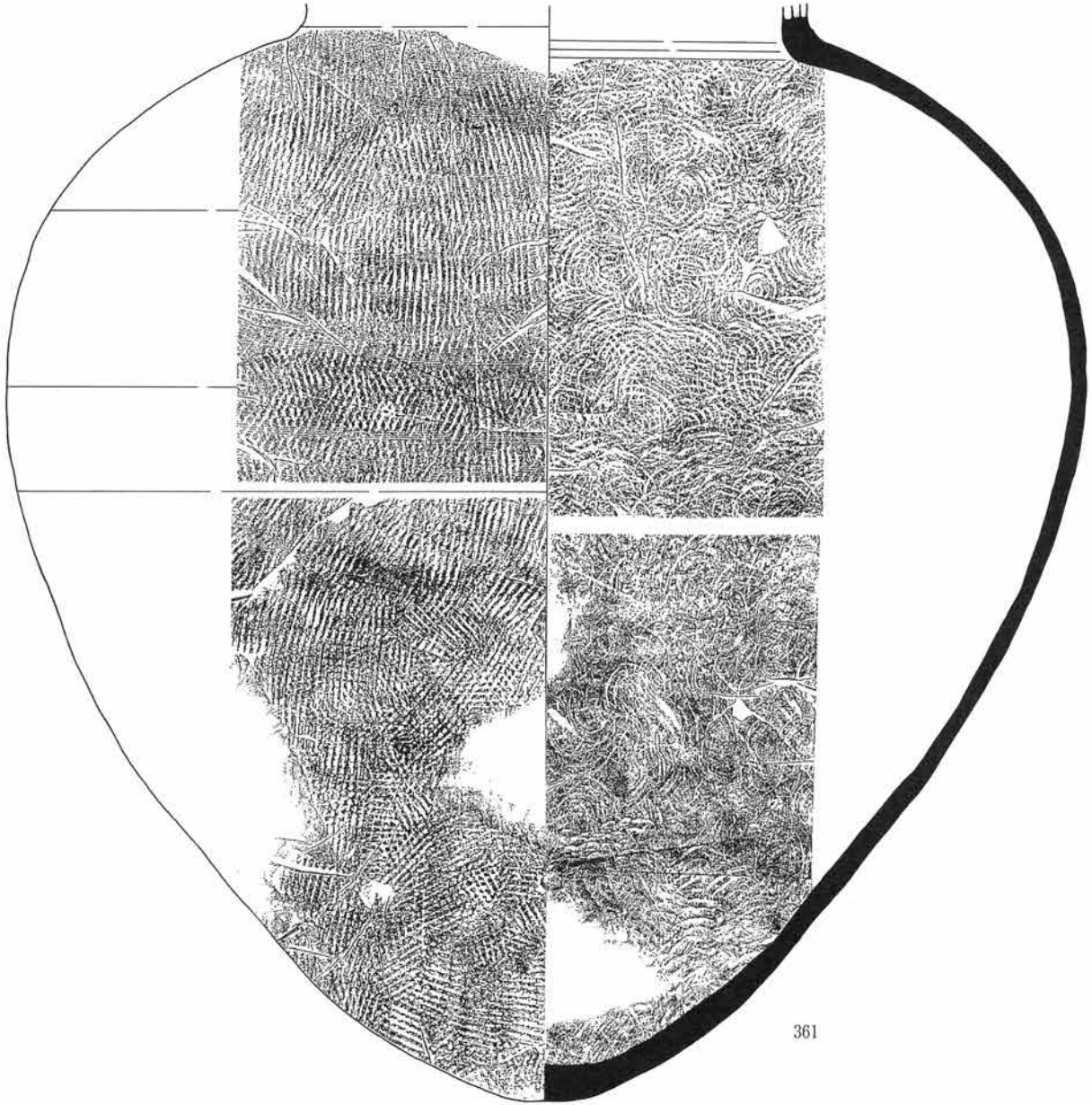

344

0 (1：3) 15cm


345
346
347
348
349
350
351
352
354
355
353
356
357
358
359
0
(1:3)
15cm



360

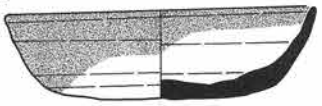


361

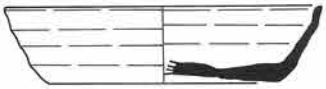
0 360 (1：3) 15cm

0 361 (1：4) 20cm

SK400



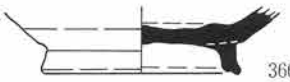
362



363

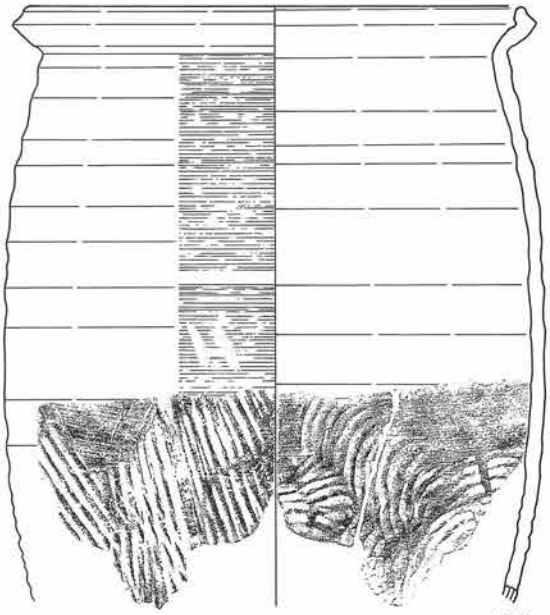
364

365

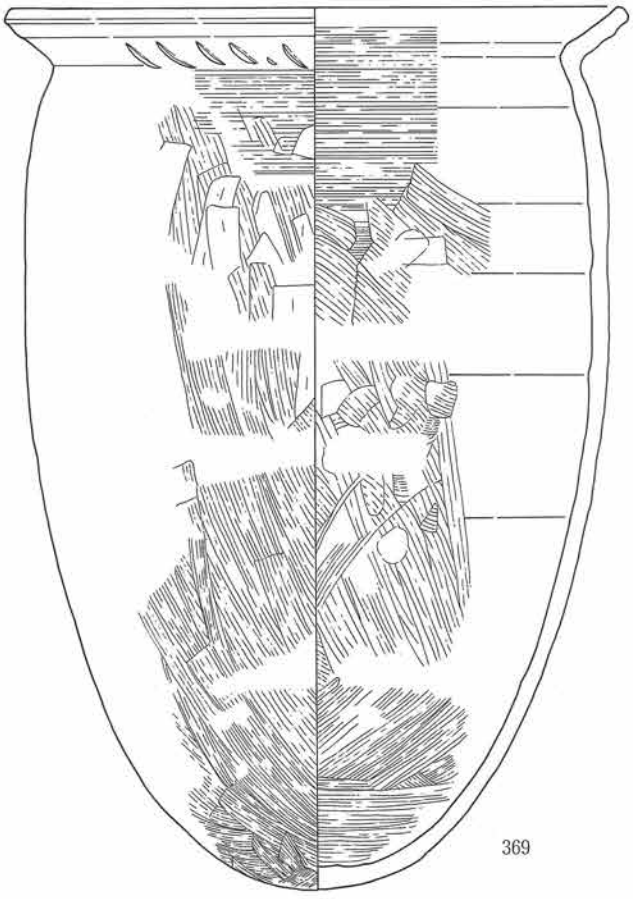


366

367

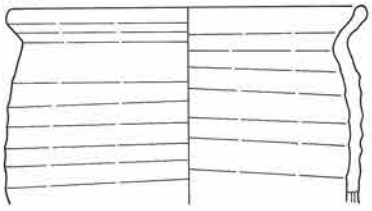


368



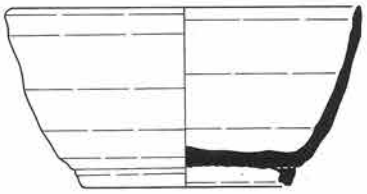
369

SK438



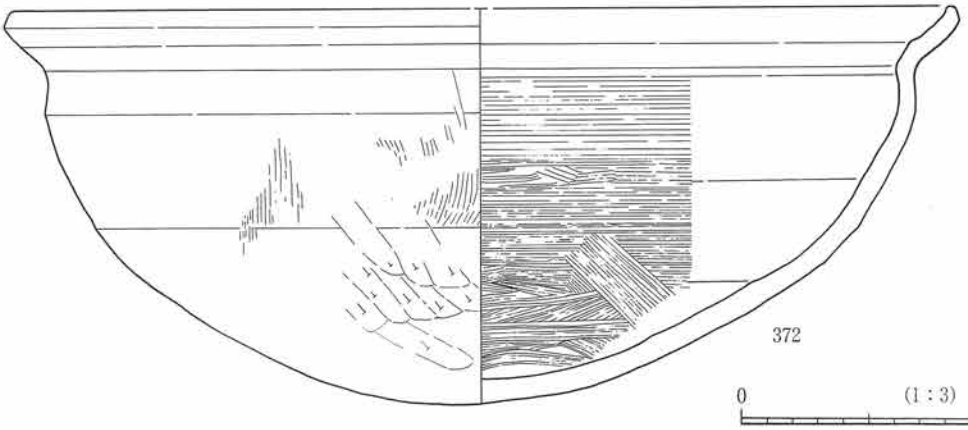
370

SK442



371

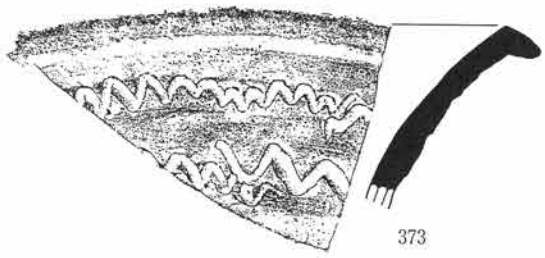
SD77



372

0 (1:3) 15cm

SD77



373

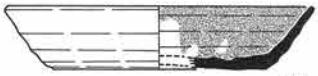
375

SD75

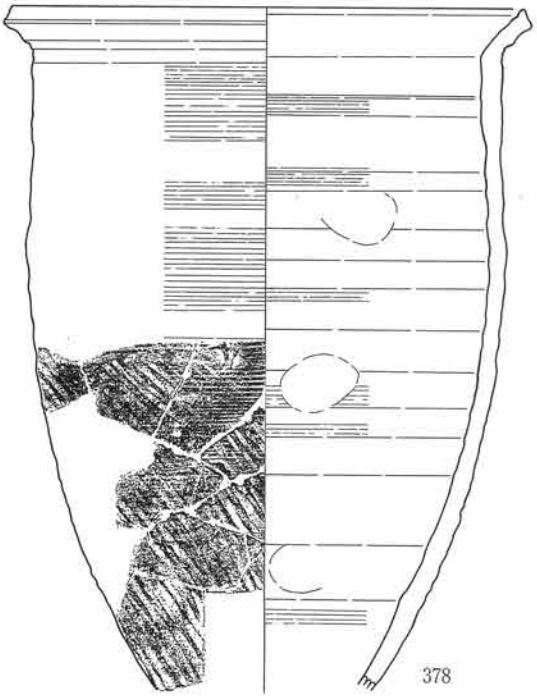
374

376

SD386

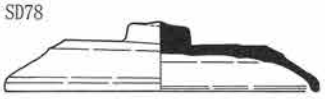


377



378

SD78



379

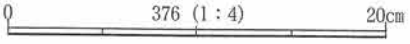
380

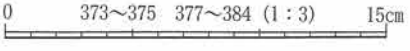
382

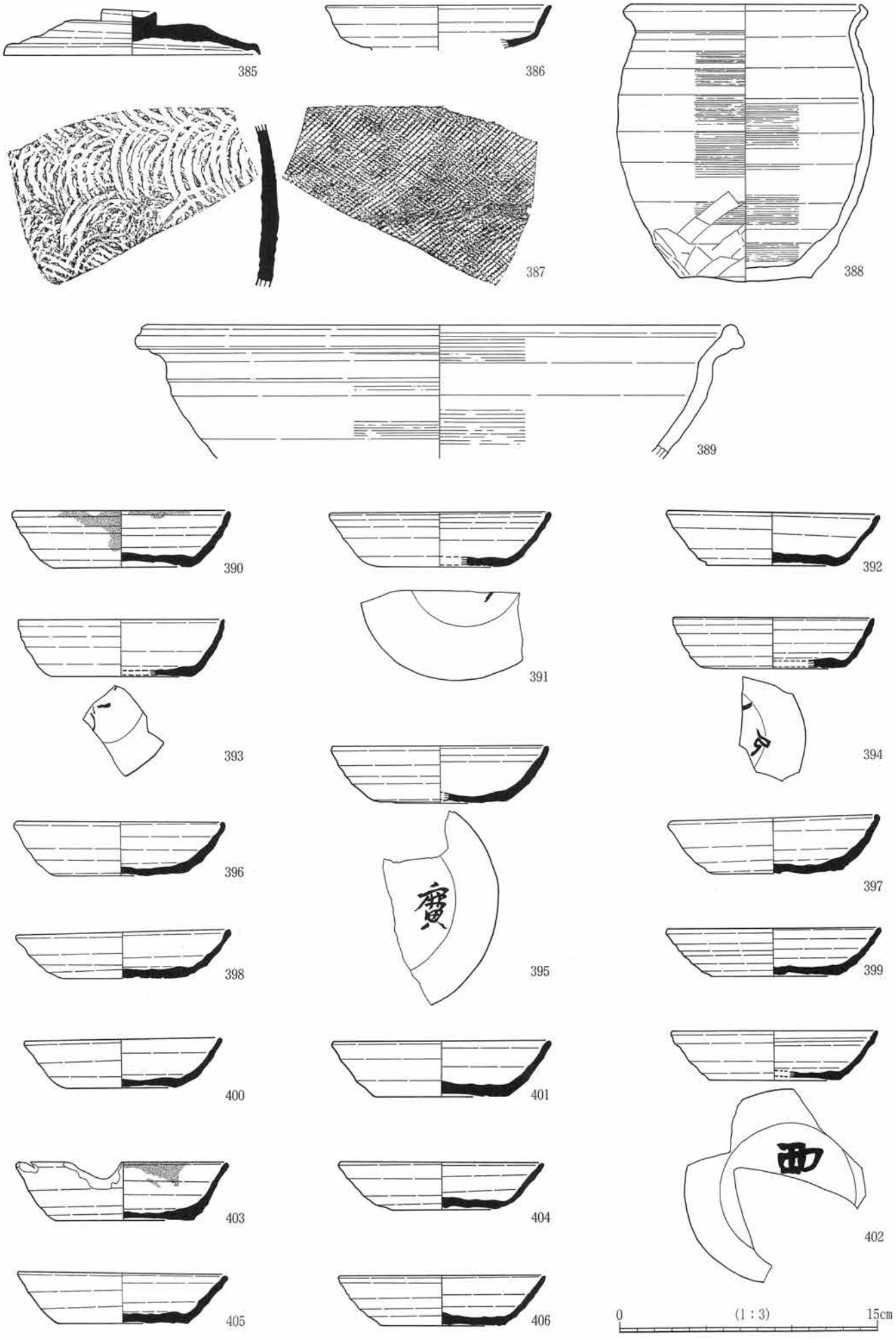
381

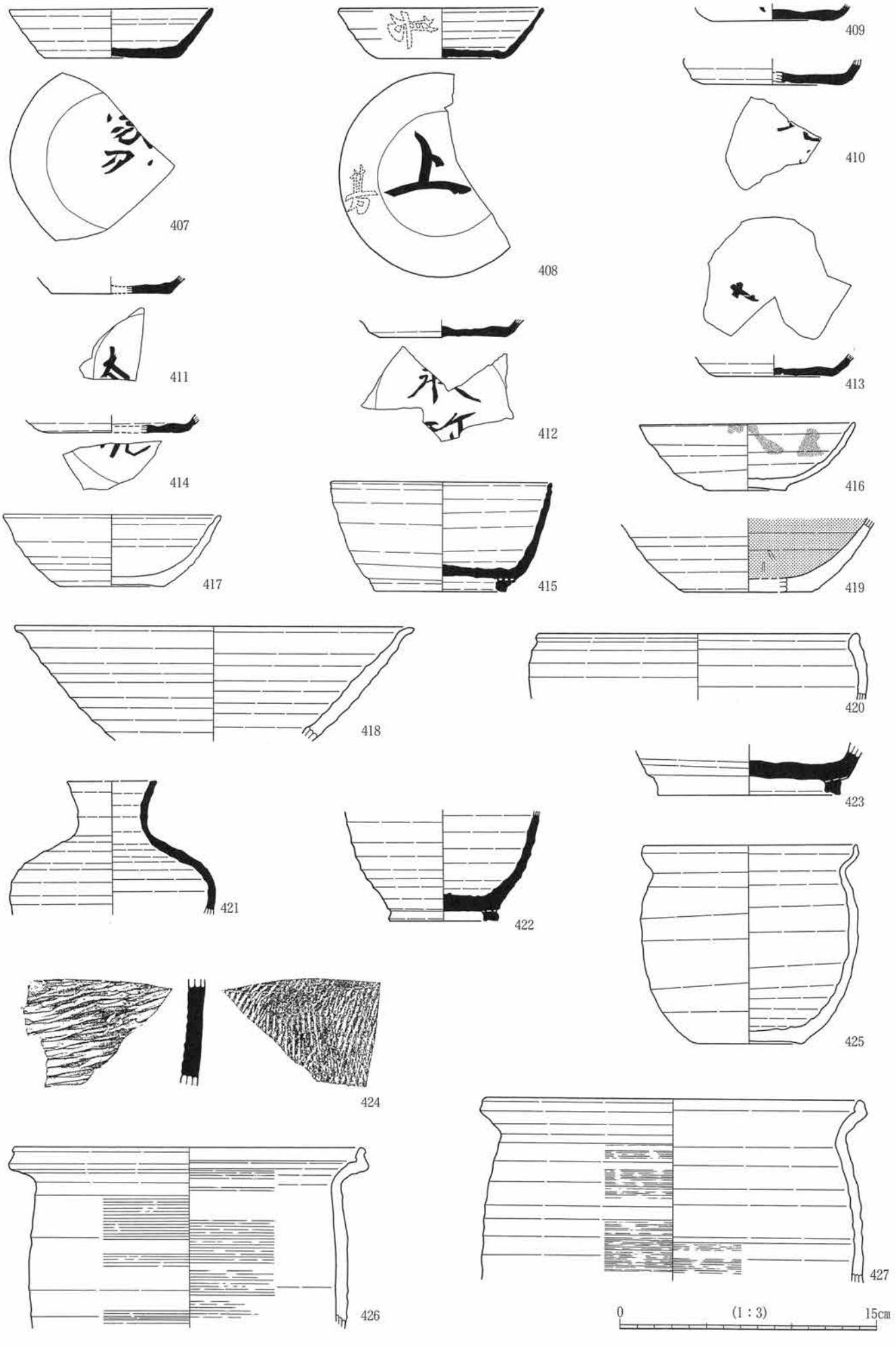
384

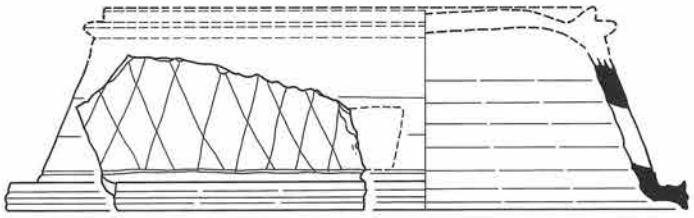
383

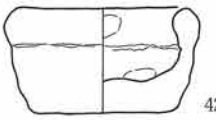


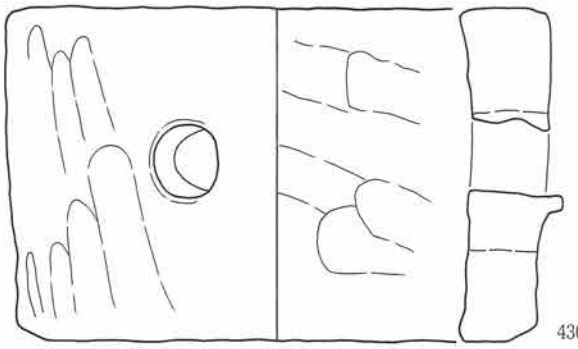


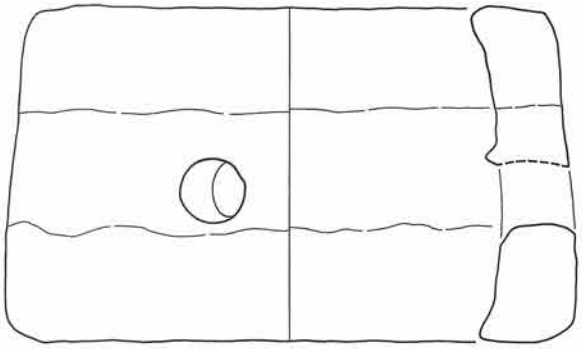

385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
396
397
395
398
399
400
401
402
403
404
405
406
0
(1:3)
15cm

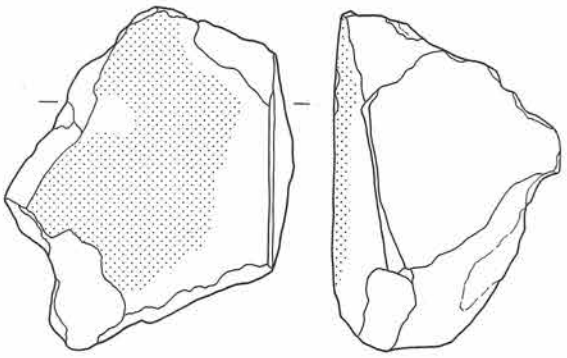

407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
0
(1 : 3)
15cm

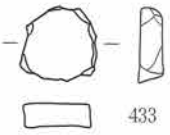

428

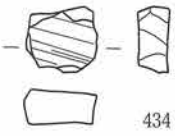

429

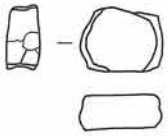

430

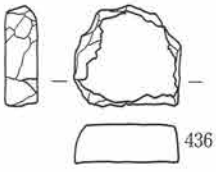

431

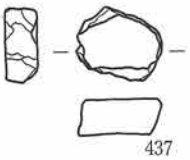

432

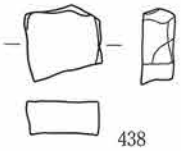

433

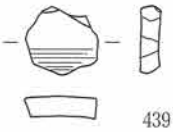

434

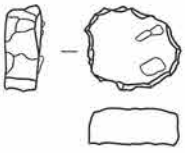

435

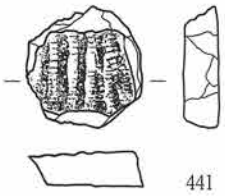

436

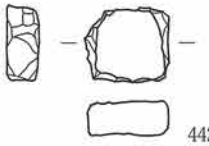

437

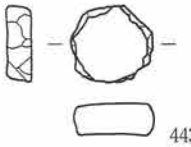

438

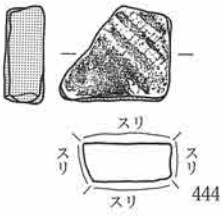

439

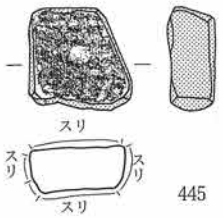

440

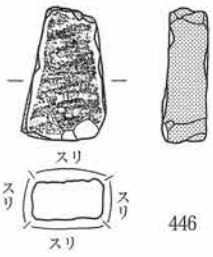

441

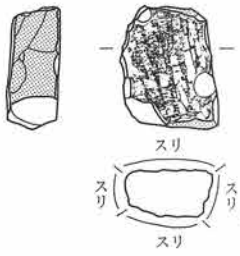

442

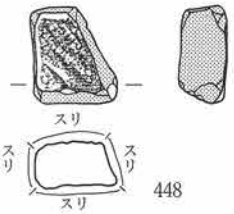

443

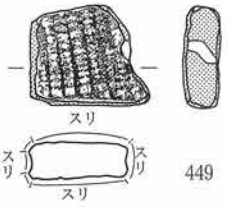

444


445

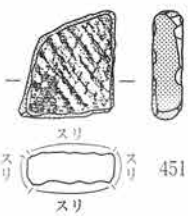

446

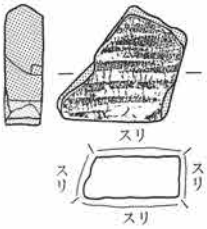

447

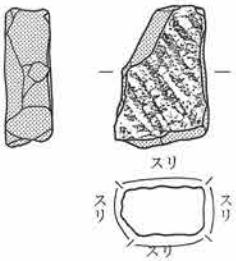

448

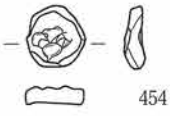

449

450

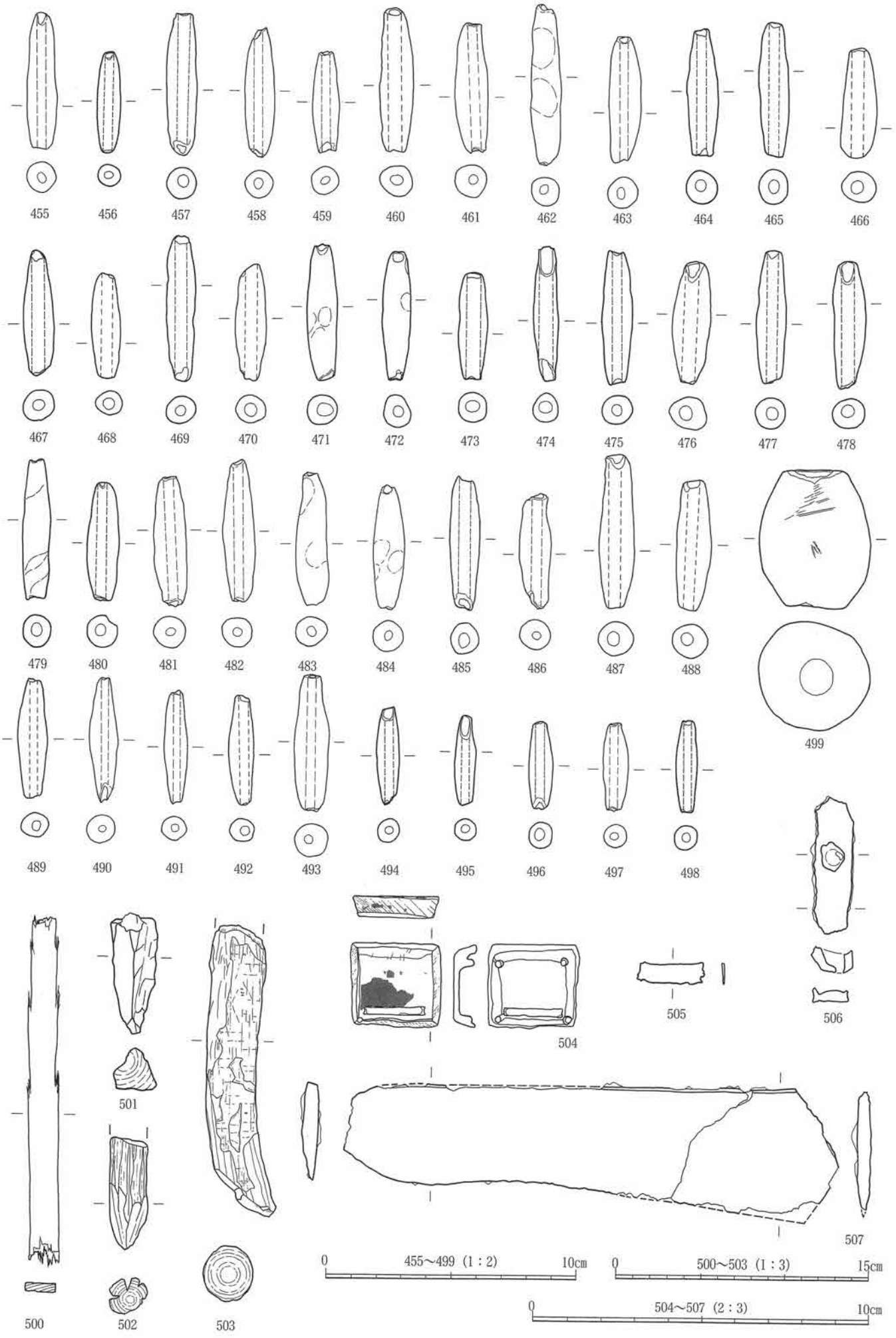

451

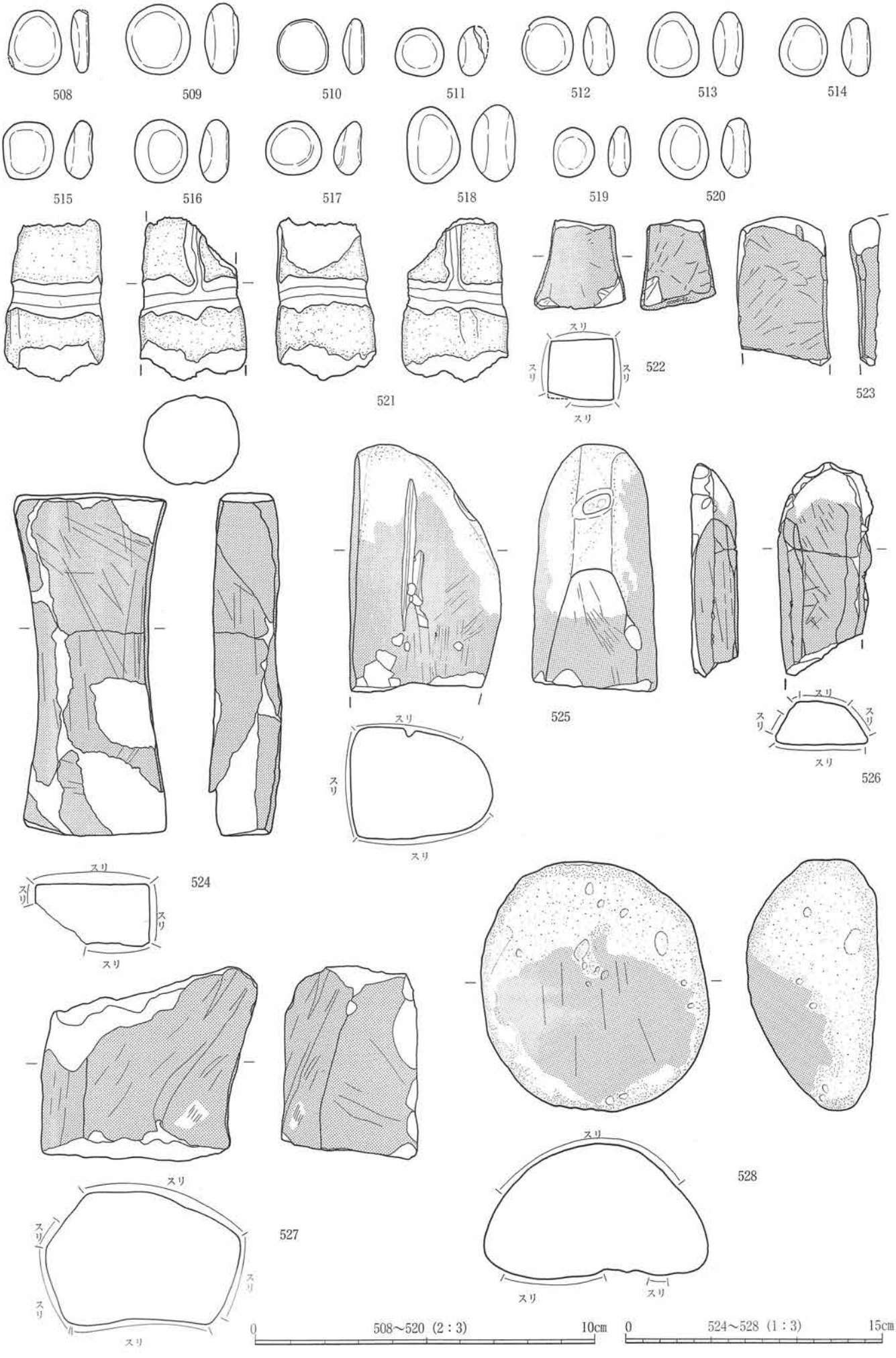

452


453


454

0 (1:2) 10cm


455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
499
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
504
505
506
501
500
502
503
507
0 455～499 (1：2) 10cm
0 500～503 (1：3) 15cm
0 504～507 (2：3) 10cm


508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
スリ
0
508～520 (2：3)
10cm
0
524～528 (1：3)
15cm

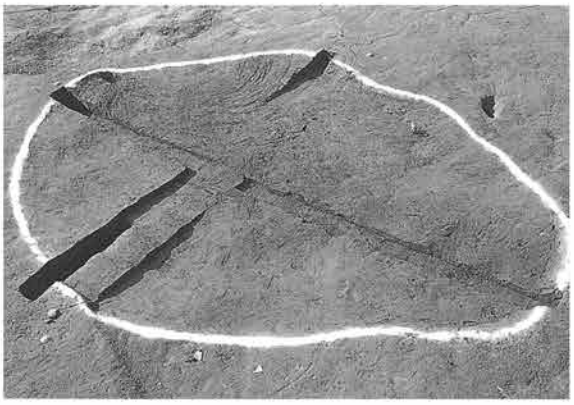
遺跡周辺の航空写真

日本地図センター発行
1936年米軍撮影

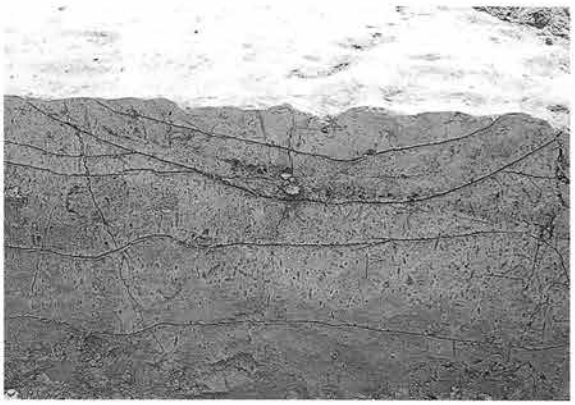
近景　弥彦山を望む（北東から）

近景　緒立遺跡・的場遺跡を望む（南から）

X層検出遺構全景

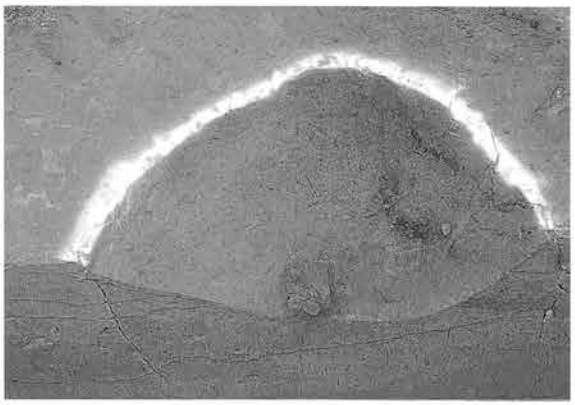


SK1　完掘　東南から

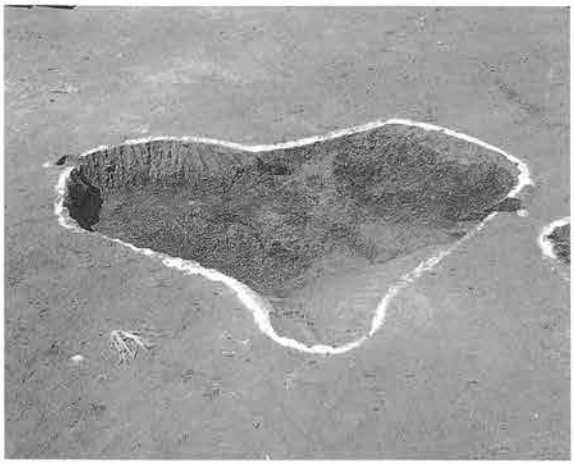


SK97　断面　西から

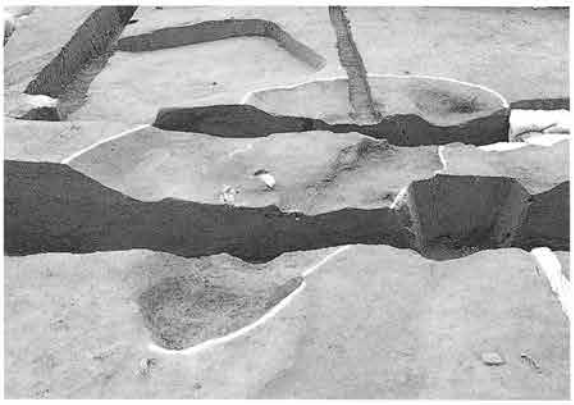
SK97　鎌出土状況　西から



SK97　完掘　西から

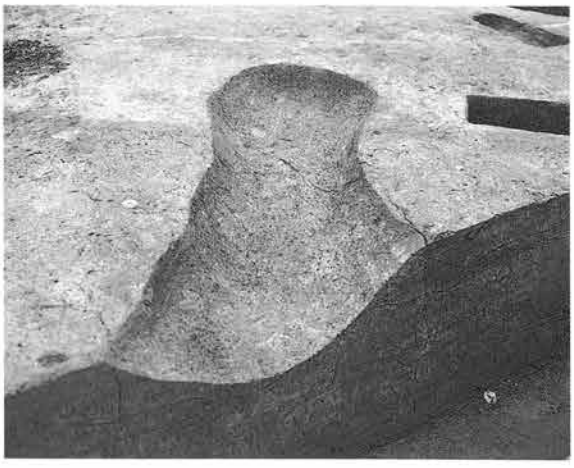


SK88　完掘　東南から



SX41　完掘　東から

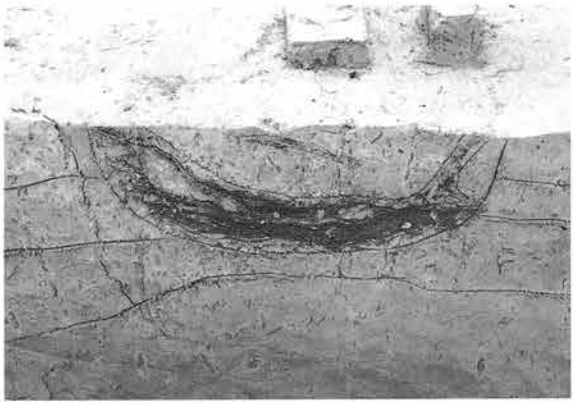
SD226　断面　南西から



SD226　完掘　南西から

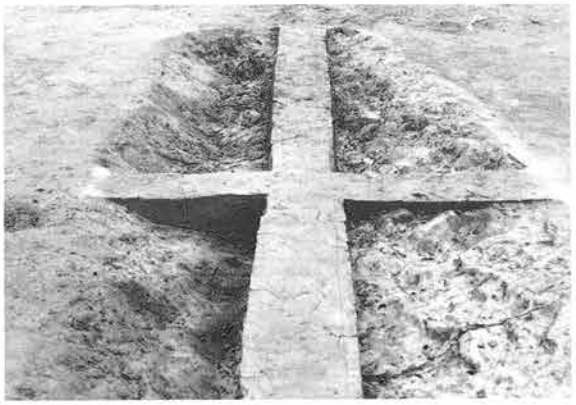
SX218　断面　南から

SX218　完掘　東南から

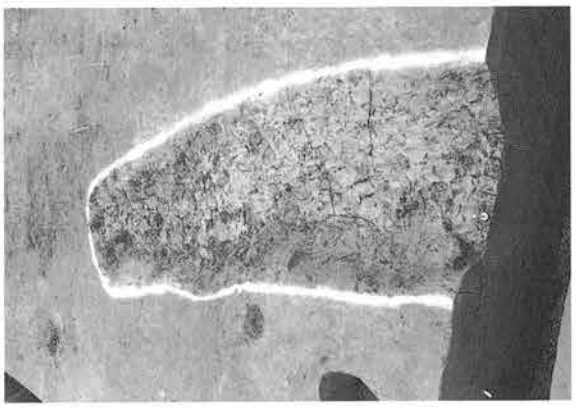


SD93　断面　西から

SD93　完掘　北西から



SD92　断面　西から



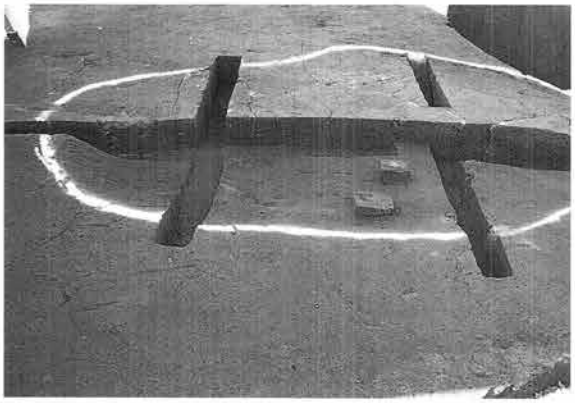
SD92　完掘　西から

杭１　東南から

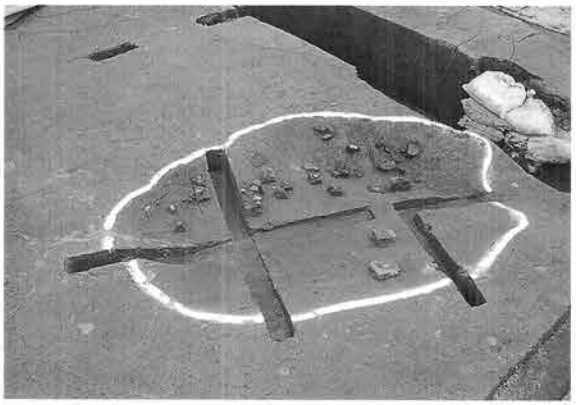
杭５　東南から

杭11　北西から

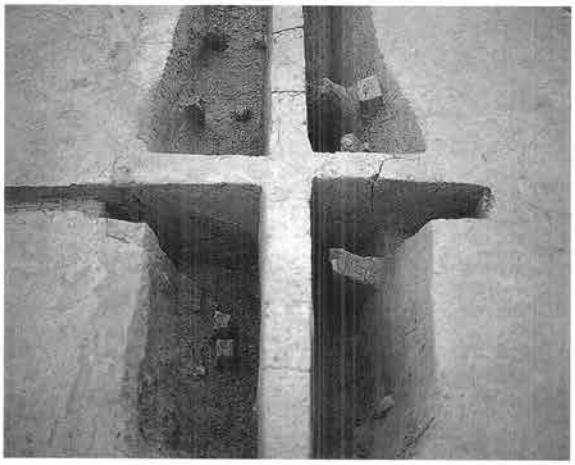
杭13　北西から



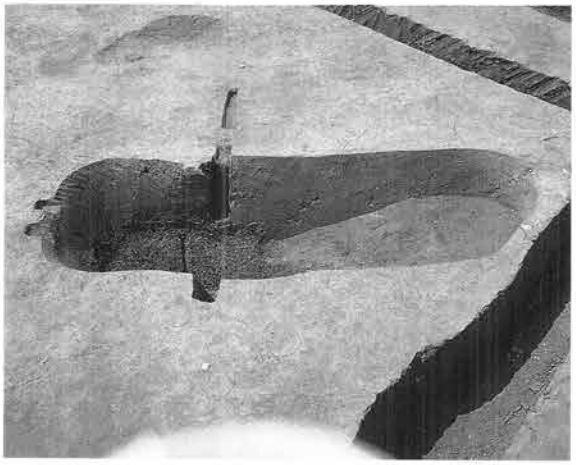
SK112　断面　南から



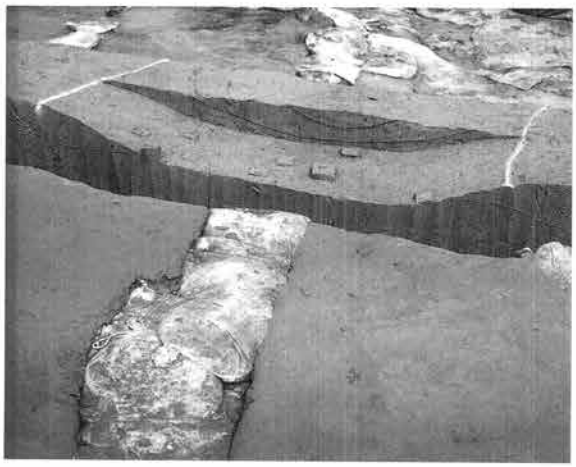
SK112　完掘　東から



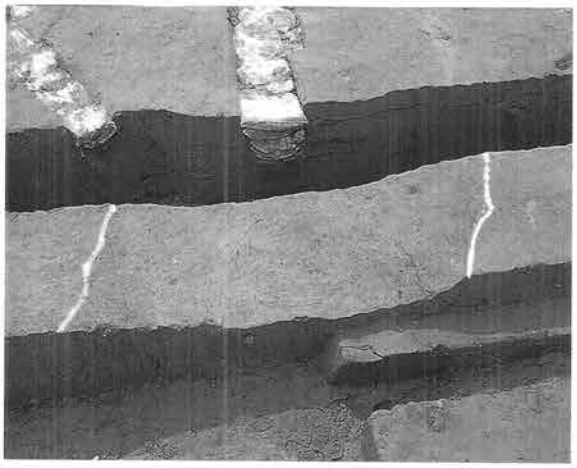
SK123　断面　東南から



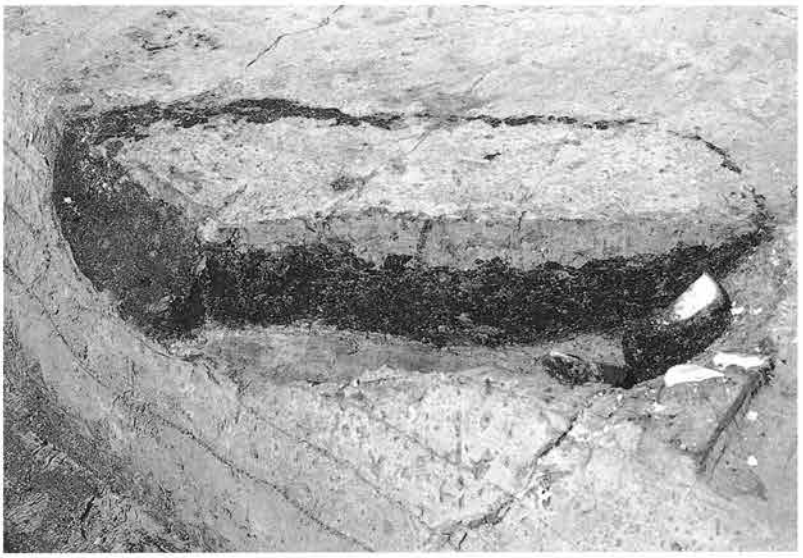
SK123　完掘　北東から



SK156　断面　南から

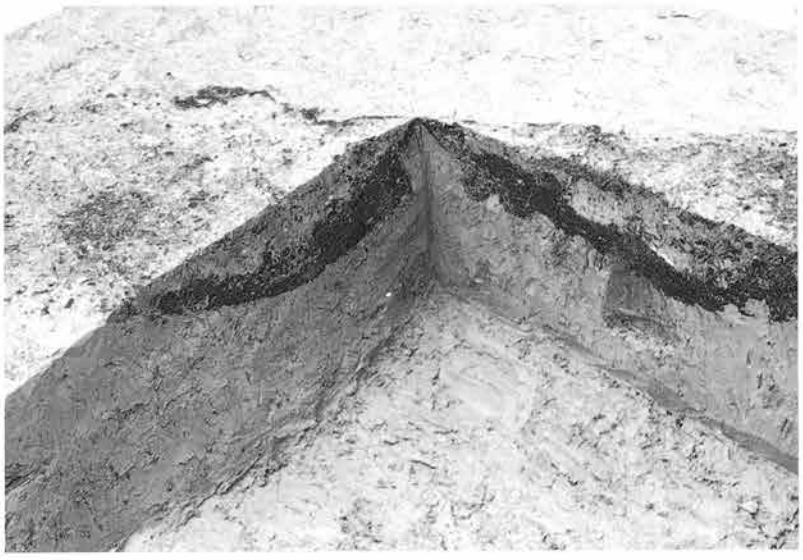


SK156　完掘　北から

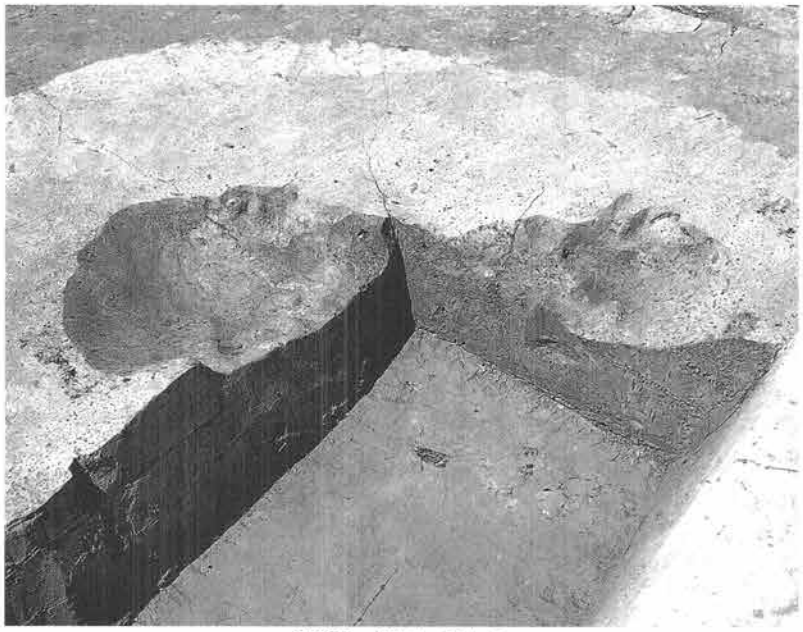


SK100　断面　南西から

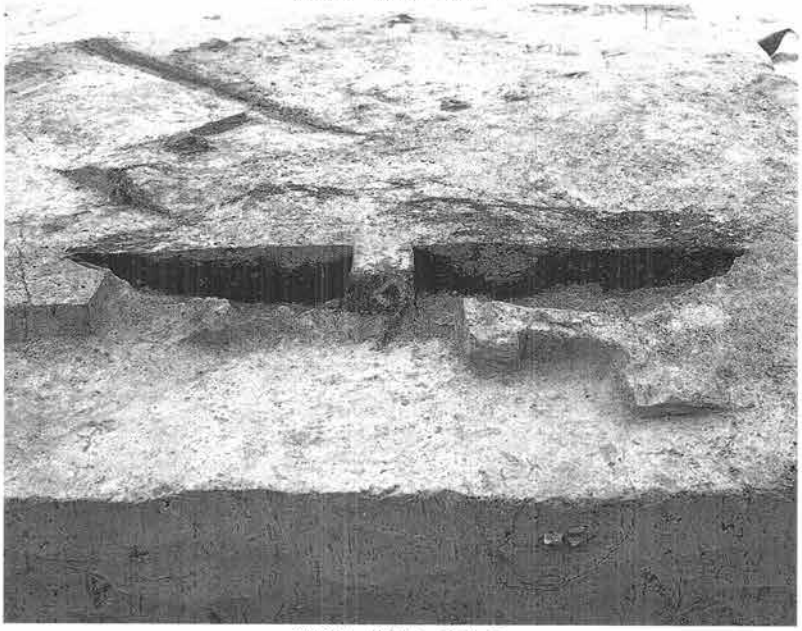
SK100　完掘　南西から



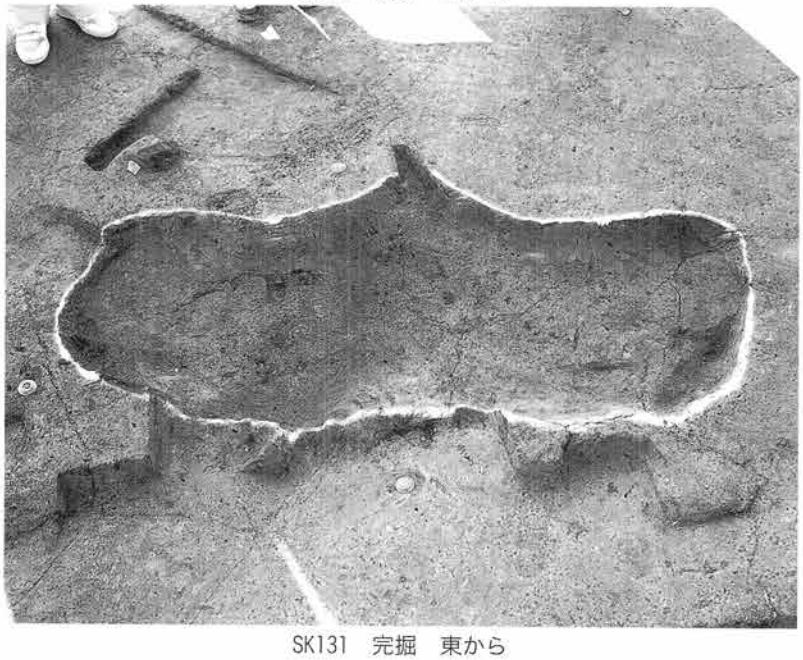
SK102　断面　東から



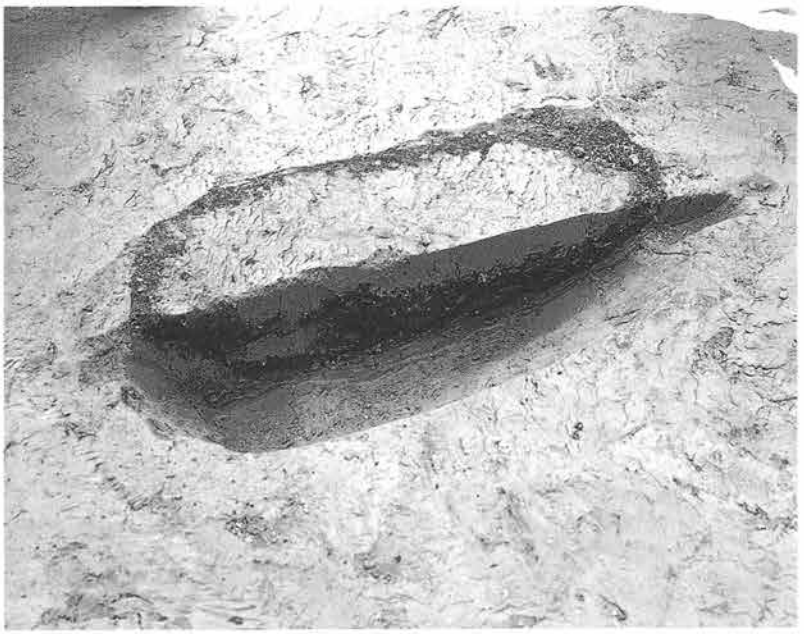
SK102　完掘　東から



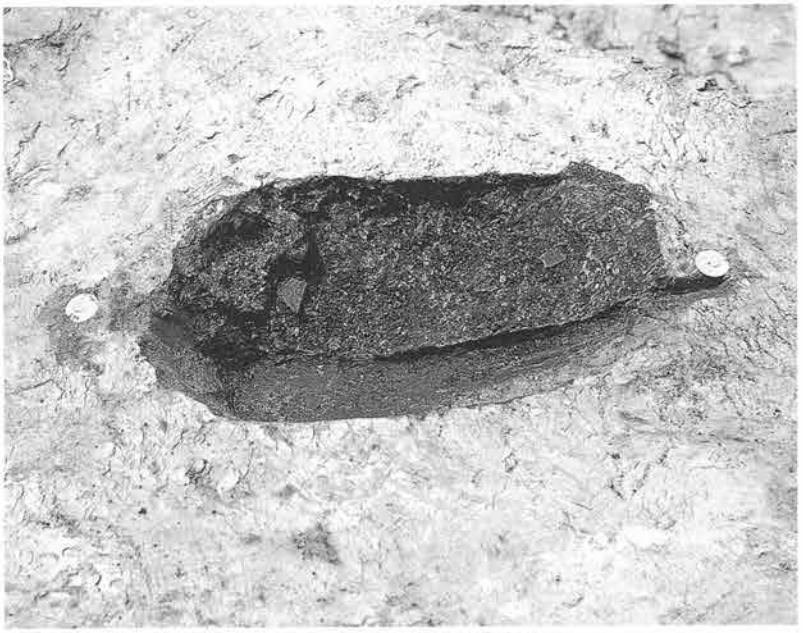
SK131　断面　東から



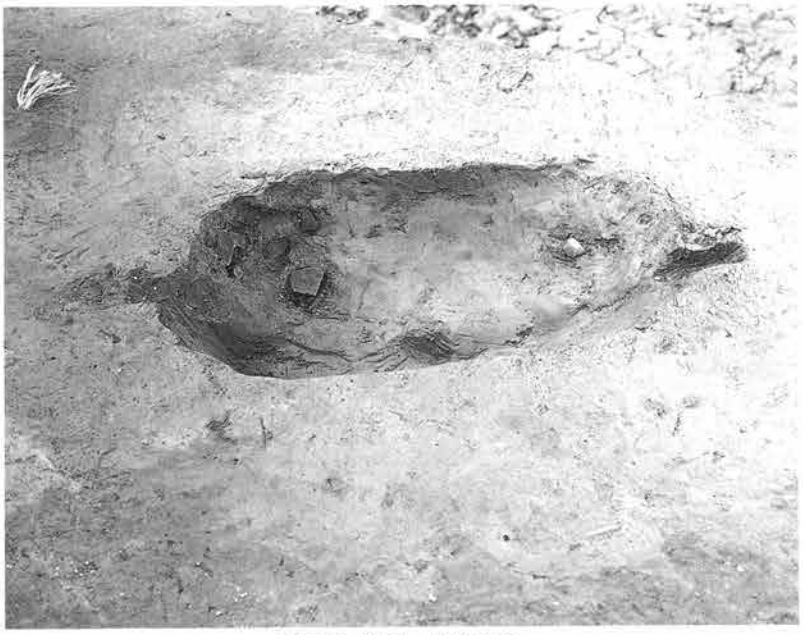
SK131　完掘　東から



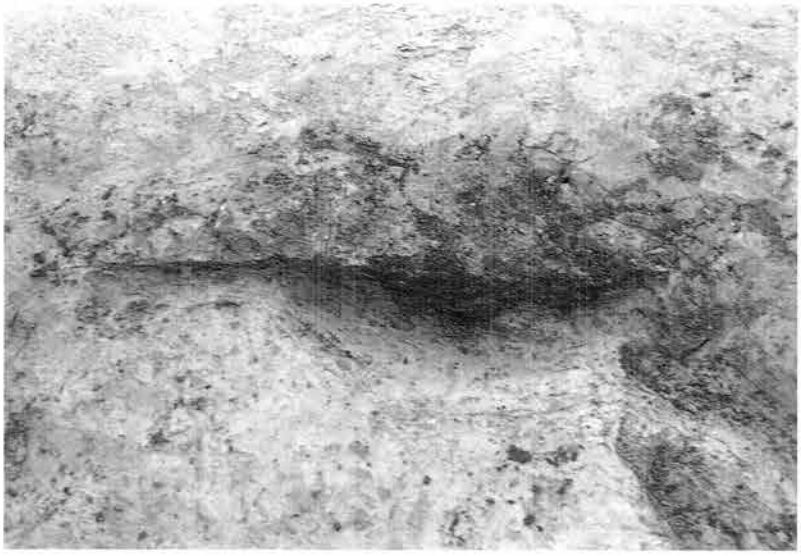
SK116　断面　北東から



SK116　骨片出土状況　北東から

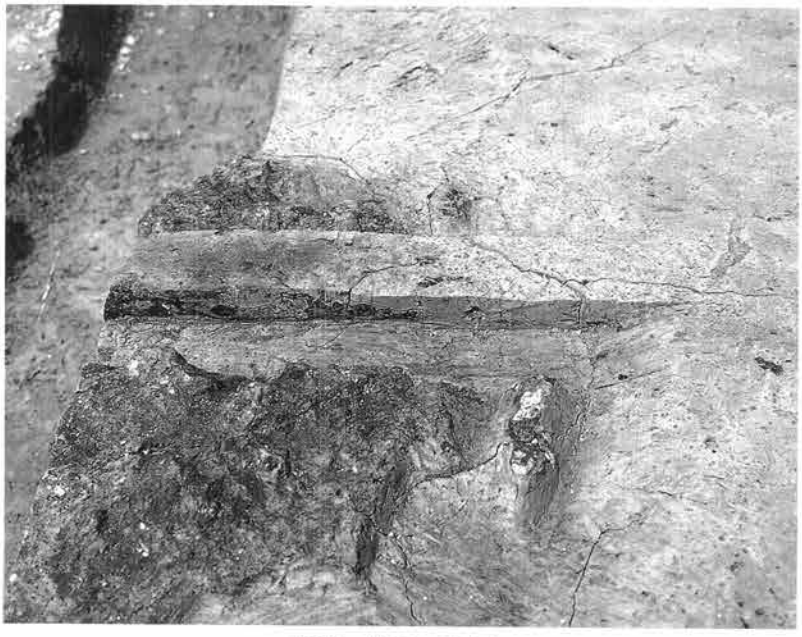


SK116　完掘　北東から

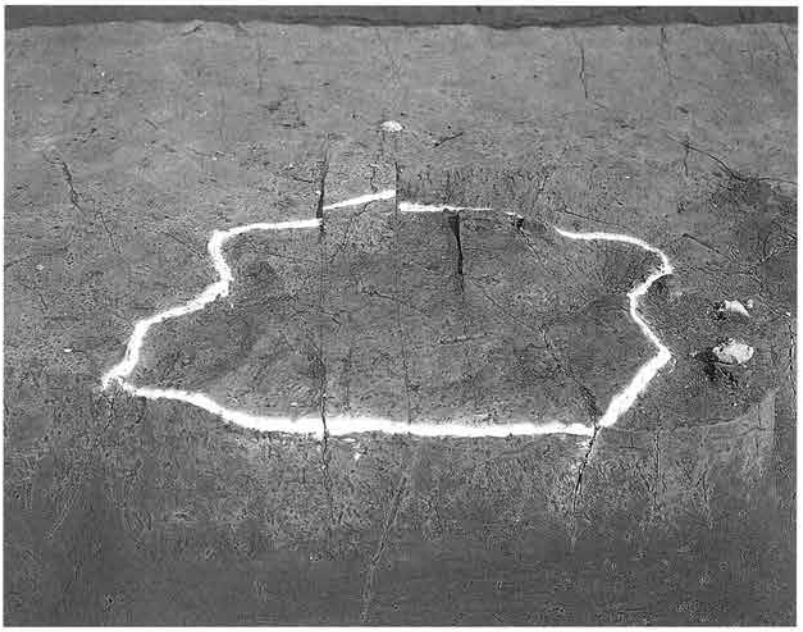


P65　断面　北から

P65　完掘　北から



SX121　断面　南から

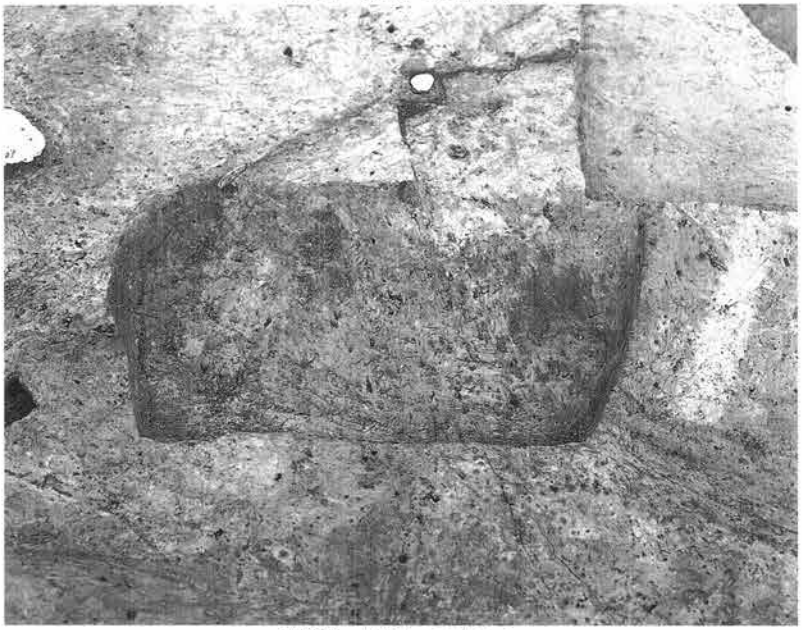


SX121　完掘　西から

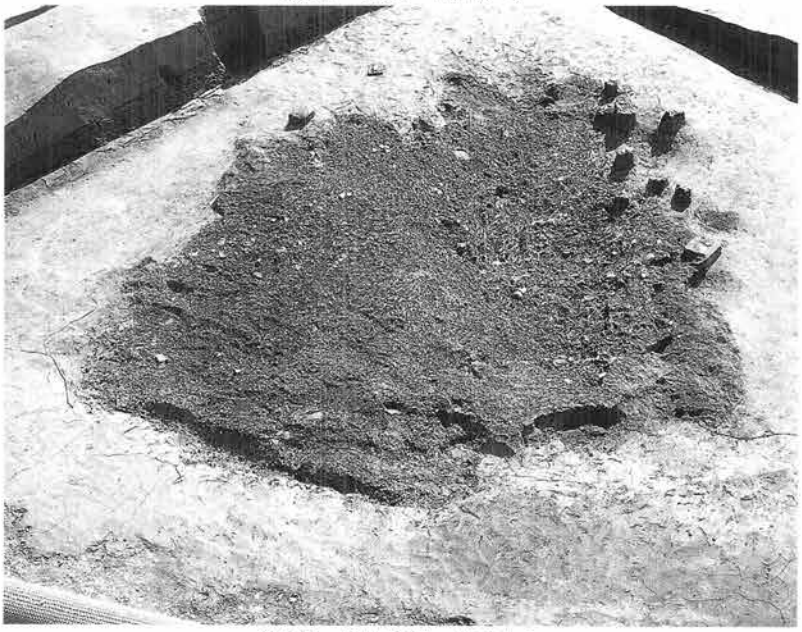
SK325　断面　北西から

SK325　完掘　南西から

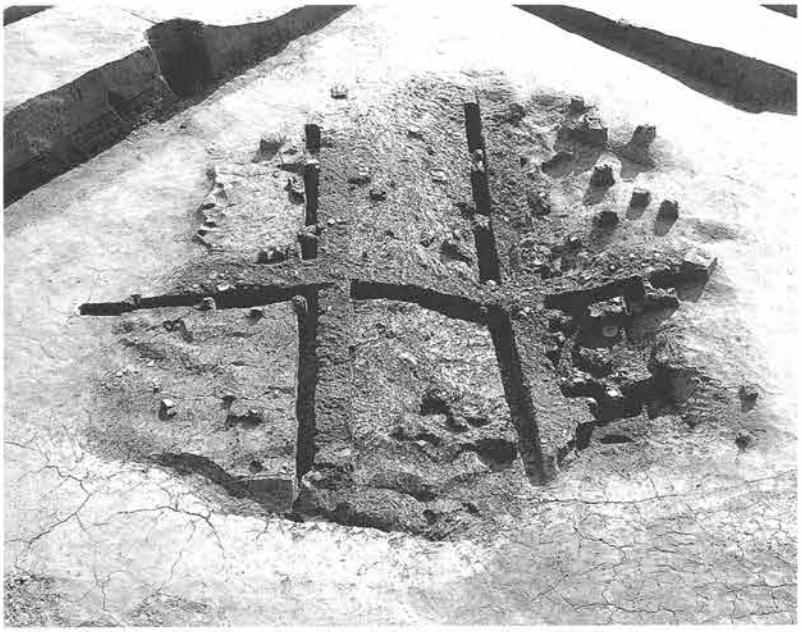
SK372　断面　東南から



SK372　完掘　南西から



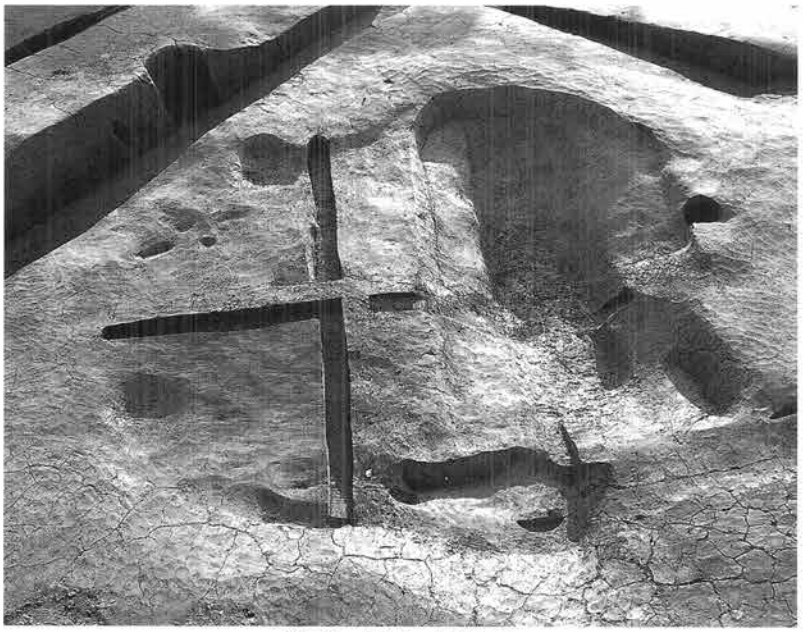
SX126　検出状況　北東から



SX126　遺物出土状況　北東から

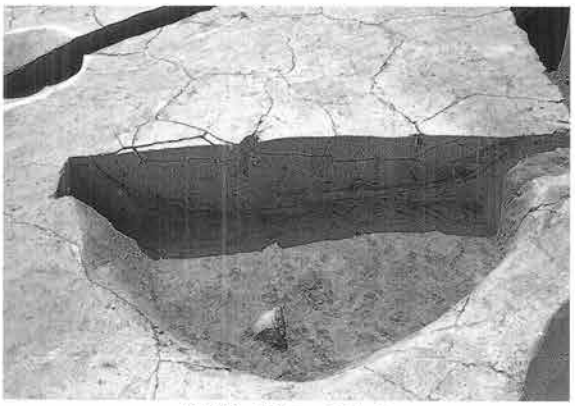
SX126　銅鈴出土状況　北西から

SX126　土坑部南北断面　南西から

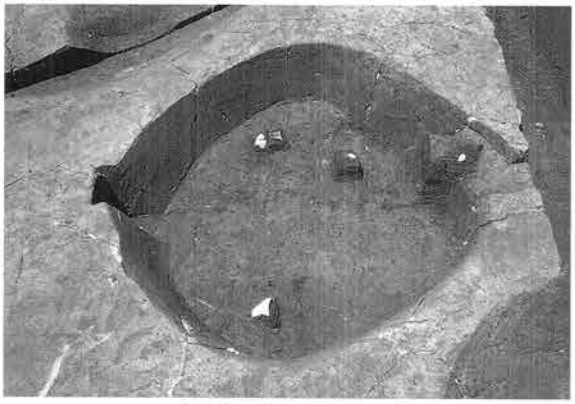


SX126　完掘　北東から

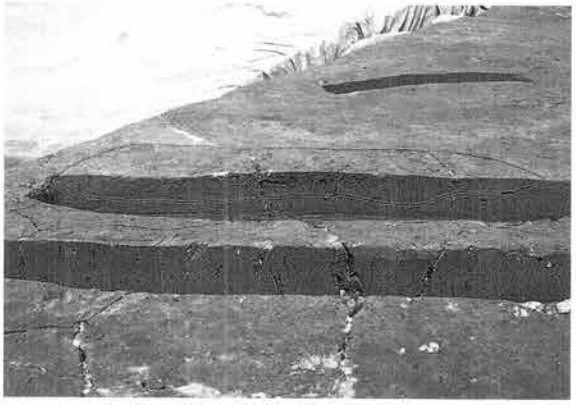
SK105　完掘　北東から



SK108　断面　東から



SK108　完掘　東から



SK114　断面　西から

SK114　完掘　南西から

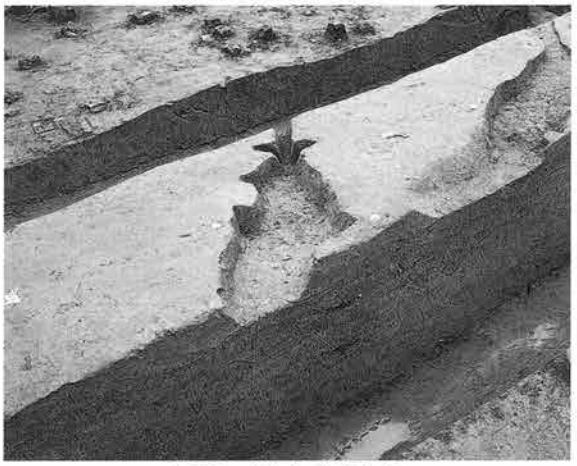
SK117　断面　東から

SK117　遺物出土状況　東から

SK117　完掘　東から

SD178　完掘　東南から

SD179　断面　東南から



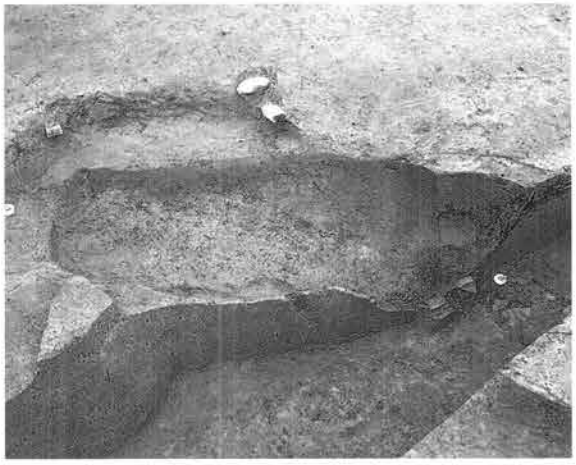
SD179　完掘　東南から

SK170　断面　東から

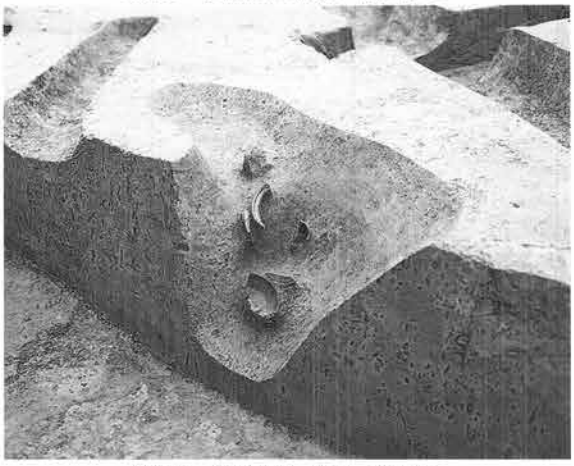
SK170　完掘　東から

SD166　完掘　北から

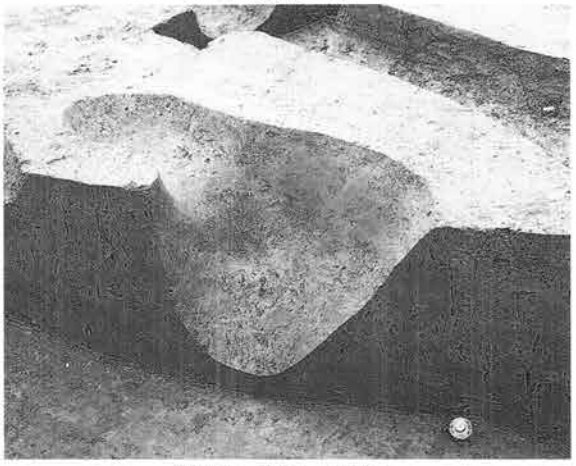
SK185　遺物出土状況　南西から



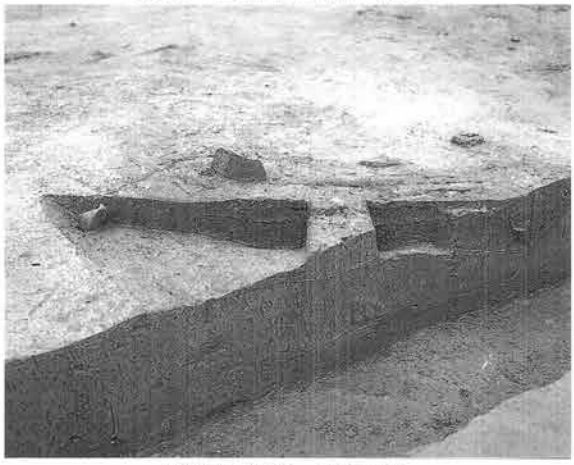
SK185　完掘　南から



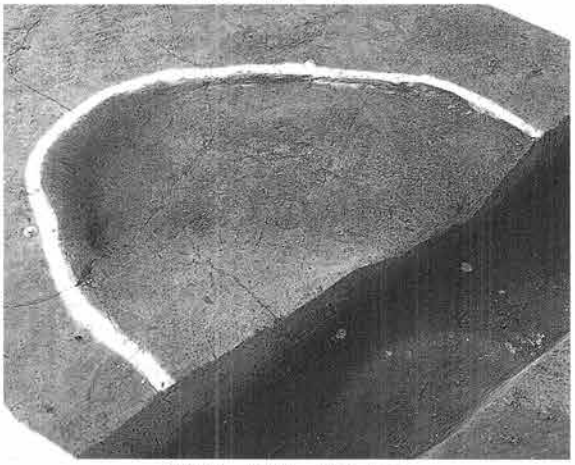
SK158　遺物出土状況　北から



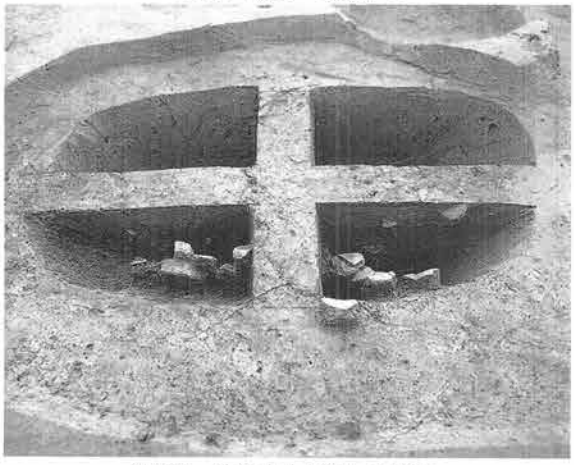
SK158　完掘　北から



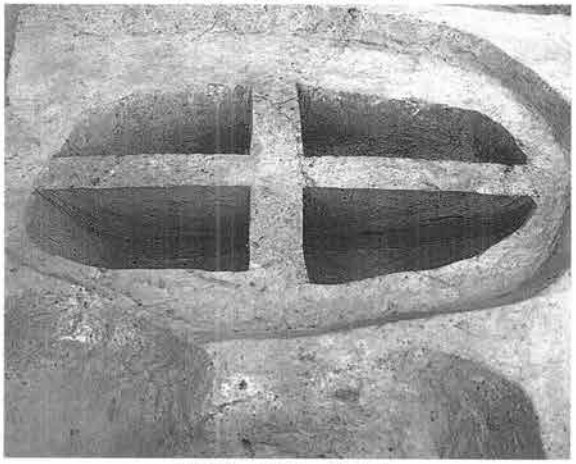
SK132　断面　東南から



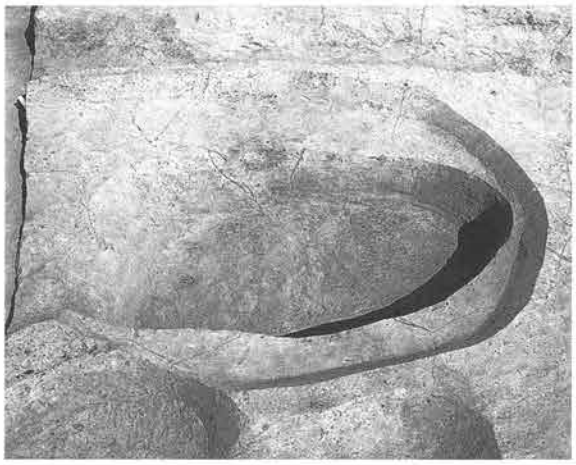
SK132　完掘　東南から



SK209　遺物出土状況　北から



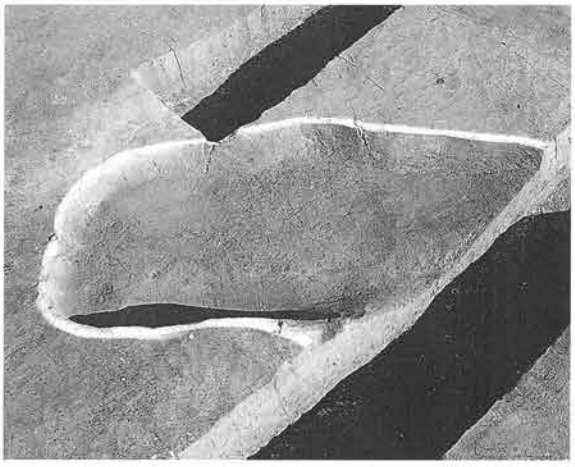
SK209　断面　南から



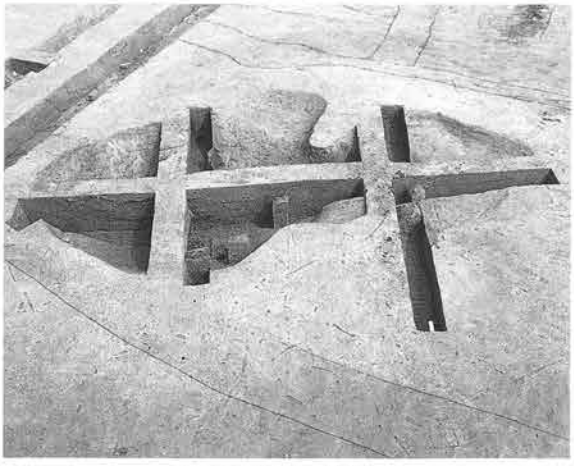
SK209　完掘　南西から

SK125　断面　南西から

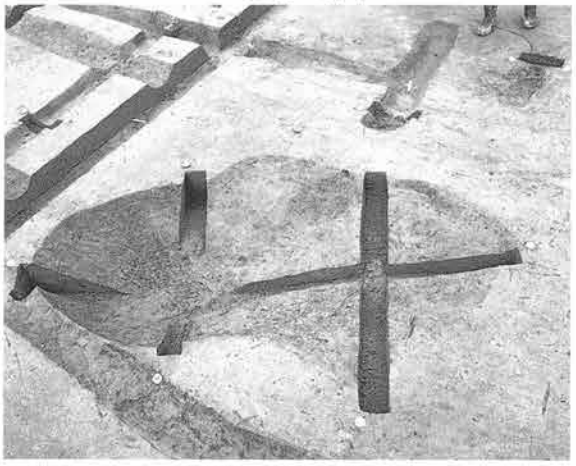
SK125　遺物出土状況　北から



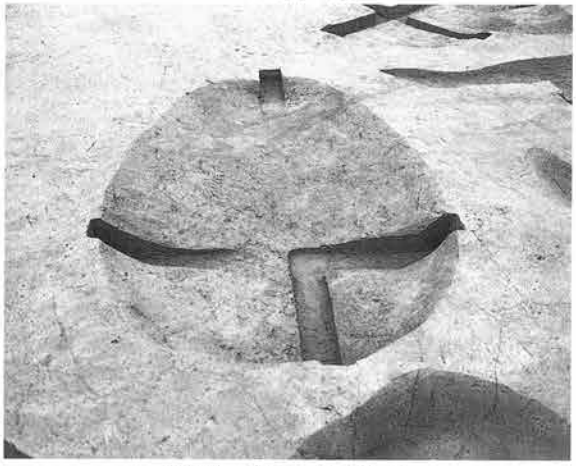
SK125　完掘　北西から



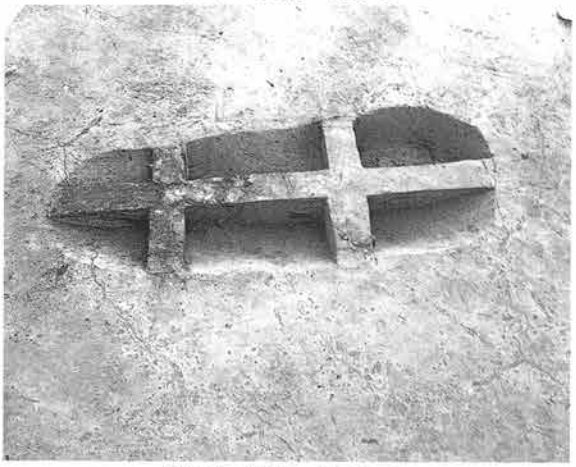
SK157　断面　南から



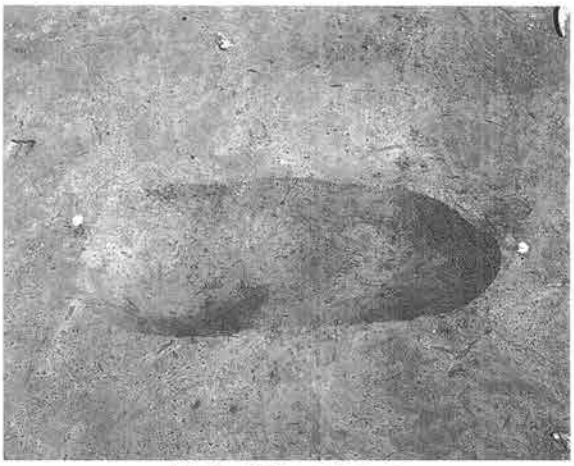
SK157　完掘　南から



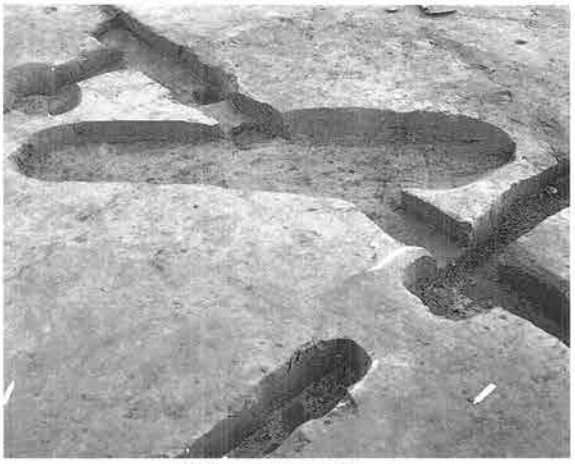
SK173　完掘　北東から



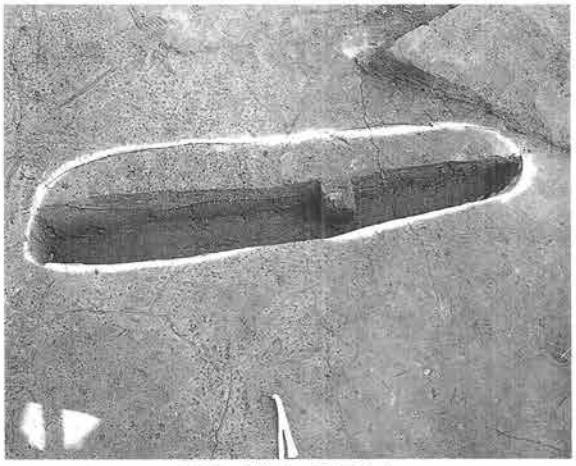
SK135　断面　北東から



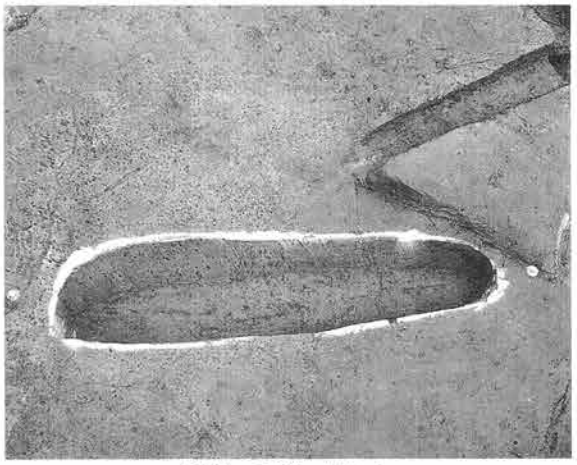
SK135　完掘　南西から



SK39　完掘　南西から



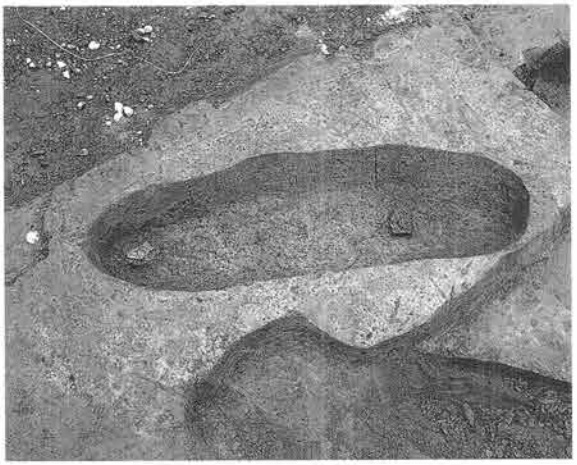
SK37　断面　南西から



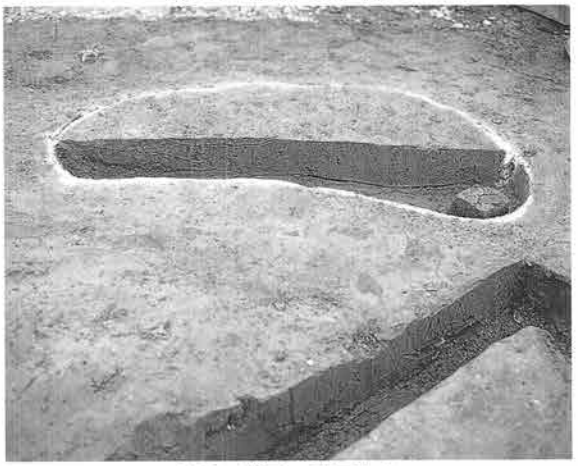
SK37　完掘　西から

SK51　完掘　南西から

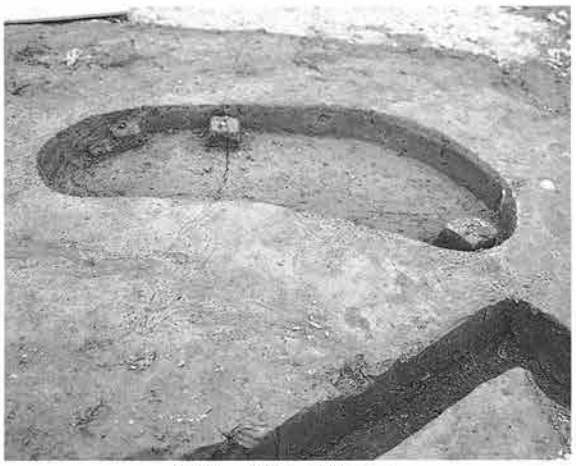
SK174　断面　南西から



SK174　完掘　南東から



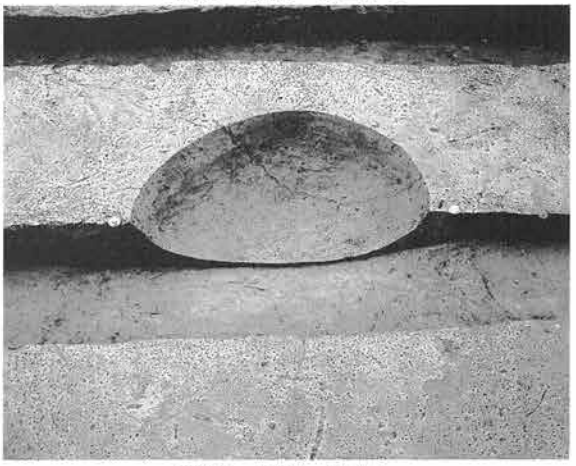
SK69　断面　南西から



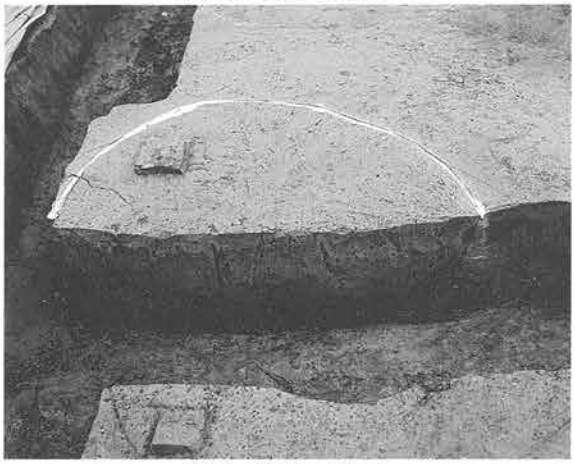
SK69　完掘　南西から

SK133　断面　北西から

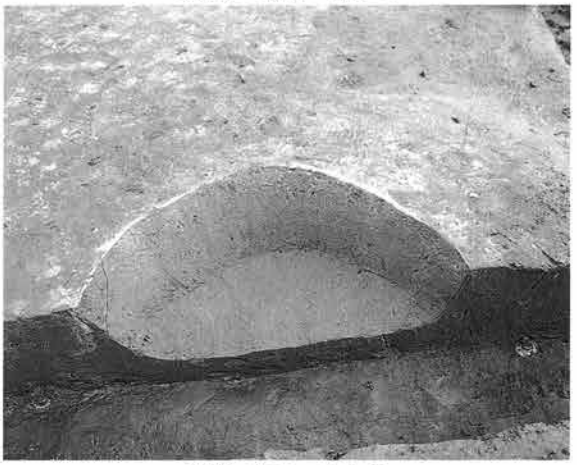
SK438　断面　北から



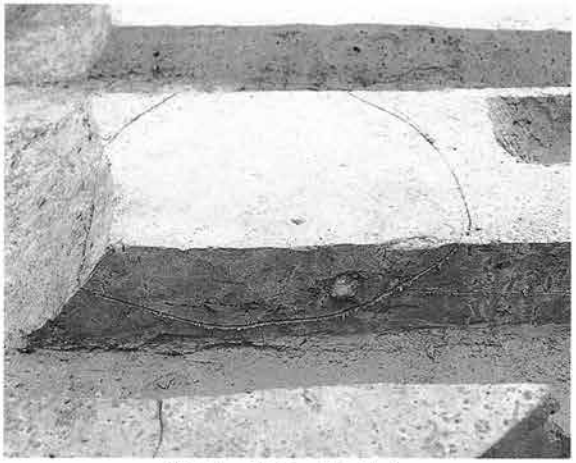
SK348　完掘　北から



SK58　断面　東から

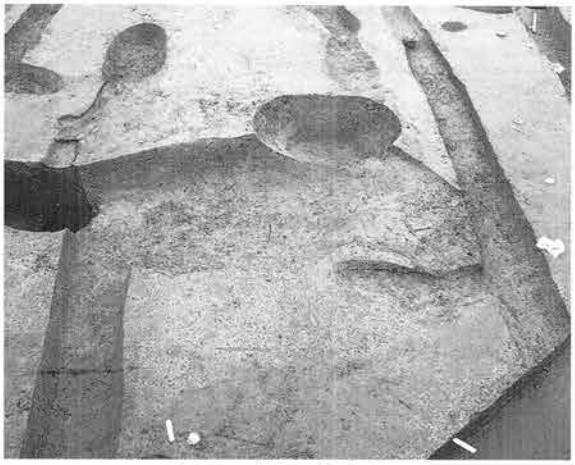


SK58　完掘　西から

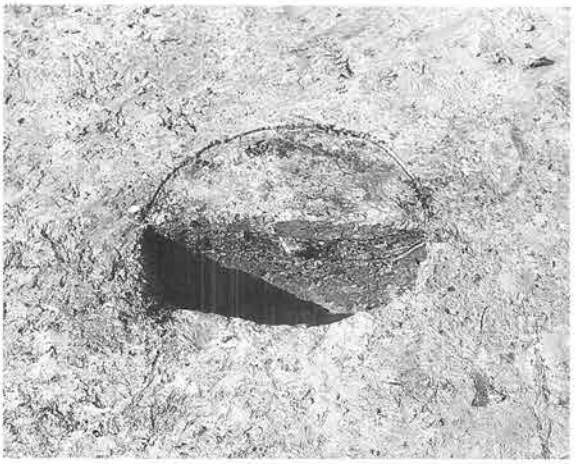


SK359　断面　北西から

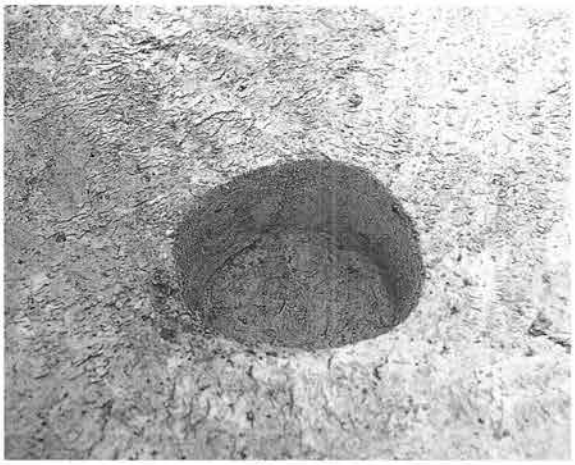
SK355　断面　北東から



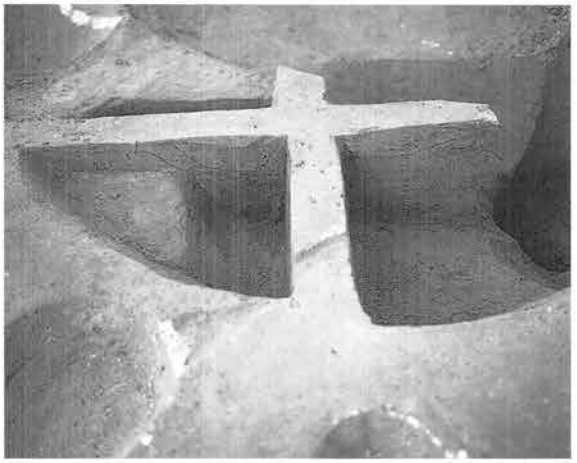
SK355　完掘　北東から



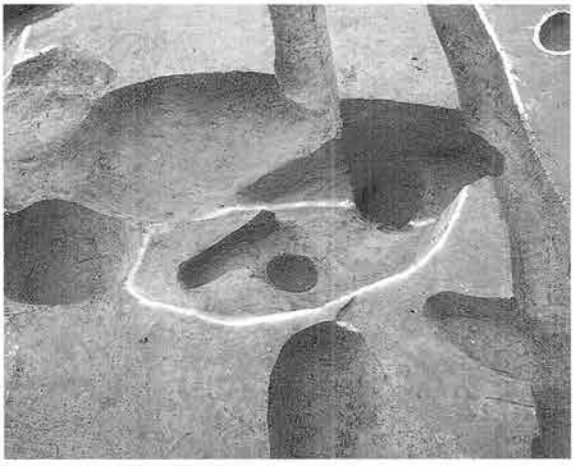
SK259　断面　北東から



SK259　完掘　北東から

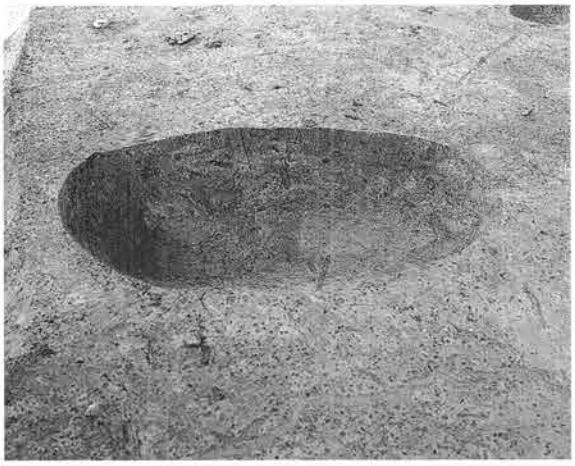


SK397　断面　西から

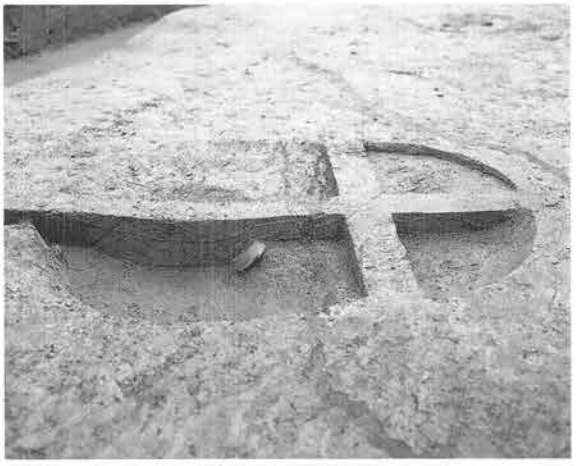


SK397　完掘　北西から

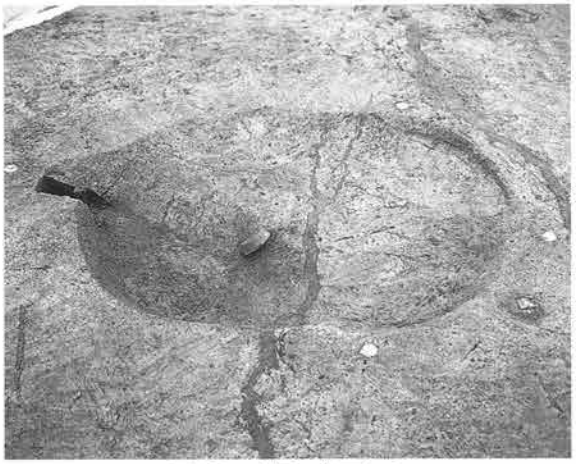
SK354　遺物出土状況　北東から



SK260　完掘　北東から

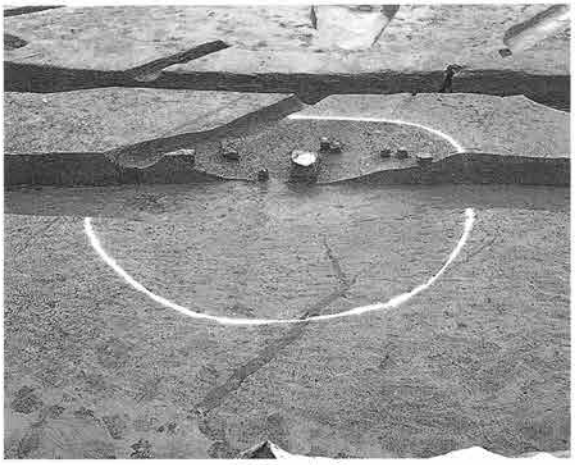


SK187　断面　北から



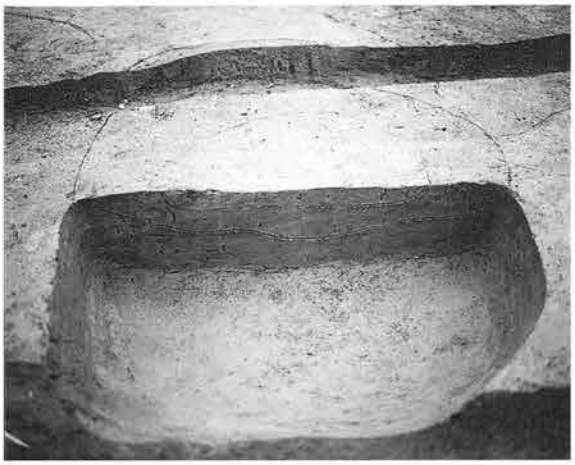
SK187　完掘　北西から

SK289　断面　西から



SK289　完掘

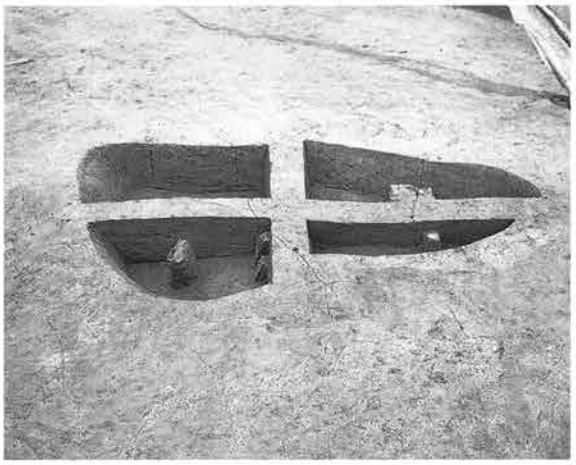
SK352　断面　北東から



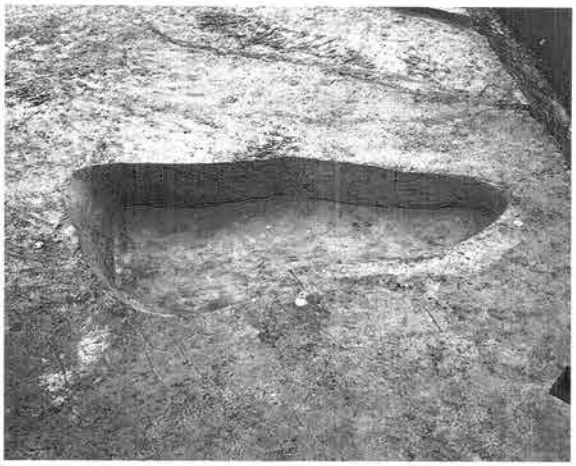
SK263　断面　北東から

SK333　断面　西から

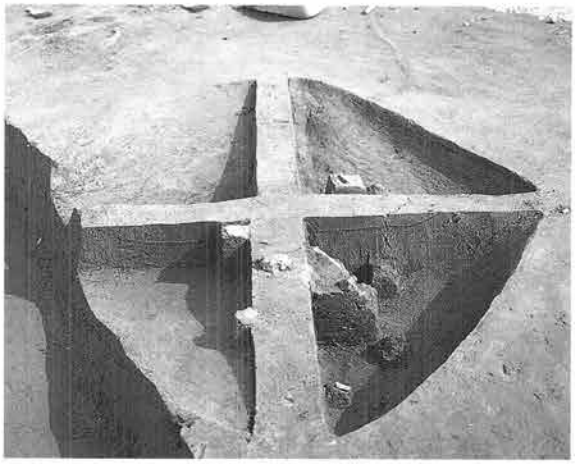
SK333　完掘　西から



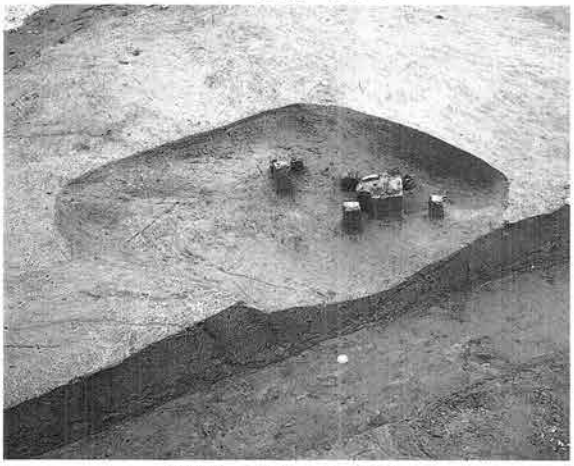
SK201　断面　北から



SK201　完掘　北から



SK236　断面　西から

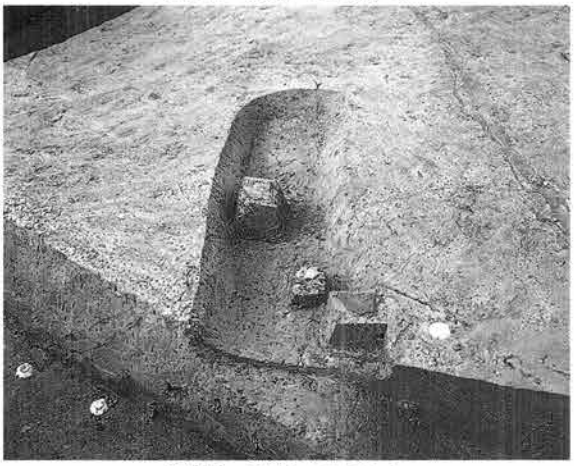


SK236　完掘　北東から

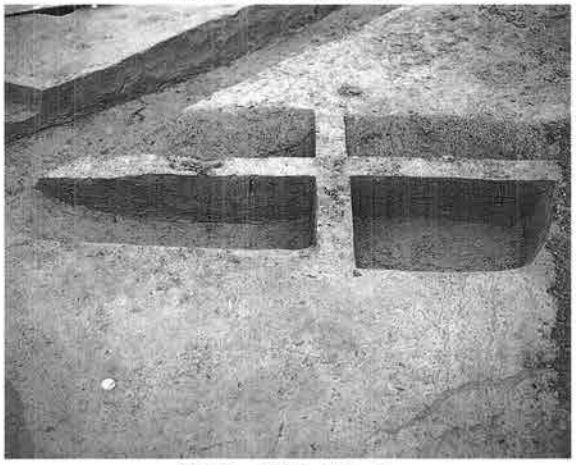
SK214　断面　東南から

SK214　完掘　東南から

SK213　断面　東南から



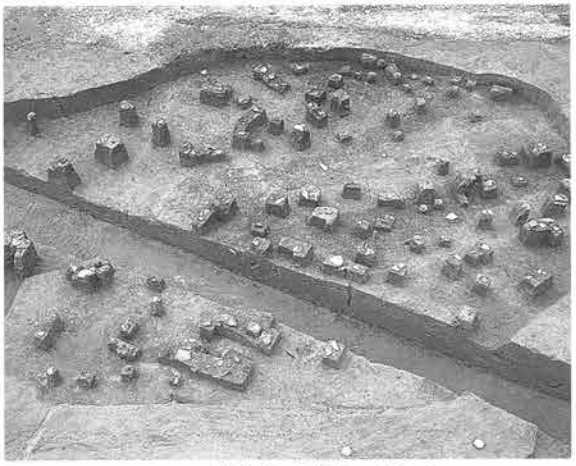
SK213　完掘　東南から



SK255　断面　西から

SK255　完掘　南から

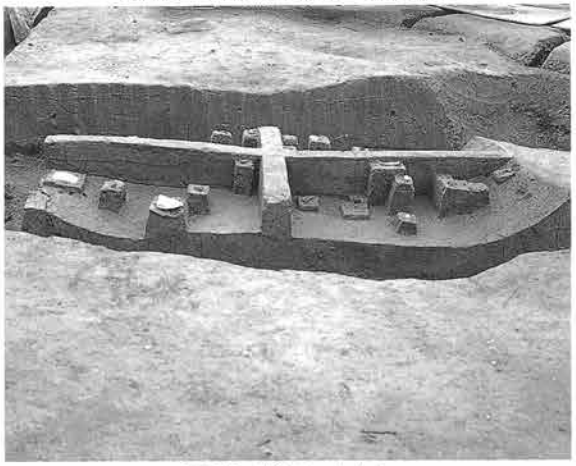
SK262　完掘　東から



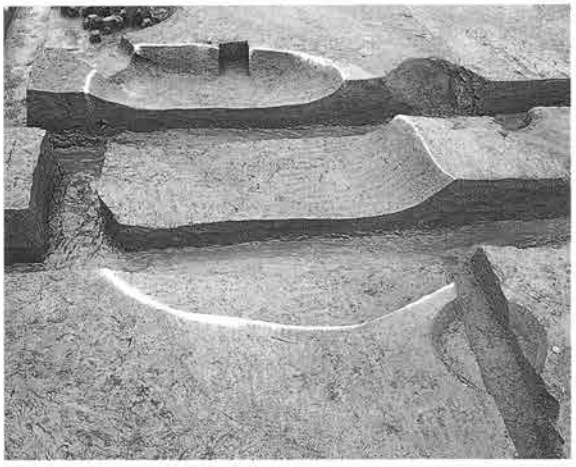
SK312　遺物出土状況　東から

SK312　土錘出土状況　北東から

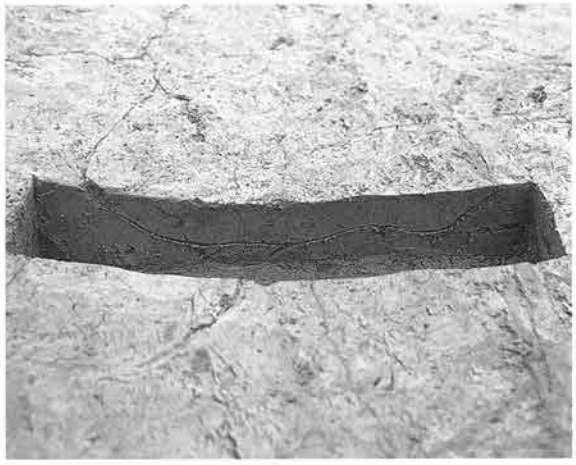
SK353　遺物出土状況　東から



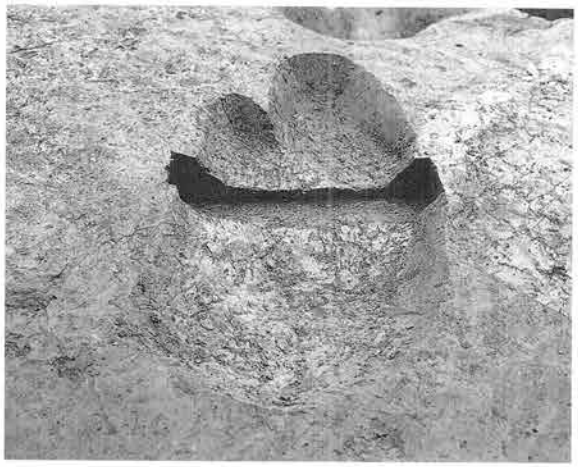
SK190　断面　北から



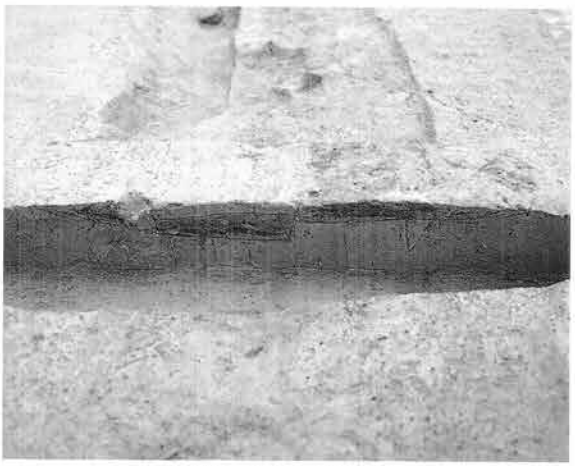
SK190　完掘　北から



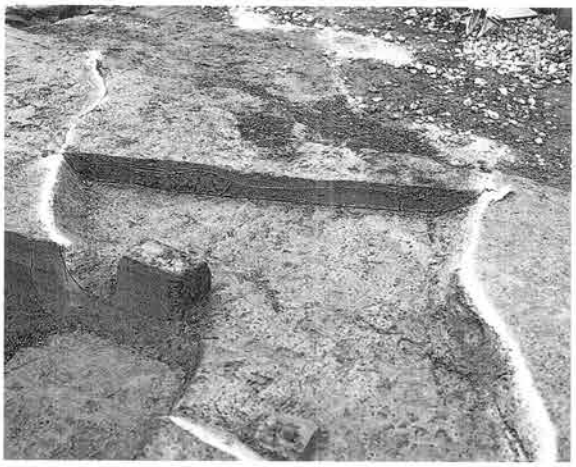
SK198　断面　西から



SK198　完掘　西から

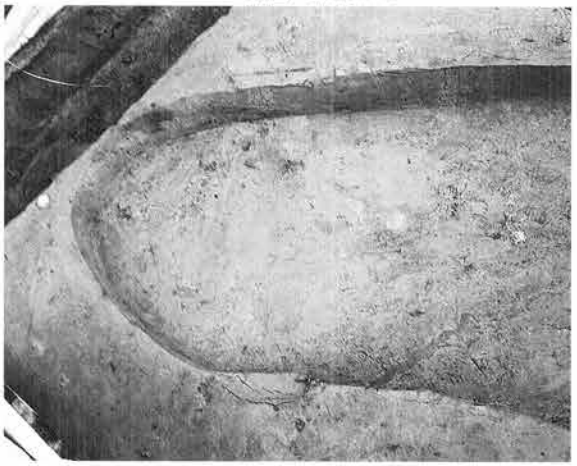


SK136　断面　北西から

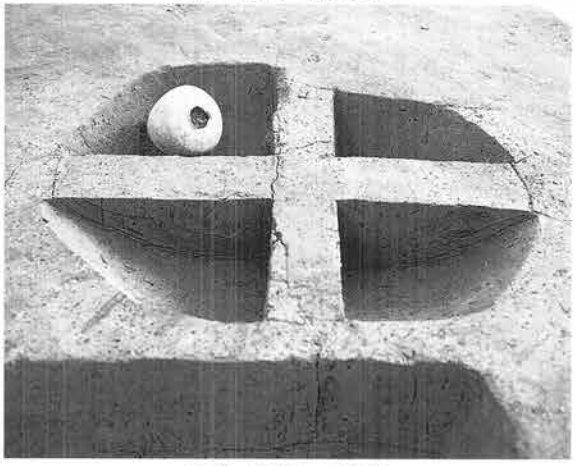


SK43　断面　東南から

SX42　断面　北東から



SX42　完掘　北東から

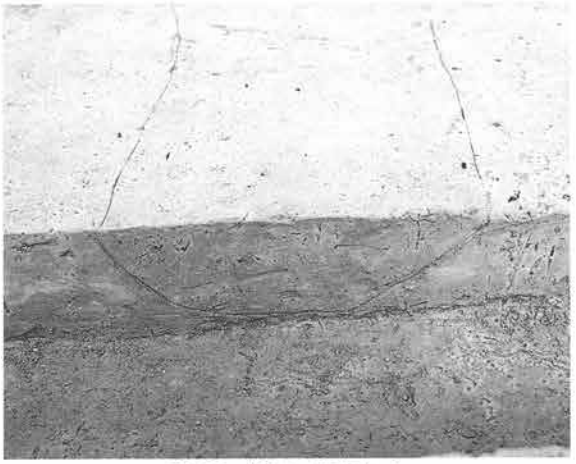


P149　断面　北から

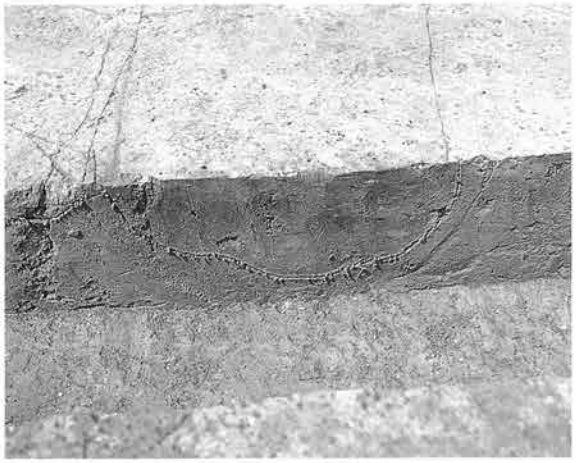
焼土305　検出状況　西から

焼土305　断面　北西から

焼土305　完掘　北西から



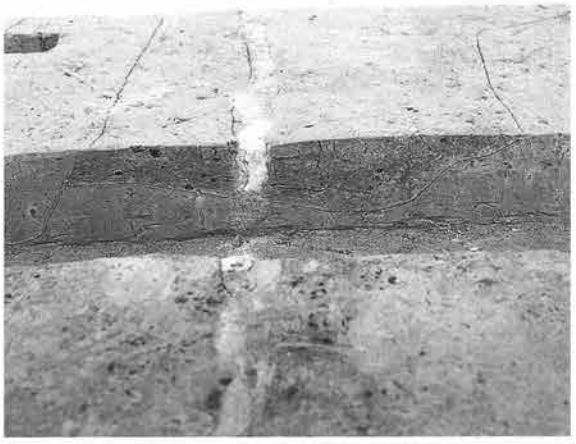
SD147　断面　東南から



SD152　断面　東南から

SD153　断面　東南から

SD140　断面　東南から

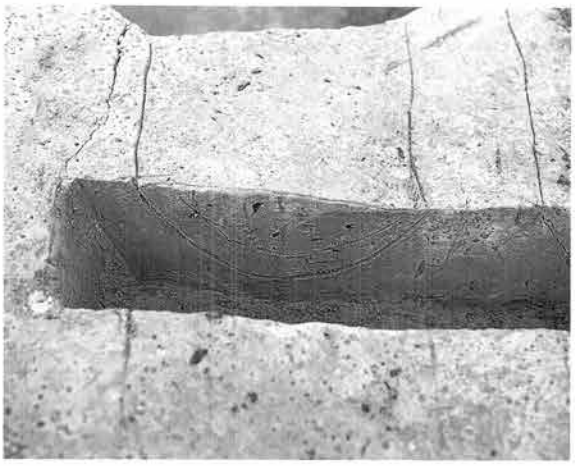


SD146　断面　東南から

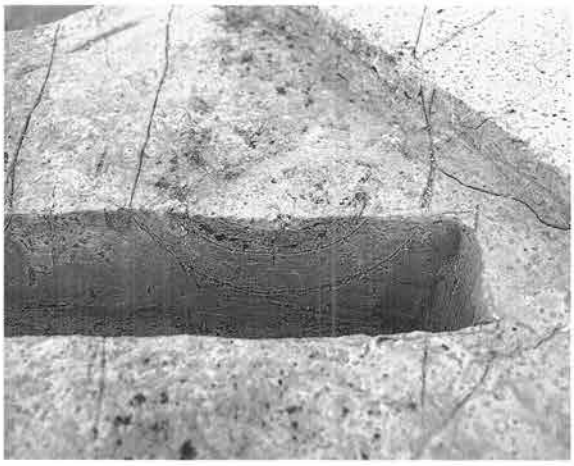
SD142　断面　東南から

SD138　断面　東南から

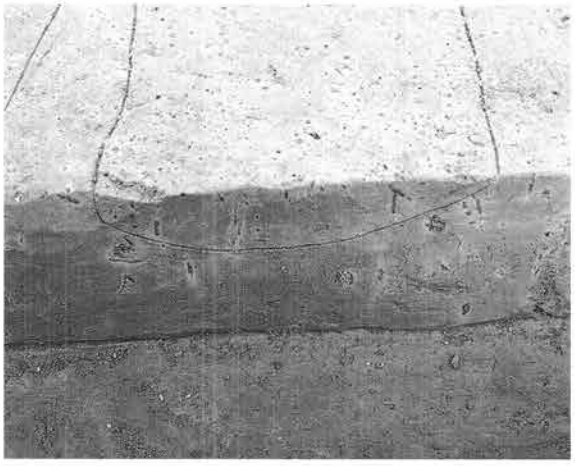
SD165　断面　西から



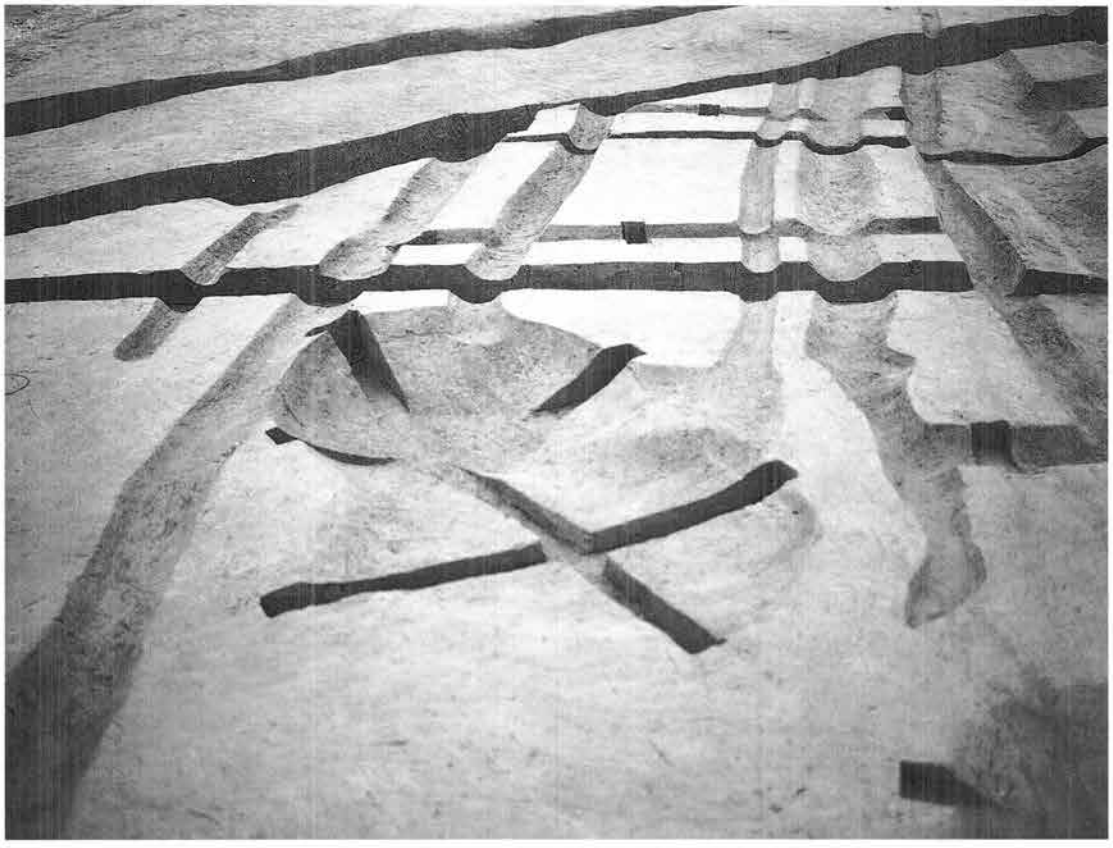
SD160　断面　南西から



SD161　断面　南西から



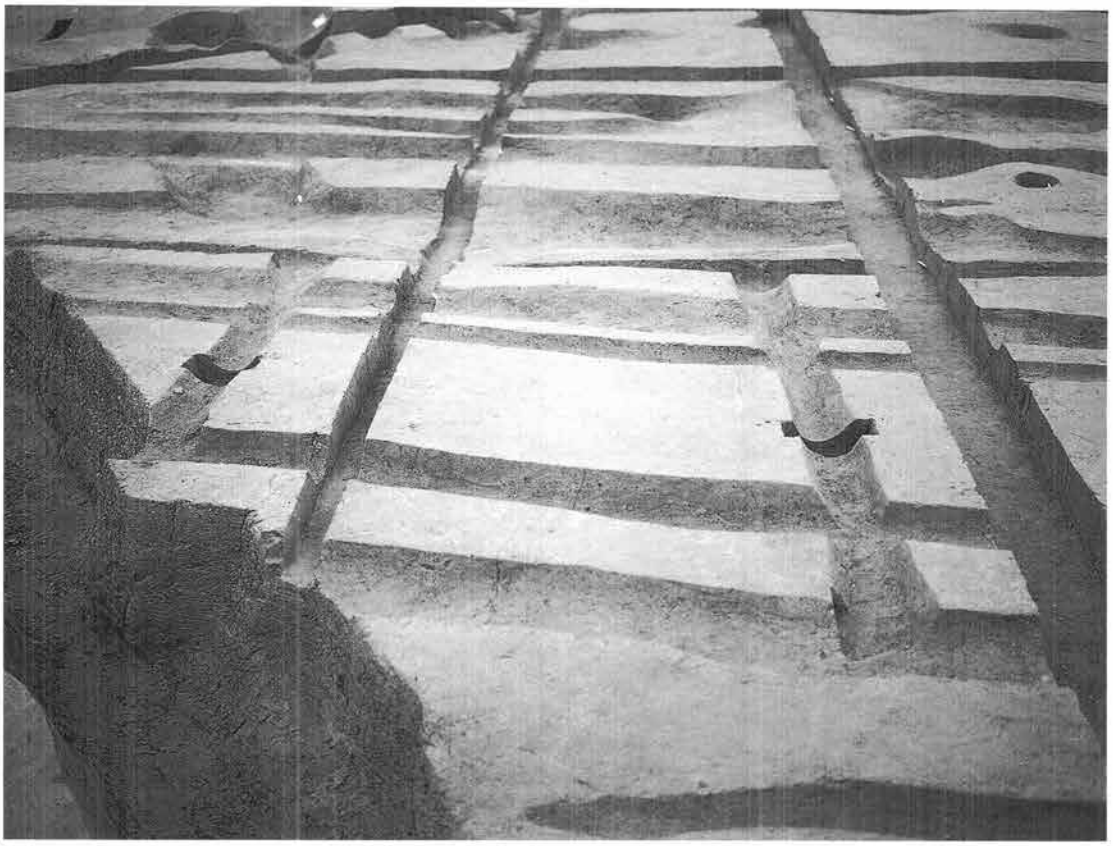
SD145　断面　東南から



溝状遺構群１　３Ｃグリッド完掘　東南から

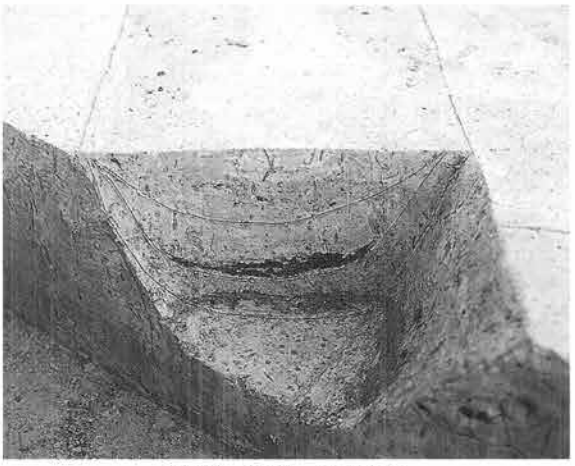
溝状遺構群１　３Ｃグリッド完掘　東南から

溝状遺構群１　３Ｃグリッド完掘　東南から

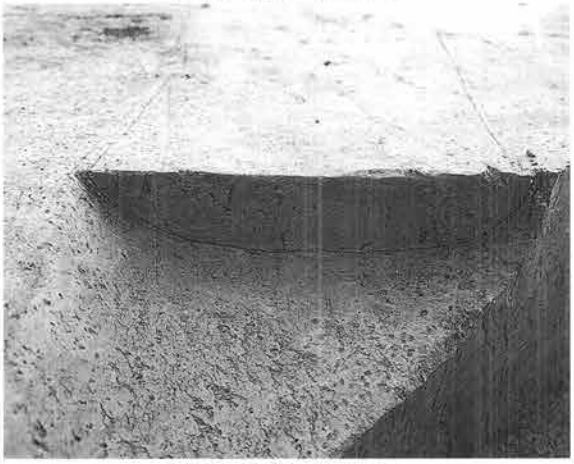


溝状遺構群１　３Ｃグリッド完掘　東南から

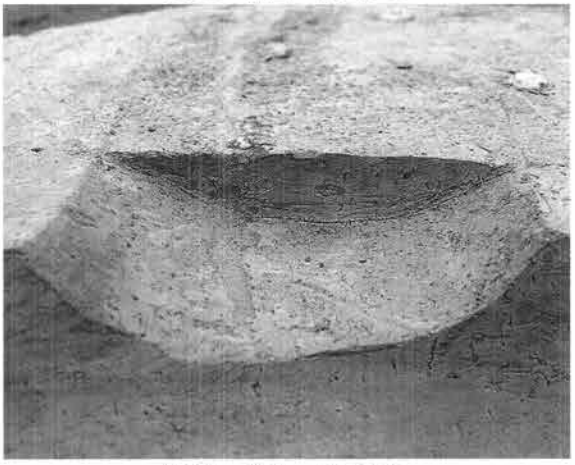
SD242　断面　北東から



SD235　断面　北西から

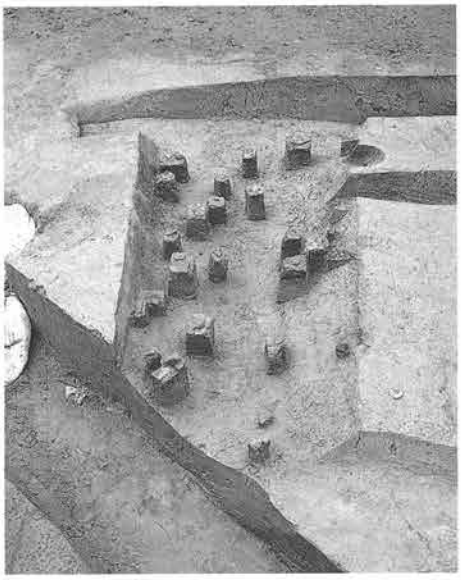


SD234　断面　北東から

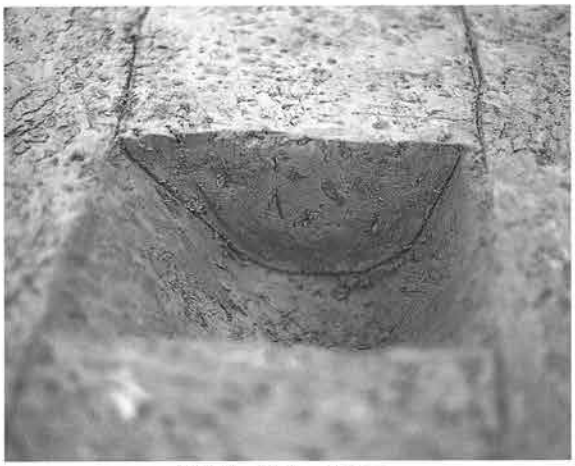


SD296　断面　北西から

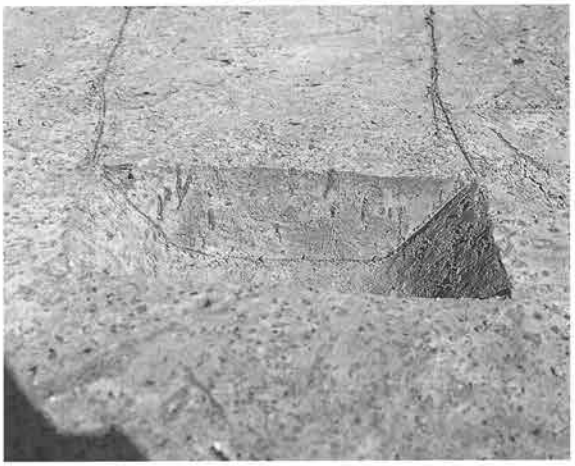
SD299　断面　北西から



SD299　遺物出土状況　北西から



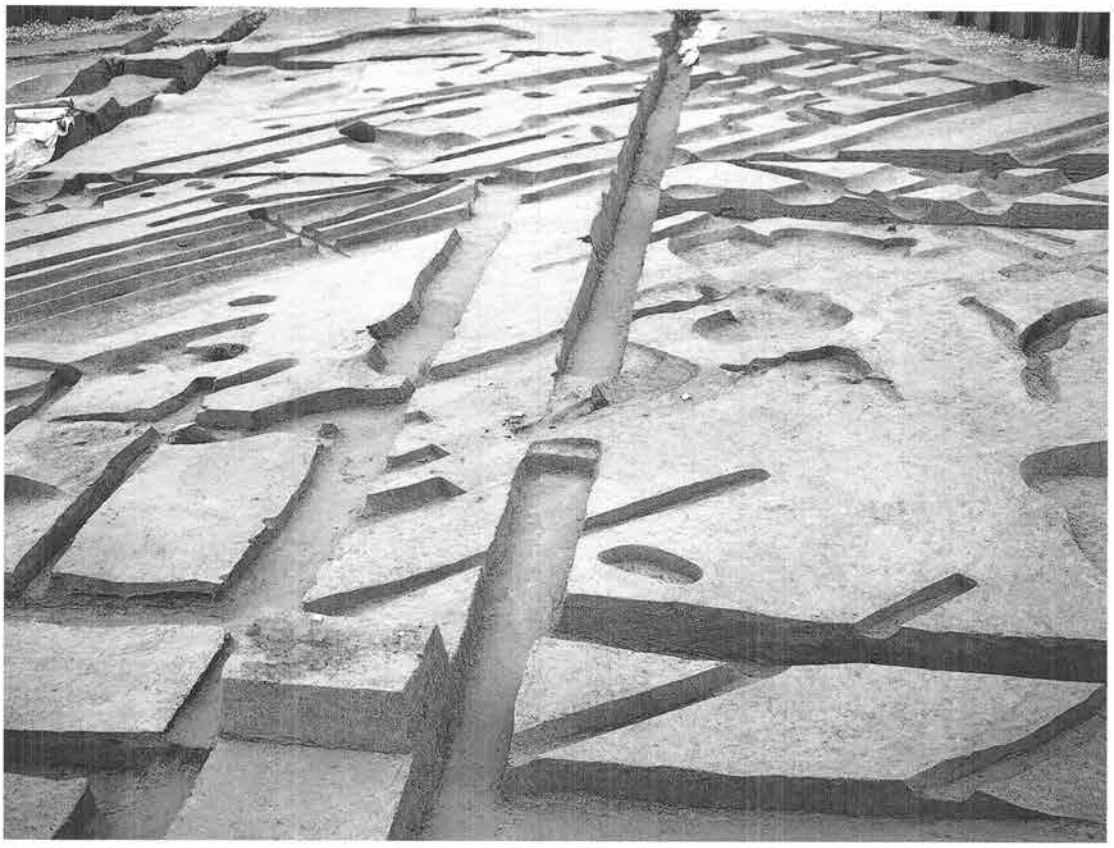
SD272　断面　西から



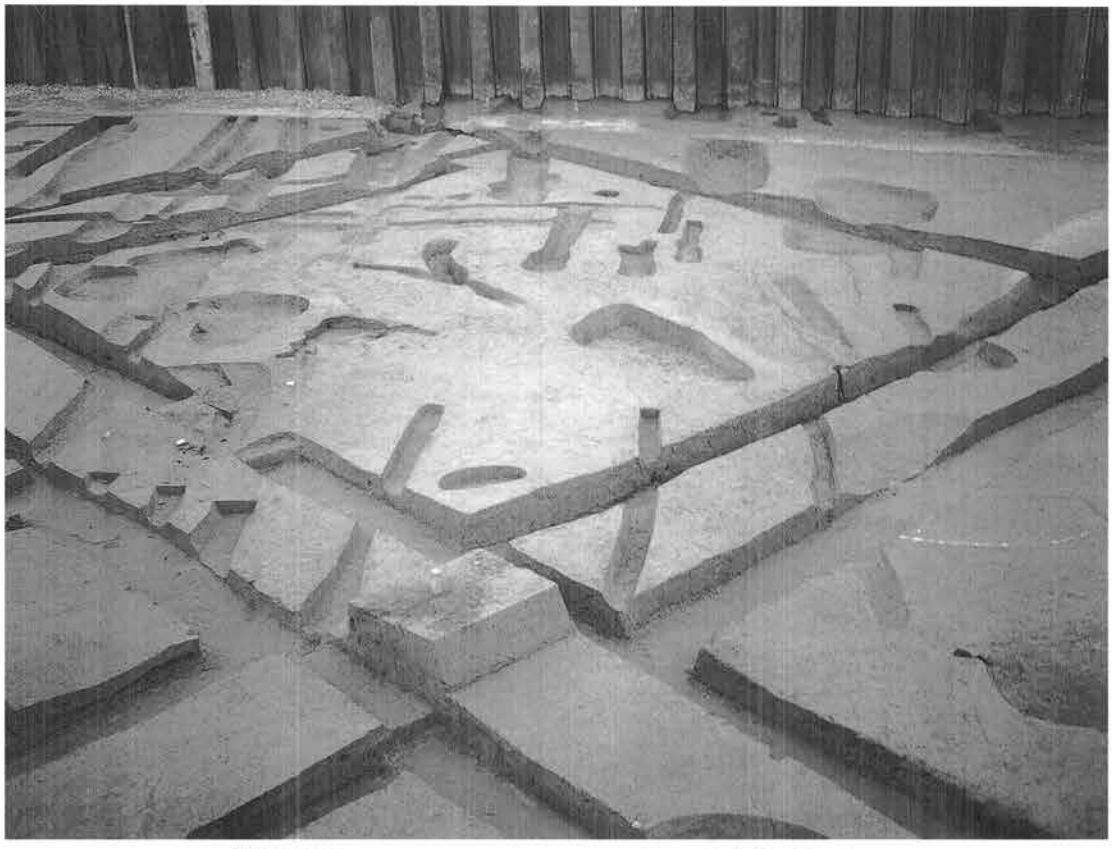
SD274　断面　南西から

SD316　断面　南西から

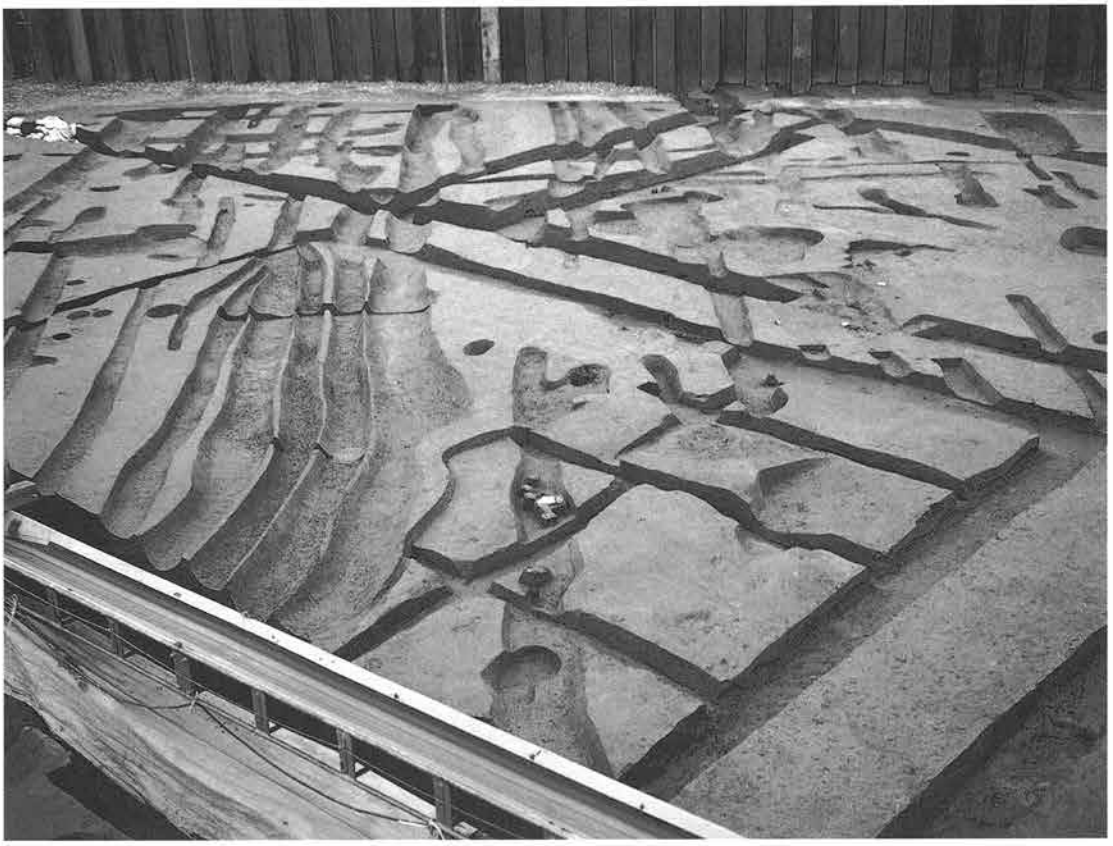
SD308　断面　南から



溝状遺構群２　４Ｅ～６Ｅ、４Ｆ～６Ｆグリッド完掘　西から

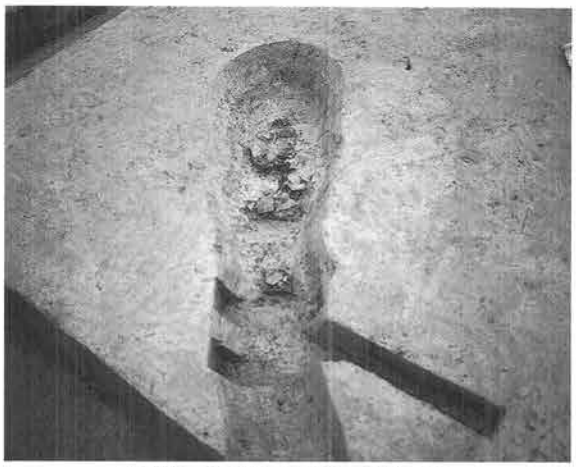


溝状遺構群２　４Ｅ～６Ｅ、４Ｆ～６Ｆグリッド完掘　北西から

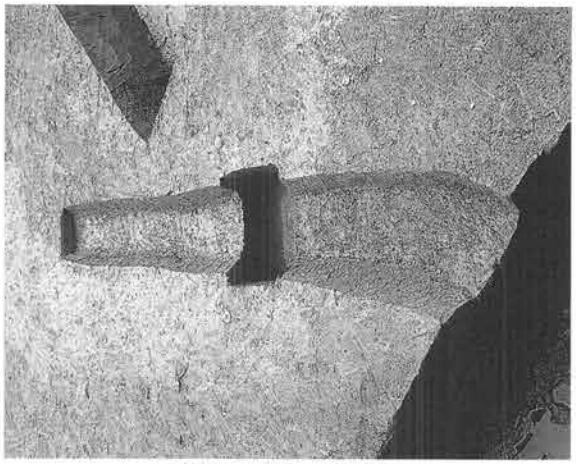


溝状遺構群２　４Ｅ～６Ｅ、４Ｆ～６Ｆグリッド完掘　北西から

溝状遺構群２　４Ｅ～６Ｅ、４Ｆ～６Ｆグリッド完掘　北西から

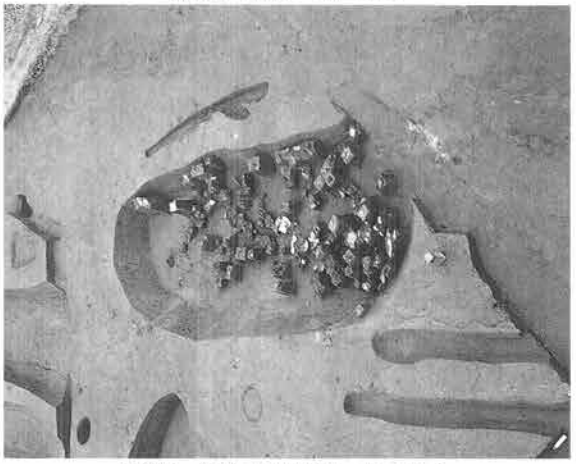


SD369　遺物出土状況　東南から

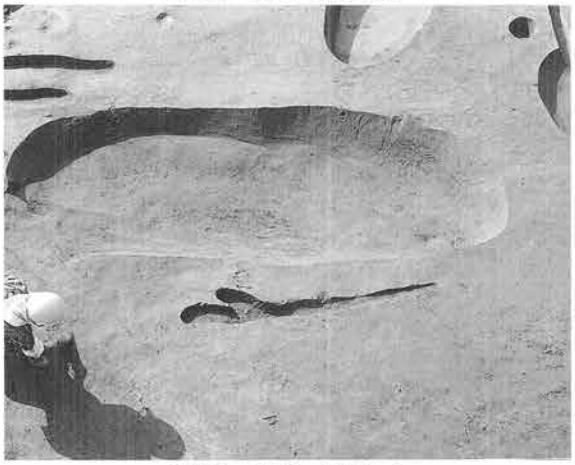


SD159　完掘　北西から

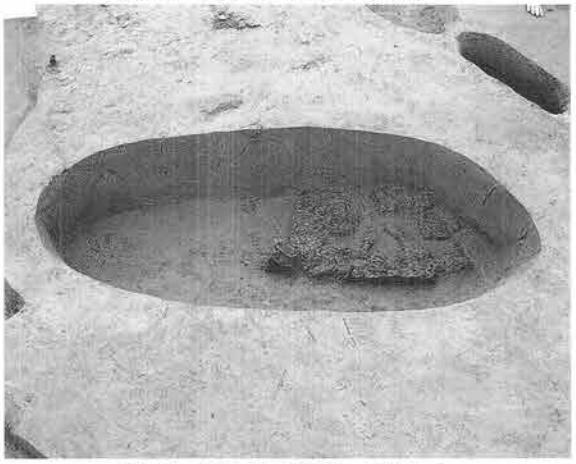
SK403　断面　北東から



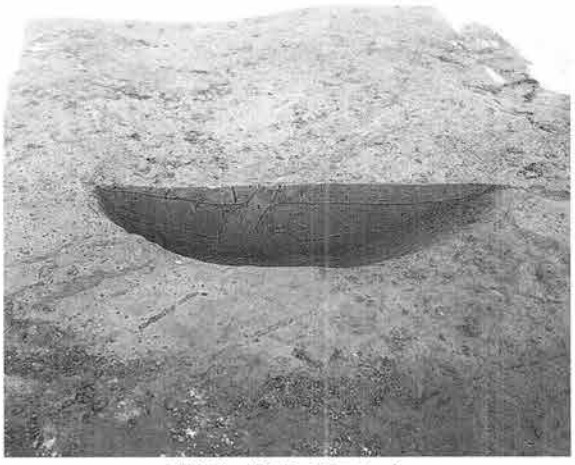
SK403　遺物出土状況　東南から



SK403　完掘　北東から

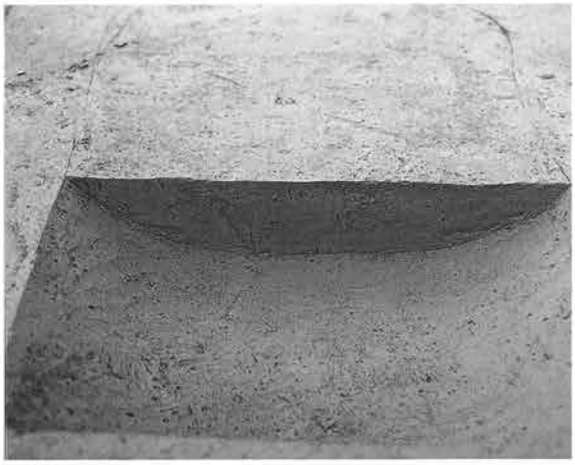


SK421　遺物出土状況　北西から



SK399　断面　南西から

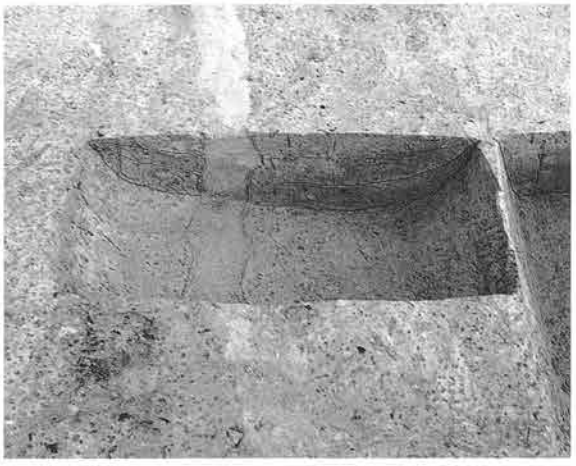
SK399　完掘　南西から



SD425　断面　東南から

SD407　断面　南西から

SD77　断面　北西から



SD386　断面　北西から

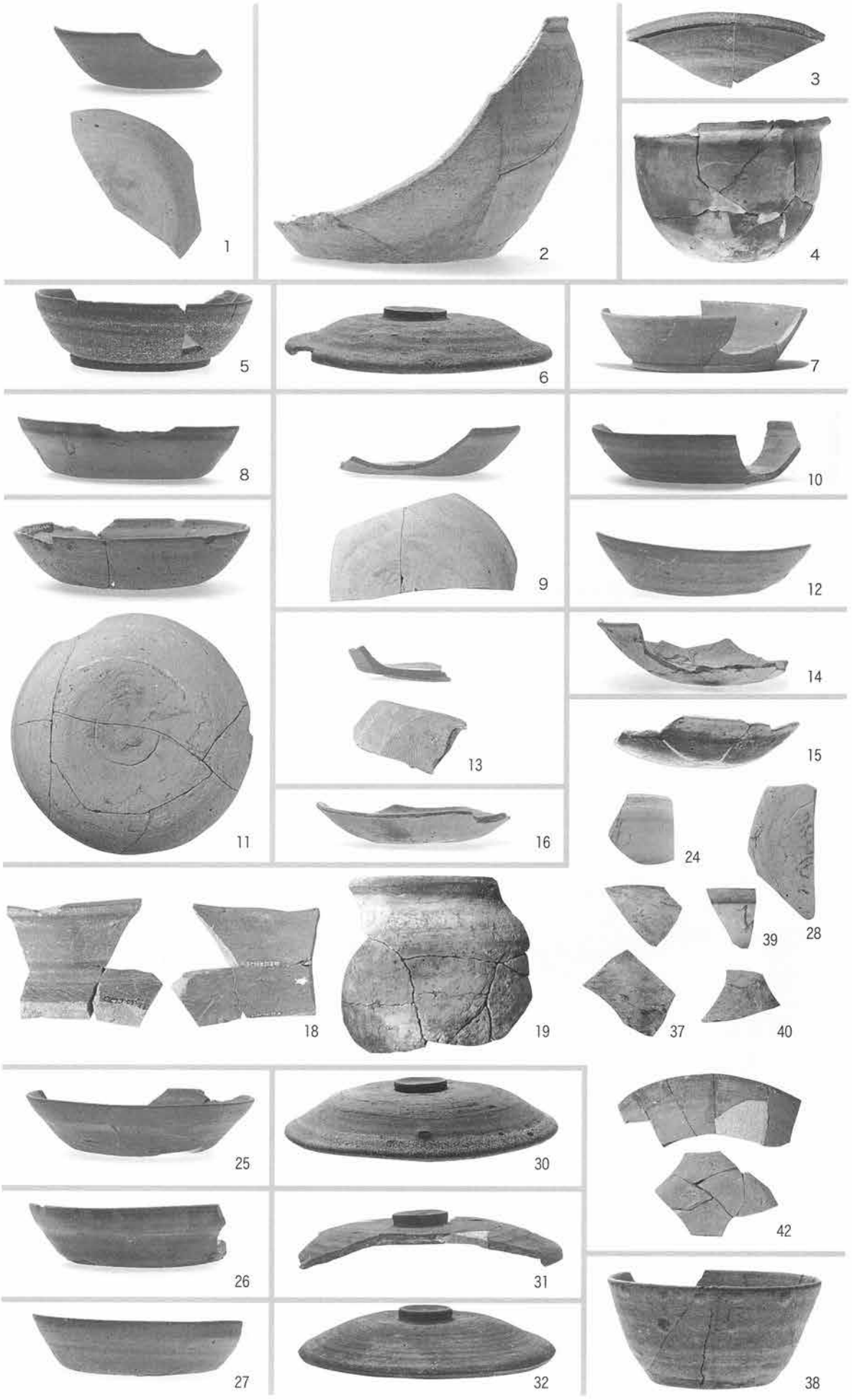
SD427　断面　北西から

SD78　断面　北西から

溝状遺構群３　３Ｅ、３Ｆ、４Ｅ～４Ｇグリッド完掘　北西から

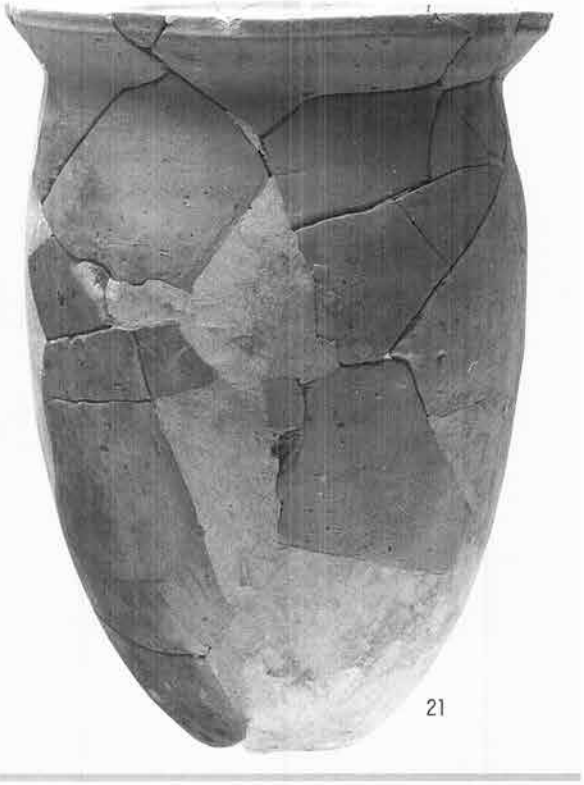
溝状遺構群３　３Ｅ、３Ｆ、４Ｅ～４Ｇグリッド完掘　北西から

Ⅶ層土器
1～4
Ⅷ層土器
5（SK1）
6（SX2）
7（SD218）
8～10（SD226）
11～16・18・19
（SX41）
24～28・30～32
（包含層）
火葬関連遺構
出土土器
37・38（SK100）
39・40（SK131）
42（P116）



17・20～22
(SX41)
23 (P276)

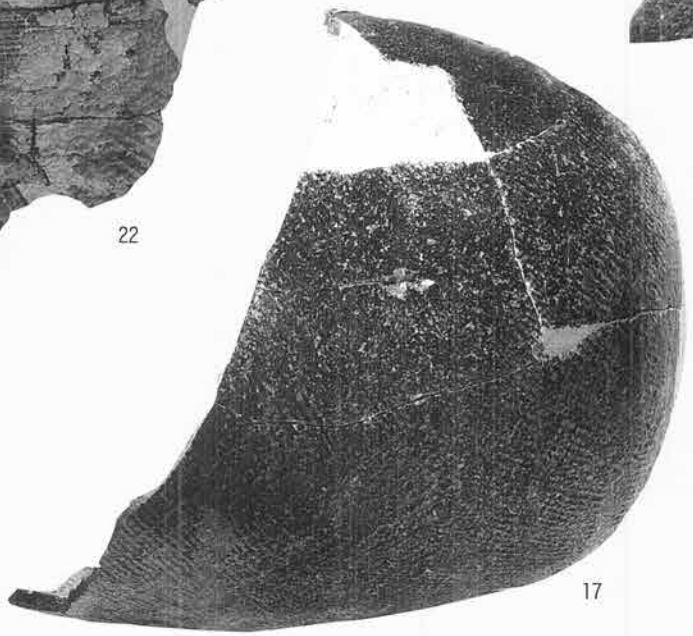
20



21

22

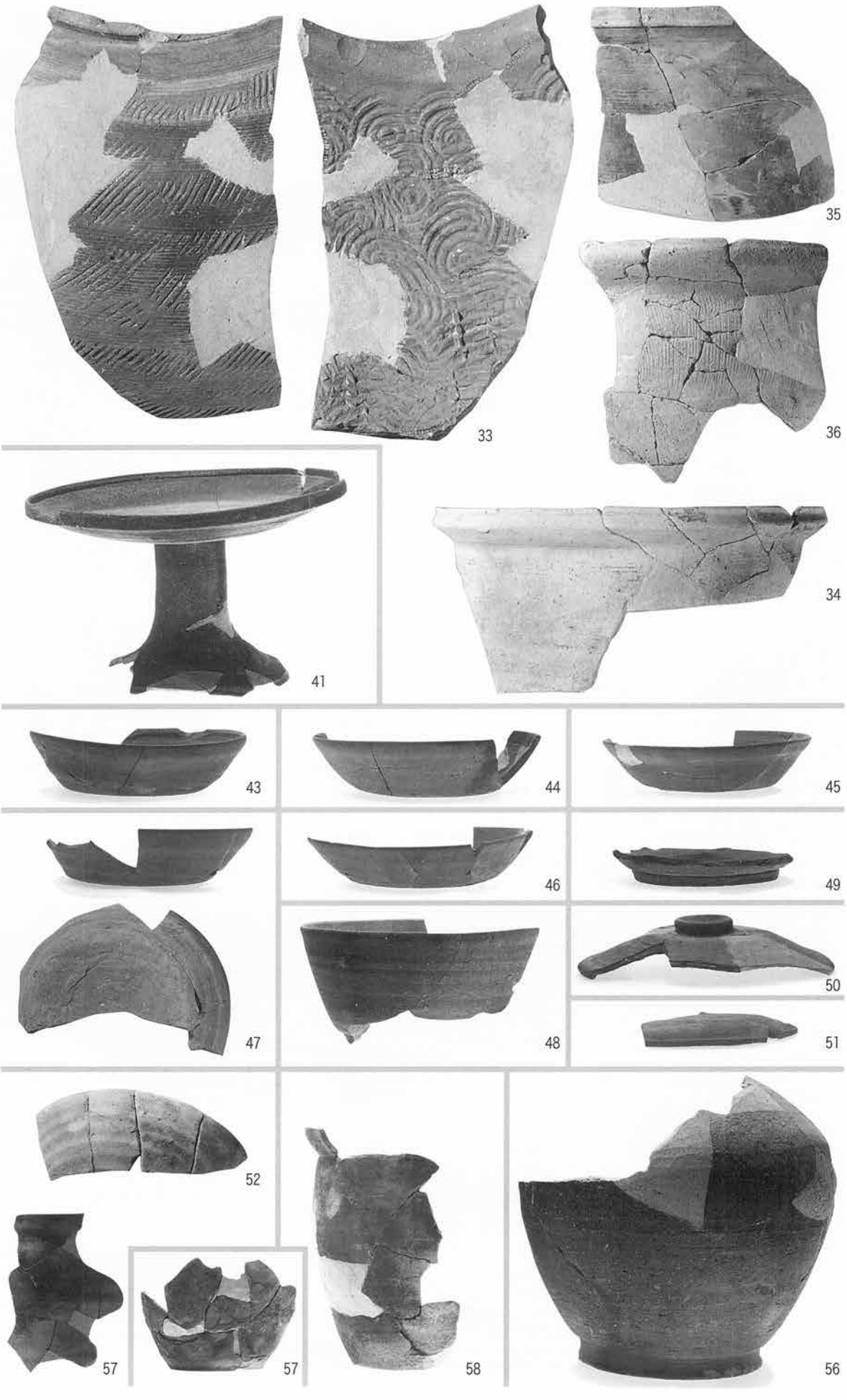
23



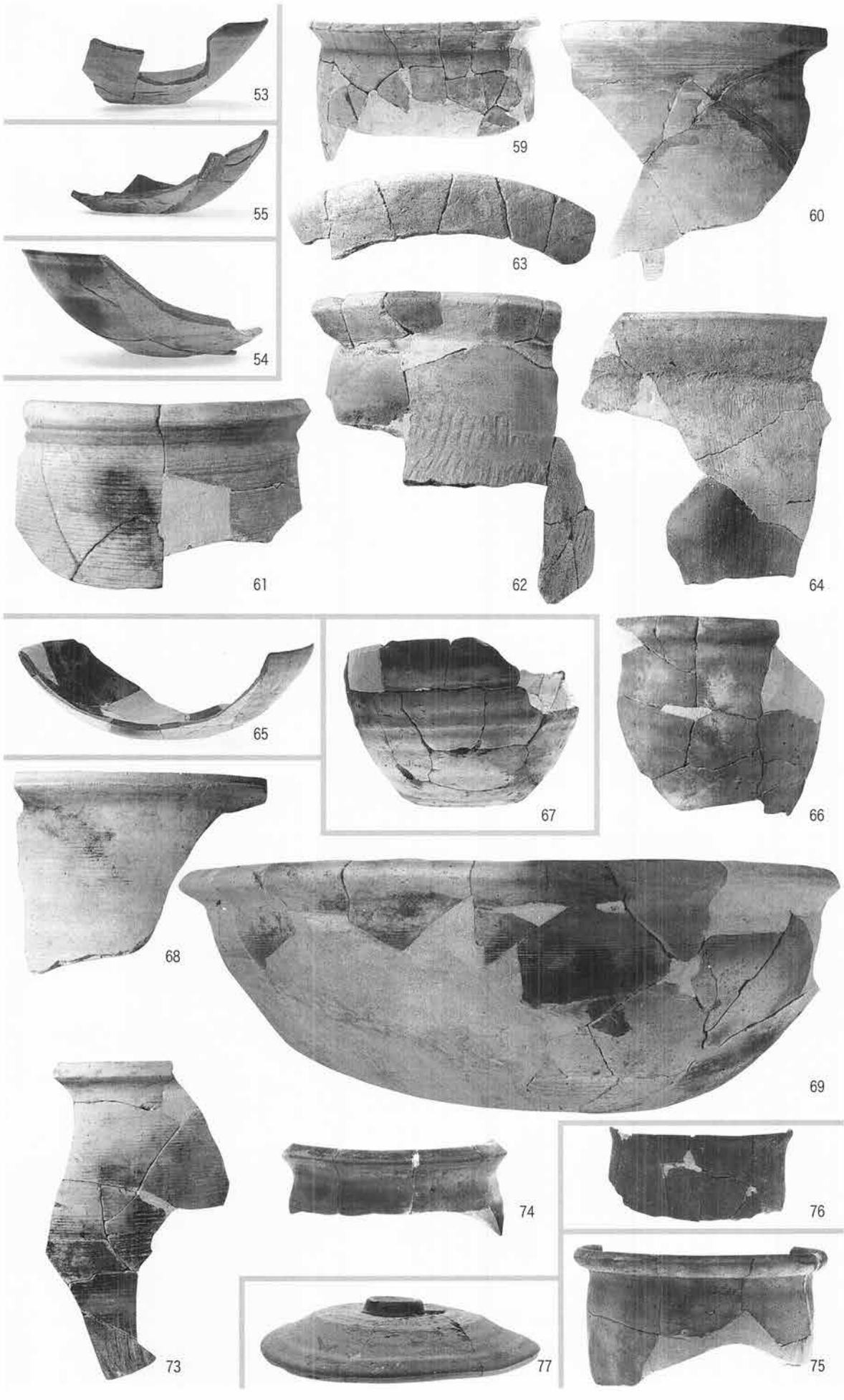
17

Ⅷ層出土土器
33～36（包含層）

火葬関連遺構
出土土器
41（P65）
43～52・56～58
（SX126）

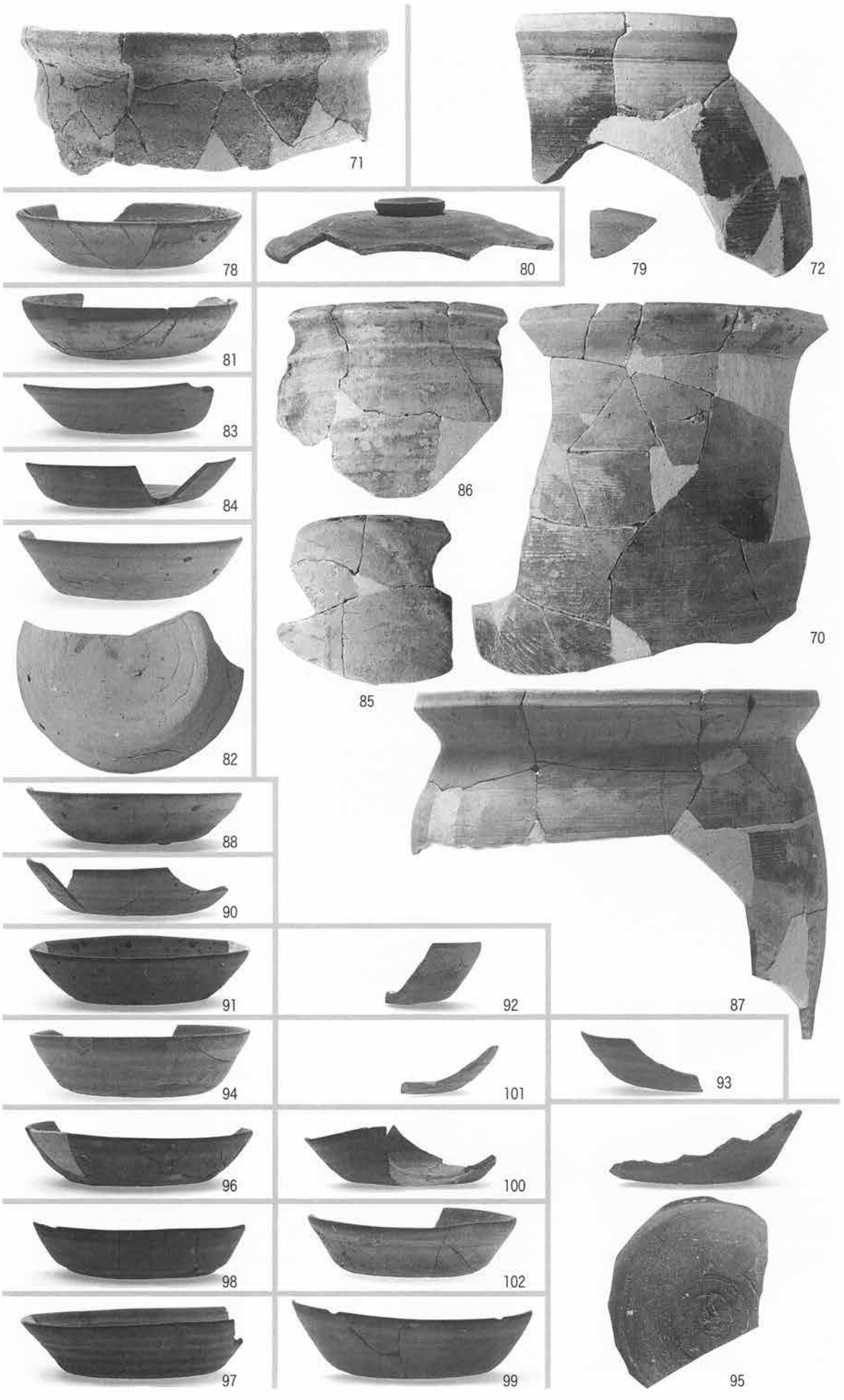


火葬関連遺構出土土器(3)、Ⅸ層土器(1)

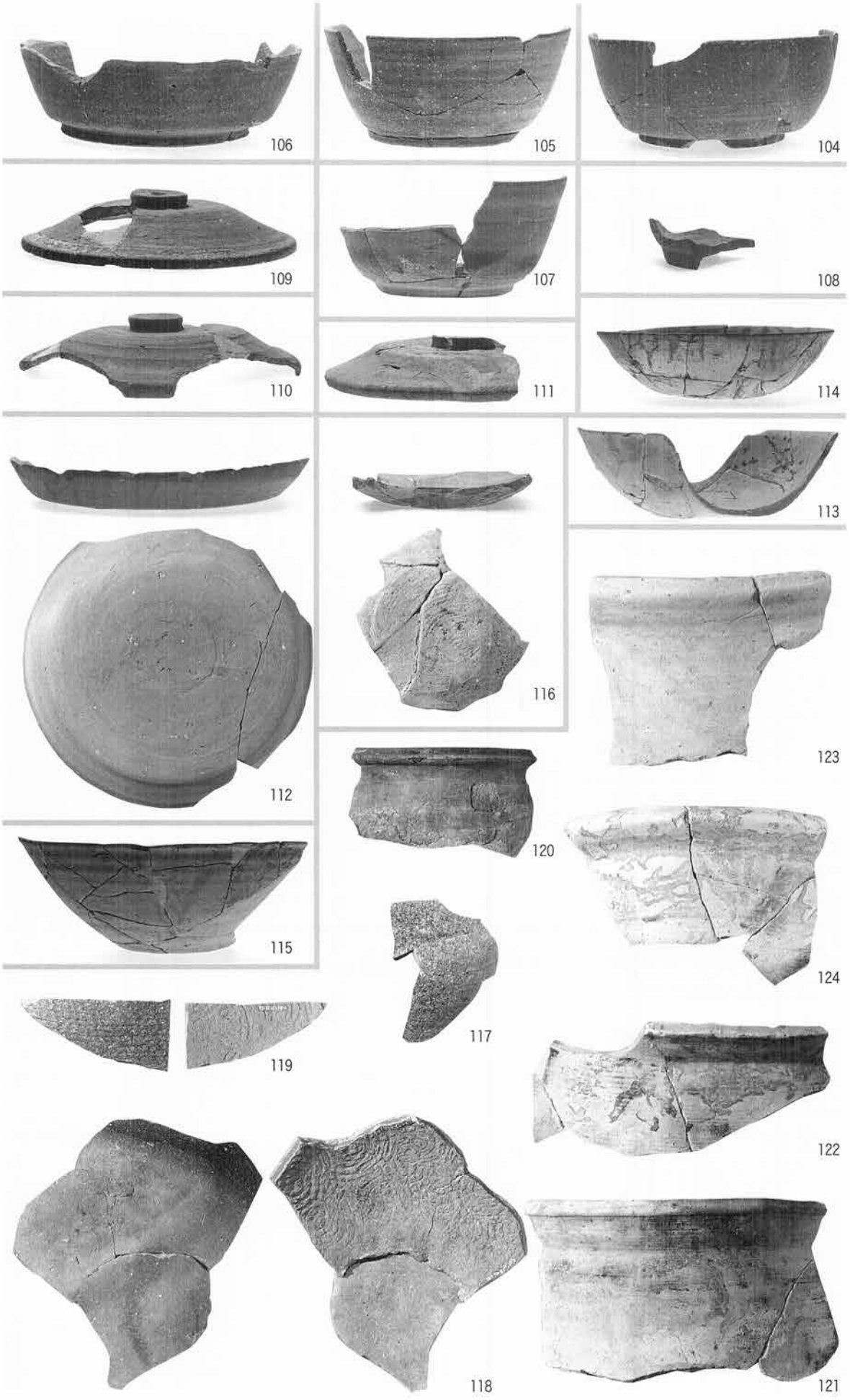


火葬関連遺構
出土土器
53～55
59～64
（SX126）
Ⅸ層土器
65～69（SK4）
73（SX34）
74（SK10）
75・76（SK30）
77（P15）

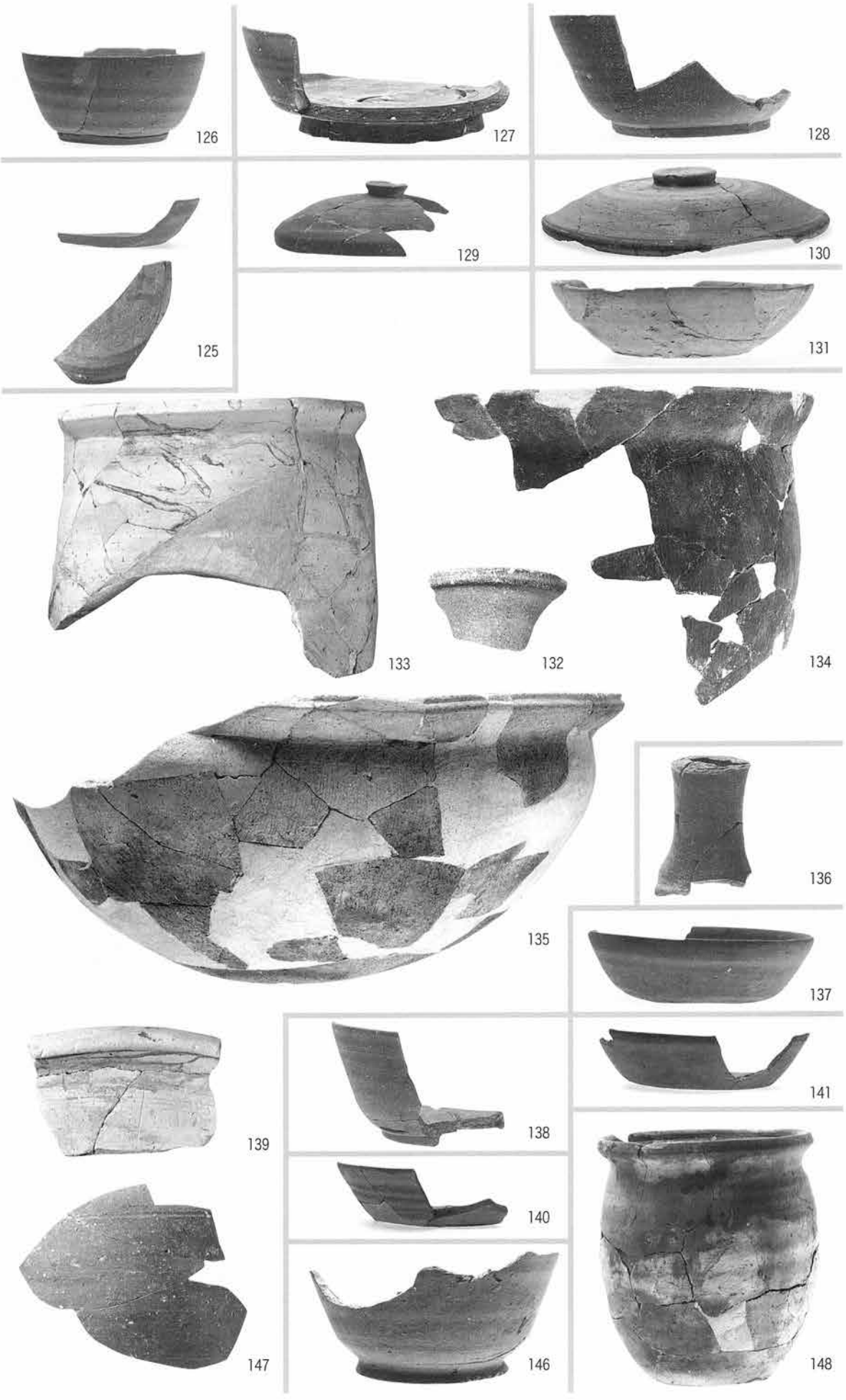
Ⅸ層土器
70～72（SK123）
78～80（SK112）
81～87（SK117）
88（SK150）
90（SD179）
91～102（包含層）

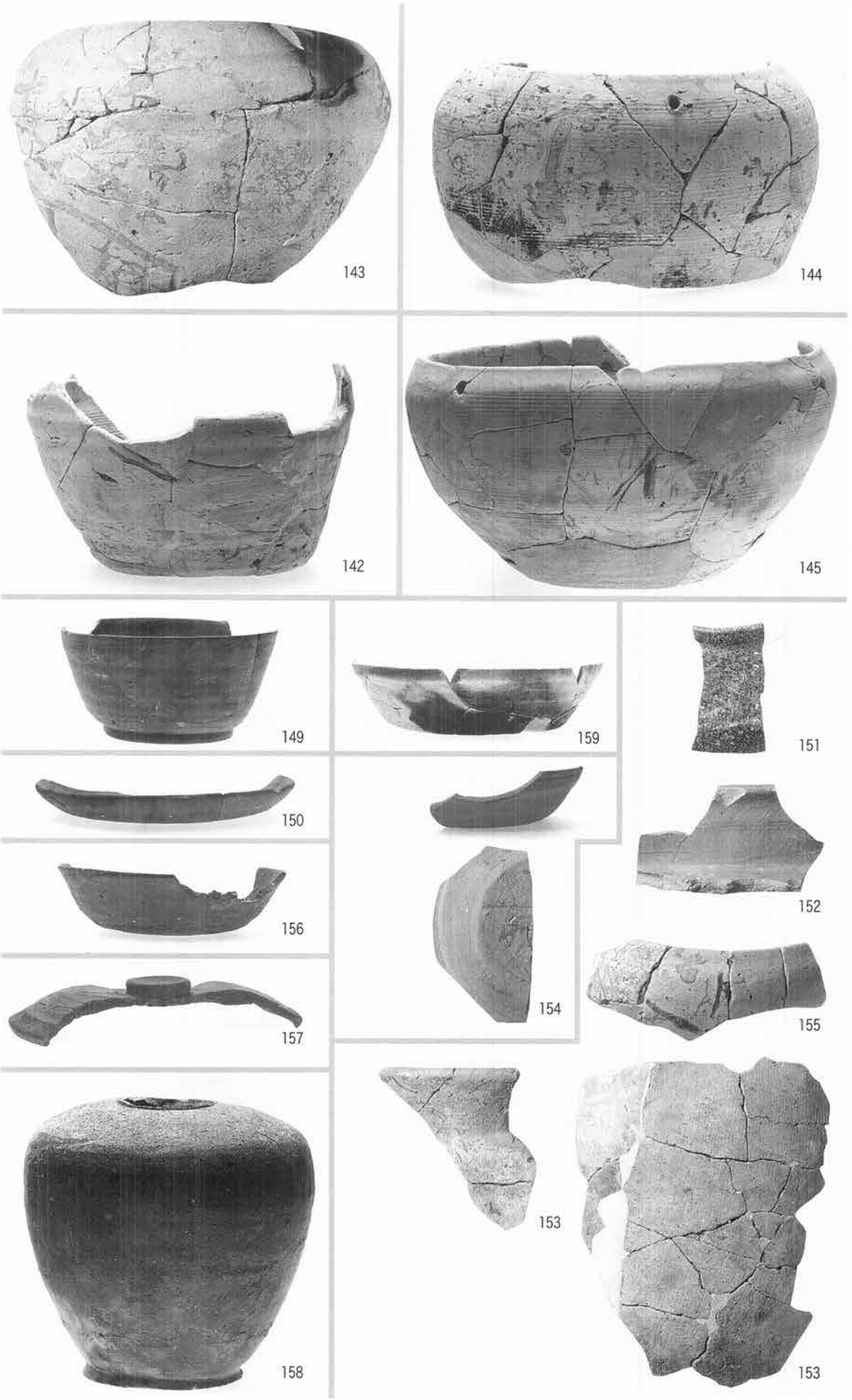


Ⅸ層土器
104～124
（包含層）



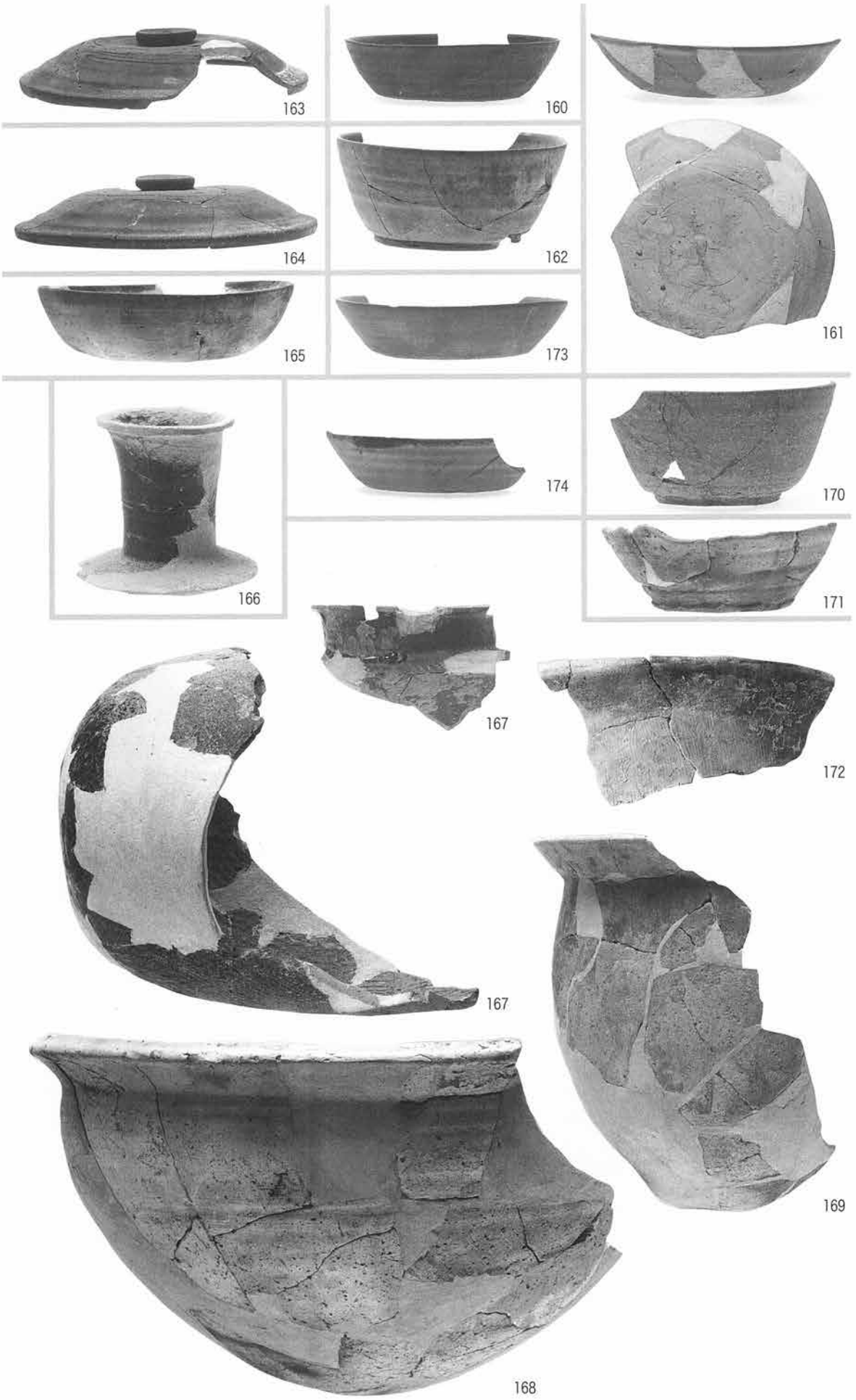
Ⅸ層土器
125～135
(SX36)
136（SX43）
137（SK40）
138（SK51）
139（SX42）
140・141
(SK125)
146～148
(SK125)



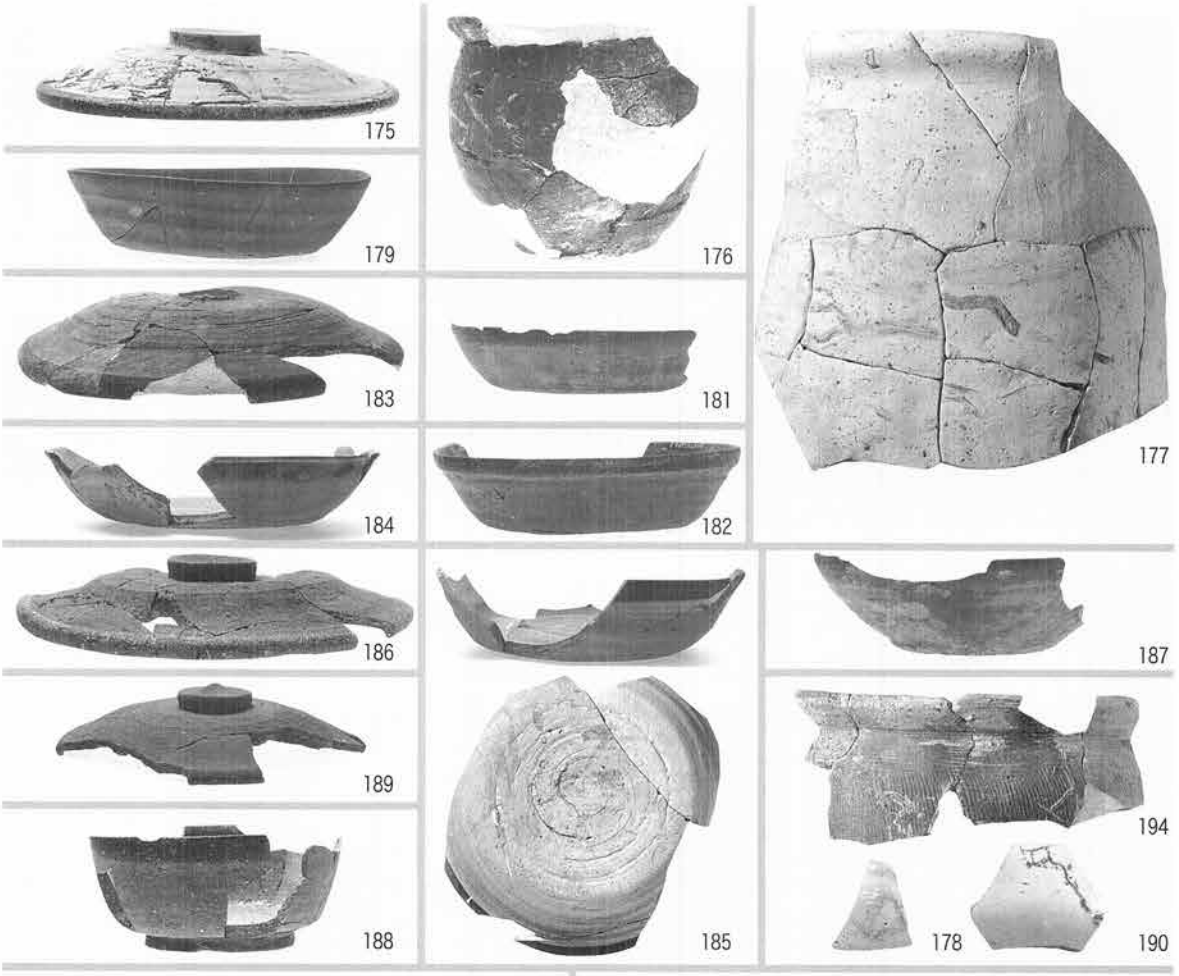


X層土器
142～145（SK125）
149・150（SK133）
151・152（SK135）
153（SK132）
154（SD140）
155（SD147）
156・157（SD152）
158（P149）
159（P168）

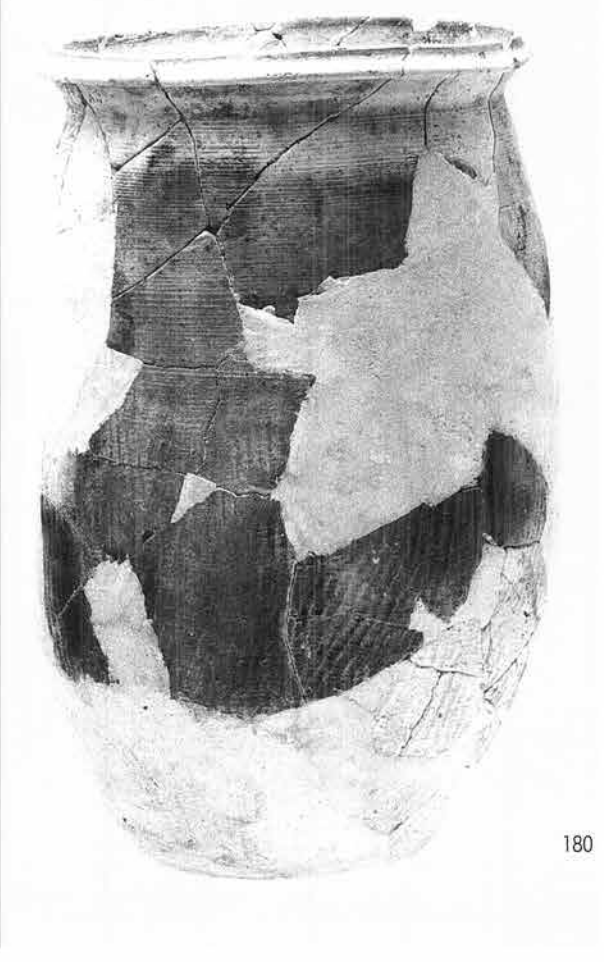
X層土器
160～168
(SK170)
169 (SD166)
170～172
(SX181)
173 (SK185)
174 (SK187)



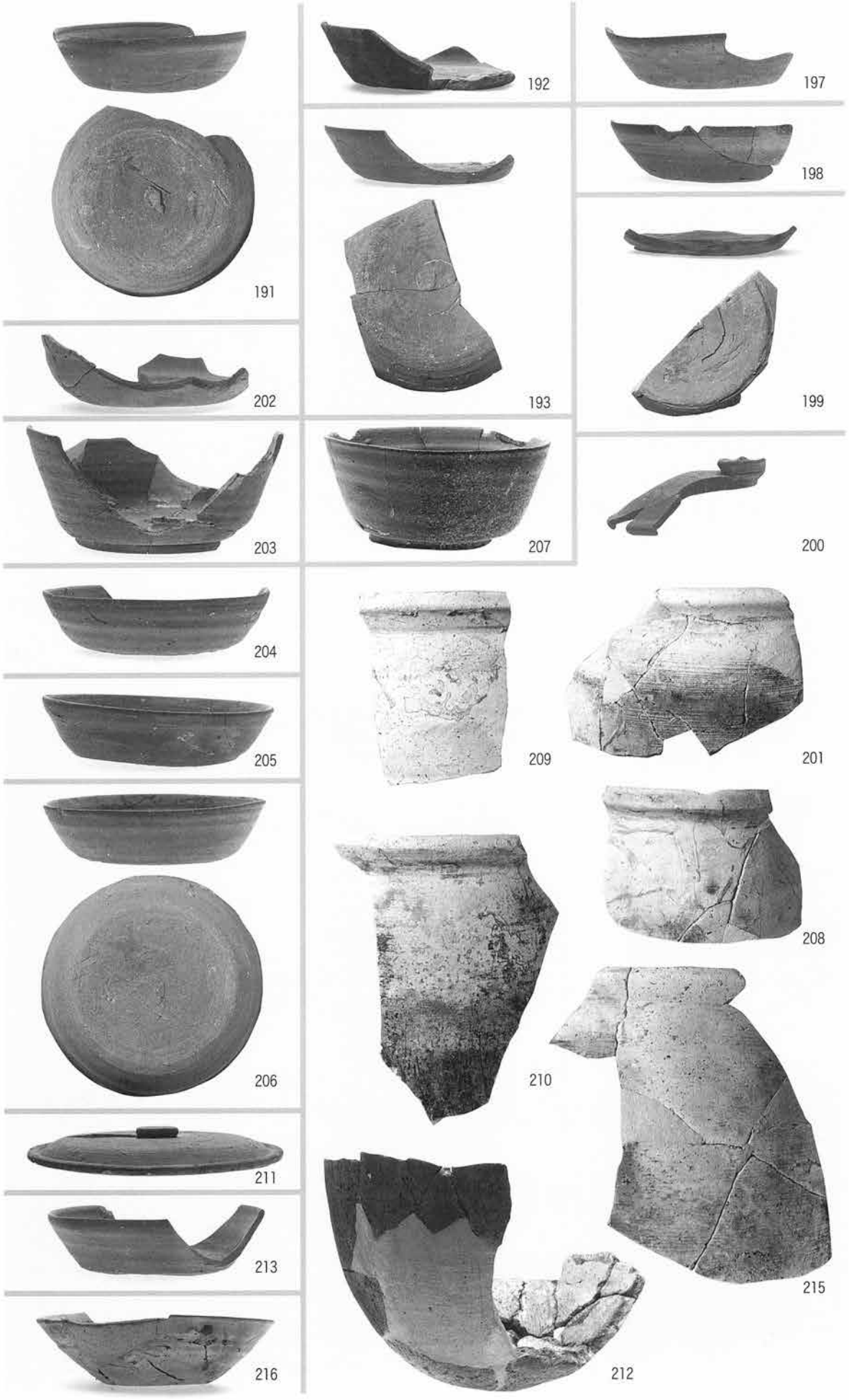
X層土器(3)



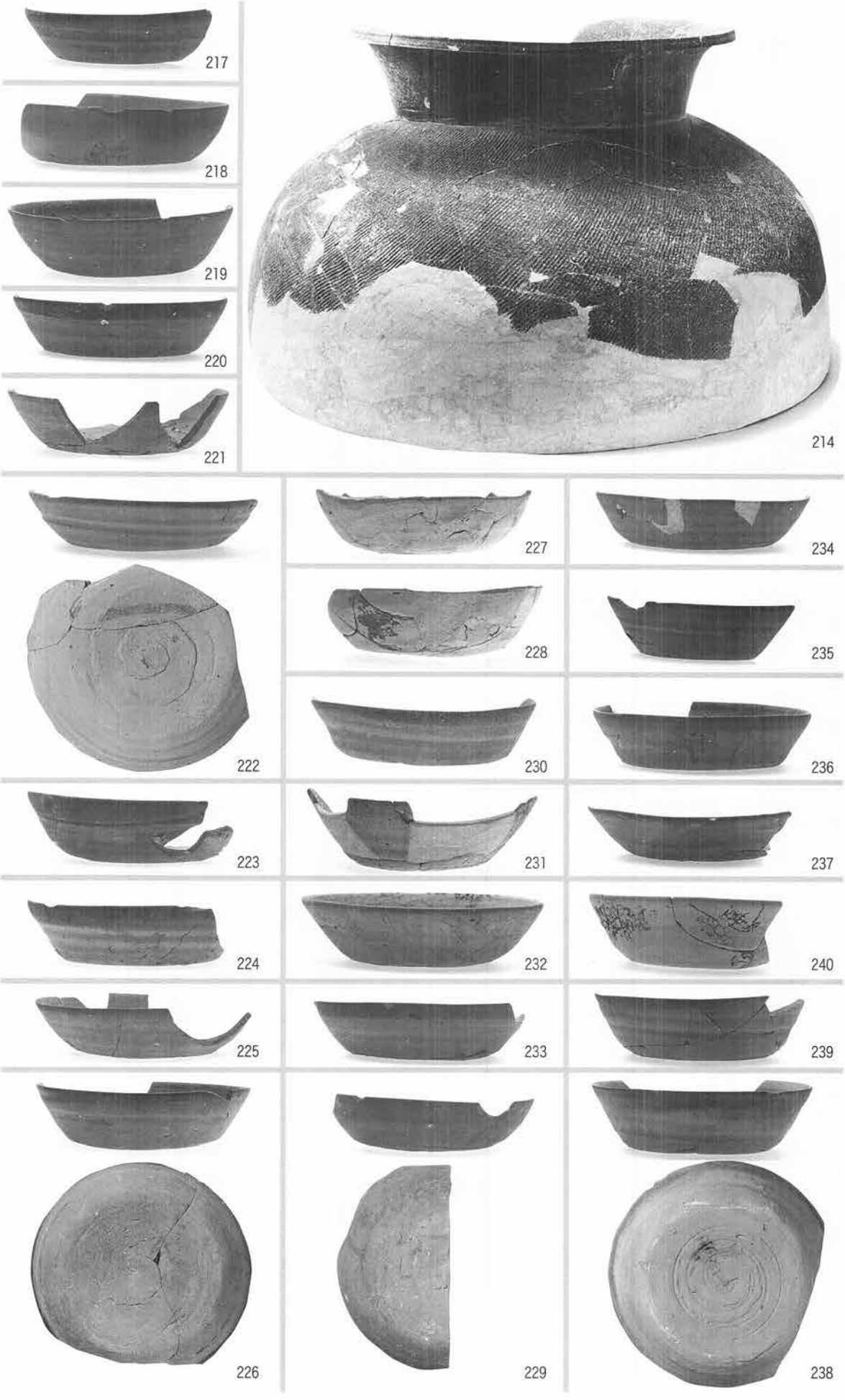
X層土器
175～177
(SK190)
178 (P191)
179 (SD196)
180 (SK174)
181 (SK251)
182 (SK214)
183 (SD213)
184・185
(SX231)
186 (SD235)
187 (SD257)
188・189
(SD265)
190 (SD251)
194 (SD299)
195 (SD273)
196 (SK262)



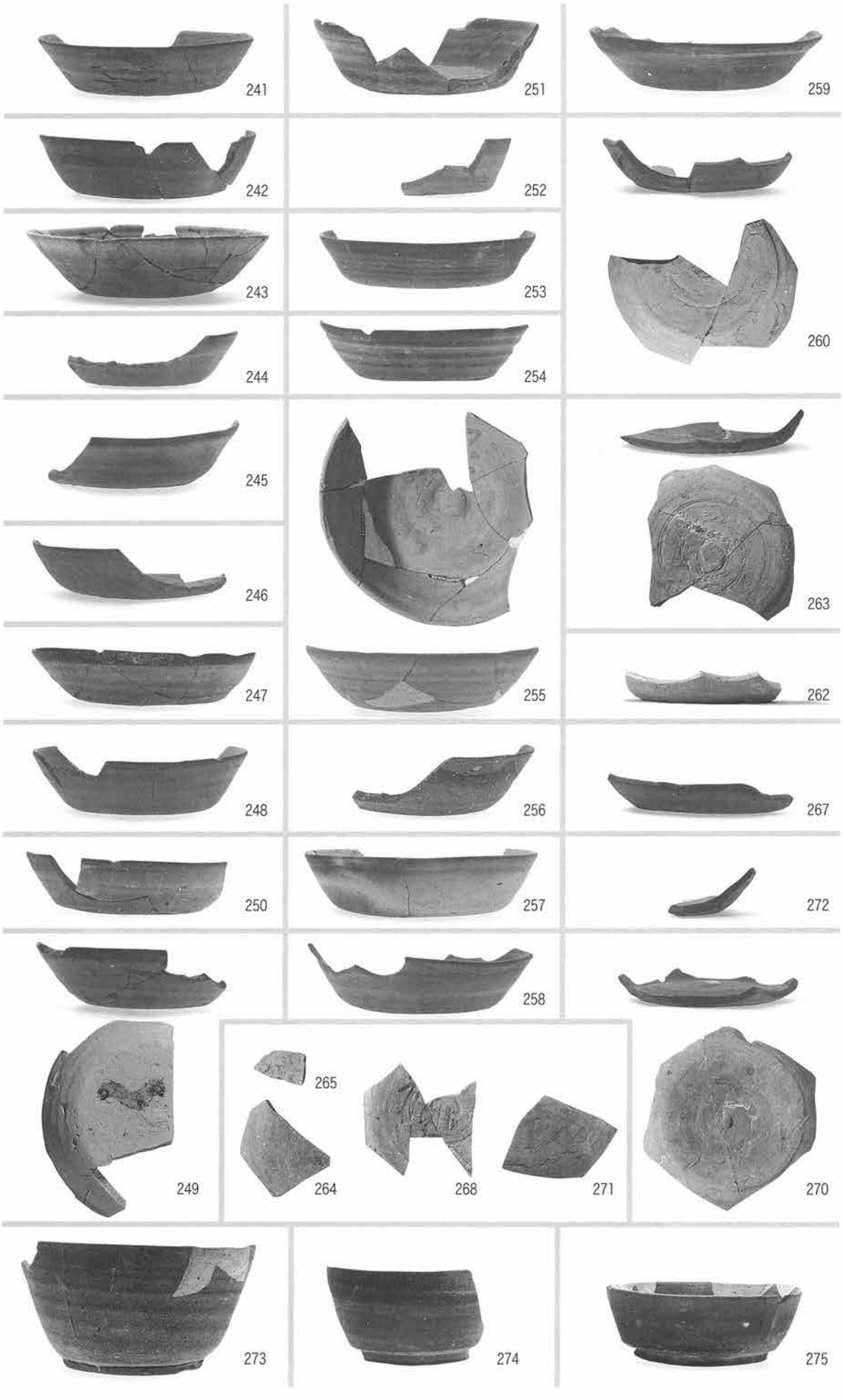
X層土器
191 (SK255)
192 (SD244)
193 (SD300)
197 (SX309)
198～201
(SK312)
202 (SK333)
203 (SK352)
204～210
(SK354)
211 (SK343)
212 (SK353)
213 (SD356)
215 (SK358)
216 (SD369)

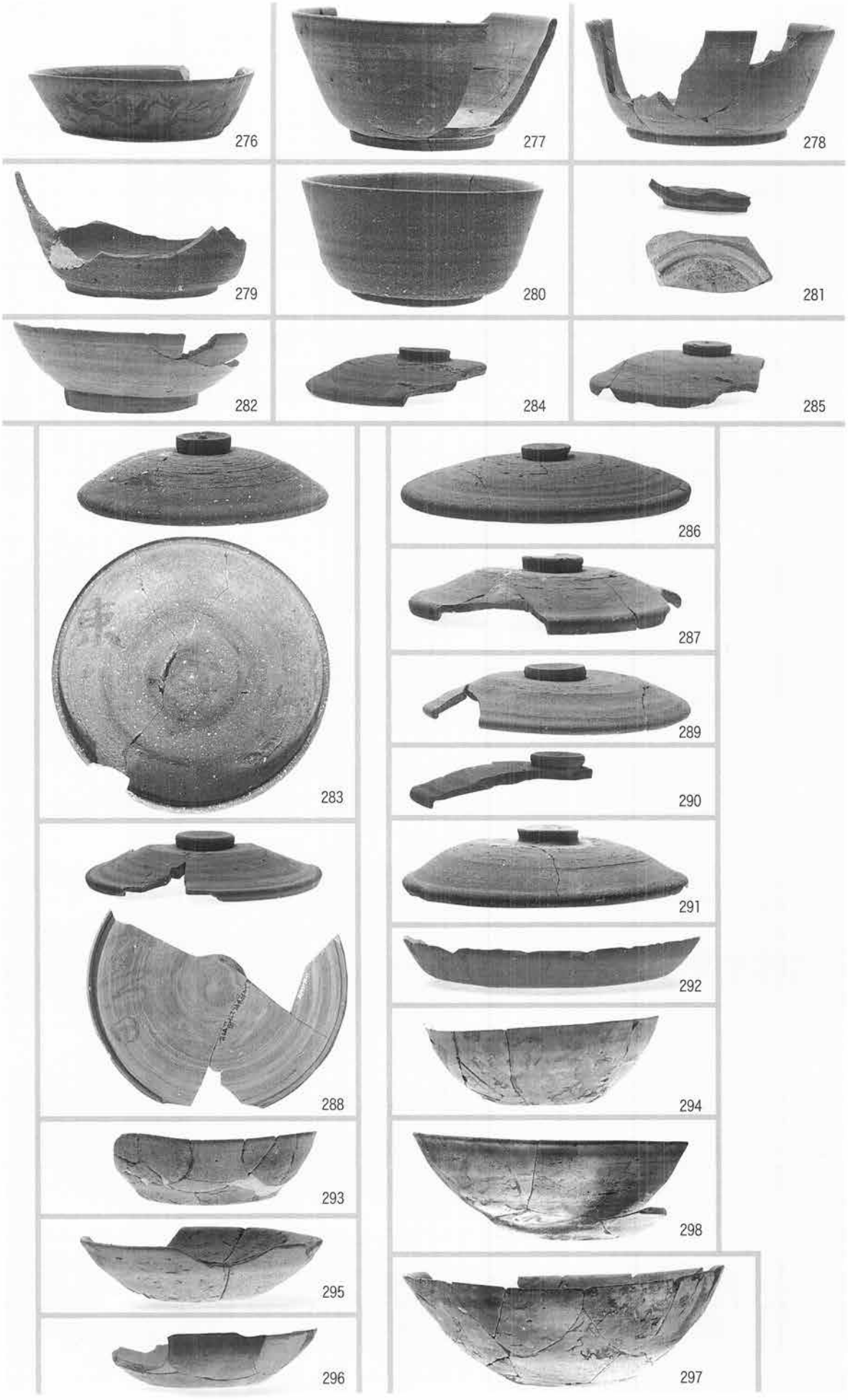


X層土器
214（SX371）
217～240
（包含層）



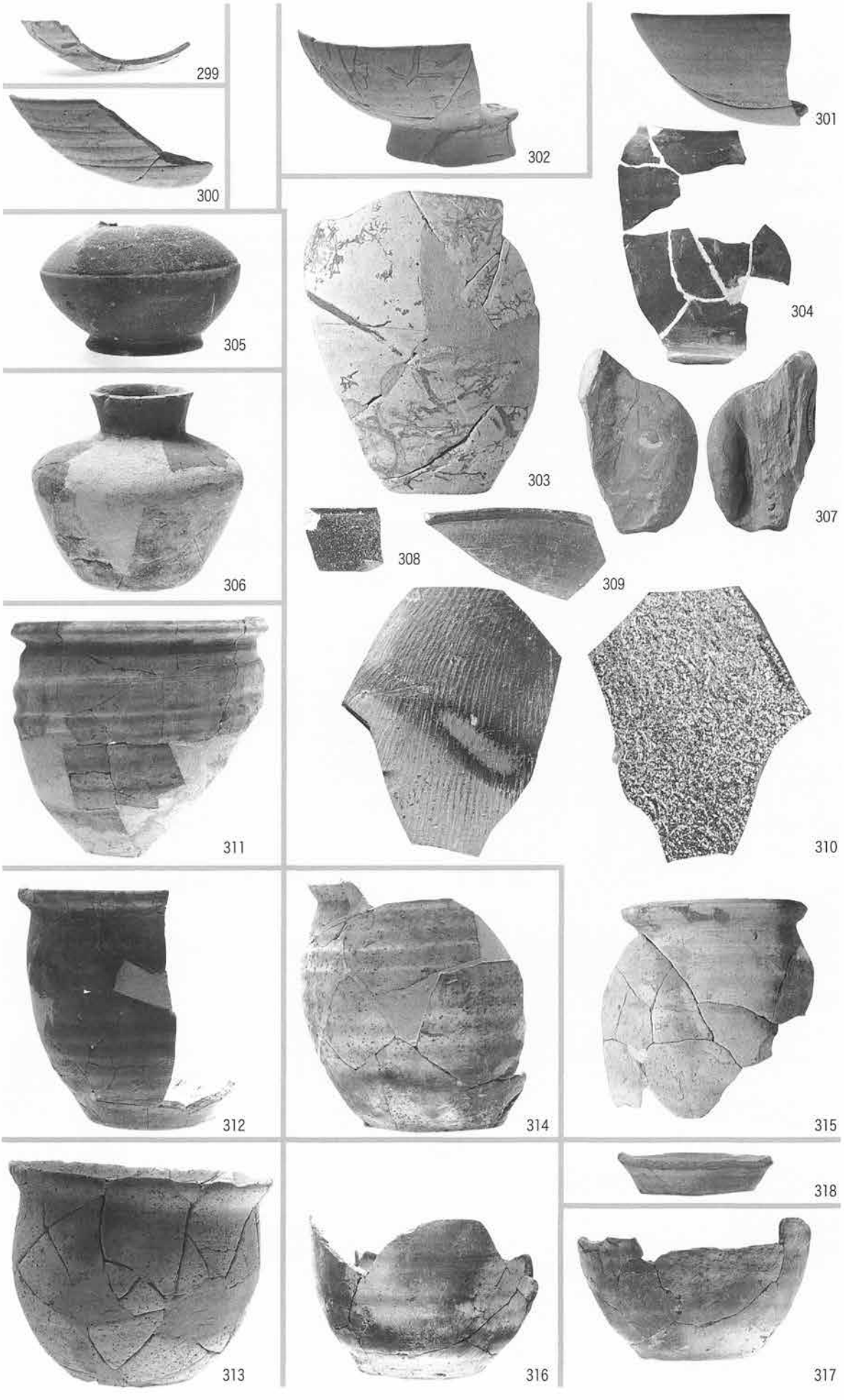
X層土器
241～260
262～265
267・268
270～275
（包含層）



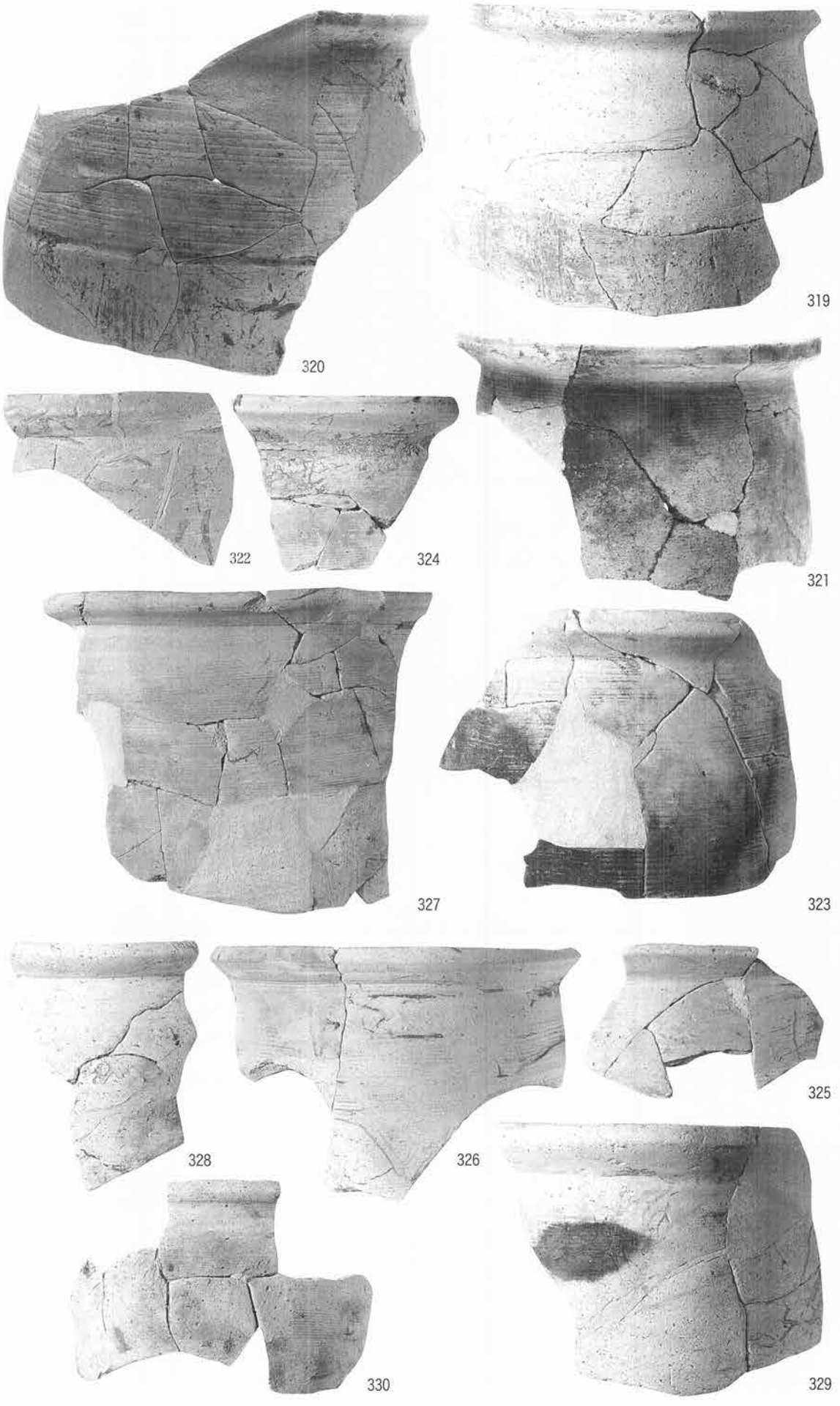


X層土器
276～298（包含層）

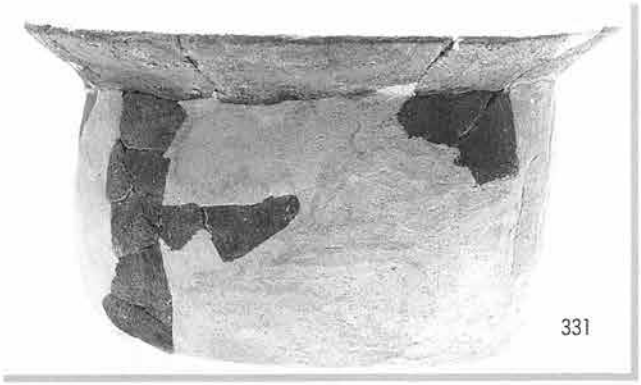
X層出土土器
299～318
（包含層）

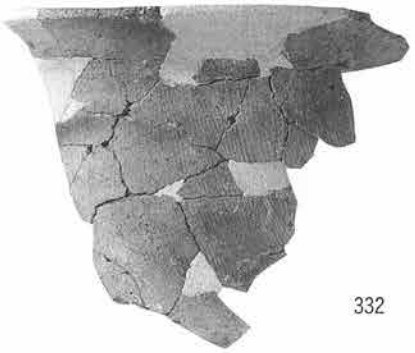


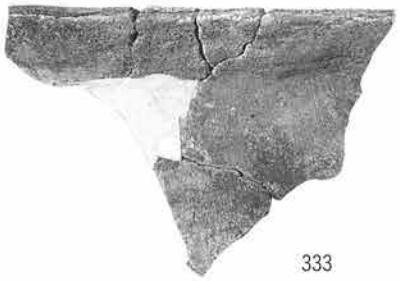
X層土器
319～330（包含層）



X層土器
331～340
（包含層）


331


332

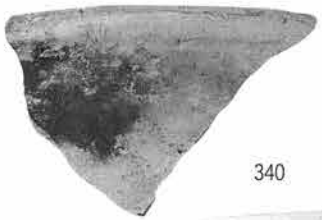

333

333

335

334

337

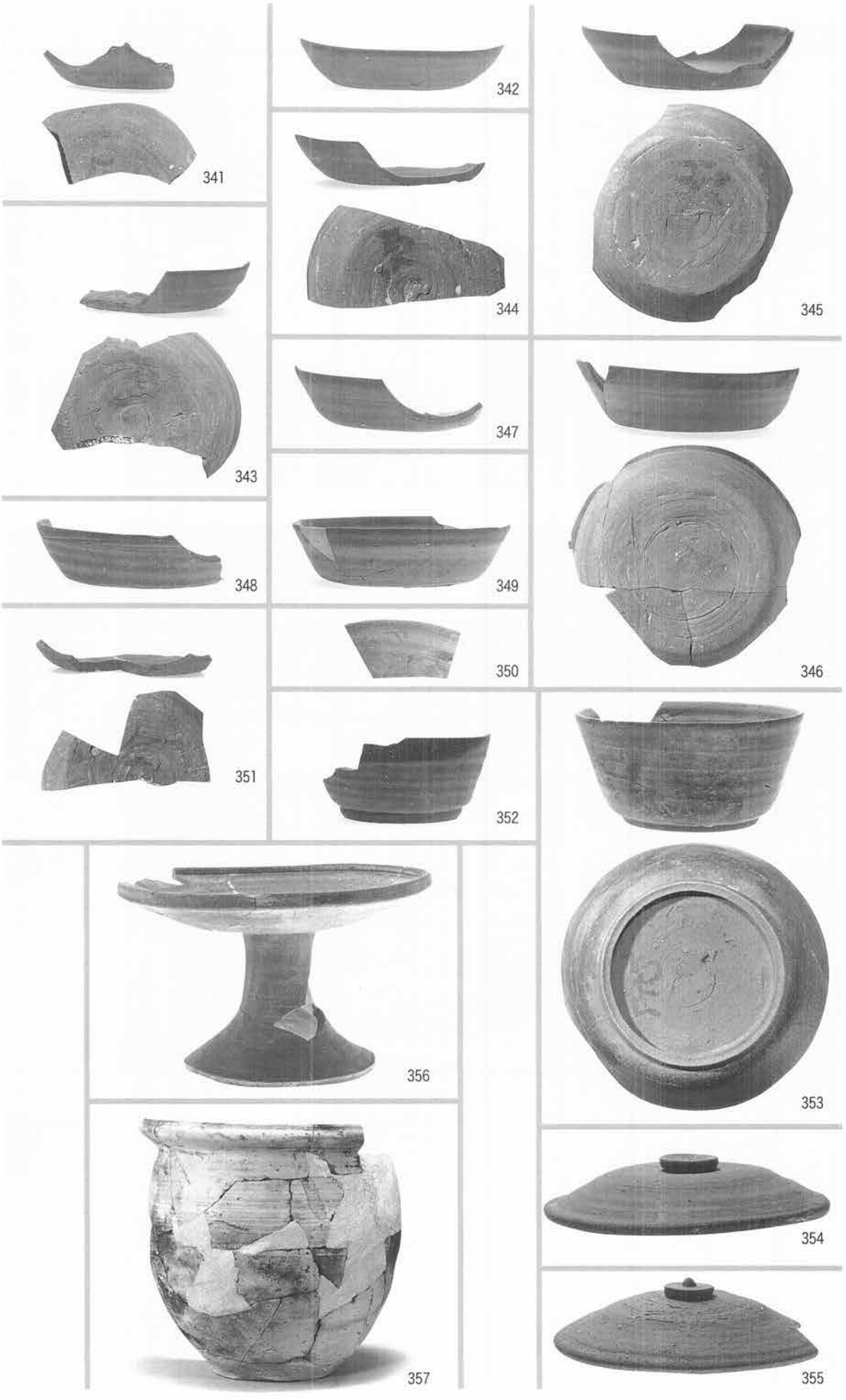

340

339

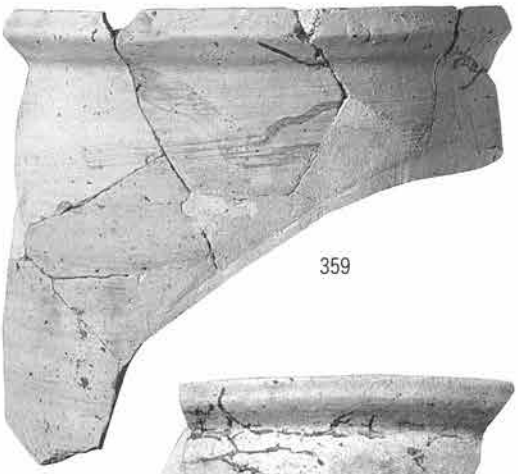
336

338

XI層土器
341（SK421）
342～357
（SK403）



XI層土器
358・359・360・
361
(SK403)
362～367 (SK400)



359

358

360

365

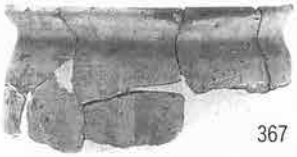
361

362

363

364

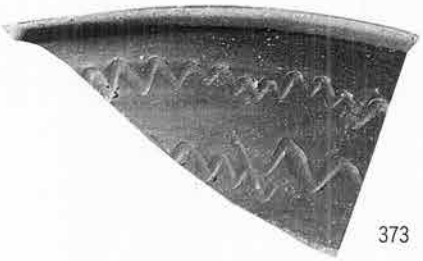
366

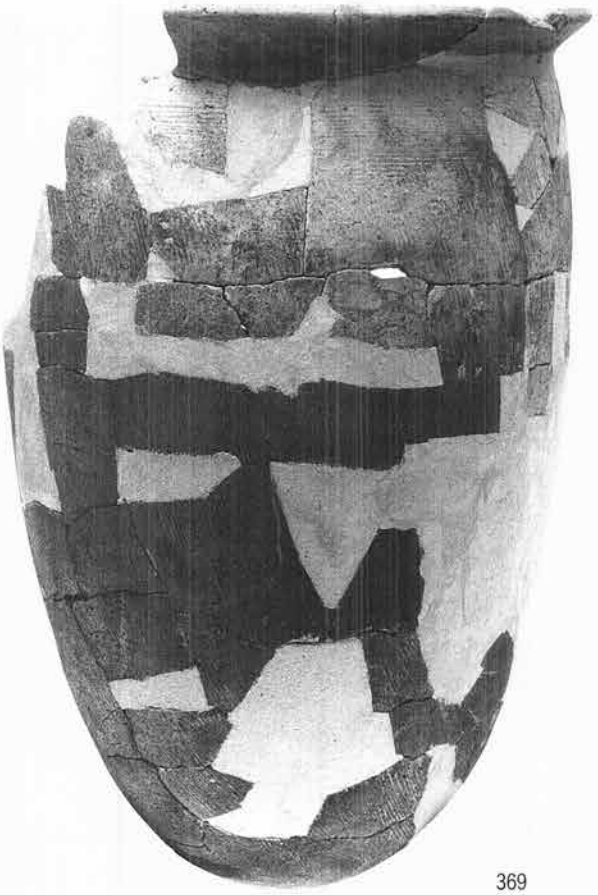


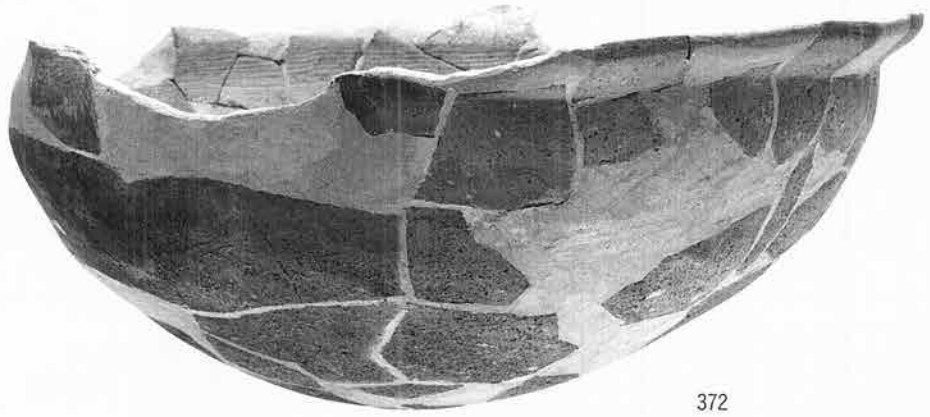
367

XI層土器
368・369（SK400）
370（SK438）
371（SK442）
372・373（SD77）
374～375（SD75）
379・380（SD78）

368


373


369


372

370

371

379

380

375

374

XI層土器
376（SD75）
377・378
（SD386）
381～389
（包含層）
出土地点・層位
不明土器
390～392

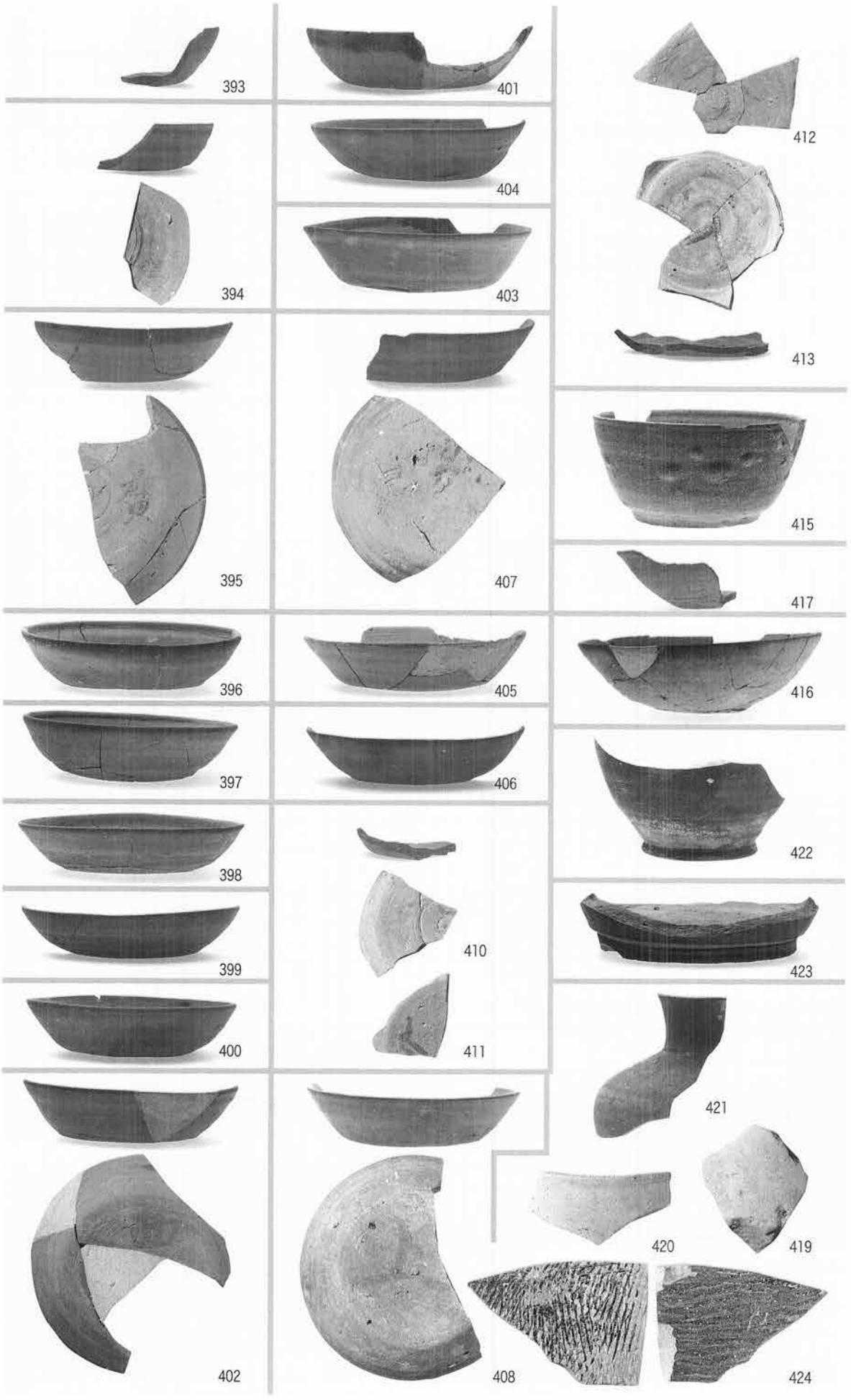
376

378

377
381
383
384
386
385
388
389
387

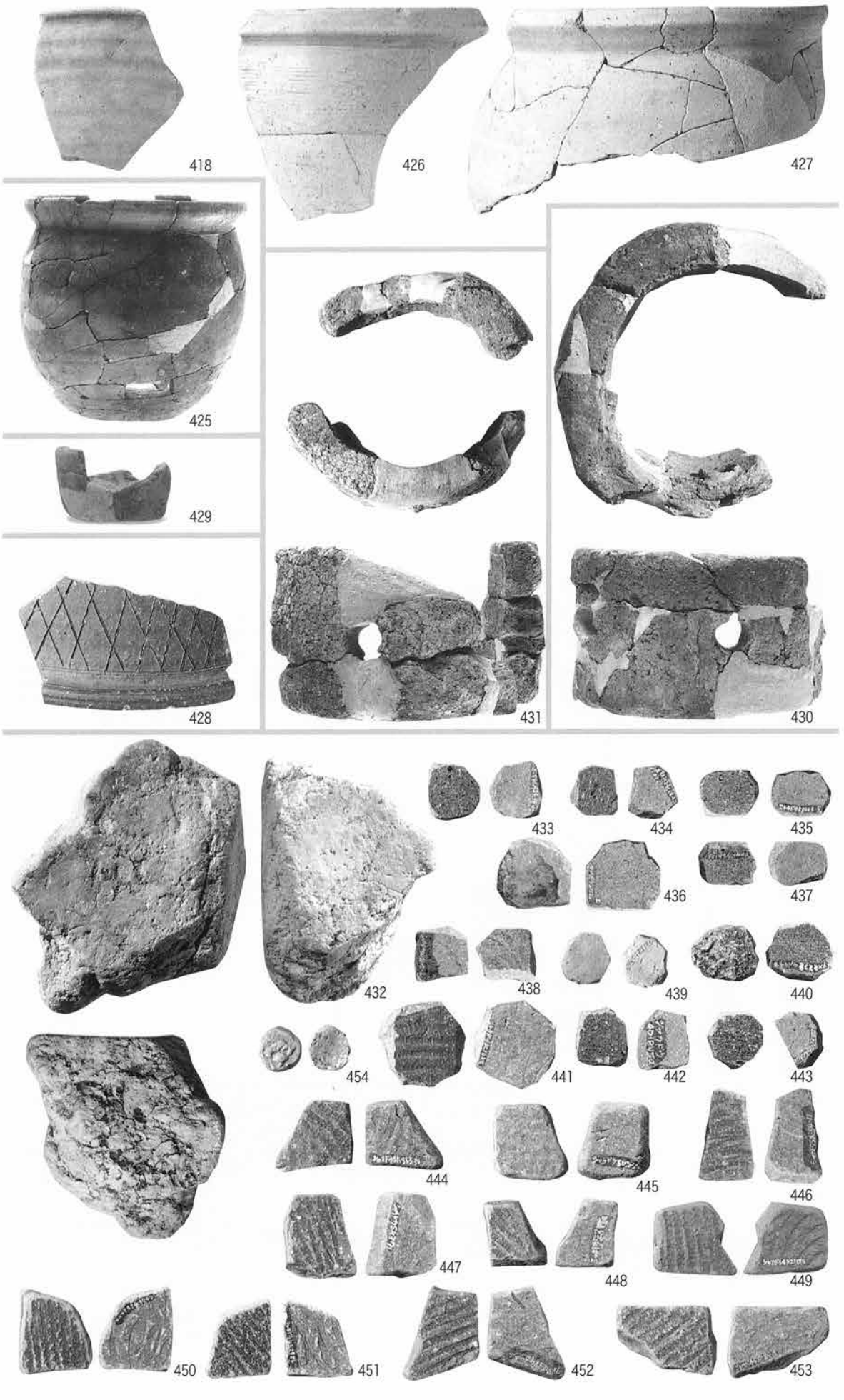
390
391
392

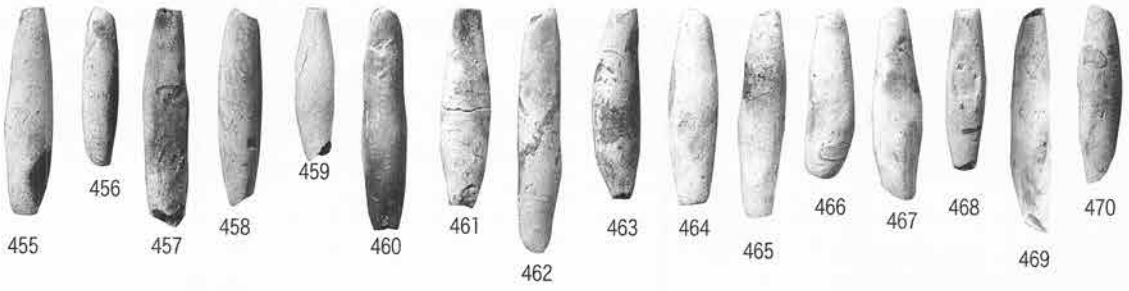
出土地点・層位不明土器(2)



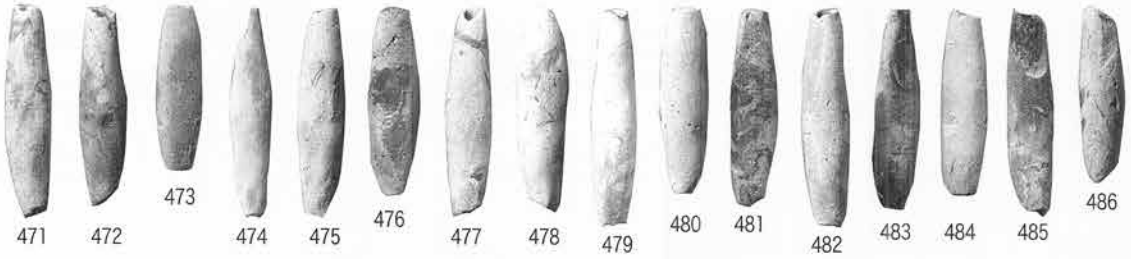
出土地点・層位不明土器
393～408
410～413
415～417
419～424

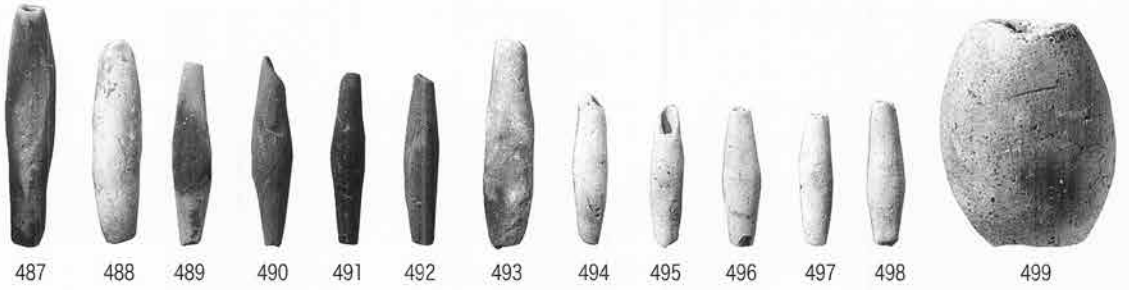
出土地点・層位
不明土器
418・425～427
土製品
428～454

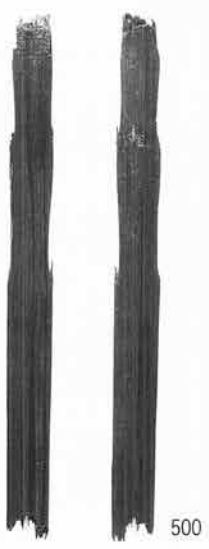




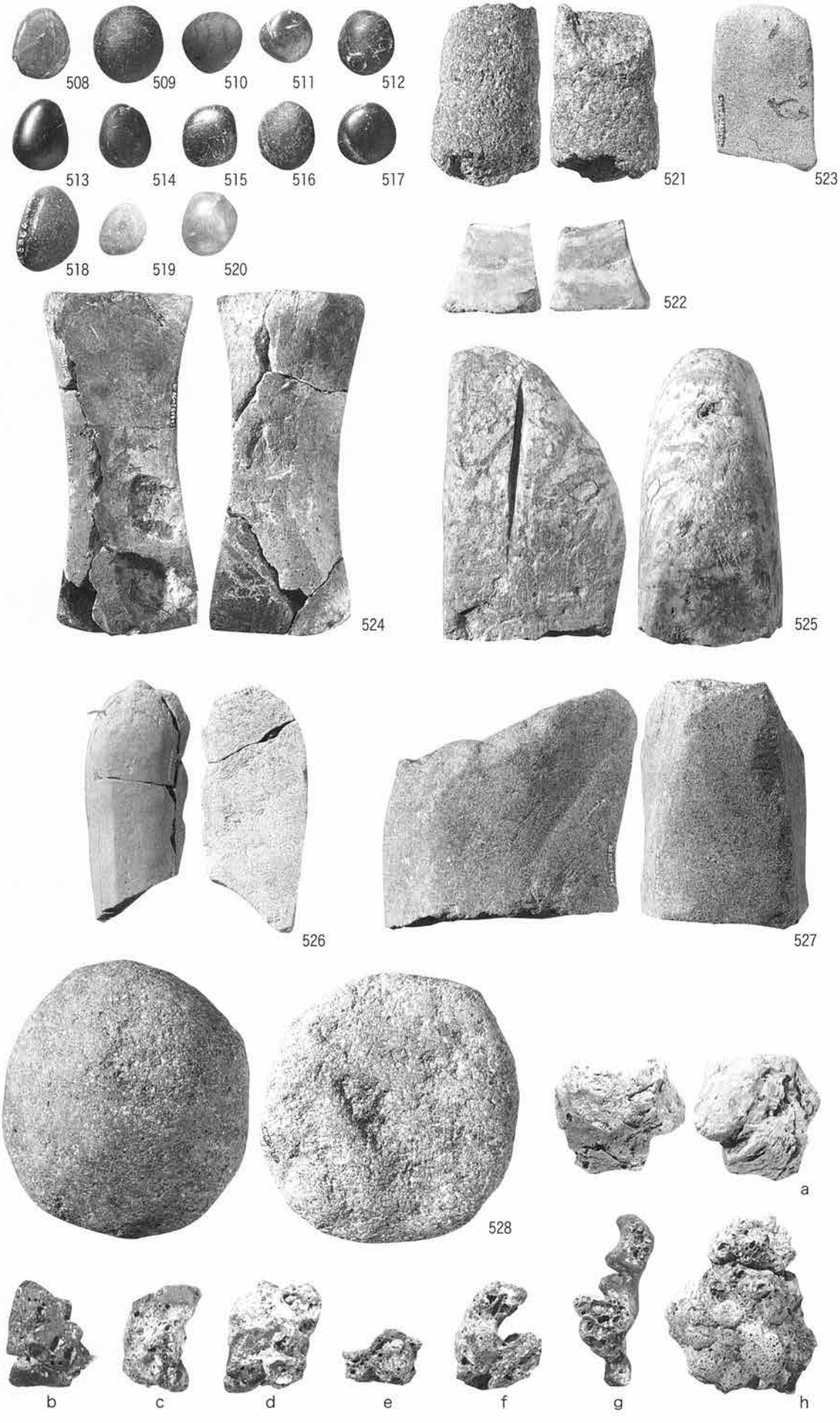
土製品
455～499
木製品
500～503
銅製品
504・505
鉄製品
506・507

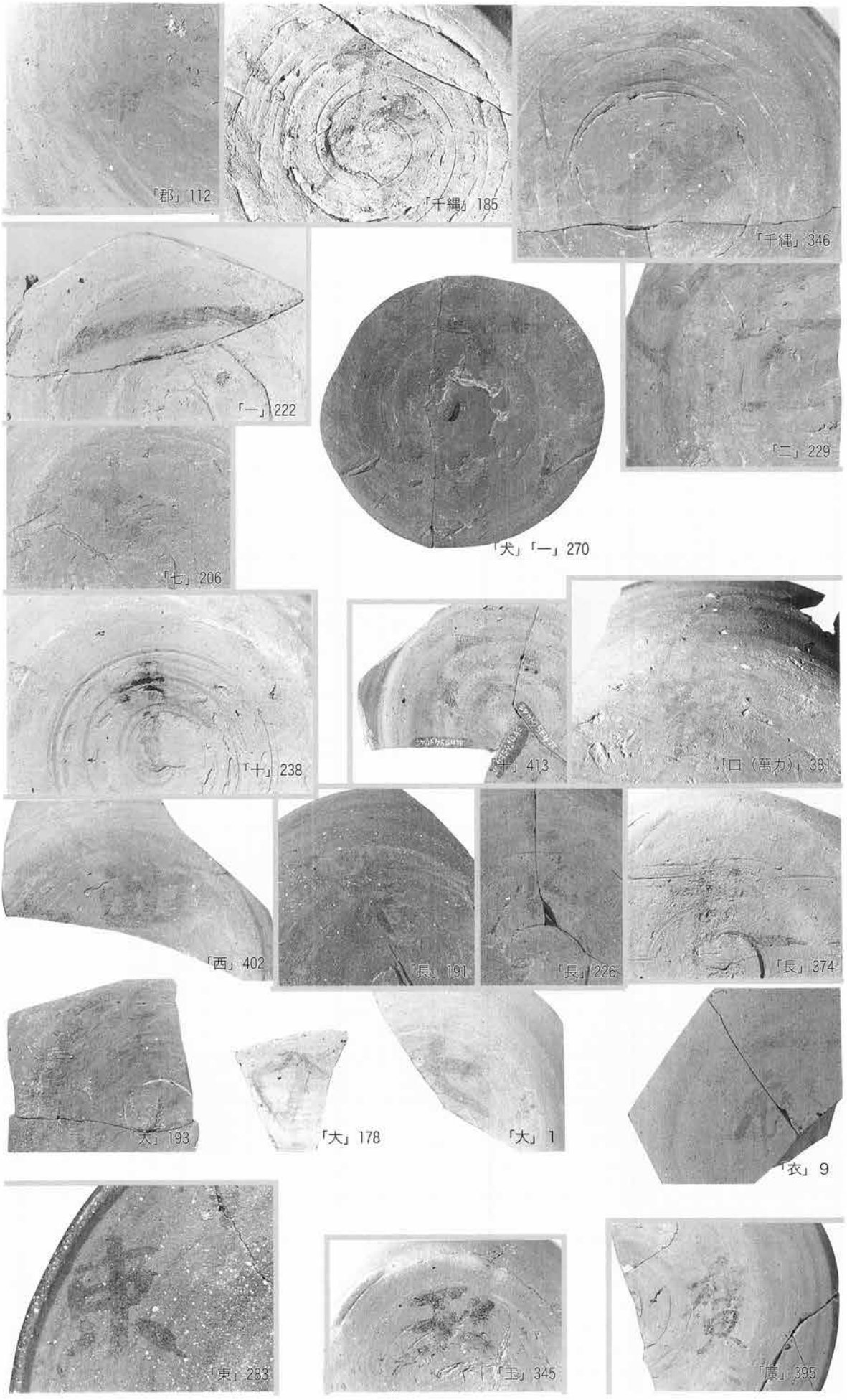






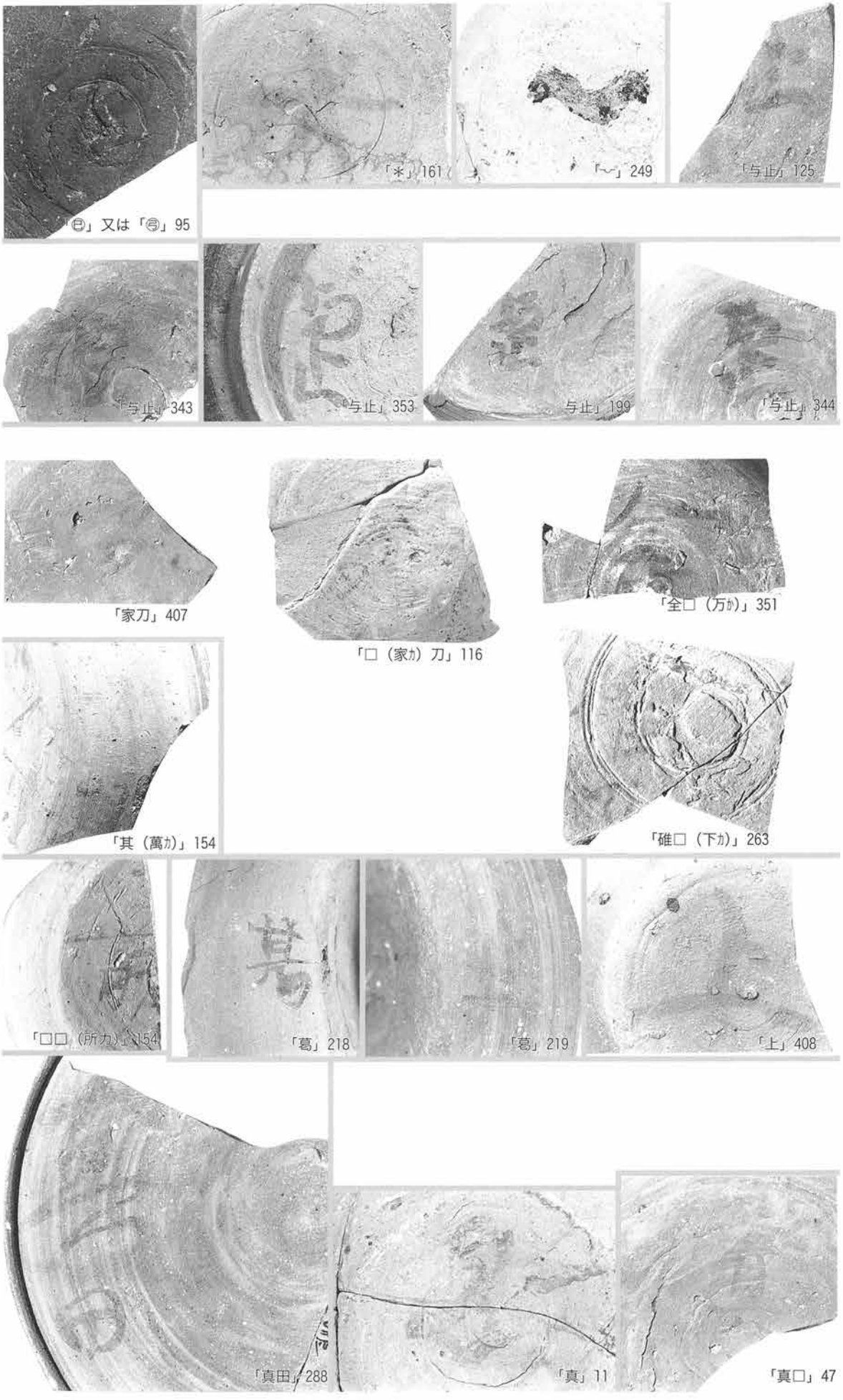
石製品
508～528
軽石
a（1：3）
鉄滓
b～h（1：2）





墨書土器
112・185・346
222・270・229
206・238・413
381・402・191
226・374・193
178・1・9・283
345・395

墨書土器
95・161・249
125・343・353
199・344・407
116・351・263
154・218・219
408・228・11・47



報告書抄録

書　　名	釈迦堂遺跡
副 書 名	北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事関係発掘調査報告書
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第100集
編・著者名	江口友子・小濱　亨・河崎昭一・村上義則
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒956-0845　新潟県新津市大字金津93-1　TEL0250-25-3981
発行年月日	2000（平成12）年９月１日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
釈迦堂遺跡	西蒲原郡黒埼町大字木場字大南1134番地ほか	15-347	15	37°49′18″	138°59′17″	1997,09,01～1997,12,13 1998,04,01～1998,11,13	13,600㎡	北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
釈迦堂遺跡	集落	平安時代	土坑、溝、ピット 火葬灰埋納土坑 火化遺構	須恵器・土師器・土製品 碁石または双六子・石製品 木製品・金属製品	火葬関連遺構 「郡」墨書土器 銅銙

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第100集
北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事関係発掘調査報告書
釈迦堂遺跡

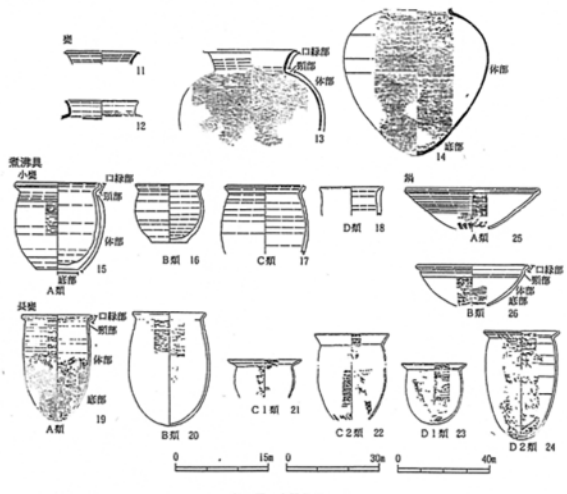
平成12年８月31日　印刷
平成12年９月１日　発行

発行・編集　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町４－１
電話　025-285-5511
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新津市大字金津93－１
電話　0250-25-3981
FAX　0250-25-3986

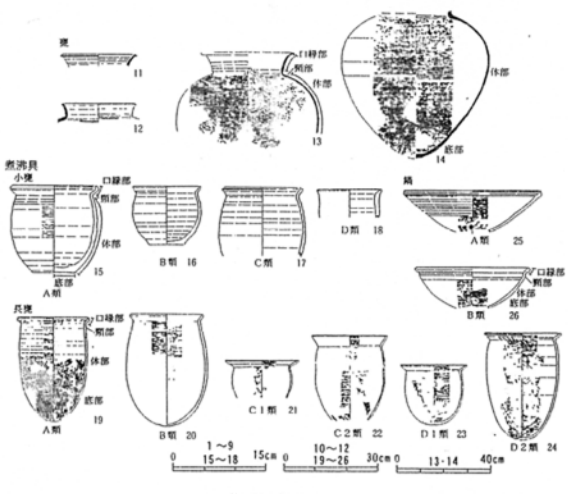
印　刷　株式会社　第一印刷所
〒950-8724　新潟市和合町２－４－18
電話　025-285-7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第100集 釈迦堂遺跡 正誤表

ページ	誤	正
図版99	7	10
図版99	10	7
図版119	383	382
38	第14図	スケール訂正



第14図 土器分類2



第14図 土器分類2